

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (132)

一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (II)

わし が さこ  
鷺ヶ迫遺跡  
(根木原遺跡B地点)

きた はら なか  
北原中遺跡  
(C地点)

う と うえ  
宇都上遺跡  
(F地点)

(鹿屋市花岡町)

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター







## 序 文

この報告書は、一般国道220号古江バイパス道路建設に伴って、平成11年度から18年度にかけて実施した鹿屋市花岡町に所在する鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の発掘調査の記録です。

調査の結果、鷺ヶ迫遺跡では旧石器時代・縄文時代・古墳時代、北原中遺跡では縄文時代から古墳時代、宇都上遺跡では縄文時代・古墳時代・古代から近世までの遺構・遺物が発見されました。なかでも、旧石器時代から縄文時代の落とし穴や古墳時代の竪穴住居跡は、南九州における当該期の研究を進めるうえで貴重な資料を提供したものと考えています。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の啓発・普及の一助になれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会及び発掘調査に従事された地元の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年 3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 宮 原 景 信



# 報告書抄録

ふりがな	わしがさこいせき    きたはらなかいせき    うとうえいせき							
書名	鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡							
副書名	一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	II							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	132							
編集者名	牛ノ濱 修・橋口 拓也							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (遺跡面積) m <sup>2</sup>	調査起因
		市町村	遺跡番号					
わしがさこ 鷲ヶ迫遺跡	かごしまけんかのやし 鹿児島県鹿屋市  はなおかちょう 花岡町	462039	12-240	31° 25′ 04″	130° 46′ 34″	確認・本調査 19990524～ 20000301 20000508～ 20010316 20010111～ 20050325 20060509～ 20070320	26,500 (14,750)	一般国道 220号 古江バイ パス建設
きたはらなか 北原中遺跡				31° 24′ 54″	130° 46′ 39″	20010507～ 20020315 20041105～ 20050128	7,950 (3,800)	
うとうえ 宇都上遺跡				31° 24′ 30″	130° 46′ 30″	20060509～ 20061027	5,400 (2,700)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鷲ヶ迫遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代  古墳時代	礫群 落し穴10, 道跡1  土坑7, 集石1 竪穴住居跡5, 溝7, 土坑4	尖頭器, 台形石器ほか 石坂式・平椀式・曾畑式・ 春日式土器, 石鏃ほか 成川式, 石皿・磨石, 軽石製品ほか				
北原中遺跡	集落	縄文時代  古墳時代 古代・中世	集石6, 溝1, 土坑4  竪穴住居跡10 溝2, 円形土坑2	入佐式・黒川式土器, 石鏃・石斧・磨石ほか 成川式 陶磁器, 石帯				
宇都上遺跡	散布地	縄文時代 古墳 古代・中世 近世以降	集石1  土坑, 溝, 道跡 土坑10, 防空壕	成川式土器 陶磁器, 須恵器ほか 陶磁器, 古銭, 煙管				
遺跡の概要	<p>鷲ヶ迫遺跡は、旧石器時代・縄文時代中期・古墳時代の遺構・遺物が主に出土した。旧石器時代の礫群やナイフ形石器・台形石器・細石刃等と出土した植刃器は貴重なものである。また、春日式土器が形式的に分類できたものも大きな成果であった。鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡では、古墳時代の住居跡, 土坑, 溝状遺構が検出され, 古墳時代の集落が発見されたことは注目される。北原中遺跡では、縄文時代晩期土器の良好な資料が得られた。宇都上遺跡では、調査面積が少なかったが、中世から近世にかけての土坑, 溝状遺構などが検出された。</p>							



第1図 鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡位置図 (1:50000)

# 例 言

- 1 この報告書は、一般国道220号古江バイパス建設に伴う鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市花岡町に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
- 4 発掘調査事業は平成11年5月から平成19年3月にかけて実施し、報告書作成事業は平成18・19年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 発掘調査及び現場における図面の作成・写真の撮影は、調査担当者が行った。
- 9 石器の実測・トレースは(株)九州文化財研究所・大成エンジニアリング(株)に委託した。
- 10 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事吉岡康弘と橋口拓也が行った。
- 11 本書の執筆・編集は牛ノ濱修・橋口拓也で行った。
- 12 遺物は、当センターで保管し、展示・活用する予定である。



# 目 次

巻頭カラー	
序文	
抄録	
第I章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の経過（日誌抄）	4
第II節 遺跡の位置及び環境	11
第1節 位置及び自然環境	11
第2節 歴史的環境	12
第III章 発掘調査の概要	21
第1節 調査の概要	21
第2節 層位	25
第IV章 鷺ヶ迫遺跡（根木原B地点）	31
第1節 発掘調査の概要	31
第2節 旧石器時代の調査	31
第3節 縄文時代の調査	48
第4節 古墳時代の調査	107
第V章 北原中遺跡（根木原C地点）	143
第1節 発掘調査の概要	143
第2節 縄文時代の調査	143
第3節 古墳時代の調査	182
第VI章 宇都上遺跡（根木原F地点）	221
第1節 発掘調査の概要	221
第2節 縄文時代の調査	221
第3節 古代～中世の調査	237
第VII章 発掘調査のまとめ	244
科学分析	249
図版	265
あとがき	

## 挿 図 目 次

第1図	鷺ヶ迫遺跡ほか位置図(5万分の1)		第41図	IV類土器 1	66
第2図	年度別調査地点	19・20	第42図	IV類土器 2	67
第3図	周辺遺跡	14	第43図	IV類土器 3	68
第4図	鷺ヶ迫遺跡周辺地形図	22	第44図	IV類土器 4	69
第5図	北原中遺跡周辺地形図	23	第45図	IV類土器 5	70
第6図	宇都上遺跡周辺地形図	24	第46図	IV類土器 6	71
第7図	基本土層模式図	25	第47図	IV類土器 7	72
第8図	周辺遺跡土層比較図	26	第48図	IV類土器 8	73
第9図	鷺ヶ迫遺跡土層図(1)	27	第49図	IV類土器 9	74
第10図	鷺ヶ迫遺跡土層図(2)	28	第50図	IV類土器10	75
第11図	鷺ヶ迫遺跡土層図(3)・北原中遺跡土層 図(1)	29	第51図	底部	76
第12図	北原中遺跡土層図(2)・宇都上遺跡土層 図	30	第52図	遺構内出土土器	77
	(鷺ヶ迫遺跡)		第53図	住居内出土遺物	78
第13図	VII層検出遺構配置図	32	第54図	石器出土状況	79
第14図	礫群	33	第55図	磨製石鏃・打製石鏃(1)	85
第15図	落とし穴	34	第56図	打製石鏃(2)	86
第16図	VII層出土状況	35	第57図	打製石鏃(2)・(3)	88
第17図	ナイフ形石器・台形石器	37	第58図	石槍・石匙	89
第18図	三稜尖頭器・スクレイパー・挟入石器	38	第59図	スクレイパー(1)	90
第19-1図	細石刃	39	第60図	スクレイパー(2)	91
第19-2図	植刃器	39	第61図	二次加工剥片・微細剥離痕剥片	92
第19-3図	草創期土器	40	第62図	楔形石器・石錐	94
第20図	細石刃核・ブランク・剥片	40	第63図	石核・残核	95
第21図	楔形石器・切断剥片・使用痕剥片	41	第64図	磨製石斧・局部磨製石斧	96
第22図	縄文時代遺構	45	第65図	打製石斧	98
第23図	落とし穴1号	46	第66図	凹石・敲石・磨石	99
第24図	落とし穴2号	47	第67図	石皿	100
第25図	集石	48	第68図	砥石	101
第26図	土器出土状況	51	第69図	軽石製品	102
第27図	曾畑式	52	第70図	古墳時代遺構配置図	109
第28図	I類土器	53	第71図	1号住居跡	110
第29図	II類土器 1	54	第72図	2～4号住居跡	111
第30図	II類土器 2	55	第73図	2～4号住居跡	112
第31図	II類土器 3	56	第74図	3号住居跡	113
第32図	II類土器 4	57	第75図	5号住居跡	114
第33図	III類土器 1	58	第76図	6号住居跡	115
第34図	III類土器 2	59	第77図	1・2・3号住居跡出土遺物	117
第35図	III類土器 3	60	第78図	3号住居跡出土遺物(2)	118
第36図	III類土器 4-1	61	第79図	3号住居跡出土遺物(3)	119
第37図	III類土器 4-2	62	第80図	3号住居跡出土遺物(4)	120
第38図	III類土器 5	63	第81図	3号住居跡出土遺物(5)	121
第39図	III類土器 6	64	第82図	3号住居跡出土遺物(6)	122
第40図	III類土器 7	65	第83図	5号住居跡出土遺物(1)	124
			第84図	5号住居跡出土遺物(2)	125
			第85図	5・6号住居跡出土遺物	126
			第86図	古道跡	129
			第87図	溝状遺構(1)	130

第88図	溝状遺構 (2)	131	第133図	7号住居跡	192
第89図	土坑 1～6	132	第134図	焼土	193
第90図	土坑 7・8, 円形土坑	133	第135図	土坑	194
第91図	ピット位置図	134	第136図	ピット	195
第92図	遺構出土石器 (1)	136	第137図	溝状遺構	196
第93図	遺構出土石器 (2)	137	第138図	1号住居内出土遺物	198
第94図	遺構出土石器 (3)	138	第139図	2号住居内出土遺物 (1)	199
第95図	遺構出土石器 (4)	139	第140図	2号住居内出土遺物 (2)	200
第96図	畝跡	141	第141図	3号住居内出土遺物 (1)	201
<b>(北原中遺跡)</b>			第142図	3号住居内出土遺物 (2)	202
第97図	遺構配置図	144	第143図	3号住居内出土遺物 (3)	204
第98図	集石 (1)	145	第144図	4・5・6号住居内出土遺物	205
第99図	集石 (2)	146	第145図	7号住居内出土遺物	206
第100図	IV層遺物出土状況	147	第146図	埋設土器	207
第101図	晚期土器 1	148	第147図	IV層出土土器 (1)	211
第102図	晚期土器 2	149	第148図	IV層出土土器 (2)	212
第103図	晚期土器 3	150	第149図	IV層出土土器 (3)	213
第104図	晚期土器 4	151	第150図	IV層出土土器 (4)	214
第105図	晚期土器 5	153	第151図	IV層出土土器 (5)	215
第106図	晚期土器 6	154	第152図	遺構内出土石器 (1)	218
第107図	晚期土器 7	156	第153図	遺構内出土石器 (2)	219
第108図	晚期土器 8	158	第154図	遺構内出土石器 (3)	220
第109図	晚期土器 9	159	<b>(宇都上遺跡)</b>		
第110図	晚期土器10	161	第155図	集石 (1)	222
第111図	晚期土器11	162	第156図	Ⅲ層遺物出土状況	223
第112図	晚期土器12	163	第157図	IV層遺物出土状況	224
第113図	石器出土状況 (1)	167	第158図	縄文土器 (1)	226
第114図	石器出土状況 (2)	168	第159図	縄文土器 (2)	227
第115図	石鏃	169	第160図	縄文土器 (3)	228
第116図	スクレイパー (1)	170	第161図	出土石器 (1)	232
第117図	スクレイパー (2)・二次加工剥片・石 錐	171	第162図	出土石器 (2)	233
第118図	磨製石斧・打製石斧 (1)	172	第163図	出土石器 (3)	234
第119図	打製石斧 (2)	173	第164図	出土石器 (4)	235
第120図	打製石斧 (3)	174	第165図	遺構配置図	238
第121図	打製石斧 (4)	175	第166図	集石 (2)・防空壕跡・溝状遺構①～⑦ 号・道跡 1～6号	239
第122図	打製石斧 (5)	176	第167図	土坑	241
第123図	凹石・敲石	177	第168図	中世出土遺物	242
第124図	敲石・磨石・軽石製品	178	<b>表 目 次</b>		
第125図	古墳時代遺構配置図	183	第 1 表	年度別発掘調査一覧表	1
第126図	H11年, 2号住居跡	184	第 2 表	周辺遺跡 (1)	15
第127図	H11年, 3号住居跡	185	第 3 表	周辺遺跡 (2)	16
第128図	1号住居跡	186	第 4 表	周辺遺跡 (3)	17
第129図	2号住居跡	188	第 6 表	旧石器遺物観察表 (1)	43
第130図	3号住居跡	189	第 7 表	旧石器遺物観察表 (2)	44
第131図	4号住居跡	190	第 8 表	縄文土器観察表 (1)	80
第132図	5号住居跡	191			



第9表	縄文土器観察表 (2)	81
第10表	縄文土器観察表 (3)	82
第11表	縄文石器観察表 (1)	103
第12表	縄文石器観察表 (2)	104
第13表	縄文石器観察表 (3)	105
第14表	縄文石器観察表 (4)	106
第16表	遺構内遺物観察表 (1)	127
第17表	遺構内遺物観察表 (2)	128
第18表	遺構内石器観察表	140
第19表	縄文土器観察表 (1)	164
第20表	縄文土器観察表 (2)	165
第21表	縄文石器観察表 (1)	180
第22表	縄文石器観察表 (2)	181
第24表	出土土器観察表 (1)	209
第25表	出土土器観察表 (2)	210
第26表	包含層成川式土器観察表	216
第27表	住居内出土石器観察表	217
第28表	縄文土器観察表	229
第29表	石器観察表	236
第30表	中世出土遺物一覧表	243
第31表	縄文時代磨製石鏃一覧表	246

## 図 版 目 次

巻頭グラビア 1	遺跡遠景	
巻頭グラビア 2	出土遺物	
図版 1	遺跡遠景	265
図版 2	遺跡遠景	266
(鷺ヶ迫遺跡)		
図版 3	土層	267
図版 4	落とし穴 1～4	268
図版 5	落とし穴 4～9号	269
図版 6	落とし穴 9～13号	270
図版 7	落とし穴 14・15号	271
図版 8	礫群・旧石器時代地形	272
図版 9	縄文時代遺物出土状況	273
図版10	縄文時代落とし穴 1・2号	274
図版11	古墳時代住居跡	275
図版12	古墳時代住居跡	276
図版13	土坑	277
図版14	遺物出土状況	278
(北原中遺跡)		
図版15	縄文時代遺構	279
図版16	土層	280
図版17	古墳時代住居跡	281
図版18	古墳時代住居跡	282
図版19	古墳時代住居跡	283
図版20	遺物出土状況	284

(宇都上遺跡)		
図版21	土層・遺構・遺物出土状況	285
図版22	発掘風景	286
(鷺ヶ迫遺跡)		
図版23	鷺ヶ迫遺跡 旧石器 (1)	287
図版24	鷺ヶ迫遺跡 旧石器 (2)	288
図版25	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (1)	289
図版26	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (2)	290
図版27	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (3)	291
図版28	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (4)	292
図版29	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (5)	293
図版30	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (6)	294
図版31	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (7)	295
図版32	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (8)	296
図版33	鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (9)	297
図版34	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (1)	298
図版35	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (2)	299
図版36	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (3)	300
図版37	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (4)	301
図版38	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (5)	302
図版39	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (6)	303
図版40	鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (7)	304
図版41	鷺ヶ迫遺跡 遺構内出土石器 (8)	305
(北原中遺跡)		
図版42	北原中遺跡 縄文土器 (1)	306
図版43	北原中遺跡 縄文土器 (2)	307
図版44	北原中遺跡 縄文土器 (3)	308
図版45	北原中遺跡 縄文土器 (4)	309
図版46	北原中遺跡 縄文土器 (5)	310
図版47	北原中遺跡 縄文土器 (6)	311
図版48	北原中遺跡 縄文土器 (7)	312
図版49	北原中遺跡 縄文石器 (1)	313
図版50	北原中遺跡 縄文石器 (2)	314
図版51	北原中遺跡 縄文石器 (3)	315
図版52	北原中遺跡 縄文石器 (4)	316
図版53	北原中遺跡 縄文石器 (5)	317
図版54	北原中遺跡 縄文石器 (6)	318
図版55	北原中遺跡 古墳時代土器 (1)	319
図版56	北原中遺跡 遺構内出土石器 (1)	320
(宇都上遺跡)		
図版57	宇都上遺跡 縄文土器 (1)	321
図版58	宇都上遺跡 縄文土器 (2)	322
図版59	宇都上遺跡 石器 (1)	323
図版60	宇都上遺跡 石器 (2)	324

# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

建設省九州建設局大隅河川国道工事事務所（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所に改称）は、一般国道220号古江バイパスの建設を計画し、計画路線内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化課（組織改称により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。これを受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下センター）が平成6年12月に分布調査を実施し、事業区内に根木原遺跡が所在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取扱いについては、建設省鹿児島河川国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島河川国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。発掘調査は受託事業として県立埋蔵文化財センターが行うこととなった。

発掘調査は平成9年度より実施され、便宜上、第2図のように北からA・B・C・D・E・F地点に分けて調査を行った。発掘調査では、遺跡名をA～F地点と仮称していたが、整理作業の段階

第 1 表 年度別発掘調査一覧表

年度	調査地点	遺跡面積	調査面積	調査期間(延べ日数)	調査担当者
9	A地点		5,000㎡	H 9.10～H10.3 (97)	前迫・今村・前田
10	A地点		6,200㎡	H10.10～H11.3 (102)	寺師・元田
11	B地点	2,000㎡	4,000㎡	H11.5～H12.3 (142)	寺原・元田
	C地点	1,000㎡	2,000㎡		
12	B地点	3,250㎡	6,500㎡	H12.5～H13.3 (180)	野邊・寺原
	C地点	90㎡	90㎡		
	D地点	110㎡	110㎡		
13	C地点	1,800㎡	3,600㎡	H13.5～H14.3 (157)	高岡・西園
	D地点	3,200㎡	6,400㎡		
14	C地点	100㎡	100㎡	H14.5～H14.80 (58)	高岡・立神
	D地点	1,600㎡	3,200㎡		
15	C地点	1,000㎡	2,160㎡	H15.11～H16.10 (43)	高岡・坂本
	E地点		40㎡		
16	D地点	3,300㎡	6,600㎡	H16.5～H17.3 (163)	宗岡・日高
	E地点	700㎡	700㎡		
	B地点	3,000㎡	3,000㎡	H17.1～H17.30 (44)	高岡・吉井・佐藤
17	D地点	1,000㎡	2,000㎡	H17.5～H17.100 (93)	日高・平・松ヶ野
	F地点	182㎡	182㎡		
18	B地点	6,500㎡	13,000㎡	H18.5～H19.3 (168)	野間口・木之下・相美
	D地点	350㎡	700㎡	H18.8～H18.9 (18)	
	F地点	2,700㎡	5,400㎡	H18.5～H18.10 (93)	三垣・松ヶ野

小字名からそれぞれ、A地点＝中野西遺跡、松山田西遺跡 B地点＝鷺ヶ迫遺跡 C地点＝北原中遺跡 D地点＝領家西遺跡 E地点＝湯ノ迫遺跡・天神平溝下遺跡 F地点＝宇都上遺跡と変更した。

根木原遺跡の発掘調査は、平成9年度から平成18年度までの長期にわたって行った。今回報告する鷺ヶ迫遺跡、北原中遺跡、宇都上遺跡の調査も長期にわたり、平成11年度から平成18年度まで発掘調査を行い、調査間で整理作業を行い、報告書作成を平成19年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。調査面積は70,760㎡である。

## 第2節 調査の組織

### (平成11・12年度)

事業主体者	建設省大隅河川国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人 (11年度)
	〃	〃	井上 明文 (12年度)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋 (11年度)
	〃	〃	新東 晃一 (12年度)
	〃	調査課長補佐	新東 晃一 (11年度)
	〃	〃	立神 次郎 (12年度)
調査・企画担当者	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	青崎 和憲 (11年度)
	〃	〃	牛ノ濱 修 (12年度)
調査担当者	〃	文化財研究員	野邊 盛雅 (12年度)
	〃	〃	寺原 徹
	〃	〃	元田 順子 (11年度)
調査事務担当	〃	総務係長	有村 貢
	〃	主 査	今村孝一郎
現地指導者	東京大学	助 教 授	大貫 静夫
	鹿児島国際大学	教 授	上村 俊雄
	〃	助 教 授	中園 聡
	〃	講 師	大西 智和
	〃	助 手	中村 直子

### (平成13～16年度)

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所
調査責任者	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課



調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文 (13・14年度)
	〃	〃	木原 俊孝 (15・16年度)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸 (13年度)
	〃	〃	田中 文雄 (14・15年度)
	〃	〃	賞雅 彰 (16年度)
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
	〃	調査課長補佐	立神 次郎
調査・企画担当者	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
調査担当者	〃	文化財主事	高岡 和也
	〃	〃	宗岡 克英 (16年度)
	〃	〃	吉井秀一郎 (16年度)
	〃	〃	日高 勝博 (16年度)
	〃	文化財研究員	西園 勝彦 (13年度)
	〃	文化財調査員	立神 勇志 (14年度)
	〃	〃	坂本佳代子 (15年度)
	〃	〃	佐藤 真人 (16年度)
調査事務担当	〃	総務係長	前田 昭信 (13・14年度)
	〃	〃	平野 浩二 (15・16年度)
	〃	主 査	今村孝一郎 (13・14年度)
	〃	〃	脇田 清幸 (15・16年度)
現地指導者	鹿児島大学	教 授	森脇 広

(平成17・18年度)

事業主体者 国土交通省大隅河川国道事務所

調査責任者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 上今 常雄 (H17.4~H18.7)

〃 〃 宮原 景信 (H18.8~ )

調査企画者 〃 次長兼総務課長 有川 昭人

〃 次長兼調査第一課長 新東 晃一 (17年度)

〃 次 長 新東 晃一 (18年度)

〃 調査第二課長 立神 次郎

調査・企画担当者 〃 主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長 牛ノ濱 修

調査担当者 〃 文化財主事 野間口 勇 (18年度)

〃 〃 木之下悦朗 (18年度)

〃 〃 三垣 恵一 (18年度)

〃 〃 日高 勝博 (17年度)

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	新中なるみ (18年度)
	〃	文化財調査員	松ヶ野 恵
調査事務担当	〃	主幹兼総務係長	平野 浩二 (17年度)
	〃	総務係長	寄井田正秀 (18年度)
	〃	主査	寄井田正秀 (17年度)
	〃	〃	蒲地 俊一 (18年度)
現地指導者	別府大学	教授	橘 昌信
	鹿児島大学	助教授	本田 道輝
	〃	助教授	中村 直子

(平成19年度)

事業主体者	国土交通省大隅河川国道事務所		
作成責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	宮原 景信
作成企画者	〃	次長兼総務課長	平山 章
	〃	次長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
作成・企画担当者	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濱 修
作成担当者	〃	主任文化財主事	宮田 栄二
	〃	文化財主事	野間口 勇
	〃	〃	廣 栄次
	〃	文化財調査員	橋口 拓也
作成事務担当	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主査	蒲池 俊一
遺物指導者	鹿児島大学	準教授	本田 道輝

第3節 調査の経過 (日誌抄)

発掘調査は、平成11年度から平成18年度まで行った。経過は日誌抄により月毎に略述する。

平成11年度 (平成11年5月24日～平成12年3月1日, 調査期日 142日)

月	調 査 の 経 過
5	<p>確認調査開始 (担当：寺原徹・元田順子)</p> <p>鷲ヶ迫遺跡 道路建設用No.259とNo.260を基準に10m間隔の区割りを設定し、その区割りに沿ってトレンチで確認調査を行った。1 T～4 T設定後掘り下げ。</p> <p>北原中遺跡 東側境界杭ラインを基準に10m間隔の区割りを設定し、その区割りに沿ってトレンチで確認調査を行った。5 T～8 T設定後掘り下げ。</p>

6	鷺ヶ迫遺跡 1 T～4 T 北原中遺跡 5 T～8 T 領家西遺跡 トレンチ調査
7	北原中遺跡 C・D-1～7区 III層掘り下げ。 古道・竪穴住居跡検出 (C・D-6・7区)
8	B・C-1～7区 III層掘り下げ。 D-6・7区 竪穴住居跡検出。 24日-国土交通省主催の発掘・古代体験活動
9	B・C-1～7区 III層掘り下げ。 C-6区 竪穴住居跡検出 鷺ヶ迫遺跡 下層確認トレンチ調査
10	B・C-1～7区 III～IV層掘り下げ。 鷺ヶ迫遺跡 下層確認トレンチ調査
11	B・C-1～7区 III～IV層掘り下げ。 C-6区 土坑・竪穴住居跡検出 5日-花岡中2年生45名 遺跡見学・体験学習
12	B・C-1～8区 III～IV層掘り下げ。 北原中遺跡 竪穴住居跡検出 13・14日-大貫静夫助教授(東京大学) 調査指導
1	B・C-6～8区 IV層掘り下げ。 D-1・2区 溝状遺構・土坑検出 25日-調査終了

平成12年度 (平成12年5月8日～平成13年3月16日 調査期間 180日)

月	調 査 の 経 過
5	8日調査開始 D-3～9区 III・IV区掘り下げ。 C-13～19区 III・IV区掘り下げ。
6	B-6区 IV層掘り下げ。 D-3～7区 IV層掘り下げ。 D・E-27～33区 III～IV層掘り下げ。
7	B-6区 IV層掘り下げ。D-6・7区 IV層掘り下げ。 D・E-27～33区 IV層掘り下げ。 D-5区 住居跡検出。D-6・7区 IV層上面コンタ図作成。



8	B～E-27～33区 IV層掘り下げ。 C-31・32区 古道跡検出 4日-鹿屋市文化財少年団16名 体験学習, 22日-古江小16名 体験学習 23日-中園聡助教授・大西智和講師(鹿児島国際大学) 調査指導
9	C～E-29・30区 III～IV層掘り下げ。 B～E-27・28区 IV層上面コンタ図作成 D-5区, D-27区 遺構検出 8日-河口貞徳・本田道輝遺跡見学
10	C～E-29・30区 III～IV層掘り下げ。 B～E-27・28区 IV層上面コンタ図作成 3日-鹿屋中15名 体験学習
11	C・D-27区, C-33区 III～IV層掘り下げ。 E-31～33区 VIII層掘り下げ。 C-33区 集石検出
12	C～E-29・30区 III～IV層掘り下げ。D-5区 住居跡検出 北原中遺跡 トレンチ確認調査 4日-上村俊雄教授・中園聡助教授(鹿児島国際大学) 調査指導 5日-中村直子助手(鹿児島大学) 調査指導
1	B～D-32・33区 VIII層掘り下げ。 北原中遺跡 トレンチ確認調査 25日-作業員健康診断
2	B～E-30～33区 VIII層掘り下げ。 北原中遺跡 トレンチ確認調査 20日-空中写真撮影
3	C-29区 VIII層掘り下げ。 D-4・5区 IV層掘り下げ(春日式土器出土)。D-27区 住居跡検出 16日-調査終了

平成13年度(平成13年5月7日～平成14年3月15日 調査期間157日)

月	調 査 の 経 過
	7日調査開始
5	B～D-18～20区 表土剥ぎ取り。 B～D-18～20区 II層掘り下げ。
6	B～D-18～20区 II層掘り下げ。 D-20～23区 遺構検出 領家西遺跡 調査

7	B～D-18～20区 II層掘り下げ。 D-20～23区 遺構検出 領家西遺跡 調査
8	B～D-18～20区 II層掘り下げ。縄文晩期土器出土 D-20～23区 遺構検出 領家西遺跡 調査
9	D-20～23区 遺構検出（竪穴住居跡6基検出） 3～5号住居跡 検出作業 領家西遺跡 調査
10	3～7号住居跡 検出作業 領家西遺跡 調査 11日-森脇広教授（鹿児島大学）調査指導
11	4～8号住居跡 検出作業 遺構（竪穴住居跡）実測 領家西遺跡 調査
12	5～8号住居跡 検出作業 遺構（竪穴住居跡）実測 領家西遺跡 調査
1	7・8号住居跡 検出・実測 B～D-18～23区 II～III層掘り下げ。縄文晩期土器出土 領家西遺跡 調査
2	B～D-18～23区 II～IV層掘り下げ。 A-23区 IV層集石検出 領家西遺跡 調査
3	B～D-18～23区 IV～V層掘り下げ。 領家西遺跡 調査 27日-調査終了

平成14年度

北原中遺跡（平成14年5月7日～6月4日）

月	調 査 の 経 過
5	7日-調査開始 A-23区・D-23区 II層掘り下げ。 遺構検出
6	A-23区・D-23区 II層掘り下げ。 遺構（住居跡）検出・実測 4日-北原中遺跡調査終了。全員，領家西遺跡の調査へ

平成15年度（平成15年11月5日～平成16年1月28日 調査期間 43日）

月	調 査 の 経 過
11	5日－調査開始 D-10～17区 III～IV層掘り下げ。D-14区 縄文晩期土坑検出 天神平溝下遺跡 トレンチ確認
12	C-14～16区 III～IV層掘り下げ。 D-11～17区 III～IV層掘り下げ。 25日－鶴羽小学校体験学習
1	B・C-9～16区 IV層掘り下げ。 C-14・15区 土坑検出 28日－調査終了

平成16年度（平成17年1月11日～3月25日 調査期間 44日）

月	調 査 の 経 過
1	11日－調査開始 B・C-13～17区 II～IV層掘り下げ。 溝状遺構・古道検出
2	B・C-13～17区 IV層掘り下げ。 B～D-13～22区 II～IV層掘り下げ。 溝状遺構・古道検出，集石検出
3	C・D-5・6区 IV層掘り下げ。C～E-7区 III～IV層掘り下げ。 E・F-8・9区 IV層掘り下げ。 25日－調査終了

鷲ヶ迫遺跡

平成18年度（平成18年5月9日～平成19年3月20日 調査期間 168日）

月	調 査 の 経 過
5	9日 調査開始 B・C-50・51区 III層掘り下げ。 10日 所長あいさつ，11日－大隅河川国道事務所現地協議
6	B・C-45～51区 II～IV層掘り下げ。 C-50・51区 III層成川式土器出土 C-50・51区 竪穴住居跡検出
7	B・C-45～51区 IV・V層掘り下げ。 B・C-42区 X層掘り下げ。 B・C-45～51区 IV層上面遺構検出（ピット・土坑）

8	B・C-45～51区 VI～VIII層掘り下げ。B・C-36・37区 IV層掘り下げ。 C-47区 VII層下面地形図作成
9	B・C-45～49区 VII・VIII層掘り下げ。B・C-50区 IV・V層掘り下げ。 D・E-45～51区 表土剥ぎ。 礫群1検出(C-49区)
10	B・C-45～49区 VII・VIII層掘り下げ。B・C-50・51区 IV・V層掘り下げ。 D・E-45～50区 III・IV層掘り下げ。 落とし穴検出(C-45区)。現地説明会実施(153名参加)
11	B・C-49～51区 VIII層掘り下げ。D-45～47区 VIII層掘り下げ。D-48～51区 V層掘り下げ。B・C-34・35区 IIIb層掘り下げ。D・E-34～43区 表土剥ぎ。 細石刃出土(D-47区)
12	B・C-50・51区 VIII層掘り下げ。D・E-48～51区 VIII層掘り下げ。 B～D-34～38区 IIIb層掘り下げ。
1	B・C-34～38区 VIII層掘り下げ。D・E-34・35区 VIII層掘り下げ。 D・E-36～38区 V層掘り下げ。C・D-36～38区 トレンチ設定後掘り下げ。 溝状遺構2(D・E-47区)
2	B～E-35～38区 VI～VIII層掘り下げ。C・D-35・36区 V・VI層掘り下げ。 落とし穴1(D・E-47区) D-38区 旧石器～縄文時代草創期の遺物出土。
3	C・D-5・6区 IV層掘り下げ。C～E-7区 III～IV層掘り下げ。 E・F-8・9区 IV層掘り下げ。 27日-調査終了

### 宇都上遺跡

平成18年度(平成18年5月9日～10月27日 調査期間 93日)

月	調 査 の 経 過
5	8日調査開始 D・E-8～12区, B～D-2～5区, E-6・7区 II～IV層掘り下げ。 16日-排土処理協議(国交省)。22日-鹿屋市文化課8名 遺跡見学。
6	A～C-1～4区 II～IV層掘り下げ。 D・E-9～12区 II～IV層掘り下げ。 D-9区 防空壕検出。
7	A～D-1～4区 II～IV層掘り下げ。 D・E-8～12区 II～IV層掘り下げ。 28日-空中写真撮影。



8	A～C-2～5区 IV層掘り下げ。 C-4区 集石検出。A～C-2～5区 IV層上面コンタ図作成。 8日-鹿屋市文化財ウォッチング発掘体験16名。
9	B～E-2～6区 III～IV層掘り下げ。 D・E-6～12区 III～IV層掘り下げ。 25日-排土処理について国交省と協議。
10	C・D-5・6区 IV層掘り下げ。C～E-7区 III～IV層掘り下げ。 E・F-8・9区 IV層掘り下げ。 27日-調査終了

### 整理・報告書作成事業の概要

鶯ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の整理・報告書作成作業は、平成18年11月～平成19年12月に行った。

#### 平成18年度

11	整理作業開始。図面・遺物の分類，点検。
12	石器選別，土器接合，土器分類，科学分析委託
1	土器分類・実測，遺構実測
2	土器分類・実測，遺構実測
3	土器分類・実測，遺構実測

#### 平成19年度

4	土器分類・実測，遺構実測・仮レイアウト
5	遺構配置図作成，石器実測委託・科学分析委託，遺物実測，遺構仮トレース
6	土器実測・拓本，土器接合・復元，データ入力
7	石器実測委託見直し，土器・石器実測，データ入力
8	石器実測委託見直し，土器・石器実測，データ入力
9	土器実測・トレース，遺構トレース
10	土器実測・トレース・拓本，石器レイアウト，遺構レイアウト
11	遺構レイアウト，遺物レイアウト，原稿
12	遺構・遺物レイアウト，遺物写真撮影，原稿
1	原稿校正，一般遺物の収納
2	校正，遺稿図面及び遺物の実測図等整理
3	校正，報告書納品，報告書作成作業終了

## 第Ⅱ節 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置及び自然環境

鷲ヶ迫遺跡，北原中遺跡，宇都上遺跡は，鹿児島県鹿屋市花岡町の小字鷲ヶ迫，小字北原中，小字宇都上に所在し，以前，根木原遺跡B地点，C地点，F地点と仮称していた遺跡である。鹿屋市は大隅半島の中央部に位置する。平成18年1月には周辺地域と合併し，人口10.6万人を有する，県内3位の都市となった。

1889年（明治22）市町村制により，鹿屋郷は鹿屋村，花岡郷は花岡村，大始良郷は大始良村，高隈郷は高隈村となる。1912年（大正元）鹿屋村は鹿屋町となる。1941年（昭和16）5月27日，鹿屋町・花岡村・大始良村の1町2村が合併し鹿屋市となる。1955年（昭和30）高隈村と合併，昭和33年には垂水町大字新城のうち根木原・桜町を編入する。その後，平成の大合併で平成18年1月1日，周辺の輝北町・串良町・吾平町と合併し，新制鹿屋市となり現在に至る。

市街地の北部には，<sup>おおのがらだけ</sup>大窠柄岳（1,236m）を主峰に，横岳，御岳など1,000m級の山系が連なり，この高山を総称して高隈山とよんでいる。地質は中生層の砂岩・泥岩・粘板岩が主で西部に花崗岩がみられる。杉類の植林がみられ本県の主要な林産資源地であり，本城・高須・高隈の各河川等の源をなしている。山頂からの展望は絶景で桜島・薩摩半島等がみられ，高隈山県立自然公園となっていて，ハイキングコースとしても親しまれている。

東部から北部にかけては，鹿児島湾奥に形成された始良カルデラにより，噴出した（約24,000年前）といわれる入戸火砕流堆積物（シラス）により形成された，標高50～170mの広大な笠野原台地が広がっている。高隈山系を源とする高隈川が串良川・肝属川と名称を変えながら，この笠野原台地を浸食し谷底平野を形成し，市の中心部を流れ，市街地で向きを変えながら東へ流れている。高隈川には笠野原畑地灌漑を目的とする高隈ダムが1967年（昭和42）建設され，これによってできた人造湖は大隅湖とよばれている。市の西側は，肝属川同様，高隈山系を源とする高須川がほぼ南へ流れ，鹿児島湾に注いでいる。

本遺跡は鹿屋市役所より北西8.4kmにあり，高隈山系の扇状地にあたる標高約130mの丘陵上に所在する。本遺跡周辺の堆積物は入戸火砕流堆積物を基盤として，厚さ約7mに及ぶ。入戸火砕流の上にある一般的な堆積物と違って，このように厚いのは遺跡周辺の地形が丘陵に囲まれた凹地状をなし，ここに周囲の丘陵から土石流として堆積物が供給されてきたことによる。このため現在のこの台地表面は扇状地または麓斜面と呼ばれる地形からなり，扇状地に緩く傾斜する。このような堆積環境下にあるため，角礫と有機質の粘土・シルトの混在した堆積物がこの地層の大部分を占めている。展望はよく北に桜島，西側には雄大な錦江湾が望まれ，夕日に輝く開聞岳は絶景である。遺跡に隣接して，江戸時代の享保年間に造立された円覚山真如院跡や，花岡島津家墓地が残存し，鶴羽小学校の周辺には麓集落が形成されている。

## 第2節 歴史的環境

遺跡のある花岡町の台地は昭和60年代に圃場整備がなされ、狩俣遺跡、鶴羽遺跡、俣刈遺跡、早山遺跡、宮の脇遺跡の発掘調査が行われていて、旧石器時代、縄文時代（草創期、早期、前期、中期、後期、晩期）古代、中世の遺構・遺物が検出されている。昭和59年度発行の遺跡地名表では、鹿屋市は173箇所（遺跡）が紹介されているが、昭和60年代から始まった鹿屋バイパス、古江バイパス建設に伴う発掘調査が行われたこと等により、245箇所（遺跡）が現在紹介されている。また、平成18年度の合併により、旧輝北町・旧串良町・旧吾平町の遺跡が鹿屋市の遺跡に統合され、遺跡数は550箇所（遺跡）に増加した。そこで、周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に紹介したい。

### 旧石器時代

鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査により、榎崎A遺跡では細石器文化期の遺物が、榎崎B遺跡では多くの礫群とピット群に伴い、細石器と局部磨製石斧が検出された。西丸尾遺跡では、細石器とナイフ形石器文化の両文化期の遺構、遺物が検出されており、水晶製の細石刃、細石刃核が特に注目された。また、古江バイパス建設に伴う中野西遺跡、松山田西遺跡（根木原遺跡A地点）の発掘調査でも、ナイフ形石器文化期、細石器文化期の遺物が多数出土し、礫群3基が確認されている。

### 縄文時代

鹿屋市には、縄文時代の重要な遺跡が数多く存在する。草創期の遺跡として、南町の伊敷遺跡が著名である。薩摩火山灰下部の層より、隆帯文土器と石斧が検出された。根木原遺跡A地点では、草創期に該当すると思われる土器を始め、早期の岩本式土器や中期の春日式土器等の遺物が確認されている。本遺跡の所在する、根木原地区、花岡地区にも多数の縄文時代の遺跡が報告されている。昭和57年発行の大隅地区埋蔵文化財分布調査概報において、後期の貝殻条痕文土器の表採が報告され、昭和59年の鶴羽遺跡の確認調査で、縄文時代の土器、石器が確認されており、宮の脇遺跡でも早期の貝殻条痕土器や、晩期の土器が出土している。更に昭和61年の柿窪遺跡の発掘調査では、早期、晩期の土器が出土している。

### 弥生時代

水ノ谷遺跡、榎木原遺跡では、前期から中期にかけての資料が検出されている。特に板付Ⅱ式の壺や甕の出土、榎木原遺跡の西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺等の出土は、当時の大隅半島の状況を知る上で貴重な資料となっている。王子遺跡は中期から後期初頭の大集落跡で、27基の住居跡が検出されている。検出された花卉状住居や、棟持柱付の掘立柱建物や、土坑を持つ住居跡は、九州地方の弥生時代の集落構成を知る上で、考古学、建築学に大きな指針を与えた。出土した遺物は、在地の山ノ口式土器と瀬戸内系や北九州の土器が共伴し、弥生時代の文化圏や交流状況を考えさせる重要な資料でもある。王子遺跡は以上の学術的見地から、古代の南九州を知る上で貴重な遺跡という事で注目を集めた。中ノ丸遺跡では、中期末から、後期初頭にかけての竪穴住居や円形周溝遺構が検出され、中ノ原、前畑遺跡でも本時期の遺構、遺物が検出されている。高付遺跡では、中期から古墳時代にかけての河内、瀬戸内、東九州地方の影響を考えさせる資料が検出された。

## 古墳時代

大隅半島志布志湾沿岸や肝属平野は、畿内型高塚古墳や地下式横穴墓の本県における分布の中心となっている。鹿屋地方では、西祓川町の円墳3基と、短甲、衝角付冑が出土した地下式横穴墓、野里町の地下式横穴墓が知られている。南九州の古墳時代の土器は地域色が強く、一般に「成川式土器」と呼ばれ、甕形土器が突帯と脚台をもち、弥生時代以降、型式は変化するものの「土師器化」することなく存在し続けた土器である。この成川式土器が大隅半島では数多く出土し、また根木原地区、花岡地区でも出土しており、古墳時代の活動拠点の範囲の広大さがうかがえる。本字台の生活遺構としては、成川式土器を主体とした早山遺跡、宮の脇遺跡、上原遺跡、鶴羽遺跡、俣刈遺跡が知られ、根木原遺跡においては、A、B、C、D、E、F地点すべての遺跡から成川式土器が出土し、住居跡や溝状遺構、土坑等の遺構も多数検出されている。

## 古代～中・近世

鹿屋市内で確認されている奈良時代から平安時代の遺跡として、飯盛ヶ岡遺跡、榎崎A、B遺跡、宮の脇遺跡があげられる。宮の脇遺跡では、青銅器の帯金具が出土しており、古代官位制を示す貴重な資料として注目されている。中ノ原、中の丸遺跡からは、中世から近世にかけての遺構、遺物が検出されている。花岡地区においては、宮の脇遺跡、鶴羽遺跡等、古代から近世にかけての遺跡が所在する。近世の花岡は外城の一つであり、花岡島津氏の所領として古くから栄え、同家の居城として鶴羽城が残る。

## 〈参考・引用文献〉

- 「鹿屋市史」 鹿屋市史編集委員会 1967年  
「王子遺跡」 鹿児島県教育委員会 1985年 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）  
「榎崎A遺跡」 鹿児島県教育委員会 1992年 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（63）



第3図 周辺遺跡



第2表 周辺遺跡(1)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	宮下	11-91	垂水市新城大浜	縄文(後・晩) 弥生・古墳 中世	西平式・黒川式・石皿・楔形石器等 弥生土器・成川式土器 土師器	1
2	新城農協	11-17	垂水市新城農協澱粉工場	弥生	甕・壺・高坏・皿	2
3	佃	11-94	垂水市新城	古墳	成川式土器	2
4	井ノ尾	11-93	垂水市新城	古墳	成川式土器	2
5	新城跡	11-06	垂水市新城麓字中原	縄文・弥生	縄文土器・石斧・弥生土器	3
6	柿窪	12-168	鹿屋市根木原町柿窪	縄文 古墳 古代～中世	刻目突帯文・黒川式・組織痕・石斧等 成川式(甕・壺・鉢・埴) 土師器(甕・坏)・須恵器・土錘	4 5
7	根木原	12-240	鹿屋市花岡町	縄文・古墳	成川式土器	4
8	中野西		鹿屋市花岡町	旧石器 古墳 古代	礫群・ナイフ形石器・細石刃核 土坑・成川式土器 土壙鉄剣・鉄鏃・須恵器・土師器	6
9	松山田西		鹿屋市花岡町	縄文 古墳	集石・石鏃 竪穴住居跡・土坑・成川式	6
10	鷲ヶ迫		鹿屋市花岡町	旧石器 縄文 古墳	落し穴, 三稜尖頭器・植刃器等 落し穴, 春日式・黒川式・石鏃等 竪穴住居跡・溝, 成川式・軽石製品等	本文
11	北原中		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 中世	集石, 塞ノ神式・黒川式・石鏃等 竪穴住居跡, 成川式土器 円形土坑・溝, 須恵器・土師器・石帯	本文
12	領家西		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 中世	集石・土坑, 入佐式・黒川式・石斧等 竪穴住居跡・溝, 成川式(甕・壺・鉢 ・高坏・埴)・石庖丁・鉄器等 掘立柱建物跡・配石遺構・竪穴遺構・ 円形周溝, 石鍋・陶磁器・古銭	
13	天神平溝下		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 古代～近世	集石・土坑, 市来式・石鏃 竪穴住居跡・道跡, 成川式・勾玉等 溝状遺構・畠畝, 土師器・陶磁器等	
14	宇都上		鹿屋市花岡町	縄文 古墳 古代～中世	集石, 指宿式・市来式・黒川式等 成川式土器 土坑・溝・道跡, 土師器・陶磁器等	本文
15	城ヶ崎	12-169	鹿屋市花岡町城ヶ崎	縄文 古墳	前平式・石斧 成川式土器	4
16	鶴羽城跡	12-043	鹿屋市花岡町鶴羽	縄文 古墳 中世	石坂式・晩期土器(深鉢・浅鉢) 成川式土器 土師器(甕・椀・坏)・須恵器	7
17	大久保	12-170	鹿屋市古江町大久保	古墳	成川式土器	2

第3表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
18	早山	12-027	鹿屋市花岡町早山・宮ノ脇	縄文 弥生 古墳 古代～中世	草野式・市来式・晩期土器 山ノ口式 竪穴住居跡, 成川式(甕・壺・罎等) 土師器・焼塩壺・青銅製帯金具	8
19	横山3	12-082	鹿屋市横山町	古墳	土器片	9
20	枯木ヶ尾	12-026	鹿屋市小里町枯木ノ尾	弥生・古墳	弥生土器・成川式・須恵器	10
21	古里	12-044	鹿屋市古里町	縄文・弥生・古墳	縄文晩期土器・石器・成川式土器	11
22	本戸口	12-087	鹿屋市海道町本戸口			2
23	俣刈	12-028	鹿屋市海道町俣刈道	縄文・古墳	成川式	2
24	小里B	12-145	鹿屋市古里町	古墳・中世	成川式・土師器	2
25	小里A	12-144	鹿屋市古里町	古墳・中世	〃	2
26	石鉢谷B	12-143	鹿屋市白水町	古墳・中世	成川式・土師器	2
27	石鉢谷A	12-142	鹿屋市白水町	古墳・中世	〃	2
28	宇戸平	12-141	鹿屋市小野原町	縄文(早)	塞ノ神式	2
29	山ノ上B	12-140	鹿屋市小野原町	古墳・中世	成川式・土師器	12
30	山ノ上A	12-139	鹿屋市小野原町	古墳・中世	成川式・土師器	12
31	白水B	12-138	鹿屋市白水町	縄文 古墳	集石, 下剥峯式・黒川式・石鏃・石斧 土坑・古道, 成川式土器	2
32	萩ヶ尾B	12-137	鹿屋市白水町	古墳・中世	成川式・土師器 〃	2
33	萩ヶ尾A	12-136	鹿屋市白水町	縄文 古墳	集石 成川式土器	2
34	白水A	12-135	鹿屋市白水町	古墳・中世	〃	2
35	西丸尾	12-133	鹿屋市白水町西丸尾	旧石器 縄文	ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器 ・スクレイパー・彫器・敲石・細石刃 ・細石刃核・石斧 前平式・塞ノ神式・石鏃	13
36	西丸尾B	12-134	鹿屋市白水町西丸尾	旧石器・ 縄文 古墳	土坑・剥片 集石, 前平式・石坂式・石皿・石斧等 成川式土器	14
37	榎崎B	12-132	鹿屋市郷之原町榎崎	旧石器 縄文 古墳 古代	礫群, 細石刃・細石刃核・石斧等 集石・石坂式・塞ノ神式・黒川式等 竪穴住居跡・成川式 掘立柱建物跡・須恵器・土師器・刀子	15・16
38	榎崎A	12-131	鹿屋市郷之原町榎崎	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代	礫群・細石刃核・スクレイパー等 集石, 前平式・押型文・塞ノ神式等 下城式土器 溝状遺構, 成川式土器 周溝墓・掘立柱建物跡, 須恵器・土師器・焼塩壺・砥石等	17

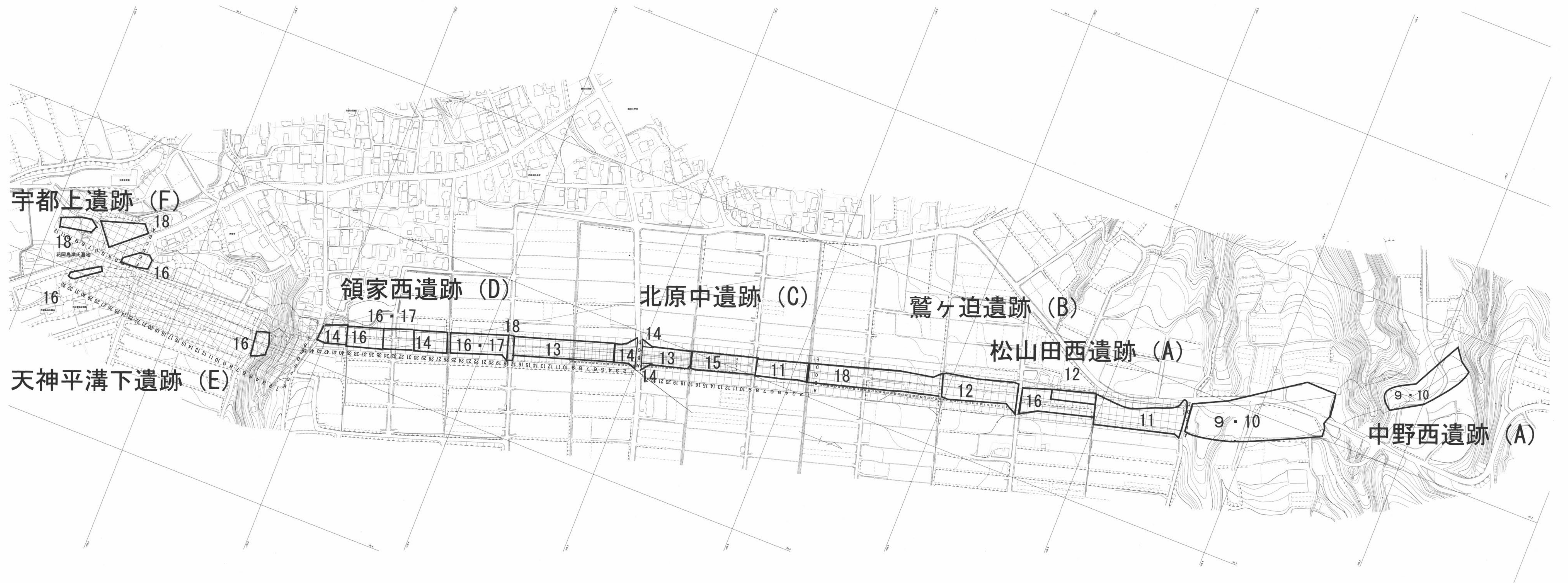
第4表 周辺遺跡(3)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
39	飯盛ヶ岡	12-130	鹿屋市小野町飯盛ヶ岡	縄文 弥生 平安	集石・土坑, 石坂式・市来式・管玉等 竪穴住居跡, 山ノ口式・磨製石鏃等 土師器	18
40	小薄町遺跡群	12-41	鹿屋市小薄町・有武町・高牧町	縄文(早・前・後) 古墳		11
41	柴立	12-42	鹿屋市花岡町柴立	縄文(後)・古墳	条痕文・メンコ・沈線文	11
42	前畑	12-129	鹿屋市郷之原町前畑	縄文 弥生 近世	集石, 石坂式・押型文・平椀式等 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝 山ノ口式・須久Ⅱ式・磨製石鏃等 近世墓・古銭・鉛玉・ガラス玉 戦跡遺構(掩体壕・誘導路)	19 20 21 22
43	中原山野	12-128	鹿屋市郷之原町中原山野	縄文 弥生 近世	集石, 下剥峯式・平椀式・台石等 竪穴住居跡, 山ノ口式(甕・壺・鉢) 戦跡遺構(掩体壕・誘導路)	23 24
44	川の上	12-40	鹿屋市大浦町松橋川の上	中世	供養塚2	11
45	中ノ丸	12-127	鹿屋市大浦町中ノ丸	縄文 弥生 中世～近世	轟式・曾畑式・指宿式・石鏃・石皿等 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・円形周溝 土坑, 山ノ口式・砥石等 掘立柱建物跡・土坑・陶磁器等	25
46	中ノ原	12-126	鹿屋市大浦町中ノ原	縄文 弥生 中世～近世	竪穴住居跡・集石・土坑, 石坂式・曾畑式・指宿式・入佐式・石鏃・磨石等 竪穴住居跡・掘立柱建物跡, 溝状遺構 山ノ口式(甕・壺・鉢) 土師器(坏)	26～30
47	大浦	12-38	鹿屋市大浦町	縄文 古墳	縄文土器 地下式横穴墓	11
48	榎田下	12-125	鹿屋市大浦町榎田下	縄文(前・後)	轟式・曾畑式・指宿式・市来式・石鏃 ・石斧・磨石・石皿	25
49	郷之原	12-39	鹿屋市郷之原町	縄文・古墳	土器片・石器	11
50	耳取ヶ丘	12-92	鹿屋市大浦町耳取ヶ丘			9

## 引用文献

- 1 「宮下遺跡」 2001 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 5
- 2 鹿児島県市町村別遺跡地名表
- 3 「鹿児島県の中世城館跡」 1987 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書40
- 4 「柿窪遺跡・大久保遺跡・城ヶ崎遺跡」 1987 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 7
- 5 「柿窪遺跡（Ⅱ）」 1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書37
- 6 「中野西遺跡・松山田西遺跡」 2004 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書76
- 7 「俣刈遺跡・鶴羽遺跡」 1985 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 3
- 8 「早山遺跡・宮の脇遺跡」 1986 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 4
- 9 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 1983 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書25
- 10 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 1980 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書13
- 11 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 1982 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書23
- 12 「山ノ上B遺跡」 1996 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書43
- 13 「西丸尾遺跡」 1992 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書64
- 14 「西丸尾B遺跡」 1994 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
- 15 「榎崎B遺跡」 1993 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4
- 16 「榎崎B（Ⅰ）遺跡」 1993 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書33
- 17 「榎崎A遺跡」 1992 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書63
- 18 「飯盛ヶ岡遺跡」 1993 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3
- 19 「中ノ原遺跡（Ⅱ）・中原山野遺跡・西原掩体壕跡・前畑遺跡」 1990 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書52
- 20 「前畑（あけぼの）遺跡・立神遺跡（Ⅱ）」 1990 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書18
- 21 「前畑（Ⅱ）遺跡」 1992 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書25
- 22 「前畑（Ⅲ）遺跡」 1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書36
- 23 「中原山野遺跡」 2007 県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書114
- 24 「中原山野遺跡」 1997 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書35
- 25 「概要編・榎田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡」 1989 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書48
- 26 「中ノ原（Ⅰ）遺跡」 1993 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書34
- 27 「中ノ原（Ⅱ）遺跡」 1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書35
- 28 「中ノ原（Ⅲ）遺跡」 1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書40
- 29 「中ノ原（Ⅳ）遺跡」 1995 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書41
- 30 「中ノ原（Ⅴ）遺跡」 1997 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書46





第2図 年度別調査地点



## 第Ⅲ章 発掘調査の概要

### 第1節 調査の概要

鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡は、鹿屋市花岡町高約66mのシラス台地上に位置する。

約2600mの長さの根木原遺跡は、北に桜島、南西方向には錦江湾越しに開聞岳が望める絶景の地に位置している。昭和50年代に圃場整備が行われている為、旧地形が想定しづらく発掘調査によって遺跡内で谷部がみられ、遺跡が分離されることが判明した。そのため遺跡は、中野西遺跡・松山田西遺跡・鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・領家西遺跡・天神平溝下遺跡・宇都上遺跡と7箇所の遺跡に区割りされ、小字名から上記のような名称に変更した。

#### 鷺ヶ迫遺跡

鷺ヶ迫遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成10年度の確認調査の結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し、下層確認を行った結果、古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため、Ⅲ層までは全面調査を行った。また、Ⅵ層から旧石器時代の石器が出土したため、Ⅳ・Ⅴ層は重機で排除し、Ⅵ層以下は2m四方の区割りを設定し調査を進めたが、旧石器時代の遺物集中箇所は検出されなかった。

遺構・遺物は旧石器時代の礫群や落とし穴が検出され、三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパー・植刃器等が出土した。

縄文時代時代では早期の落とし穴が検出され、前期の曾畑式土器・春日式土器等や石鏃・スクレイパー・凹石・敲石・磨石・石皿等が出土した。

古墳時代では、竪穴住居跡・土坑・溝状遺構等が検出され、成川式土器が出土した。

#### 北原中遺跡

北原中遺跡も鷺ヶ迫遺跡の区割り基準を延長して設定した。北側から1～23区、東からA～E区と名称し、調査を行った。

遺構・遺物は縄文時代の集石と晩期の入佐式土器・黒川式土器・組織文土器等や石鏃・石斧・磨石等が出土した。

古墳時代では、竪穴住居跡・土坑・溝状遺構等が検出され、成川式土器が出土した。

#### 宇都上遺跡

宇都上遺跡は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.180を結ぶ線を基軸に、北側から1～12、西側からA～F区と名称し、10m間隔の区割りを設定して調査を行った。

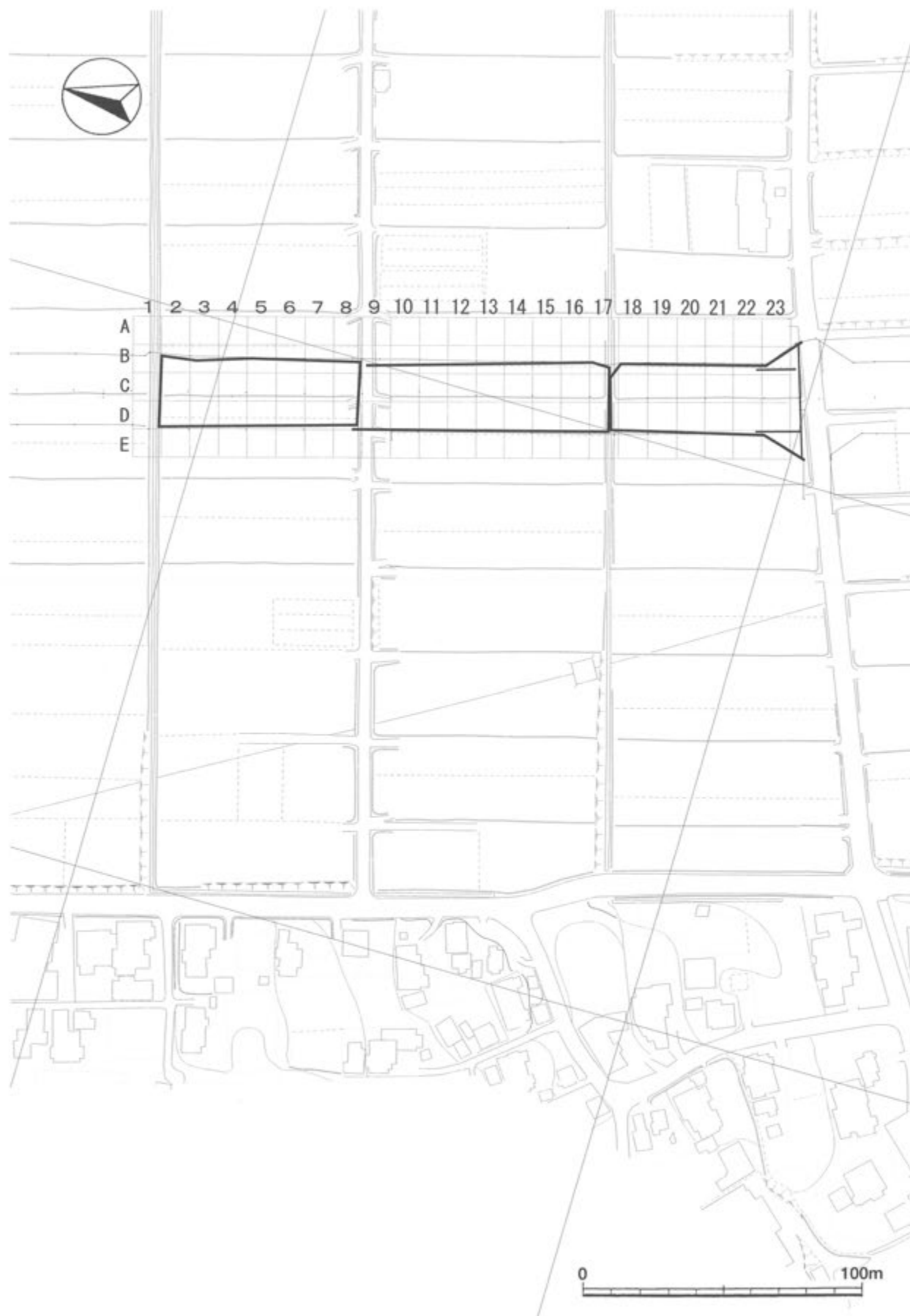
遺構・遺物は、縄文時代の集石1基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏃・石斧・敲石等が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し、古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され、第2次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

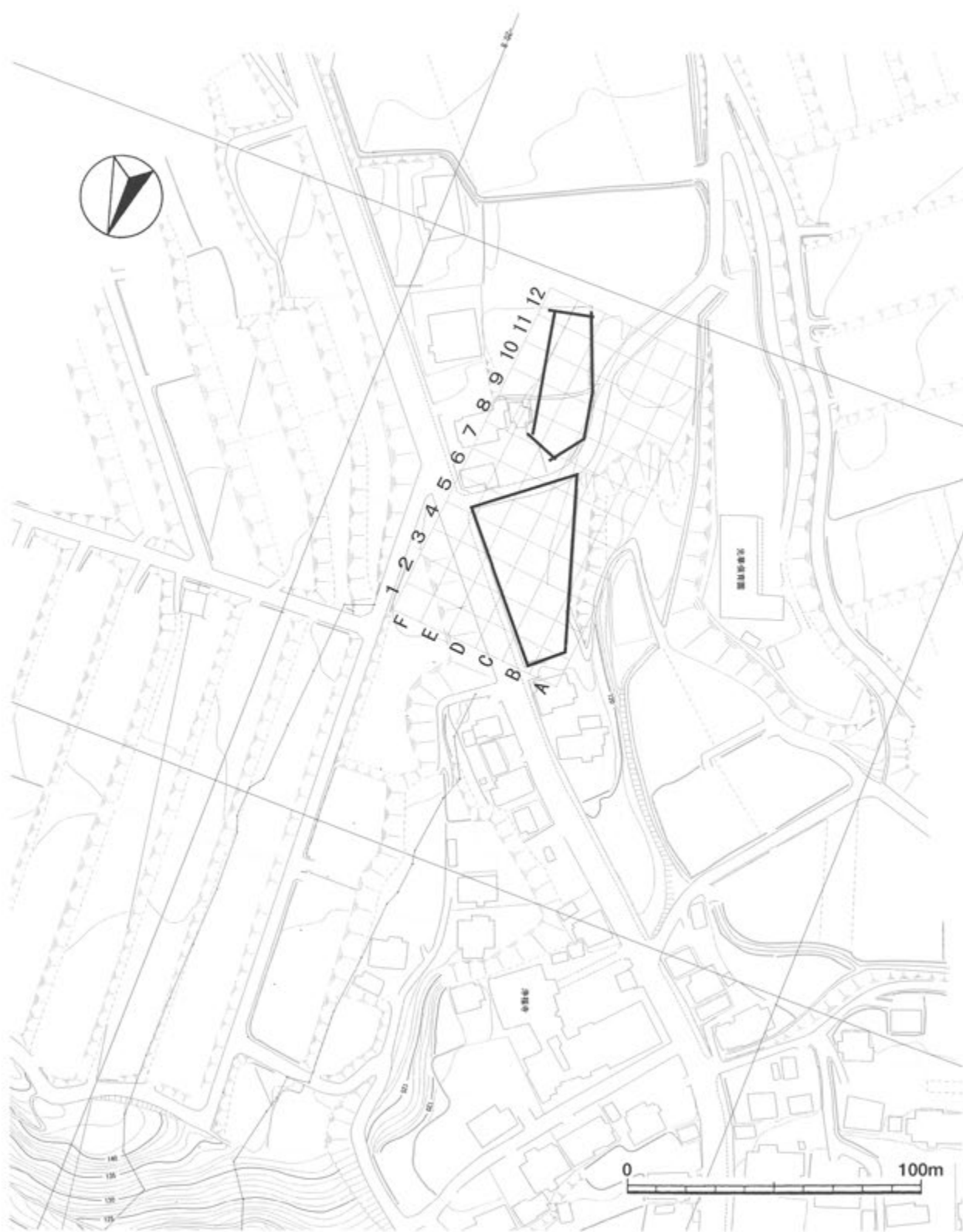




第4図 鷲ヶ迫遺跡周辺地形図



第5図 北原中遺跡周辺地形図



第6図 宇都上遺跡周辺地形図

## 第2節 層位

鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の基本土層は、発掘中の土層区分を参考に行ったが、報告書作成中に矛盾が生じたため、層位は同一にしたが、表現と色調名を変更せざるを得なかった。その理由については、各層位の中で説明を加えた。

V	V
I a	
I b	
II a	
II b	
III a	
III b	
III c	
IV	
V	
VI	
VII	
VIII	
IX	
X	

I層：黒褐色の耕作土。色調によって2～3層に区分できる。

調査時点では、現耕作土・旧耕作土を分層していたが、耕作土は一括した土層にし、その中で細分化できるものはa・b・c…と分層した。

II層：黒色腐植土。削平されている箇所が多く、部分的にしみられないところもある。

III層：下部は、約6,400年前の鬼界カルデラ起源のアカホヤ（幸屋火砕流）に対比される黄橙色軽石で、上部はその火山灰に有機質が混在したもので、粘質が弱く、径2mm前後の軽石を含む黄橙色火山灰土である。また、中位程に、約5,500年前の池田カルデラ起源の池田軽石が部分的にみられるところもある。上部に縄文時代前～晩期及び古墳時代の遺物が包含されている。

IV層：淡褐色火山灰土。やや灰色を帯びた硬質の火山灰で、比較的細粒である。下部に縄文時代早期の遺物が包含している。

V層：暗茶褐色火山灰土。調査時点では、暗オリーブ褐色土と表現していたが、曖昧であったため変更した。やや濃い褐色で粘質が強く、径5mm前後の軽石が混じる。

VI層：この層は約11,500年前の桜島起源の軽石（薩摩火山灰）である。

VII層：暗茶褐色粘質火山灰土。極めて微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発達する。旧石器時代細石器文化～縄文時代草創期の遺物が包含されている。通称チョコ層とも呼ばれている。

VIII層：茶褐色粘質火山灰土。微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発達する。

IX層：淡黄白色土でシラスと呼ばれているものである。これは約25,000年前の始良カルデラ起源の火砕流堆積物であり、南九州一帯を覆っている。

X層：黄色軽石で大隅降下軽石と呼ばれているものである。

第7図 基本土層模式図

榎崎A(報告書)

I a	耕作土
I b	旧耕作土
II	黒色砂質土
III a	暗黒褐色火山灰土
III b	褐色火山灰土
IV a	暗黄褐色火山灰土
IV b	粒の粗い 明黄褐色火山灰土
V	青灰色火山灰土
VI a	薩摩火山灰土
VI b	オレンジバミス含み
VII a	暗茶褐色ローム
VII b	黒褐色ローム
VIII a	茶褐色粘質土
VIII b	淡茶褐色粘質土
VIII c	大隅降下軽石

中野西(報告書)

I	耕作土
II	旧耕作土
III a	黒茶褐色土
III b	茶褐色土
IV a	黄褐色火山灰土
IV b	淡褐色土
IV c	黄褐色火山灰土
V	淡茶褐色土
VI	暗茶褐色土
VII	黄茶褐色土
VIII	暗茶褐色粘質土
IX	淡茶褐色硬質土
X	黄褐色弱粘質土
XI	淡黄白色土
XII	黄色軽石

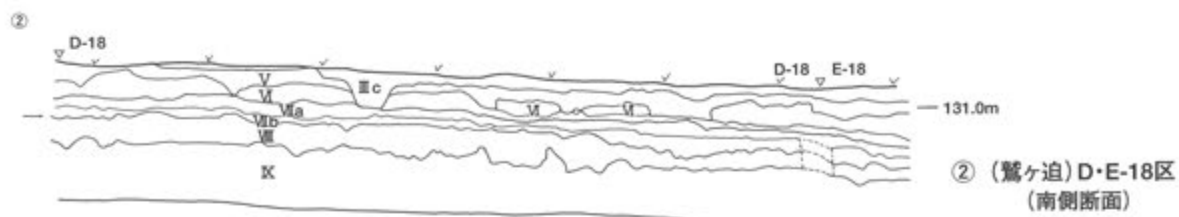
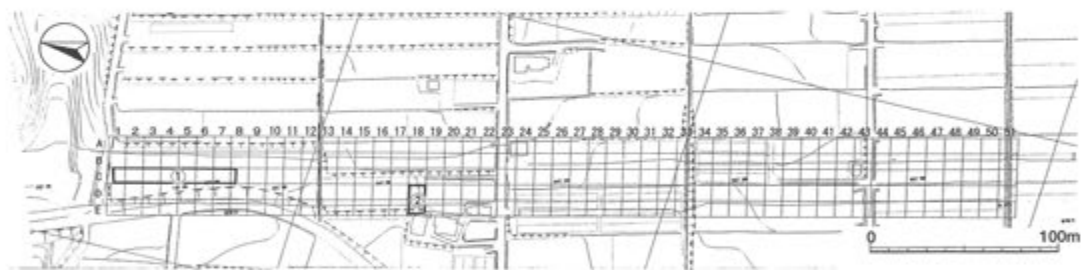
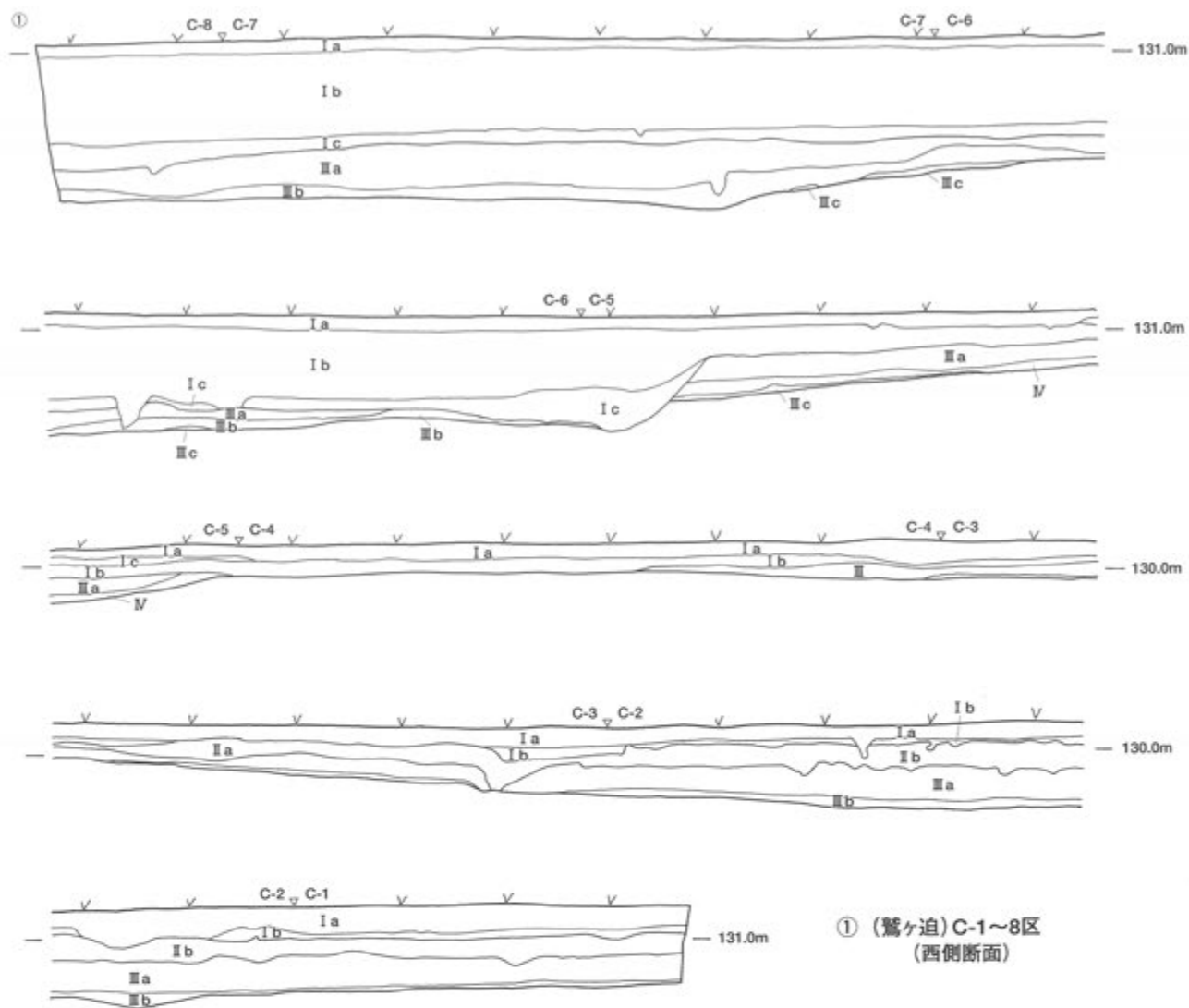
根木原(発掘)

I	暗褐色土
II	褐色土
III a	黒色土
III b	オリーブ褐色土
IV a	淡褐色土
IV b	褐色土
IV c	黄橙色火山灰土
V	オリーブ黄色土
VI	暗オリーブ褐色土
VII	明黄褐色火山灰土
VIII	黒褐色粘質土
IX	暗褐色硬質ローム
X	黄白色土
XI	黄色軽石

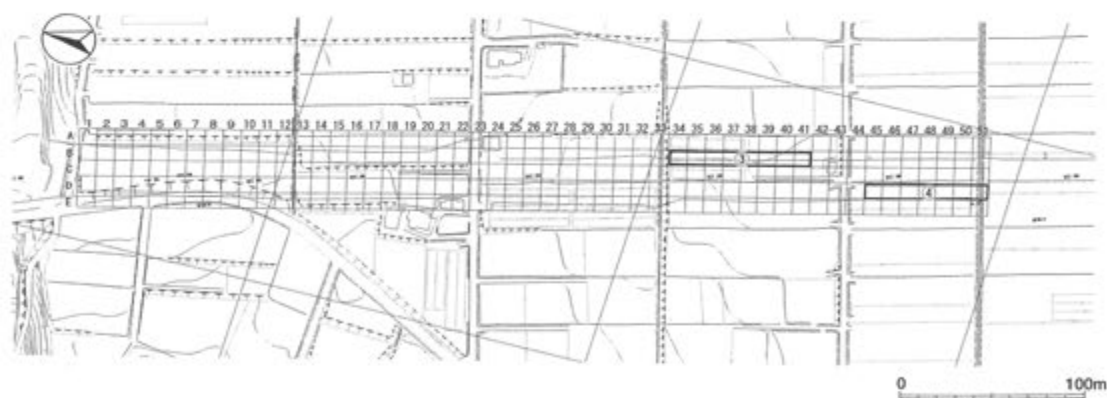
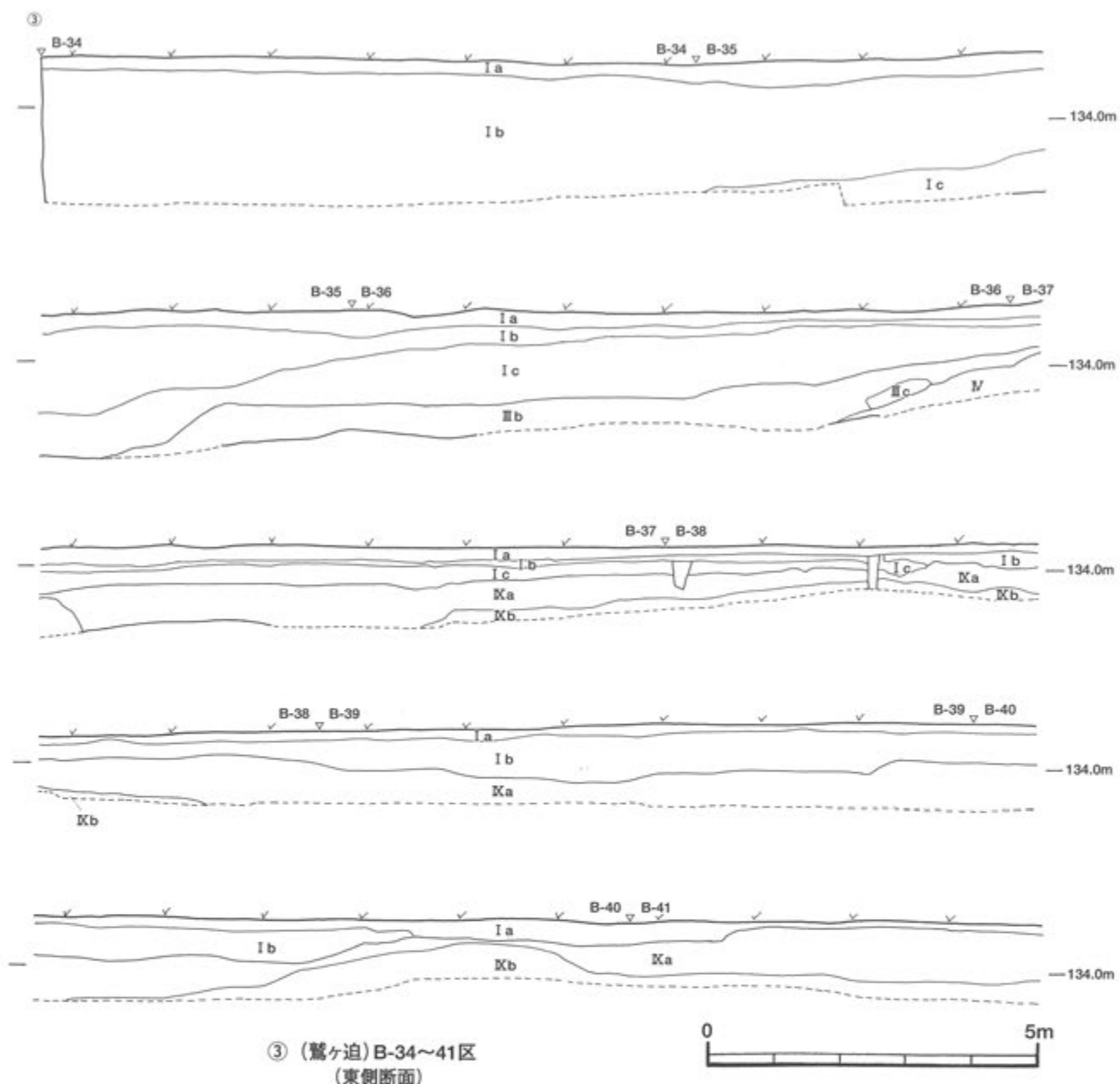
鷲ヶ迫他基本土層図

I a	黒褐色土
I b	淡黒褐色土
II a	黒色腐植土
II b	黒褐色土
III a	淡褐色土
III b	黄橙色火山灰土
III c	黄橙色軽石
IV	淡茶褐色土
V	暗茶褐色土
VI	黄褐色軽石
VII	暗茶褐色 粘質火山灰土
VIII	茶褐色粘質火山灰土
IX	淡黄白色土
X	黄色軽石

第8図 周辺遺跡土層比較図

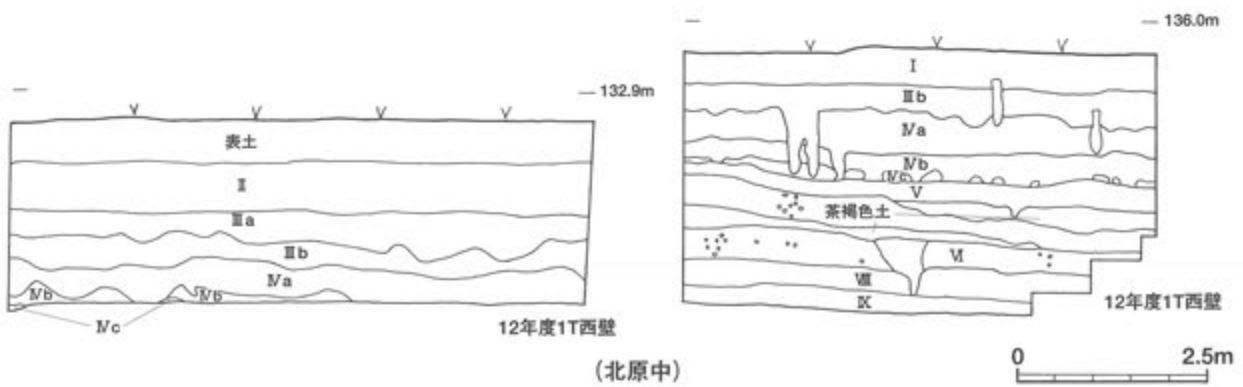
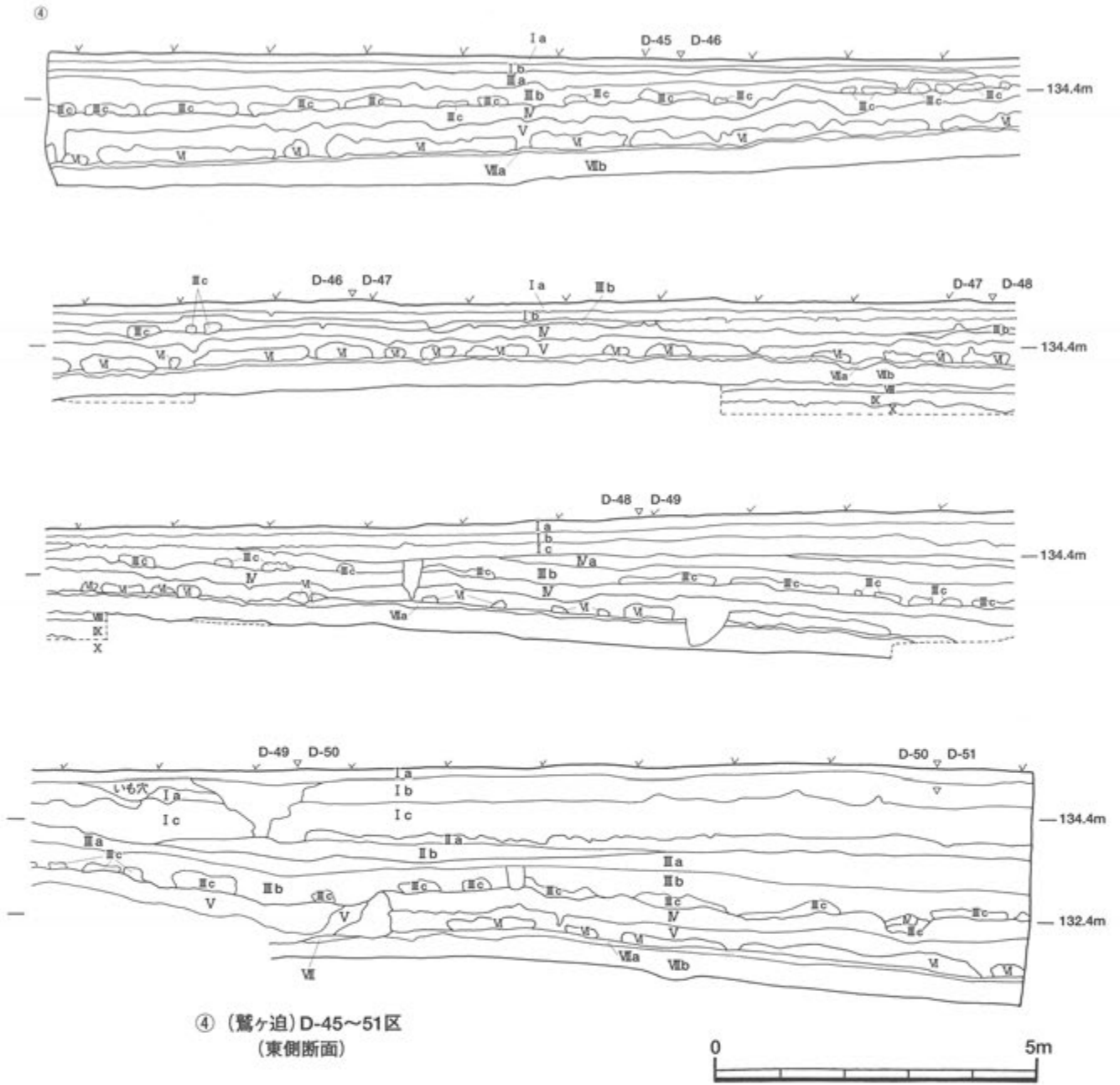


第9図 鷺ヶ迫遺跡土層図(1)

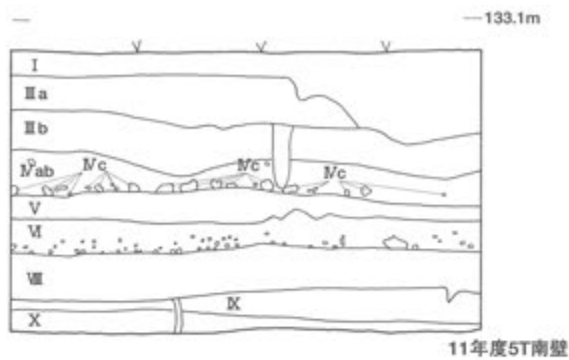


第10図 鷺ヶ迫遺跡土層図 (2)

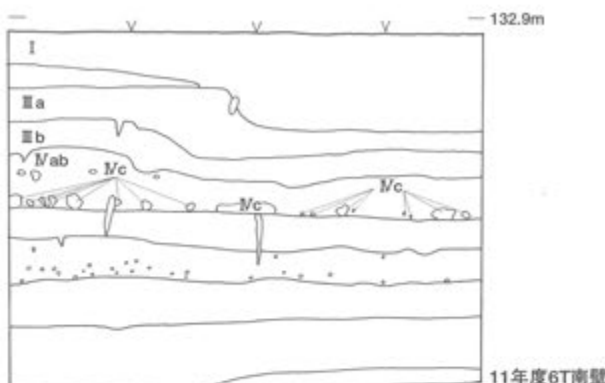




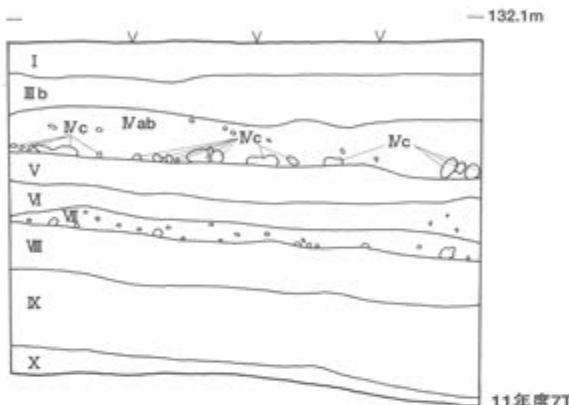
第11図 鷺ヶ迫遺跡土層図 (3) ・北原中遺跡土層図 (1)



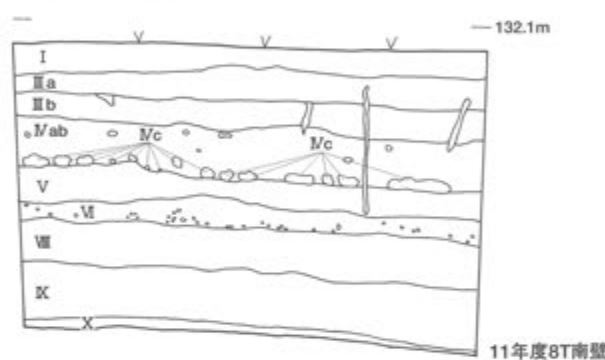
11年度5T南壁



11年度6T南壁

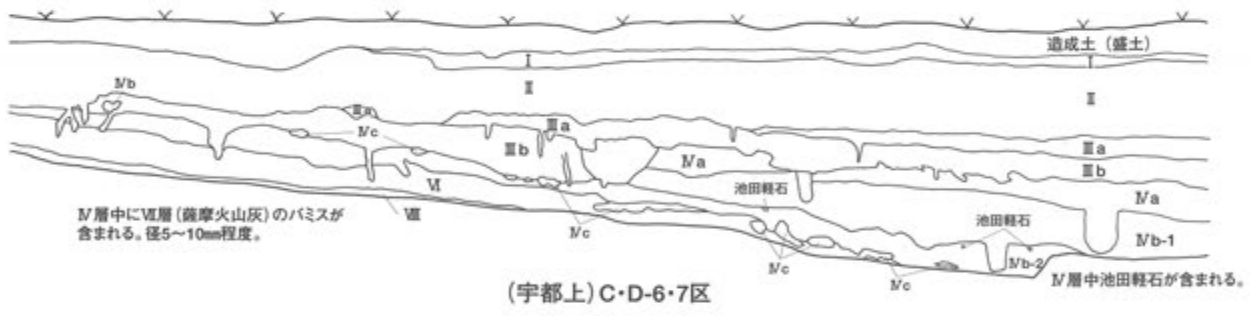


11年度7T南壁

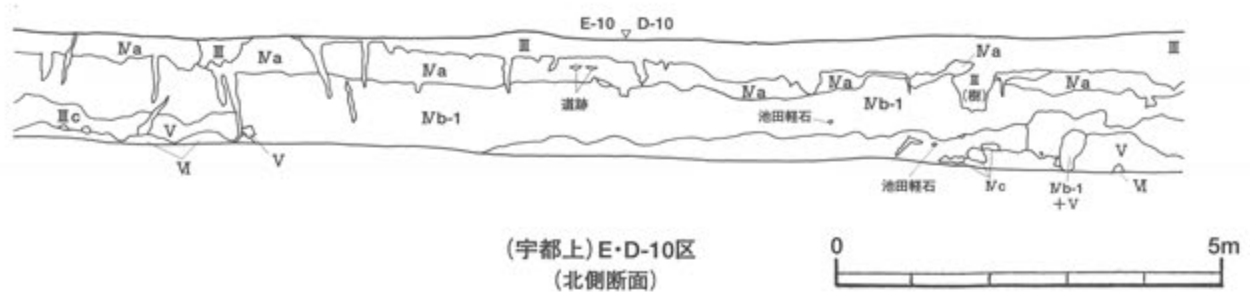


11年度8T南壁

(北原中)



(宇都上)C·D-6·7区



(宇都上)E·D-10区  
(北側断面)



第12図 北原中遺跡土層図(2)・宇都上遺跡土層図

跡遺迫ヶ鷺

## 第Ⅳ章 鷺ヶ迫遺跡

### 第1節 発掘調査の概要

鷺ヶ迫遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成11年度から確認調査及び本調査を行ったが、用地買収に手間取り変則的な発掘調査になった。そのため、平成11・12・16・18年度に発掘調査を行った。

その結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し、下層確認を行った結果、古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため、Ⅲ層までは全面調査を行った。また、Ⅵ層から旧石器時代の石器が出土したため、Ⅳ・Ⅴ層は重機で排除し、Ⅵ層以下は2m四方の区割りを設定し調査を進めたが、旧石器時代の遺物集中箇所は検出されなかった。

### 第2節 旧石器時代の調査

Ⅶ層からは、旧石器時代～縄文時代草創期の遺物が出土した。遺物は29～38区、44～50区に集中し、遺構は礫群・落とし穴が検出された。遺物の出土状況はブロック状であったが、境界が不鮮明な箇所も多く一括して取り上げた。

#### 礫群 (第14図)

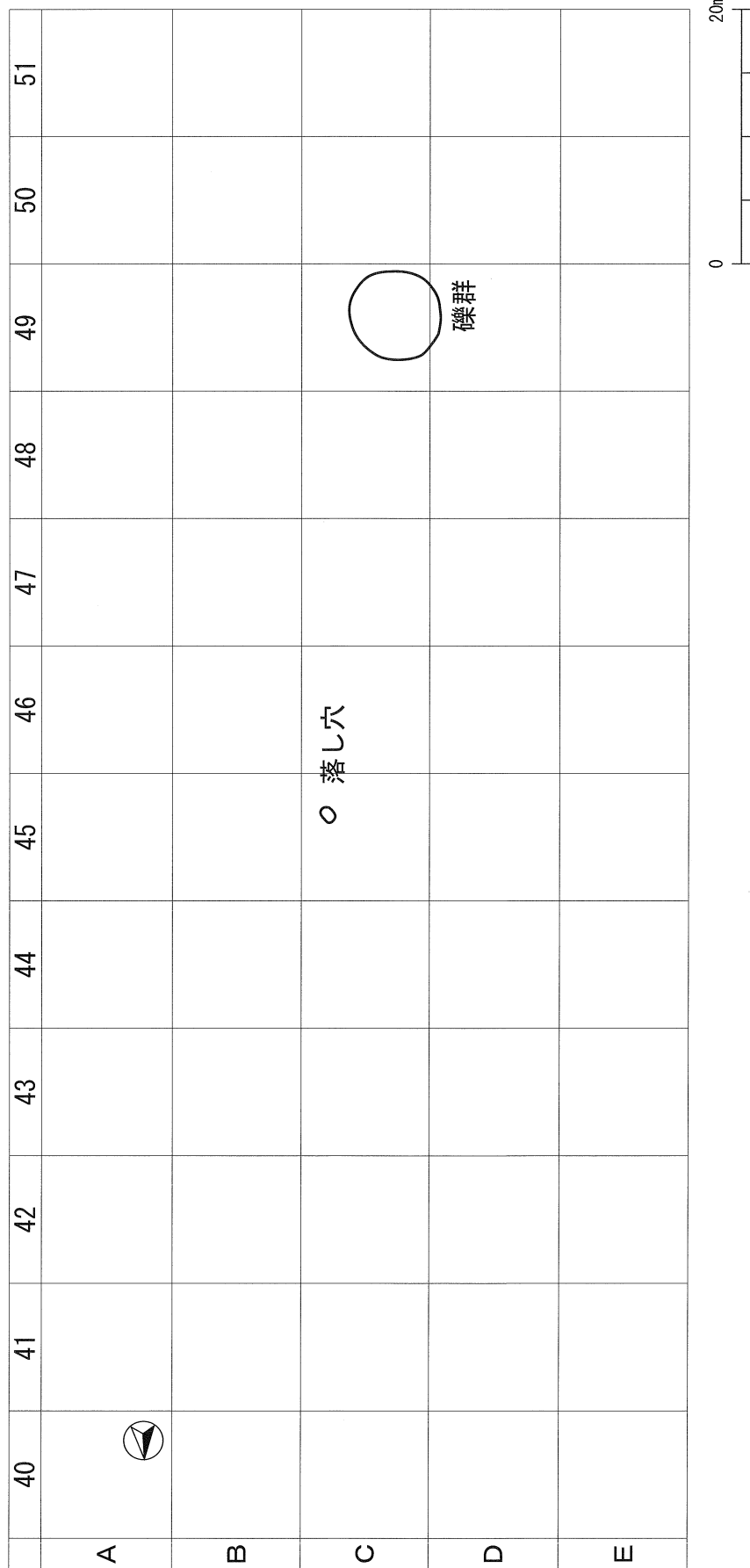
C49区Ⅶ層上面で、検出したものである。Ⅶ層下面より旧石器時代の遺物が出土することから、調査区(34～50区)に2×2mの区割りを設定し、千鳥掘りで掘り下げを行った。その結果、C49区Ⅶ層下部からⅧ層上部にかけて礫がまばらに検出された。その周辺を慎重に掘り下げを行った結果、拳大の礫が多数出土した。礫群は2m四方に円形状の範囲に434個の大小の砂岩の角礫・円礫が集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており、火熱の影響を受けたものと考えられる。礫はやや小ぶり、拳大よりも少し小さめであった。この礫群の周囲からは、細石刃・剥片・植刃器が出土し、土器片の出土がないことからこの礫群は旧石器時代のものと考えられる。

#### 落とし穴 (第15図)

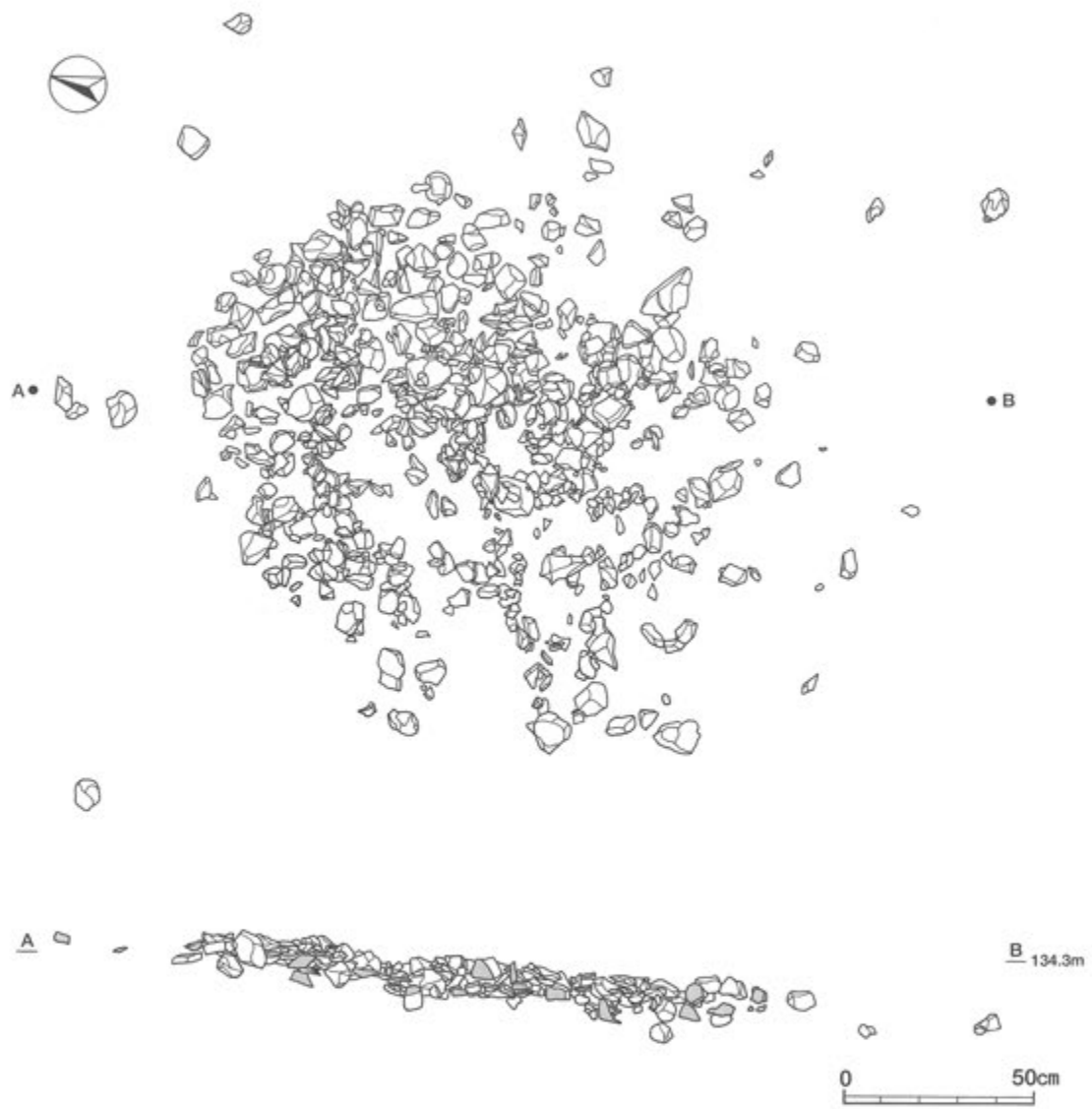
C45区Ⅸ層上面で検出したものである。粘質土であるⅧ層を掘り下げて、Ⅸ層上面で100×70cmの隅丸方形の遺構を検出した。西側半分を半裁したところ底面にピットが確認された。これにより落とし穴の可能性が高いと判断し、西側からスライス調査を行った。その結果、底面は70×50cmを測り逆茂木痕を検出できた。この落とし穴の深さは検出面から約50cmを測り、逆茂木痕は10箇所確認できた。逆茂木痕の深さは底面から15～20cmを測る。

#### 遺物

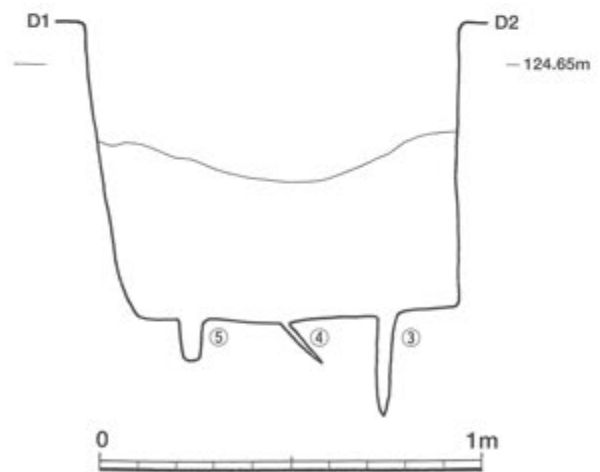
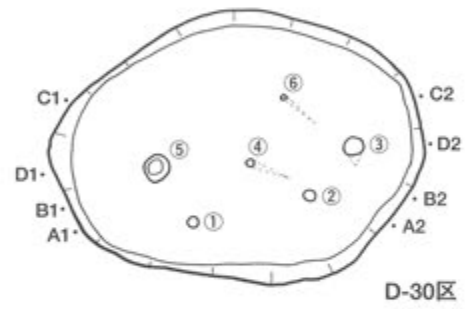
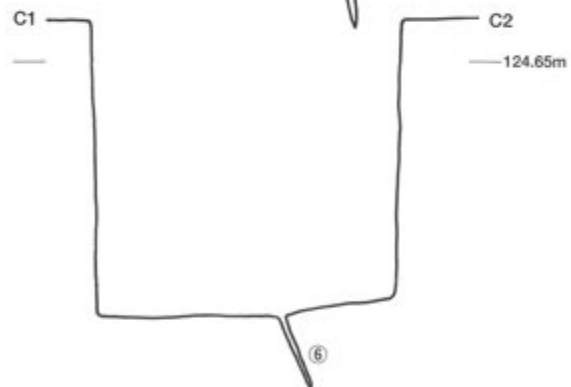
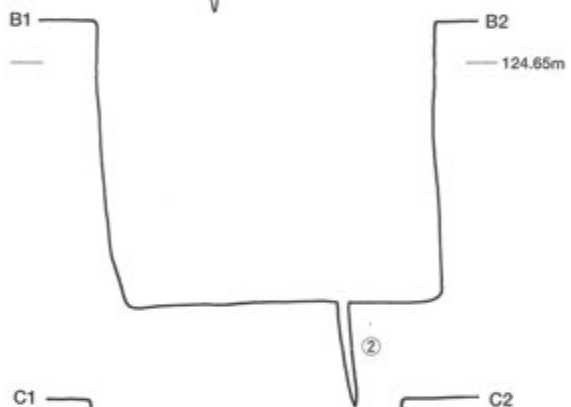
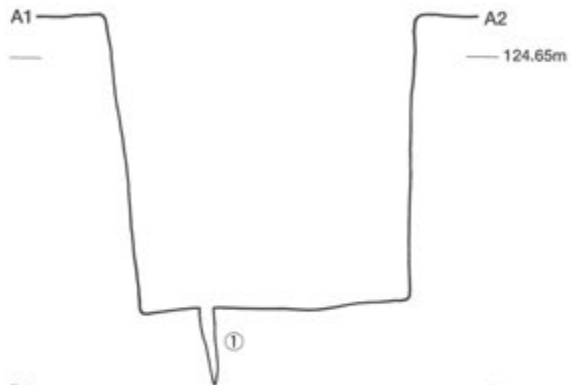
旧石器時代の遺物は29～38区、44～50区のⅦ層に集中して出土した。ナイフ形石器8点、台形石器9点、三稜尖頭器4点、スクレイパー6点、細石刃20点、植刃器2点、ブランク2点、楔形石器1点と剥片・チップが出土した。



第13図 Ⅶ層検出遺構配置図















第14図 礫群















第15図 落とし穴

A	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
B													
C													
D													
E													

A	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
B													
C													
D													
E													

A	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
B													
C													
D													
E													

A	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
B												
C												
D												
E												



第16図 VII層出土状況



石材は、黒曜石、頁岩、安山岩、チャート、砂岩、花崗岩等であり、黒曜石は肉眼的観察により、県内産の三船、平木場、上牛鼻、桑ノ木津留、県外産の腰岳、針尾、椎葉川などがみられた。なお、大口市の日東産黒曜石は、五女木や猩々といった原産地が付近にあり、肉眼的な区別は困難であった為、「日東産系」もしくは「日東産」と、まとめて分類した。今後、科学的な分析で正確な分類を行っていきたい。

#### ナイフ形石器（第17図， 1～8）

1～6は三船産黒曜石を素材としている。1は縦長剥片を用いており、背部にはわずかに刃つぶし加工がほどこされている。基部は欠損している。2も縦長剥片を用いており、刃部に使用痕がみられる。3は刃部に厚みがあり、一見スクレイパーのようであるが刃部・背面が形成され背面には刃つぶし加工がみられたため、ナイフ形石器と分類した。4の刃部は上部にみられるが、二側辺加工の後、刃つぶし加工の微調整がみられる。切出し形ナイフ形石器である。5も切出し形ナイフ形石器で、縦長剥片に二側辺加工を施し先端部に刃部をつくるものである。6は刃潰し加工が周囲すべてに行われている。両側縁加工のナイフ形石器とした。7は日東産黒曜石を素材としている。5と同様の切出しナイフ形石器である。8は三船産黒曜石を素材としている。二側片加工の後、丁寧な刃潰し加工が施されている。刃部には使用痕がみられる。極めて小型で、検出された地点の近くには、植刃器が2点検出されていることから、この石器も植刃器と組み合わせて使われた可能性がある。

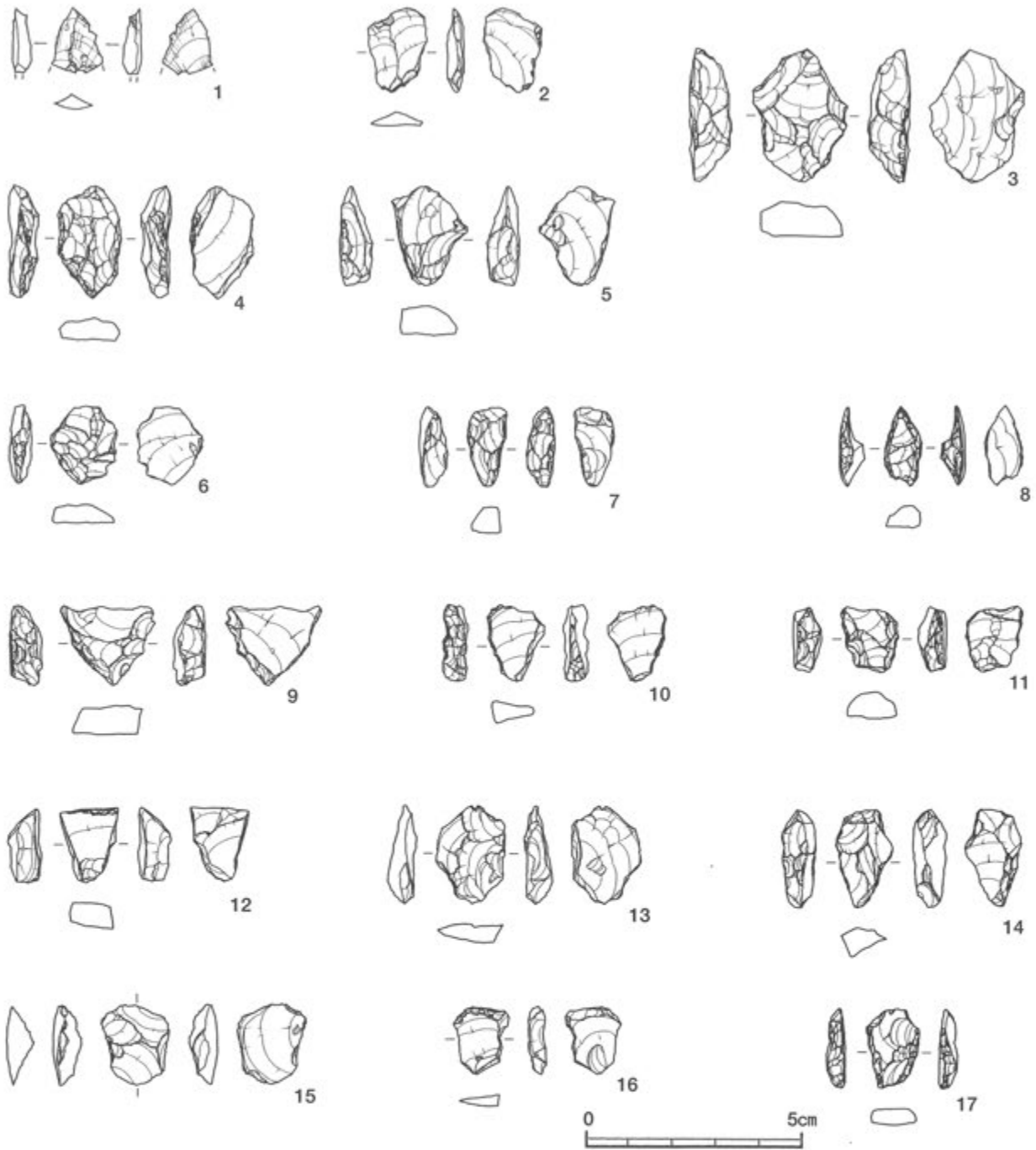
#### 台形石器（第17図， 9～17）

9～16は三船産の黒曜石を石材に用いた台形石器である。9は縦長剥片を利用し、両側縁は両面からと片面からの丁寧なブランディングにより整形している。10・11も同様な整形を施している。10の刃部は欠損している。12はやや厚みのある不定形剥片を利用し、両側縁を平坦剥離により整形している。刃部には使用痕がみられる。13もやや厚みのある不定形剥片を利用し、両側縁を平坦剥離により整形している。刃部は欠損している。14はやや厚みのある縦長剥片を利用し、両側縁に片面からのブランディングを施し整形している。15は横長剥片を縦位に利用し、両側縁に片面からのブランディングが施され整形している。16は不整形剥片を横位に利用し、両側縁は片面からのブランディングと平坦剥離により整形されている。17は腰岳産の黒曜石を石材に用い、不整形剥片を縦位に利用している。両側縁は片面からの丁寧なブランディングが施され整形されている。刃部には使用痕がみられる。

#### 三稜尖頭器（第18図， 18～21）

18～21は三船産の黒曜石を素材に用いた三稜尖頭器である。18は一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離を施すもので先端部はやや鋭い。断面は台形を呈す。19は厚みのある横長剥片を素材にしたもので、やはり一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離を施すもので、先端部が鈍いものである。

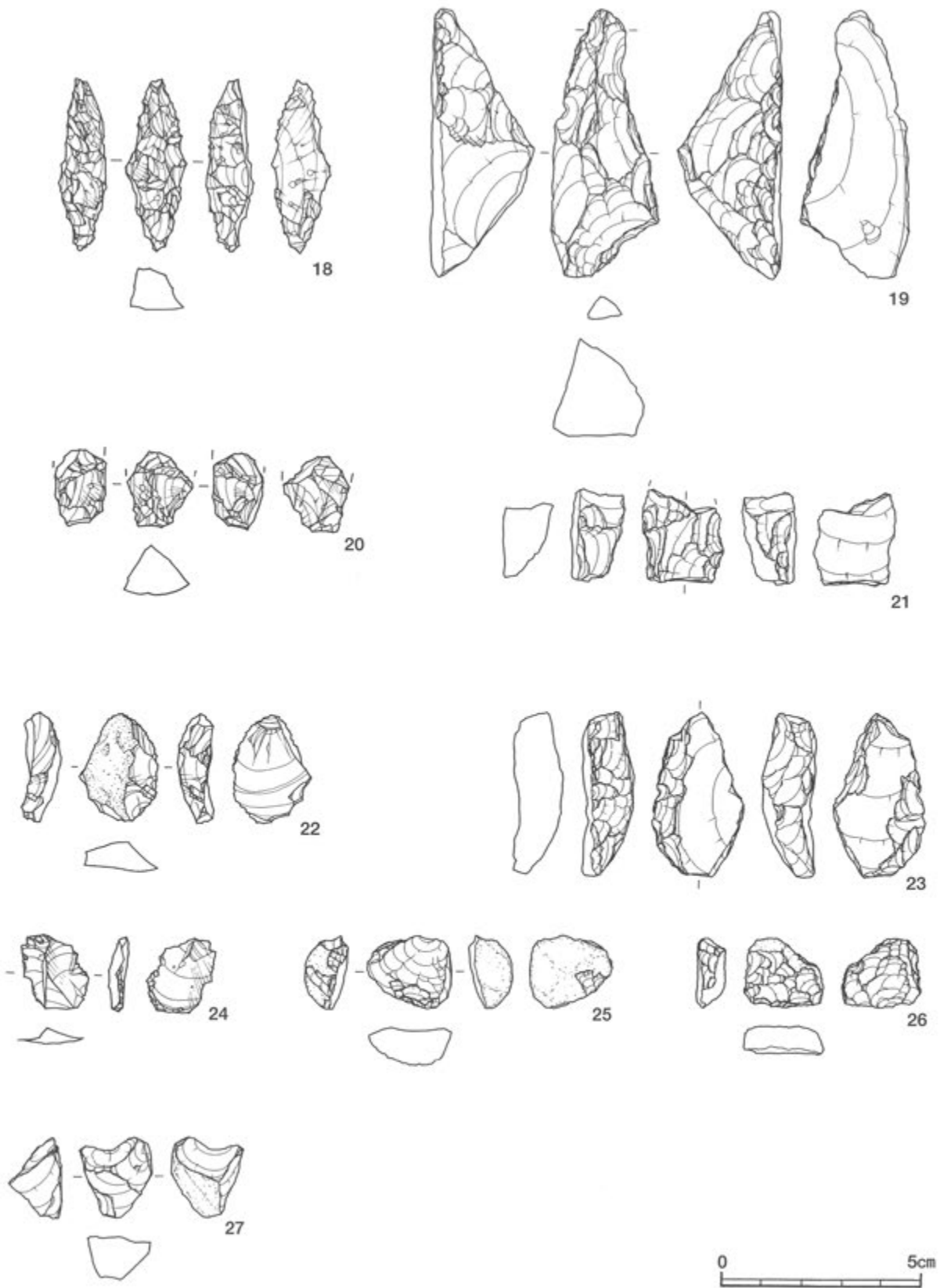
断面は三角形を呈す。20は先端部が欠損し基部のみであるが、厚みのある縦長剥片を素材にし、二面に調整剥離を施した三稜尖頭器である。21は気泡の多い粗悪な黒曜石を素材に用いている。やはり一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離を施していることから三稜尖頭器に分類した。



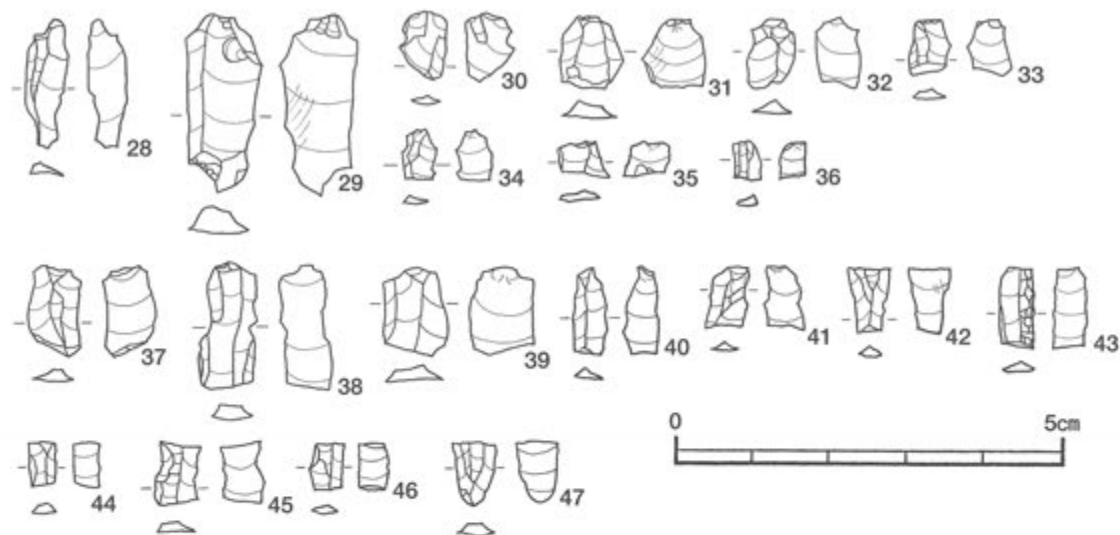
第17図 ナイフ形石器・台形石器

スクレイパー (第18図, 22~27)

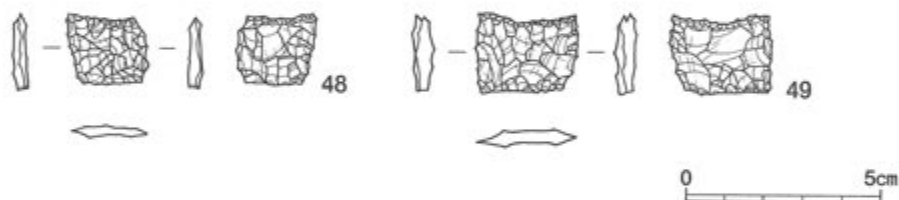
22は針尾産黒曜石を素材としたスクレイパーである。自然面を有する剥片を用い、両下側縁に調整剥離を行い、刃部を形成し45°ほどの厚い刃を作り出している。23は三船産黒曜石を素材としている。4 cmほどの剥片の左側縁に70°ほどの刃部を形成している。左側縁は方向性・計画性のみられない剥離面となっている。24は桑ノ木津留産黒曜石を素材としている。自然面の残る縦長剥片を用い、下部に裏面からの微細剥離を施している。また左側縁には使用痕がみられる。25は三船産黒



第18図 三稜尖頭器・スクレイパー・挿入石器



第19-1図 細石刃



第19-2図 植石器

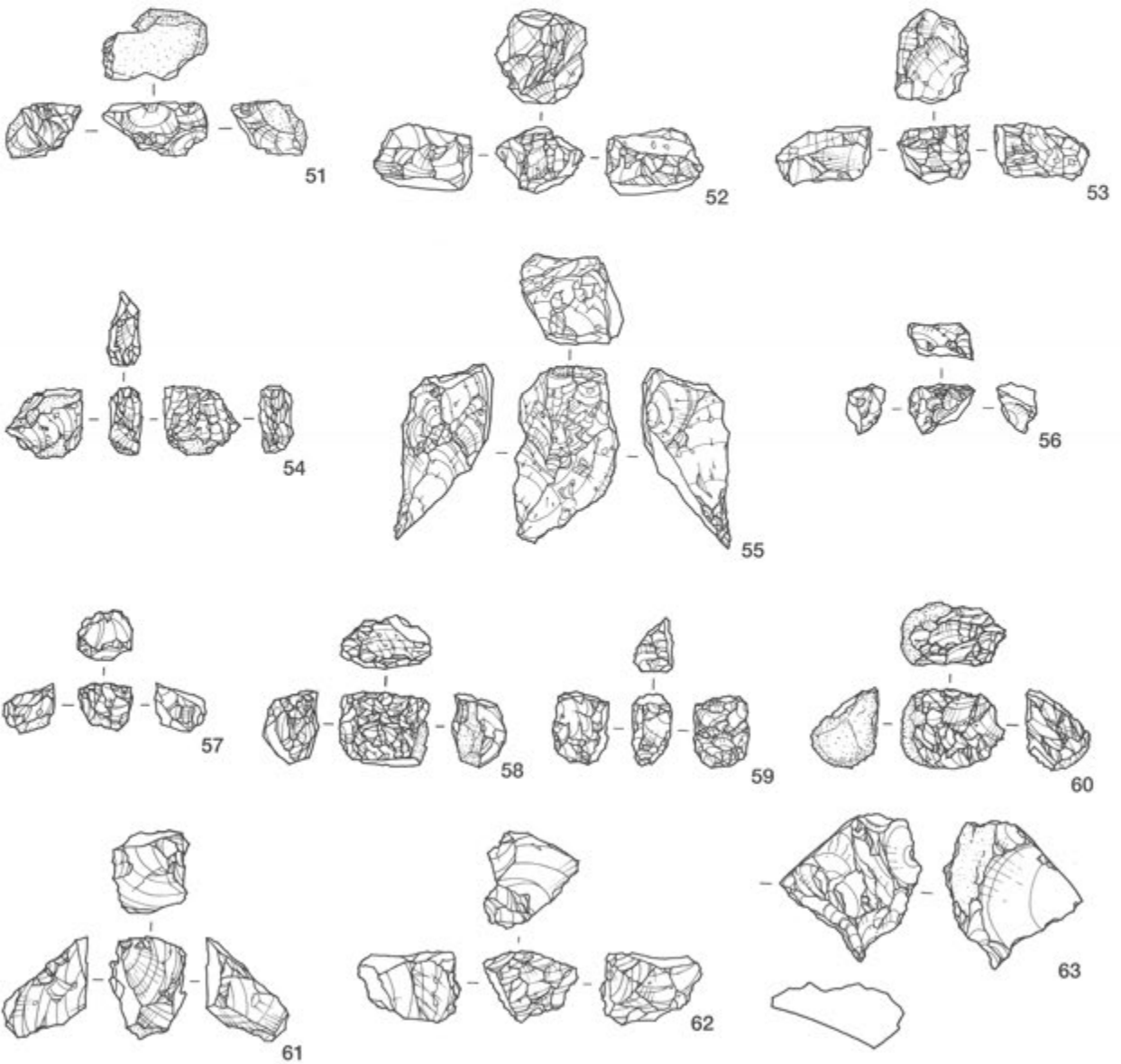
曜石を素材としている。裏面はほとんど自然面であり表面からの剥離により、下部に刃部を形成している。刃の厚さは60°ほどである。26は三船産黒曜石の縦長剥片を横位に利用し、左側縁は切断後に刃潰し加工が施されている。表裏両面から剥離を施し下縁に60°ほどの厚さの刃部を形成している。27は三船産黒曜石を素材としている。下面、右側縁は自然面が残り左側縁は切断されている。抉りを作るための調整剥離や調整痕はみられず、剥離の際、偶然できた抉りを使用した可能性がある。抉り部分には使用痕がみられる。

細石刃（第19-1図，28~47）

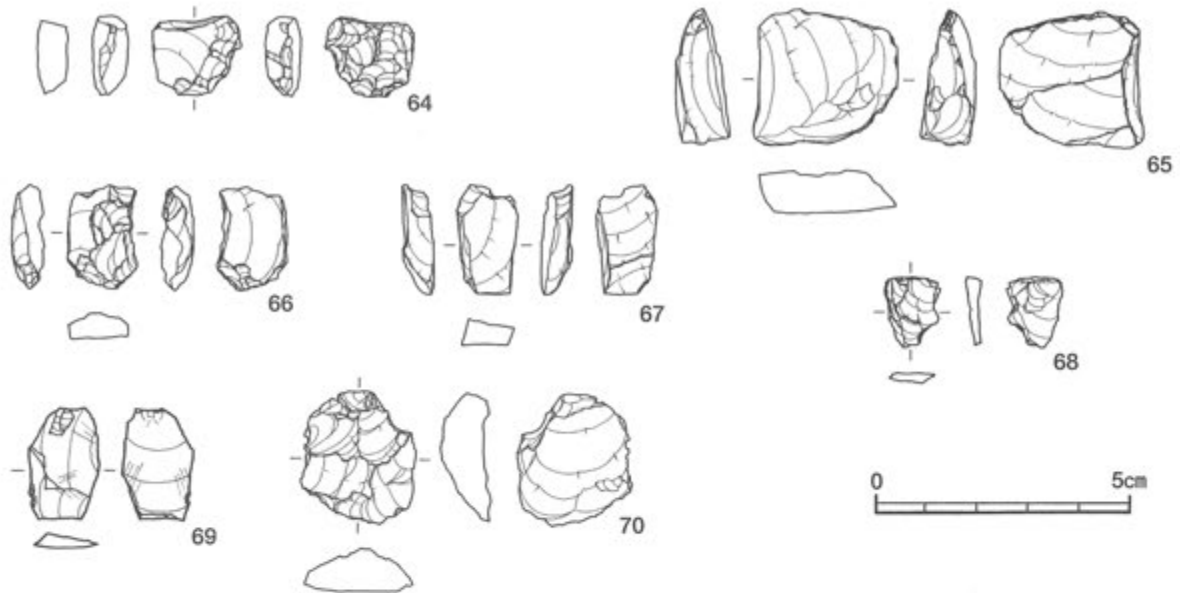
28，29は完形の細石刃である。28は三船産，29は桑ノ木津を素材としている。28は右側縁が刃部となっており、左側縁は切断されている。全体が湾曲している。29は両縁が刃部となっている。下部は抉状に加工がほどこされており使用痕がみられる。30~36は細石刃の頭部である。30・31・33は腰岳産，32・34~36は三船産黒曜石を用いている。全て意図的に切断分割されており，30・32・33・36には両側縁に使用痕がみられる。37~41は頭・中間部である。37・38は腰岳産，39は桑ノ木



第19-3図 草創期土器



第20図 細石刃核・ブランク・剥片



第21図 楔形石器・切断剥片・使用痕剥片

津留産，40，41は三船産黒曜石を素材としている。全て意図的に切断されており，両側縁に使用痕がみられる。42～46は中間部の細石刃である。43は腰岳産，42・44・45は三船産46は安山岩を素材としている。全て意図的に切断され使用痕がみられる。43は右側辺の刃部に刃つぶし加工がほどこされたブランディングツールである。細石刃にブランディングを施しているものは出土例が少なく検討を要するが，この遺物が検出された付近には小型ナイフ，植刃器が出土しており，細石刃のブランディングもそれに伴うものである可能性が考えられる。46は安山岩製の細石刃である。周辺から安山岩の細石刃核，剥片は出土しておらず。製品として持ち込まれたと考えられる。道具の移動を考えさせる遺物である。47は三船産の黒曜石を使用した尾部である。意図的に切断されており，尾部の特徴である弯曲した形となっている。

#### 植刃器（第19-2図，48・49）

48・49は植刃器である。48は桑ノ木津留産黒曜石，49は三船産黒曜石を用いている。石鏃の尖頭部が欠損した形状であるが，全面に微細剥離が施されており，また出土した付近には，細石刃や小型ナイフ形石器が出土している。出土条件や周辺環境より植刃器と判断したが，出土例や報告も少なく，慎重な研究が必要とされるであろう。

#### 草創期土器（第19-3図，50）

50は，Ⅶ層出土の薩摩火山灰下位から出土した無文土器である。表裏共に明赤褐色を呈し表面はナデ整形がみられる。胎土は角閃石・石英を含み，焼成はやや粗悪なものである。

#### 細石刃核（第20図，51～63）

51は腰岳産黒曜石を素材とした不定形剥片を基に剥離作業を行った石核である。自然面をプラットホームとしている。52～59は，三船産，60は日東産の黒曜石を素材としている。51・52，55～58は，ほぼ台形をしている。上部を半割しプラットホームを作り，そこから剥離作業を行っている。53は上面を半割後プラットホームを作り，左右面を主に剥離作業を行い，最終的に幅の狭くなった

正面から剥離作業を行っていったものである。54は厚い縦長剥片を素材とした不定形剥片を使用している。剥離面をプラットホームとしている。厚い部分の上部に剥離作業が多くみられる。59は自然面を多く含み、風化面が目立つ。剥離の方向性、剥離作業面から細石刃核と分類したが不明な点が多い。

#### ブランク（第20図，61・62）

61は、桑ノ木津留産，62は、三船産の黒曜石を使用している。61は逆台形を呈しており，わずかに剥離作業面がみられる程度である。62も逆台形を呈しているが，石材に不純物が多く，それに伴ない微少なヒビが入っている。そのため，細石刃を剥出できなかつたと考えられる。

#### 楔形石器（第21図，64）

64は，桑ノ木津留産の黒曜石を素材にした楔形石器である。背面に主要剥離がみられ，正面には上方に向かう剥離がみられる。下面，左側縁に使用によるつぶれがみられる。

#### 剥片（第20・21図，63・65～70）

63は三船産黒曜石の不純物の目立つ剥片である。65～67は切断剥片で，65～67は三船産の黒曜石を素材としている。65は正面からの加圧により切断されており，上縁には加工痕がみられ，下縁には，多方向による剥離が施されている。66は両側縁が正面からの加圧によって切断されている。上縁にわずかに使用痕がみられる。67も65同様，両側が正面からの加圧によって切断されている。67～69は使用痕がみられた。68・69は，桑ノ木津留産，70は，三船産の黒曜石を素材としている。67は縦長剥片を用い，上縁を切断後そこから調整加工が施されている。左側縁に使用痕があり，わずかに調整痕がみられる。69は縦長剥片を用い，下部が切断されている。切断された下部を除きほぼ全ての側縁に使用痕がみられる。70は円形に近い剥片を用い，左側縁に使用痕がみられる。

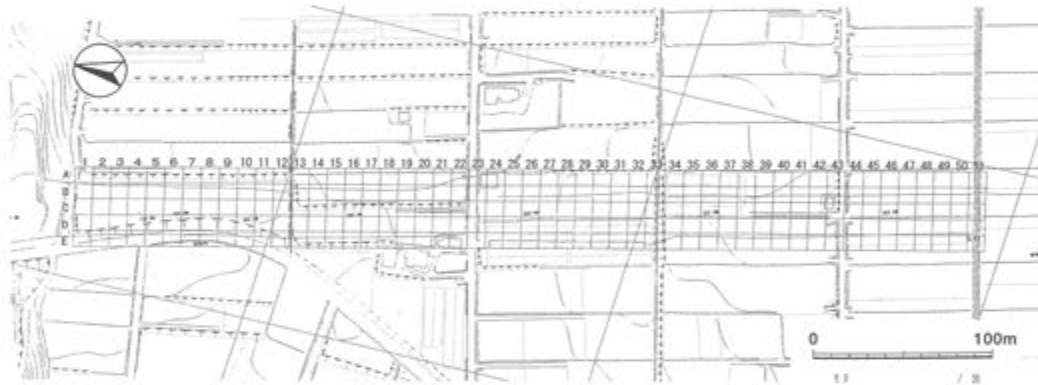
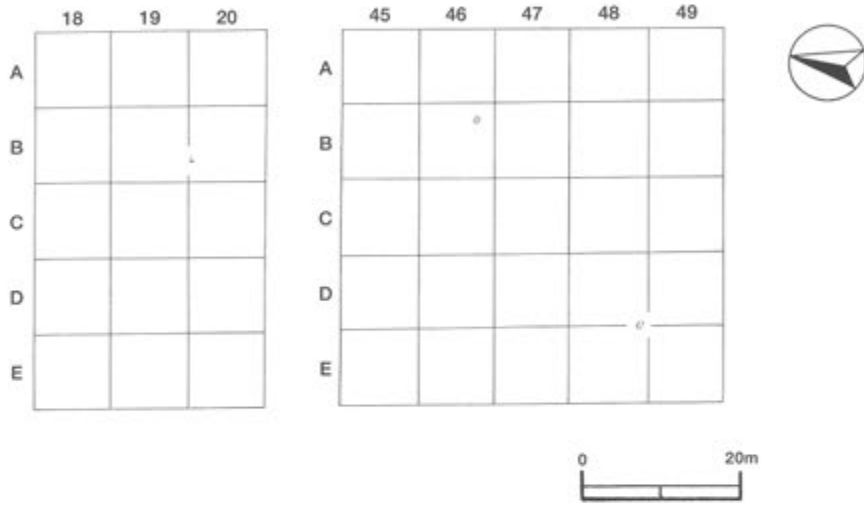
第6表 鷲ヶ迫遺跡旧石器遺物観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
17	1	4279	ナイフ形石器	黒曜石三船	B50	VII	1.5	1.2	0.4	0.6	
	2	12865	ナイフ形石器	黒曜石三船	D30	VII	2.1	1.4	0.4	0.9	
	3	12824	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	VII	3.3	2.2	1.0	5.9	
	4	12797	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	VII	2.7	1.5	0.8	2.8	
	5	12696	ナイフ形石器	黒曜石三船	D33	VII	2.4	1.5	0.8	2.2	
	6	12651	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	VII	1.9	1.5	0.5	0.4	
	7	12661	ナイフ形石器	黒曜石日東	C33	VII	0.9	0.9	6.5	1.0	
	8	12659	ナイフ形石器	黒曜石三船	C33	VII	1.9	0.9	0.6	0.6	
	9	12279	台形石器	黒曜石三船	B33	VII	1.7	2.2	0.8	2.6	
	10	12012	台形石器	黒曜石三船	B33	VII	1.8	1.3	0.5	1.0	
	11	12663	台形石器	黒曜石三船	C33	VII	1.8	1.7	0.7	1.5	
	12	12755	台形石器	黒曜石三船	C31	VII	1.7	1.3	0.6	1.3	
	13	12277	台形石器	黒曜石三船	B33	VII	2.3	1.5	0.8	2.2	
	14	12801	台形石器	黒曜石三船	C33	VII	2.3	1.3	0.8	1.7	
	15	12654	台形石器	黒曜石三船	C33	VII	1.9	1.6	0.7	1.7	
	16	12822	台形石器	黒曜石三船	C33	VII	1.6	1.3	0.4	0.6	
	17	13070	台形石器	黒曜石腰岳	C7	IV	2.0	1.2	0.5	1.1	
18	18	5649	三稜尖頭器	黒曜石三船	D44	VII	4.4	1.5	1.2	6.5	
	19	—	三稜尖頭器	黒曜石三船	C29	VII	7.0	2.8	2.5	32.9	
	20	12665	三稜尖頭器	黒曜石三船	D33	VII	1.9	1.7	1.5	3.5	
	21	12760	三稜尖頭器	黒曜石三船	C31	VII	2.3	1.9	1.3	5.4	
	22	4096	スクレイパー	黒曜石針尾	C49	VII	2.8	2.9	0.7	4.1	
	23	12847	スクレイパー	黒曜石三船	C29	VII	4.2	2.3	1.2	12.0	
	24	12208	スクレイパー	黒曜石桑ノ木津留	B32	VII	1.9	1.7	0.4	1.1	
	25	12622	スクレイパー	黒曜石三船	C33	VII	2.1	1.7	1.0	3.6	
	26	12036	スクレイパー	黒曜石日東	D33	VII	2.2	1.7	0.9	2.8	
	27	12257	抉入石器	黒曜石三船	C33	VII	2.1	1.8	1.3	3.2	
19(1)	28	12817	細石刃(完形)	黒曜石三船	B33	VII	1.6	0.5	0.2	0.14	
	29	12778	細石刃(完形)	黒曜石桑ノ木津留	B33	VII	2.3	1.0	4.2	0.02	
	30	5650	細石刃(頭部)	黒曜石腰岳	C35	VII	0.9	0.6	0.15	0.08	
	31	12664	細石刃(頭部)	黒曜石腰岳	C33	VII	1.0	0.8	0.24	0.12	
	32	4081	細石刃(頭部)	黒曜石三船	C49	VII	0.9	0.6	0.17	0.77	
	33	4093	細石刃(頭部)	黒曜石腰岳	C49	VII	0.75	0.55	0.17	0.05	
	34	12666	細石刃(頭部)	黒曜石三船	C33	VII	0.7	0.45	0.1	0.03	
	35	12685	細石刃(頭部)	黒曜石三船	D33	VII	0.6	0.4	0.13	0.03	
	36	12884	細石刃(頭中)	黒曜石三船	C29	VII	0.5	0.4	0.1	0.02	
	37	4092	細石刃(頭中)	黒曜石腰岳	C49	VII	1.3	0.6	0.19	0.13	
	38	4091	細石刃(頭中)	黒曜石腰岳	C49	VII	1.7	0.7	0.15	0.19	
	39	5641	細石刃(頭中)	黒曜石桑ノ木津留	C35	VII	1.2	0.8	0.17	0.21	
	40	4278	細石刃(頭中)	黒曜石三船	D50	VII	1.15	0.5	0.19	0.08	
	41	6069	細石刃(頭中)	黒曜石三船	C36	VII	0.8	0.5	0.1	0.04	
	42	5570	細石刃(中)	黒曜石三船	C37	VII	0.9	0.6	0.17	0.07	
	43	4080	細石刃(中)	黒曜石腰岳	C49	VII	1.1	0.5	0.4	0.07	
	44	12646	細石刃(中)	黒曜石三船	C33	VII	0.6	0.4	0.11	0.02	
	45	5767	細石刃(中)	黒曜石三船	D7	VII	0.8	0.55	0.13	0.07	
	46	4101	細石刃(中)	安山岩	C49	VII	0.6	0.4	0.14	0.05	
47	5674	細石刃(尾)	黒曜石三船	D38	VII	0.8	0.6	0.12	0.07		
19(2)	48	4086	植刃器	黒曜石桑ノ木津留	C49	VII	1.0	1.0	0.1	0.2	
	49	3803	植刃器	黒曜石三船	C46	VII	1.0	1.4	0.2	0.3	
20	51	3787	細石刃核	黒曜石腰岳	C48	VII	1.1	2.3	1.2	3.5	
	52	12784	細石刃核	黒曜石三船	B33	VII	1.2	1.3	1.9	5.2	
	53	12275	細石刃核	黒曜石三船	B33	VII	1.1	1.4	1.0	5.1	
	54	12693	細石刃核	黒曜石三船	D33	VII	1.4	0.8	1.5	1.7	

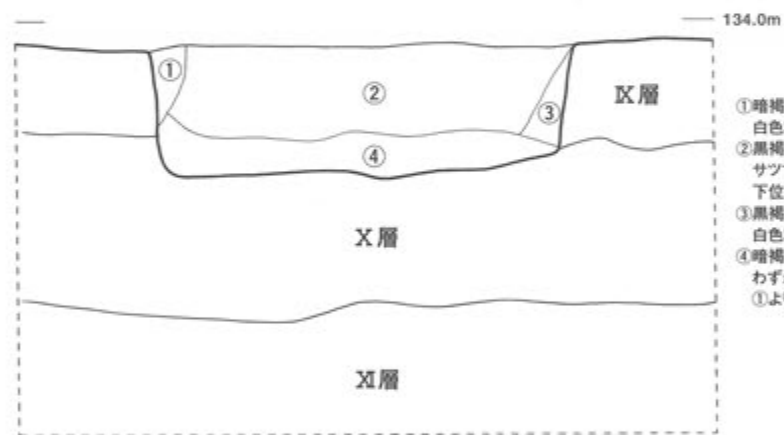
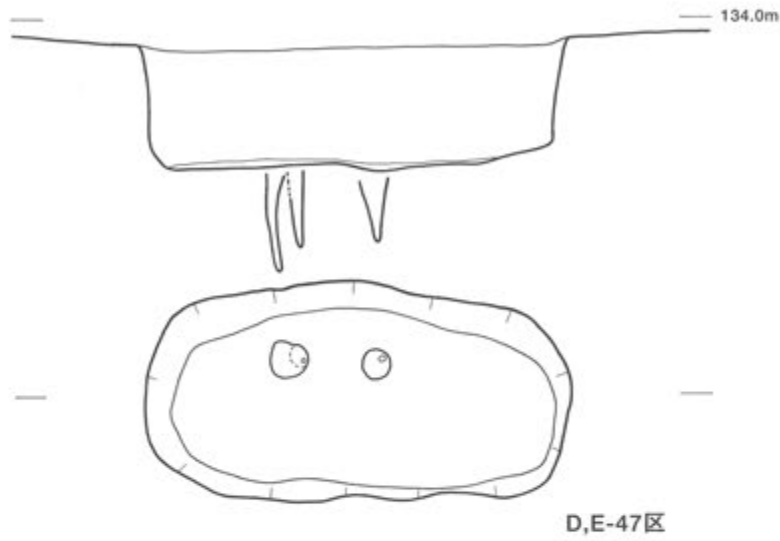


第7表 鷺ヶ迫遺跡旧石器遺物観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
20	55	12846	細石刃核	黒曜石三船	C29	VIII	4.0	2.6	1.6	13.8	
	56	12855	細石刃核	黒曜石三船	C29	VIII	1.0	1.5	1.0	0.9	
	57	12837	細石刃核	黒曜石三船	D35	VIII	1.9	2.2	1.2	5.2	
	58	12647	細石刃核	黒曜石三船	C33	VIII	1.6	1.9	1.1	3.7	
	59	5861	細石刃核	黒曜石三船	D37	VIII	1.5	0.9	1.0	1.7	
	60	12037	細石刃核	黒曜石日東	C29	VIII	1.2	1.1	1.1	1.6	
	61	12235	ブランク	黒曜石桑ノ木津留	C32	VIII	2.7	1.8	1.0	4.8	
	62	12617	ブランク	黒曜石三船	C33	VIII	1.5	1.8	2.1	5.3	
	63	12038	剥片	黒曜石三船	D33	VIII	2.8	2.9	1.6	10.5	
21	64	12034	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	D33	VIII	1.9	1.7	0.7	2.1	
	65	12241	折断剥片	黒曜石三船	C33	VIII	2.6	2.6	1.0	7.7	
	66	12772	折断剥片	黒曜石三船	C32	VIII	2.0	1.4	0.6	1.6	
	67	12679	折断剥片	黒曜石三船	C33	VIII	2.2	1.2	0.5	1.2	
	68	12786	使用痕剥片	黒曜石桑ノ木津留	C33	VIII	1.4	1.1	0.4	0.4	
	69	5631	使用痕剥片	黒曜石桑ノ木津留	D35	VIII	2.2	1.6	0.3	2.0	
	70	12803	使用痕剥片	黒曜石三船	D32	VIII	2.6	2.3	0.9	5.1	



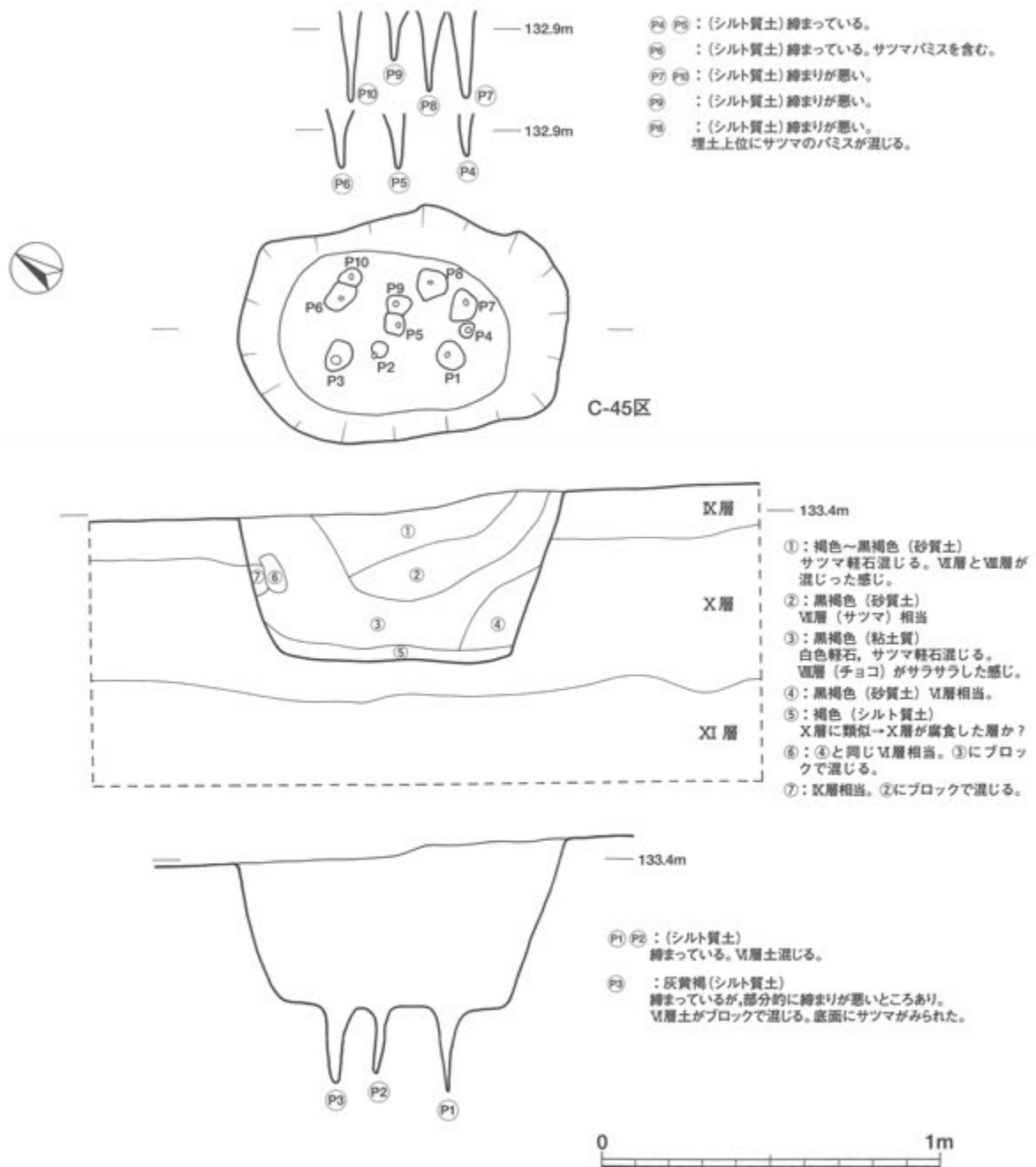
第22図 縄文時代遺構



- ① 暗褐色(シルト質土)  
白色粒若干含む V層に類似。
- ② 黒褐色(シルト質土、VI層類似)  
サツマバミス含む。  
下位になればなるほどバミスが多くなる。
- ③ 黒褐色(シルト質土)  
白色粒を若干含む。
- ④ 暗褐色(シルト質土)  
わずかにサツマバミス含む。  
①より黒味が強い。



第23図 落とし穴1号



第24図 落とし穴2号

### 第3節 縄文時代の調査

#### 遺構

縄文時代の遺構は、落とし穴2基と集石が検出された。

#### 落とし穴1 (第24図)

C45区IX層上面で検出したものである。粘質土であるVIII層を掘り下げて、IX層上面で110×60cmの隅丸方形の遺構を検出した。南側半分を半裁したところ底面にピットが確認された。これにより落とし穴の可能性が高いと判断し、西側からスライス調査を行った。その結果、底面は100×45cmを測り逆茂木痕を検出できた。この落とし穴の深さは検出面から約30cmを測り、逆茂木痕は3箇所確認できた。逆茂木痕の深さは底面から20～30cmを測る。

埋土中に遺物はみられなかったが、埋土にVI・VII層を確認することができた。このことからこの落とし穴の時期は縄文時代早期のものであると判断した。

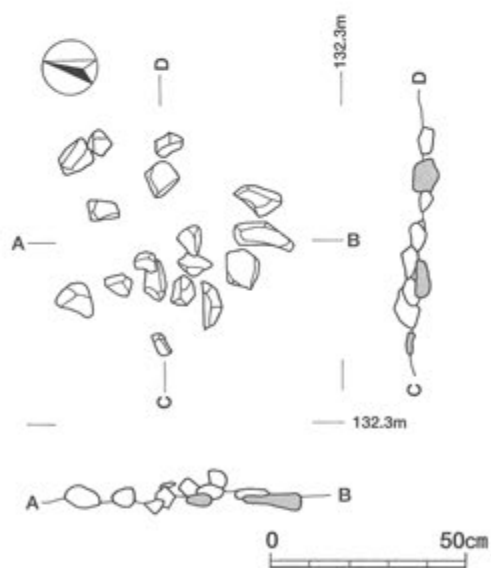
#### 落とし穴2 (第23図)

C45区IX層上面で検出したものである。粘質土であるVIII層を掘り下げて、IX層上面で100×70cmの隅丸方形の遺構を検出した。西側半分を半裁したところ底面にピットが確認された。これにより落とし穴の可能性が高いと判断し、西側からスライス調査を行った。その結果、底面は70×50cmを測り逆茂木痕を検出できた。この落とし穴の深さは検出面から約50cmを測り、逆茂木痕は10箇所確認できた。逆茂木痕の深さは底面から15～20cmを測る。

埋土中に遺物はみられなかったが、埋土にVI・VII層を確認することができた。このことからこの落とし穴の時期は縄文時代早期のものであると判断した。

#### 集石 (25図)

集石はC-20区に検出され、60×50cmの範囲に17個の大小の安山岩製の角礫が集中して検出された。集石としての集中度は少なく、掘り込み、炭化物、焼石などは確認できなかった。



第25図 集石

## 土器

土器は、B～D-1～8区、D・E-18区、C・D-49～51区、IV層で出土した。縄文時代中期を主体にしたものである。

71は、曾畑式土器である。外面全体に沈線による幾何学文様を施すもので、同一の棒状工具による刺突文で、口縁端部に刻目を施す。器形は口縁部が外反し、底部は丸底である。底部まで沈線が施され、内面口縁部付近にも沈線の幾何学文様が施されている。復元口径は32.6cmを測る。

72～81はI類土器である。

72・73は外反する口縁部である。貝殻条痕を施文し、口縁部下位に波状の貼付突帯を付したものである。口唇部下位の突帯は刻目を施している。これらの特徴から野久尾式土器に該当するものである。74～79は、波状の突帯を付した胴部である。

82～117はII類土器である。文様構成が突帯のみで表すものをII類土器にした。

82は口径32.4cmを測る口縁部で、大きく内弯するキャリパー形をした器形である。内外面とも貝殻条痕による調整を行っている。

83・84は大きく内弯するキャリパー状の口縁部で、口唇部下位に波状の突帯文を6条廻らしている。84はやや内弯するキャリパー状の口縁部である。

85～88は大きい幅の波状を呈す突帯文で、刻目を施す。大きく内弯する口縁部である。

89～92は内弯する口縁部をもち「U」字状の貼付突帯文をもつものである。

93は口縁部が山形を呈するもので、口唇部に刻目を施す。

94は外反する口縁部をもつもので、刻目のある貼付突帯文である。

97～99は口唇部に刻目を施し、直線的な貼付突帯を横位に廻らした、大きく内弯する口縁部である。101～103は直口気味の口縁部をもつものである。

106はやや内弯する口縁部である。

107～111は、口唇部に刻目を施したもので、口縁部下位に波状の貼付突帯を施している。

112～114も大きく内弯する口縁部で刻目突帯を付している。

115は外弯する口縁部で口唇部外面に刻目突帯を施す。

116は、口径20.4cmを測り内弯する口縁部をもつもので、口唇部外面に波状の刻目突帯を施す。

117は外反する口縁部で、口唇部に縦位の刻目突帯が施してある。

118～141はIII類土器である。3類土器は突帯と沈線を施すものである。

118・119はやや内弯する口縁部に縦位の貼付突帯が施されているものである。120～124は横位の刻目突帯に縦位の沈線を施したものである。120・121は内弯する口縁部である。

125・126は、口縁部下位に横位に廻る刻目突帯を沈線で施したものである。口径は、36.0cm、27.6cmを測る内弯する口縁部である。

129は、26.0cmを測る口縁部で、波状の突帯と縦位の沈線が施されたものである。132～138も同様なものである。

139は、口径27.0cmを測る。器形は胴部の張りが強く、口縁部の内弯はやや弱い。頸部のくびれはやや下位にあるものである。縦・横位に曲線状の沈線を施し、横位に3条の刻目突帯を施す。

142は、口径23.2cmを測る。口縁部に4か所の突起を有し、突起部に口縁内部から外面にかけて突帯を貼り付け、突起には貝殻の肋による押圧がみられる。器形は胴部の張りが弱く、口縁部の内弯も弱い。頸部下位にも沈線が施されている。

144は、口径21.0cmを測る。頸部が緩やかでやや内弯する口縁部である。鋸歯状の刻目突帯を施している。

145～221はⅣ類土器である。Ⅳ類土器は沈線のみで文様を構成するものである。

145は、山形を呈する口縁で、大きく内弯する口縁部である。

146も口縁部が山形を呈するものである。

147～149は、縦横の沈線で文様を構成するもので、内弯する口縁部をもつものである。

150は、口径23.4cmを測るやや内弯する口縁部で、縦・横・波状の沈線を、また、口唇部には刻目が施されている。

151～165も内弯する口縁部で沈線で文様構成しているものである。

166～172は、大きく内弯する口縁部をもつもので、曲線的な沈線を施している。

173～185は、波状を呈する沈線を施すものである。

185～204は、直線的な沈線で文様を構成しているものである。

205～221は、沈線と連点で文様を構成するものである。

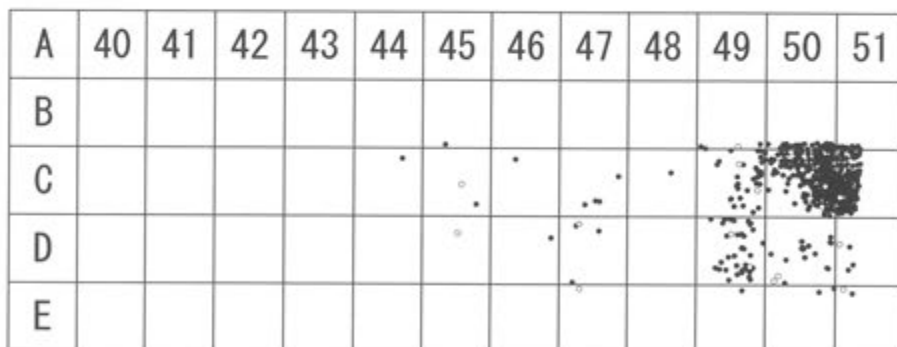
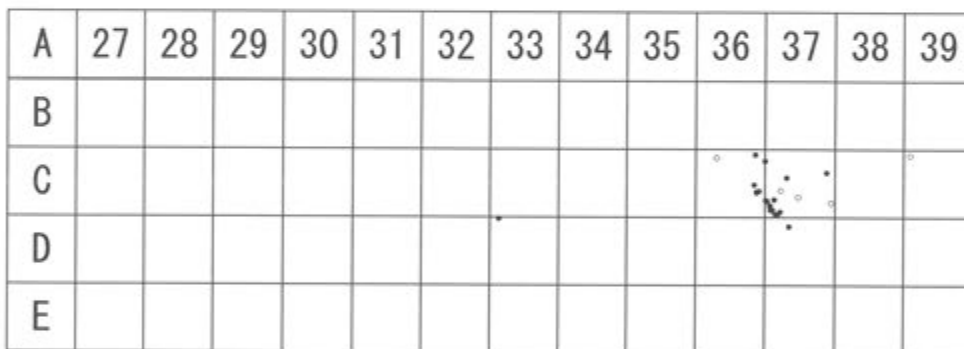
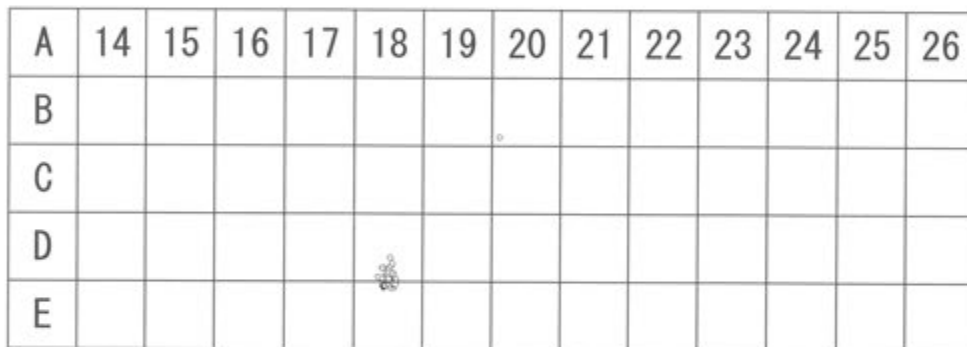
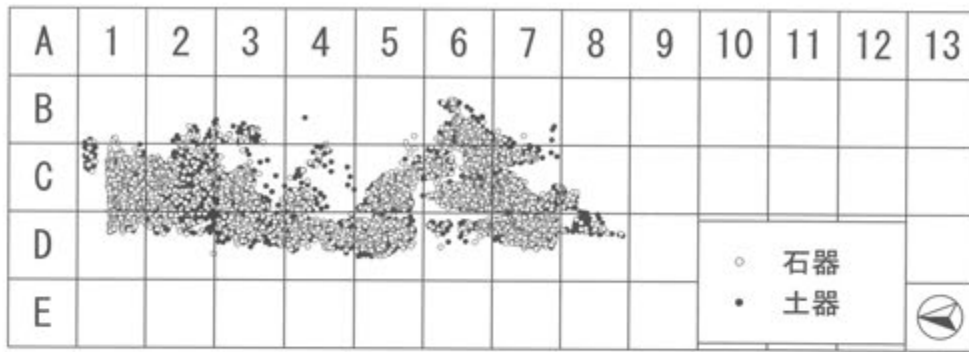
222～240は底部である。中くぼみのある平底（222～234）、平底（235～239）、やや膨らむ平底（240）に分けられる。

241～256は、遺構等の攪乱層から出土した遺物である。

251は、口径20.4cmを測る。外反する口縁部で頸部は「く」の字状を呈する。

255は、環状の土製品で刺突による文様である。用途不明のものである。

256は、142に類似した突起状のものである。

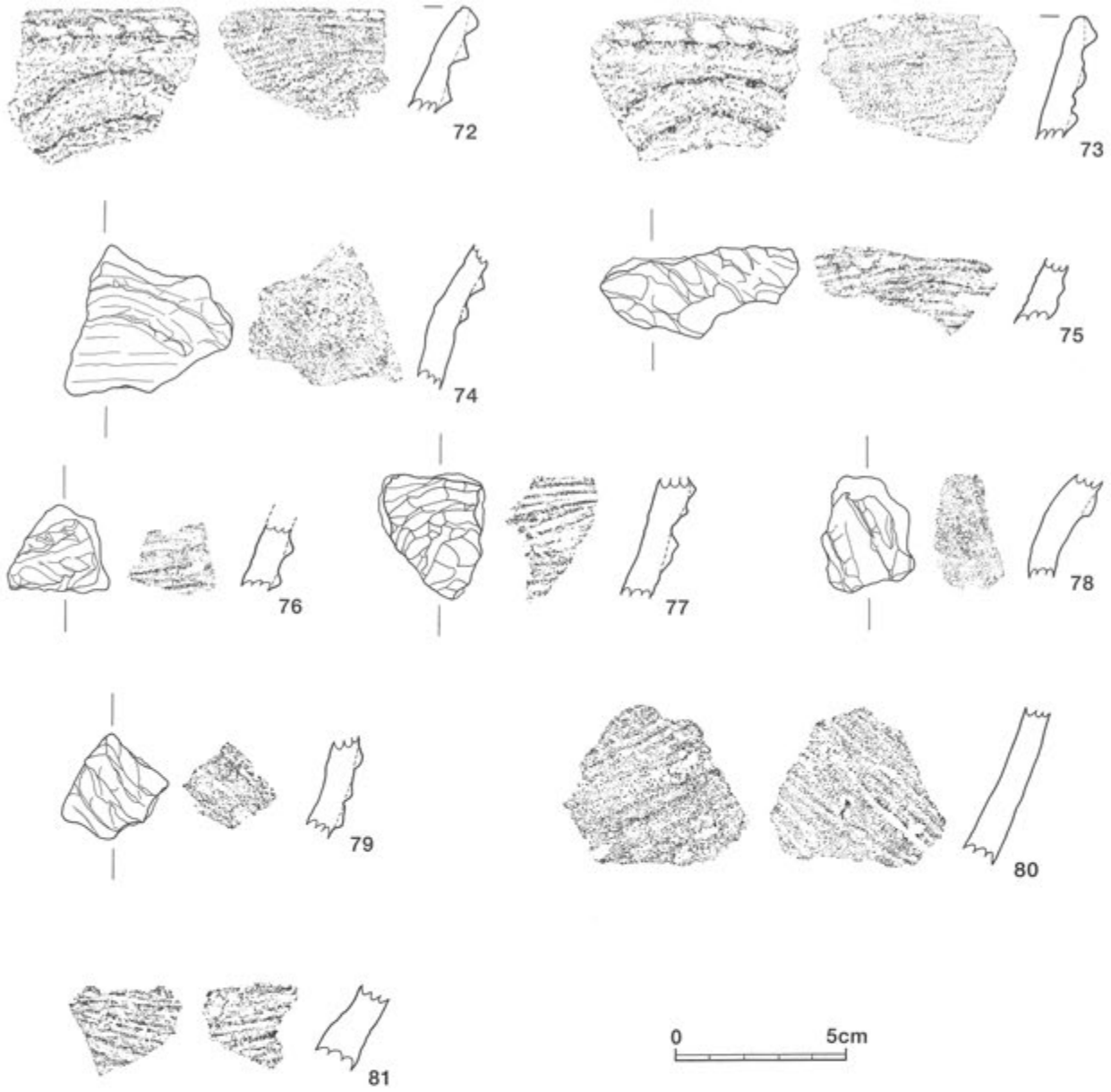


第26図 土器出土状況

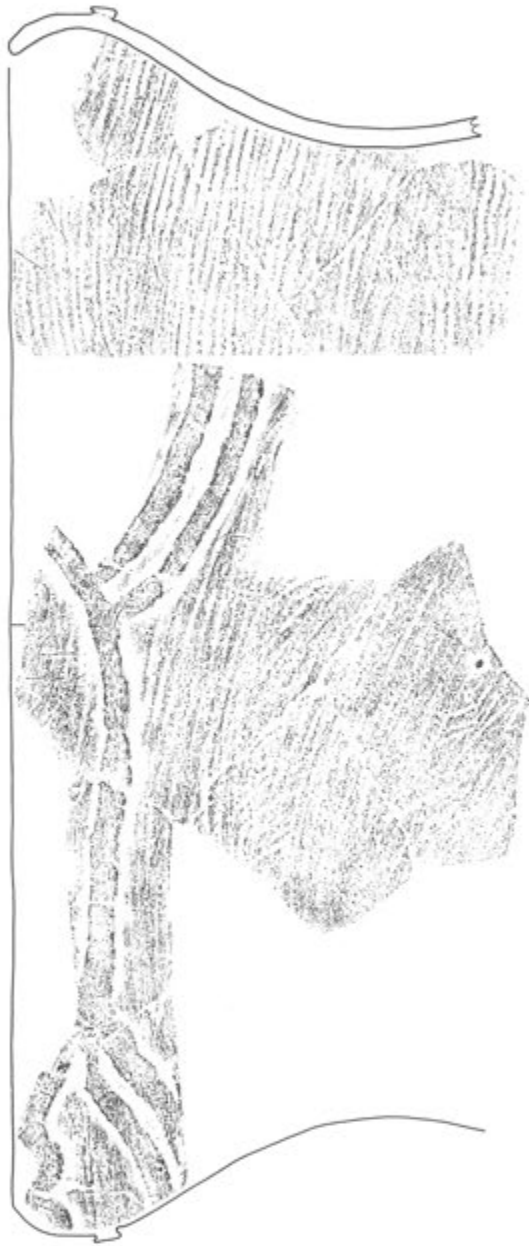




第27图 曾畑式



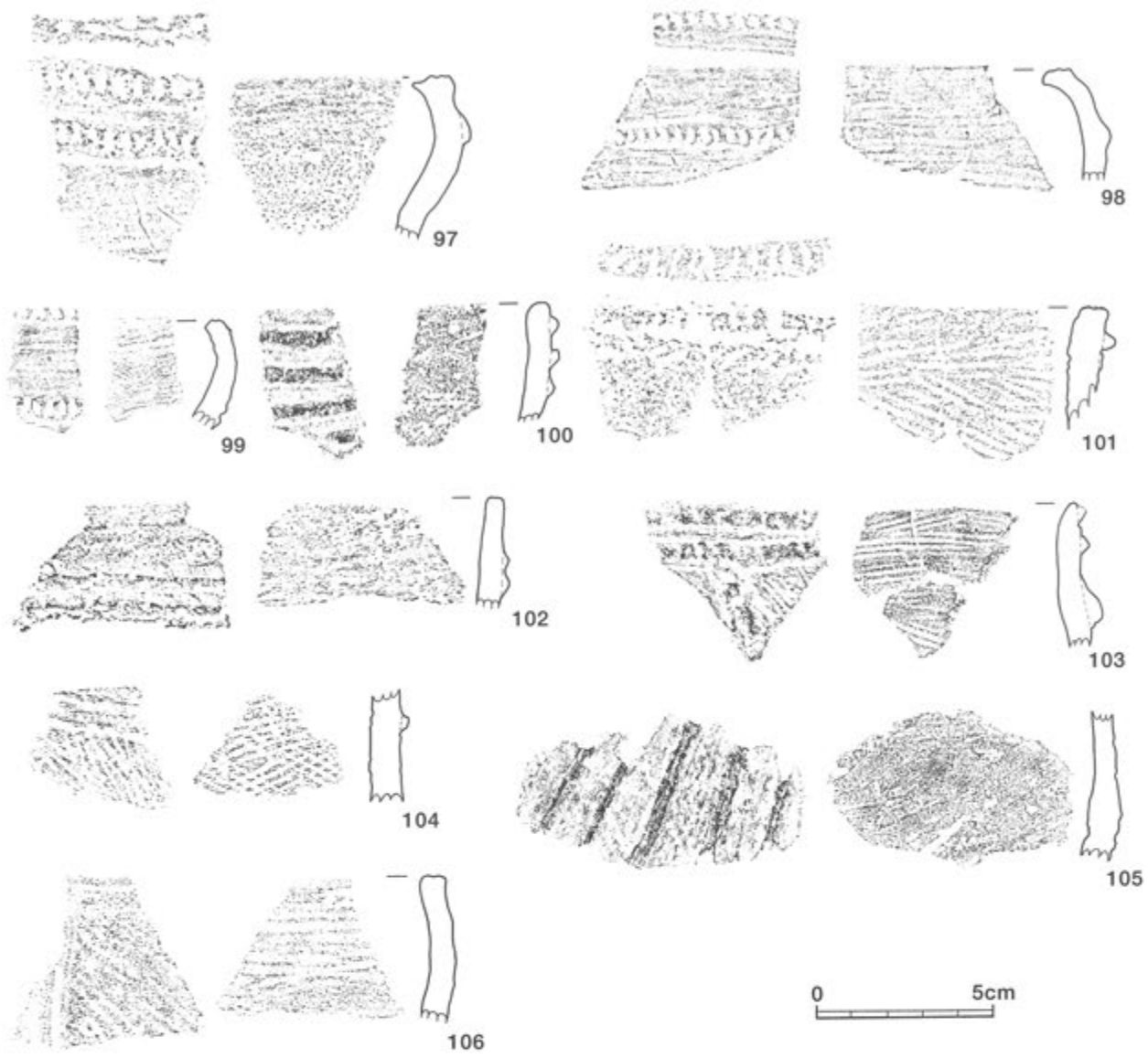
第28図 I類土器



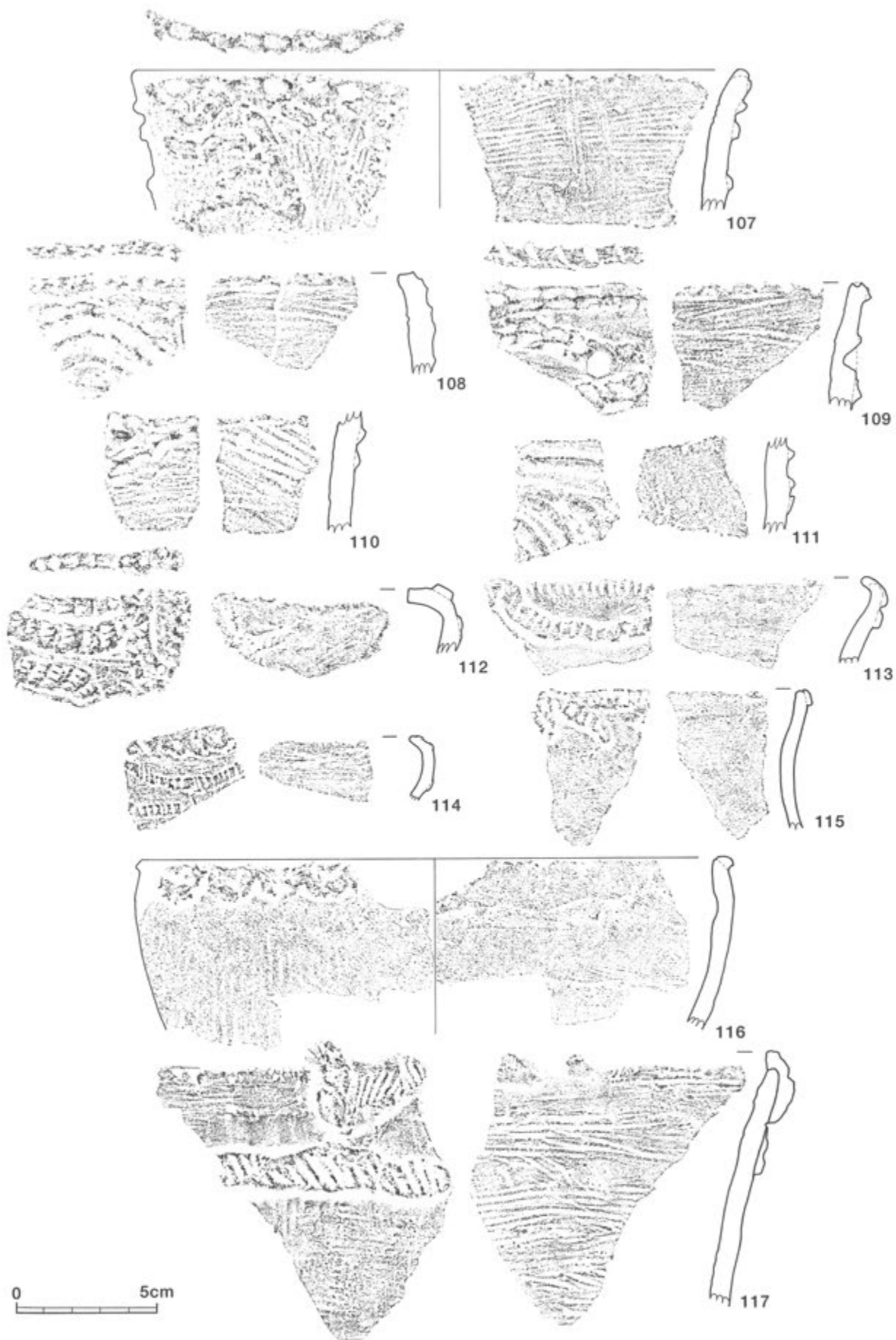
第29図 II類土器 1



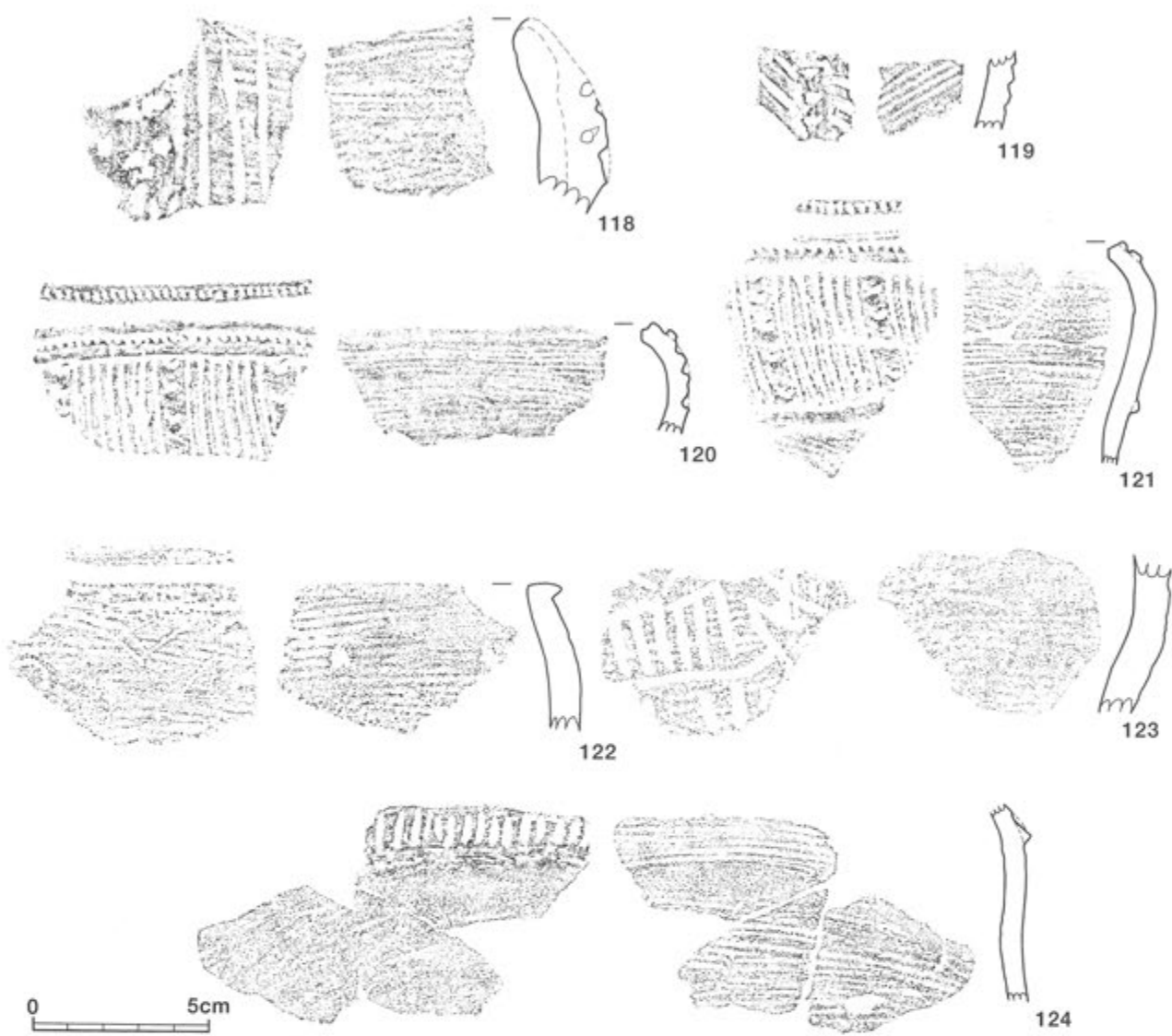
第30图 II類土器2



第31図 II類土器3

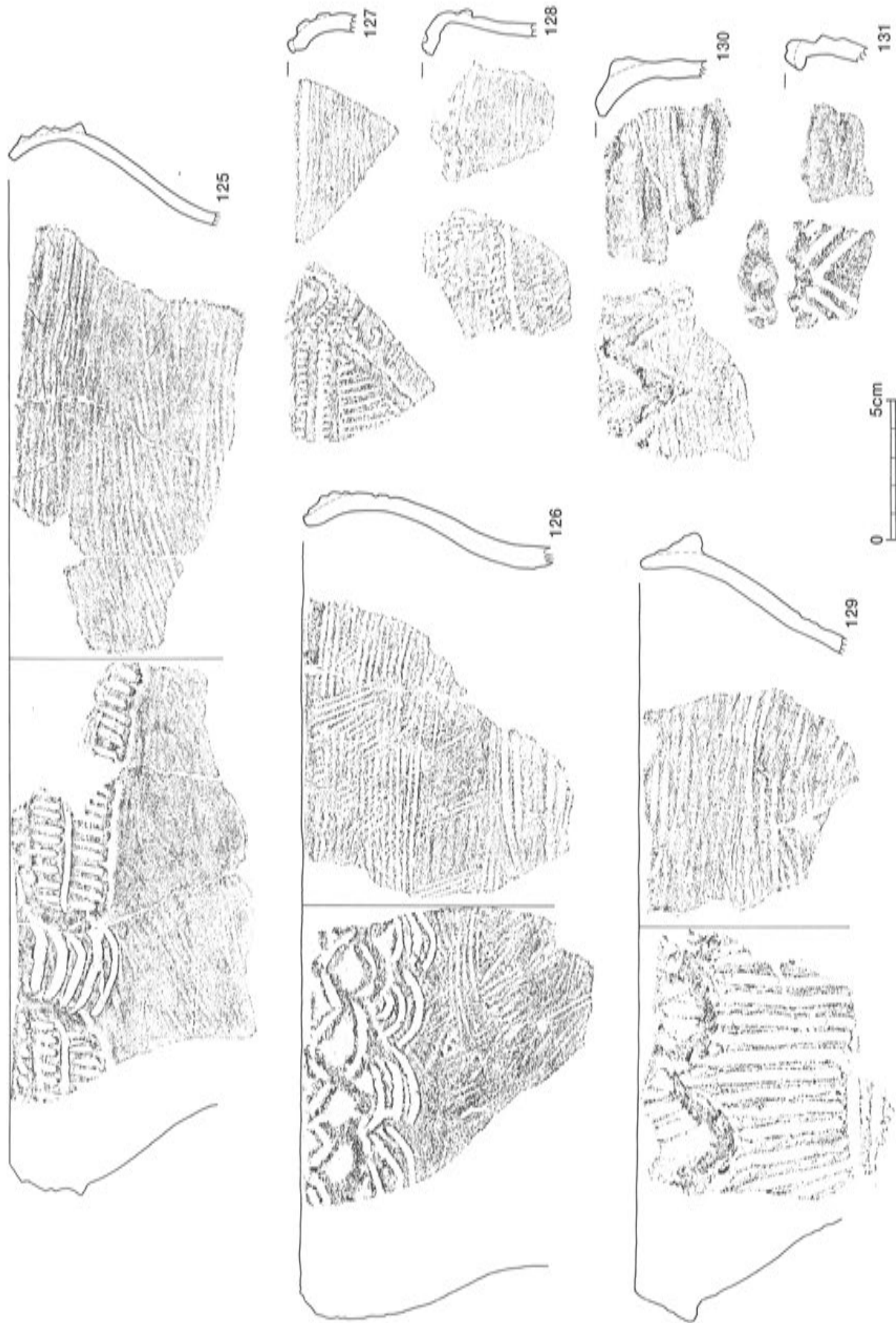


第32図 II類土器 4



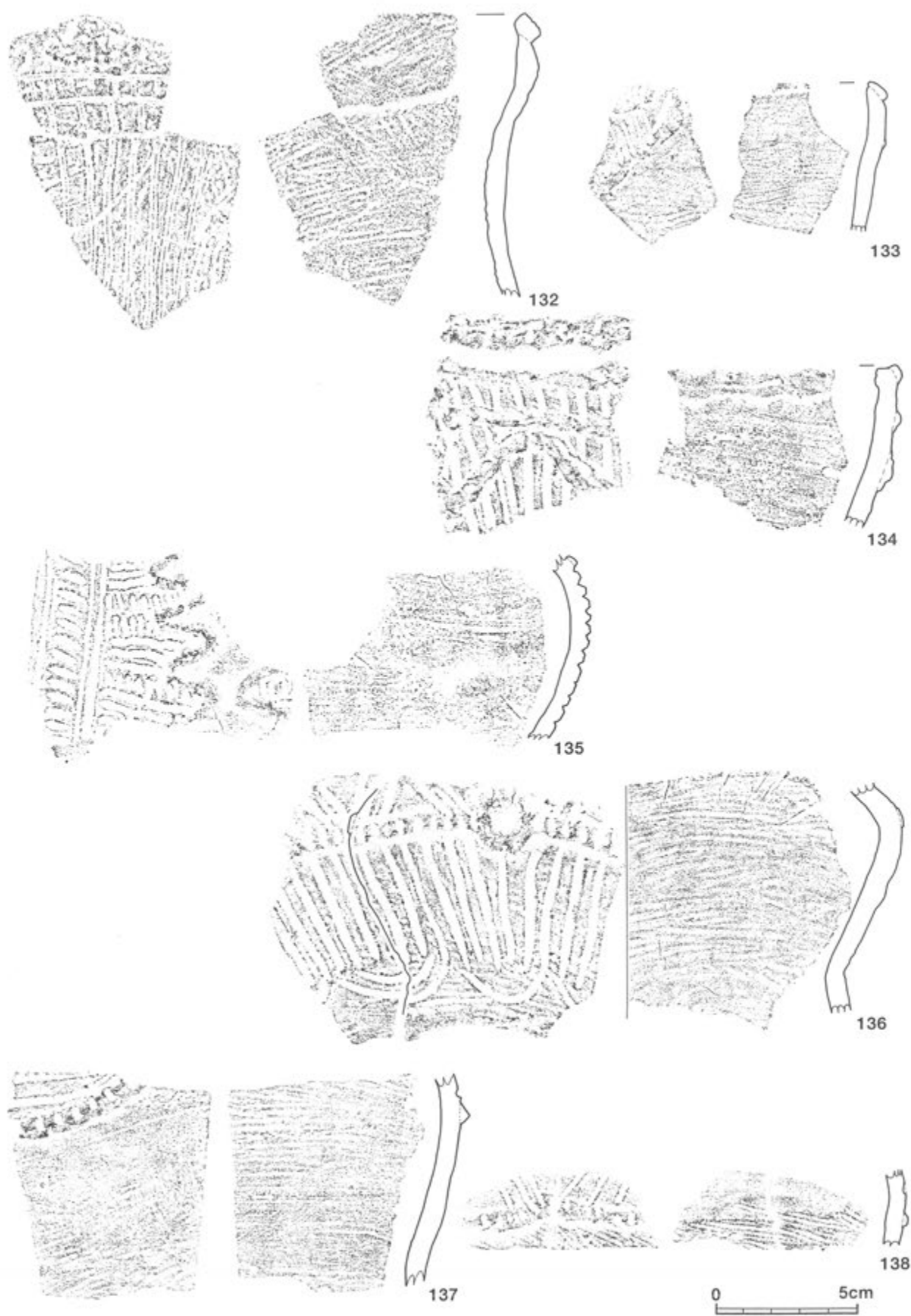
第33图 Ⅲ類土器 1



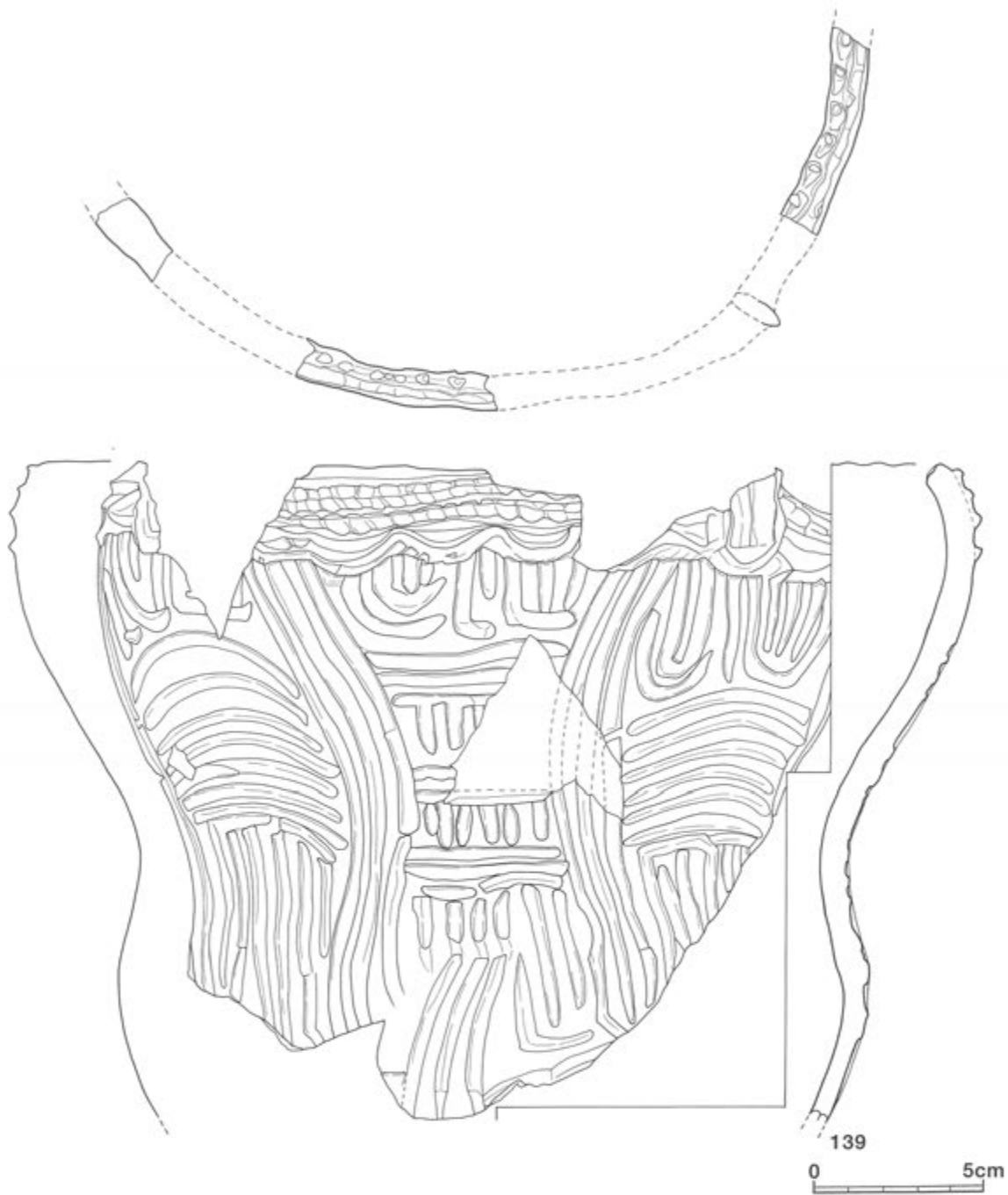


第34図 III類土器 2

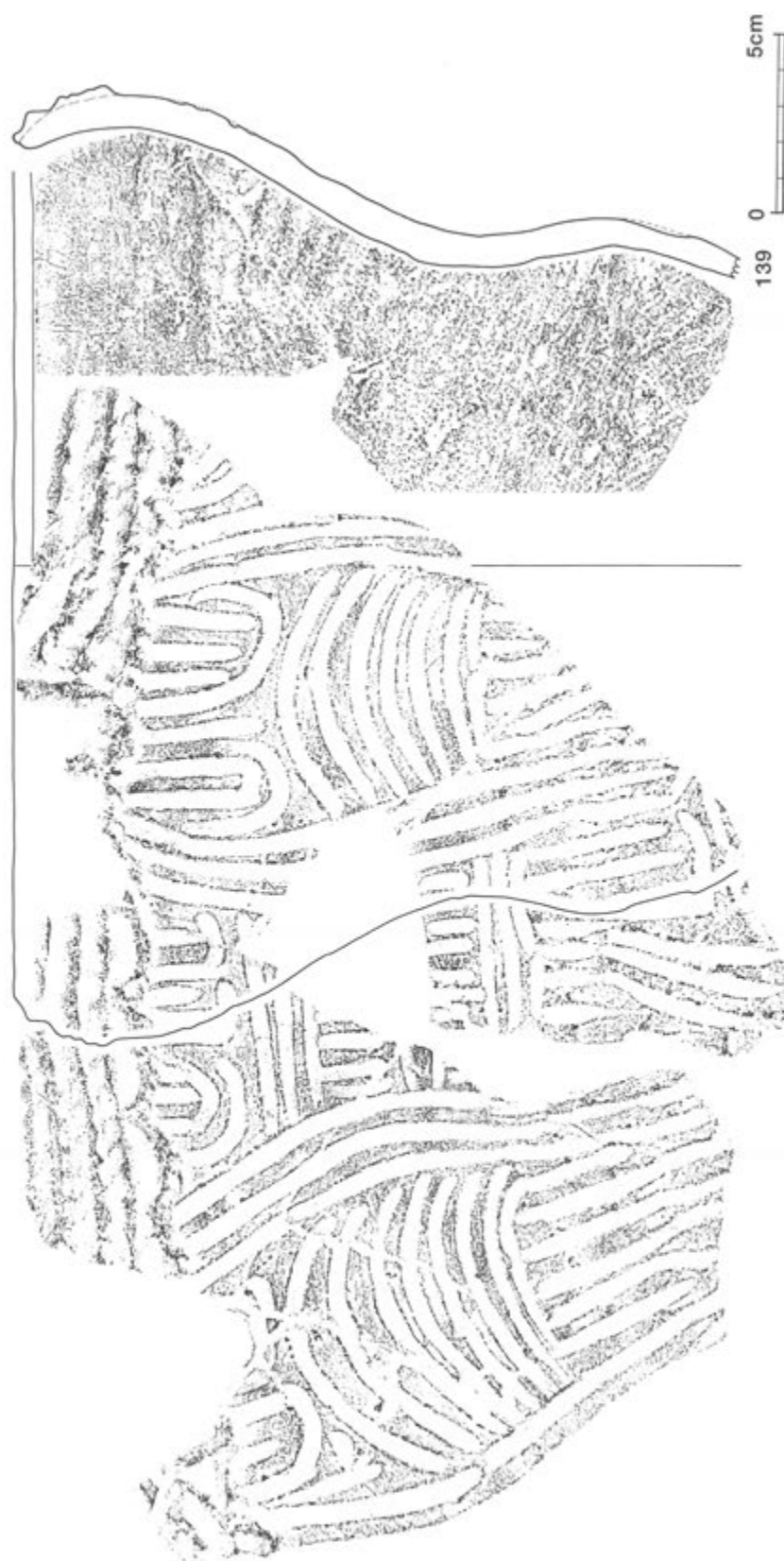




第35図 Ⅲ類土器 3



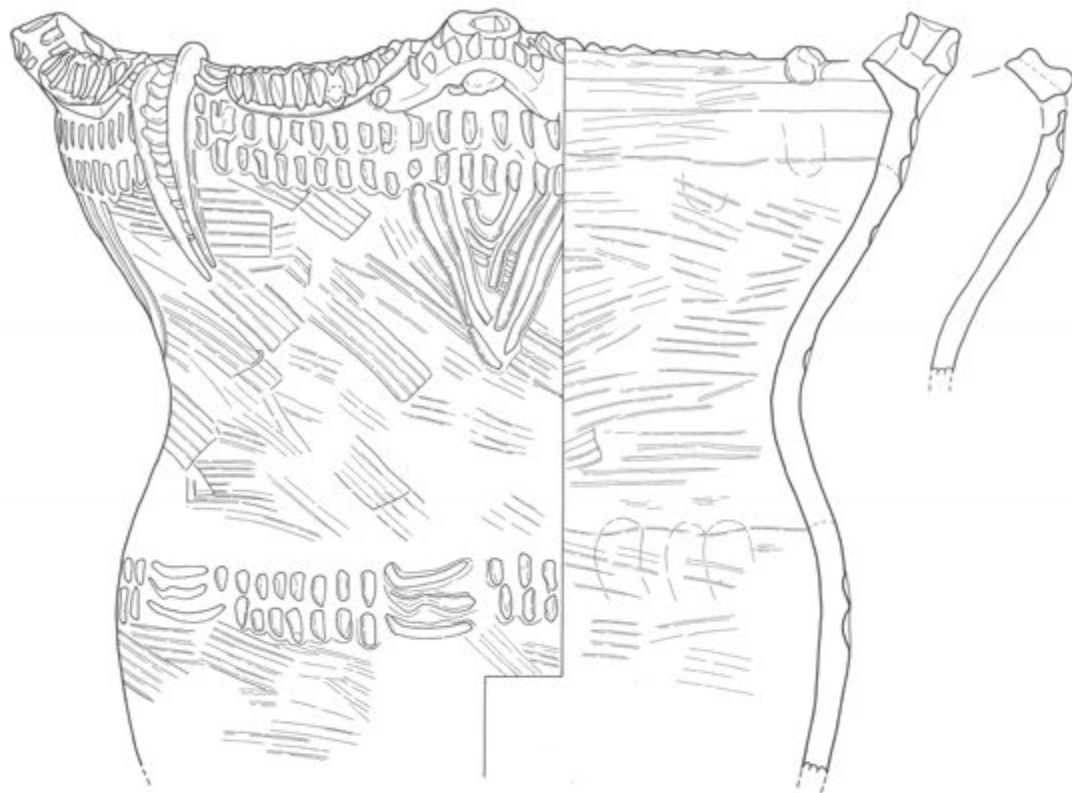
第36図 Ⅲ類土器 4-1



第37图 Ⅲ類土器 4-2



第38図 Ⅲ類土器 5



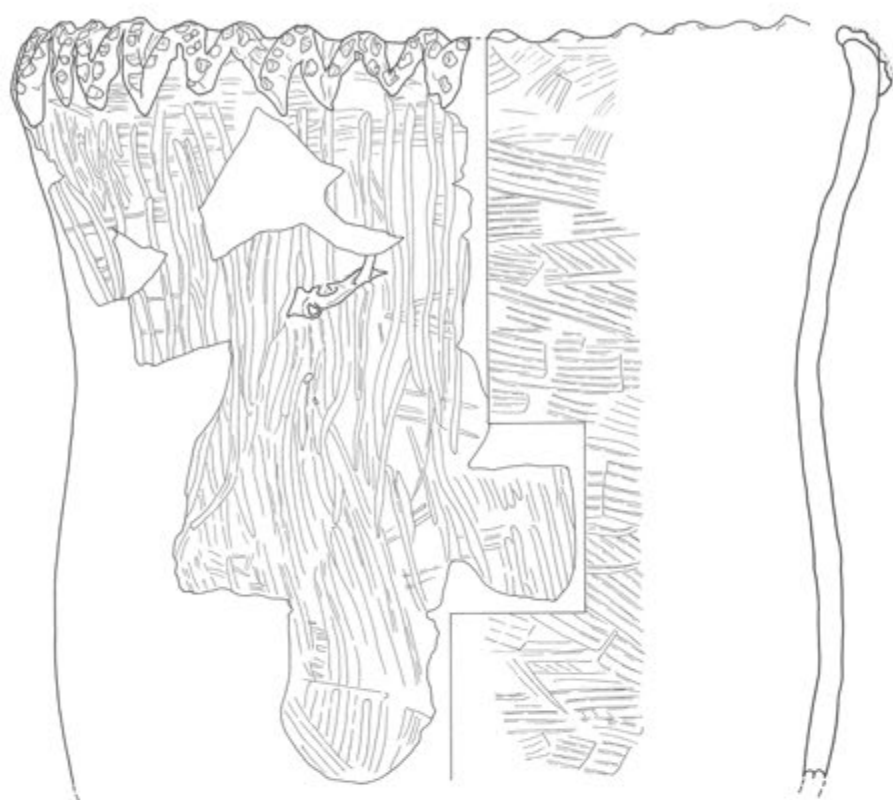
142



143

0 5cm

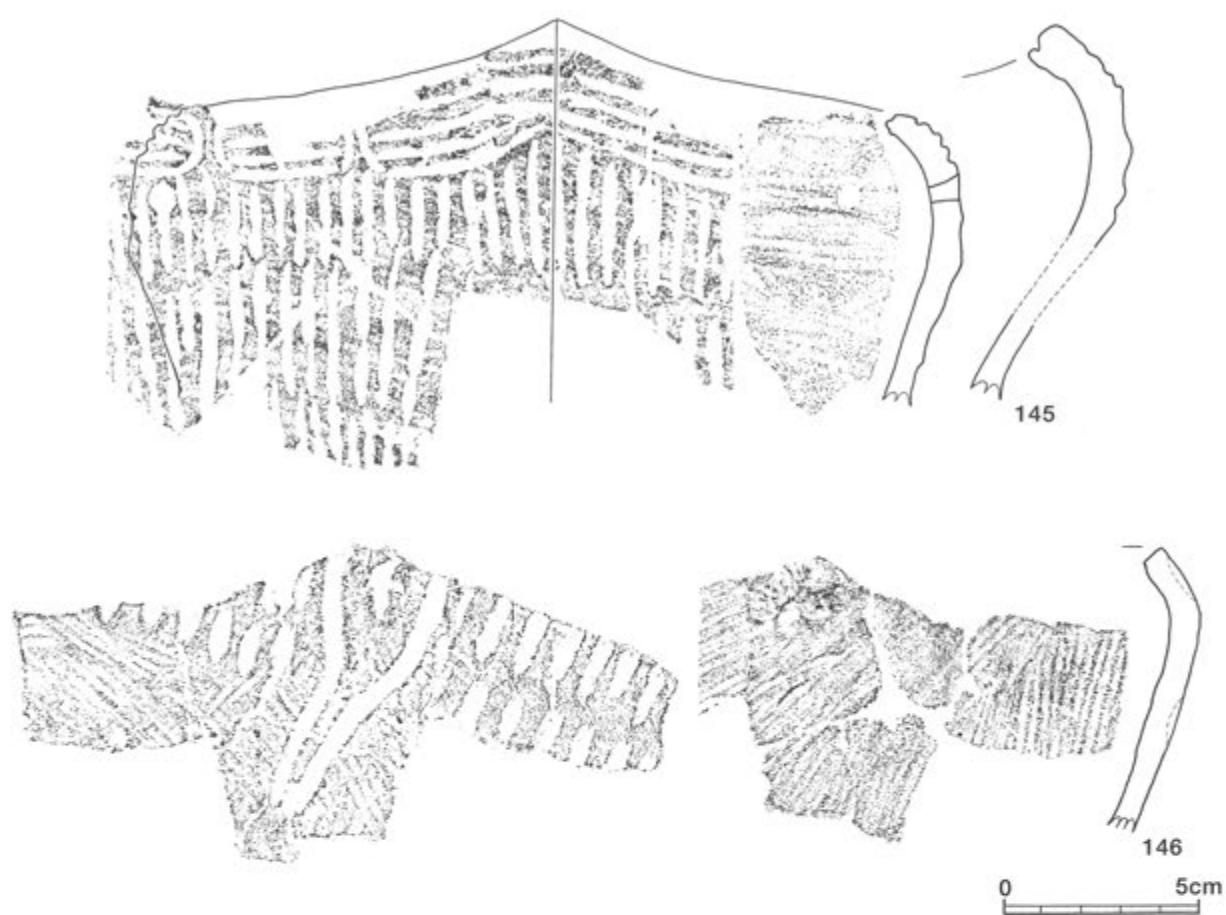
第39図 Ⅲ類土器 6



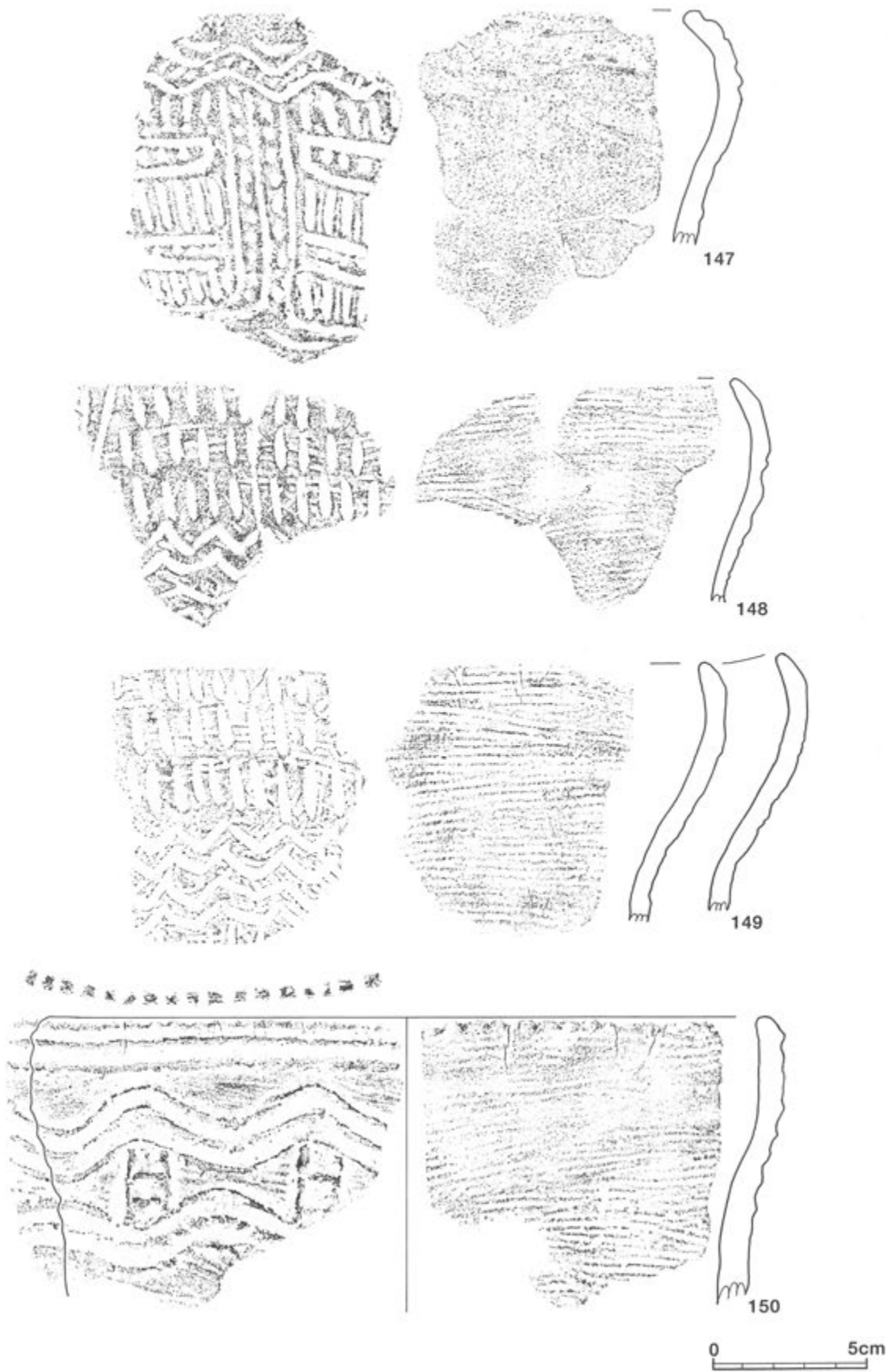
144



第40図 III類土器 7

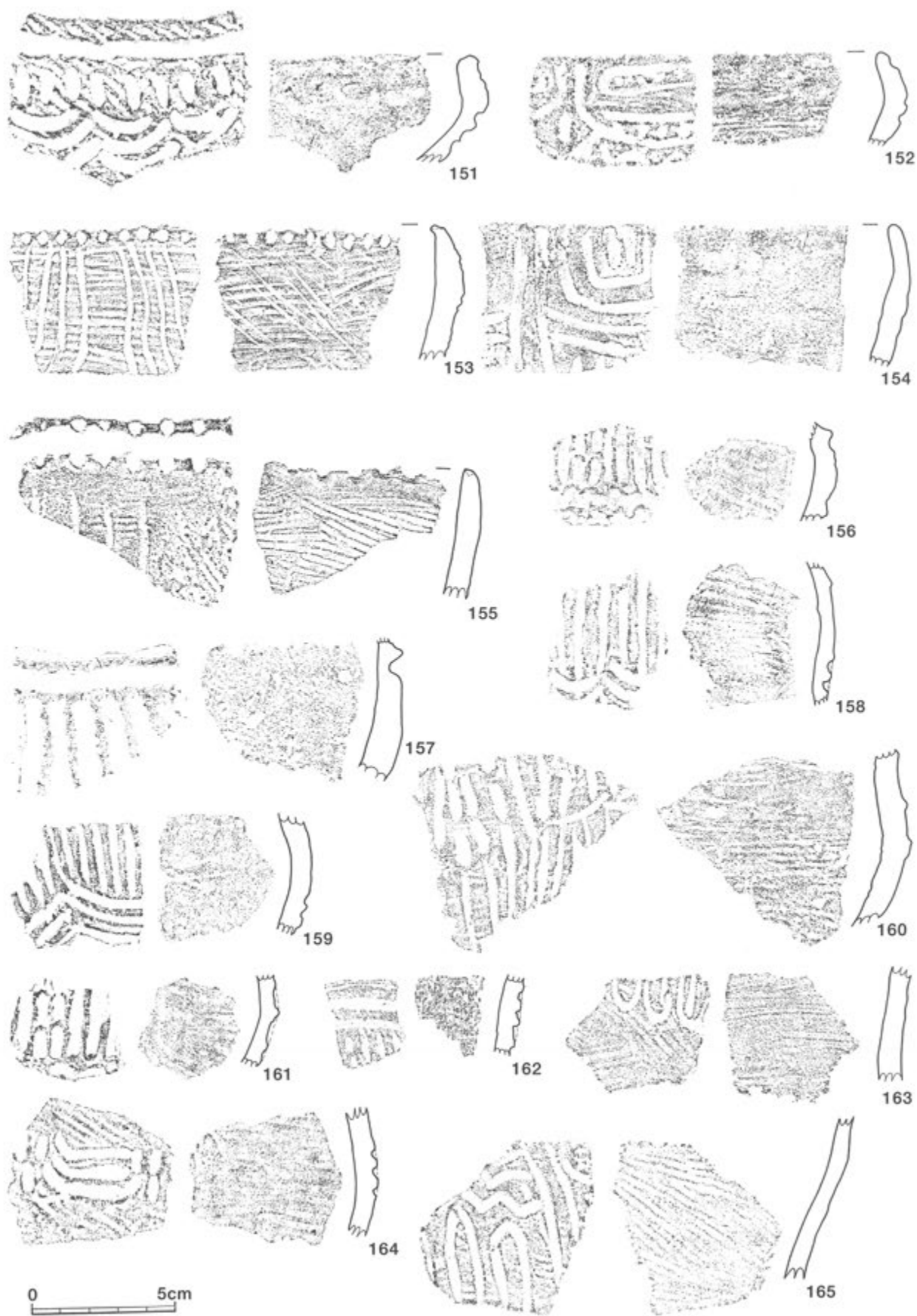


第41図 IV類土器 1

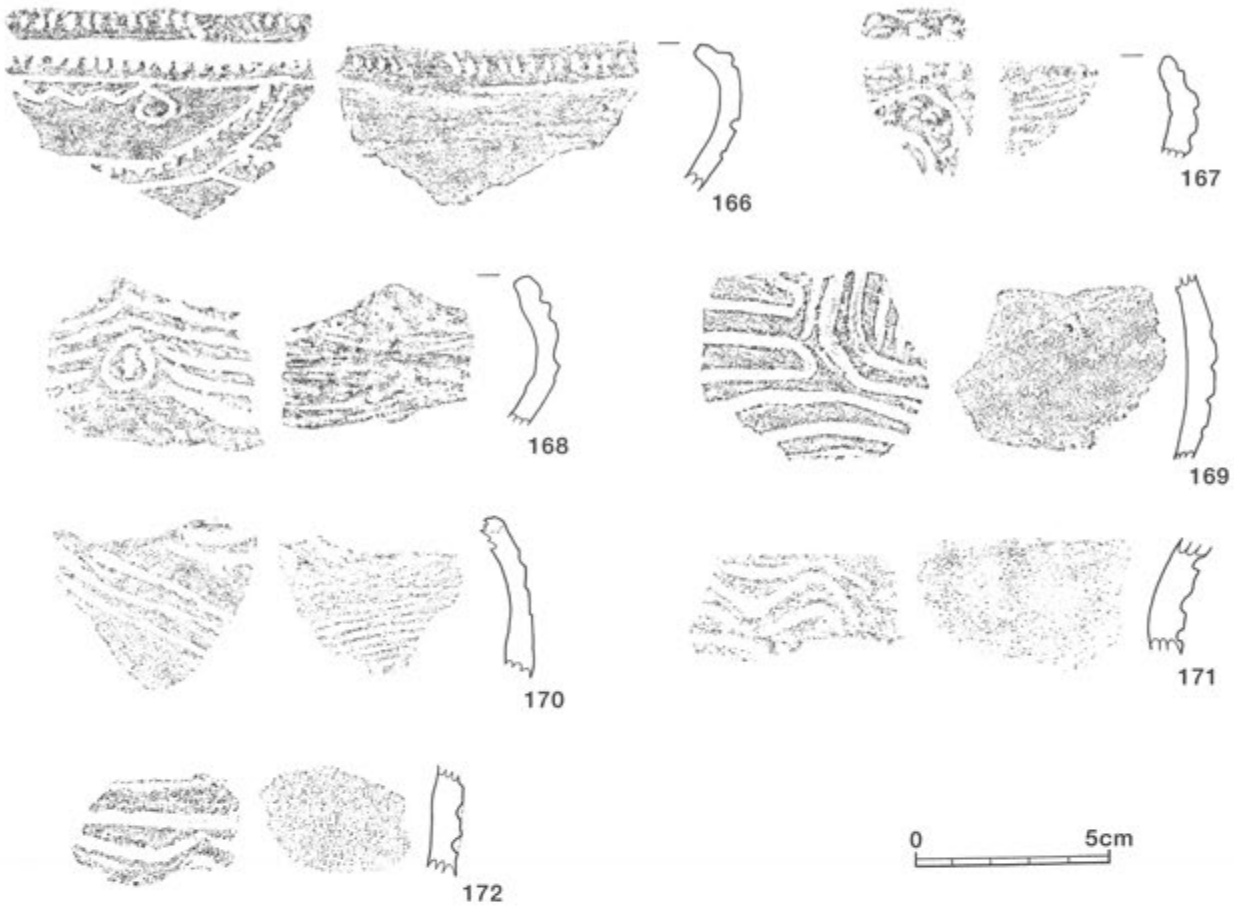


第42図 IV類土器 2

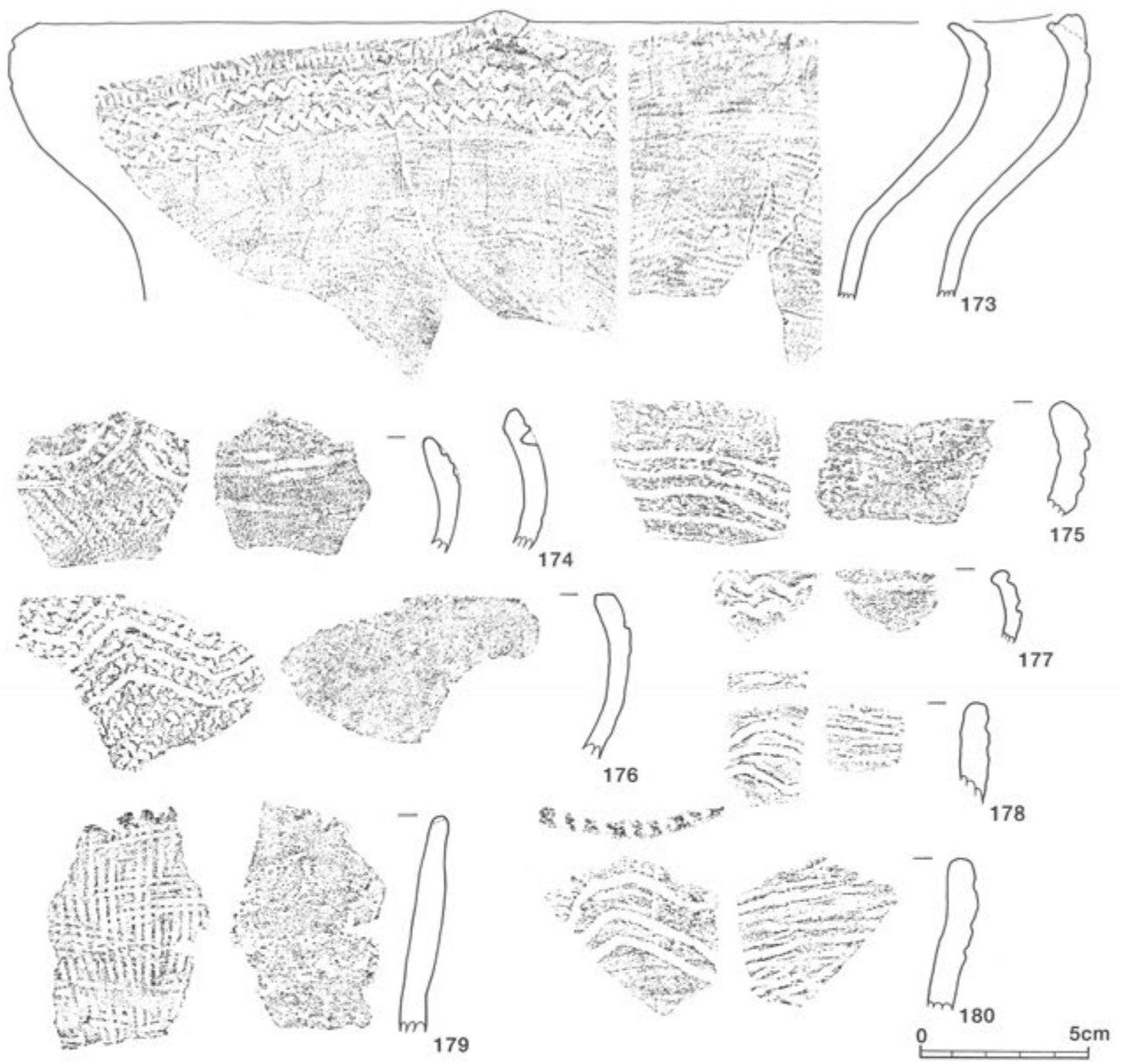




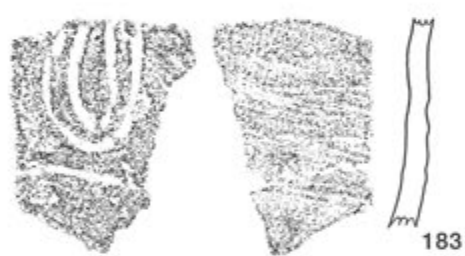
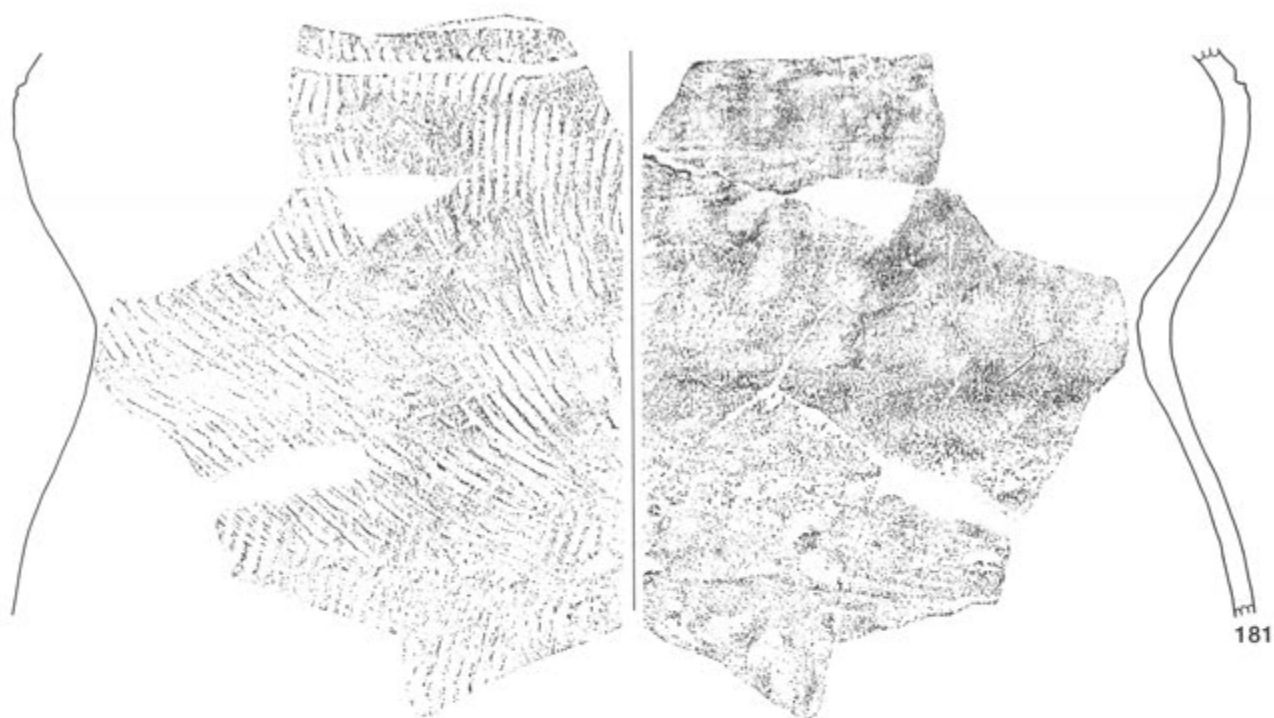
第43図 IV類土器 3



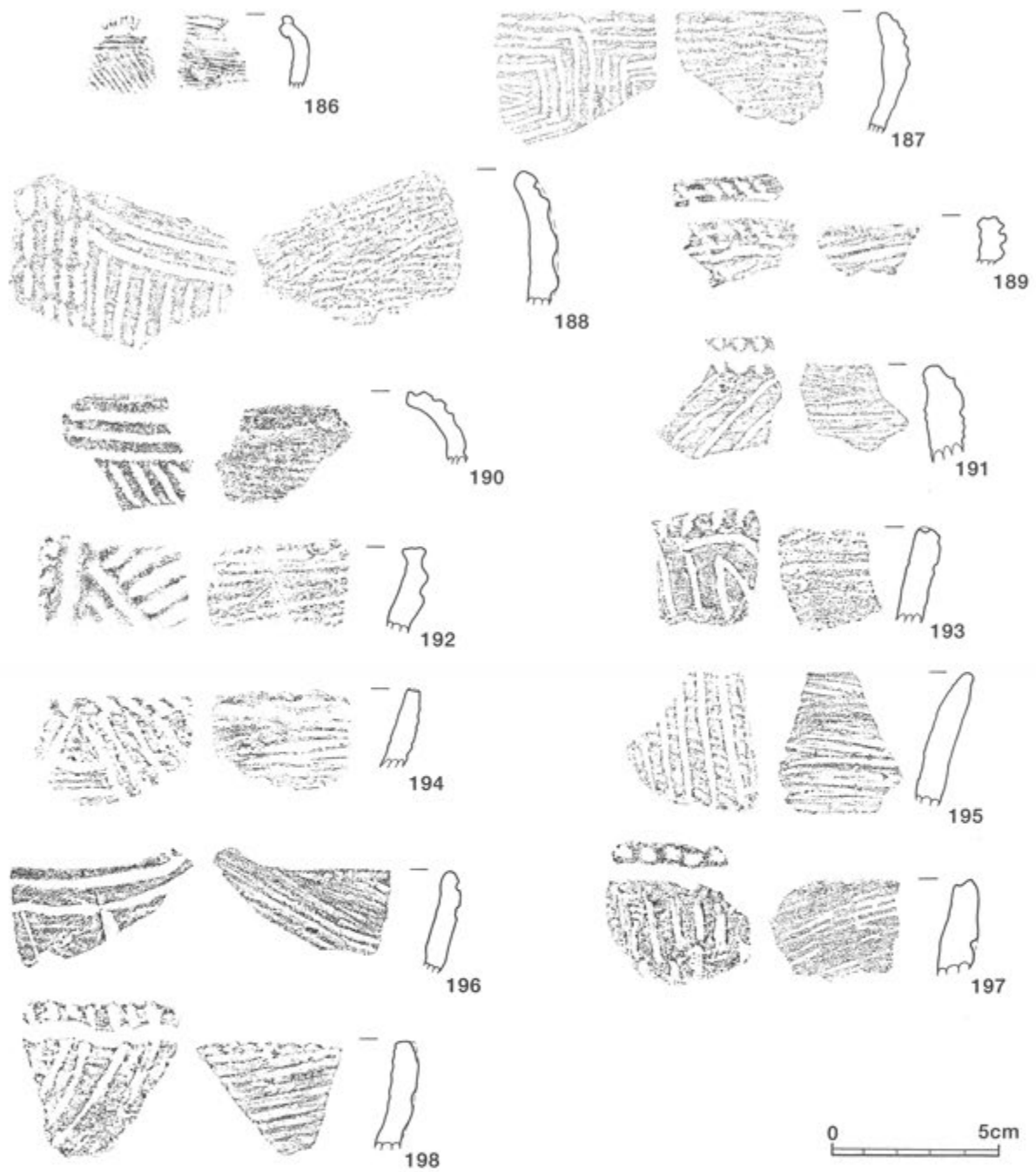
第44图 IV類土器 4



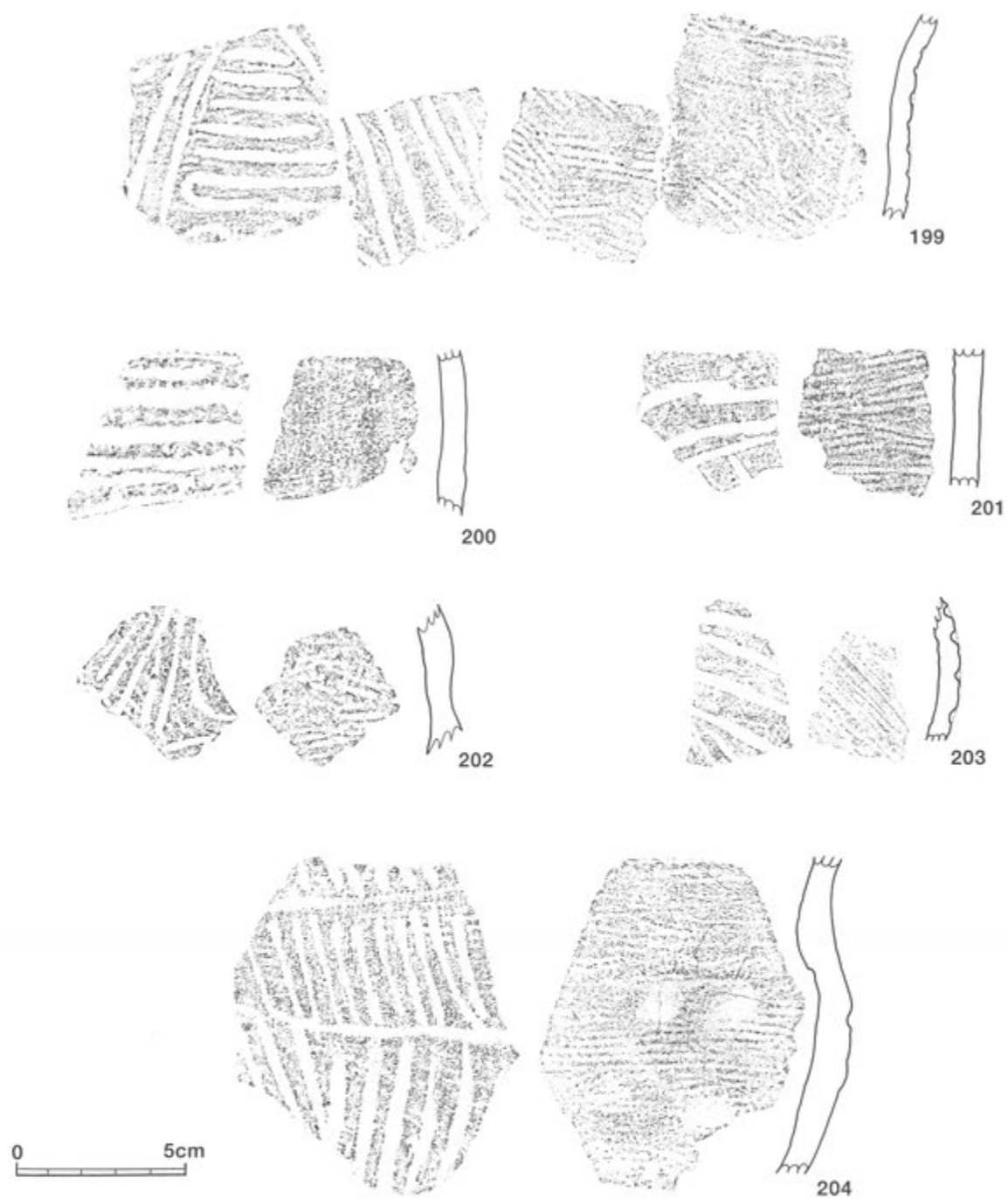
第45図 IV類土器 5



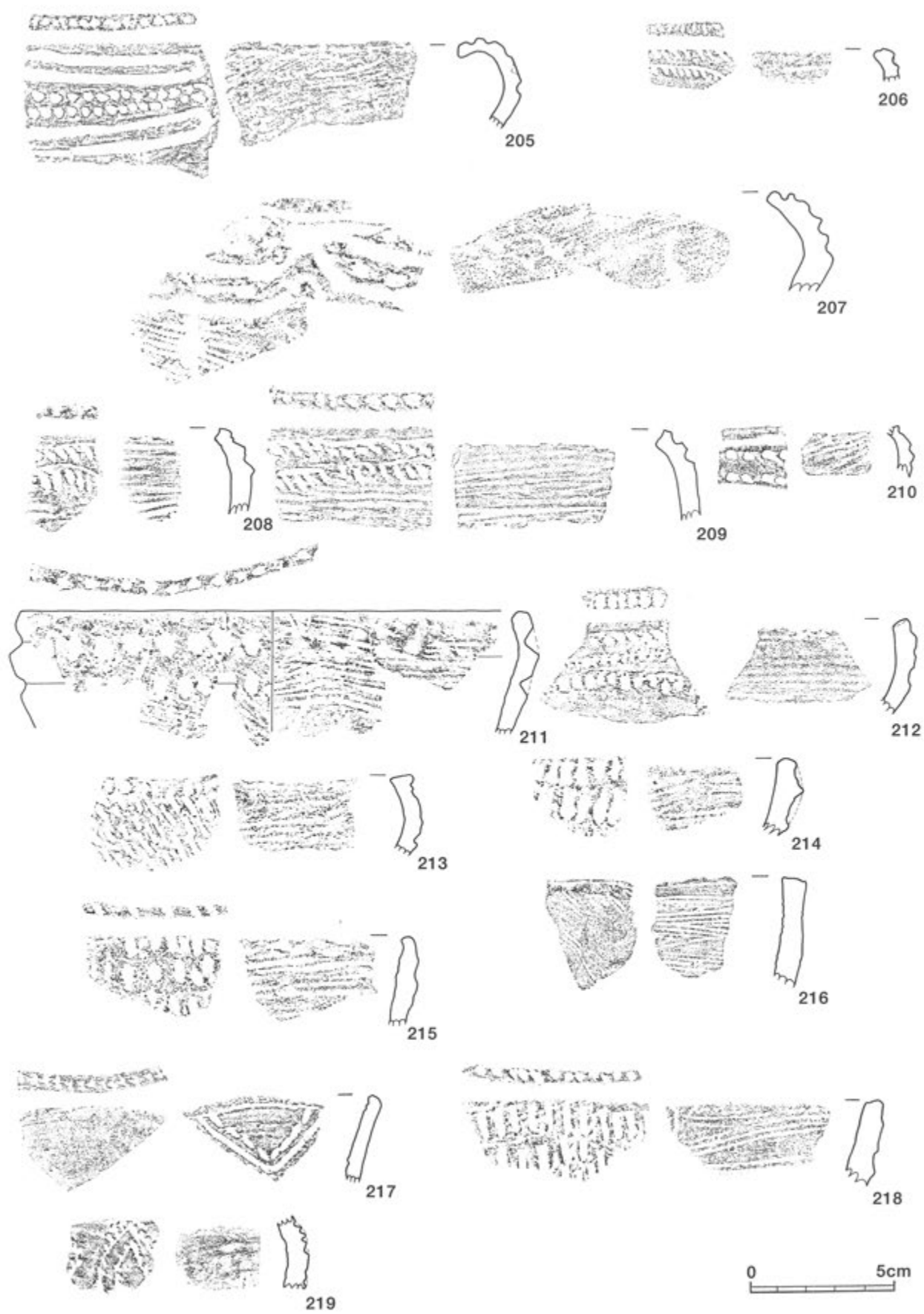
第46図 IV類土器6



第47図 IV類土器 7



第48図 IV類土器 8



第49図 IV類土器 9



220

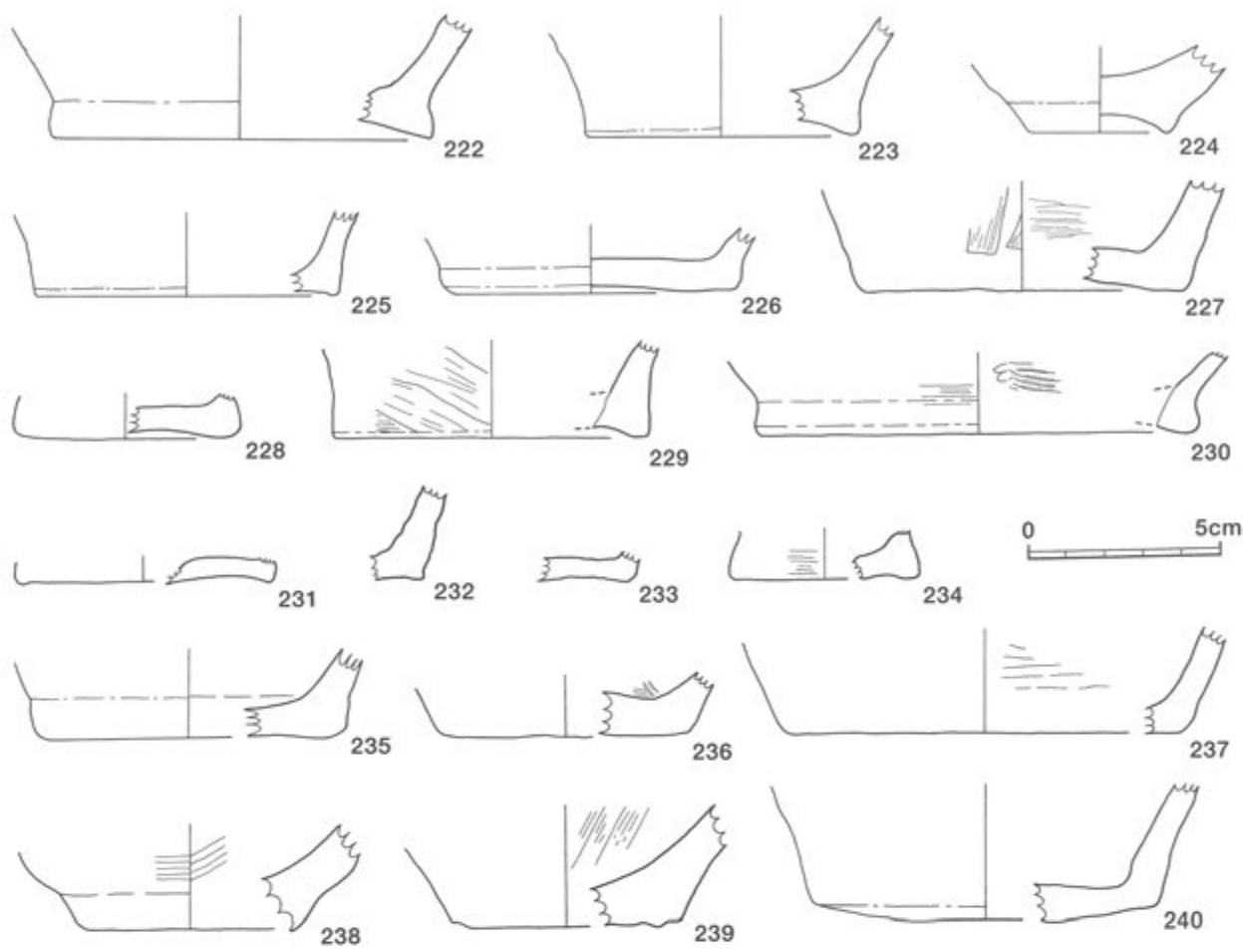


221



第50図 IV類土器10

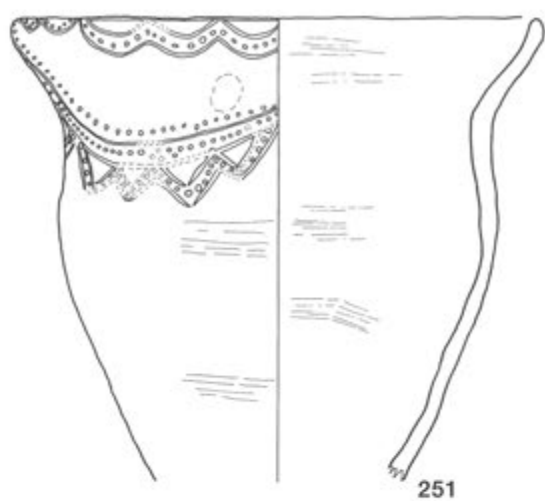




第51图 底部



第52図 遺構内出土土器



251



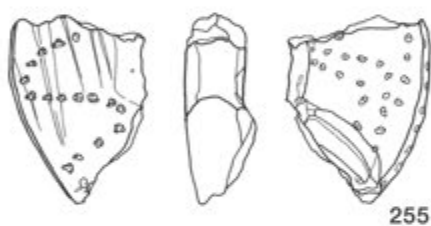
252



253



254



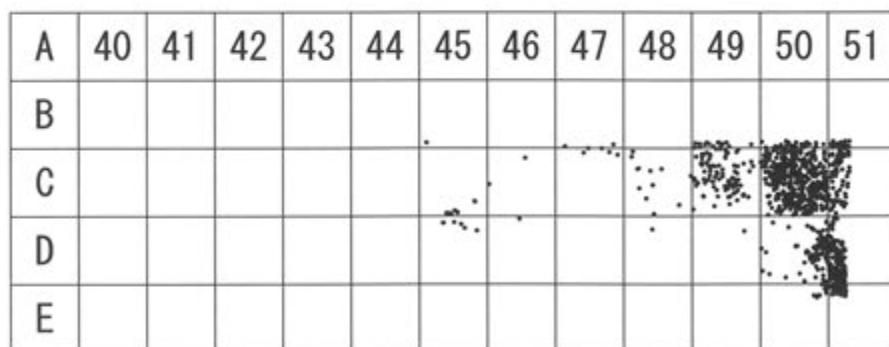
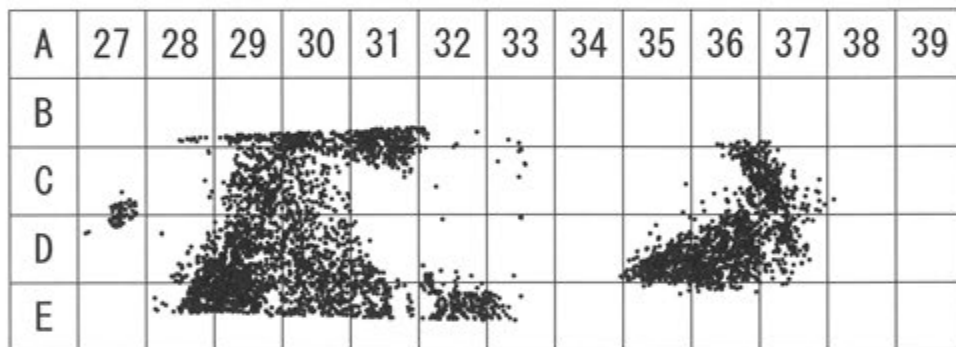
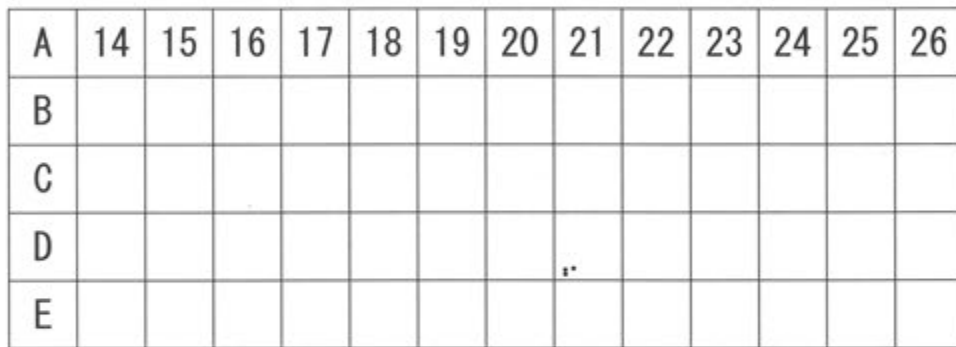
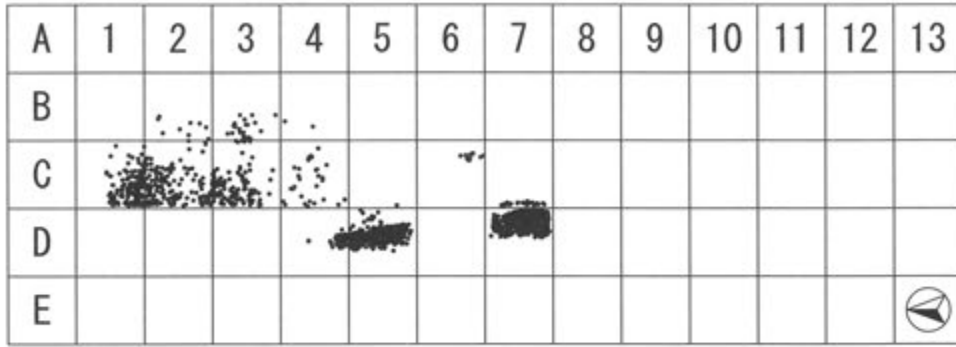
255



256



第53図 住居内出土遺物



第54図 石器出土状況

第8表 鷲ヶ迫遺跡縄文土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
19	50	B33	Ⅶ								12014	草創期土器
27	71	D1	Ⅳ			沈線	沈線				15201他	曾畑式土器
28	72	C7	Ⅳ		口縁	条痕	条痕	bi.fl.qz	淡赤褐色	淡赤褐色	15139	
	73	C7	Ⅳ		口縁	条痕	条痕	bi.fl.qz	淡赤褐色	淡赤褐色	5750	
	74	C8	Ⅳ		胴部	条痕	条痕	bi.fl.qz.礫	にぶい褐色	にぶい褐色	5814	
	75	C9	Ⅳ		胴部	条痕	条痕	bi.qz.礫	にぶい褐色	にぶい褐色	8868	
	76	D7	Ⅳ		胴部	条痕	条痕	bi.qz.礫	にぶい褐色	にぶい褐色	2988	
	77	C10	Ⅳ		胴部	条痕	条痕	bi.qz.礫	にぶい褐色	にぶい褐色	14748	
	78	D7	Ⅳ		胴部	ナデ	ナデ	bi.qz.礫	にぶい褐色	にぶい褐色	4992	
	79	C7	Ⅳ		胴部	ナデ	ナデ	bi.qz.礫	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	4322	
	80	C6	Ⅳ		胴部	条痕	条痕	bi.qz.礫	にぶい褐色	にぶい褐色	15630	
	81	C7	Ⅳ		胴部	条痕	条痕	bi.qz.礫	暗褐色	暗褐色	9044	
29	82	C・67			口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	黒褐色	橙色	8163	
30	83	C7	Ⅲb・Ⅳ	1	口縁	条痕	条痕	ho.qz	褐色	黒色	4278他	
	84	C7	Ⅳ	1	口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	赤褐色		12983	
	85	C6	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	fl.qz	黒褐色	黒褐色	12231	
	86	C7	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	fl.qz	黒褐色	黒褐色	12414他	
	87	C6・D7	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	16183他	
	88	C6	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	ho.qz.礫	橙色		5260	
	89	C3	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	fl	黒褐色	黒褐色	8330	
	90	C7	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	ho.qz	褐色	にぶい褐色		
	91	C5	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	黒褐色	9355	
	92	C6	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	ho.qz	にぶい黄褐色	にぶい橙色	14641	
	93	C7	Ⅳ	2	口縁	条痕	条痕	bi.fl.qz	黒褐色	にぶい褐色	5762	
	94	D7	Ⅳa	2	口縁	条痕	条痕	fl.qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5275	
	95	C3	Ⅳ	2	胴部	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	6324	
	96	C7	Ⅳ	2	胴部	条痕	条痕	qz	黒褐色	赤褐色	13086	
	31	97	C3	Ⅳ	3	口縁	条痕	条痕	bi.qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	3803
98		C6	Ⅳ	3	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	11162他	
99		D7	Ⅳa	3	口縁	条痕	条痕	ho.qz	にぶい褐色	にぶい褐色	4964	
100		D7	Ⅳa	3	口縁	条痕	条痕	ho.qz	橙色	橙色	3917	
101		C6	Ⅳ	3	口縁	条痕	条痕	bi.qz	黒褐色	褐色	13387他	
102		C1	Ⅳ	3	口縁	条痕	条痕	qz	暗褐色	にぶい褐色	9702	
103		C6	Ⅳ	3	口縁	条痕	条痕	qz.礫	にぶい黄褐色	黒褐色	12255	
104		C7	Ⅳ	3	胴部	条痕	条痕	fi.qz.礫	にぶい黄褐色	暗褐色	11837	
105		C7	Ⅳ	4	胴部	条痕	条痕	ho.qz	黒褐色	褐灰色	3482	
106		C3	Ⅳ	4	口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	明黄褐色	明黄褐色	6332	
32	107	D3	Ⅳa	5	口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	にぶい黄褐色	黒褐色	155	
	108	C7	Ⅳ	5	口縁	条痕	条痕	ho.qz	橙色	橙色	10744他	
	109	D7	Ⅳa	5	口縁	条痕	条痕	bi.qz.礫	黒褐色	灰黄褐色	5708	
	110	C6	Ⅳ	5	胴部	条痕	条痕	qz	褐色	にぶい黄褐色	14781	
	111	C3	Ⅳ	5	胴部	条痕	条痕	bi.ho.qz	黒褐色	黒褐色	10037	
	112	D5	Ⅳa	7	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい黄色	にぶい黄色	1919	
	113	C7	Ⅳ	7	口縁	条痕	条痕	qz.礫	褐色	黄褐色	15383	
	114	C6	Ⅳ	7	口縁	条痕	条痕	ho.qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5363	
	115	C6	Ⅳ	7	口縁	条痕	条痕	fi.qz.礫	暗褐色	黒褐色	13784	
	116	C7	Ⅳ	7	口縁	条痕	条痕	fi.qz.礫	黒褐色	オリーブ褐色	11701	
	117	D5	Ⅳa	7	口縁	条痕	条痕	ho.qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	871	
33	118	C6	Ⅳ	10	口縁	条痕	条痕	qz.礫	褐色	褐色	10431	
	119	C6	Ⅳ	10	胴部	条痕	条痕	qz	黒褐色	黒褐色	9480	
	120	C6	Ⅳ	11	口縁	条痕	条痕	qz.礫	黒褐色	暗褐色	4843	
	121	C・D7	Ⅲb・Ⅳ・Ⅳa	11	口縁	条痕	条痕	ho.qz	黒褐色	暗褐色	14357他	
	122	C6	Ⅳ	11	口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	灰褐色	にぶい褐色	11510	
	123	D7	Ⅳa	11	胴部	条痕	条痕	ho.qz	にぶい橙色	灰黄褐色	5364	
	124	C6	Ⅳ	11	胴部	条痕	条痕	fl.qz	黒褐色	褐色	5985他	
34	125	C6・7	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	黒褐色	にぶい褐色	5986他	
	126	C6	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	ho.qz	黒褐色	褐色	10400	
	127	C6	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	fl.ho.qz	黒褐色	暗褐色	4895	
	128	D7	Ⅳa	12	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	暗褐色	5840	
	129	C6・7	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	ho.qz	黒褐色	灰黄褐色	4366他	
	130	C1	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	qz	褐灰色	褐灰色	7847	
	131	C6	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	fi.qz.礫	黒褐色	にぶい黄褐色	10285	
35	132	C6	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	ho.qz.礫	黒褐色	にぶい赤褐色	5641他	
	133	D7	Ⅳa	12	口縁	条痕	条痕	fl.qz	にぶい黄褐色	灰黄褐色	500	
	134	C7	Ⅳ	12	口縁	条痕	条痕	fl.qz	黒褐色	灰黄褐色	12102	
	135	C7	Ⅳ	12	胴部	条痕	条痕	qz	灰褐色	褐色	12681他	
	136	C6	Ⅳ	12	胴部	条痕	条痕	ho.qz	灰褐色	にぶい褐色	12334	
	137	D7	Ⅳb	12	胴部	条痕	条痕	ho.qz	黒褐色	にぶい黄褐色	1368	
	138	C7	Ⅳ	12	胴部	条痕	条痕	fl.qz	にぶい褐色	灰褐色	12600他	

第9表 鷲ヶ迫遺跡縄文土器観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
36	139	C7	IV		口縁~胴	沈線	条痕	ho,qz	黒褐色	暗灰色	13046他	
37	139											
38	141	C7	IV	12	胴部	条痕	条痕	ho,qz,礫	橙色	にぶい黄褐色	7747	133と接合
39	142	C7	IV	13	口縁~胴			qz,礫	黒褐色	褐色	13969他	
	143	C7	IV	13	口縁	条痕	条痕	fl,qz	黒褐色	黒褐色	14498	
40	144	C6	IV	13	口縁~胴	条痕	条痕	ho,qz,礫	黒褐色	にぶい褐色	9577他	
41	145	B6-C6-7	IV	14	口縁	条痕	条痕	qz,礫	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	13368他	
	146	C7	IV	14	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	14495他	
42	147	C6-7	IV	14	口縁	条痕	条痕	qz,礫	灰黄褐色	にぶい黄褐色	14544他	
	148	C7	IV	14	口縁	条痕	条痕	qz,礫	灰褐色	にぶい黄褐色	15694他	
	149	C3	IV	14	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	暗灰色	6374	
	150	C6	IV	14	口縁	条痕	条痕	ho,qz	褐色	にぶい褐色	9610	
43	151	C7	IV	14	口縁	条痕	条痕	bi,qz	黒褐色	灰黄褐色	12795	
	152	C7	IV	14	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	7745	
	153	C7	IV	14	口縁	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい褐色	13066	
	154	C6	IV	14	口縁	条痕	条痕	qz	褐色	黄灰色	3021	
	155	C7	IV	14	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい赤褐色	8927	
	156	D7	IVa	14	胴部	条痕	条痕	ho,qz	褐色	にぶい褐色	38	
	157	C7	IV		口縁	条痕	条痕	qz	灰黄褐色	灰黄褐色	14099	
	158	C7	IV	14	胴部	条痕	条痕	fl,ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	12972	
	159	C7	IV	14	胴部	条痕	条痕	qz,礫	にぶい褐色	褐色	15472	
	160	D7	IVa	14	胴部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	5367	
	161	C6	IV	14	胴部	条痕	条痕	ho,qz	褐色	にぶい褐色	7518	
	162	C6	IV	14	胴部	条痕	条痕	qz,礫	黒褐色	にぶい黄褐色	10416	
	163	C7	IV	14	胴部	条痕	条痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	13998	
	164	C7	IV	14	胴部	条痕	条痕	fl,qz	黒褐色	にぶい褐色	8941	
	165	C7	IV	14	胴部	条痕	条痕	ho,qz	灰褐色	にぶい褐色	15698	
44	166	D4	IVa	15	口縁	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	177	
	167	D7	IVa	15	胴部	条痕	条痕	qz,礫	明褐色	明褐色	4766	
	168	C6	IV	16	口縁	条痕	条痕	st,fl,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	11339	
	169	C6	IV	16	胴部	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	褐色	14580	
	170	D7	IVa	16	口縁	条痕	条痕	fl,qz	黒褐色	黒褐色	4732	
	171	C6	IV	16	胴部	条痕	条痕	qz,礫	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	13775	
	172	C6	IV	16	胴部	条痕	条痕	qz,礫	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10376	
45	173	D7	IVa	17	口縁	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5297他	
	174	C6	IV	17	口縁	条痕	条痕	ho,qz	褐色	にぶい黄褐色	6665	
	175	C3	IV	17	口縁	条痕	条痕	qz,礫	黒褐色	褐色	6302	
	176	C3	IV	17	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	灰黄褐色	3785	
	177	C7	III b	17	口縁	条痕	条痕	qz,礫	褐色	にぶい褐色	4289	
	178	C7	IV	17	口縁	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい褐色	14138	
	179	D7	IVa	17	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	褐色	5391	
46	180	C7	IV	17	口縁	条痕	条痕	ho,qz	灰黄褐色	にぶい赤褐色	13069	
	181	C6	IV	17	胴部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	7521他	
	182	C6-7	IV	17	胴部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	8812他	
	183	C6	IV	17	胴部	条痕	条痕	qz,礫	黒褐色	にぶい赤褐色	10430	
	184	C1	IV	17	胴部	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	褐色	7938他	
47	185	C7	IV	17	胴部	条痕	条痕	qz	灰黄褐色	にぶい黄褐色	13286	
	186	C3	IV	18	口縁	条痕	条痕	qz	暗褐色	黒褐色	6221	
	187	C3	IV	18	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	6341	
	188	C6	IV	18	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	褐色	5333	
	189	C3	IV	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	8322	
	190	C7	IV	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	明赤褐色	明赤褐色	10625	
	191	D7	IVa	18	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	褐色	5240	
	192	C7	IV	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	褐色	褐色	4382他	
	193	D7	IVa	18	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	褐色	一括	
	194	D7	IVa	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	褐色	褐色	4130	
	195	D7	IVa	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	褐色	5345	
	196	C6	IV	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい褐色	11193	
	197	C7	IV	18	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	5875	
	198	D7	IVa	18	口縁	条痕	条痕	ho,qz	褐色	明赤褐色	4866	
	48	199	C7	IV	18	胴部	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	5561他
200		C7	IV	18	胴部	条痕	条痕	st,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	13275	
201		C6	IV	18	胴部	条痕	条痕	qz	黄灰色	黒褐色	9567	
202		C6	IV	18	胴部	条痕	条痕	fl,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	7580	
203		C6	IV	18	胴部	条痕	条痕	bi,qz	暗赤褐色	にぶい褐色	14579	
204		C6	IV	18	胴部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	14783	
49	205	C7	IV	19	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	13261	
	206	D7	IVa	19	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5596	
	207	C6	IV	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz,礫	にぶい褐色	にぶい黄褐色	10281他	

第10表 鷲ヶ迫遺跡縄文土器観察表 (3)

插图 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
49	208	D7	IVa	19	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい橙色	にぶい褐色	5738	
	209	D7	IVa	19	口縁	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	灰黄褐色	12094	
	210	C6	IV	19	口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	13098	
	211	C2・7	IV	19	口縁	条痕	条痕	st,qz	灰黄褐色	褐灰色	10990他	
	212	C7	IV	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	灰黄褐色	8817	
	213	C3	IV	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz	灰黄褐色	にぶい褐色	3783	
	214	C6	IV上	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	4072	
	215	C7	IV	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8816	
	216	D7	IVa	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい橙色	橙色	4106	
	217	C7	IV	19	口縁	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	灰褐色	14452	
50	218	C6	IV	19	口縁	条痕	条痕	qz,礫	黒褐色	にぶい黄褐色	11497	
	219	C6	IV	19	胴部	条痕	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5706	
	220	B6	IV	19	胴部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	5169他	
	221	C6・7	IV	19	胴部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	7667他	
51	222	C6	IV	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	11085	
	223	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	褐灰色	6113	
	224	C3	IV	20	底部	条痕	条痕	qz,礫	にぶい黄褐色	黒褐色	6625	
	225	C6	IV	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	橙色	にぶい赤褐色	9184	
	226	C3	IIIb	20	底部	条痕	条痕	fl,ho,qz	にぶい褐色	褐灰色	3246	
	227	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	fl,qz	にぶい黄褐色	黒褐色	一括	
	228	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	5212	
	229	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	5786	
	230	B6	IV	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	橙色	9636	
	231	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	橙色	4643	
	232	C7	IV	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	13910	
	233	C7	IV	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい赤褐色	褐色	12798	
	234	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	褐灰色	5705	
	235	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	fl,ho,qz	にぶい黄褐色	褐灰色	2966	
	236	C3	IV	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10008	
	52	237	D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3002
238		D7	IVa	20	底部	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	褐灰色	5158	
239		C7	IV	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	明赤褐色	にぶい褐色	5914	
240		C3	IV	20	底部	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	6267	
244		C6	土坑		口縁	条痕	条痕	qz	橙色	橙色	6584	
245		C6	土坑		口縁	条痕	条痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	4556	
246			土坑		口縁	条痕	条痕	qz	にぶい黄褐色	褐灰色	4551	
247		C6	土坑		口縁	条痕	条痕	bi,fl,qz	黒褐色	褐灰色	4576他	
248		C6	土坑		胴部	条痕	条痕	qz	灰黄褐色	褐灰色	4437	
249		C6	土坑		口縁	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	褐色	4518他	
53	250	D1			口縁	条痕	条痕	bi,qz	にぶい黄褐色	褐灰色		
	251	D5	住1		口縁	条痕	条痕	ho,qz	灰黄褐色	にぶい褐色	8246他	
	252	D5	住1		口縁	条痕	条痕	qz	黄褐色	黄褐色	13226	
	253	D45	住1		口縁	条痕	条痕	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	8305	
	254	D45	住1		口縁	条痕	条痕	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8651他	
	255	D6			口縁	条痕	条痕	fl,ho,qz	にぶい黄褐色	浅黄色	551	
	256	D2			口縁	条痕	条痕	bi,qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	248	

## 2 石器

縄文時代の石器は、石鏃・石槍・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・石核・残核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・石皿・砥石・軽石製品が出土している。石材は黒曜石・頁岩・玉髓・瑪瑙・安山岩・チャート・砂岩・花崗岩等がみられた。

### 石鏃 (第55～57図, 257～333)

本遺跡からは石鏃が77点出土し、その内3点は磨製石鏃である。IV a層, IV層, III層出土と分層し、その後、形態によってさらに細分した。

IV a層からは32点が出土した。黒曜石21点, 安山岩1点, ハリ質安山岩1点, 頁岩2点, 瑪瑙4点, 玉髓3点である。形態は様々で、磨製石鏃2点(257, 258)、基部に膨らみをもつもの3点(259～261)、大型で鋸歯状のもの1点(262)、鋸歯状のもの8点(263～270)、抉りの深いもの1点(271)、抉りの浅いもの5点(272～276)、欠損品11点(277～287)、未成品1点(288)である。

257, 258は共に頁岩を用いた磨製石鏃である。257は、全面に入念な研磨が施されており、研ぎ出しにより刃部を形成している。基部に抉りはないが、研磨により一直線に仕上げられている。258は基部のみの欠損品であるが、全面に丁寧な研磨が施されている。両面の中央部に浅い凹みが見られるが、詳しい性格は不明である。259～261は基部に膨らみをもつ平基鏃である。259は三船産黒曜石, 260・261は玉髓を用いている。小柄で3点とも、ほぼ同じ大きさを呈している。いずれも厚みがあり、基部が丸くなる。先頭部が鈍く、下部に最大径を計る。262は大型で鋸歯状の石鏃である。腰岳産黒曜石を素材とし、丁寧な剥離により全体が仕上げられている。抉りがやや深く入り、逆刺は鋭い。ほぼ左右対称であり、非常に完成度の高いものである。263～270は側辺に鋸歯状を呈するものである。263は上半鼻産黒曜石, 264は針尾産黒曜石, 265・266は三船産黒曜石, 267・268は桑ノ木津留産黒曜石, 269・270は瑪瑙をそれぞれ素材としている。263は側辺がやや内弯し、それに伴って脚部がわずかに外に張り出している。抉りが深く入り、逆刺は長く鋭い。264～266は側辺が直線上を呈している。抉りがやや深く入り、逆刺は丸くなっている。また尖頭部は鈍くなっている。267・268は鋸歯状を呈する側辺が、最大幅下端に向けてやや外弯している。抉りがやや深く入り、逆刺、尖頭部に鋭さはみられない。269は乳白色の瑪瑙, 270は浅黄色の瑪瑙をそれぞれ用いている。269は側辺が直線上であり、鋸歯状の調整がわずかにみられ、やや小柄である。抉りが深く入り逆刺は鋭い。270は側辺が脚部に向かってやや外弯し、強く鋸歯状を呈している。抉りがやや深く入り、逆刺は丸い。丁寧な調整剥離によって鋸歯が作成され、それにより尖頭部も鋭いものとなっている。271は黄灰色の瑪瑙を素材としている。側辺は鋸歯状であるが、脚部付近でわずかに外弯する。抉りは深く入っているが、両脚の長さには差があり逆刺、尖頭部は丸くなっている。272～276は抉りの浅いものである。272は桑ノ木津留産黒曜石, 273は針尾産黒曜石, 274は淡橙色の瑪瑙, 275は玉髓, 276は安山岩をそれぞれ素材としている。272は側辺やや内弯し、脚部がわずかに張り出している。基部は非常に浅く、裏面に主要剥離面を多く残す。273～275はいずれも側辺が最大幅下端に向けてやや外弯する。抉りは広く浅く形成されており、それに伴い逆刺は非常に鈍い。尖頭部はやや鈍くなっている。276は、側辺が鋸歯状となり尖頭部は向けてやや外弯する。抉りは微細剥離により浅く広く作られ、逆刺が鋭くなっている。

277～287は欠損品である。277・278は尖頭部が欠損し、277は椎葉川産黒曜石, 278は三船産黒曜



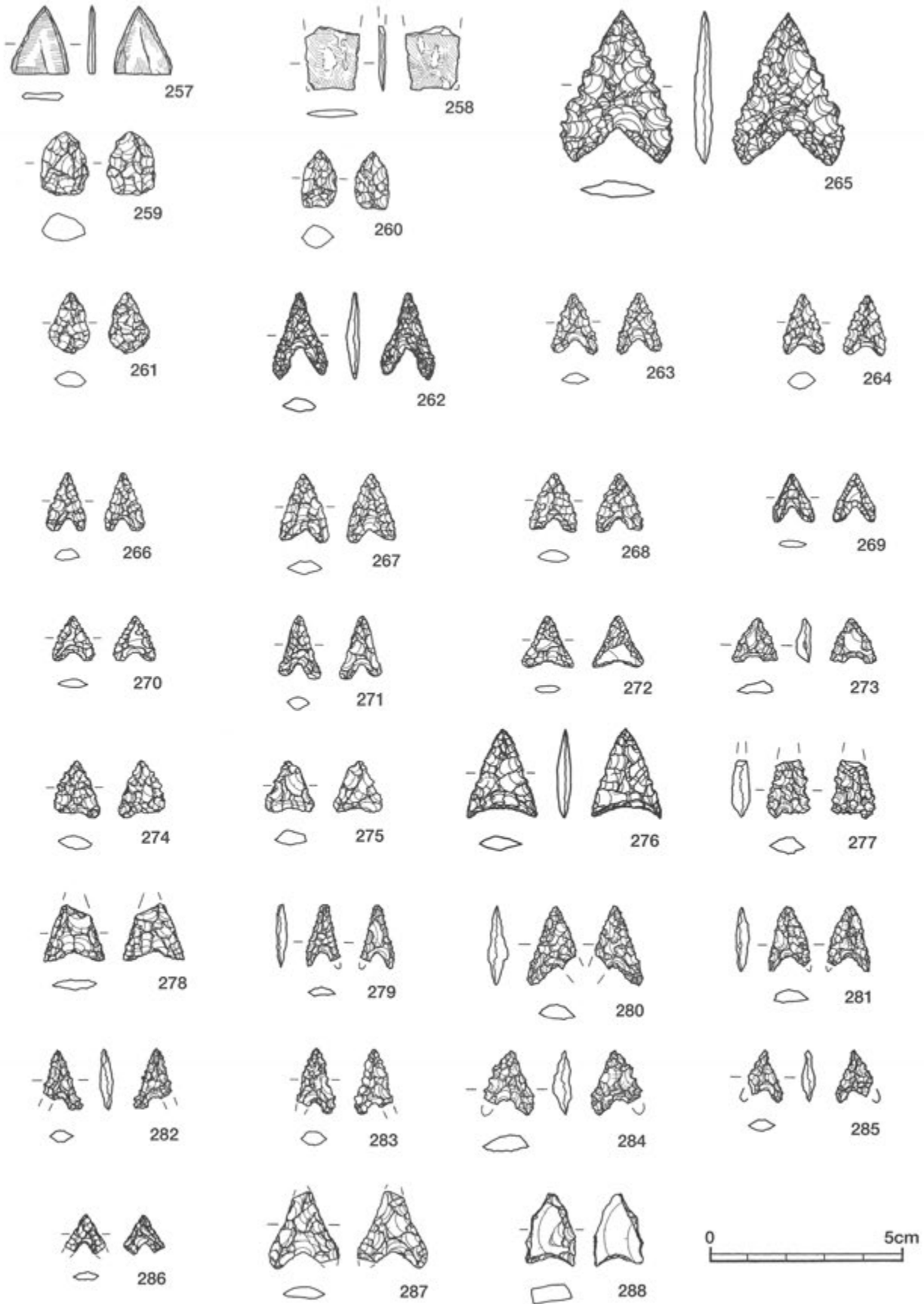
石を用いている。277は側辺が直線で、鋸歯状を呈する。抉りはなく、平基鏃と考えられる。278も同様、鋸歯状を呈するが、やや浅い抉りが入り、鈍い逆刺を有する。279～286は脚部が欠損している。279・280は側辺が直線で、鋸歯状を呈している。抉りが深く入り、逆刺がやや鋭く作られている。尖頭部は、279が丸く、280が鋭いものとなっている。281は両側辺が不揃いなものである。尖頭部が鈍く、抉りは深く入るが、逆刺は鋭いものとなっている。282は側辺が直線で、鋸歯状を呈している。尖頭部は鋭く、抉りが深く入り、逆刺は非常に鈍くなっている。283～285は脚部が欠損し、側辺が非対称なものである。側辺の調整に統一性がみられず、また抉りも中心から外れて入れられており、非常にバランスが悪く見える。286は上半鼻産黒曜石を用いた両脚の欠損したものである。小柄であるが、丁寧な調整剥離により側辺が形成され、尖頭部も鋭いものとなっている。287はハリ質安山岩を素材とした尖頭部と脚部の欠損したものである。側辺が中央付近で強く内弯し、脚部はやや外に張り出した形となっている。抉りが深く入り逆刺は丸くなっている。

288は未成品である。桑ノ木津留産黒曜石の横長剥片を利用し、表面からの押圧剥離により石鏃も形を作り出している。刃部は形成されておらず、主要剥離面が多く残る。

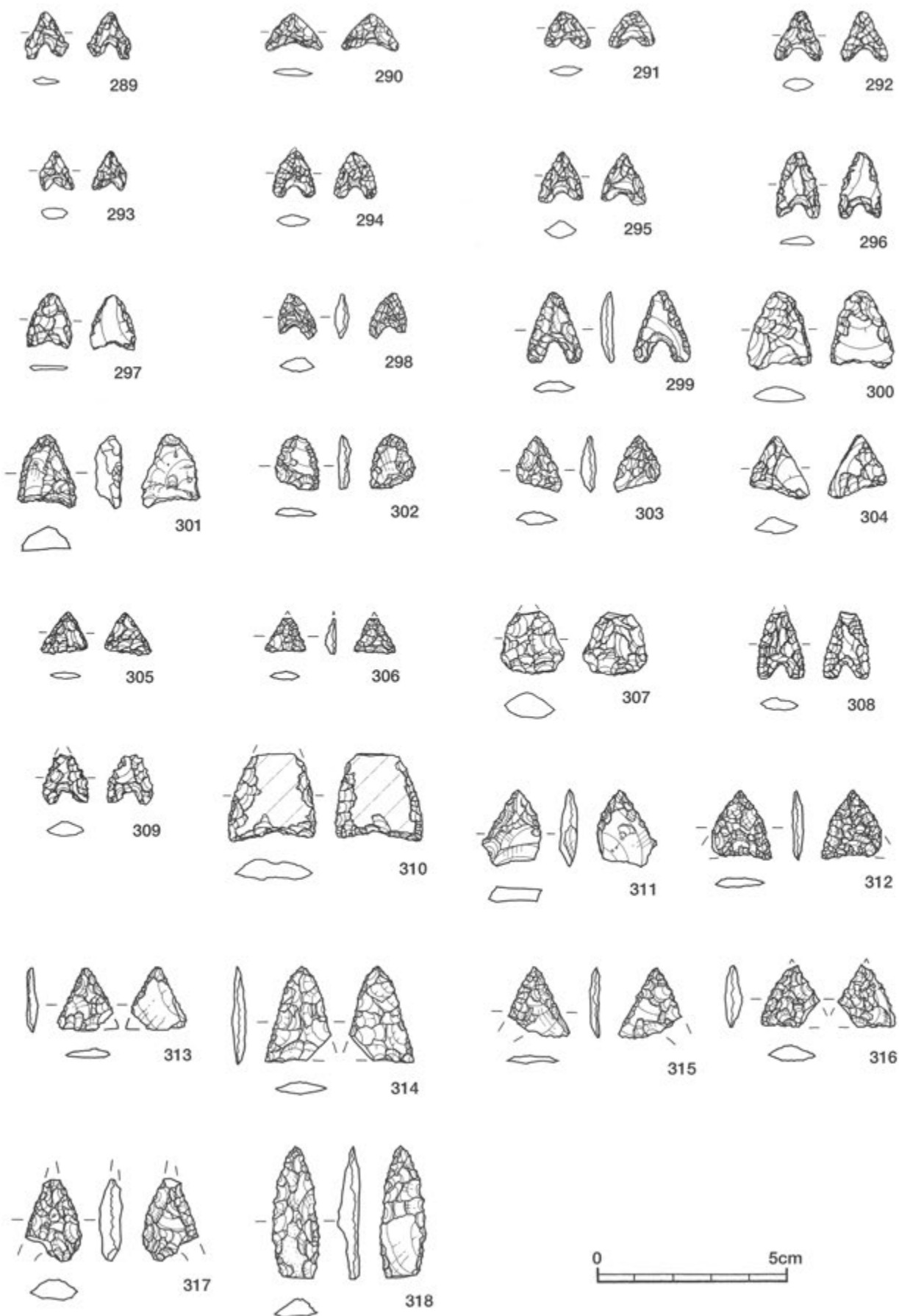
IV層からは、30点の石鏃が出土した。IV a層出土の石鏃同様、形態ごとに分類した、石材は黒曜石19点、瑪瑙2点、玉髓3点、鉄石英1点、安山岩5点である。

形態は、五角形鏃1点(289)、幅の広い石鏃2点(290・291)、鋸歯状のもの6点(292～297)、抉りの深いもの2点(298・299)、抉りの浅いもの6点(300～305)、欠損品12点(306～317)、その他形状1点(318)である。289は玉髓を用いた小柄の五角形鏃である。側辺下部に張り出しが作られている。抉りが深く入るが逆刺は鈍く、左右非対称である。290・291は、横幅に対して側辺が短く、脚部に向けて外弯している。尖頭部は丸く鈍い。抉りは浅く逆刺は鈍い。2点とも上半鼻産黒曜石を用い、プーメランのような形を呈した、小柄なものである。292～297は、側辺に鋸歯状を呈するものである。292は側辺がわずかに内弯し、深く抉りが入る。尖頭部、逆刺共に丸い。293は非対称の側辺を呈し、中心から外れた所に深く抉りが入る。尖頭部は鋭いが、全体的にバランスが悪い。294～297は、側辺に鋸歯状を呈するが、外弯し、尖頭部、逆刺が丸く、抉りが浅いものである。296・297は裏面に主要剥離面を多く残し、主に裏からの調整剥離によって側辺を形成している様子がよく観察できる。298は、片側辺がわずかに外弯しているが、両側辺に鋸歯状を呈する。深い抉りが中心から外れた位置に作られており、非常にバランスが悪い。299は、側辺に鋸歯状を呈したものである。鉄石英の縦長剥片を用いており、やや内側に反る形となっている。抉りが深く入るが、逆刺、尖頭部共に丸くなっている。

300～305は抉りの浅いものである。300・301は共に縦長剥片を用いており、両側辺がやや粗いタッチの調整剥離によって形成されている。また、側辺がわずかに外弯し、尖頭部が丸く鈍いものになっている。302・305は抉りを持たず、左右の側辺の長さに差があるものである。302・303は、側辺に鋸歯状を呈し、やや外弯する。尖頭部は302が丸く、303が鋭くなっている。304・305は、側辺が直線となり、鋸歯を呈さない。尖頭部はややまるい。306～317は欠損品である。306・307、310～316は抉りが浅いものである。306・307・311・314・316は、基部に抉りを持たない平基鏃である。306は小柄で、両側辺が直線上であり、中心部のは微細剥離痕がみられる。307は、両側辺、基部が外弯し全体的に丸く見える。粗いタッチで調整が施されており、完成度が低い。311は、両側辺に



第55図 磨製石鏃・打製石鏃 (1)



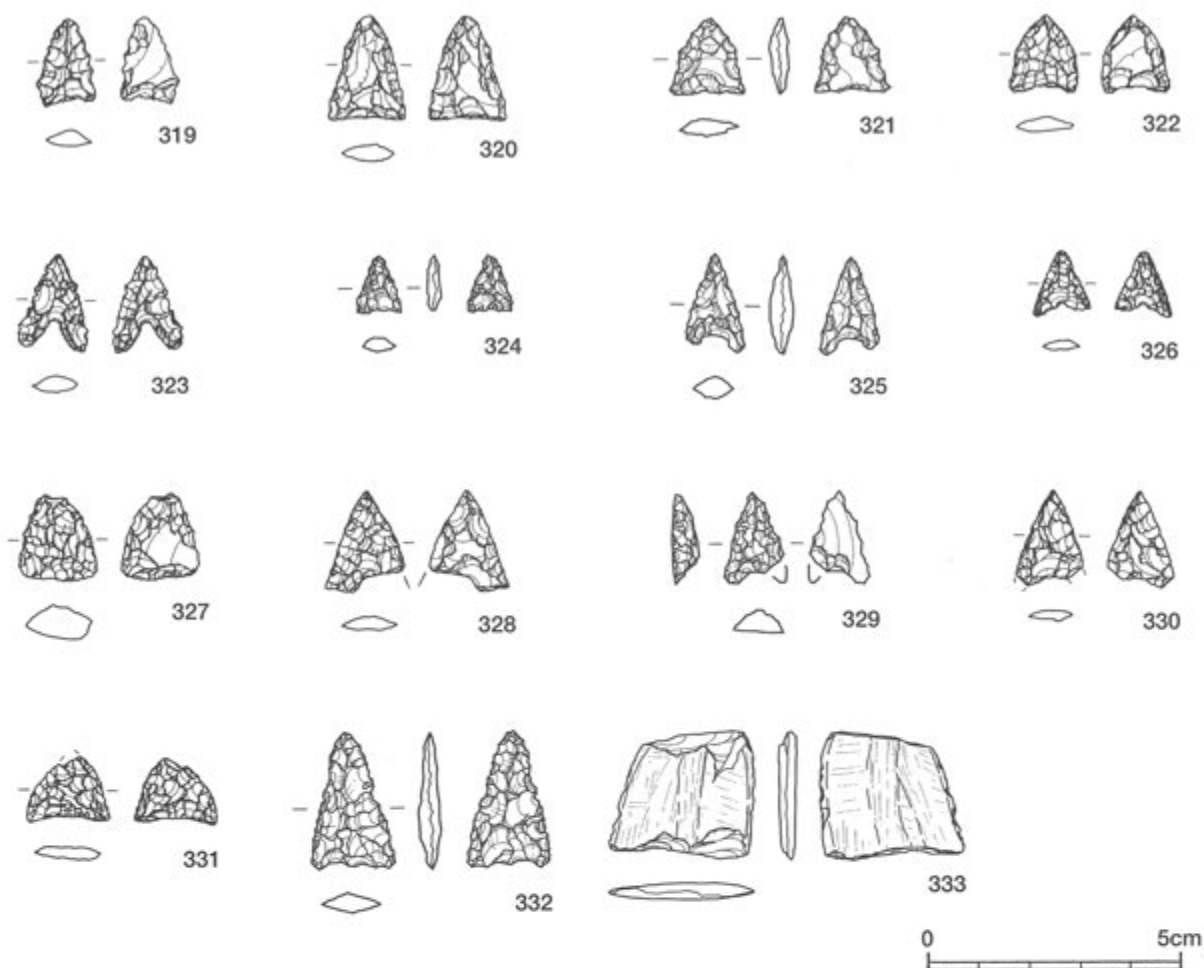
第56図 打製石鏃 (2)

のみ調整剥離が施されており、基部に調整はみられない。また、裏面には、主要剥離面を多く残す。313・314は安山岩を用いている。313は横長剥片を用い、両側辺は直線上であり、わずかに鋸歯状を呈する。逆刺、尖頭部はやや丸く、ほぼ正三角形である。314は、側辺が直線であり鋸歯状であるが、尖頭部付近で角度が内側に曲がり、五角形の形状を呈している。基部は調整剥離により、一直線となっている。丁寧な調整により、全体が仕上げられている。308・309は、深く抉りが入ったものである。2点とも側辺がわずかに外弯し、鋸歯状を呈している。尖頭部が欠損しているため、詳しい情報は判断できないが、逆刺は丸くなっている。310・312・315は抉りの浅いものである。310・312は、側辺がやや外弯し、鋸歯状を呈さない。310は尖頭部が欠損しているが、312は尖頭部が鋭く作られている。315は、側辺がわずかに内弯し、鋭く尖頭部が作られている。正面からの調整剥離によって非常に浅い抉りが施されている。317は側辺に差があり、左右非対称となっている。尖頭部、逆刺が欠損しており、形の悪い抉りが施されている。

318はその他の形態のものである。安山岩の縦長剥片を素材としており、石鏃に分類したが、小型の石槍の可能性もある。自然面を多く残し、尖頭部はやや鋭く、側辺は外弯し、最大幅が中央にある。基部は欠損しているため確認できないが、膨らみを持つものである可能性がある。

Ⅲ層からは、15点の石鏃が出土した。黒曜石6点、チャート1点、玉髓1点、安山岩5点、黒色頁岩1点、頁岩1点である。形態は様々あり、両側辺に張り出しを持つ五角形のもの。(319~322)両側辺が直線状で抉りがあるもの。(323~326)平基のもの。(327)欠損品(328~331)磨製石鏃(333)その他形状(332)である。319は黒褐色のチャートを素材としている。両側辺は鋸歯状を呈しているが、下部に意識的に突起部が作られている。抉りは浅く裏面に主要剥離面を多く残す。

321・322は安山岩を素材としており、逆刺が丸くにおいものである。322は、側辺部の突起は目立たず。全体が丸みをおびている。2点とも抉りが非常に浅い。320は安山岩を素材にしている。側辺に突起はみられないが、側辺の下部から意識的に角度が変わっており、五角形鏃と判断した。逆刺は丸く、基部は非常に浅い。323~326は側辺が直線状で抉りをもつものである。323は、腰岳産黒曜石を素材とし側辺部に鋸歯状を呈するものである。抉りが深く入り、丁寧な調整剥離によって全体が仕上げられている。325・326は、側辺部に鋸歯状を呈しないが、抉りをもつものである。325は黒色頁岩、326は三船産黒曜石を素材としている。325は半円状の抉りがやや深く入り、326は三角形状の抉りが浅く入っている。324は三船産黒曜石を素材としている。小柄で側辺が直線状であり、わずかに抉りが入っている。327は、玉髓を素材とした平基鏃である。両面辺がやや外弯し、下辺も外弯している。荒いタッチで調整がほどこされており、全体的に厚みがある。328~331は先頭部及び脚部の欠損したものである。328は、桑ノ木津留産黒曜石を素材としたものである。側辺部がわずかに外弯し逆刺がすどく、抉りがやや深く入る。全体に丁寧な調整剥離が施されている。329は、針尾産黒曜石を素材としている。主要剥離面の多い裏面からの調整剥離により、側辺を形成している。断面はカマボコ状を呈している。330は、安山岩を素材としている。側辺部は直線状で、逆刺がすどい抉りは浅く大まかな調整により作られている。331は、三船産黒曜石を素材としている。両側辺の長さに差があり、左右非対称である。抉りが浅く幅が広い。332は、安山岩を用いた、側辺が段状を呈するものである。側辺のほぼ中央に深い剥離をほどこし、二段階の側辺を作っている。荒いタッチの剥離により側辺部が作られており一見、鋸歯状を思わせる。浅い抉りが



第57図 打製石鏃 (3)

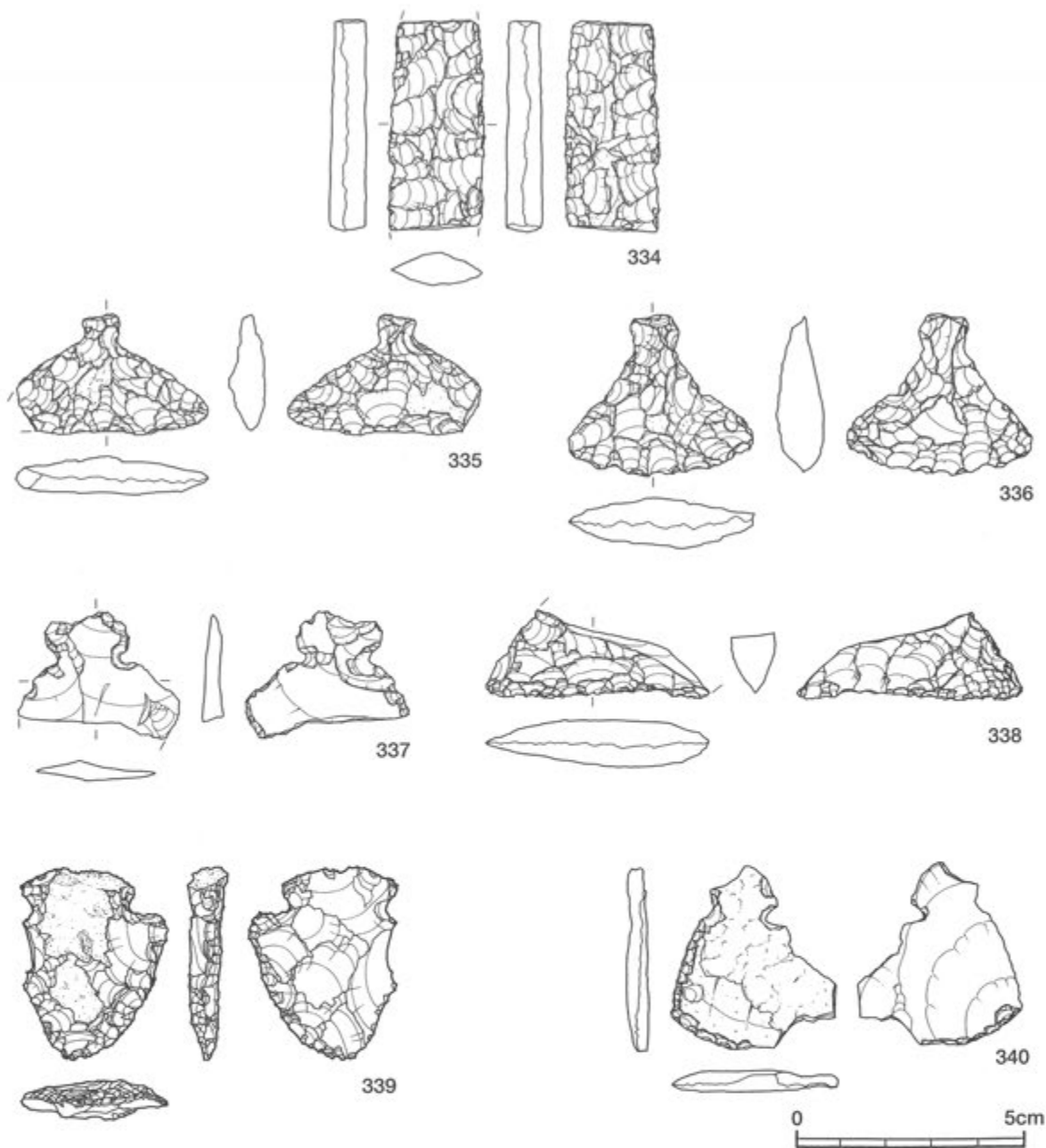
2箇所あり、アルファベットの「M」を思わせる。333は、頁岩を用いた、先頭部の欠損した磨製石鏃である。全体が磨きあげてあり、両面の中央部に浅い溝が作られている。古墳時代の槌をもつ石鏃と酷似しており、これも同時期・同タイプのものである可能性がある。

#### 石槍 (第58図, 334)

先端部と基部が欠損する。黒色安山岩を素材とし、縄文時代早期の石槍に概当する遺物の可能性があるが、表採遺物のため、詳しい時期等は不明である。両面に調整剥離がほどこされており、裏面には自然面が残る。

#### 石匙 (第58図, 335~340)

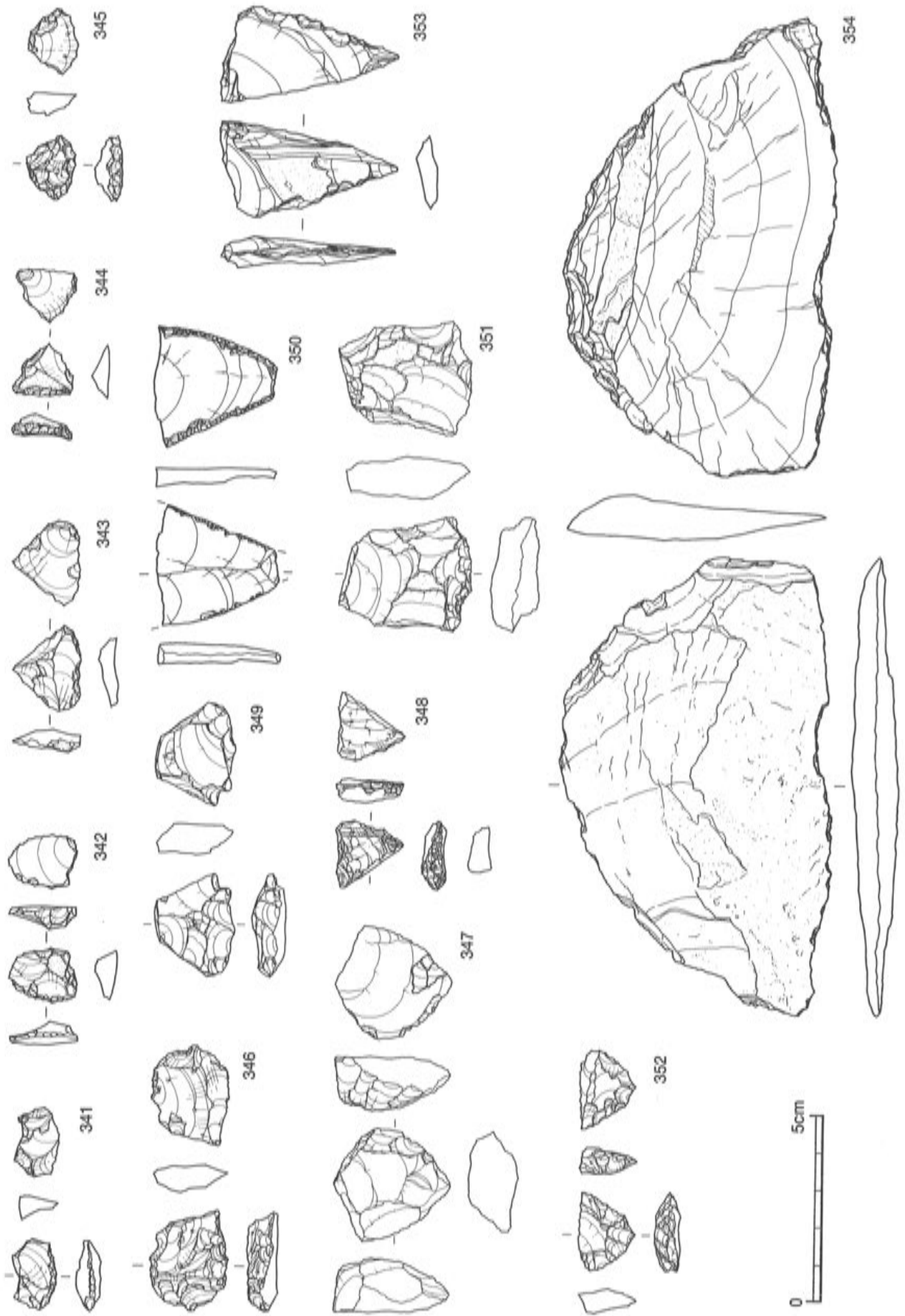
石匙は、6点出土し、内2点は欠損品である。縦型、横型があり身部の平面形は多様である。外部の調整は片面調整 (片刃)、両面調整 (両刃) があるが、片面調整のものは出土していない。刃部の形能は、左右の挟りを結ぶ線を基準にした場合、外弯気味に平行するもの (335, 336) 先端で交わる斜行する両側線に刃部を有するもの (339, 340) 刃部の欠損品 (337) つまみ部の欠損品 (338) がある。加工調整は、縁辺部のみにもみられ、身部全体に及ぶものはみられない。335は、正面に節理面を有する玉髓を素材とし、表裏からの調整で急な挟りが入る。左肩が欠損しているが、わずかに外弯する両面調整の刃部を呈する。336は正面から裏面にかけて節理面を有する玉髓を素



第58図 石槍・石匙

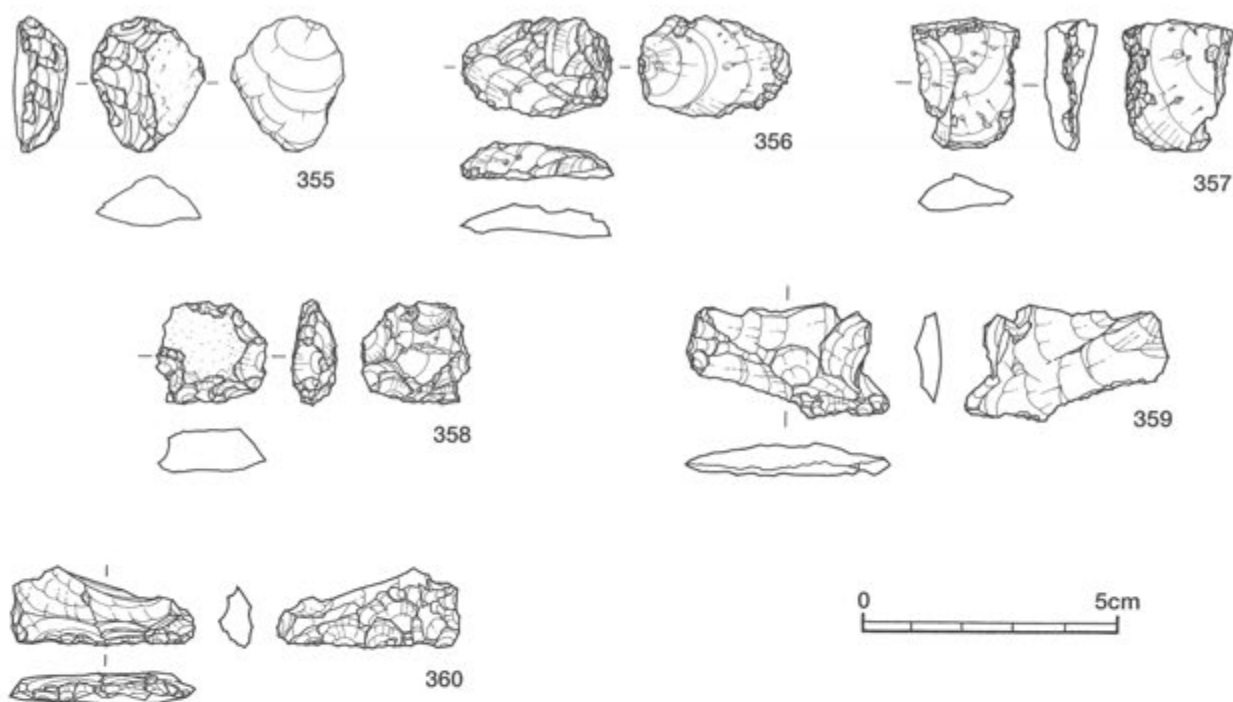
材としている。身部は、ほぼ正三角形で、左右に両面からの調整で浅い抉りが入る。両面調整で作られた刃部は外弯する。337は、灰色のチャート素材とした刃部の欠損したものである。つまみ部分と左右の肩部から石匙と判断した。欠損品のため刃部の性格は不明である。

338は、玉髓を素材としたつまみ部が欠損したものである。刃部は両面からの調整がなされ、ほぼ直線の刃部をもつ。339・340は、自然面を有する黒色安山岩を素材としている。2点ともつまみ部分の調整・加工は雑で左右に、表裏からの剥離で半円状の抉りが入る。両面からの調整により刃部が形成され、340は、両面加工の調整剥離が施されている。



第59図 スクレイパー (1)





第60図 スクレイパー (2)

#### スクレイパー (第59・60図, 341~360)

スクレイパーは20点出土し、IV a層からは3点、IV層からは11点、III層からは6点である。

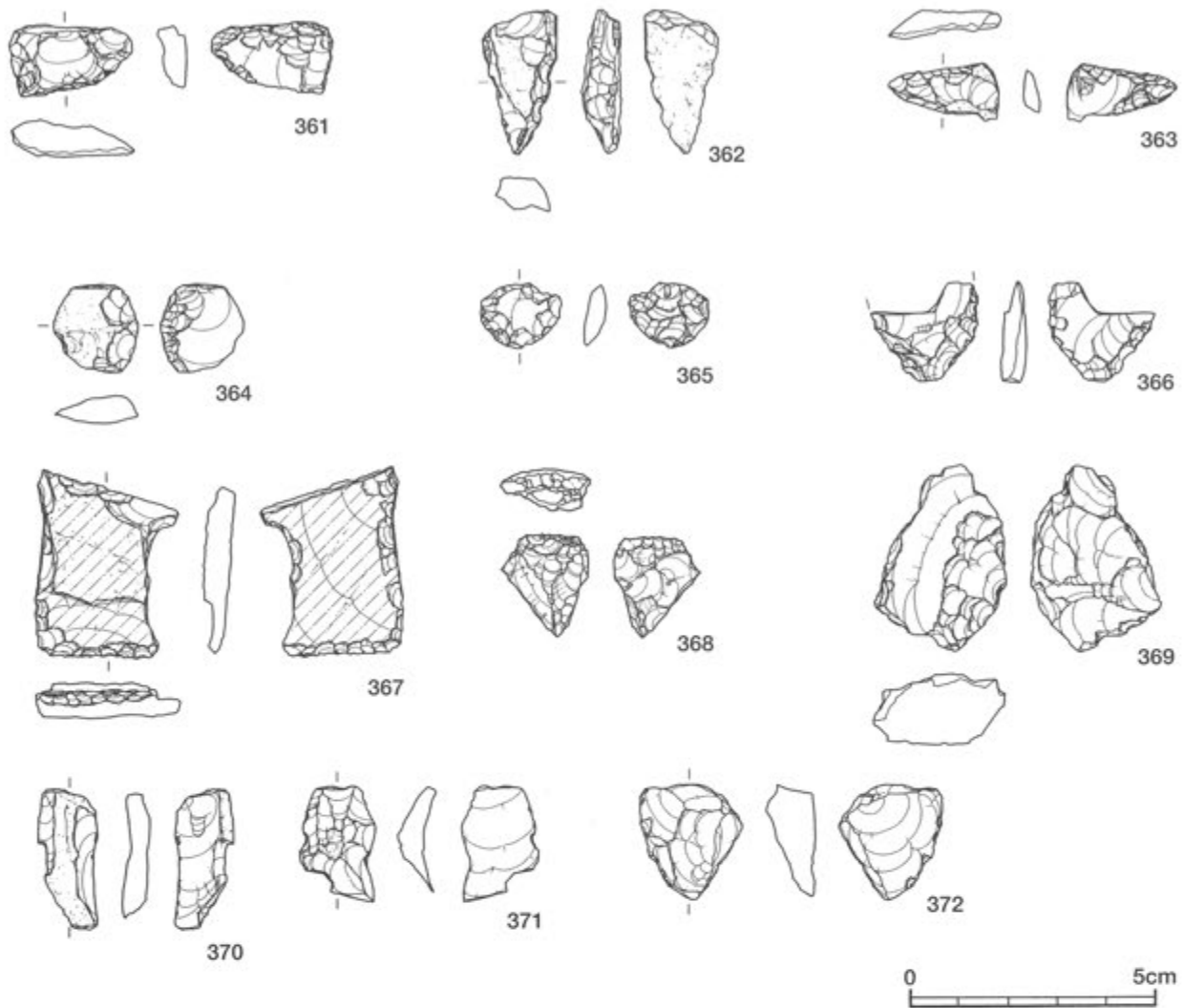
IV a層出土のものは、341~343である。

341は、椎葉川産黒曜石を使用している。上面に自然面が残し、下縁部に表裏からの調整剥離により刃部を形成している。342は、節理面を有する縦長剥片を素材とし、裏面には主要剥離面を残す。主に裏面からの剥離によって、左側辺に刃部を形成している。343は、不純物を多く含む玉髓の縦長剥片を素材としている。三角形状を呈しており、左側辺で底辺に刃部を有する。左側辺は表裏からの調整下縁は裏面からの調整により、刃部が形成されている。

IV層出土のものは344~354である。

344は、上牛鼻産黒曜石の縦長剥片を素材としている。表面には自然面を残し裏面には主要剥離面を多く残している。左側辺には裏面からの調整が行われており、下辺部には使用痕がみられる。345は、三船産黒曜石の横長剥片を素材としている。下部に裏からの調整により外弯する刃部が形成されている。346・347・349は、三船産黒曜石の縦長剥片を素材としたものである。346・349は、両面からの調整によって、下縁に刃部を作り、347は右側辺に裏面からの調整により刃部が作られている。3点とも厚い刃を呈している。348は三船産黒曜石を素材としている。逆三角形を呈し、右側辺に主に裏からの剥離によって分厚い刃を形成している。350は、暗緑色のチャートの縦長剥片を用いている。上部と下部が欠損しているが、逆三角形を呈するものと考えられる。両側辺に細かい調整剥離が表裏面からなされており、欠損する両側辺部にも加工が施されていたものと考えられる。351は、両面に節理面を多く有する玉髓を素材としており、上部と両肩が欠損しているものである。下辺に両面からの大まかな調整剥離による外弯した刃部を呈する。352は、玉髓を





第61図 二次加工剥片・微細剥離痕剥片

素材としている。上部が欠損しているように見えるが、そこから細かな調整が施されており、完形品であると判断した。裏からの調整により表には連続する剥離がみられる。353は、安山岩の薄い縦長剥片を素材とし、鋭い逆三角形を呈している。左側辺に荒いタッチで両面からの調整が行われ、刃部はやや内湾している。354は、黒色頁岩の大型の剥片を素材としている。両面とも自然面を有し風化がみられる。下縁に波状の刃部を持ち、細かな両面からの調整がみられる。

Ⅲ層出土のものは355～360である。

355は、自然面を有する三船産黒曜石の縦長剥片を用いている。裏面は主要剥離面がそのまま残り、裏面からの調整により、上側辺から右側辺、下側辺にかけて刃部が形成されている。

356は、三船産黒曜石の縦長剥片を横にして、底部となった部分に調整を施したものである。両面からの調整によって刃部が形成されているが連続性はなく、使用による微細剥離が観察できる。

357は、三船産黒曜石の縦長剥片を用いている。一見、上部が欠損しているように見えるが、わずかに剥離痕がみられる。右側辺に両面からの細かい調整剥離によって刃部が作られている。

358は、正面に自然面を有し、不純物が非常に多い三船産黒曜石を用いている。左側辺の上部を除

く全ての面に表裏からの調整が入っており、下縁に、使用痕であろう微細剥離が多くみられる。359は、頁岩の縦長剥片を横にしたものを素材としている。下辺に両面からの細かい調整剥離によって刃部を形成している。360は、ハリ質安山岩の横長剥片を素材としている。両面から大まかな剥離により、波状の刃部が作られている。

#### 二次加工剥片（第61図，361～368）

黒曜石，水晶，チャート，蛋白石，玉髓など緻密な石材の剥片で，剥片剥離後の二次的な剥離がみられる剥片である。本遺跡からは8点が出土し，黒曜石4点，玉髓4点である。364～366・368は，黒曜石の剥片を用いている。

364は腰岳産黒曜石，365は三船産黒曜石，366は椎葉川産黒曜石，368は三船産黒曜石を素材としている。

364は，表面に自然面を有し，裏面には主要剥離面が残る。左側辺に刃部形成のためと思われる剥離が両面にみられる。側辺は刃を成しておらず，性格は不明である。365は，円形を呈しているが，側辺部全ての面に表裏からの剥片による刃部が形成されている。366は，欠損部をのぞく全ての辺に，表裏からの調整がほどこされたものである。上面に自然面を有し，刃部が丁寧に作られているが，性格は不明である。368は，逆三角形を呈している。両側辺が切断されており，上辺には細かい剥離が集中しており，わずかに，つぶれがみられるため楔形石器の欠損品の可能性がある。

361～363・367は，玉髓を素材としている。361～363は，3点とも三角形状のものである。361・363は上辺に362は右側辺に連続性のみられない荒い剥離が施されている。いずれも性格は不明である。367は節理面を多く有している。薄い玉髓の剥片を用いている。左側辺から底辺にかけて表裏から規則正しい剥離が行われている。

#### 微細剥離痕剥片（第61図，369～372）

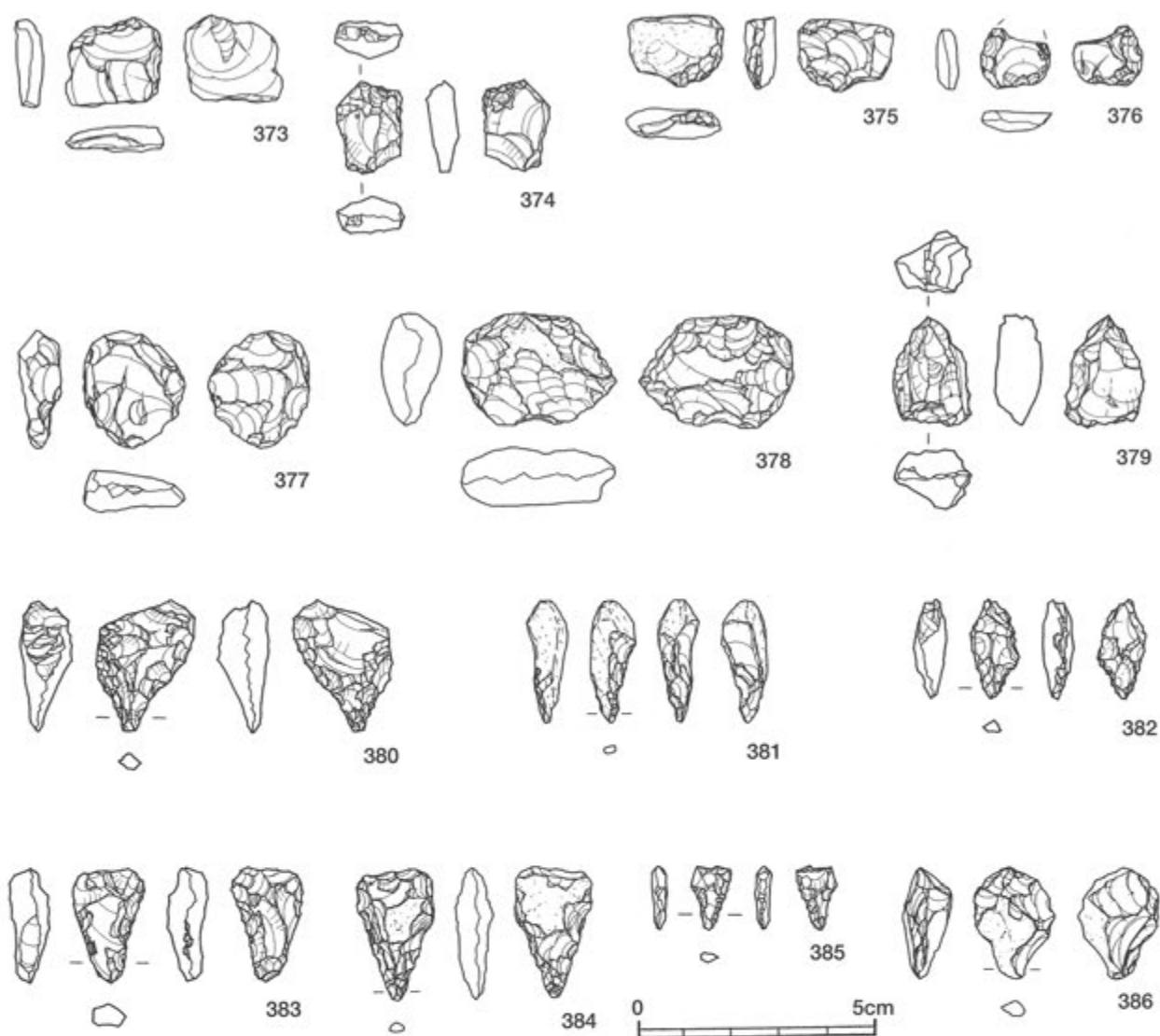
本遺跡からは4点出土した。いずれも黒曜石を用いており，母岩からの剥離の際にできた薄い部分にみられる傾向がある。369は，三船産黒曜石の横長剥片を用いている。左側辺に調整痕らしき剥離がみられるが，正確性や連続性がみられず，刃部を形成していない。一見，スクレイパーのように見える。370は桑ノ木津留産黒曜石の弯曲した縦長剥片を用いている。右側辺に微少な剥離が生じているが方向性，規則性はみられない。371は三船産黒曜石の縦長剥片を素材としている。剥片の末部が抉り状を呈しており，微細剥離がみられる。抉入石器として使われた可能性がある。372は三船産黒曜石の幅の広い縦長剥片を素材としている。弯曲する右側辺部に微細な剥離がみられるが，詳しい性格は不明である。

#### 楔形石器（第62図，373～379）

形状，縁辺部の階段状剥離，対辺に向かって延びる剥離痕，剥離の重なり対辺同士を直線的に結ぶ剪断面の形成などの特徴を有する。石器及びその使用によって生じたと思われる破片を楔形石器（ピエス・エスキーユ）と分類した。本遺跡からはⅣb層からⅢb層にかけて7点出土した。

使用形状を保つと考えられるもの（6点）欠損品（1点）である。

373は桑ノ木津留産黒曜石の縦長剥片を素材としており，断面が薄いものである。上辺と右側辺に階段状の剥離と右側辺上部につぶれがみられる。下部が欠損しているようにみられるがつぶれとわずかな剥離がみられた。374は三船産黒曜石を素材としている。両側辺が切断されており，ほぼ



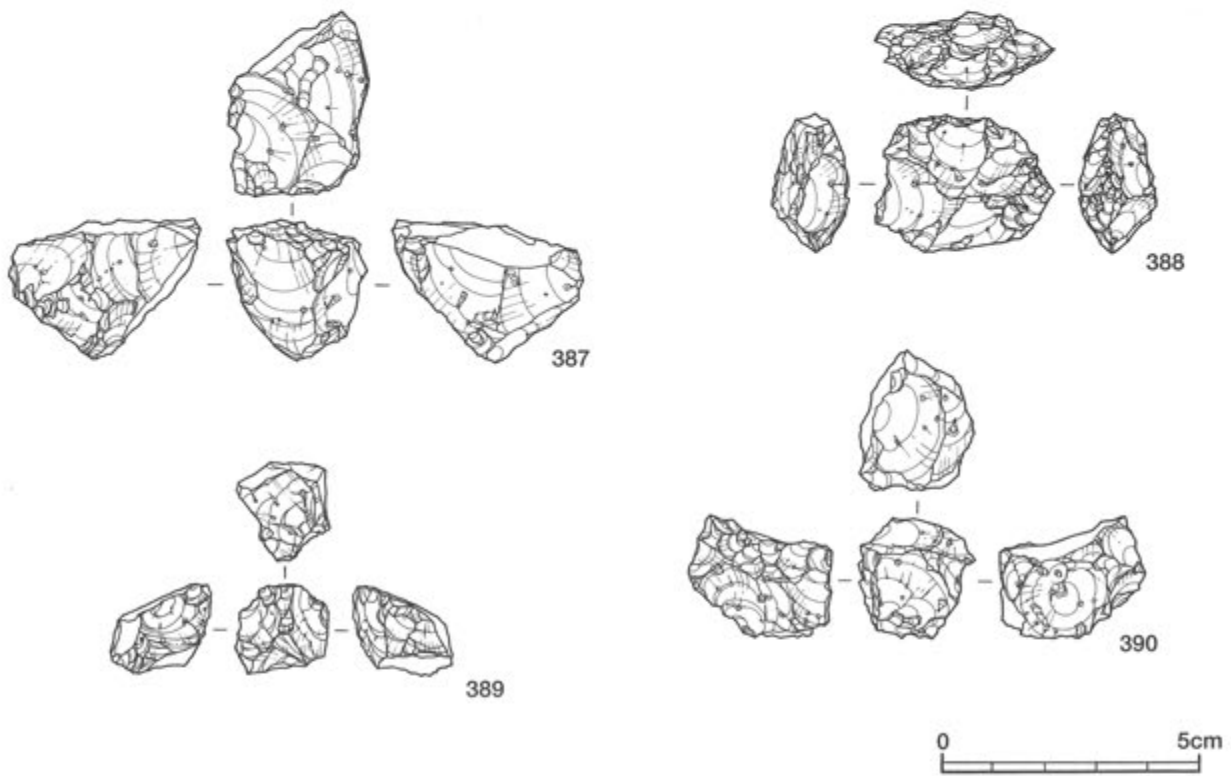
第62図 楔形石器・石錐

六角形を呈している。上辺下辺に階段状の剥離とつぶれがみられるが、特に上辺に目立つ。375は桑ノ木津留産黒曜石を使用し裏面には自然面を有する。上辺が切断されており、つぶれがみられる。上辺を除く全ての側辺に階段状剥離がなされ、またそこからつぶれがみられる。376は桑ノ木津留産黒曜石を使用している。上部が欠伏しているが下部両側辺に階段状剥離を呈し、つぶれがみられる。特に下部には叩きとつぶれが強くあらわれている。377は不純物の多い三船産黒曜石を使用している。上辺にはつぶれとわずかな階段状の剥離がみられ下部も同様の剥離とつぶれがみられる。378は三船産黒曜石を使用している。自然面を有し不純物が非常に多い。上辺には階段状の剥離がみられ、つぶれが上辺と左側辺にみられる。下辺にもつぶれや階段状剥離がみられたが、正面に不純物やアバタが目立ち、剥離を見極める事が困難である。379は不純物の目立つ三船産黒曜石の縦長剥片を素材とし、ほぼ五角形を呈している。両側辺は剥離面がそのまま残されており、加工痕・使用痕は上辺と下辺にみられる。上辺には、階段状剥離とたたきによるつぶれがみられ裏面には、

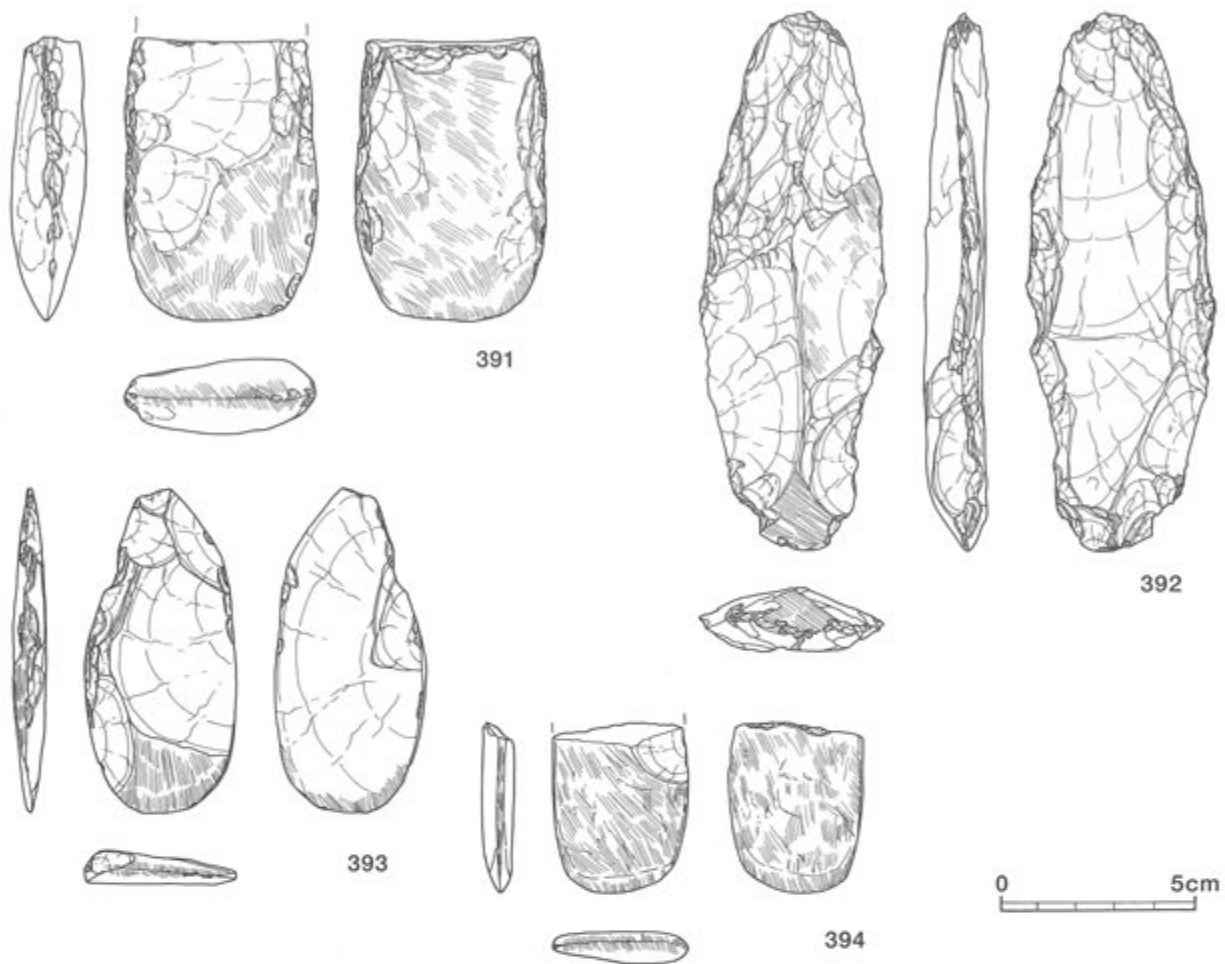
上辺から下辺に向かって延びる剥離痕もみられる。下辺には、不純物が集中しているが、階段状剥離が著しく発達しており、下辺全てにつぶれがみられる。

石錐 (第62図, 380~386)

7点出土した。緻密な石材を用いている傾向があると考えられるが、黒曜石製のものが2点ある。380は、玉髓を素材としている。上部、左側の上部が欠損しており、詳しい形成は不明である。両側辺の表裏からの調整剥離が交互になされ、側辺部から錐部へ急に移行する。錐部は、側辺からの微細剥離によって作られており、断面は不定形を呈する。381は、腰岳産黒曜石を素材としている。自然面の残る縦長剥片を用い、左測辺と右測辺の下部に調整剥離がみられるが、錐部に鋭さはみられない。錐部末端には両測辺からの細かな調整剥離が施されており、断面は方形を呈す。382は玉髓を用いている。菱形を呈し、頭部から錐部にかけて、側辺からの調整剥離が施されている。側辺の中程から緩やかに錐部へ移行し、表裏面からの調整剥離によって形成されている。断面は三角形を呈す。また、わずかではあるが、錐部に摩耗がみられる。383は、玉髓の縦長剥片を用いている。角の鈍い逆三角形を呈しており、やや弯曲している。両側縁に調整がみられるのだが、左測辺は切断面から調整されている。胴部に厚みがあり、そのまま錐部へ移行しているため、断面は鋭さのみられない五角形を呈している。384は、節理面を多く含み、逆五角形鏃を呈している。頭部から側辺部の中ごろまでは大まかな調整がなされているが、測辺の下部に向かうにつれて、丁寧な調整が施されている。錐部は、左右側面と表裏面の4点から調整剥離が施されており、断面は円に近い五角形を呈している。385は玉髓を素材としている。小柄でやや内弯した形となっている。左側辺は、直線状であるのだが、左側辺の中央部に大きく剥離が入り、左右非対称となっている。側辺部から



第63図 石核・残核



第64図 磨製石斧・局部磨製石斧

錐部へかけて、調整がほどこされており、特に錐部には裏面からの調整が行われている。断面は不定形となっている。386は、自然面の多く残る桑ノ木津留産黒曜石を用いている。頭部から側辺、錐部には大まかな調整が施されているが、錐部を形成するための細かな調整が施されていないため、未完成品の可能性がある。

石核・残核（第63図，387～390）

小型剥片石器製作を目的とした素材剥片の獲得に利用されたと考えられる石核が4点出土し、内1点は残核である。いずれも三船産黒曜石を素材としている。

387・389は、やや変則的な形状に分割された素材を用いたものであると考えられる。上面に横からの剥離を行い、ほぼ水平になった所を打点としている。打点に規則性がなく、上面の側辺を移動している。388は、非常に幅のせまい上面をプラットホームとしている。そこから、不規則に剥離がなされ、剥離面の末端が階段状を呈している所もある。290は、残核である。素材に多くの不純物が目立ち、剥片の獲得には向かなかつたものであると考えられる。横からの剥離により獲られたプラットホームには、左面に剥離痕が多く目立つ。

### 石斧（第64・65図，391～396）

石斧は磨製石斧・局部磨製石斧・打製石斧があり，全て頁岩製である。磨製石斧3点，局部的磨製石斧1点，打製石斧2点の計6点出土した。

391・393・394は，磨製石斧である。3点とも基部が欠損しているが，全面に研磨がみられる。刃部は丸みをおびており，側辺には形成のための調整がなされ，階段状の剥離がみられる。392は局部磨製石斧である。大まかな調整剥離の後，刃部を研磨により作りだしている。刃部は，欠損部分が多くわずかに残る程度である。395・396は打製石斧である。2点とも頁岩製であり，基部が欠損している。395は有肩の打製石斧である。側辺部と肩部には階段状の剥離がみられ，刃部には使用による摩耗がみられる。396も，有肩の打製石斧であるが，刃部と基部の差が不明瞭である。

### 凹石・敲石・磨石（第66図，397～402）

凹石・敲石・磨石は，同一個体に研磨・敲打・凹みといった加工痕があり，重複して有する場合がみられる。本報告書では，顕著に現れている使用痕により遺物を判断した。大きさは不均一で凝灰岩・花崗岩が素材とされている。

397は角礫を含む凝灰岩を用いた凹石である。表面の中心に5mmほどの深さを呈する。研磨・敲打はみられず，裏面に自然面を有する。398・399はいずれも花崗岩を用いている。398はほぼ全ての側辺に敲打痕がみられ表裏面にごくわずかな擦痕がみられる。上部が欠損しており，また下部には敲打痕付近に剥離がみられる。使用によるものかは不明である。399は側辺全てに敲打痕がみられ，表裏面には擦痕と敲打が共存している。左側辺上部が欠損している。400～402は，いずれも花崗岩を用いた磨石である。大きさ・形状は不定である。400は正面が平滑化しているほどの研磨が施されている。側辺にごくわずかの敲打がみられる。右側辺が大きく欠損している。401は，平面形が円形で側辺及び断面が楕円形を呈している。大型であるが，擦痕が弱い。402は扁平な円礫を用いたものである。上部と下部が欠損しており，擦痕が弱い。

### 石皿（第67図，403・404）

2点出土している。いずれも花崗岩を用い，欠損品である。

403は，平たい花崗岩を用い，2分の1程度が欠損しているものである。表面に強い擦痕がみられ，中心に向けて急にくぼんで行っている。404は，目の荒い花崗岩を用いている。大きく欠損しているが，正面と右側面に浅い擦痕がみられる。

### 砥石（第68図，405～407）

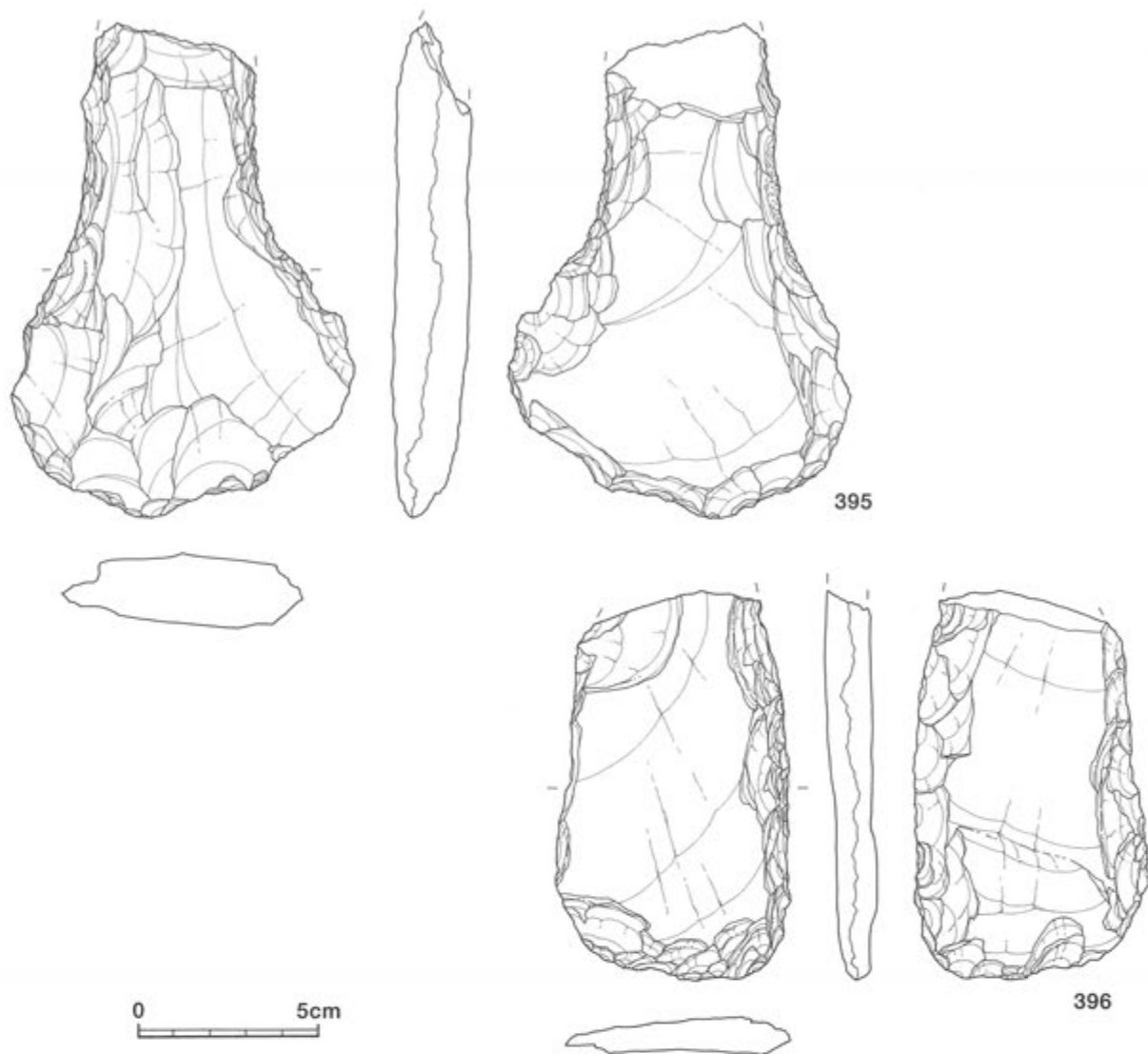
3点出土している。花崗岩製のものが2点，砂岩製のものが1点である。

405は，円礫の一面に研磨面がみられる。非常に浅くくぼんでおり，研磨に方向性がみられる。

406は，砂岩を用いている。表裏面ともに研磨により強にくぼんでおり，右側面にも研磨がみられる。縦長で提砥を思わせる形を呈している。407は，目の荒い花崗岩を用いている。研磨製を3面有し，正面と右側面には，浅く溝状に研磨がほどこされている。下部が欠損している。

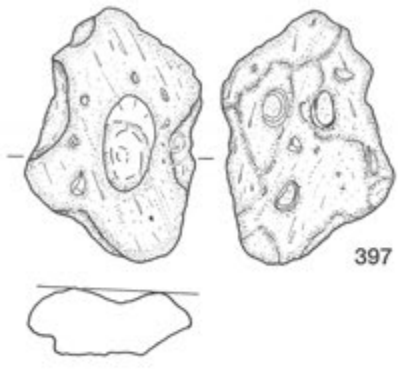
### 軽石製品（第69図，408～412）

5点出土している。ほぼ楕円形を呈するものが4点，不定形のものが1点である。いずれも一定方向への擦痕がみられるが，穿孔や加工，彫刻などはみられない。

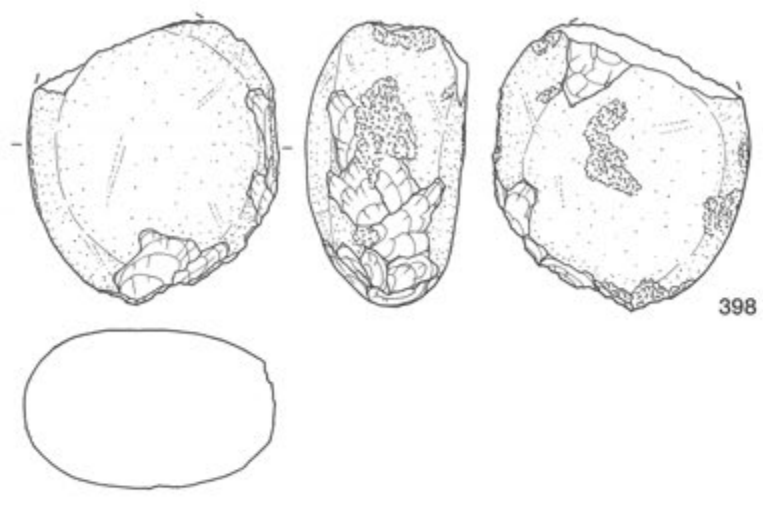


第65図 打製石斧

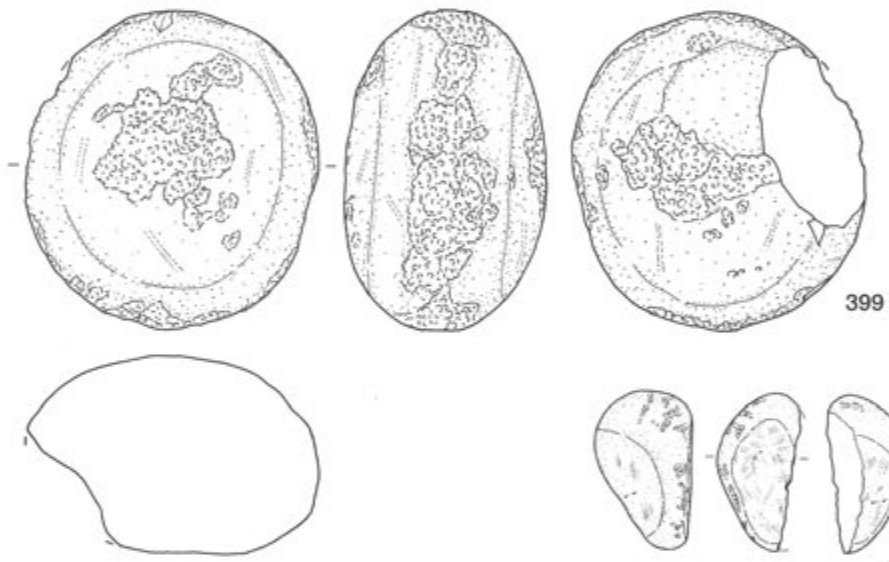




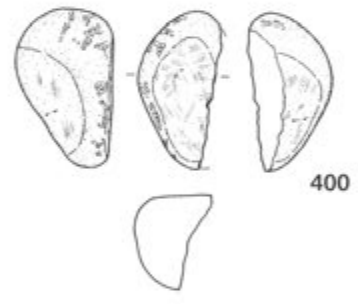
397



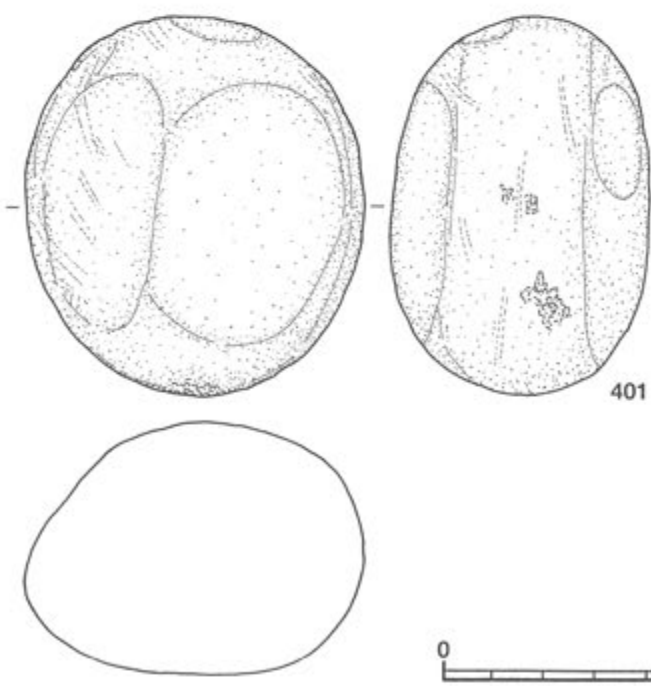
398



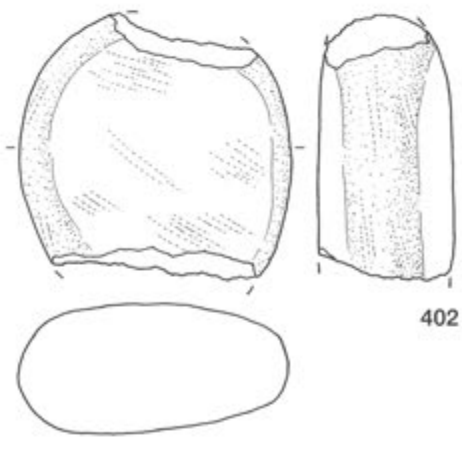
399



400



401

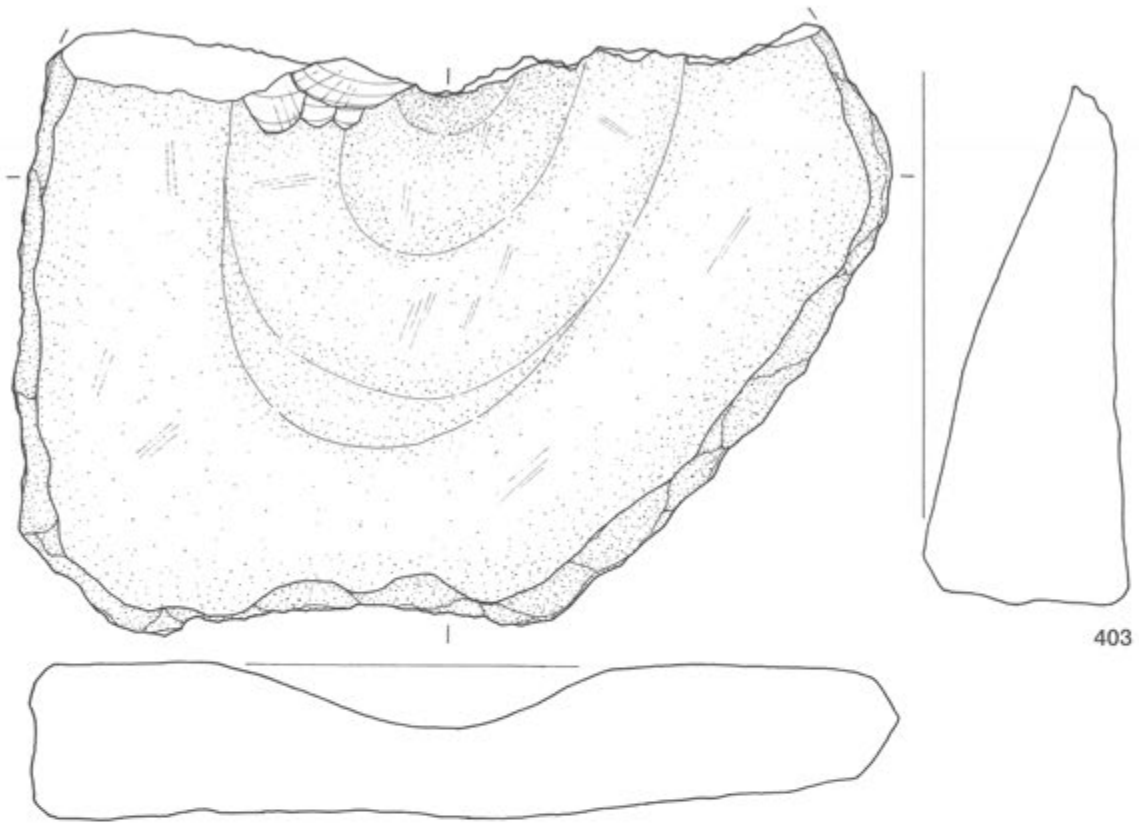


402

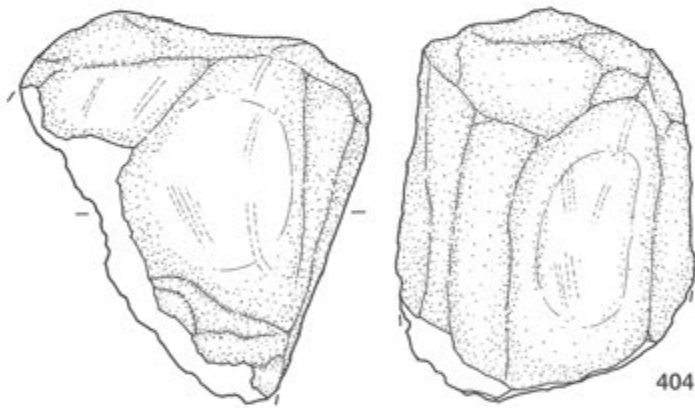


第66図 凹石・敲石・磨石

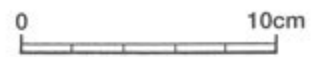
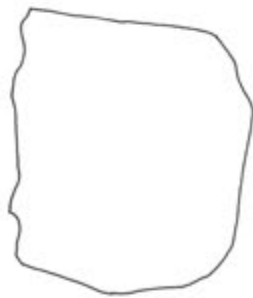




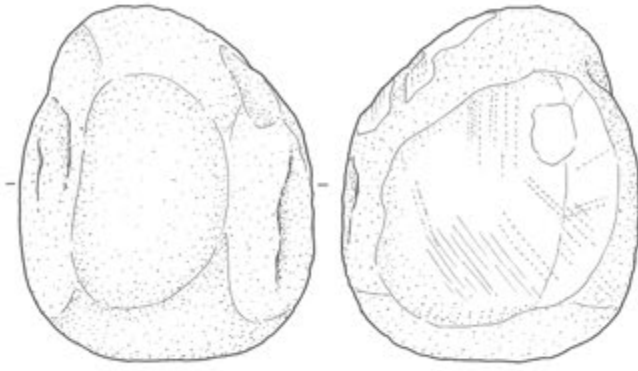
403



404



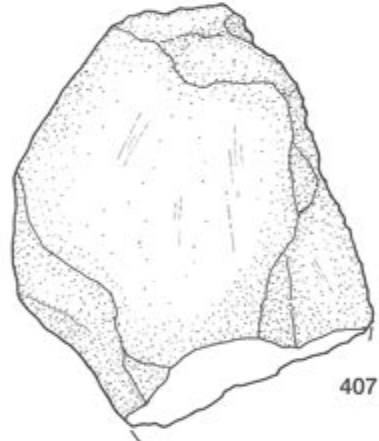
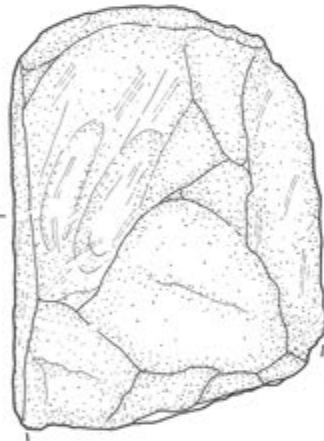
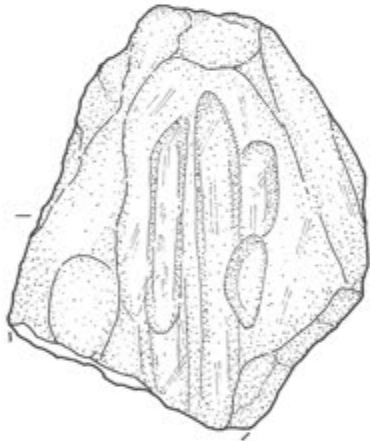
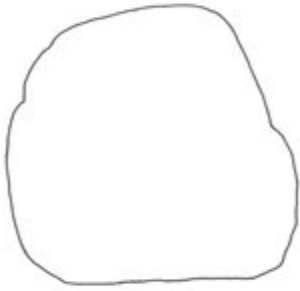
第67図 石皿



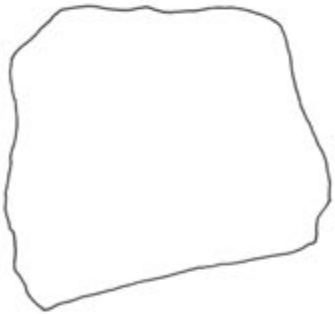
405



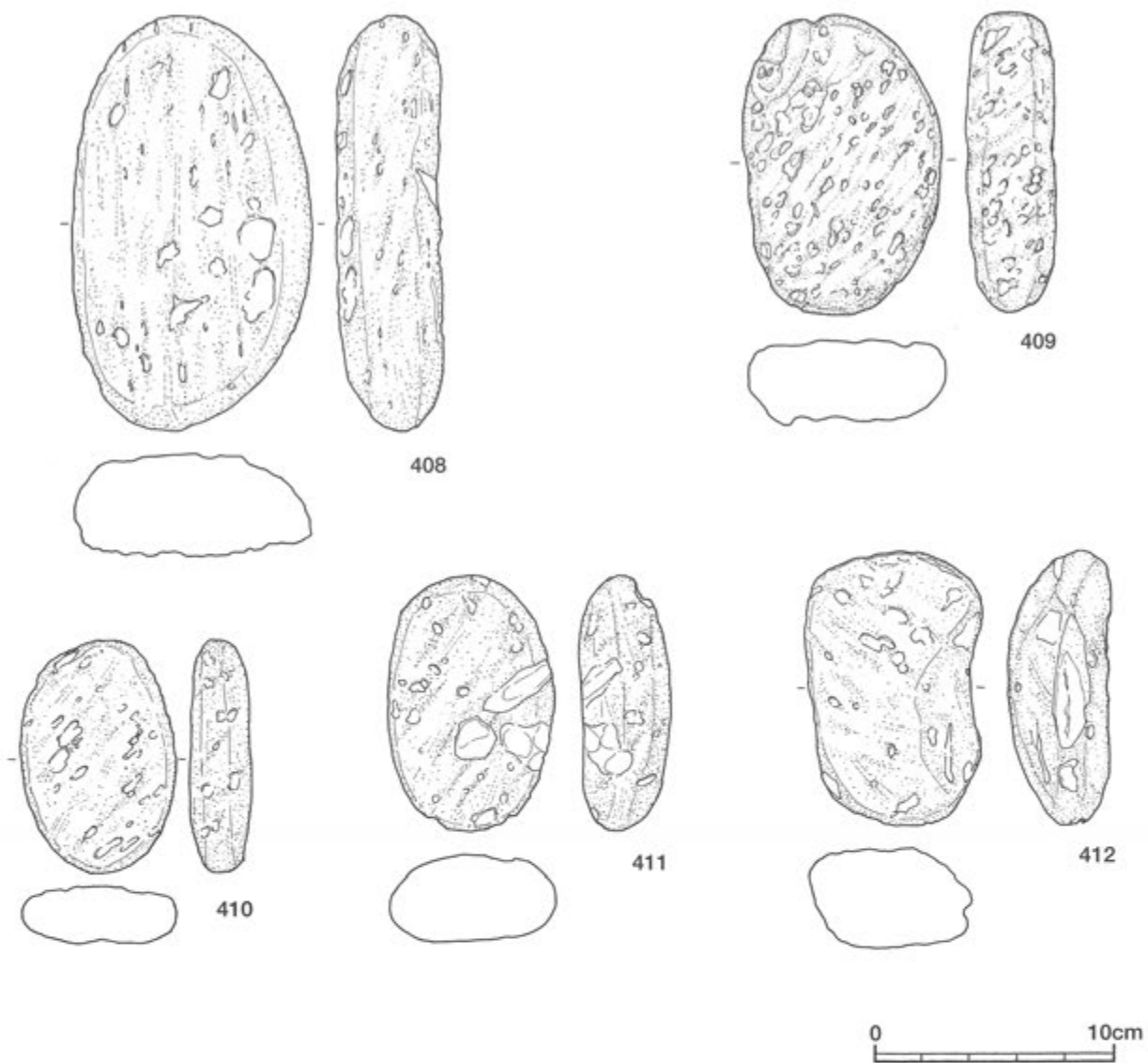
406



407



第68図 砥石



第69図 軽石製品

第11表 鷲ヶ迫遺跡縄文石器観察表 (1)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
55	257	4031	磨製石鏃	頁岩	C50	IVa	1.8	1.6	0.2	0.6	
	258	5605	磨製石鏃	頁岩	D36	IVa	1.7	1.5	0.2	0.6	
	259	2898	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IVa	1.6	1.2	0.8	1.3	
	260	12597	打製石鏃	玉髓	C7	IVa	1.5	0.9	0.6	0.8	
	261	10360	打製石鏃	玉髓	C6	IVa	1.6	1.0	0.5	0.6	
	262	15290	打製石鏃	黒曜石腰岳	D2	IVa	4.0	1.5	0.5	3.5	
	263	1725	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	—	IVa	2.3	1.1	0.4	0.6	
	264	3111	打製石鏃	黒曜石針尾	D6	IVa	1.6	1.0	0.3	0.3	
	265	3062	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IVa	1.6	1.0	0.6	0.5	
	266	1166	打製石鏃	黒曜石三船	D6	IVa	1.6	1.0	0.4	0.3	
	267	11765	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C7	IVa	1.8	1.2	0.4	0.6	
	268	8990	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C7	IVa	1.5	1.0	0.4	0.5	
	269	5668	打製石鏃	瑪瑙	D7	IVa	1.3	1.0	0.3	0.2	
	270	10135	打製石鏃	瑪瑙	C6	IVa	1.3	1.1	0.3	0.2	
	271	9260	打製石鏃	瑪瑙	C5	IVa	1.7	0.9	0.4	0.3	
	272	7950	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C1	IVa	1.4	1.2	0.2	0.3	
	273	10304	打製石鏃	黒曜石針尾	C6	IVa	1.1	1.2	0.4	0.3	
	274	12076	打製石鏃	瑪瑙	C6	IVa	1.5	1.1	0.4	0.6	
	275	1112	打製石鏃	玉髓	D3	IVa	1.3	1.2	0.4	0.5	
	276	912	打製石鏃	安山岩	D3	IVa	2.5	1.8	0.3	1.1	
	277	13003	打製石鏃	黒曜石椎葉川	C7	IVa	1.4	1.1	0.4	0.7	
	278	7139	打製石鏃	黒曜石三船	C1	IVa	1.5	1.5	0.3	0.5	
	279	7539	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	C6	IVa	1.6	0.9	0.2	0.2	
	280	338	打製石鏃	黒曜石三船	D4	IVa	2.0	1.2	0.5	0.7	
	281	10313	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C6	IVa	1.7	1.1	0.3	0.4	
	282	112	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	C6	IVa	1.6	1.0	0.3	0.3	
	283	2398	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D4	IVa	1.7	1.0	0.5	0.5	
	284	3960	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IVa	2.6	1.3	0.4	0.6	
285	6087	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	IVa	1.3	0.9	0.3	0.2		
286	299	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D4	IVa	1.0	0.9	0.3	0.2		
287	8266	打製石鏃	ハリ質安山岩	C2	IVa	2.0	1.8	0.4	0.8		
288	5750	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	IVa	1.9	1.3	0.5	1.3		
56	289	10216	打製石鏃	玉髓	C6	IV	1.3	1.0	0.2	0.2	
	290	15228	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D1	IV	1.0	1.3	0.3	0.2	
	291	8576	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	C6	IV	1.0	1.1	0.3	0.2	
	292	5198	打製石鏃	黒曜石三船	D7	IV	1.4	1.1	0.4	0.4	
	293	4966	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D7	IV	1.1	0.8	0.4	0.2	
	294	4423	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D7	IV	1.3	1.0	0.3	0.3	
	295	6328	打製石鏃	安山岩	D5	IV	1.4	1.0	0.5	0.4	
	296	12941	打製石鏃	安山岩	C7	IV	1.8	1.1	0.2	0.5	
	297	14319	打製石鏃	黒曜石三船	D1	IV	1.5	1.2	0.2	0.2	
	298	1402	打製石鏃	黒曜石針尾	D5	IV	1.3	1.0	0.4	0.3	
	299	4243	打製石鏃	鉄石英	C50	IV	1.9	1.5	0.3	0.6	
	300	6976	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	C2	IV	2.2	1.8	0.5	1.4	
	301	12087	打製石鏃	黒曜石三船	C6	IV	1.9	1.5	0.6	1.8	
	302	8647	打製石鏃	黒曜石椎葉川	C6	IV	1.4	1.1	0.2	0.4	

第12表 鷲ヶ迫遺跡縄文石器観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考	
56	303	15831	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D2	IV	1.3	1.2	0.4	0.4		
	304	15812	打製石鏃	黒曜石針尾	D2	IV	1.7	1.4	0.5	0.7		
	305	15175	打製石鏃	黒曜石三船	D1	IV	1.2	1.1	0.2	0.2		
	306	15255	打製石鏃	黒曜石椎葉川	D1	IV	0.9	1.1	0.2	0.2		
	307	5953	打製石鏃	玉髓	D7	IV	1.8	1.7	0.7	1.8		
	308	2971	打製石鏃	瑪瑙	D7	IV	1.8	1.2	0.3	0.7		
	309	479	打製石鏃	瑪瑙	D6	IV	1.3	1.3	0.4	0.5		
	310	2016	打製石鏃	玉髓	D7	IV	2.4	2.3	0.7	3.4		
	311	8064	打製石鏃	黒曜石腰岳	C1	IV	2.1	1.5	0.4	1.2		
	312	12098	打製石鏃	黒曜石上半鼻	2トレンチ	IV	1.8	1.6	0.3	0.7		
	313	470	打製石鏃	安山岩	D6	IV	1.7	1.4	0.3	0.5		
	314	3940	打製石鏃	安山岩	C45	IV	2.5	1.7	0.4	1.2		
	315	7144	打製石鏃	黒曜石椎川葉	C1	IV	1.9	1.6	0.2	0.5		
	316	11294	打製石鏃	黒曜石三船	C6	IV	1.7	1.4	0.4	0.7		
	317	12189	打製石鏃	黒曜石三船	C6	IV	2.2	1.4	0.5	1.6		
	318	3268	打製石鏃	安山岩	C51	IV	3.5	1.2	0.5	1.9		
	57	319	1074	打製石鏃	チャート	D3	III b	1.7	1.0	0.4	0.6	
		320	10070	打製石鏃	安山岩	B31	III b	1.1	1.5	0.4	1.1	
321		3640	打製石鏃	安山岩	C46	III b	2.5	1.4	0.3	0.6		
322		1073	打製石鏃	安山岩	D3	III b	1.5	1.2	0.3	0.5		
323		3769	打製石鏃	黒曜石腰岳	D7	III b	1.9	1.1	0.4	0.6		
324		4874	打製石鏃	黒曜石腰三船	D37	III b	1.1	0.9	0.3	0.2		
325		3154	打製石鏃	黒色頁岩	C2	III b	1.9	1.1	0.5	0.7		
326		3647	打製石鏃	黒曜石三船	C1	III b	1.3	1.0	0.3	0.2		
327		3770	打製石鏃	玉髓	D7	III b	1.7	1.5	0.7	1.8		
328		8854	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D30	III b	2.1	1.4	0.4	0.7		
329		3730	打製石鏃	黒曜石針尾	D7	III b	1.8	1.2	0.5	0.8		
330		6895	打製石鏃	安山岩	D29	III b	1.9	1.3	0.3	0.5		
331		9243	打製石鏃	黒曜石三船	D31	III b	1.3	1.6	0.3	0.6		
332		—	打製石鏃	安山岩	—	III b	2.7	1.6	0.4	1.5		
333		1443	磨製石鏃	頁岩	C2	III b	2.5	2.8	0.4	2.9		
58	334	—	石槍	黒色安山岩	5トレンチ	—	4.8	2.1	0.8	12.0	表採	
	335	3777	石匙	玉髓	C3	IV	2.8	4.3	0.9	7.5		
	336	6171	石匙	玉髓	C3	IV	3.6	4.2	1.1	11.3		
	337	10976	石匙	チャート	C2	IV	2.5	3.6	0.6	3.9		
	338	2070	石匙	玉髓	D7	IV	4.7	2.0	1.1	7.0		
	339	10869	石匙	黒色安山岩	C2	IV	4.3	3.2	0.7	10.7		
	340	15907	石匙	黒色安山岩	D2	IV	4.0	3.6	0.5	5.5		
59	341	2216	スクレイパー	黒曜石椎葉川	D5	IV a	1.3	1.8	0.7	1.1		
	342	5365	スクレイパー	玉髓	D7	IV a	1.8	1.4	0.6	1.9		
	343	4096	スクレイパー	玉髓	C6	IV a	2.3	1.8	0.4	1.8		
	344	15072	スクレイパー	黒曜石上半鼻	C7	IV	1.6	1.4	0.5	0.9		
	345	9448	スクレイパー	黒曜石三船	C5	IV	1.4	1.7	0.7	1.3		
	346	10618	スクレイパー	黒曜石三船	C7	IV	2.1	2.5	0.7	4.1		
	347	13539	スクレイパー	黒曜石三船	B6	IV	3.2	3.2	1.4	12.3		
	348	13307	スクレイパー	黒曜石三船	C6	IV	1.7	1.7	0.6	1.5		

第13表 鷺ヶ迫遺跡縄文石器観察表 (3)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
59	349	4011	スクレイパー	黒曜石三船	C6	IV	2.2	2.8	0.9	4.8	
	350	9899	スクレイパー	チャート	C2	IV	3.3	3.3	0.6	5.6	
	351	3614	スクレイパー	玉髄	C2	IV	4.0	4.0	1.3	13.9	
	352	4739	スクレイパー	玉髄	C5	IV	1.4	2.7	0.6	1.8	
	353	7230	スクレイパー	安山岩	C5	IV	4.7	2.7	0.6	6.7	
	354	13781	スクレイパー	黒色頁岩	C6	IV	12.6	7.0	1.1	95.0	
60	355	3144	スクレイパー	黒曜石三船	C2	III b	2.7	2.2	1.0	4.8	
	356	3606	スクレイパー	黒曜石三船	D5	III b	2.0	2.9	0.7	3.5	
	357	3421	スクレイパー	黒曜石三船	C3	III b	2.6	2.1	0.8	4.2	
	358	3699	スクレイパー	黒曜石三船	D5	III b	2.1	2.1	0.9	3.8	
	359	3607	スクレイパー	頁岩	D5	III b	2.4	3.9	0.6	4.9	
	360	8375	スクレイパー	ハリ質安山岩	E29	III b	1.6	2.6	0.5	3.1	
61	361	2031	二次加工剥片	玉髄	D7	IV b	2.5	1.4	1.7	2.6	
	362	1745	二次加工剥片	玉髄	D4	IV a	3.0	1.5	0.8	3.2	
	363	1018	二次加工剥片	玉髄	D3	IV a	2.3	1.2	0.6	1.2	
	364	12541	二次加工剥片	黒曜石腰岳	C7	IV	2.0	1.7	0.6	1.8	
	365	8958	二次加工剥片	黒曜石三船	C7	IV	1.5	1.3	0.5	0.9	
	366	9849	二次加工剥片	黒曜石椎葉川	C2	IV	2.2	2.1	0.5	1.6	
	367	12626	二次加工剥片	玉髄	C5	IV	2.4	3.6	0.6	7.7	
	368	4222	二次加工剥片	黒曜石三船	D7	III b	2.1	1.7	0.8	2.9	
	369	4803	微細剥離痕剥片	黒曜石三船	C6	IV	4.0	2.6	1.3	9.0	
	370	3609	微細剥離痕剥片	黒曜石桑ノ木津留	C2	IV	3.0	1.2	0.5	1.8	
	371	10395	微細剥離痕剥片	黒曜石三船	C6	IV	2.6	1.7	0.6	1.7	
	372	14102	微細剥離痕剥片	黒曜石三船	C7	IV	2.5	2.0	1.4	4.8	
	62	373	2677	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	2トレンチ	IV b	2.4	2.0	0.5	1.9
374		2389	楔形石器	黒曜石三船	D4	IV a	2.0	1.4	0.7	2.2	
375		9507	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	C6	IV	2.0	1.5	0.7	2.2	
376		8695	楔形石器	黒曜石桑ノ木津留	C6	IV	1.5	1.1	0.5	0.8	
377		13221	楔形石器	黒曜石三船	C6	IV	2.5	2.1	1.0	3.9	
378		8204	楔形石器	黒曜石三船	D5	III b	3.3	2.4	1.2	9.2	
379		6066	楔形石器	黒曜石三船	C36	III b	2.3	1.4	1.2	4.0	
380		5039	石錐	玉髄	D7	IV a	2.5	2.2	0.9	4.9	
381		9626	石錐	黒曜石腰岳	B6	IV	2.7	0.9	0.9	1.4	
382		15361	石錐	玉髄	C7	IV	2.0	0.9	0.7	1.2	
383		13814	石錐	玉髄	C3	IV	2.5	1.3	0.7	2.7	
384		13913	石錐	玉髄	C7	IV	2.7	1.6	0.8	3.0	
385		12574	石錐	玉髄	D5	III b	1.3	0.8	0.2	0.3	
386	3373	石錐	黒曜石桑ノ木津留	D7	III b	2.3	1.7	1.0	3.0		
63	387	5716	石核	黒曜石三船	D38	III b	3.7	2.7	2.4	23.6	
	388	2307	石核	黒曜石三船	D5	IV a	2.8	3.3	1.4	11.6	
	389	5776	石核	黒曜石三船	D7	IV a	1.6	1.7	1.5	5.1	
	390	3789	残核	黒曜石三船	D7	III b	2.1	2.3	2.7	13.3	
64	391	7505	磨製石斧	頁岩	B5	IV	7.4	4.8	1.9	104.9	
	392	14551	局部磨製石斧	頁岩	C6	IV	14.3	5.0	1.6	116.4	
	393	14841	磨製石斧	頁岩	B6	IV	4.5	3.5	0.9	20.4	
	394	7915	磨製石斧	頁岩	C1	IV	8.5	3.9	0.9	32.4	

第14表 鷺ヶ迫遺跡縄文石器観察表 (4)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
65	395	2494	打製石斧	頁岩	C18	IV a	13.8	9.6	2.0	283.3	
	396	4561	打製石斧	頁岩	D37	III b	10.8	6.7	1.3	120.0	
66	397	1238	凹石	凝灰岩	B14	IV	10.5	7.2	2.2	145.3	
	398	1500	敲石	花崗岩	D19	IV a	11.2	9.9	6.3	940.0	
	399	1892	敲石	花崗岩	B19	IV	12.4	11.3	7.8	1480	
	400	11019	磨石	花崗岩	C6	IV	6.2	3.9	2.5	78.3	
	401	13464	磨石	花崗岩	B6	IV	15.2	13.2	10.2	2660	
	402	621	磨石	花崗岩	D7	IV a	10.2	10.8	5.2	845.0	
67	403	6913	石皿	花崗岩	C2	IV	24.2	35.0	8.1	9200	
	404	2346	石皿	花崗岩	—	IV a	15.4	13.3	11.6	2540	
68	405	6777	砥石	花崗岩	E33	IV a	13.9	12.6	11.3	2660	
	406	4418	砥石	砂岩	C7	IV	10.2	4.6	2.3	93.2	
	407	14399	砥石	花崗岩	C7	IV	16.2	14.0	12.5	3360	
69	408	4605	軽石製品	—	B12	IV b	17.7	10.0	4.1	1881	
	409	1984	軽石製品	—	C20	IV a	12.6	8.4	3.7	154.8	
	410	1595	軽石製品	—	C23	IV a	9.9	6.4	2.5	48.7	
	411	3333	軽石製品	—	C20	IV a	10.9	7.0	3.7	83.6	
	412	5912	軽石製品	—	D18	IV a	11.7	7.3	4.1	145.2	

## 第4節 古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物はⅢ a層で検出された。遺構はD-4・5区，C・D-27区，C-50・51区で竪穴住居跡が6軒検出され，その他，土坑14基，古道4条，溝状遺構15条が検出された。

遺物は成川式土器（甕形土器・壺形土器・高坏・埴形土器），手捏土器と石器（凹石・敲石・磨石・石皿・台石・軽石製品）が出土した。

### ① 1号住居跡

1号住居跡は，D-4・5区，Ⅲ a層で検出された。昭和時代の圃場整備により西側半分が削平されていた。外径の長さ3.8m，内径は3.5mを測る方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30cmを測る。主軸方向はN-10°-Eである。内部に柱穴・硬化面が検出したが，主柱穴は不明だった。

出土遺物は甕形土器・壺形土器・高坏・埴形土器・手捏土器が出土した。

### 2号～4号住居跡

D-5区，Ⅲ a層で検出された住居群で，3軒の住居跡が切り合っていることから検出順に2～4号住居跡と名称した。いずれも方形プランを基準にした間仕切りされた施設（ベッド状施設）があることから花卉状住居と想定される。

### ② 2号住居跡

2号住居跡は，D-5区，Ⅲ a層で検出された重複している竪穴住居跡である。柱穴が1個検出され，その周辺に硬化面がみられたが内部施設は不明である。また，4号住居跡との切り合い関係も判明しなかった。西側側壁が間仕切りされていることから，これも花卉状住居と想定される。

出土遺物は，甕形土器，壺形土器が出土したが細片であった。

### ③ 3号住居跡

3号住居跡は，D-5区，Ⅲ a層で検出された重複している竪穴住居跡である。長軸4.5m，短軸4.3mの方形の竪穴住居跡で，長軸方向の南側ライン上に90cm×75cmの間仕切り部をもつものである。遺構検出面からの深さは25～30cmを測る。主軸方向はN-57°-Eである。内部には約30cmの深さを測る柱穴が5個検出され，中央部には硬化面がみられる。

この住居跡から出土した炭化物の年代測定を行ったところ，別項の科学分析でも記載しているが，C<sup>14</sup>年代はそれぞれ1740±50yrBP，1720±30yrBP，1690±30yrBP，1660±30yrBPであり，古墳時代中期に該当する。

出土遺物は，土器が甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏・埴形土器・手捏土器，石器は敲石が出土した。

### ④ 4号住居跡

4号住居跡は，D-5区，Ⅲ a層で検出された重複している竪穴住居跡である。柱穴が1個検出



されたが、内部施設は不明である。また、2号住居跡との切り合い関係は判明しなかった。遺構の大半が調査区域外に想定されるため、プランは不明である。

#### ⑤ 5号住居跡

5号住居跡は、C・D-27区、Ⅲa層で検出されたものである。西側が後世の削平により残されていない。長軸は4.3mを測る方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約60cmを測る。主軸方向はN-15°-Eである。西側壁面近くに焼土が検出され、中央部には炭化物が出土した。柱穴等の内部施設はみられなかった。この住居跡から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、別項の科学分析でも記載しているが、C<sup>14</sup>年代は1530±30yrBPである。

出土遺物は、西側壁面近くに一括して出土した。出土遺物は、甕形土器・壺形土器・高坏・椀形土器である。

#### ⑥ 6号住居跡

6号住居跡は、C-50・51区、Ⅲa層で検出された。外径3.0m×3.0m、内径2.8m×2.8mを測る方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは5cmを測り、掘り込み等は削平されていた。主軸方向はN-12°-Eである。柱穴等の内部施設はみられなかったが、部分的に硬化面が検出された。

出土遺物は、甕形土器・壺形土器が出土した。

#### 土坑（第89・90図）

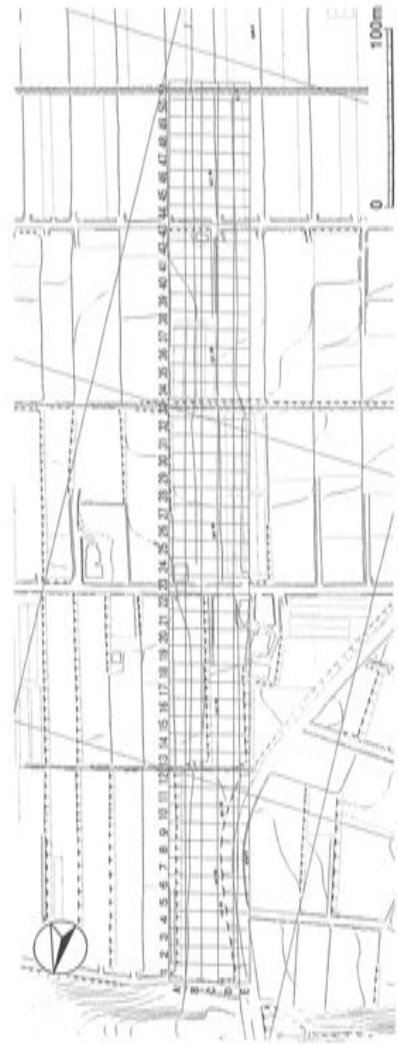
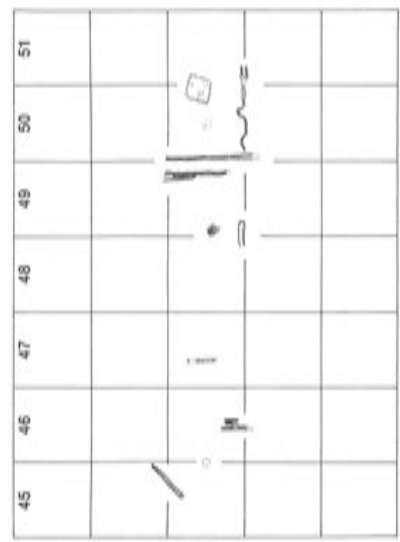
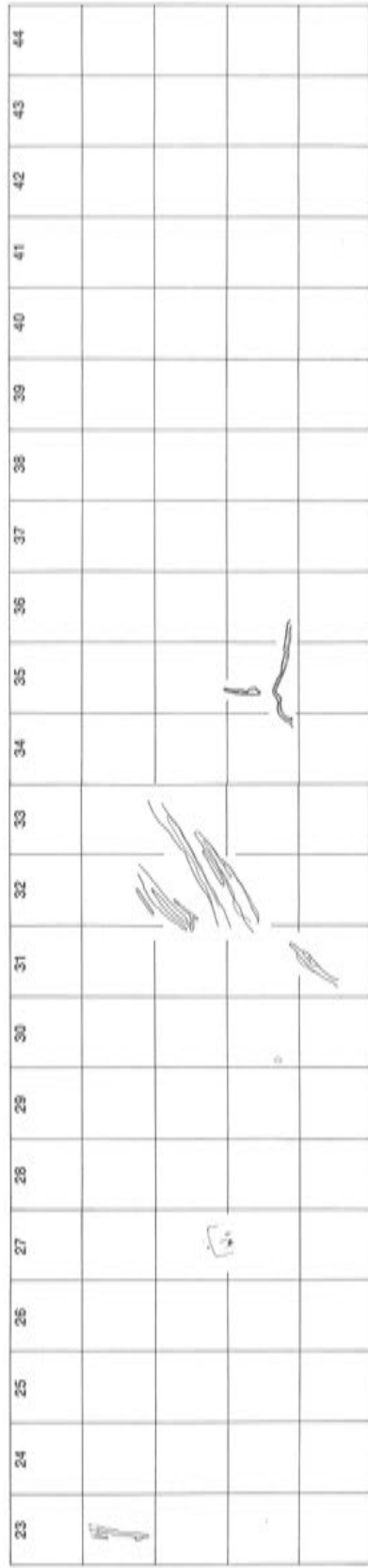
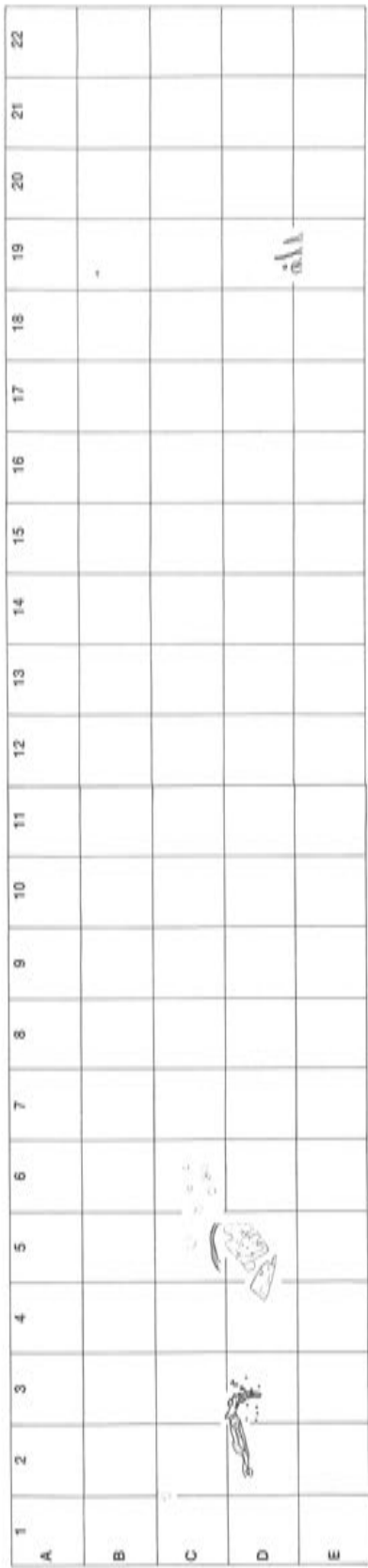
土坑は遺跡全体で散発的に調査区域内で14基が検出した。ほぼ同タイプの土坑で直径0.6～1.5m前後の楕円形プラン・方形プランで、遺構検出面からの深さは約20～120cmを測る。性格等は不明である。

#### 古道（第86図）

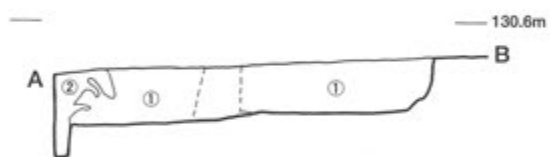
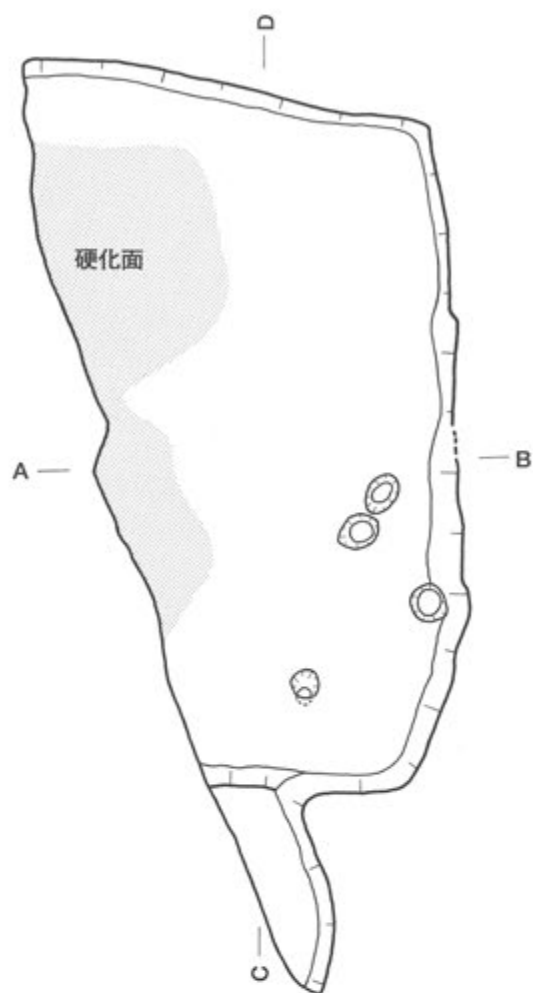
B～E-31～33区、Ⅲa層上面で硬化面のある道跡を4条検出した。検出された幅は50～70cmで、硬化面の硬さ・締まり具合の程度は部分により異なっている。古道の主軸方向はN-55°-Eで、4条ともほぼ同方向である。総延長は最大で約20mである。

#### 溝状遺構（第87・88図）

D-2・3区、C・D-5区、D・E-19区、B-23区、C・D-35区、B・C-45区、C・D-46・47区のⅢa層上面で溝状遺構15条が検出された。主軸方向は、南北方向と東西方向に向かっているものに分かれた。検出された溝状遺構の幅は40～50cmで、深さは30～60cmを測るものである。



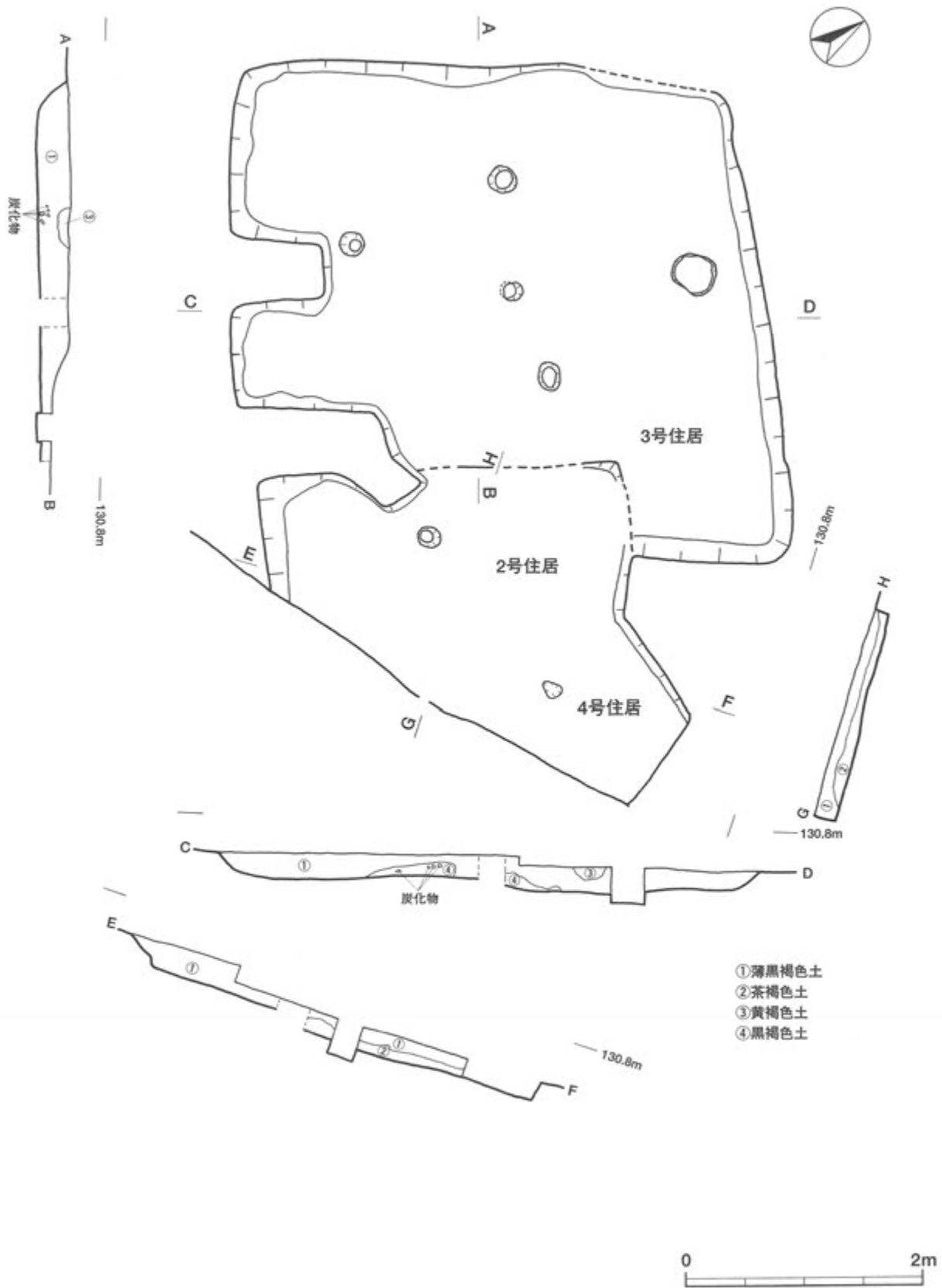
第70圖 古墳時代遺構配置圖



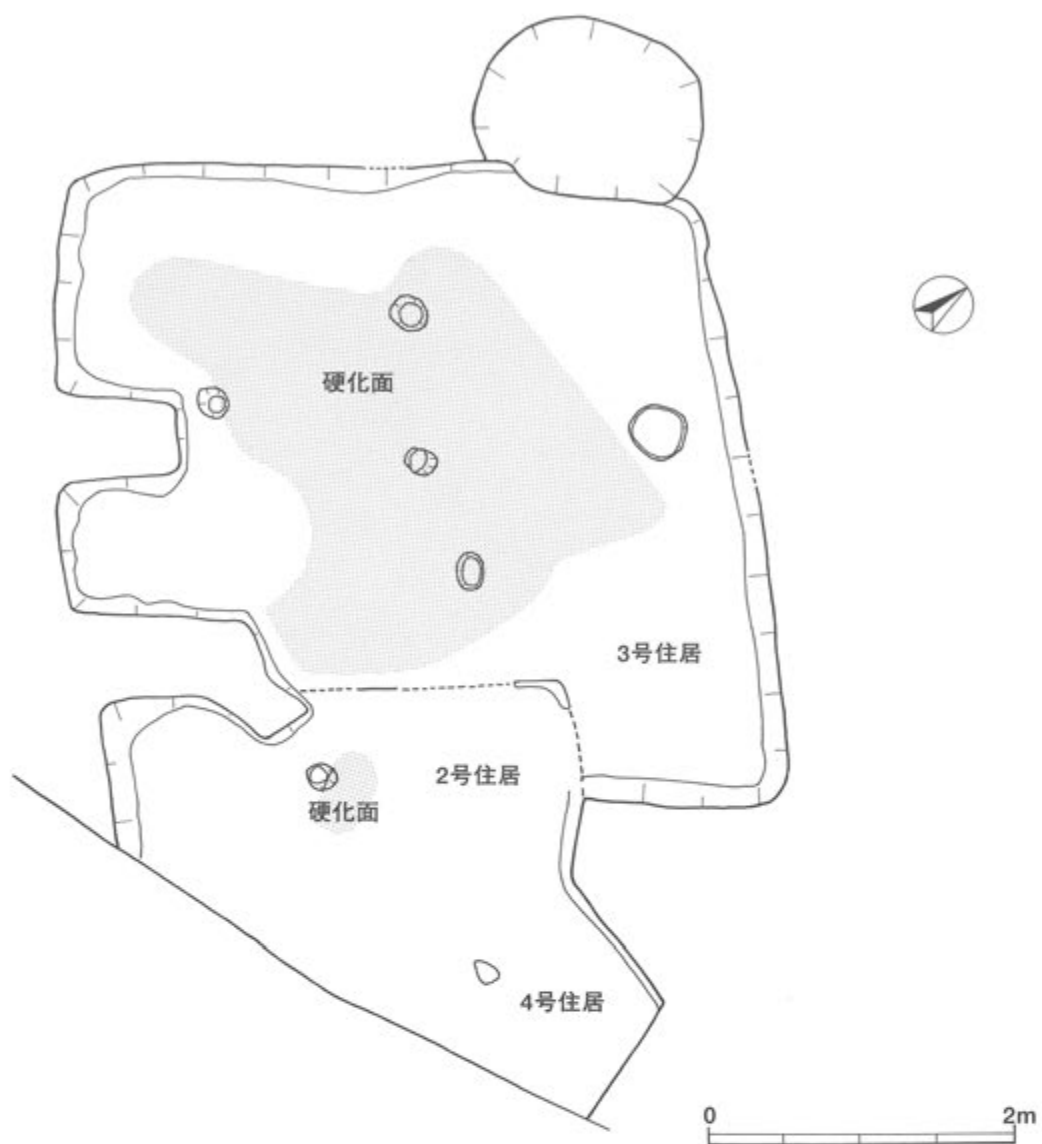
- ① 黑褐色土
- ② 黑色土



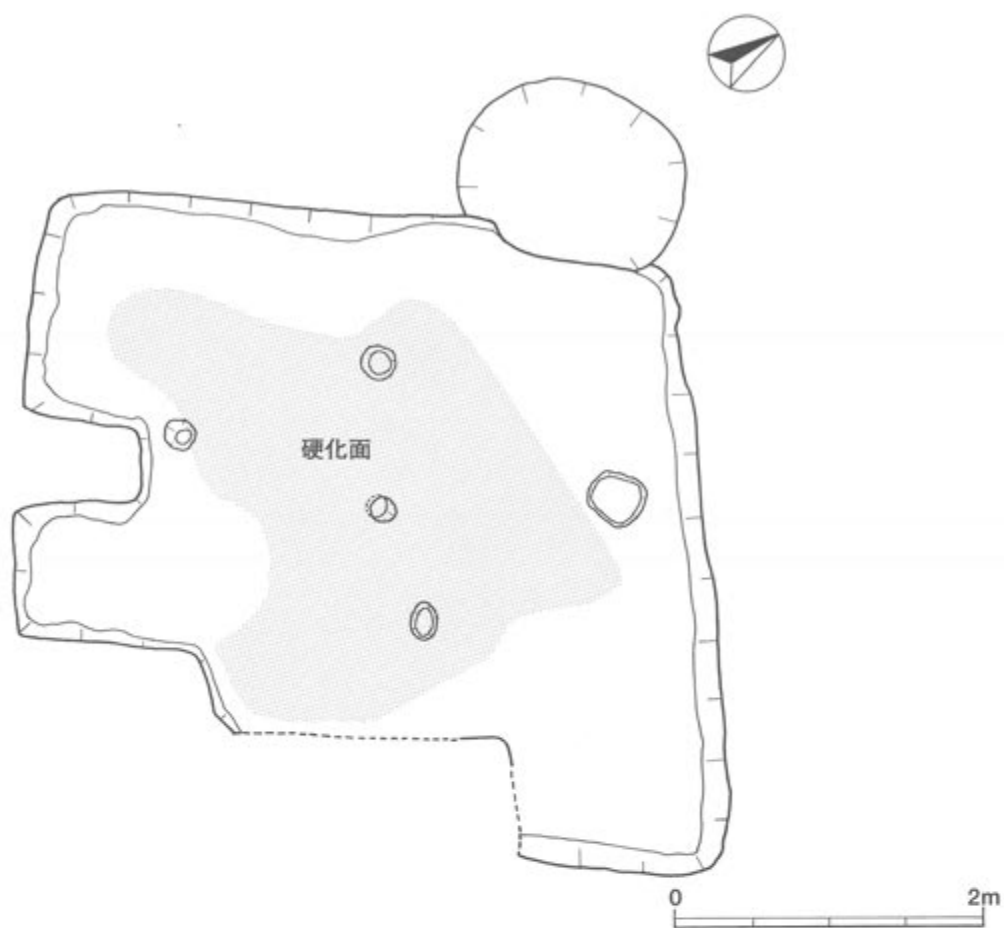
第71図 1号住居跡



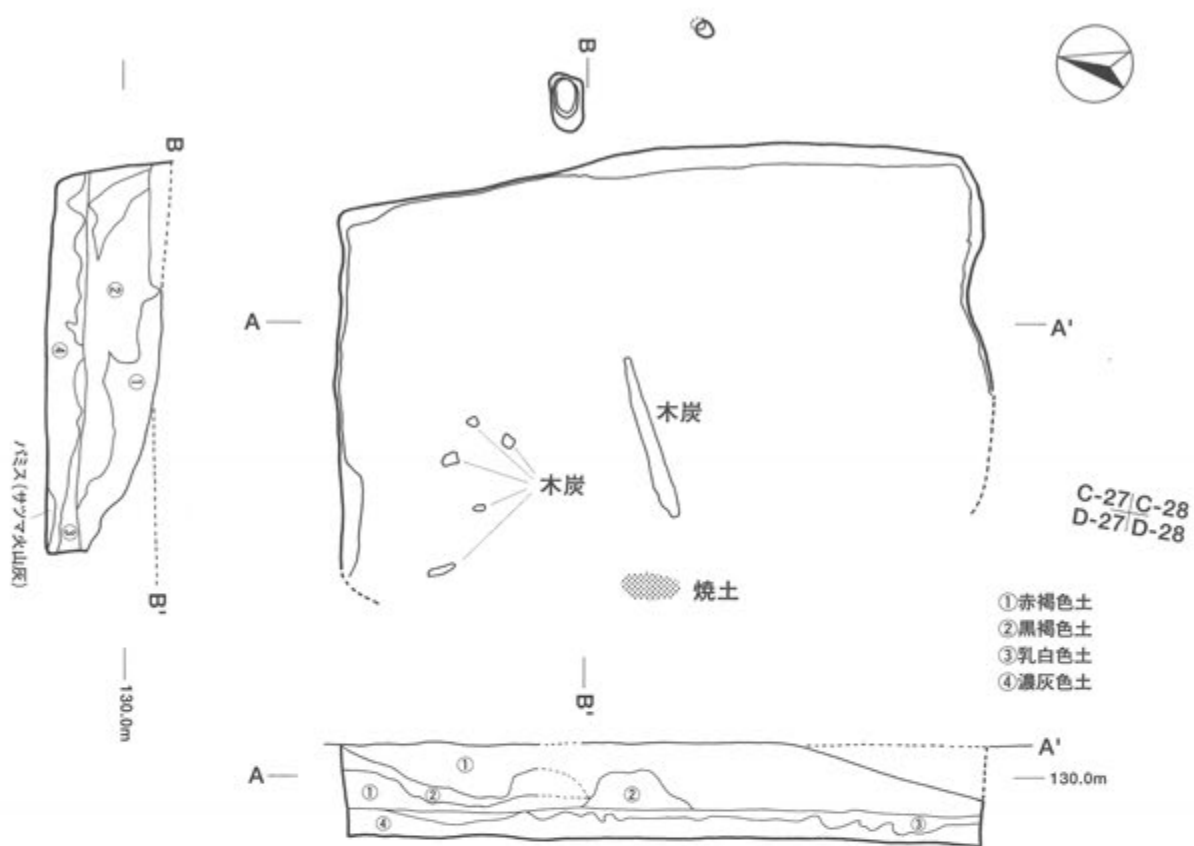
第72图 2~4号住居跡



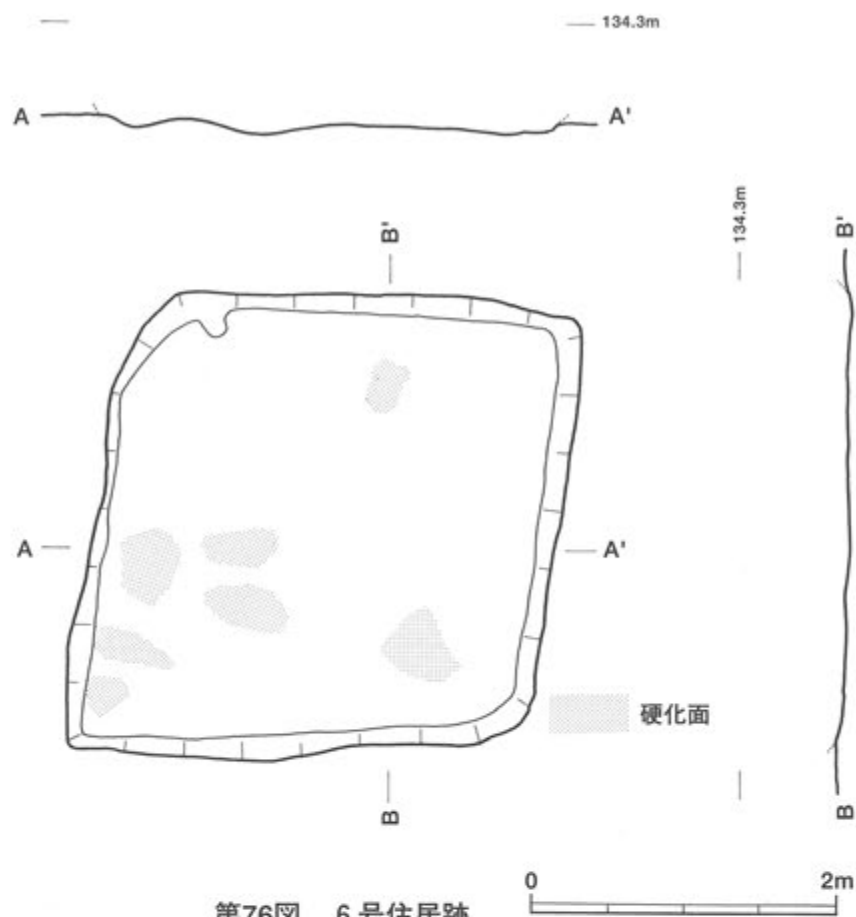
第73図 2～4号住居跡



第74図 3号住居跡



第75図 5号住居跡



第76図 6号住居跡



## 遺構出土の土器

### 1号住居跡

413・414は甕形土器の外反する口縁部で、内外面ともナデ調整を施している。415・416は甕形土器の底部で中空のあげ底底部である。417は高坏の口縁部で外開きになるものである。418は小型丸底の埴形土器である。内面はナデ調整し、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

### 2号住居跡

420は2号住居跡から出土した中空のあげ底底部である。

### 3号住居跡

421～469は3号住居跡から出土した土器である。

421～444は甕形土器である。

421～423は「く」の字状に外反する口縁で、胴部はそれほど張らずになだらかに底部へつながるものである。復元口径は21.0cm, 26.0cm, 16.8cm, 器高は27.6cm, 24.0cm, 14.4cm, 脚台径は9.6cm, 10.2cm, 6.9cmを測る。器面調整はナデ整形である。424は「く」の字状に外反する口縁で、口径は21.6cmを測り、胴部はやや膨らむものである。ナデ整形で器面調整がなされている。426・429・433～437は口縁下部に絡縄突帯の貼り付けを廻らしたものである。426・429は刻目を付する。430は口径26.7cmを測る口縁部で、外開きに直口するものである。431はやや内向気味に直口する口縁で、口径は29.2cmを測る。432はやや内弯する口縁部で、ナデ整形で器面調整がなされている。434～437は外弯する口縁部をもつもので、口縁下部に絡縄突帯を施すものである。復元口径は36.0cm, 35.2cm, 33.2cm, 29.8cmを測る。438～444は甕形土器の底部で、何れも中空のあげ底底部である。

445～448は鉢形土器である。

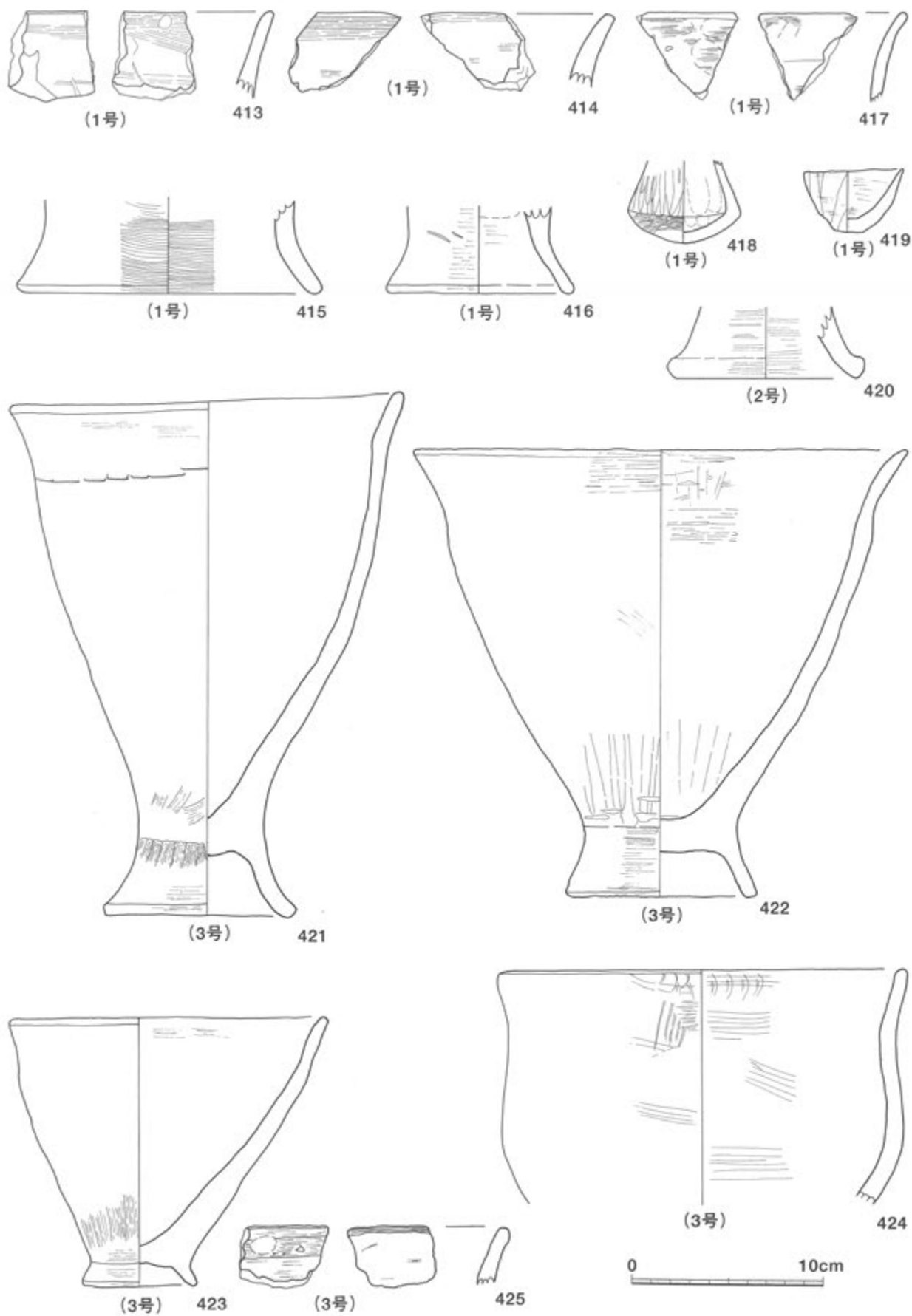
445は胴部の張った器形で立ち上がりは直交し、口縁部は緩やかに外反している。口径24.4cmを測る。446～448は鉢形土器の底部で低い脚台が付く。脚台径はそれぞれ9.0cm, 7.8cm, 8.4cmを測る。内外面ともナデ整形を施している。

449～454は壺形土器である。

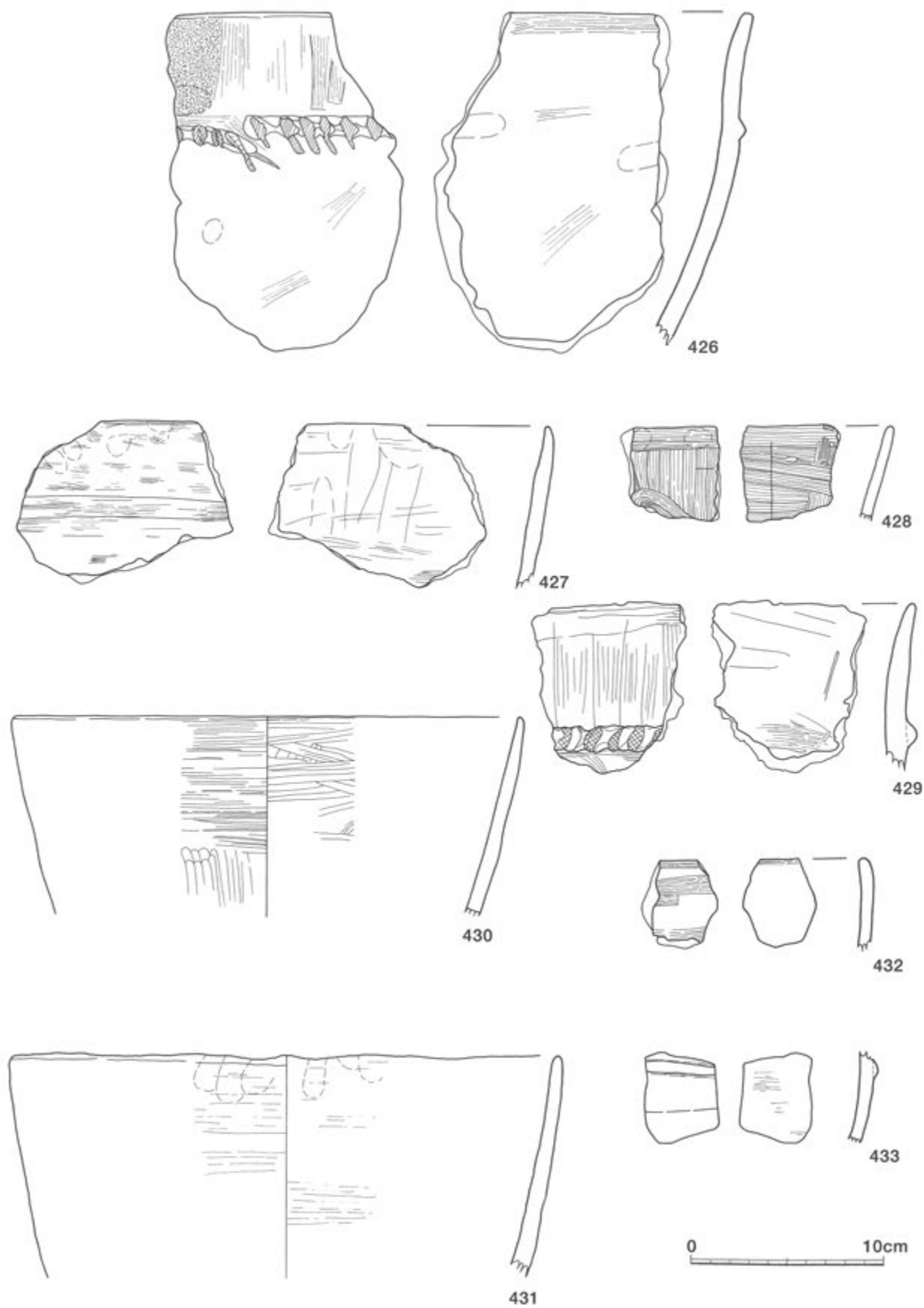
449は丸底の完形壺形土器である。口径は12.0cm, 器高15.8cm, 胴部径13.8cmを測る。内面はナデ整形, 外面はハケ目調整を施している。450・451は口径が12.6cm, 10.5cmを測る, 頸部が「く」の字状に折れ口縁部が外反するものである。452は丸底底部で, 453は平坦面をもつ丸底である。454は緩やかな尖底をもつ壺形土器の底部である。

455～459は高坏である。455は完形品で, 口径23.7cm, 器高24.0cm, 脚部径15.6cmを測る。口縁部が体部から大きく外折反転し, 外開きになるものである。脚部は, 底部から筒部をもたず, すぐ裾部になる形状を呈している。456は, 坏部は455と類似している。口径は19.2cmを測り, 脚部は筒部が短く, 裾部が緩やかに外反するものである。457も同類であるが, 外面に屈曲部がみられる。

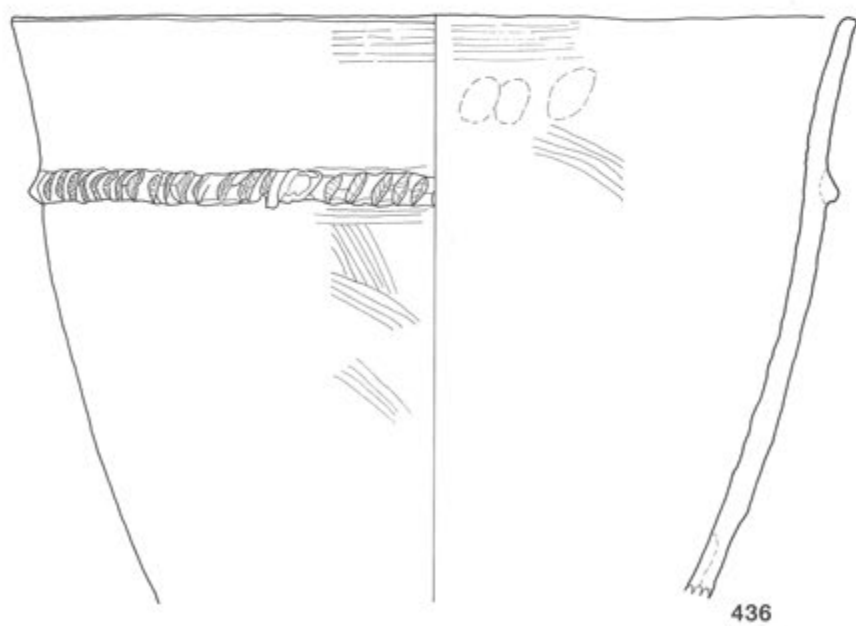
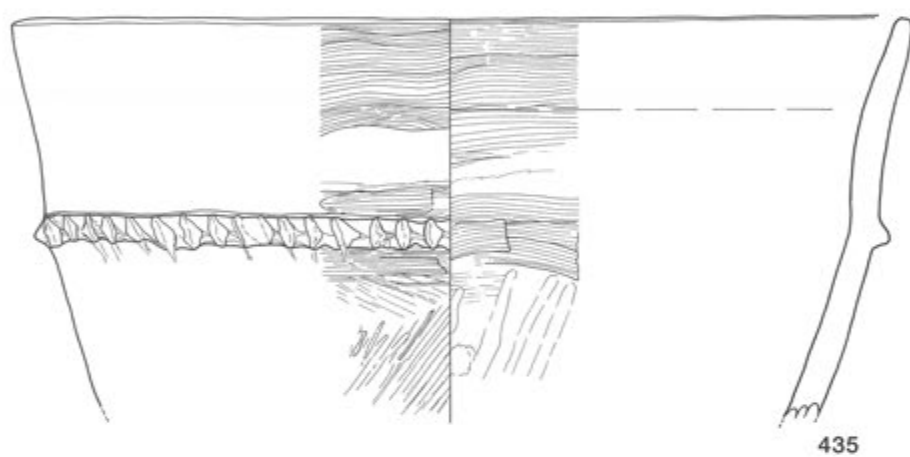
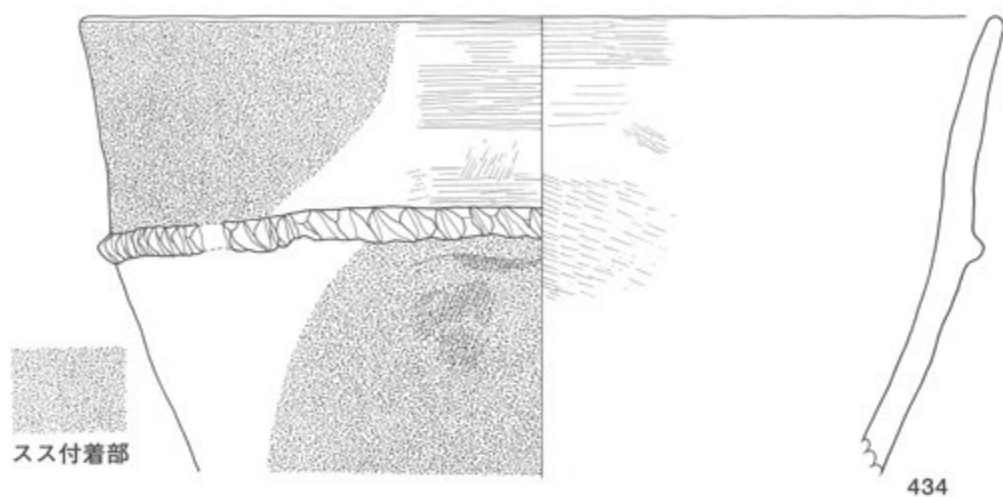
458・459は底部から筒部をもたず, すぐ裾部になる形状で裾部が屈曲するものである。



第77图 1·2·3号住居跡出土遺物

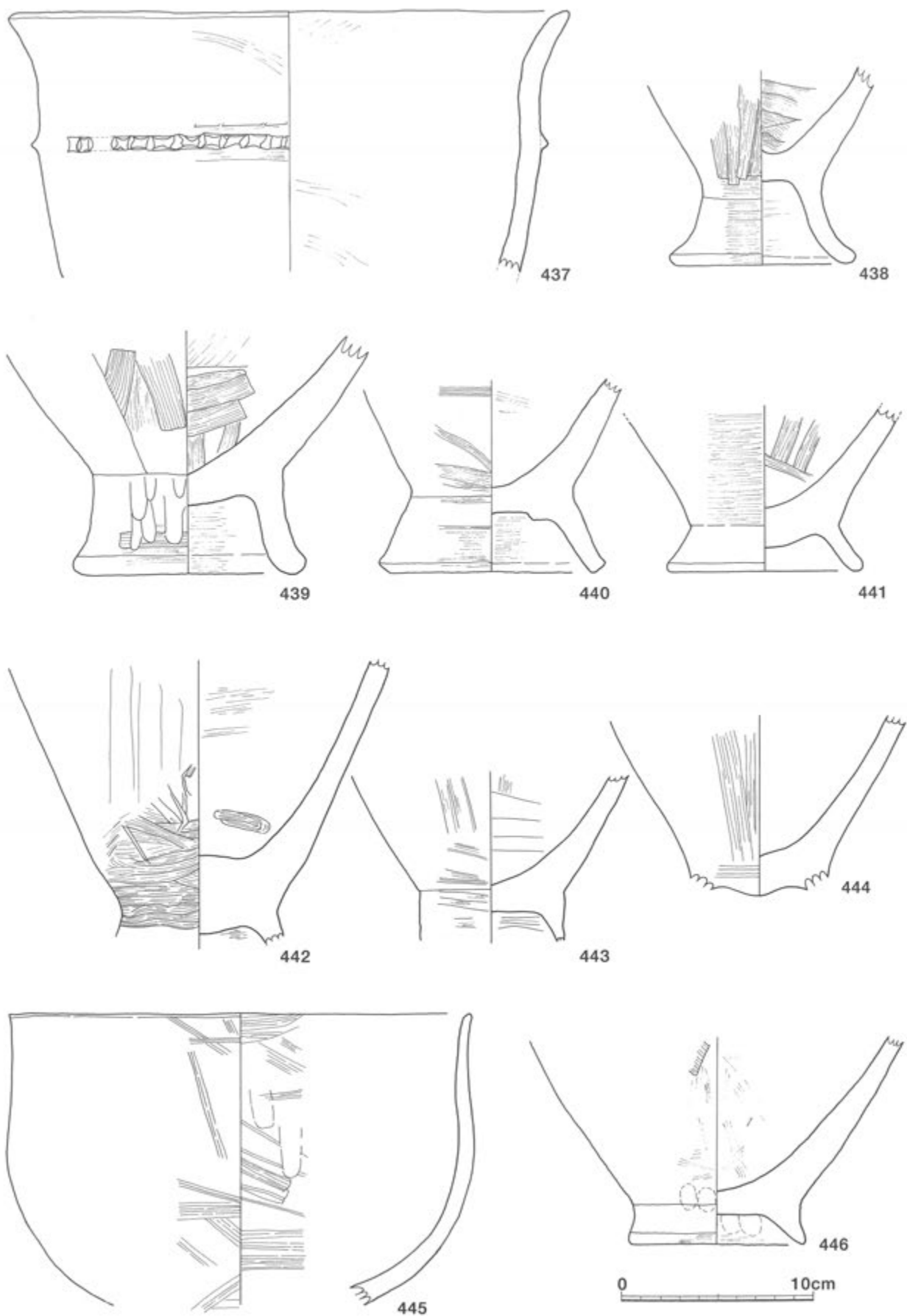


第78图 3号住居跡出土遺物(2)

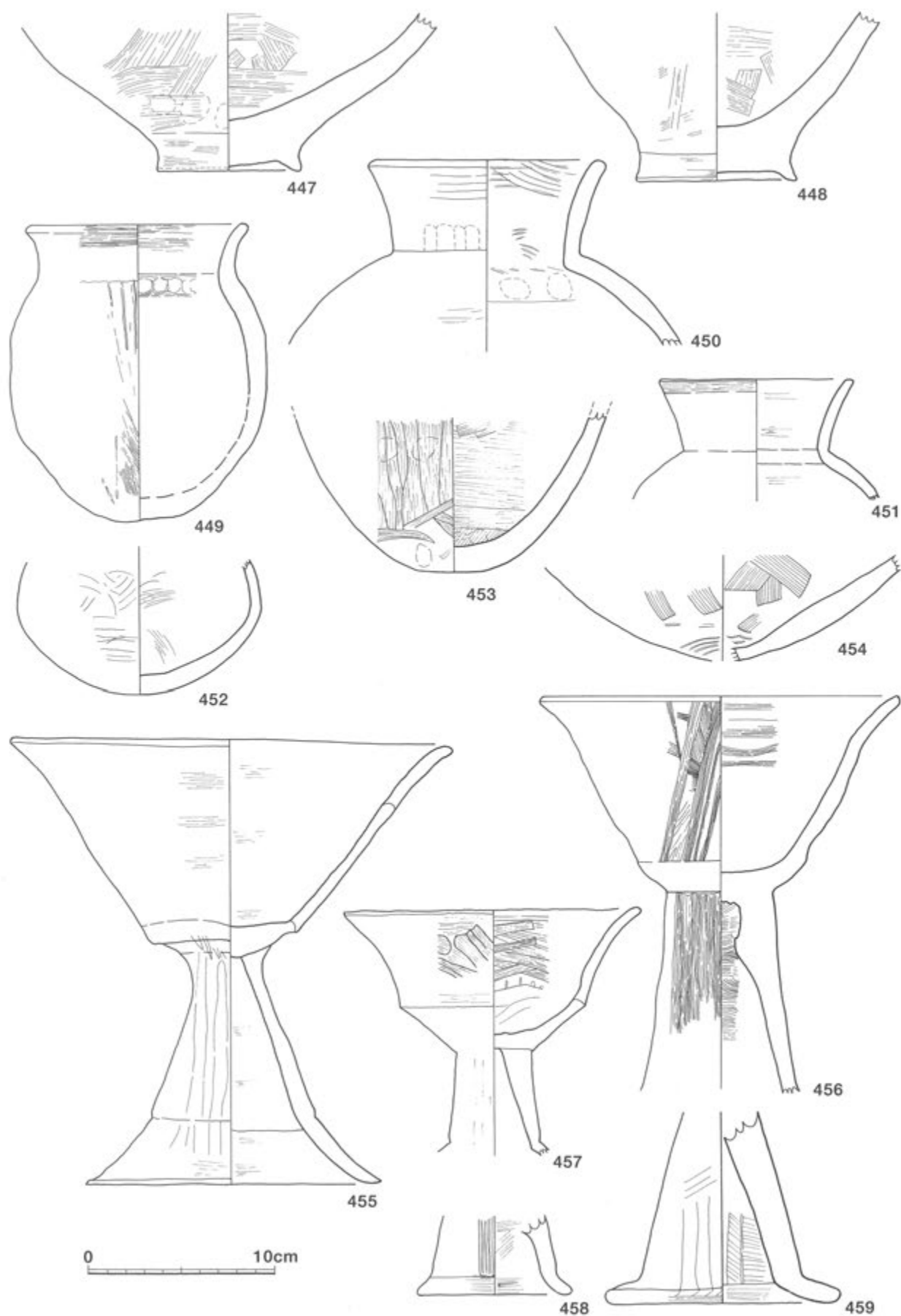


0 10cm

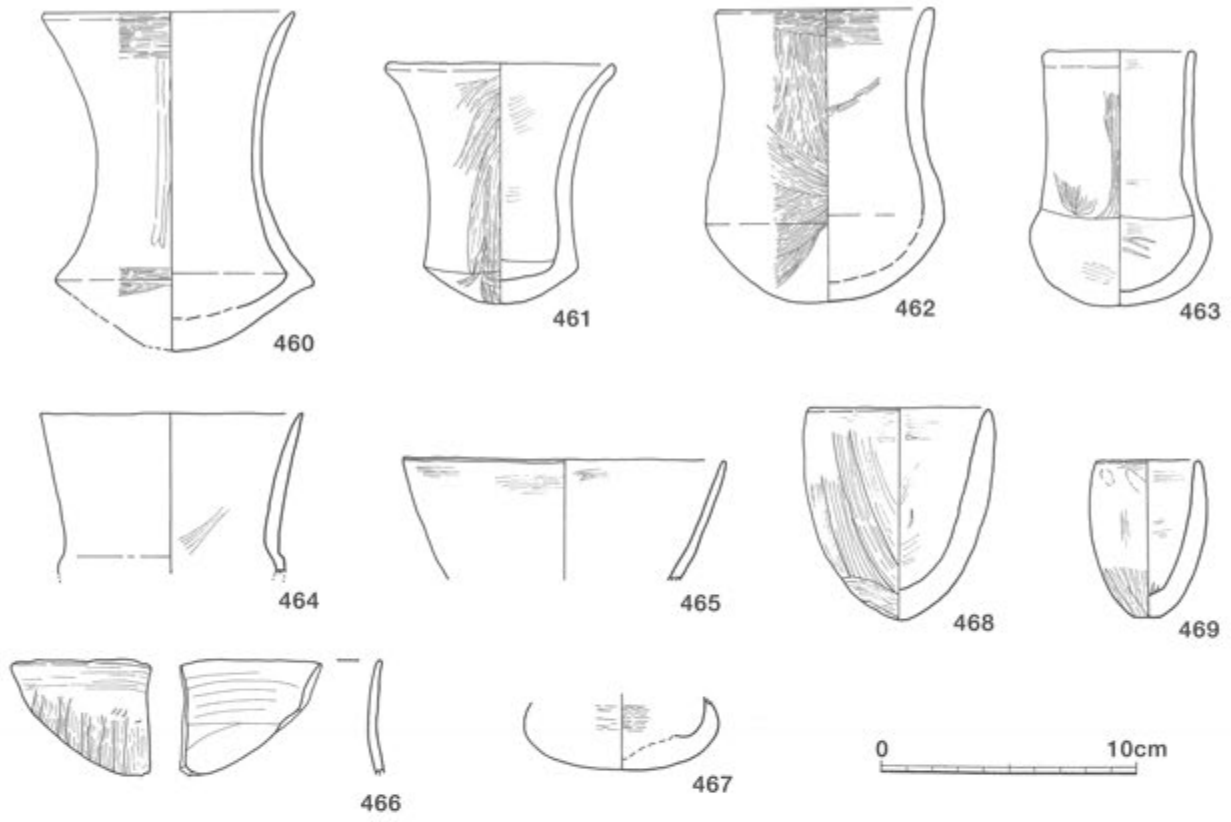
第79図 3号住居跡出土遺物(3)



第80图 3号住居跡出土遺物(4)



第81图 3号住居跡出土遺物(5)



第82図 3号住居跡出土遺物(6)

460～467は埴形土器である。

460・461は外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺である。小さい丸底と外へ細長い口縁からなり、胴部で稜をもつ。口縁端部は尖り気味である。口径は9.8cm, 9.0cm, 器高は13.5cm, 9.6cm, 胴部径は10.2cm, 6.0cmを測る。外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。462は胴部がややくびれ口縁部が外反する。胴部は浅く底部は丸底である。口径8.7cm, 器高11.7cm, 胴部径9.3cmを測る。463も同様のもので、口径6.0cm, 器高10.2cm, 胴部径7.2cmを測る。口縁端部は胴部から立ち上がり直交するものである。464・465は口径10.5cm, 12.6cmを測る小型壺の口縁部である。口縁端部は尖り気味である。468・469は手捏土器である。底部が尖り気味で、口縁部はやや内弯し、口唇部が尖り気味なものである。口径は7.2cm, 4.2cm, 器高は8.4cm, 6.3cmを測る。

#### 4号住居跡

出土遺物は、甕形土器・壺形土器が出土したが細片であった。

#### 5号住居跡

470～485は5号住居跡出土の土器である。

470～478は甕形土器である。470～475は内弯する口縁部をもつもので、ナデ整形で器面調整がなされ、絡縄突帯を施すものである。470は完形土器で、口径25.5cm, 器高33.3cm, 脚台径8.2cmを測るものである。器面調整はナデ整形であり、外面には煤が付着している。471～475の口径はそれぞれ27.8cm, 24.0cm, 28.8cm, 24.8cm, 28.2cmを測る。何れもナデ整形を施している。476は内弯気味に直口する口縁部である。

478は中空のあげ底底部である。

479～484は高坏であり、何れも外面には丹塗りが施されている。479・480は椀形の器形をした坏部で、内弯気味の口縁部をもつものである。口径は18.6cm, 18.0cmを測る。481は直口する口縁をもつ坏部である。483・484は底部から筒部をもたず、すぐ裾部になる形状である。484は裾部が大きく開く。

485は平底の鉢形土器である。底部からやや膨らみながら口縁部に直口し、口唇部内面がやや外に反る形状で、口唇部は丸みをもつ。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。口径12.8cm, 器高6.0cm, 底径6.6cmを測る。

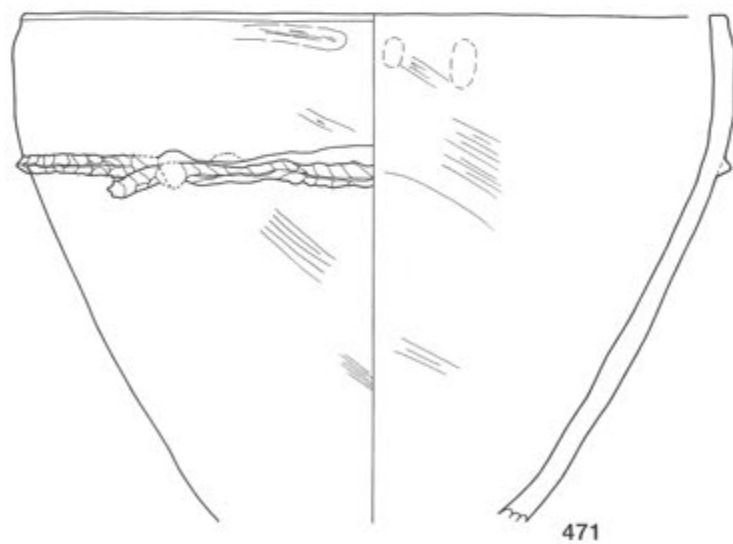
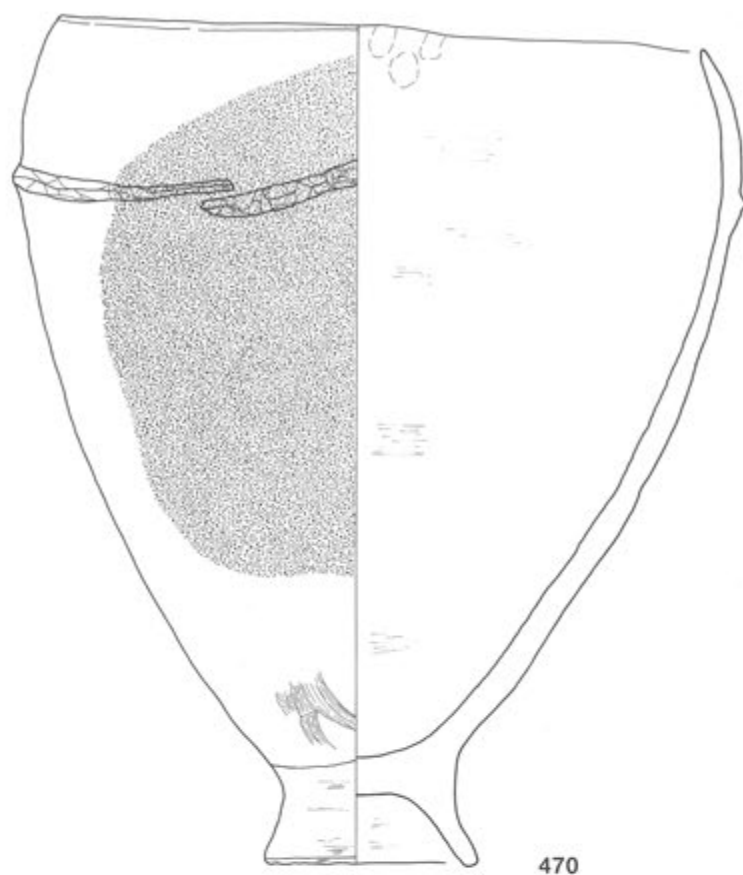
#### 6号住居跡

486～490は6号住居跡から出土した土器である。

486～488は甕形土器の口縁部であり、486は直交する口縁部で、487は外反する口縁をもつものである。488は絡縄突帯を施すもので、ナデ整形で器面調整がなされている。

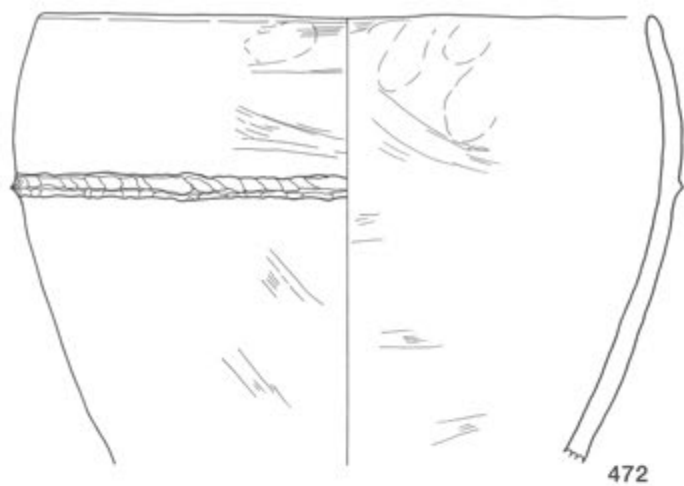
489・490は壺形土器である。489は口径12.8cmを測る外反する口縁部で、490は平底の底部である。



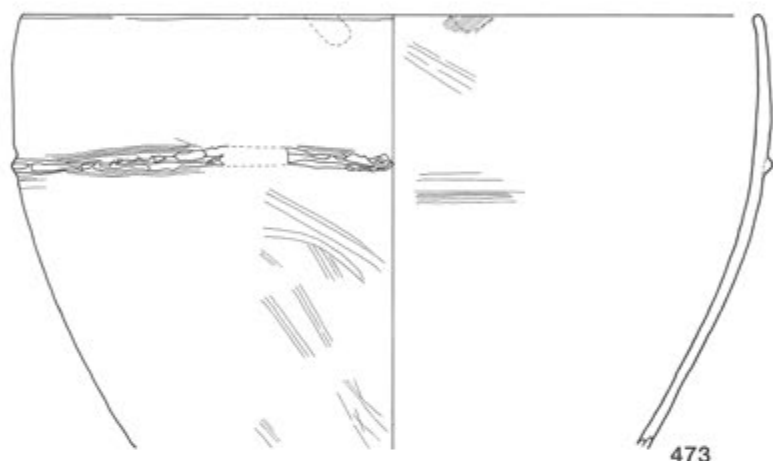


0 10cm

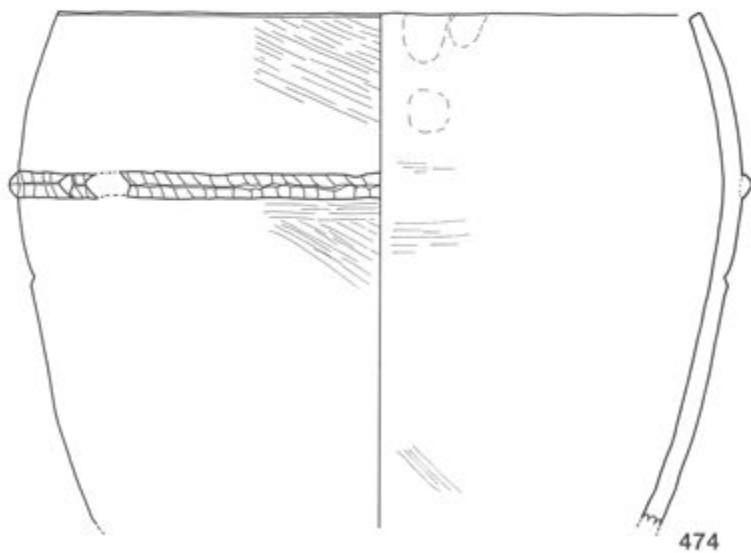
第83图 5号住居跡出土遺物(1)



472



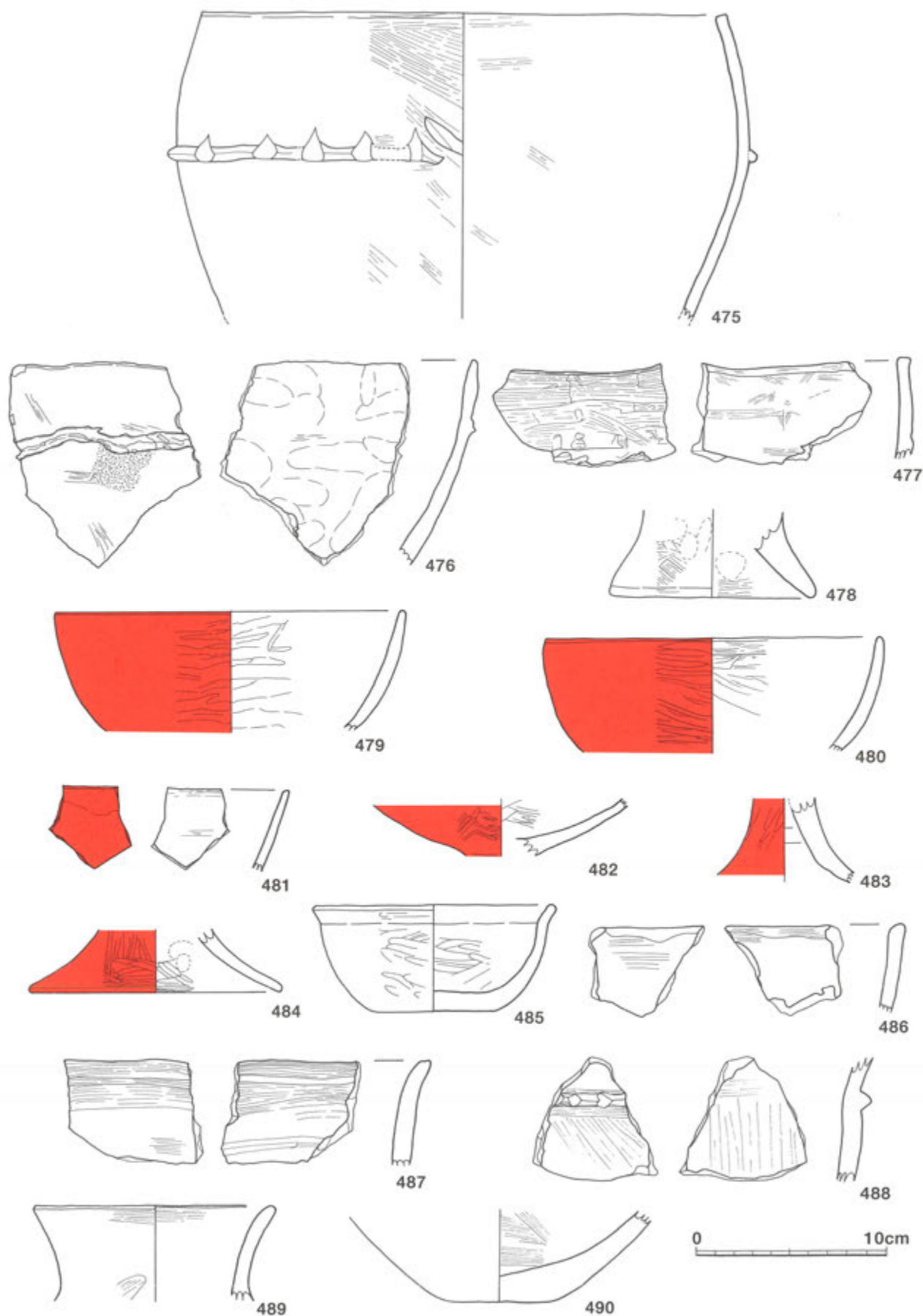
473



474

0 10cm

第84図 5号住居跡出土遺物(2)



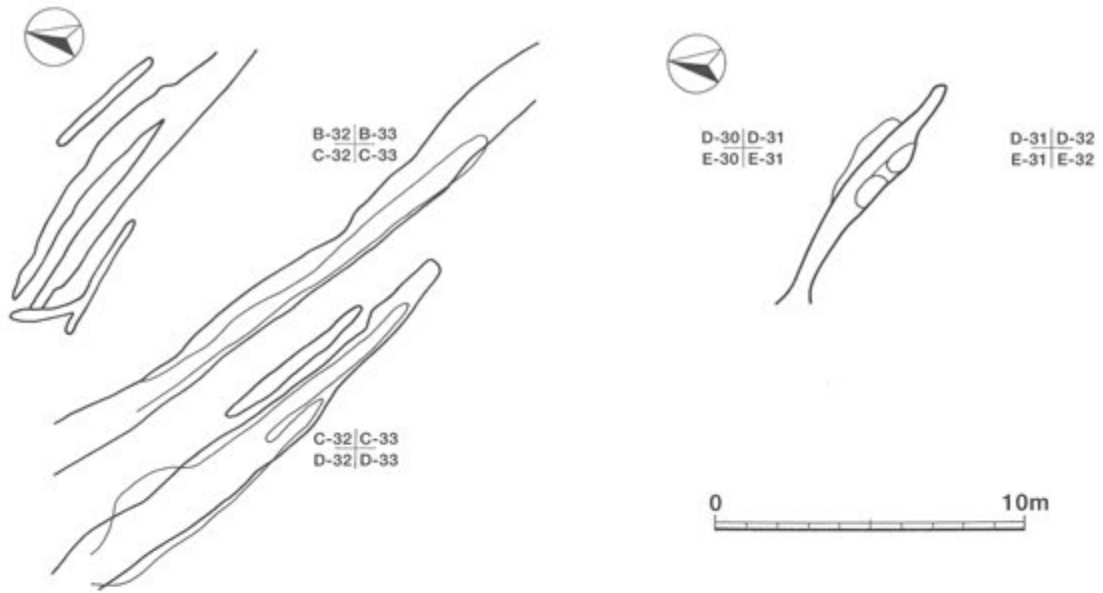
第85图 5·6号住居跡出土遺物

第16表 鷲ヶ迫遺跡遺構内遺物観察表 (1)

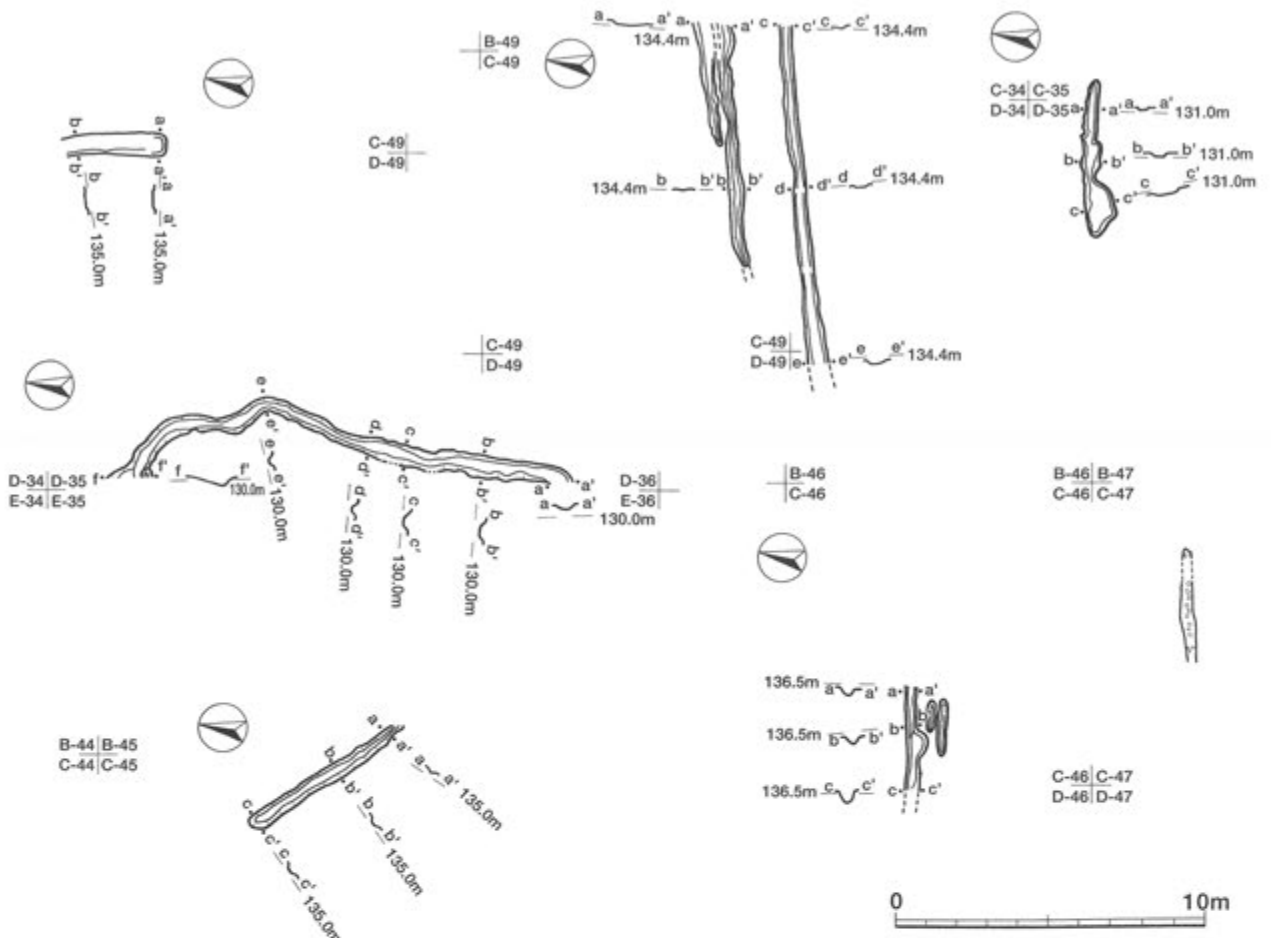
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	分類	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
77	413	D4・5	住1	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	にぶい橙色	にぶい橙色	848	
	414	D4・5	住1	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	8191	
	415	D4・5	住1	底部	甕	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	明褐色	8586	
	416	D5	住1	底部	甕	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	13245	
	417	D5	住1	口縁	高環	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	明褐色	11049	
	418	D4・5	住1	底部	埴	ハラミガキ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8629	
	419	D4・5	住1	完形	手づくね	ハラケズリ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黒褐色	8201	
	420	D5	住2	脚	甕	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	8255	
	421	D5	住3	完形	甕	ケズリ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	10他	
	422	D5	住3	完形	甕	ケズリ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	241他	
	423	D5	住3	完形	甕	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	75	
	424	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	10158他	
	425	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	にぶい赤褐色	8215	
78	426	D5	住3	口縁	甕	ケズリ	ナデ	qz	灰黄褐色	赤褐色	153他	
	427	D5	IVa住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	黒色	黄褐色	16231	
	428	D5	住3	口縁	甕	ケズリ	ナデ	qz	黒色	明赤褐色	一括	
	429	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	12411	
	430	D5	住3	口縁	甕	ケズリ	ナデ	qz	赤褐色	暗黄褐色	1239	
	431	D5	住3	口縁	甕	ケズリ	ナデ	qz	にぶい黒褐色	にぶい褐色	10159他	
	432	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	黒色	にぶい橙色	160	
433	D5	住3	胴	甕(小型)	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	10134		
79	434	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	灰黄褐色	にぶい褐色	?	スス附着
	435	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ケズリ	qz	暗褐色	にぶい褐色	59他	
	436	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz,磔	暗褐色	にぶい褐色	136	
80	437	D5	住3	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz,磔	明赤褐色	にぶい褐色	12741他	
	438	D5	住3	底部	甕	ケズリ	ケズリ	qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	32	
	439	D5	住3	底部	甕	ケズリ	ケズリ	qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	47他	
	440	D5	住3	底部	甕	ケズリ	工具ケズリ	qz,磔	にぶい褐色	にぶい褐色	167	
	441	D5	住3	底部	甕	ケズリ	ハラケズリ	ho,qz	にぶい赤褐色	暗黄褐色	109	
	442	D5	住3	胴~底	甕	ハラケズリ	ナデ	qz,磔	にぶい赤褐色	暗黄褐色	12740	
	443	D5	住3	底部	甕	ケズリ	不明	qz,磔	暗黄褐色	暗黄褐色	159	
	444	D5	住3	底部	甕	ケズリ	ナデ	qz	暗赤褐色	暗黄褐色	162	
	445	D5	住3	底部欠	鉢	ナデ	ナデ	qz	暗黄褐色	にぶい赤褐色	11640	
	446	D5	住3	底部	鉢	ケズリ	ナデ	qz	暗赤褐色	明赤褐色	151他	
81	447	D5	IVa住3	胴~底	鉢	ケズリ	ケズリ	qz	にぶい黒褐色	にぶい赤褐色	6239他	
	448	D5	IVa住3	胴~底	鉢	ケズリ	指押さえ	qz	明赤褐色	にぶい黒褐色	10234他	
	449	D5	住3	完形	壺	ケズリ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	55他	小型壺
	450	D5	住3	口縁	壺	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	54他	
	451	D5	住3	口縁	壺	ナデ	ナデ	qz,磔	明赤褐色	暗黄褐色	10607	
	452	D5	住3	胴~底	壺	ミガキ	ナデ	qz	暗灰黄色	浅黄色	113他	
	453	D5	住3	底部	壺	ケズリ	ナデ	qz	暗赤褐色	にぶい赤褐色	86他	
	454	D5	住3	底部	壺	ナデ	ナデ	qz	浅黄色	明赤褐色	4他	
	455	D5	住3	完形	高環	ケズリ	ナデ	qz	明赤褐色	褐色	111他	
	456	D5	住3	脚部欠	高環	ケズリ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	黄褐色	49他	
	457	D5	住3	脚部欠	高環	ケズリ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	12679他	
	458	D5	住3	底部	高環	ケズリ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	203他	
	459	D5	住3	脚部	高環	ケズリ	工具痕	qz	にぶい褐色	暗褐色	74	

第17表 鷺ヶ迫遺跡遺構内遺物観察表 (2)

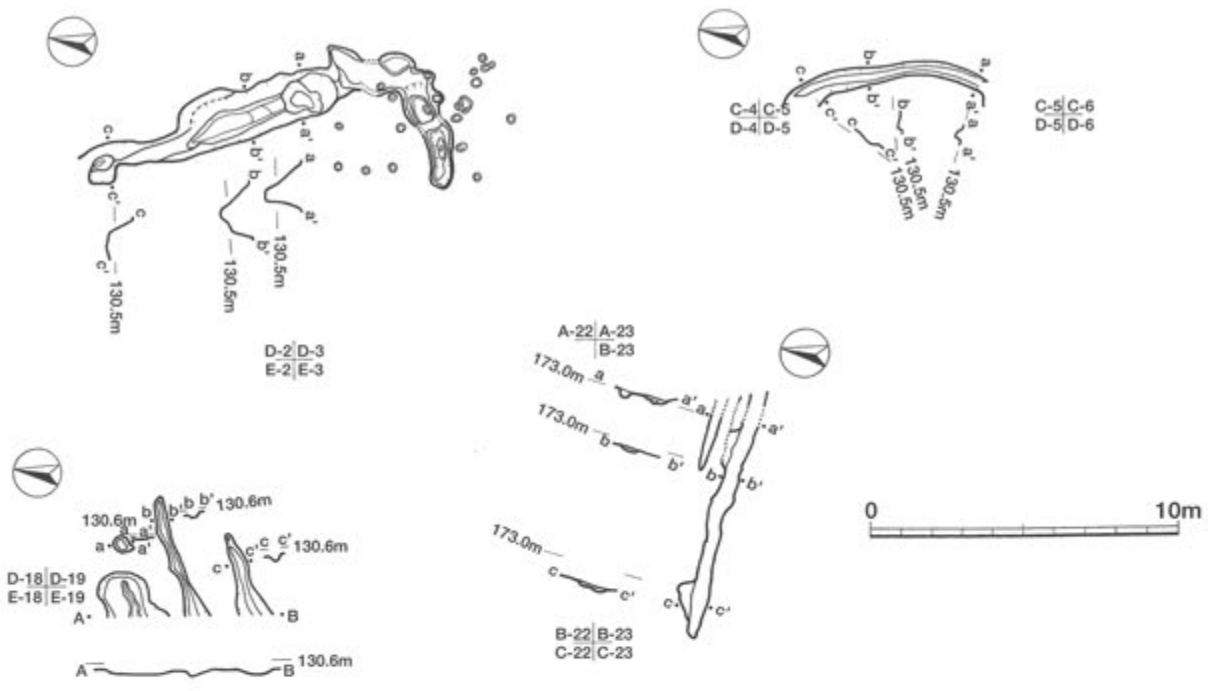
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	分類	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
82	460	D5	住3	完形	埴	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	185他	
	461	D5	住3	完形	埴	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	53他	
	462	D5	住3	完形	埴	ナデ	ナデ	qz	灰褐色	黒褐色	ナシ	
	463	D5	住3	完形	埴	ミガキ	工具痕	qz	橙色	赤褐色	12379	
	464	D5	IVa住3	口縁	埴	ケズリ	ミガキ	ho,qz	赤褐色	赤褐色	1863他	
	465	D5	住3	口縁	埴	ミガキ	ナデ	ho,qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	72	
	466	D5	住3	口縁	埴	ミガキ	ナデ	qz	淡黄色	淡黄色	10540	
	467	D5	住3	胴~底	埴	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	12496	
	468	D5	住3	完形	手づくね	ナデ	ナデ	ho,qz	暗褐色	赤褐色	?	
	469	D5	住3	完形	手づくね	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	12387	
83	470	C27	住5	完形	甕	ナデ	ナデ	qz	暗褐色	赤褐色	8704他	スス付着
	471	C,D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	明赤褐色	8771	
84	472	D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	明赤褐色	ナシ	
	473	C,D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	7869他	
	474	C,D27	住5	口縁~胴	甕	ナデ	ナデ	qz,磔	暗赤褐色	にぶい赤褐色	8780	
85	475	C,D27	住5	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	暗赤褐色	赤褐色	12434他	
	476	C,D27	住5	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい赤褐色	9555	
	477	D27	住5	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	ナシ	
	478	C,D27	住5	底部	甕	ケズリ	ナデ	qz	赤色	にぶい黄褐色	ナシ	
	479	D27	住5	口縁~胴	高坏	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	にぶい赤褐色	9622	丹塗り
	480	C,D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	明赤褐色	ナシ	丹塗り
	481	D27	住5	口縁	高坏	ミガキ	ミガキ	ho,qz	赤色	にぶい褐色	9633	丹塗り
	482	C,D27	住5	脚	高坏	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	赤褐色	ナシ	丹塗り
	483	D27	住5	脚	高坏	ミガキ	工具ナデ	qz	赤色	暗褐色	9647	丹塗り
	484	C,D27	住5	脚	高坏	ミガキ	ミガキ	ho,qz	暗赤褐色	黒褐色	12445	丹塗り
	485	C,D27	住5	完形	椀	ミガキ	ミガキ	qz	暗褐色	にぶい赤褐色	12595他	
	486	C50	住6	口縁	甕	ナデ	ナデ	qz	明褐色	明褐色	2914	
	487	C50	住6	口縁	甕	ナデ	ナデ	ho,qz	明赤褐色	明赤褐色	2934	
	488	C50	住6	胴部	甕	ナデ	ケズリ	ho,qz	暗灰黄色	暗灰黄色	2917	
	489	C50	住6	口縁	壺	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	赤褐色	3134他	
	490	C50	住6	底部	壺	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	赤褐色	2921他	



第86図 古道跡

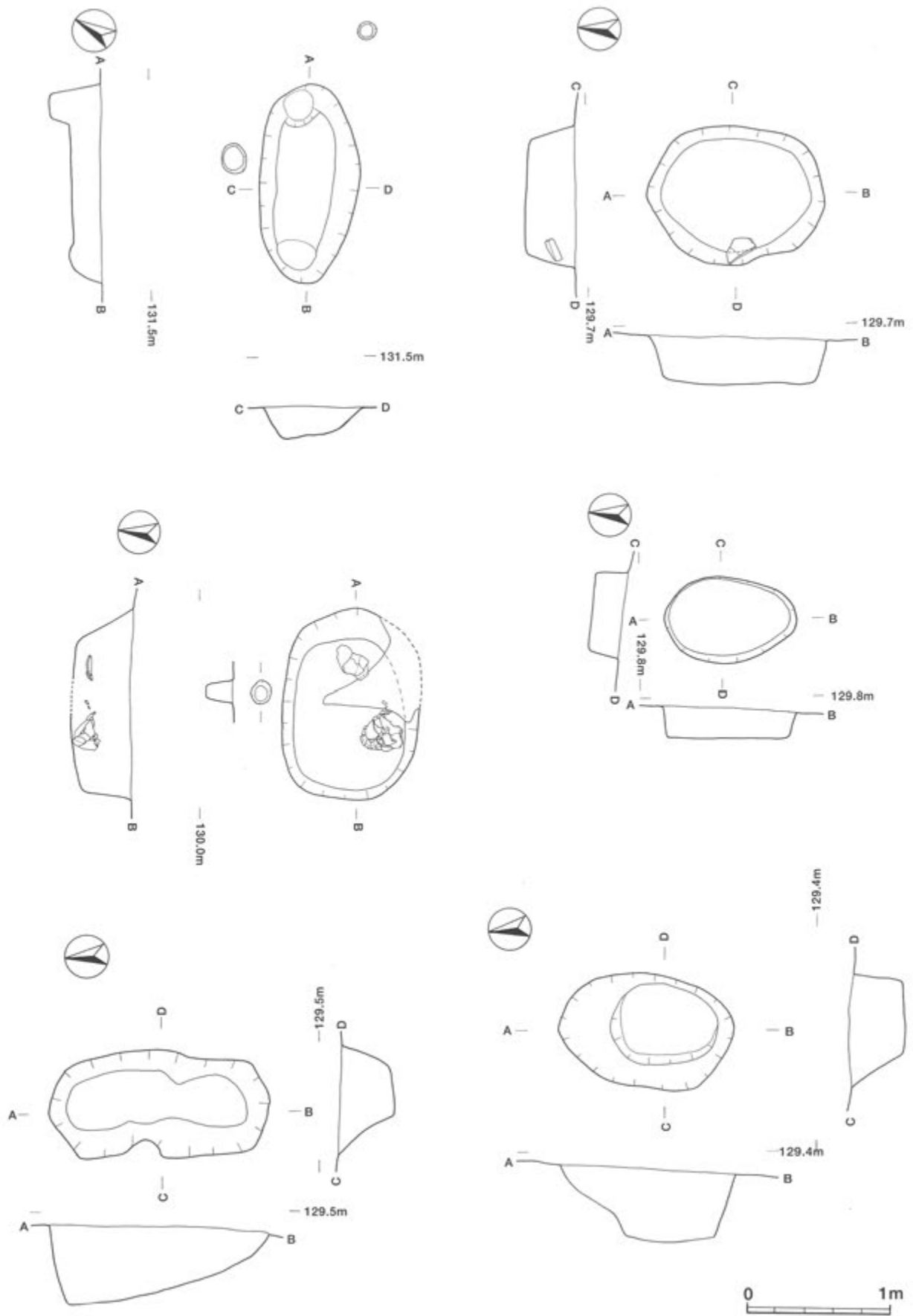


第87図 溝状遺構 (1)

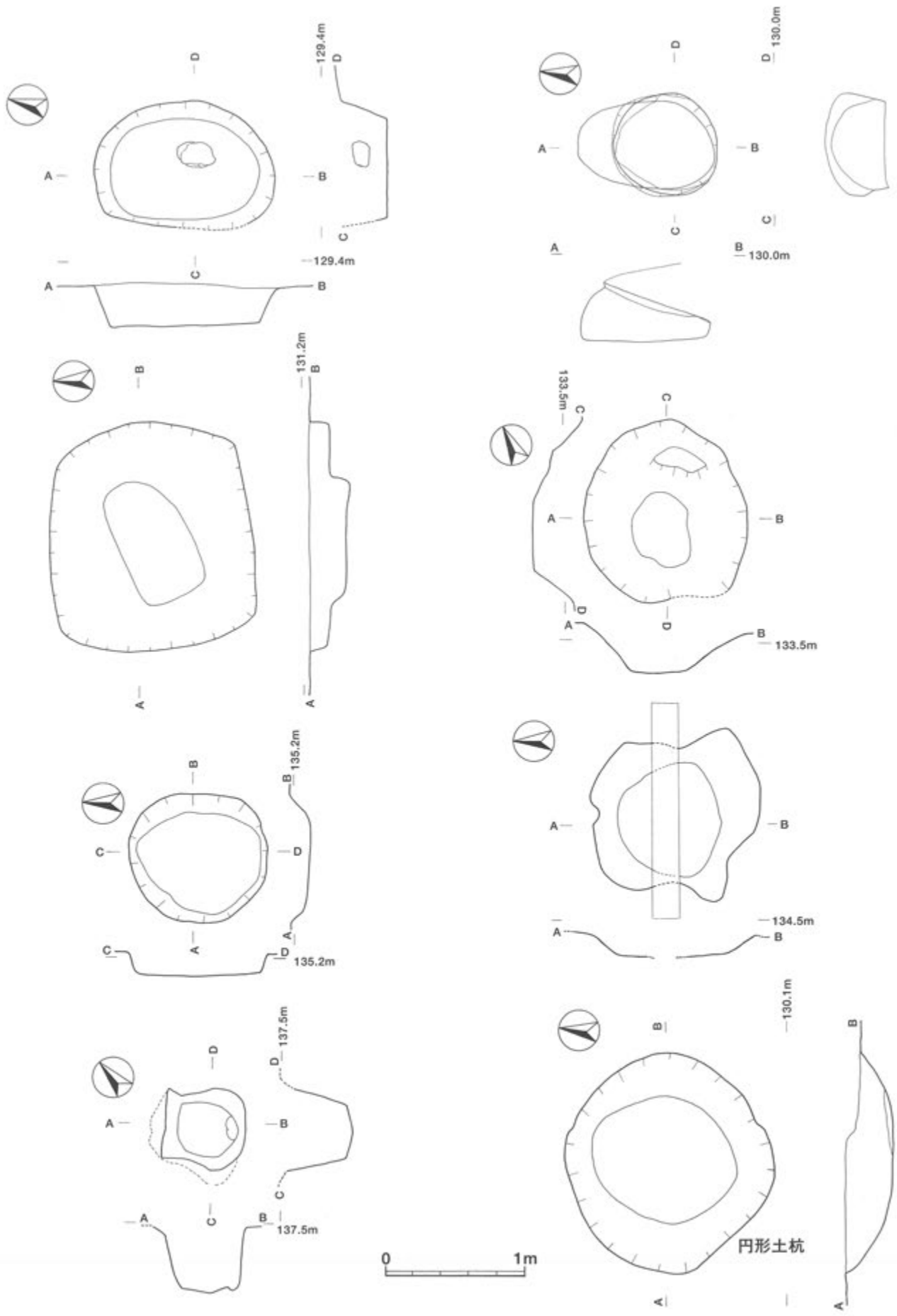


第88図 溝状遺構 (2)

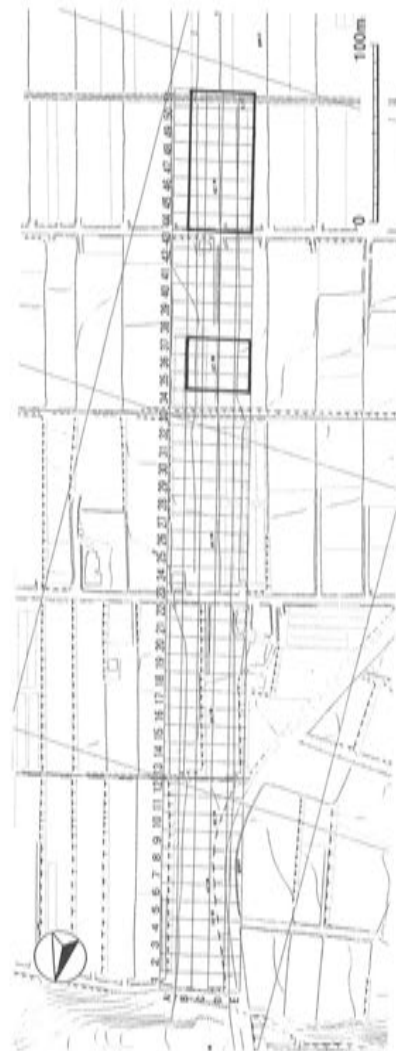
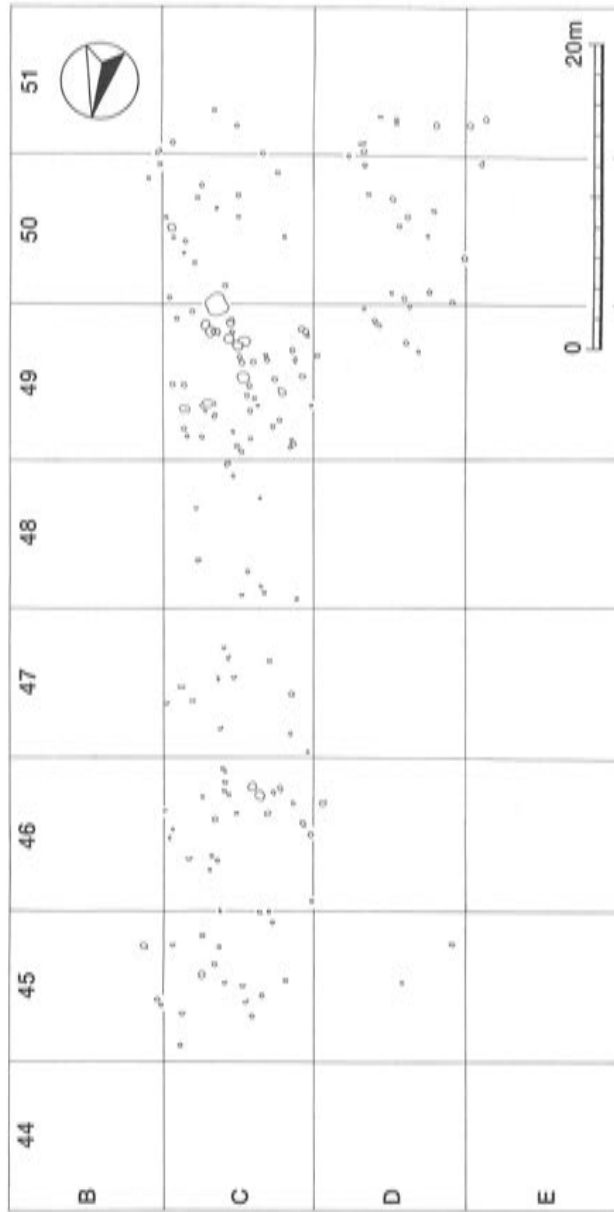
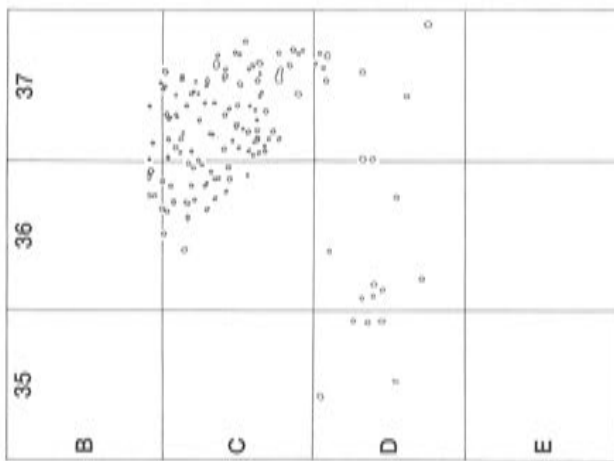




第89图 土坑 1~6



第90図 土坑7・8, 円形土坑



第91図 ビット位置図

### 住居跡出土石器（第92～95図，491～512）

検出された住居内の埋土から、成川式に伴い数十点の石器が出土した。その中から状態の良いものをそれぞれ図化した。

住居1号内からは、5点の遺物が出土した。包含層での分類を基に遺物を判断した。凹石が3点・敲石が2点であり、いずれも花崗岩である。

491～493は凹石である。491・493は表面と上部・下部に敲打痕がみられ、裏面には6mmほどのくぼみがある。ほぼ全面に擦痕がみられる。492は、上下と表裏に敲打痕がみられる。また、表裏の敲打された所に凹みが入り、全面が研磨されている。

493・494は敲石に分類した。いずれも敲打面が中心にあり、その後研磨がほどこされている。

住居2号からは、5点の遺物が出土した。

497は、うすく扁平な頁岩を用いた礫器である。右側辺から下辺、左側辺にかけて規則性の無い粗い剥離によって刃部が形成されている。一部に階段状の剥離がみられる。また刃部には、使用によるつぶれがみられる。497は凹石である。砂岩を用いており、表裏面に共に4mm弱の深さのくぼみを呈する。擦痕や敲打痕はみられない。498は花崗岩を用いた敲打痕が強く残り、表裏面には擦痕を呈する。499は黒曜岩を用いた磨石である。角の取れた三角柱を呈し、全ての面に強く擦痕がみられる。500は軽石製品である。楕円形の柱状を呈し、上部に向かってやや狭くなっている。下部は欠損しているようにみえるが、擦痕がみられる。全面に擦痕がみられるが、詳しい情報は不明である。

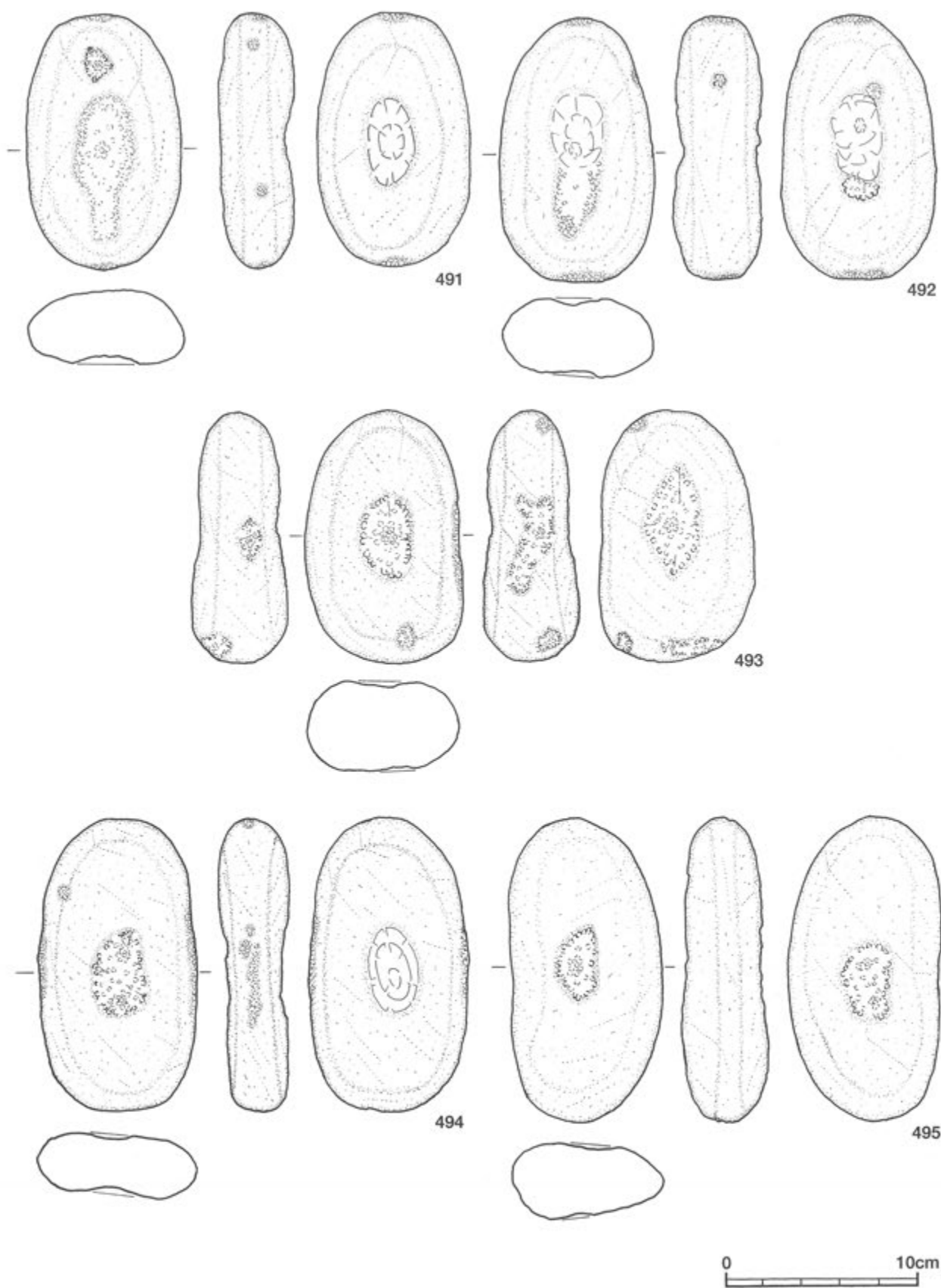
住居3号からは敲石2点、磨石1点が出土した。

501は、花崗岩の円礫を用いている。側辺に敲打がみられるが、連続性はなく左側辺に敲打が特に強くみられる。表裏に擦痕がみられ、また、側辺部には敲打面をのぞいた所に擦痕がみられる。

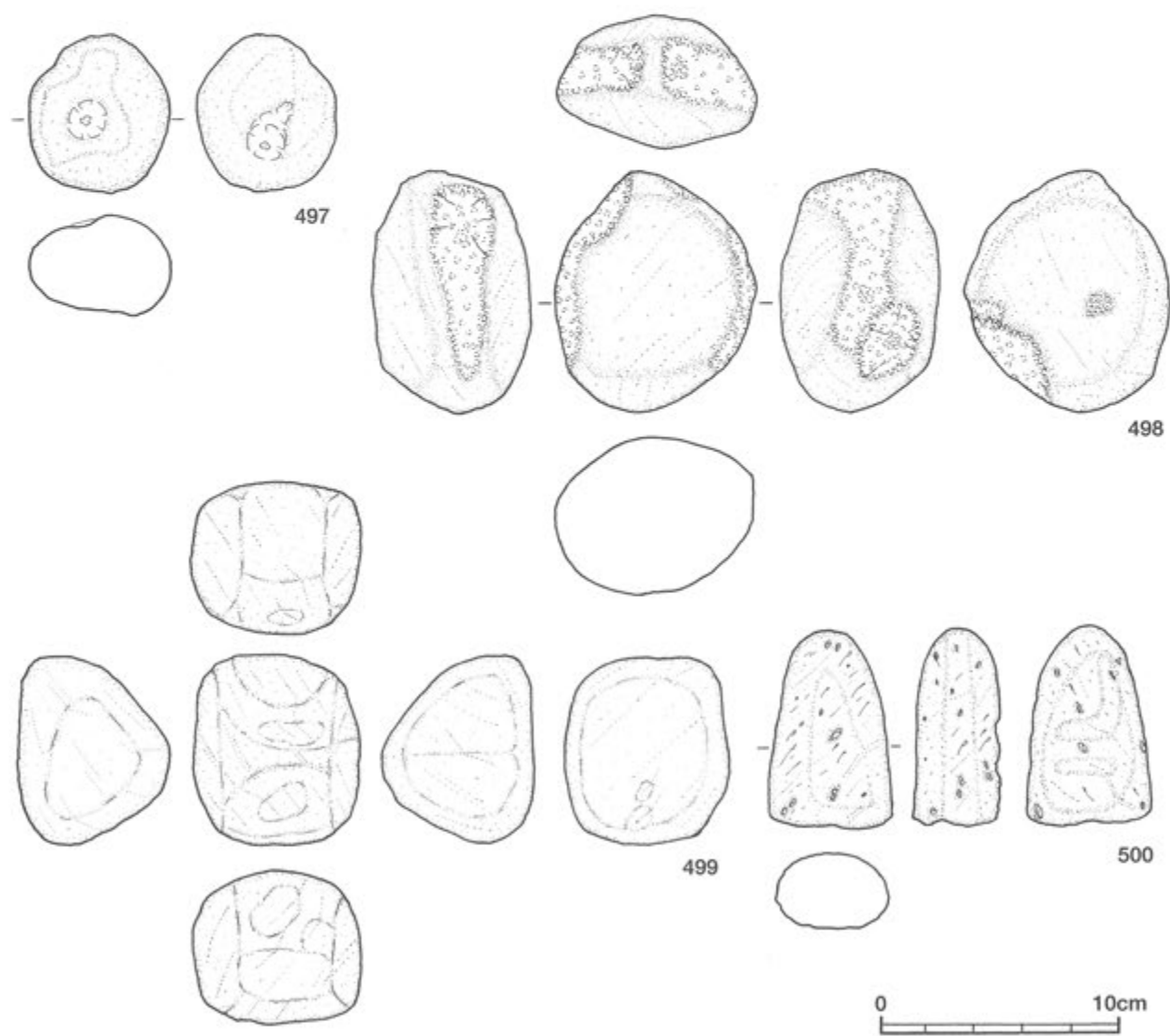
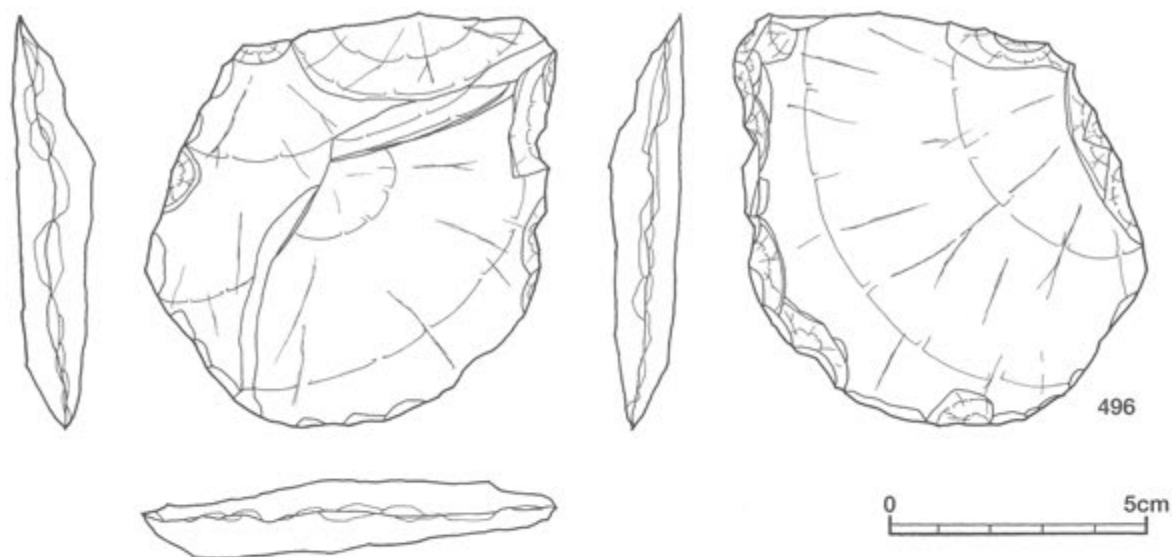
502は、花崗岩を用いた磨石である。表裏と両側面にわずかに敲打がみられるが、裏面は平滑化が強くあらわれるほどの擦痕がある。503は、黒曜岩を用いた小柄な敲石である。側辺全てに敲打がみられ、表裏面には弱く擦痕がみられる。

住居2・3・4号は、検出面が切り合っており、それに準じて遺物も住居番号が判断できないものが存在する。95図に住居番号不明遺物として掲載する。

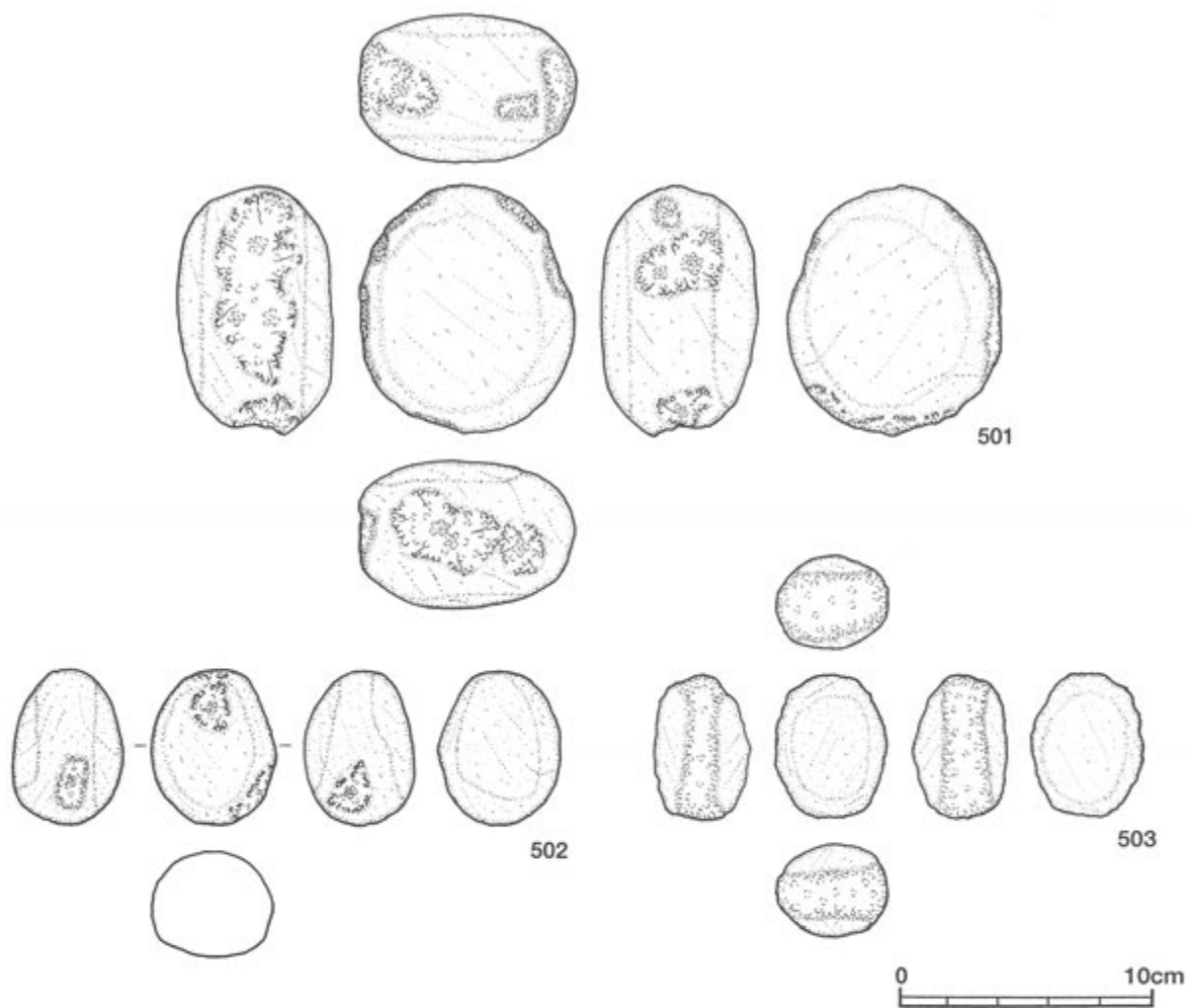
501～504は、敲石である。全て花崗岩を用いているが、形状には大きな差がある。側辺に敲打痕がみられ、全体に擦痕がみられる。503は、中央にも敲打痕がみられ、台石の可能性を考えさせる。505は、花崗岩の小円礫を用いた磨石である。表面には、2箇所磨面がみられ、その切り合いにより、稜が作られている。裏は研磨により、平坦な面が作られている。506は、花崗岩を角礫を用いた台石である。表面のみ使用痕がみられ、その他の面には自然面が残る。表面中央部に敲打痕がみられ、表全面に擦痕がみられる。507・510は軽石製品である。510は方形、507は楕円形を呈しているが、全ての面に擦痕がみられる。



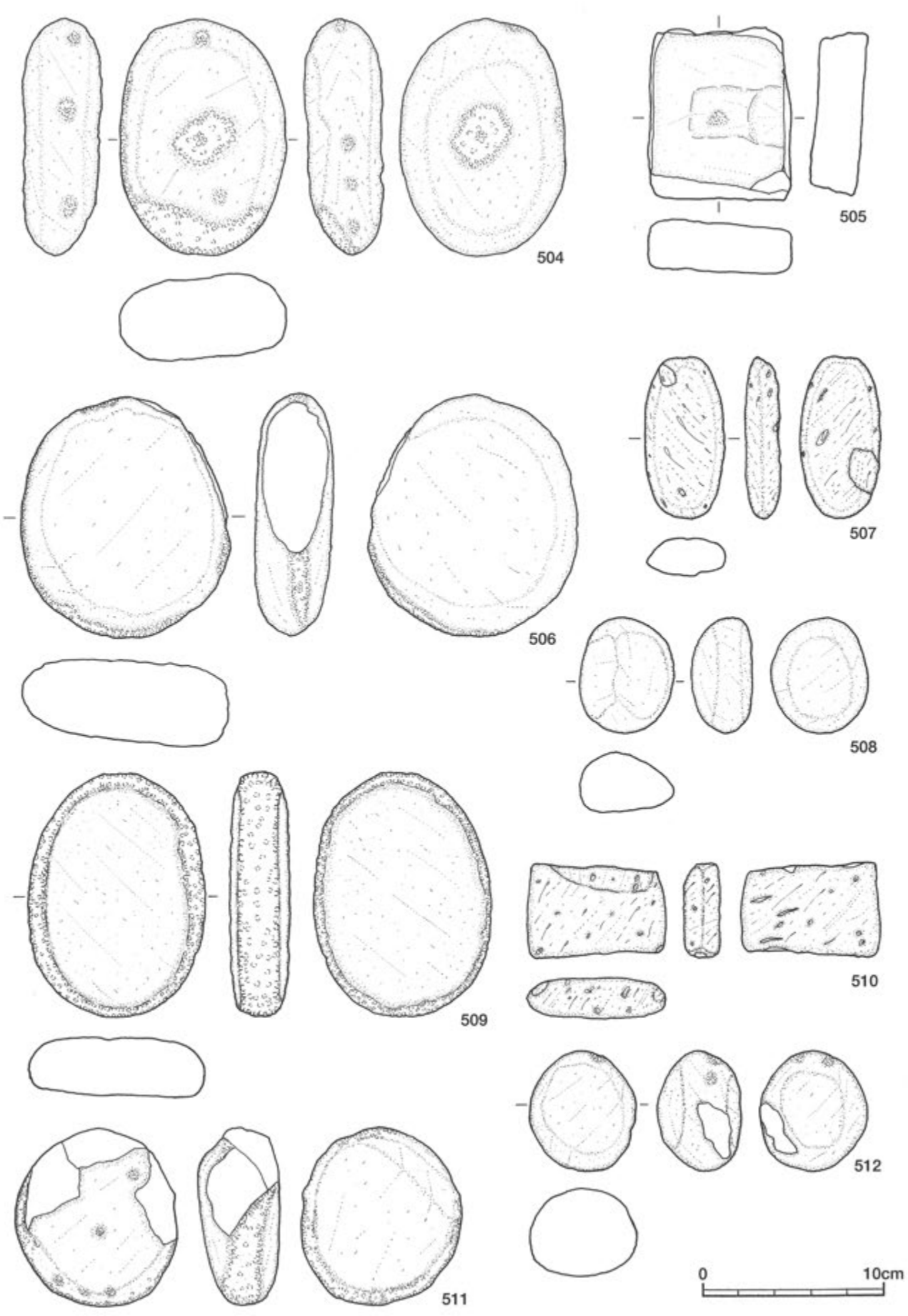
第92図 遺構出土石器 (1)



第93図 遺構出土石器 (2)



第94図 遺構出土石器 (3)

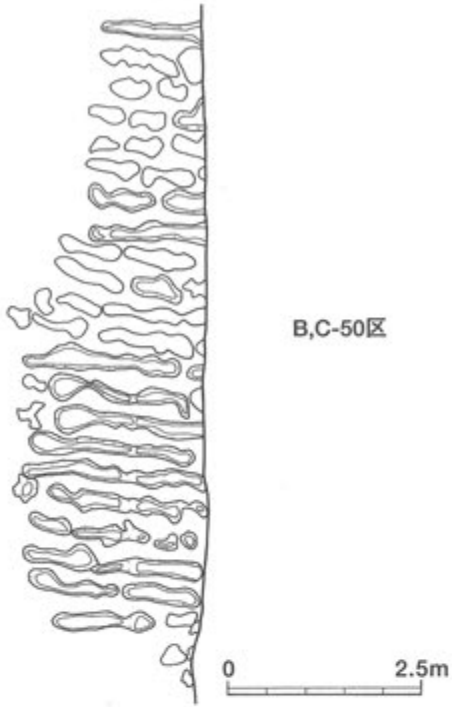


第95図 遺構出土石器 (4)



第18表 鷲ヶ迫遺跡遺構内石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
92	491	12542	凹石	花崗岩	C・D27	住1	13.3	8.0	4.1	690.0	
	492	12546	凹石	花崗岩	C・D27	住1	12.6	8.0	4.5	760.0	
	493	12544	凹石	花崗岩	C・D27	住1	13.0	8.1	4.9	840.0	
	494	12551	敲石	花崗岩	C・D27	住1	15.2	8.2	3.6	730.0	
	495	12543	敲石	花崗岩	C・D27	住1	16.0	7.9	4.4	800.0	
93	496	9605	礫器	頁岩	C2	住2	9.5	7.4	1.2	95.0	
	497	3158	凹石	砂岩	C2	住2	6.8	5.8	3.8	190.0	
	498	8244	敲石	花崗岩	C2	住2	10.2	8.4	6.2	670.0	
	499	7755	敲石	黒曜岩	C2	住2	7.5	6.8	6.1	470.0	
	500	8065	軽石製品	軽石	C2	住2	8.3	5.2	3.6	50.0	
94	501	1922	敲石	花崗岩	D5	住3	10.2	8.5	6.0	730.0	
	502	2191	敲石	安山岩	D5	住3	6.2	4.8	4.7	175.0	
	503	7250	敲石	黒曜岩	D5	住3	5.8	4.5	3.8	125.0	
95	504	13146	敲石	花崗岩	—	—	13.3	9.2	4.4	820.0	
	505	15910	台石	花崗岩	—	—	9.5	7.5	3.0	495.0	
	506	7355	敲石	花崗岩	—	—	13.3	11.6	4.3	1030	
	507	415	軽石製品	軽石	—	—	8.9	4.4	2.0	30.0	
	508	—	磨石	花崗岩	—	—	6.4	5.2	3.3	155.0	
	509	7218	敲石	花崗岩	—	—	13.6	9.8	3.3	670.0	
	510	1661	軽石製品	軽石	—	—	5.3	7.6	2.0	30.0	
	511	1645	敲石	花崗岩	—	—	9.9	8.8	4.3	450.0	
	512	3466	敲石	花崗岩	—	—	6.2	5.3	4.6	275.0	



#### 畝跡 (第96図)

B・C-50区，Ⅱ層上面で検出された畝跡である。圃場整備等により削平されていたため，全体はつかめなかったが，残存面積は約23㎡であった。畝と畝間の比高差は約5cm程しかない。畝幅は約30cmで，長さ約2.5m程検出されたものが，23条残っていた。畝跡の使用時期は層位等から中世から近世と考えている。

第96図 畝跡



北原中遺跡

## 第V章 北原中遺跡

### 第1節 発掘調査の概要

北原中遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成11年度から確認調査及び本調査を行ったが、用地買収に手間取り変則的な発掘調査になった。そのため、平成11・12・16・18年度に発掘調査を行った。

その結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し、下層確認を行った結果、古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため、Ⅲ層までは全面調査を行った。

### 第2節 縄文時代の調査

Ⅲ層からは、縄文時代晩期から古墳時代の遺構・遺物が出土した。遺物はC・D-10・11区、C-12~17区、C・D18~24区に集中し、遺構は集石遺構が5基検出された。

#### 遺構

##### 集石遺構1（第98図）

C-20区、Ⅲ層上面で、検出したものである。21個の拳大の角礫が、70×50cmの楕円状の範囲に集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

##### 集石遺構2（第98図）

集石遺構2より南西約6mのC-21区、Ⅲ層上面で検出されたものである。約60×60cmの円形の範囲に、16個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、集石遺構1同様、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

##### 集石遺構3（第98図）

集石遺構2より北西23mのD-19区、Ⅲ層上面で、検出したものである。89個の拳大の円・角礫が、約140×100cmの楕円状の範囲に集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

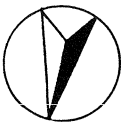
##### 集石遺構2-1（第99図）

集石遺構2より南東約26mのE-23区、Ⅲ層上面で検出されたものである。約50×40cmのほぼ円形の範囲に、14個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、他の集石遺構同様、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

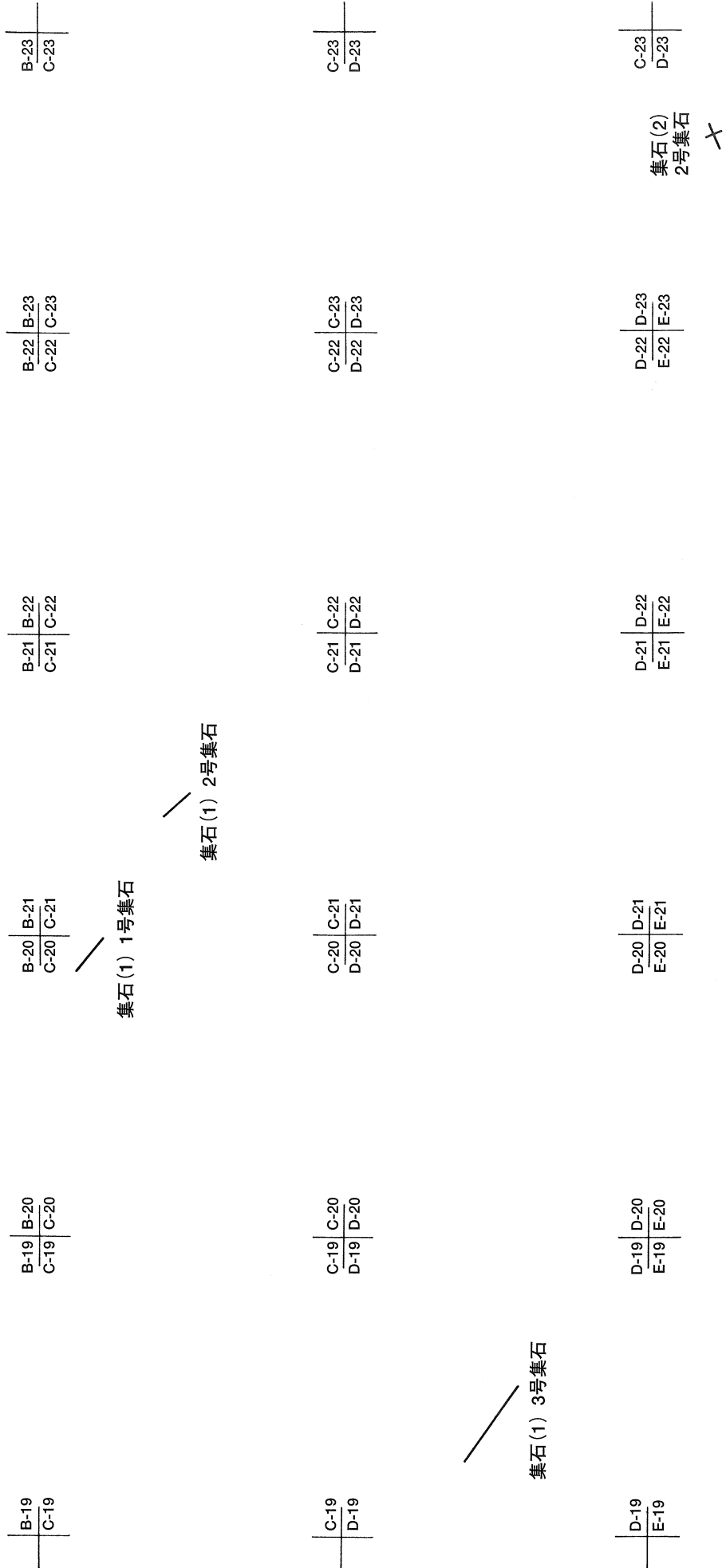
##### 集石遺構2-2（第99図）

集石遺構2-1より西約26mのB-23区、Ⅲ層上面で検出されたものである。約40×20cmの範囲に、5個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、他の集石遺構同様、火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

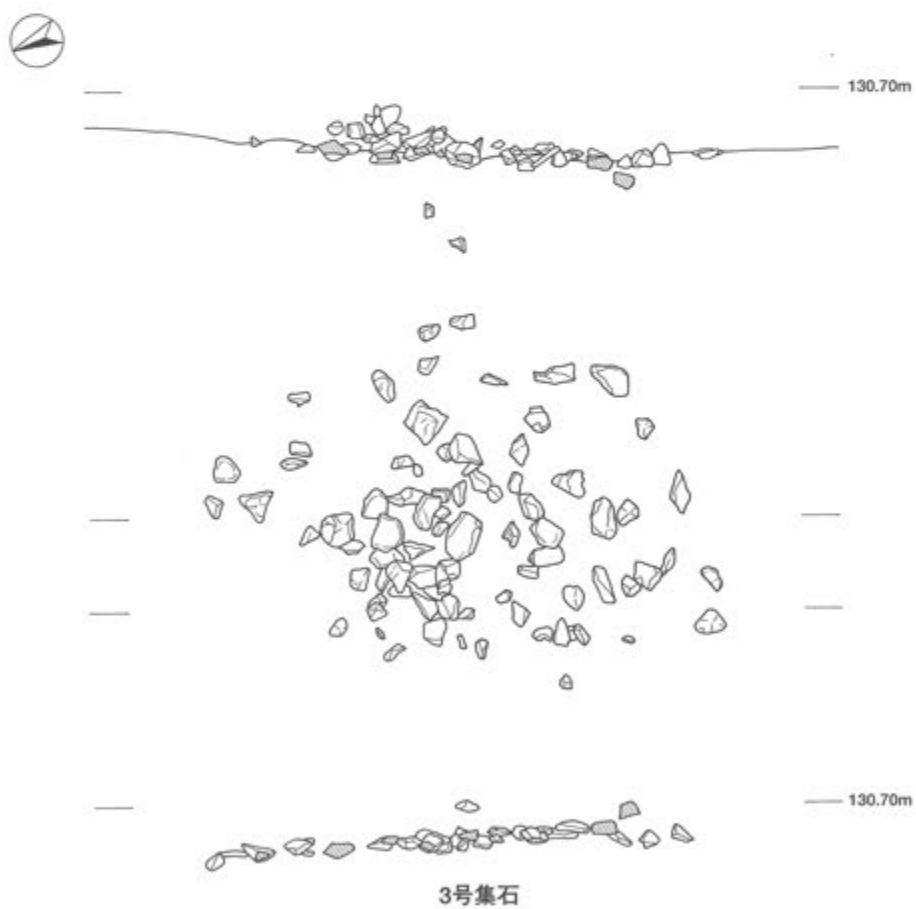
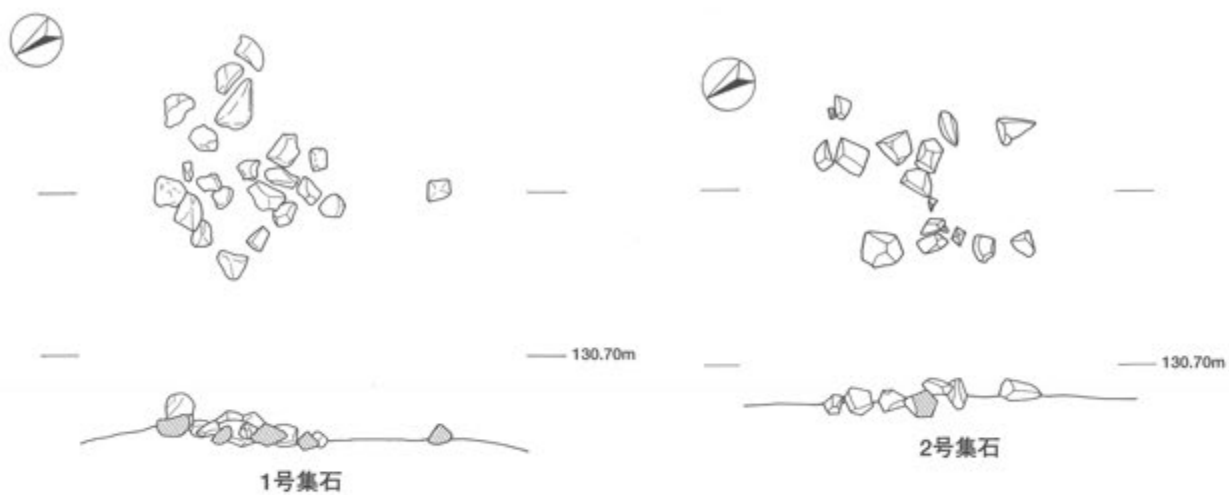
これらの集石遺構の周辺からは、縄文時代晩期の土器や石器が共伴したことから、この集石遺構の時期は縄文時代晩期と想定される。



集石(2)  
1号集石 X

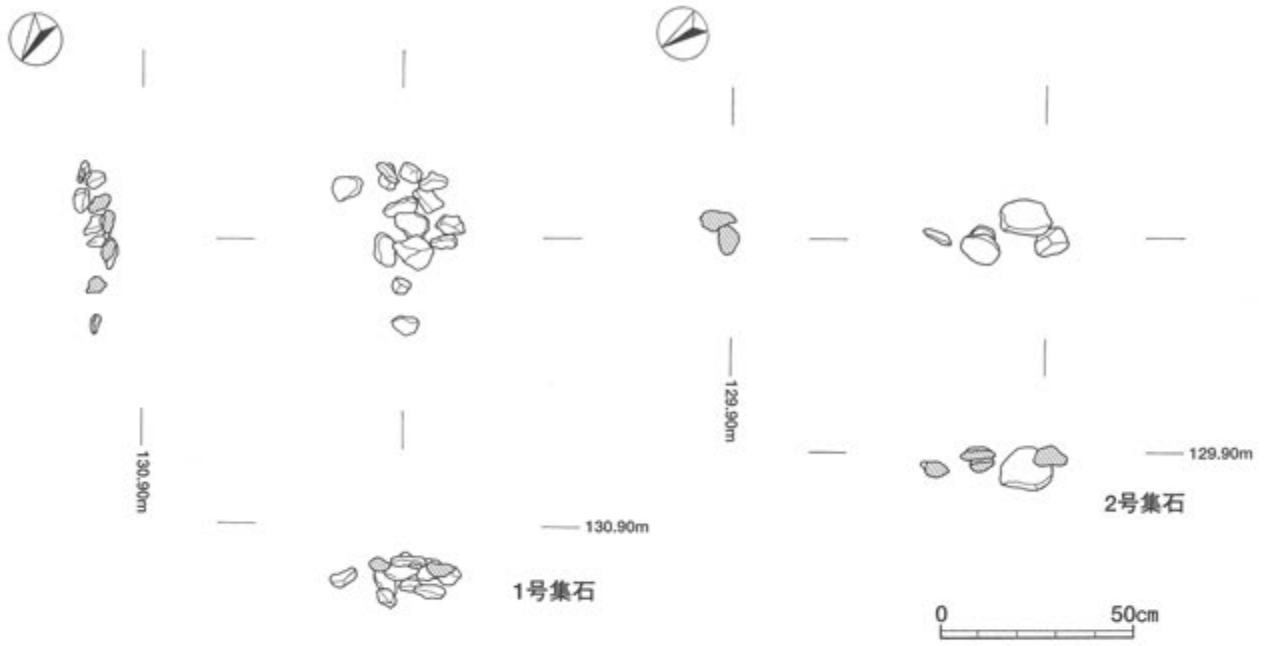


第97图 遺構配置図



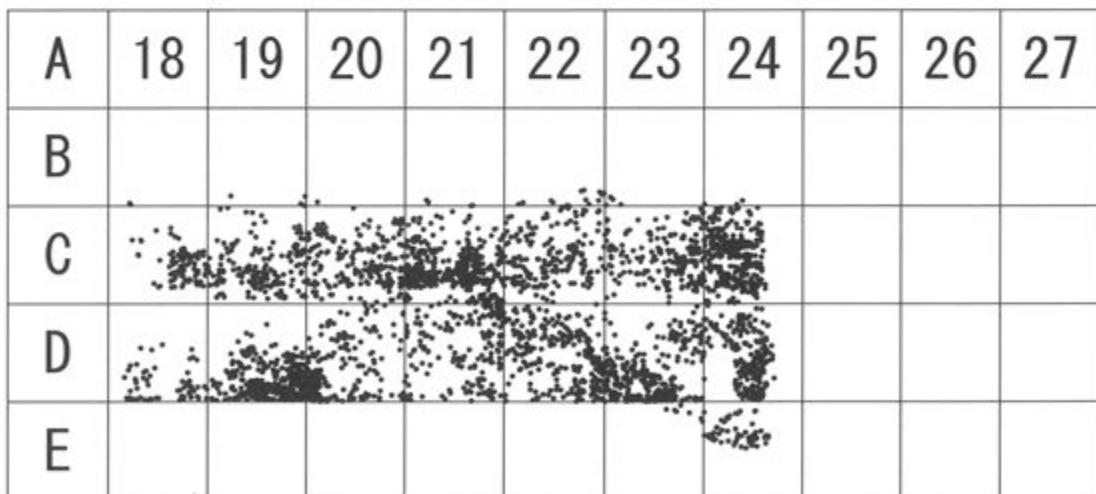
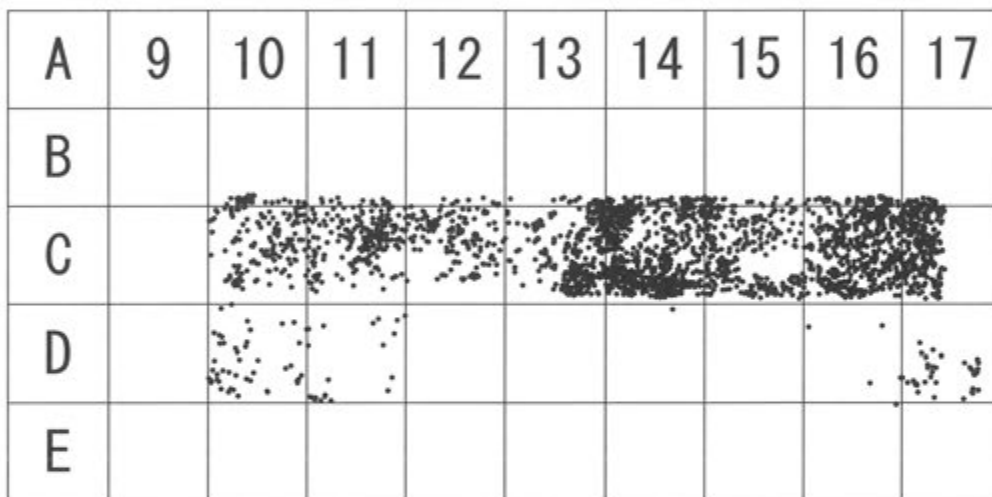
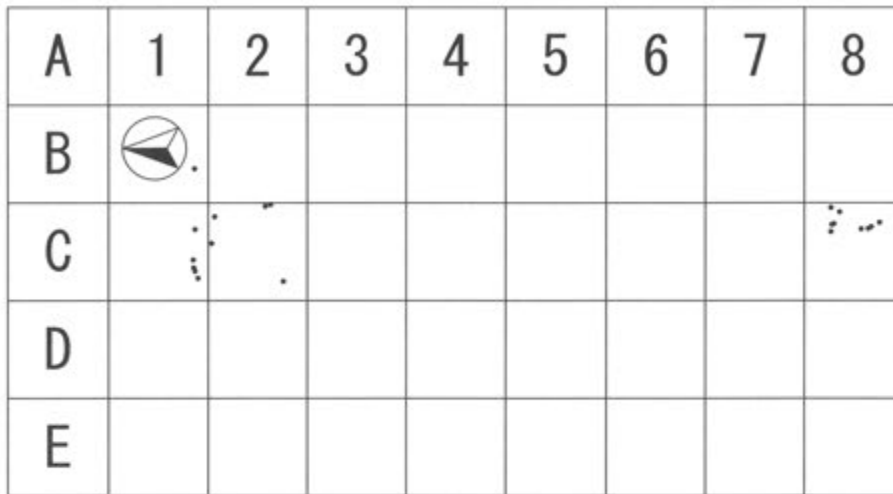
0 50cm

第98图 集石 (1)

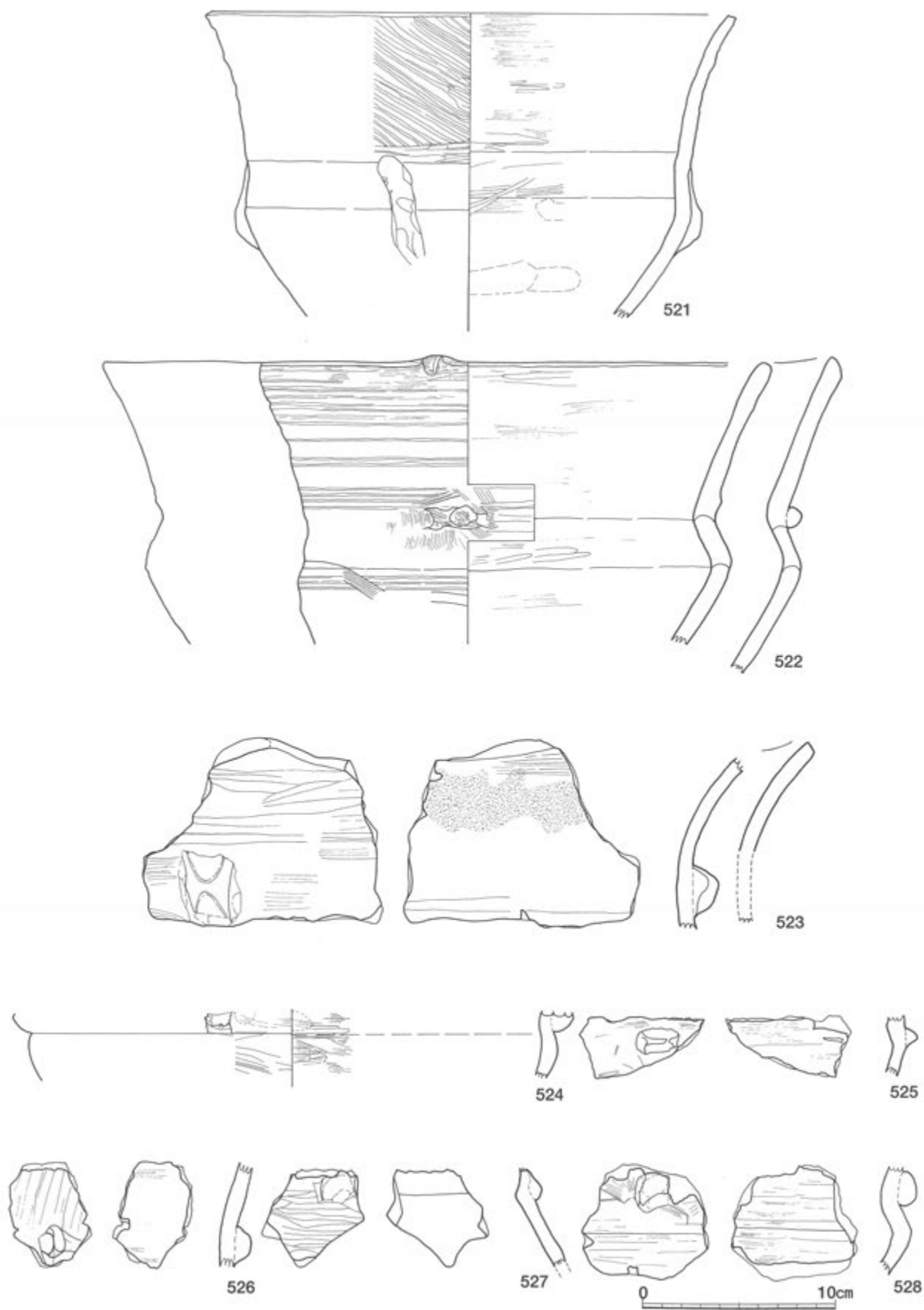


第99図 集石 (2)

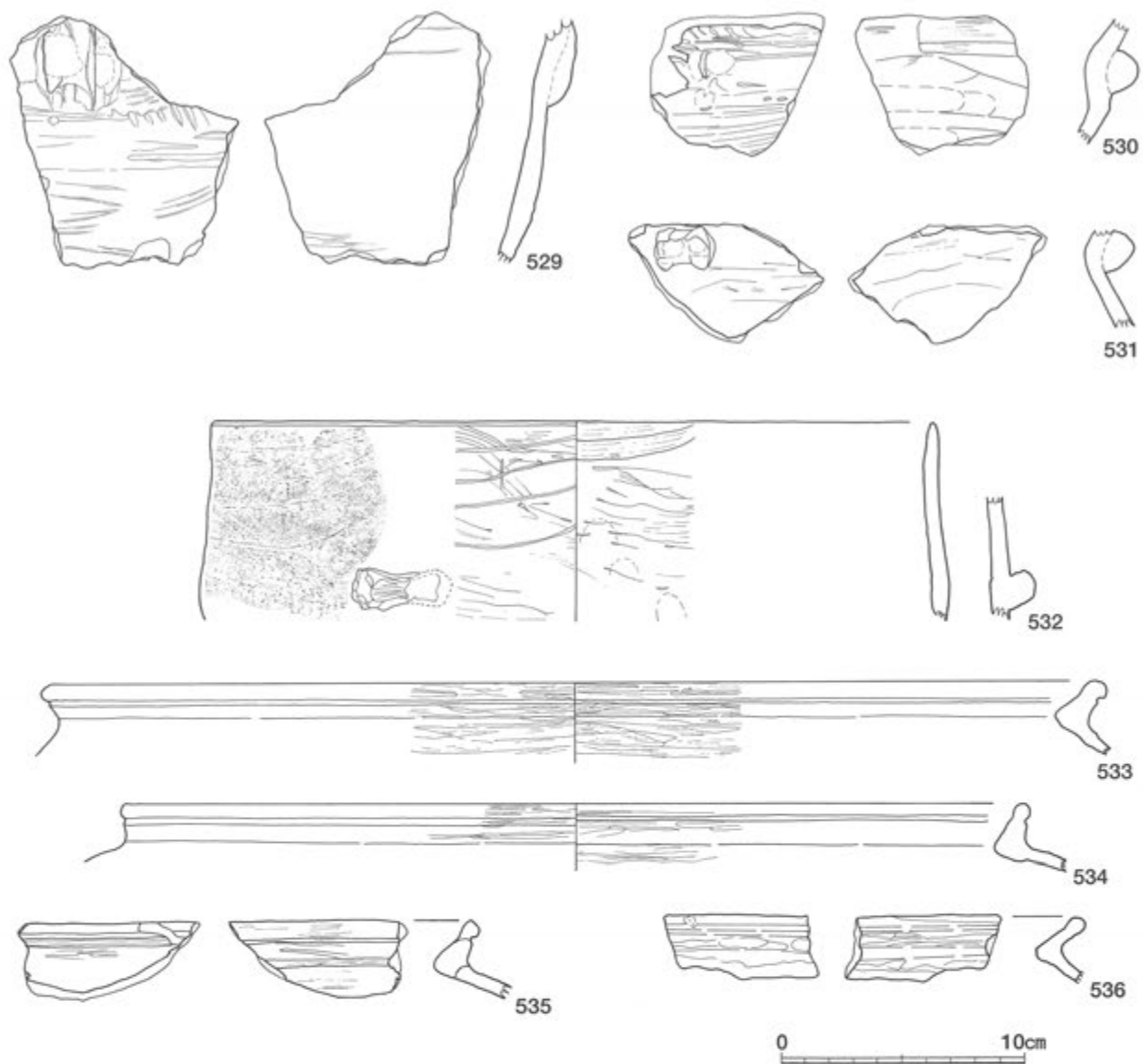




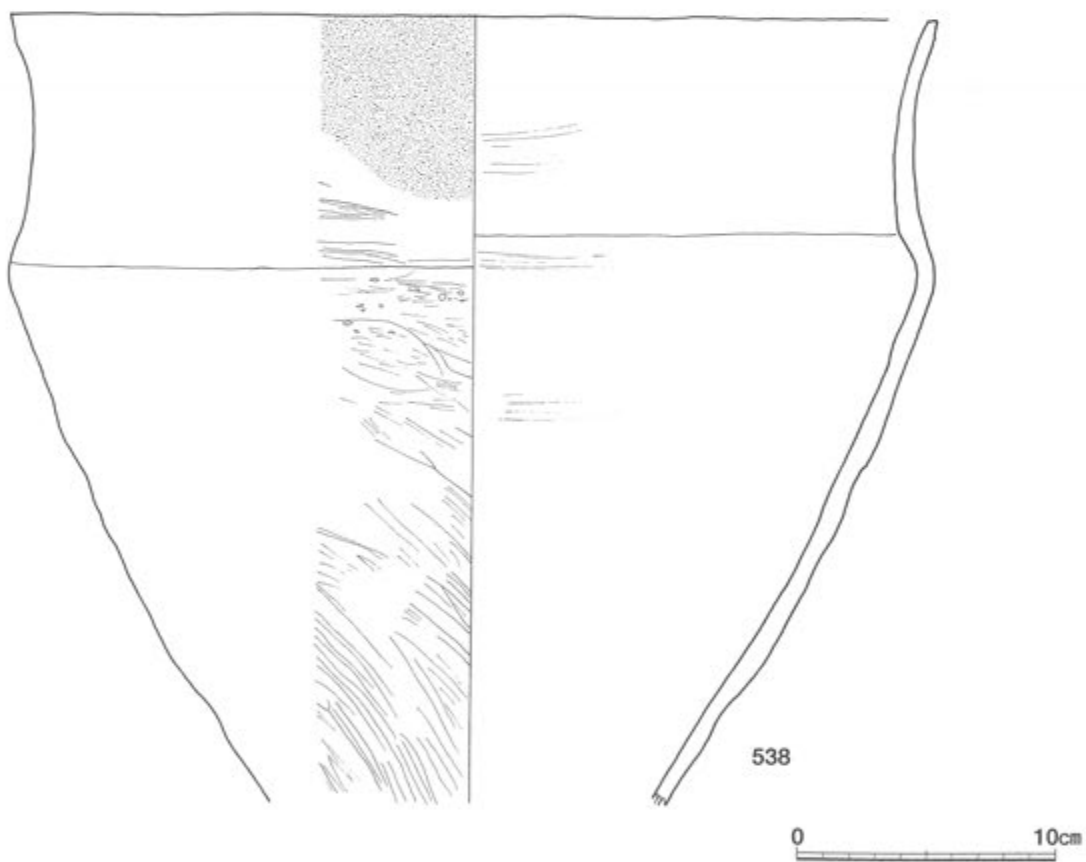
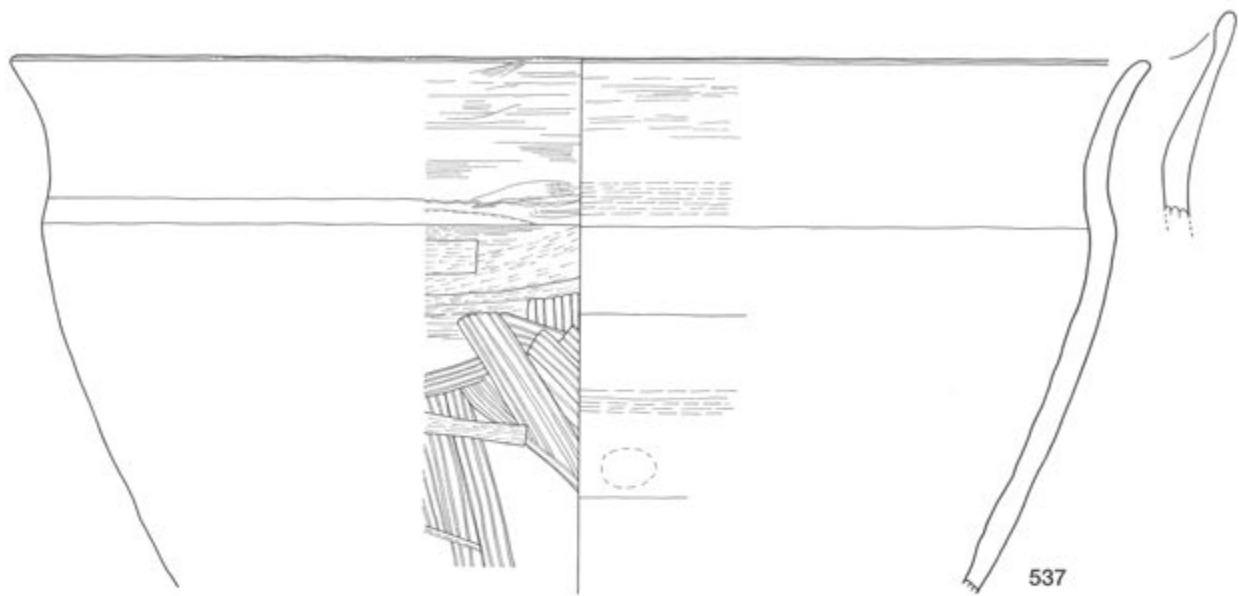
第100図 IV層遺物出土状況



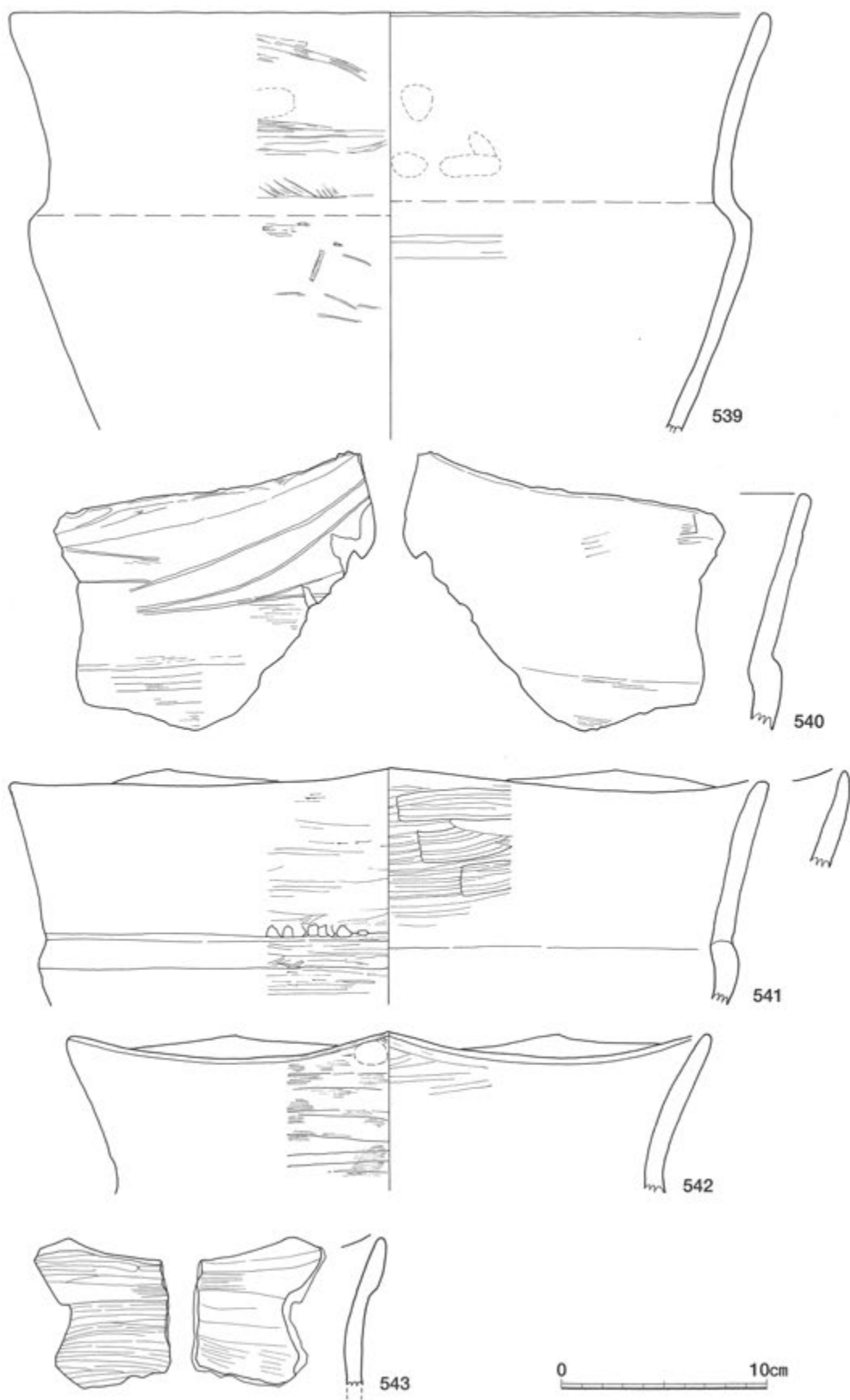
第101图 晚期土器 1



第102図 晚期土器 2



第103図 晚期土器 3



第104图 晚期土器 4

## 土器

Ⅲ～Ⅳ層にかけて、縄文時代晩期の土器がC・D-10・11区、C-12～17区、C・D-18～24区にかけて大量に出土した。

器形は、深鉢形土器・浅鉢形土器・椀形土器（まり）などであり、粗製土器・精製土器等がみられた。

521～532はリボン状の突起を付けたものである。521・522は外反する器形で、口縁部が長い土器である。頸部や肩部でそれぞれ「く」の字状に折れている。内外面ともナデ整形を施すものである。521のリボン状突起は縦位に、522は横位に施されている。

532は直口する口縁部をもつまり形土器である。

533～536は浅鉢形土器である。533・534は口縁部端部が丸みを帯び、口縁部外面に一条の沈線が施されている。口縁接合部の内面に僅かに稜線がみられる。内外面ともヘラ研磨で整形されている。

535・536も口縁端部が丸みを帯びているものである。

### 深鉢形土器

537～578は深鉢である。

537～539は口縁部が帯状に肥厚し、全体的に口縁部の口径が大きく開口したような器形で、口縁部が外反し、頸部や肩部がそれぞれ「く」の字状に折れるものである。

540～543は山形を呈する口縁部をもつもので、内外面ともナデ調整で整形を行っている。

544は口縁が直口し、口縁部が内弯するものである。口径は27cmを測る。内外面とも横位のヘラミガキ調整を行っている。

545は口縁部が短く「く」の字状に折れる器形のタイプである。横方向のナデ調整を行っている。復元口径は30.6cmを測る。

546は頸部と肩部が「く」の字状に直線的に折れるもので、外面は横方向のヘラナデで仕上げている。肩部口径は26.8cmを測る。

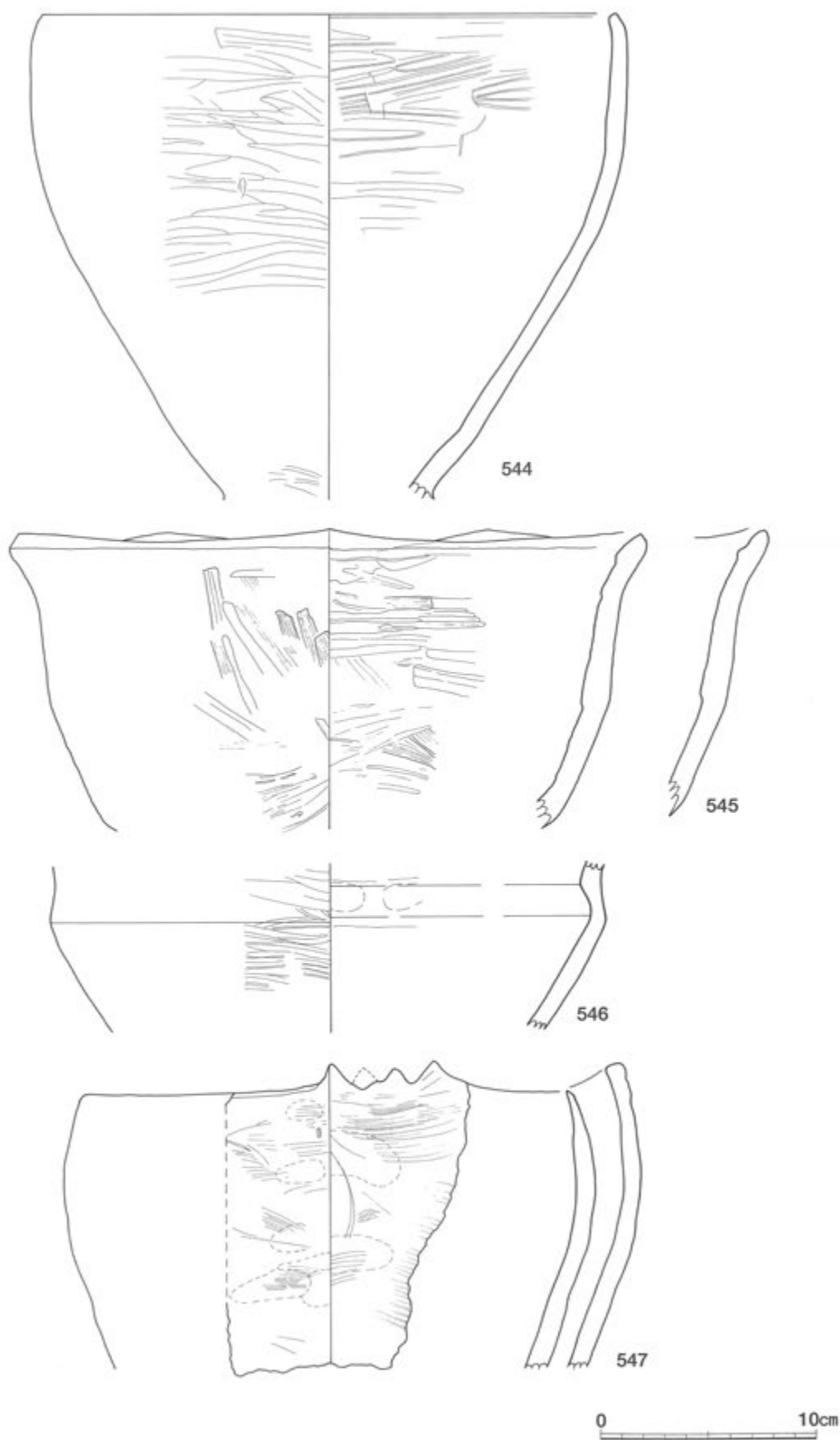
547は口唇部にやや小ぶりの山形突起を4個付したもので、復元口径23cmを測る。内外面ともナデ整形で調整している。

548～553は直口する口縁部をもつものである。外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・ナデ整形を行っている。548・550は外面に煤が付着している。

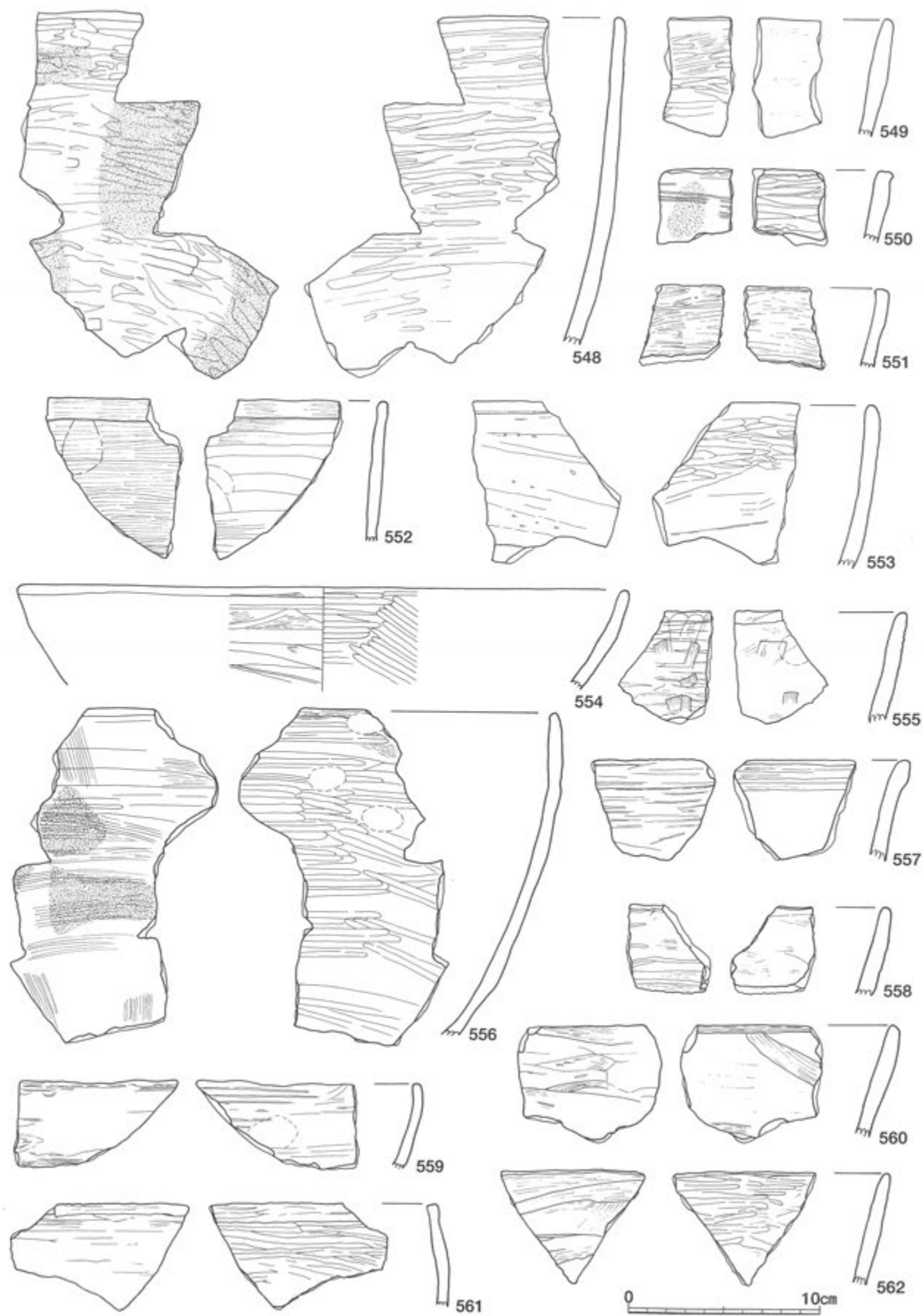
554～556は口縁部がやや内弯するもので、外面は横方向のヘラナデで仕上げ、内面はヘラミガキである。

563～569は外反する口縁部をもつものである。内外面ともナデ整形を行っている。

572は口縁部が内側に傾き、頸部は緩やかに内弯し、肩部から胴部にかけて「く」の字状に折れ、その径が口縁部より大きい形状を呈している。口唇部は平坦に調整している。内外面ともヘラミガキで仕上げている。



第105図 晚期土器 5



第106图 晚期土器 6



## 浅鉢形土器

579・580は頸部の口径の直径が33cm・28.5cmを測るものである。口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて立ち上がる、長い口縁部をもち、頸部で締まり肩部で「く」の字状に折れる器形を呈する。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

581は口径が35cmを測る大型の浅鉢形土器である。口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて立ち上がるもので、579・580よりやや寝る状態のものである。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

582・588・590は口縁部のみであるが、口唇部が低く玉縁が断面三角形状を呈する形状になるものである。復元口径は37cm・20cm・19.2cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

583～585は口唇部が玉縁状になり、肩部から口縁部にかけて短く立ち上がるものである。復元口径は、それぞれ38cm・33cm・32.6cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

586・587は口縁部の口唇部が玉縁状になり、口縁部が直口するものである。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。587の復元口径は31.2cmを測る。

589は口縁部が丸みをもちながら外反し、肩部で「く」の字状に折れる器形である。

591～598は口唇部が玉縁口縁で、肩部から口縁部にかけて短く立ち上がる精製された浅鉢形土器である。頸部で締まり、肩部で「く」の字状に折れる器形を呈する。復元口径は21.6cm～32.4cmを測る。内外面とも丁寧なヘラで研磨が施され調整されている。

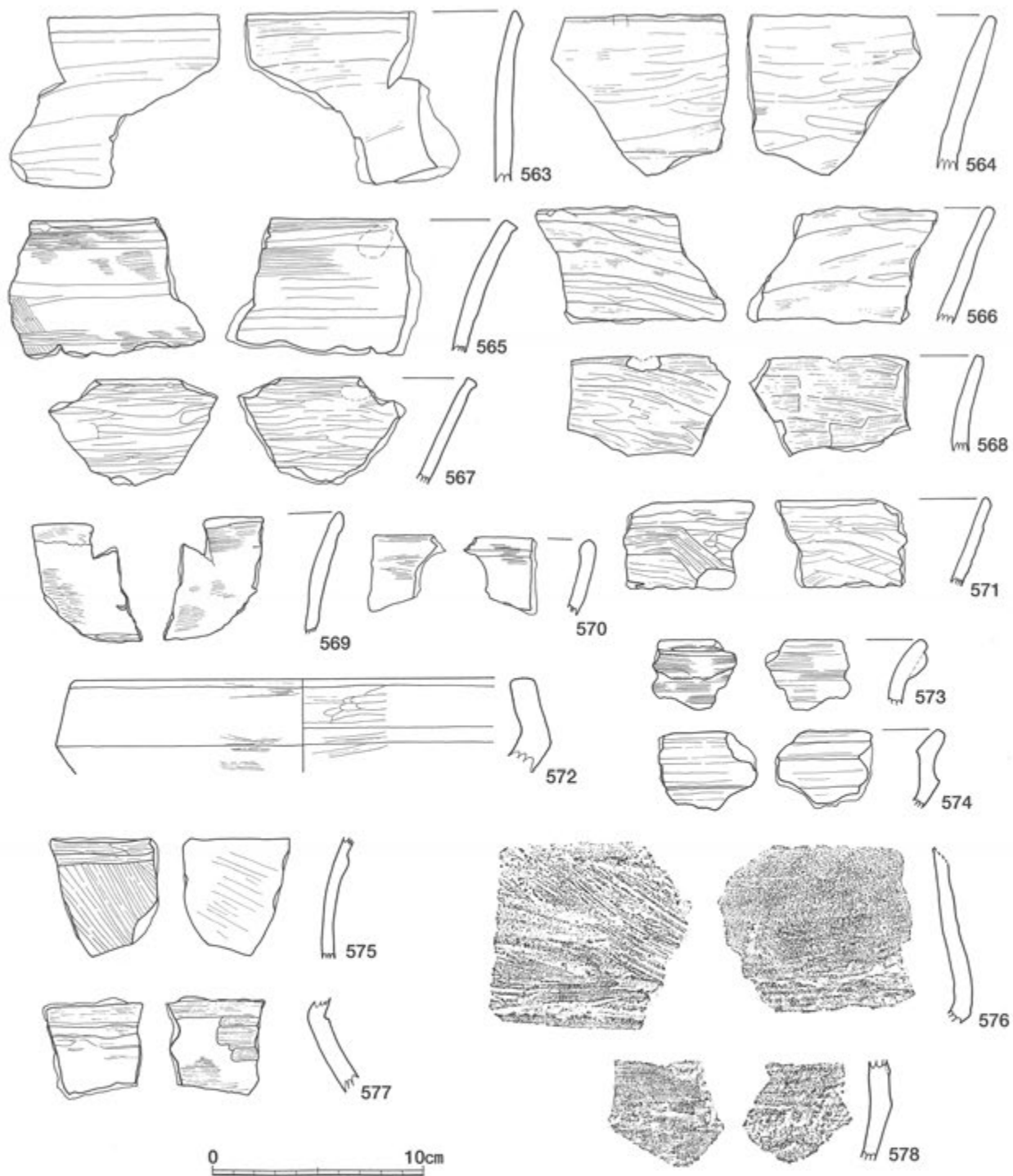
599はやはり口唇部が玉縁口縁であり、肩部が「く」の字状に折れる器形である。復元口径は24cmを測る。600も同様の玉縁口縁であり、復元口径は31.5cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

601～608は浅鉢形土器の口縁部である。いずれも玉縁口縁で外反している。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。608は口唇部に鱗状突起を付けている。

609～618は口縁部が玉縁口縁で、頸部が大きく「く」の字状に折れ、肩部から胴部にかけて半球状に曲がる形状の精製された浅鉢形土器である。復元口径は21cm～40.8cmを測る。内外面とも丁寧なヘラで研磨が施され調整されている。

610は内面に1条の浅い沈線がみられる。口縁接合部の内面に明瞭な稜をもつものや、接合部が丸みを帯びるものがある。

619～625も同様の口縁部である。



第107图 晚期土器 7

626～628は深鉢である。

626・627は口縁部が外反し、頸部が「く」の字状に折れるものである。胴部最大幅が口縁寄りにあり、稜をなすものである。内外面ともナデ整形を行っている。復元口径28.2cm, 25.5cmを測る。

629～632は鉢形土器である。深鉢と浅鉢の中間的な器高のものをまとめた。

629は口縁内側端部を肥厚させるものである。復元口径23cmを測り、外面はヘラケズリとナデ整形で調整し、内面はナデ整形を施している。630は口縁端部が平坦なもので、631は先細りするものである。復元口径18cm, 22.5cmを測る。共のナデ整形で調整されている。

643・644は玉縁口縁をもつもので、復元口径19.5cm, 21.2cmを測るもので、ナデ整形で鬼面調整を行っている。

645～649は玉縁口縁をもつ浅鉢形土器である。内外面とも丁寧なヘラナデが施されている。645は古墳時代の3号住居, 647は6号住居から出土しているが、古墳時代の住居埋土に混入したものと思われる。

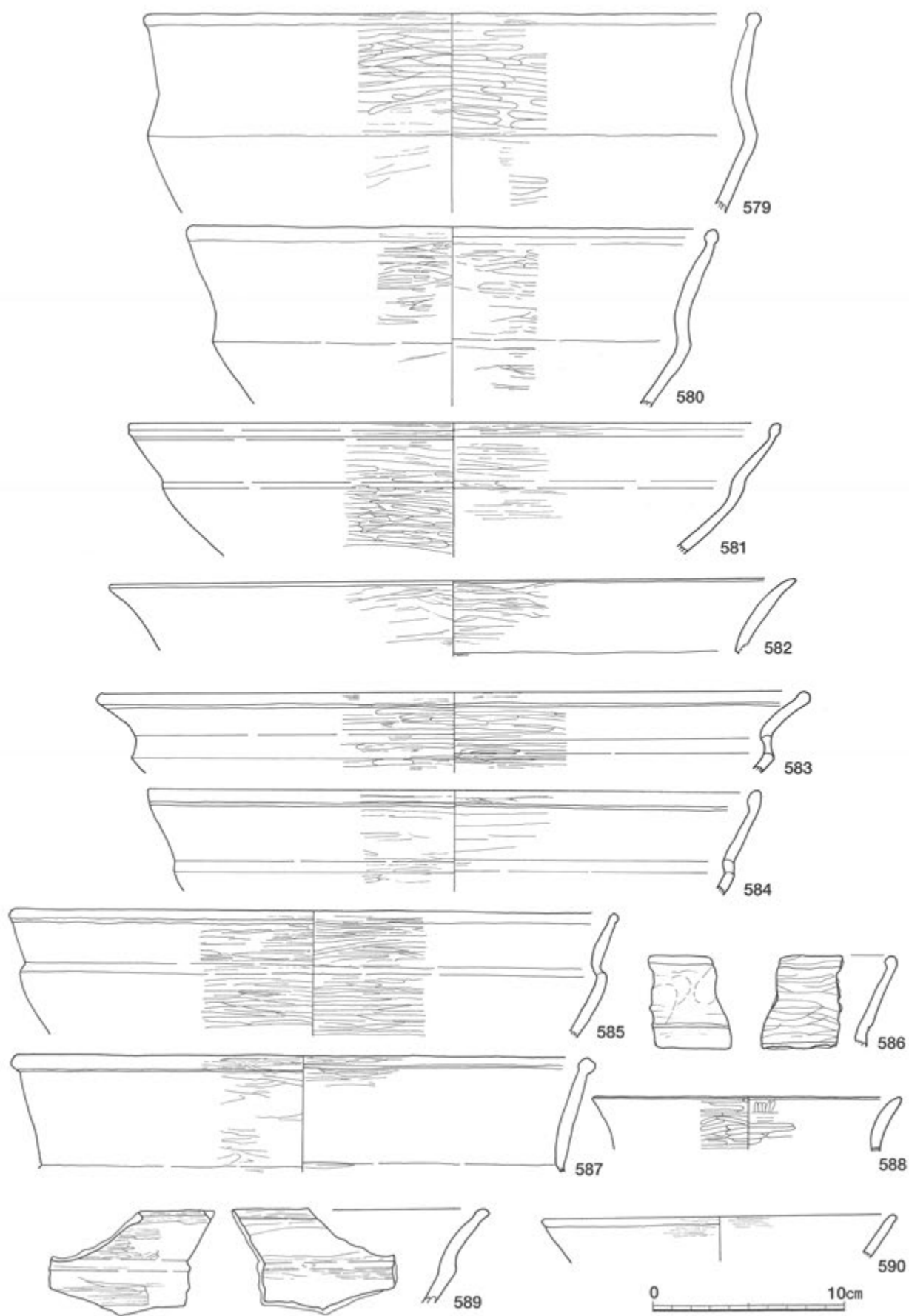
650は復元口径16cmを測る鉢形土器で、口縁端部が平坦で直口するものである。内外面とも丁寧なヘラミガキで器面調整が行われている。651・652も同様の口縁部である。

653・654・656・660は椀形土器（マリ）である。半球形の薄手で胴部が深い土器で、653は復元口径17cm, 656は15cm, 660は13cmを測る。いずれも丁寧なヘラミガキで器面調整が施され、653・656・660の外面には赤色顔料が付着している。

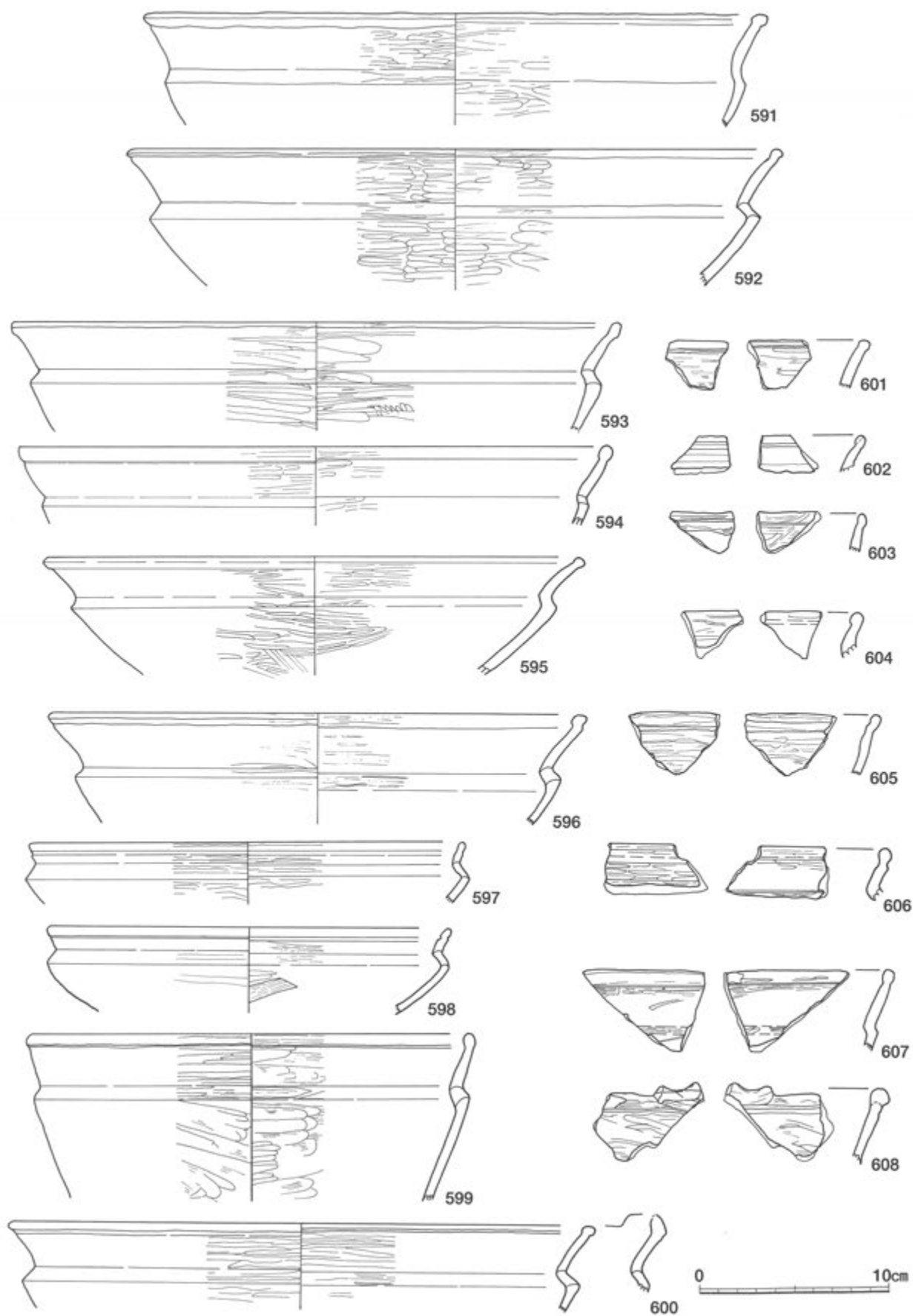
661～675は縄文時代晩期の土器底部である。深鉢形土器・浅鉢形土器など器種による分類が困難なため、ここでは一括して取り上げた。661は丸底であり、内外面とも丁寧なヘラ研磨が調整が施されていることから浅鉢形土器の底部の可能性はある。

662～675は平底である。662は上げ底気味の底部で、外開きの胴部に移行するものである。663～675は平底で、張り出しのみられる底部からすぐ外開きの胴部に移行するもの（662～672・674）、接地面から僅かに立ち上がり外開きになるもの（673）、上げ底気味で高台状の底部になる675がみられる。

676は組織痕土器である。組織痕土器には圧痕の種類として網目、席目、布目、籠目の4種類が知られているが、676は網目圧痕の組織痕土器である。網目の一節の長さは0.5cmを測る。



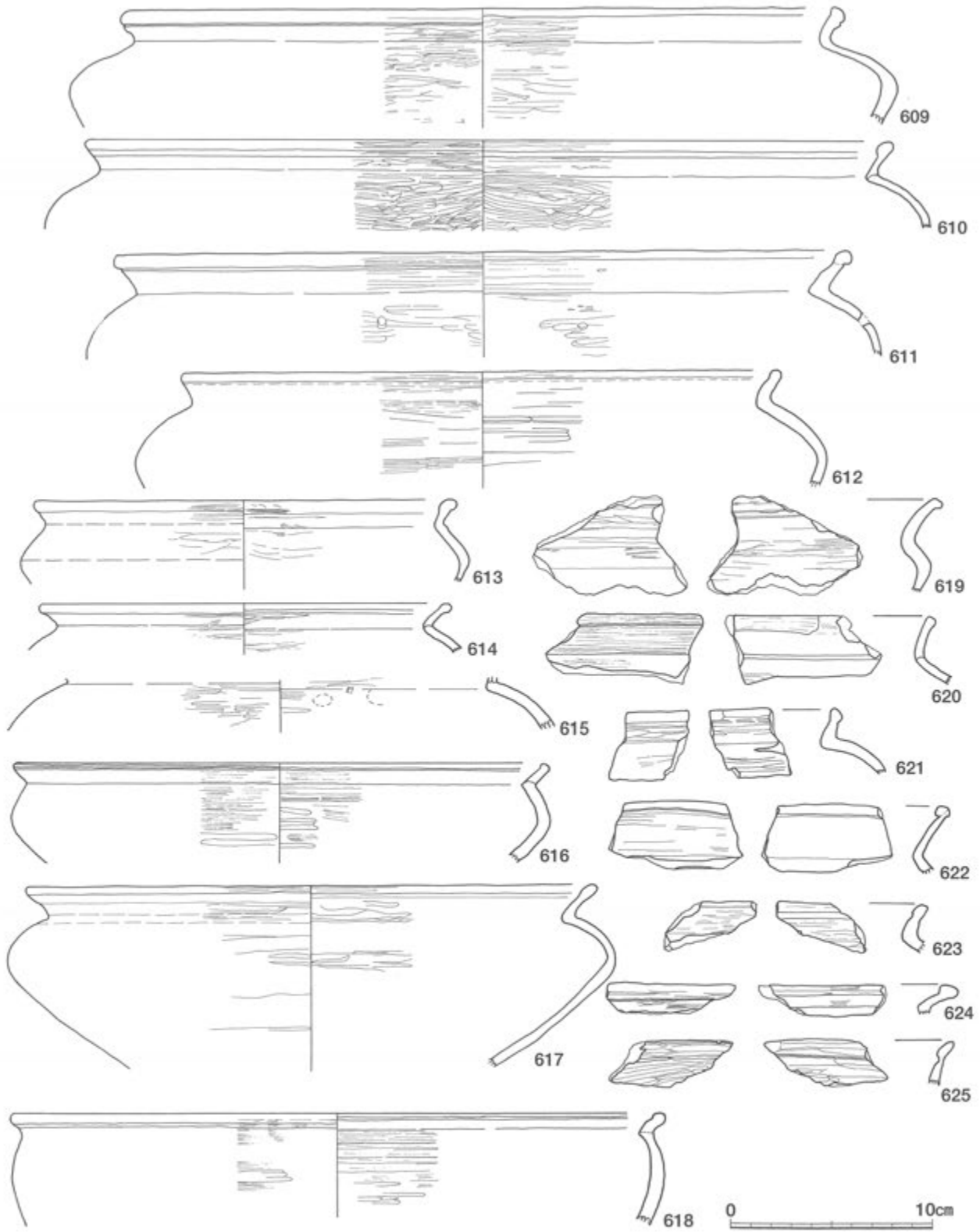
第108图 晚期土器 8



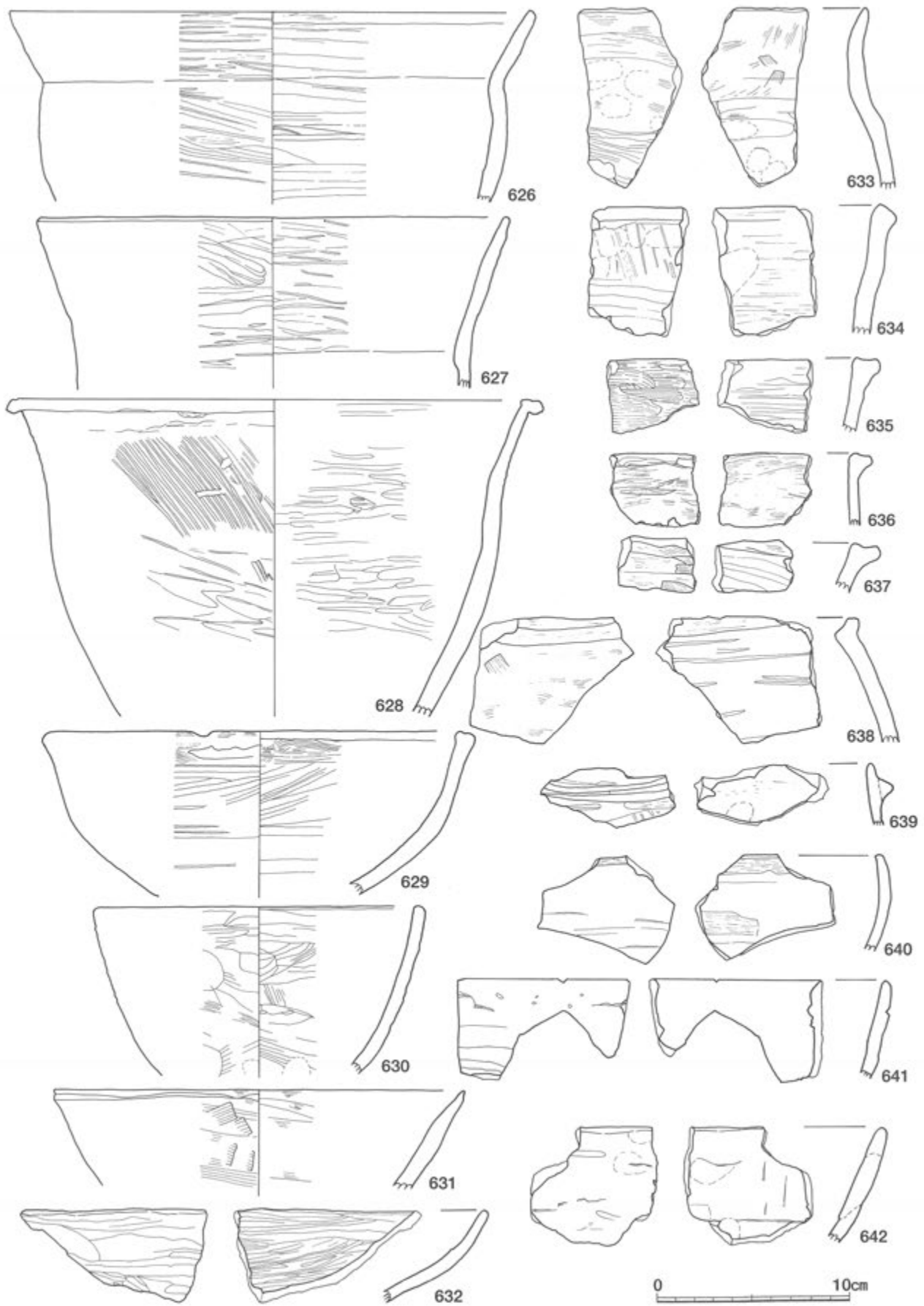
第109図 晚期土器 9

縄文時代晩期土器口縁部口径観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	分 類	口径 (cm)	取上番号	備 考
101	521	D-18・19	深鉢形土器	27.8	5350	リボン貼付け
	522	C-14	深鉢形土器	35.4	546	リボン貼付け
102	532	C-15	深鉢形土器	30.6	2498	
	533	C-18	浅鉢形土器	43.8	2398	
	534	C-12	浅鉢形土器	37.8	739	
103	537	B-13	深鉢形土器	44.1	1903	
	538	B-13	深鉢形土器	36.0	1420	
104	539	E-23	深鉢形土器	36.9	1194	
	541	C-13・14	深鉢形土器	36.6	1914	
105	544	C-18	深鉢形土器	27.0	7345	
	545	C-11	深鉢形土器	30.6	2709	
	547	D-19	深鉢形土器	23.0	7345	
106	554	D-22	深鉢形土器	32.4	8192	
107	572	E-23	深鉢形土器	22.5	1142	
108	579	C-23	浅鉢形土器	33.0	5136	
	580	C-23	浅鉢形土器	28.5	5130	
	581	D-20	浅鉢形土器	34.8	6130	
	582	C-20	浅鉢形土器	37.0	1915	
	583	C-18	浅鉢形土器	38.0	15	
	584	C・D-20	浅鉢形土器	33.0	16	
	585	C-14	浅鉢形土器	32.6	2546	
	587	E-23	深鉢形土器	31.2	2806	
	588	C-19	深鉢形土器	20.0	5596	
	590	C-22	鉢形土器	19.2	3433	
109	591	C-13	浅鉢形土器	33.0	1461	
	592	B-12	浅鉢形土器	35.1	1468	
	593	C-20	浅鉢形土器	32.4	6383	
	594	D-20	浅鉢形土器	31.5	6672	
	595	D-20	浅鉢形土器	28.8	12	
	596	C-16	浅鉢形土器	28.8	268	
	597	C-21	浅鉢形土器	23.1	6541	
	598	C-21	浅鉢形土器	21.6	6949	
	599	D-20	浅鉢形土器	24.0	6727	
	600	C-20	浅鉢形土器	31.5	1966	
110	609	C-23	浅鉢形土器	36.3	1574	
	610	D-22	浅鉢形土器	40.5	7971	
	611	D-19	浅鉢形土器	36.9	5657	穿孔あり
	612	D-21	浅鉢形土器	30.0	6647	
	613	C-14	浅鉢形土器	21.0	2134	
	614	D-21	浅鉢形土器	20.7	6992	
	616	C-20	浅鉢形土器	27.0	1963	
	617	D-19	浅鉢形土器	27.3	6300	
111	618	C-21	浅鉢形土器	33.0	1840	
	626	C-20	深鉢形土器	28.2	1951	
	627	C-20	深鉢形土器	25.5	1947	
	628	C-13	深鉢形土器	28.8	1978	
	629	C-16	浅鉢形土器	23.0	4617	
	630	C-14	鉢形土器	24.0	1901	
112	631	C-19	鉢形土器	21.8	6477	
	643	E-23	浅鉢形土器	19.2	1187	
	644	C-18	浅鉢形土器	21.0	2524	
	650	D-21	浅鉢形土器	16.2	160	
	653	D-21	浅鉢形土器	16.8	70	赤色顔料付着
	656	D-21	浅鉢形土器	15.0	64	赤色顔料付着
	659	E-24	鉢形土器	16.8		
	660	D-21	浅鉢形土器	12.8	31	赤色顔料付着

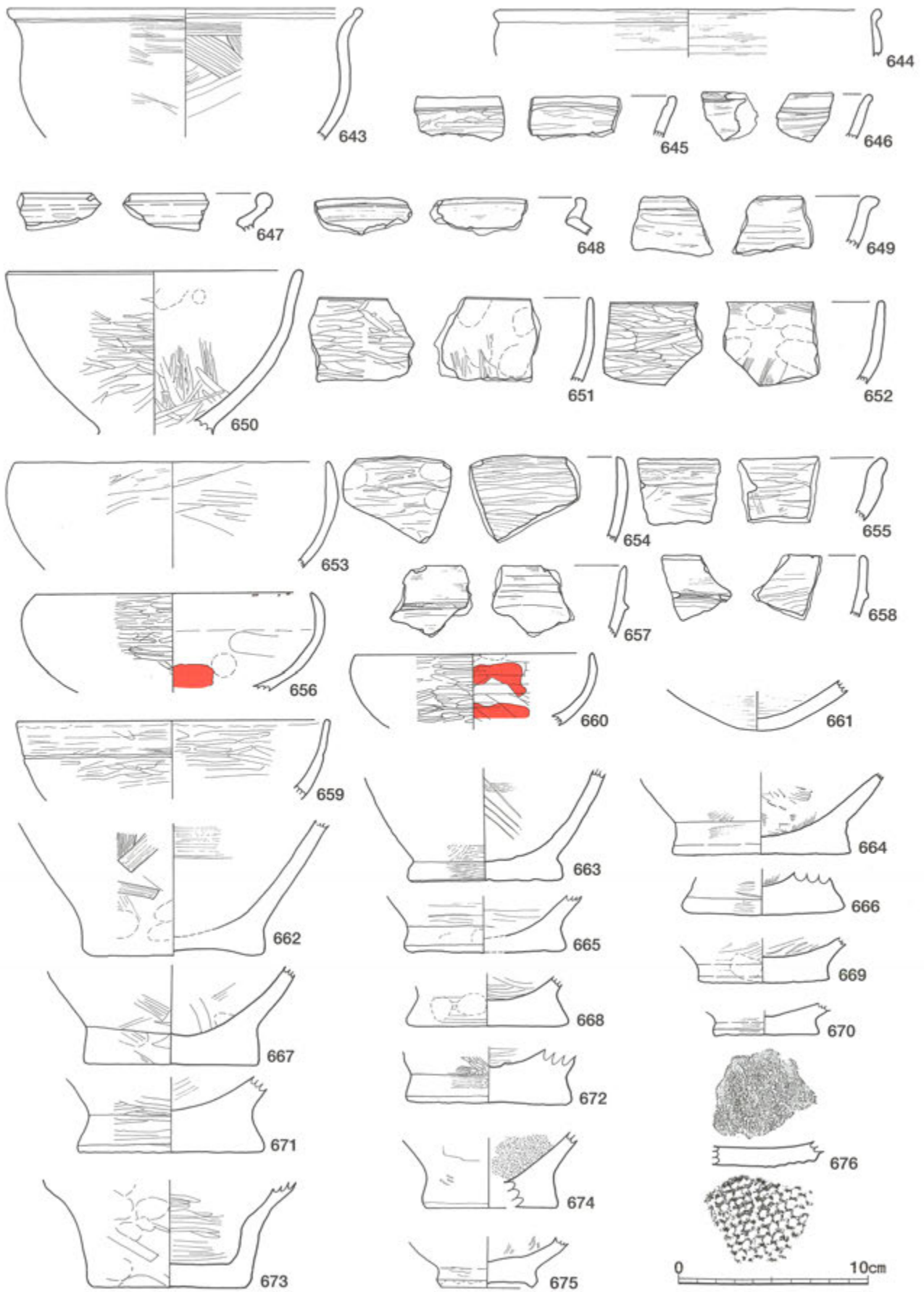


第110图 晚期土器10



第111图 晚期土器11





第112图 晚期土器12

第19表 縄文土器観察表 (1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考	
						外面	内面		外面	内面			
101	521	D18-D19	IVa	深鉢	口~胴	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい赤褐色	5350他	突帯	
	522	C14		深鉢	口~胴	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黄褐色	546他	リボン貼付け	
	523	C23	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	暗赤褐色	にぶい黄褐色	1589他	リボン貼付け スス付着	
	524	D32	IVa	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	赤褐色	褐色	7182他	リボン貼付け	
	525	D19	IIIb	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	6291	リボン貼付け	
	526	D20	IVa	深鉢	胴部	工具ナデ		qz	黒褐色	褐色	6756他	リボン貼付け	
	527	D18	IIIb	深鉢	胴部	貝殻条痕		fl,qz	にぶい褐色	明黄褐色	7309	リボン貼付け	
	528	E23	IVa	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	fl,qz	黒褐色	灰褐色	2845	リボン貼付け	
102	529	C18		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	fl,礫	にぶい黄褐色	明褐色	2482	リボン貼付け	
	530	D18		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	5398	リボン貼付け	
	531	C20	IIIb	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	灰黄褐色	褐色	6332	リボン貼付け	
	532	C15	IV	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	bi,fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2498他	リボン貼付け	
	533	C18	IVa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2398		
	534	C12	IV	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	739		
	535	C10	IVa	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2289		
	536	C12	IVa	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	790		
103	537	B13	IV	深鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	褐色	褐色	1903他		
	538	B13	IV	深鉢	口~胴	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1420他	スス付着	
104	539	E23	IIIb	深鉢	口~胴	ナデ	ナデ	qz	褐色	にぶい黄褐色	1194他		
	540	C13	IV	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1317他		
	541	C13-14	IV	深鉢	口縁	ナデ	工具によるナデ	qz	赤褐色	黒褐色	1914他		
	542	C20	IIIb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	浅黄色	2218他		
	543	C20	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	褐色	2125他		
105	544	C18	IV	深鉢	口~胴	ナデ	工具ナデ	fl,qz	黒褐色	灰黄褐色	7345他		
	545	C11	IV	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	明黄褐色	にぶい褐色	2709他		
	546	D18	IVa	深鉢	胴部	工具ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい褐色	黒褐色	5711他		
	547	D19	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	黒褐色	暗灰黄色	7345他		
106	548	C23-D22	IVa, IIIb	深鉢	口~胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5031他	スス付着	
	549	D21	IIIb	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	fl,qz	褐色	褐色	6145		
	550	C16	IV	深鉢	口縁	ミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	2710	スス付着	
	551	D20	IIIb	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6763		
	552	C20	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6386	条痕あり	
	553		1住	深鉢	口縁	工具ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	122		
	554	D22	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	8192他		
	555	D21	IVa	深鉢	口縁	工具ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	7204		
	556	C15-16	IV	深鉢	口~胴	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	274他	スス付着	
	557	C22	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	fl,qz	赤褐色	赤褐色	1743		
	558	D21	IIIb	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	明赤褐色	明赤褐色	5986		
	559	D21	IIIb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6153		
	560	C20	IVa	深鉢	口縁	ヘラケズリ	ナデ	qz,礫	にぶい褐色	黒褐色	2054		
	561	D18	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	灰褐色	にぶい褐色	5422		
	562	C19	IIIb	深鉢	口縁	ナデ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	3545		
107	563	E23	IIIb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	褐色	土器集中部		
	564	D21	IIIb	深鉢	口縁	工具ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6138		
	565	D19	IIIa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6227		
	566	C20	IVa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	2202		
	567	D22	3住	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄色	にぶい黄色	25		
	568	D22	3住	深鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	暗灰黄色	19		
	569	D21	IVb	深鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	6648		
	570	D21	IVa	深鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	7208		
	571	D21	IIIb	深鉢	口縁	ヘラナデ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	暗褐色	6189		
	572	E23	IIIb	鉢	口縁	ミガキ	ヘラミガキ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	1142		
	573	C18	IIIb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい黄褐色	3563		
	574	C16	IV	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	205		
	575	C16	IV	深鉢	胴部	ヘラケズリ	ナデ	qz	にぶい褐色	黄褐色	206		
	576		3住	深鉢	胴部	ハケメ	ナデ	qz	褐色	にぶい黄褐色	100		
	577	E23	IIIb	深鉢	胴部	ケズリ	ハケメ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1173		
	578		3住	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	褐色	にぶい黄褐色	74		
	108	579	C23	IVa	浅鉢	口~胴	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5136他	
		580	C23	IVa	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5130他	
581		D2	IIIb	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6130		
582		C20	IVa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	1915		
583		C~D18-23	IIIb	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	一括		
584		C-D20	IVa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	暗灰黄色	暗灰黄色	16他		
585		C14	IV	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	褐色	にぶい赤褐色	2546他		
586		D21	IVa	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	褐色	にぶい黄褐色	6997		
587		E23	IIIb	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2806		
588		C19	IVa	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	暗褐色	黒褐色	5596		
589		C16	IV	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ハケメ	qz,ho	黒褐色	褐色	260他		
590		C22	IVa	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	3433		
109	591	C13	IV	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	1461他		
	592	B12	IV	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい褐色	1468他	入佐	
	593	C20	IVa	浅鉢	口~胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6383他		
	594	D20-21	IIIb	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6672他		
	595	D20	5住	浅鉢	口~胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	12他		
	596	C16	IV	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz,ho	黒褐色	暗灰黄色	268		
	597	C21	IIIb	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6541		
	598	C21	IVa	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6949他		

第20表 縄文土器観察表 (2)

挿入番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	調整		胎土	色調		取上番号	備考
						外面	内面		外面	内面		
109	599	D20	Ⅲb	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6727	
	600	C20	Ⅳa	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	1966他	
	601	C18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい橙色	2505	
	602	C13	3住	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	一括	
	603	D19	Ⅳa	浅鉢	口縁	横ナデ	ナデ	qz	黒褐色	褐灰色	5671	
	604	C21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい褐色	褐灰色	1905	
	605	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2396	
	606	D22	3住	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	61	
607	D20	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	6730		
608	C12	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz,ho	暗灰黄色	灰褐色	742		
609	C23	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz,ho	灰黄褐色	褐色	1574他	入佐	
610	D22	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒褐色	黒褐色	7971		
611	D19	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5657他	入佐 穿孔有り	
612	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6647		
613	C14	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ナデ	fl,qz	黒褐色	暗灰黄色	2134		
614	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐灰色	6992他		
615	D20	5住	浅鉢	胴部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	褐灰色	褐灰色	37		
616	C20	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	明赤褐色	にぶい黄色	1963		
617	D19	Ⅲb	浅鉢	口~胴	ミガキ	ミガキ		黒褐色	暗灰黄色	6300他		
618	C21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒褐色	黒褐色	1840		
619	D20	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐灰色	6465		
620	D19	Ⅳa	浅鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	明褐色	明褐色	5410		
621	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	fl,qz	褐灰色	灰褐色	1193他		
622	D21	4住	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	25		
623	D18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒褐色	黒褐色	5718		
624	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒色	黒色	6058		
625	D18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		褐灰色	褐灰色	5362		
626	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	1951		
627	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	褐灰色	1947他		
628	C13・15	Ⅳ	甕	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	黒褐色	褐灰色	1978他		
629	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ケズリ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	4617		
630	C14	Ⅳ	鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz,ho	橙色	褐灰色	1901他		
631	C19	Ⅲb	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz,礫	黒褐色	にぶい橙色	6477		
632	C20	Ⅳa	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	暗赤褐色	にぶい赤褐色	1919		
633	C20	Ⅳa	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	2130他		
634	D21	Ⅳa	甕	口縁	ケズリ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6680		
635	C14	Ⅳ	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	灰褐色	にぶい褐色	540		
636	C21	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒色	にぶい赤褐色	6542		
637	B15	Ⅳ	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	明褐色	432		
638	C16	Ⅳ	甕	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	灰褐色	黒褐色	1775		
639	C22	Ⅳa	鉢	口縁	ナデ	ハケメ	qz,礫	黒褐色	褐色	1719		
640	C21	Ⅲ	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6530		
641	D21	4住	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい橙色	褐灰色	139他		
642	D21	Ⅳa	鉢	口縁	工具ナデ	ナデ	qz,礫	橙色	にぶい黄褐色	6602		
643	E23	Ⅲb	浅鉢	口~胴	工具ナデ	工具ナデ	qz	にぶい褐色	黒褐色	1187		
644	C18	Ⅳa	浅鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz,ho	にぶい黄褐色	褐灰色	2524他		
645	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	明赤褐色	2387		
646	D22	3住	浅鉢	口縁	ミガキ	工具ナデ	qz	明褐色	にぶい褐色	33		
647		6住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ナデ	fl,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	一括		
648	C21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	橙色	褐色	1855		
649	D20	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	褐灰色	にぶい褐色	6764	黒色磨研	
650	D21	4住	浅鉢	口~胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	にぶい赤褐色	160他		
651	D21・22	4住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	明赤褐色	明赤褐色	146		
652	D21・22	4住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	指ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	90		
653	D21・22	4住	浅鉢	口~胴	ヘラミガキ	ナデ	qz	にぶい褐色	黒褐色	70	丹の付着	
654	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	黒色	褐色	6589		
655	E23	Ⅲb	浅鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	713		
656	D21	4住	浅鉢	口~胴	ヘラミガキ	ココナデ	qz	黒色	黒褐色	64他	赤色顔料付着	
657	D22	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	5864		
658	D22	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	ho,qz	にぶい赤褐色	明黄褐色	5854		
659	E24	表層	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			
660		4住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	指ナデ	ho,qz	黒色	にぶい黄褐色	31他	赤色顔料付着	
661	C18	Ⅳa	浅鉢	底部	ミガキ	ミガキ	fl,qz	黒色	黒褐色	2515		
662	C18	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	工具ナデ	qz,礫	にぶい褐色	にぶい褐色	2453他		
663	D21	Ⅲb・Ⅳa	甕	底部	ナデ	ハケメ	ho,fl,qz,礫	にぶい黄褐色	灰黄褐色	6625他		
664	C18	Ⅳa	甕	底部	ハケメ	工具ナデ	fl,qz	褐色	褐色	2363		
665	C20	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz	灰黄色	明黄褐色	2049他		
666	C22	Ⅳa	甕	底部	ナデ	工具ナデ	fl,qz,礫	明赤褐色	明赤褐色	1735		
667	C20	Ⅳa	甕	底部	ナデ	ナデ	qz,礫	褐色	浅黄色	5269		
668	D20	Ⅳa	甕	底部	指ナデ	ナデ	qz	浅黄色	浅黄色	8134		
669	C22	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz,礫	褐色	にぶい褐色	5262		
670	C21	Ⅳa	甕	底部	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	3372		
671	C18	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい褐色	明黄褐色	2409		
672	C20	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	3228		
673	C12	Ⅳa	甕	底部	ナデ	ナデ	qz	明黄褐色	灰黄色	2744		
674	D22	3住	浅鉢	底部	工具ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい黄褐色	24他	炭化物付着	
675	E23	表層	壺	底部	ナデ	工具痕	qz,ho	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			
676		5住	甕	底部	筵圧痕		ho,fl,qz	浅黄褐色	暗灰黄色	38	筵圧痕文	

## 石器

北原中遺跡のⅢ・Ⅳ層からは縄文晩期の土器と共伴して、石鏃・スクレイパー・石錐・石核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・軽石製品などが出土した。

石材は黒曜石・頁岩・安山岩・チャート・瑪瑙・花崗岩・砂岩などであり、黒曜石は肉眼的観察により県内産の三船・上牛鼻・平木場、県外産の腰岳・椎葉川などがみられた。

### 石鏃 (第115図, 677~702)

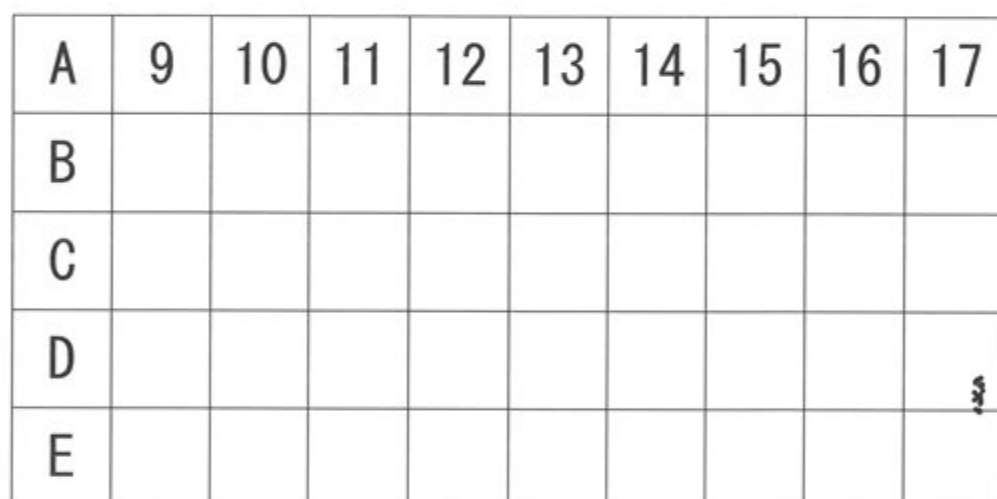
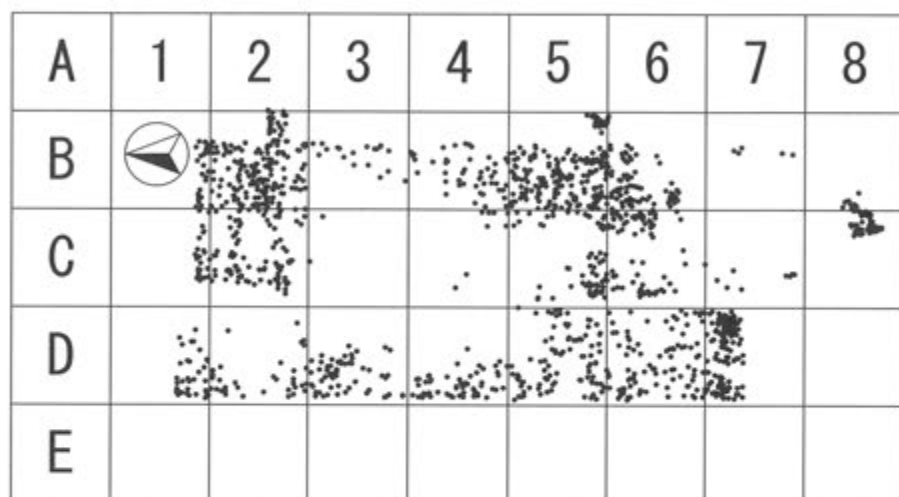
北原中遺跡の4層からは、17点の石鏃が出土した。様々な素材が用いられており、五角形鏃が9点、平基鏃が5点その他形状の石鏃が3点と3タイプに分類し、鷲ヶ迫遺跡同様の分類を行った。

677と678は黒曜石を用いており、677は三船産黒曜石、678は椎葉川産黒曜石を素材としている。677はやや小型で、左側辺がわずかに鋸歯状を呈している。678は、側辺が外弯し、張り出しがあまり目立たない。右側辺は鋸歯状の調整剥離が施されている。679は頁岩を用いている。側辺が直線的で、わずかに鋸歯状を呈する。逆刺はやや丸く、側辺下部に張り出しを持つ。680・681はハリ質安山岩を用いている。680は側辺が弯曲し、側辺下部に張り出しを持つ。逆刺はすどい。681は側辺の上部に張り出しが作られ、逆刺は鈍く、粗いタッチで調整が施されている。682は、暗緑灰色のチャートを用いている。側辺がわずかに内弯し、下部に張り出しをもつ。逆刺は丸く鈍い。683・684は安山岩を用いている。683は脚部付近の側辺に、深い剥離を施し張り出しを作っている。粗いタッチの剥離により、側辺に鋸歯状を呈している。684は、側辺下部にごくわずかな張り出しがみられる。側辺は直線的で逆刺は丸い。685は淡黄色の瑪瑙を用いているが、上部は欠損している。側辺中央部に張り出しを呈するが、左右非対象である。五角形鏃は逆刺に若干の差がみられるが、いずれも浅く、広い抉りを呈している。686~691は平基鏃である。686・688は玉髓を用いている。686は粗く調整剥離が施されており、側辺は不規則な波状を呈している。逆刺は鈍く丸い。

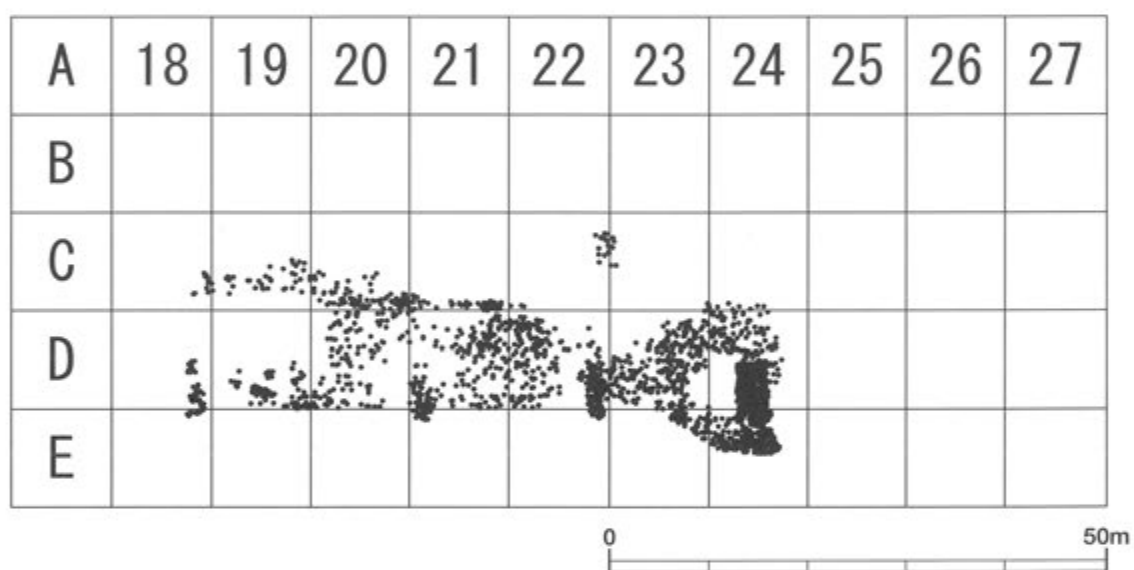
688はほぼ正三角形を呈しており、側辺はわずかに外弯する。調整痕により鋸歯状を思わせる。687はハリ質安山岩を用いている。側辺の中央部にわずかな角が入り、五角形鏃を思わせる形態である。逆刺は丸い。689・691は先端部が欠損している。いずれも安山岩を用いている。689は大まかな調整により側辺が作られており、やや外弯する。鋸歯状を呈しているように見える。691はやや小型で、側辺の中央部から大きく外弯している。その他の形状の石鏃は、690・692・693の3点である。690は安山岩を用いやや厚みがある。側辺が外弯し逆刺は丸い。抉りが2箇所剥離によって浅く作られており、アルファベットの「M」を呈している。692は安山岩を用いており、先端部が欠損したものである。側辺部が直線状を呈しているが、左右の脚部に大きく差がみられる。693は上牛鼻産黒曜石を用いている。側辺が直線を呈し、先端部が欠損しているようにみえるが、細かな調整剥離により、逆刺が形成されていることが観察された。右脚部が欠損している。

Ⅲ層からは9点の石鏃が出土した。鋸歯状のもの1点、五角形鏃6点、欠損品2点である。

694は頁岩を用いたやや厚みのあるものである。側辺が内弯し、表裏からの調整剥離により、わずかに鋸歯状を呈する。抉りは浅く大まかな剥離によって不規則につくられている。695~699は五角形鏃である。695~697は、浅い抉りの入ったものである。いずれも暗青灰色のチャートを用いている。側辺部が直線状を呈し、695は張り出しが特に強い。698・699は平基の五角形鏃である。698は、暗緑色のチャート、699はハリ質安山岩を用いている。側辺部での調整が粗く、わずかに張り



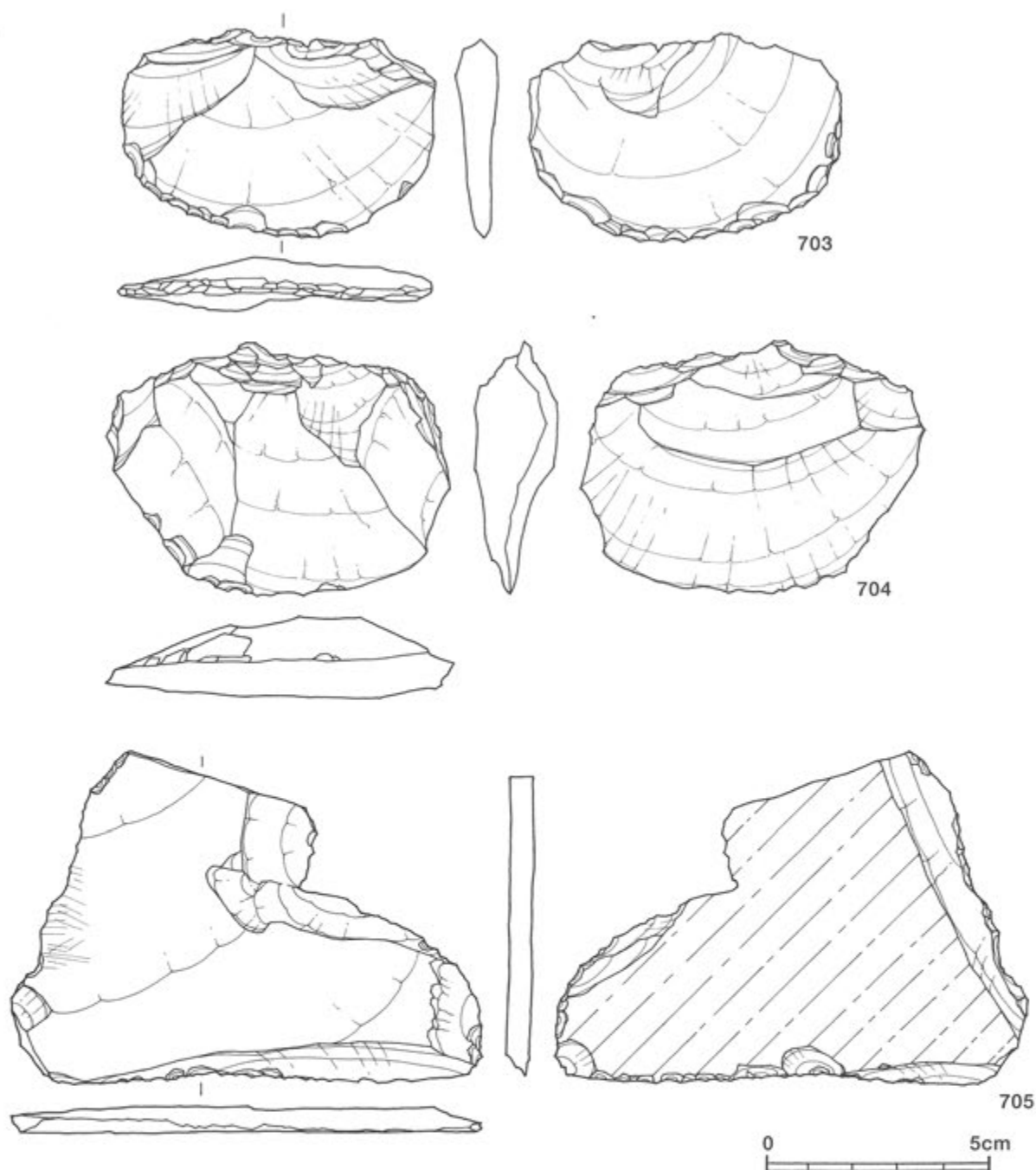
第113図 石器出土状況 (1)



第114図 石器出土状況 (2)



第115図 石鏃



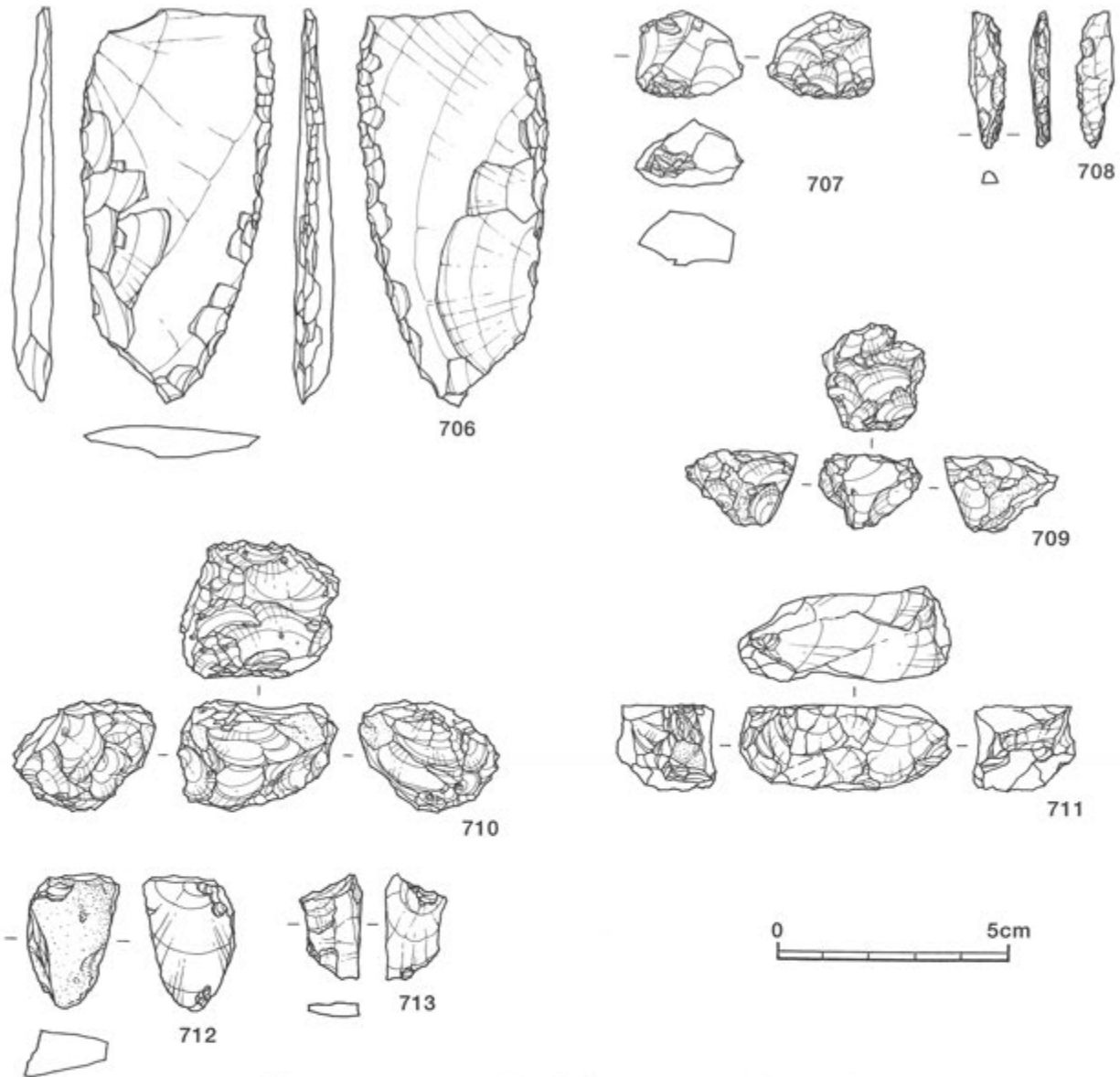
第116図 スクレイパー (1)

出しを持つ。いずれも逆刺は丸い。700～702は欠損品である。700は桑ノ木津留産黒曜石を素材とし先端部が欠損している。調整が粗く側辺が不定形である。浅く抉りが入り、断面に厚みがある。701は乳白色の瑪瑙を用いた先端部のみ残るものである。側辺が外弯し逆刺が丸い。調整が粗く、右側辺には階段状の剥離がみられる。702は、三船産黒曜石を用い、左脚部を欠損したものである。側辺が外弯し、上部は鋸歯状を呈する。

スクレイパー (第116・117図, 703～706)

4点出土した。頁岩を用いたもの3点、粘板岩1点である。厚みは薄く幅広の剥片を用いている。703・704は半円に近い形状の横長剥片を用いている。いずれも右側辺から下辺、右側辺にかけて刃





第117図 スクレイパー (2) ・二次加工剥片・石錐

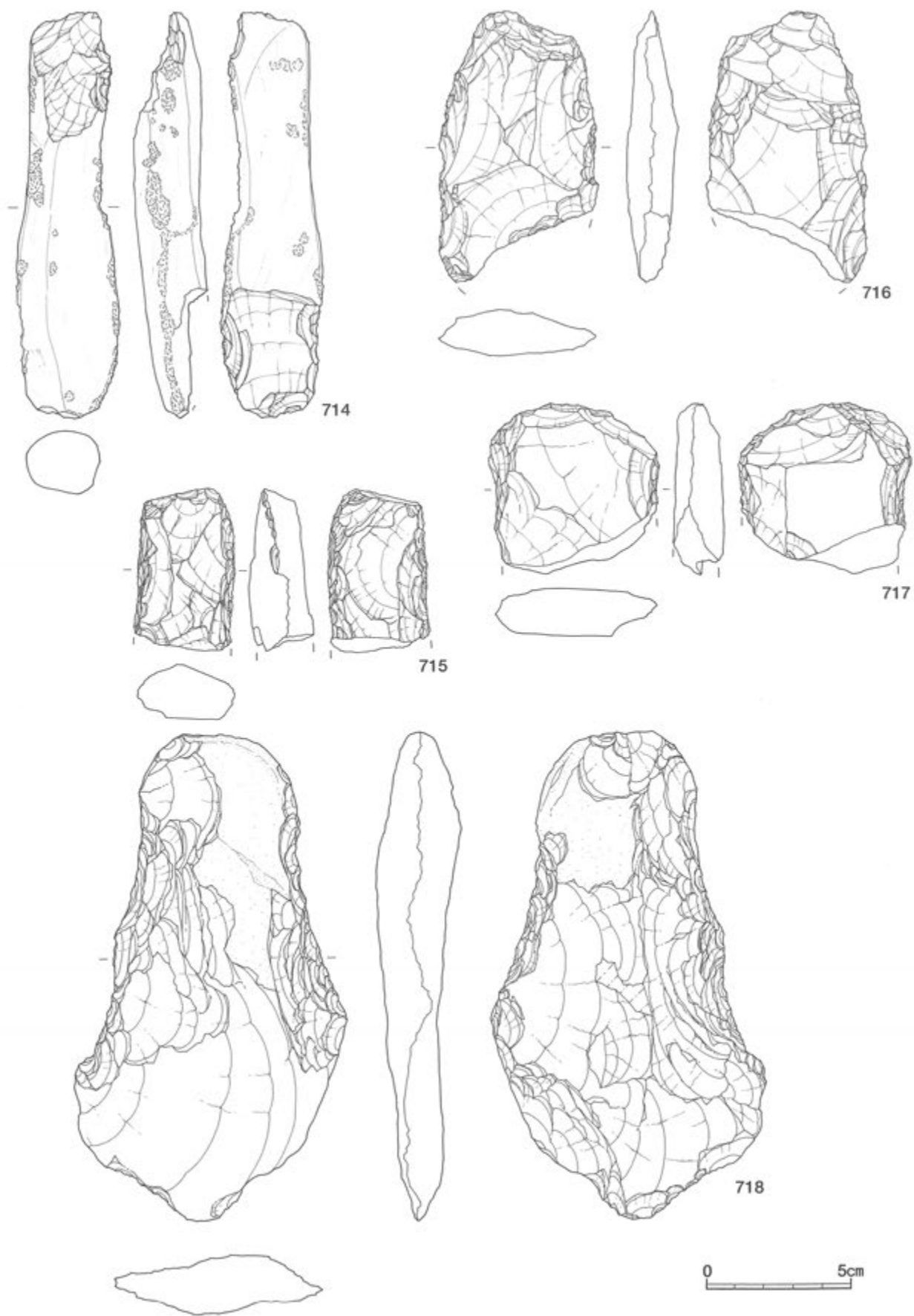
部が形成されており、703は表裏から704は裏面からの調整によるものである。705は、幅の広い粘板岩の縦長剥片を用い、表面には、サビを含む節理面を有する。下辺に表裏からの調整により、刃部が作られる。706は黒色頁岩の横長剥片を縦位に用い、両側辺に刃部を有するものである。連続性のある表裏からの調整によって刃部が形成され、また右側辺に使用痕がみられる。

#### 二次加工剥片 (第117図, 707)

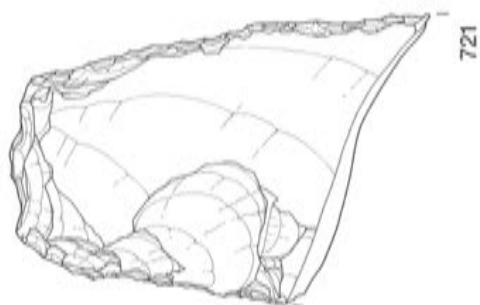
1点出土した。節理面を有する玉髓を用いており、下辺に階段状の剥片がみられる。使用痕と思われるつぶれがみられ、スクレイパーの可能性も考えられる。

#### 石錐 (第117図, 708)

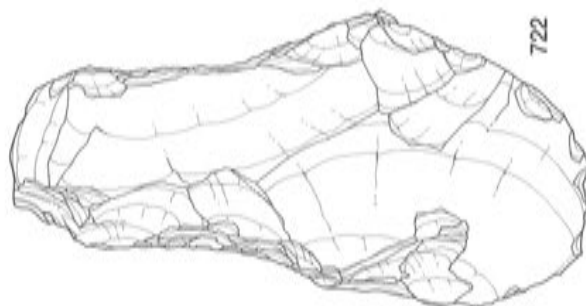
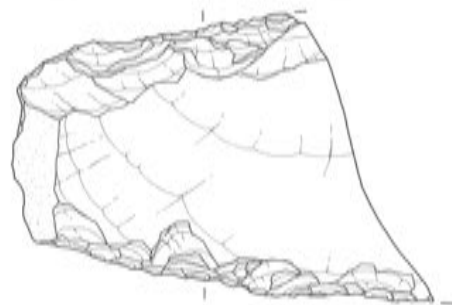
1点出土した。灰色のチャートの縦長剥片を用いており、錐部に細かな調整がみられる。左側辺は切断されており、右側辺には裏面からの調整剥離によりスクレイパーのような刃が形成されている。転用品の可能性はある。



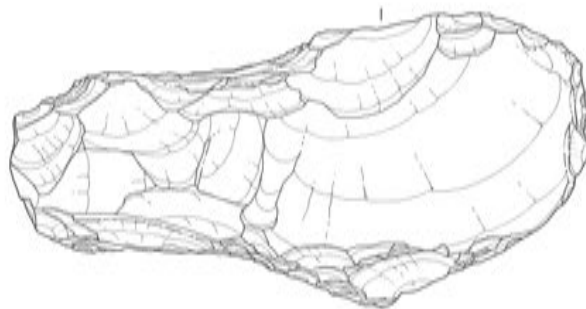
第118図 磨製石斧・打製石斧 (1)



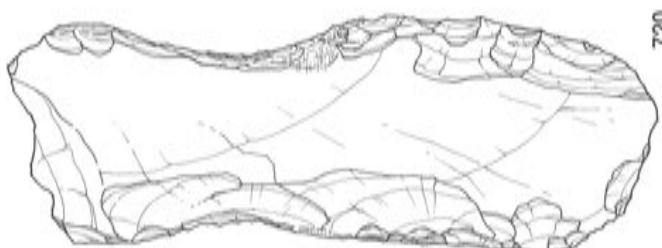
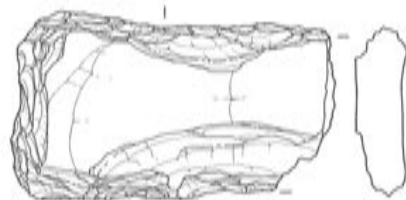
721



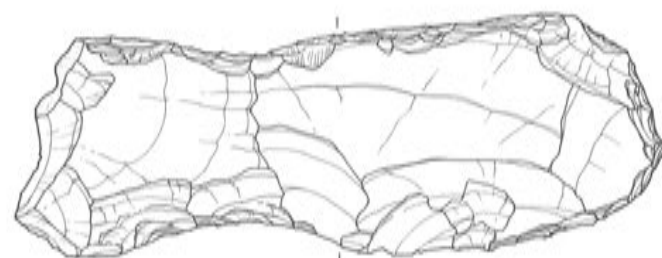
722



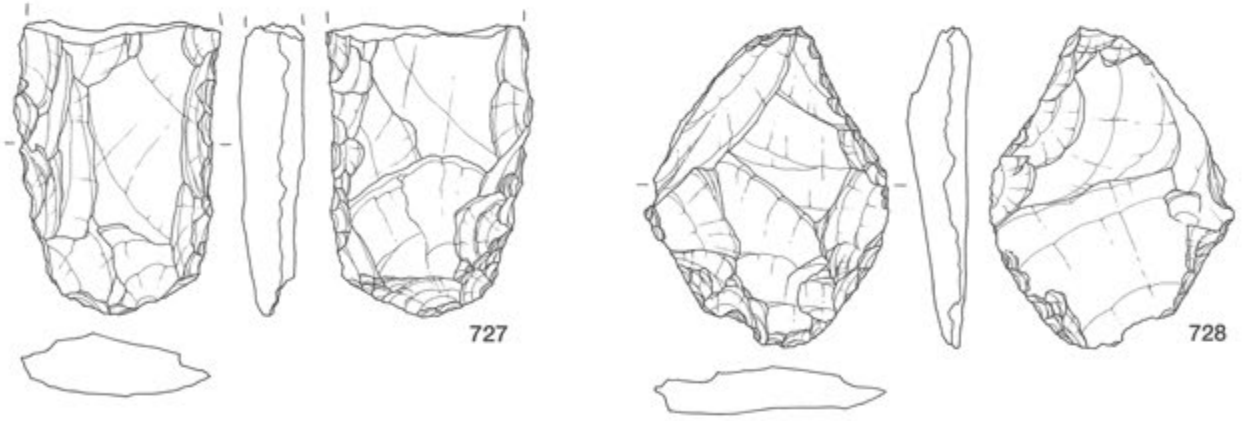
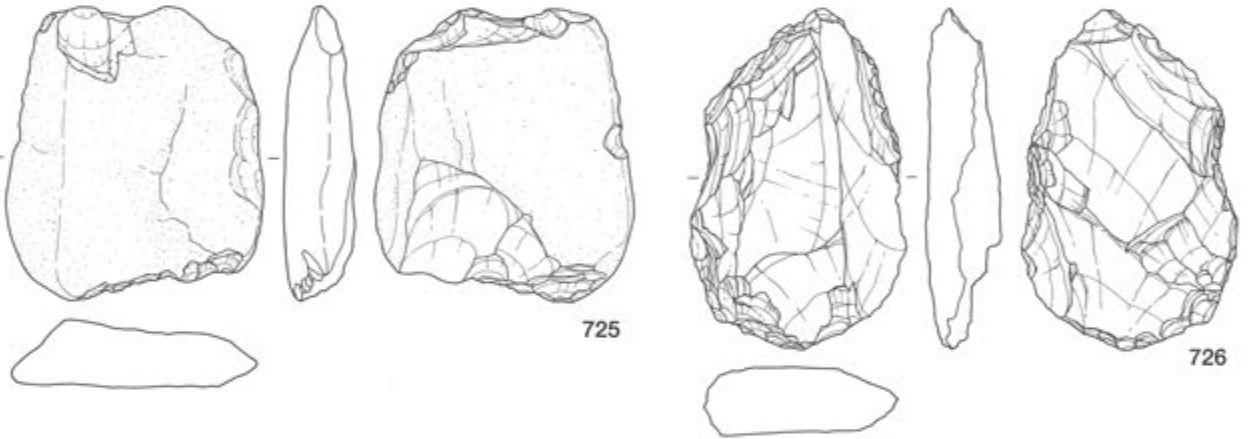
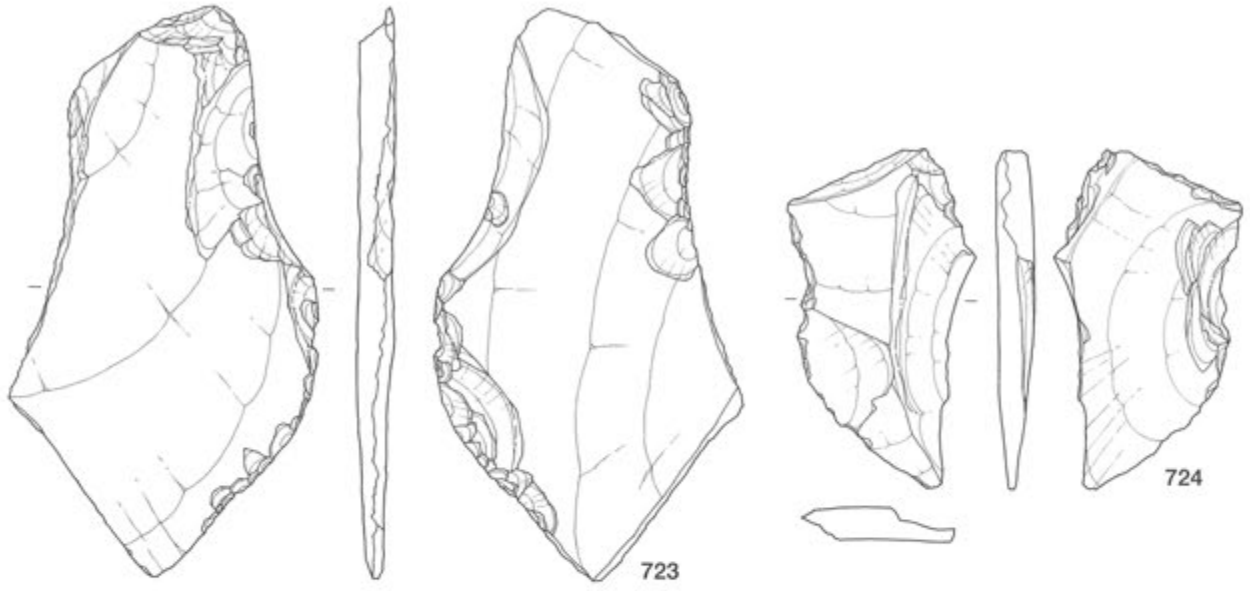
719



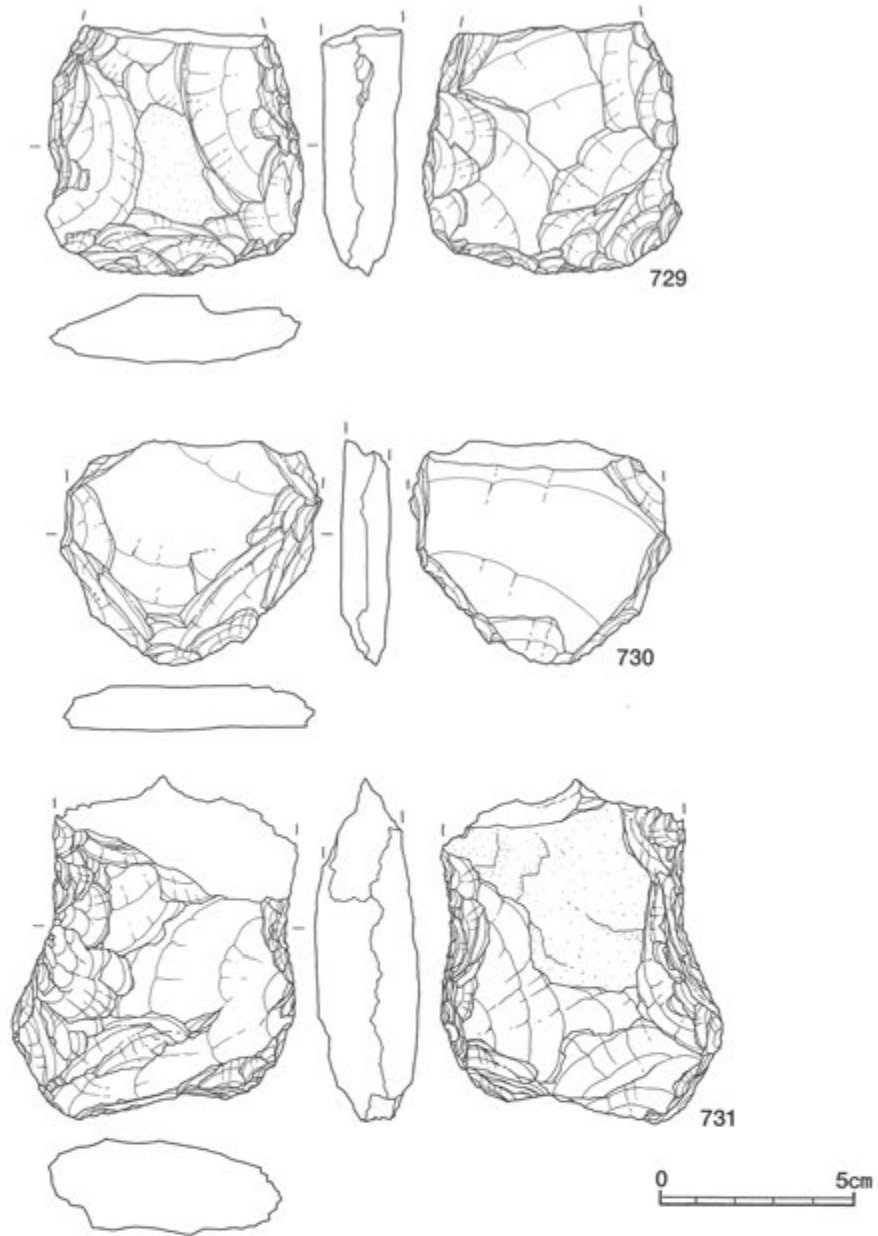
720



第119図 打製石斧 (2)



第120図 打製石斧 (3)



第121図 打製石斧 (4)

**石核 (第117図, 709~711)**

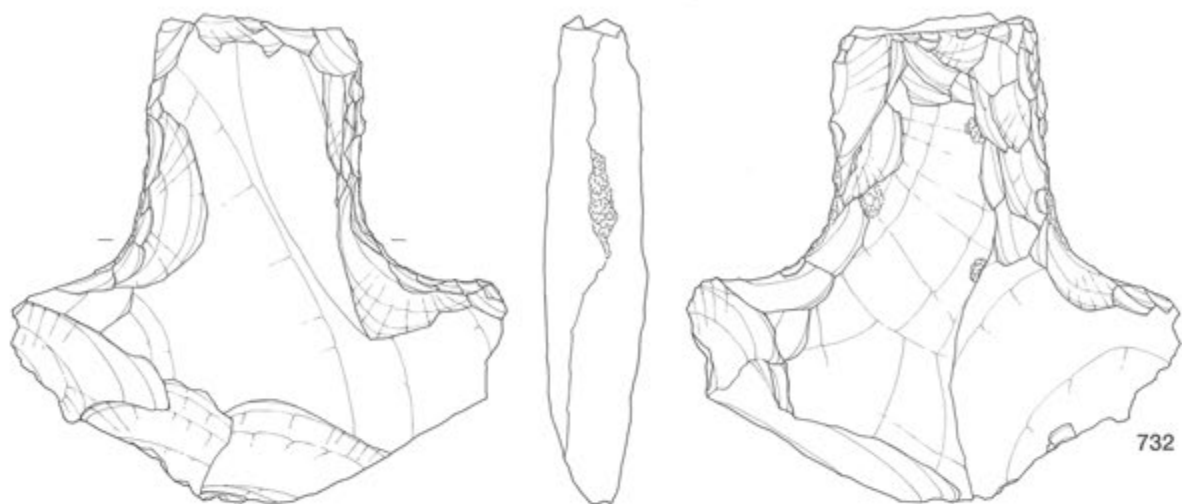
小型の剥片石器製作を目的とした素材剥片の獲得に利用されたと考えられる石核が3点出土した。709・710は自然面や気泡の多い粗雑な三船産黒曜石を素材にしている。打点に規則性はみられない。711は縦長剥片を用い、主要剥離面をプラットホームにしている。

**使用痕剥片 (第117図, 712・713)**

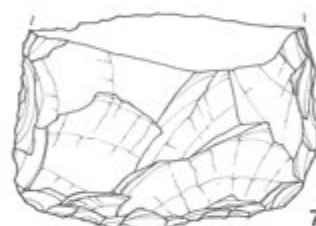
712は自然面を有する腰岳産黒曜石、713は安山岩を素材とし、いずれも縦長剥片を用いている。712は、側辺に微細剥離がみられ、713は、上部と下部に微細剥離が上部には階段状剥離がみられる。

**石斧 (第118~122図, 714~734)**

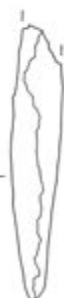
磨製石斧1点、打製石斧(完形)6点、欠損品14点が出土した。全て頁岩を用いている。



732



733



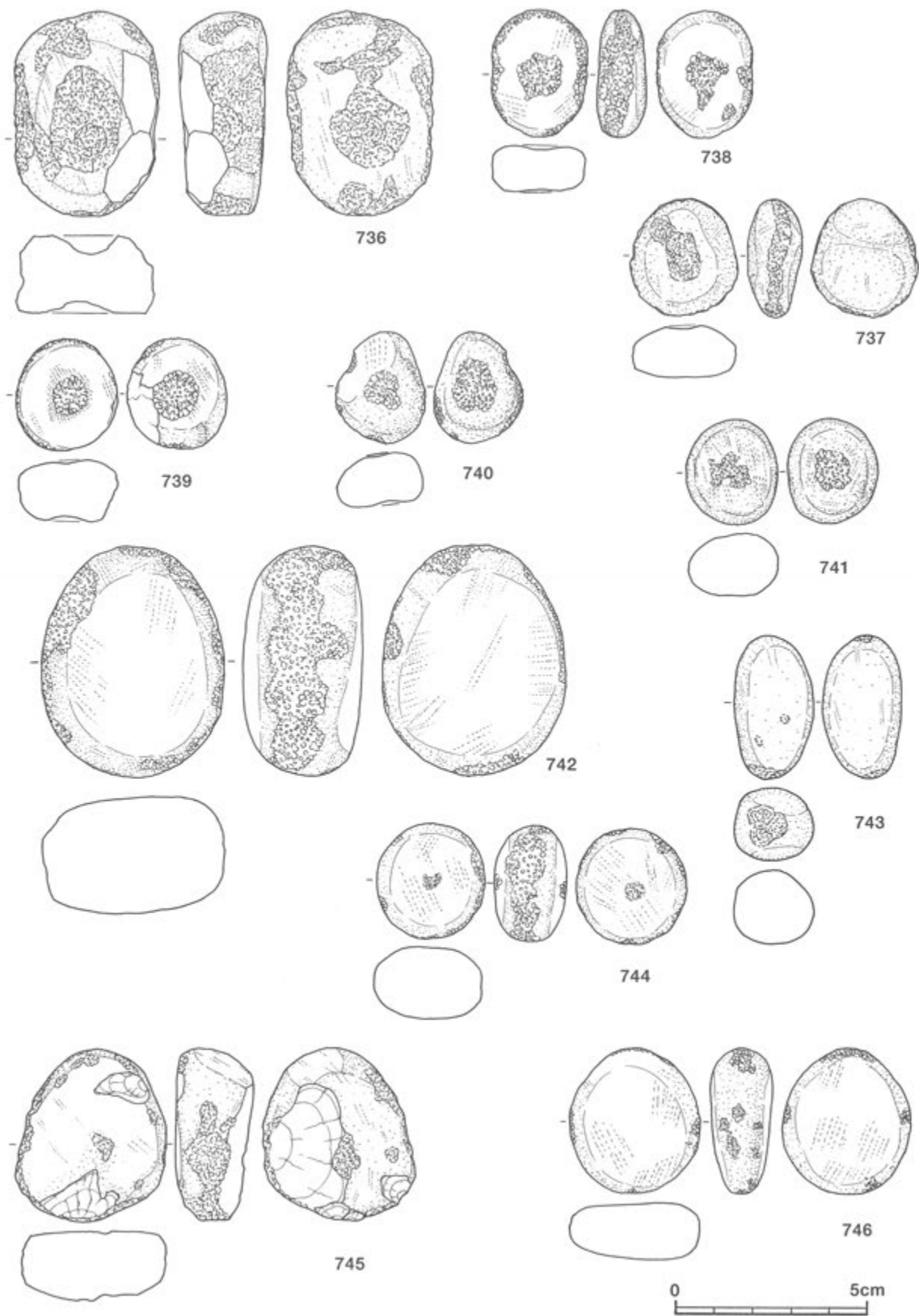
734



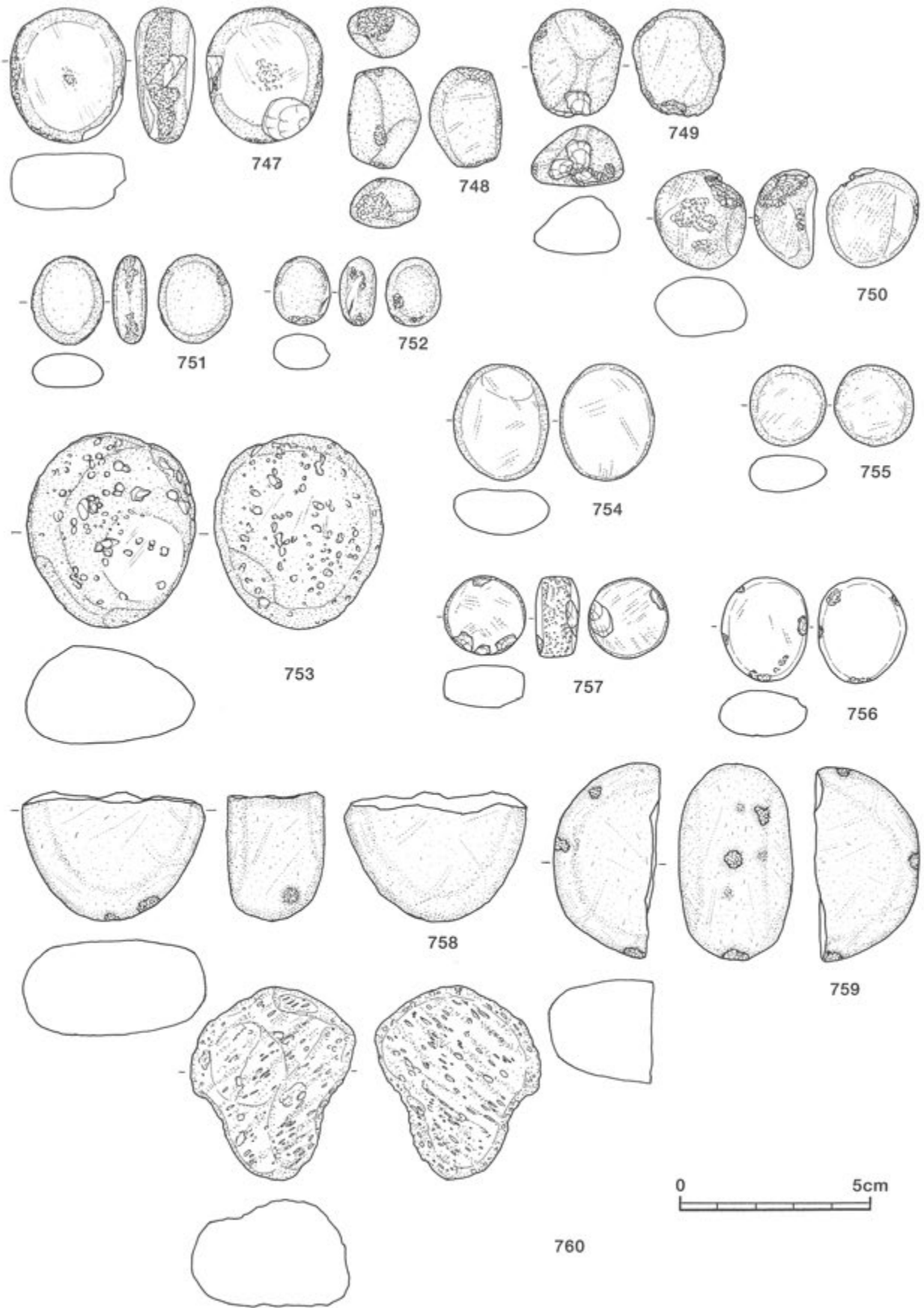
735



第122図 打製石斧 (5)・礫器



第123図 凹石・敲石



第124図 敲石・磨石・軽石製品



714は、短冊形を呈する磨製石斧である。側辺が敲打により形成されており、その後全体を入念に研磨している。裏面の刃部が大きく欠損しているが、表面の刃部が残り使用によるつぶれが観察できた。718・720・722～724・732は、打製石斧の完形品である。石材の性質上、薄手でやや粗雑な調整が目立つ。718・720・722～724は有肩石斧である。718・720・722は両肩部から下側辺にかけて使用痕がみられる。723・724は尖底状を呈しており使用痕が目立つため、つるはしの様に使用された可能性がある。732は肩部が広く作られ、それに伴い幅広の外弯する刃部を呈するものである。刃部につぶれや剥離痕が多くみられる。715～717・719・721は、肩部や刃部が欠損したものである。715は、整形のための調整剥離により、側辺が階段状を呈している。柄の部分の可能性がある。716・717・719・721は、有肩石斧か短冊型の石斧が判断できなかった。725～731・733・734は、基部の欠損するものである。いずれも粗雑な調整により刃部が形成されており、階段状を呈するものである。731と734は有肩石斧であろうと判断できた。

#### 礫器（第122図，735）

礫器は1点出土した。正面の一部に自然面を有し粗いタッチで剥離により刃部を作り出している。刃部の中央に使用痕がみられる。

#### 凹石・敲石・磨石（第123・124図，736～759）

一個体に的して、凹み・敲打・研磨がみられるものがあるが、鷲ヶ迫遺跡同様著顕に表れている使用痕により遺物を判断した。大きさに統一性はなく、主に花崗岩と安山岩を素材とする。

736～741は、凹石である。花崗岩の円礫・楕円礫を用いている。736は表裏の中央に敲打により凹みが深く入っている。側辺のほぼ全面に敲打痕が残り擦痕が弱く残る。737～739は、やや小型であるが、736と同様の使用痕がみられる。裏面は強い研磨により稜が形成されている。741は、表裏に敲打による浅い凹みと擦痕を有する。側辺に敲打痕はみられない。

742～752は、敲石である。花崗岩を素材としているが751は砂岩の小形の円礫を用いている。

742・743は側辺部に敲打痕が集中し表裏面に擦痕を有する。744は楕円形の礫を用い上部と下部に敲打痕がみられる。全体に弱い擦痕が残る。745は、いたる所に敲打痕がみられ、表裏面に強く擦痕が残り敲打による剥離痕がみられる。746・747は側辺部に敲打がみられ、表裏面に弱い擦痕を有する。748・749は不定形の礫を用い上面と下面に敲打痕がみられる。正面は自然面が残り裏面に強く擦痕が残る。750・751は小形の円礫を用い、側辺に敲打痕がみられたが、擦痕は観察できなかった。752は右上部が敲打により大きく破碎している。裏面には擦痕が強く残り稜を形成している。

753～759は磨石である。753・758・759は花崗岩を用い、754～757は安山岩を用いている。なお、758・759は欠損品である。753は、気泡の多い花崗岩を用いており、表裏面に弱く擦痕がみられる。754・755は円礫を用い表裏が強く磨き込まれている。756は、円柱状で表裏が磨き込まれている。側面は敲打の後研磨されてる。758は、表裏面にのみ研磨がみられた。758・759はほぼ全面に研磨が施され、敲打痕も観察できる。

#### 軽石製品（第124図，760）

1点出土した。厚みがあり不定形である。表面は多方向に擦痕がみられるが、裏面には一定方向に向かって広く研磨面を呈する。

第21表 北原中遺跡縄文石器観察表 (1)

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
115	677	5566	打製石鎌	黒曜石三船	D19	IV	1.5	1.3	0.3	0.6	
	678	2816	打製石鎌	黒曜石椎葉川	E23	IV	2.3	1.8	0.3	1.2	
	679	2356	打製石鎌	頁岩	B19	IV	2.5	1.7	0.4	1.6	
	680	6675	打製石鎌	ハリ質安山岩	D21	IV	2.4	1.6	0.4	1.4	
	681	2653	打製石鎌	ハリ質安山岩	C13	IV	2.6	1.5	0	1.4	
	682	560	打製石鎌	チャート	C14	IV	1.9	1.4	0.4	0.8	
	683	7351	打製石鎌	ハリ質安山岩	D18	IV	1.7	1.1	0.3	0.5	
	684	5522	打製石鎌	安山岩	D19	IV	1.7	1.2	0.4	0.7	
	685	1547	打製石鎌	瑪瑙	C23	IV	1.5	1.3	0.3	0.7	
	686	3729	打製石鎌	玉髓	B6	IV	2.1	1.5	0.4	1.0	
	687	6430	打製石鎌	ハリ質安山岩	D20	IV	2.1	1.3	0.3	0.7	
	688	2412	打製石鎌	玉髓	C16	IV	1.7	1.4	0.5	0.9	
	689	2310	打製石鎌	安山岩	C15	IV	1.8	1.7	0.3	1.2	
	690	1922	打製石鎌	安山岩	C13	IV	2.2	1.7	0.5	1.8	
	691	5728	打製石鎌	安山岩	D18	IV	1.5	1.3	0.3	0.7	
	692	2429	打製石鎌	安山岩	C16	IV	1.8	1.6	0.3	0.7	
	693	6842	打製石鎌	黒曜石上半鼻	D19	IV	2.0	1.6	0.3	0.8	
	694	6516	打製石鎌	頁岩	C27	IIIb	2.6	1.6	0.5	1.4	
	695	—	打製石鎌	チャート	D18・19	IIIb	1.8	1.3	0.3	0.6	
	696	7247	打製石鎌	チャート	D19	IIIb	2.3	1.3	0.4	1.3	
	697	676	打製石鎌	チャート	E23	IIIb	1.8	1.4	0.2	0.6	
	698	6194	打製石鎌	チャート	D19	IIIb	1.8	1.3	0.3	0.6	
	699	6433	打製石鎌	ハリ質安山岩	D20	IIIb	1.7	1.2	0.3	0.8	
	700	6873	打製石鎌	黒曜石桑ノ木津留	D19	IIIb	1.4	1.2	0.4	0.7	
	701	7535	打製石鎌	瑪瑙	D23	IIIb	1.4	1.8	0.5	1.2	
	702	6641	打製石鎌	黒曜石三船	D21	IIIb	1.7	1.2	0.4	0.7	
116	703	5652	スクレイパー	頁岩	D19	IVa	4.9	7.2	1.0	34.0	
	704	6429	スクレイパー	頁岩	D19	IVa	5.9	7.6	1.6	76.5	
	705	2179	スクレイパー	粘板岩	C14	IV	8.4	10.6	0.5	56.6	
117	706	70	スクレイパー	黒色頁岩	D9	IV	8.7	4.1	0.8	30.9	
	707	6582	二次加工剥片	玉髓	D21	IVa	2.0	2.1	1.2	4.9	
	708	6938	石錐	チャート	C23	IVa	3.0	1.8	0.4	1.0	
	709	6090	石核	黒曜石三船	D21	IIIb	1.9	2.2	2.1	7.0	
	710	7916	石核	黒曜石三船	D22	IIIb	3.1	3.2	2.0	25.2	
	711	2776	石核	チャート	C13	IV	1.9	4.5	1.8	24.0	
	712	2490	剥片	黒曜石腰岳	C15	IV	2.9	2.0	1.3	7.5	
	713	6223	剥片	安山岩	D19	IVa	1.3	1.3	0.3	1.1	
118	714	7347	磨製石斧	頁岩	D19	IIIb	14.5	3.6	2.4	142.8	
	715	2495	打製石斧	頁岩	C18	IVa	5.7	3.7	2.1	63.0	
	716	5981	打製石斧	頁岩	D21	IVa	9.9	5.9	1.6	100.9	
	717	1886	打製石斧	頁岩	C21	IVa	6.3	6.6	0.8	88.0	
	718	2093	打製石斧	頁岩	C14	IV	17.7	9.6	2.7	332.0	
119	719	2418	打製石斧	頁岩	C18	IVa	8.5	5.0	1.5	96.1	
	720	5455	打製石斧	頁岩	D18	IVa	17.0	6.6	1.5	227.7	
	721	7099	打製石斧	頁岩	D22	IVa	10.6	7.9	2.0	169.8	
	722	5456	打製石斧	頁岩	D18	IVa	15.3	7.6	1.7	228.7	
120	723	2703	打製石斧	頁岩	C10	IV	15.1	8.0	0.7	121.4	
	724	105	打製石斧	頁岩	D10	IV	5.4	8.5	0.8	39.7	
	725	2556	打製石斧	頁岩	C14	IV	7.8	6.7	1.8	115.4	
	726	7733	打製石斧	頁岩	D23	IVa	9.1	5.6	1.8	105.6	
	727	106	打製石斧	頁岩	D10	IV	7.9	5.3	1.6	90.9	
	728	4673	打製石斧	頁岩	C14	IVa	6.3	7.6	1.4	69.8	
121	729	—	打製石斧	頁岩	C31	IVa	6.5	6.6	2.0	120.0	

第22表 北原中遺跡縄文石器観察表 (2)

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
121	730	2553	打製石斧	頁岩	C14	IV	6.2	7.0	1.1	66.0	
	731	1745	打製石斧	頁岩	C16	IV	9.2	7.3	2.7	184.2	
122	732	7617	打製石斧	頁岩	D23	III b	12.9	12.8	2.6	400.0	
	733	7618	打製石斧	頁岩	D23	III b	5.4	7.9	2.0	136.1	
	734	6484	打製石斧	頁岩	C19	III b	7.3	6.8	1.2	72.7	
	735	6580	礫器	頁岩	D21	IV a	5.8	8.8	2.2	93.6	
	736	2463	凹石	花崗岩	—	IV	10.7	7.7	4.5	520.0	
123	737	6230	凹石	花崗岩	D19	IV a	6.2	5.6	2.7	120.0	
	738	2508	凹石	花崗岩	C15	IV	6.8	5.0	2.5	118.1	
	739	1403	凹石	花崗岩	C14	IV	5.9	5.4	3.5	151.0	
	740	6010	凹石	花崗岩	D21	IV a	5.9	4.7	3.3	100.6	
	741	6674	凹石	花崗岩	D21	IV a	5.5	4.7	3.4	126.1	
	742	2520	敲石	花崗岩	C1	IV	12	9.5	6.2	110.0	
	743	8023	敲石	花崗岩	D23	IV a	7.5	4.2	3.8	191.2	
	744	6204	敲石	花崗岩	D19	III b	6.0	5.7	3.8	198.5	
	745	7803	敲石	花崗岩	D22	IV a	9.1	7.9	3.9	338.2	
	746	6233	敲石	花崗岩	D19	III b	7.7	6.8	3.2	240.9	
	747	6218	敲石	花崗岩	D19	III b	7.2	6.1	3.1	207.5	
124	748	6639	敲石	花崗岩	D21	IV a	5.3	3.7	2.6	14.7	
	749	7514	敲石	花崗岩	D23	IV a	5.7	4.8	3.4	98.4	
	750	3537	敲石	花崗岩	C19	III b	5.2	4.8	3.1	106.6	
	751	2060	敲石	砂岩	C14	IV	3.7	2.9	1.9	26.2	
	752	5457	敲石	花崗岩	D18	IV a	4.8	3.7	1.7	44.6	
	753	6959	磨石	花崗岩	D21	IV a	10.4	8.9	5.2	585.0	
	754	7350	磨石	安山岩	D18	IV a	6.2	5.0	2.4	102.8	
	755	7353	磨石	安山岩	D18	IV a	4.4	3.9	1.9	49.4	
	756	2363	磨石	安山岩	C14	IV	5.5	4.6	2.3	81.4	
	757	6903	磨石	安山岩	D18	III b	4.2	4.3	2.2	70.0	
	758	5817	磨石	花崗岩	D22	III b	7.4	10.2	5.1	499.0	
	759	5176	磨石	花崗岩	C33	IV a	11.0	6.3	5.6	530.0	
	760	—	—	軽石製品	—	—	10.2	8.0	5.6	142.6	

### 第3節 古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物はⅢ a層で検出された。遺構は竪穴C・D-7区, C・D-20~23区で竪穴住居跡が8軒検出され, その他, 土坑6基, 焼土1か所, 溝状遺構7条が検出された。

遺物は成川式土器(甕形土器・壺形土器・高坏・埴形土器), 手捏土器と石器(石皿・砥石・台石・軽石製品)が出土した。

#### ①H11年度 2号住居跡

2号住居跡は, C-7区, Ⅲ a層で検出された。外径3.0m×3.0mの方形, 内径は2.6m×2.1mの長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約20~30cmを測る。主軸方向はN-56°-Eである。硬化面・灰等は検出しなかった。内部では柱穴, 落ち込み部を検出したが, 主柱穴は不明だった。

出土遺物は甕形土器・壺形土器が若干出土したが細片であった。

#### ②H11年度 3号住居跡

3号住居跡は, D-7区, Ⅲ a層で検出された。外径2.8m×2.3mの内径2.5m×2.1mの隅丸長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約20~30cmを測る。主軸方向はN-28°-Eである。硬化面・灰等は検出しなかった。住居内のほぼ中央部に90cm×60cmの約10cmの深さの土坑がみられた。柱穴は5個の検出された。30~40cmの深さの柱穴が検出された。

出土遺物は甕形土器・壺形土器が出土したが, 細片であった。

#### ③1号住居跡

1号住居跡はD-23区, Ⅲ a層で検出された。外径2.1m×1.8m, 内径1.8m×1.6mの長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30~40cmを測る。主軸方向はN-81°-Eである。東南隅に約1m幅の硬化面がみられた。

内部に柱穴・落ち込み等は検出出来なかった。

出土遺物は, 甕形土器・壺形土器・埴・埴形土器等が出土した。

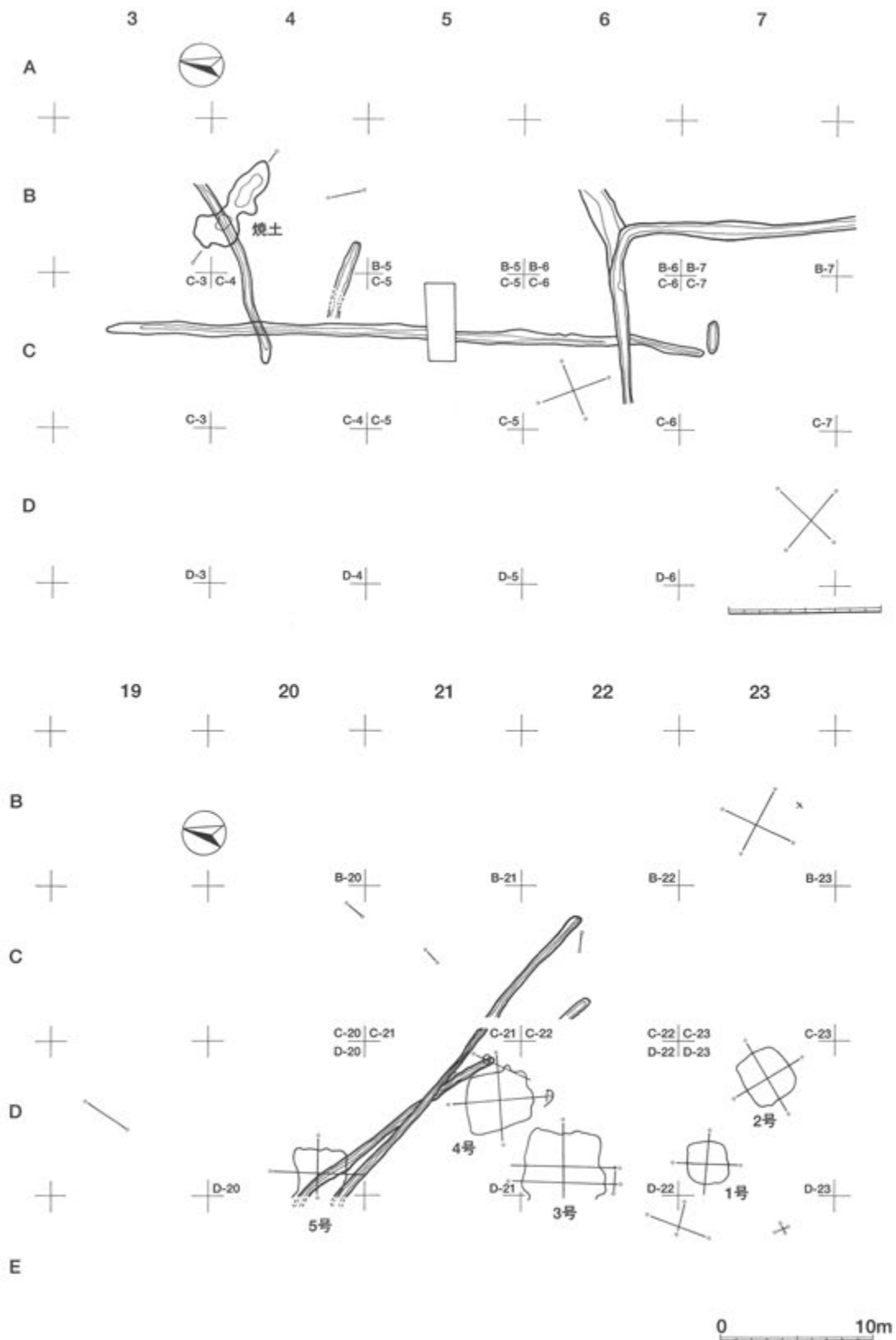
#### ④2号住居跡

2号住居跡はD-23区, Ⅲ a層で1号住居の東側約5mの位置にあり外径2.7m×2.4m, 内径2.1m×2.1mのやや長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは40cm前後を測る。主軸方向はN-45°-Eである。南側壁面に幅30cm程の段が設けられている。内部に柱穴・落ち込み等は認められなかったが, 中央部に硬化面がみられた。

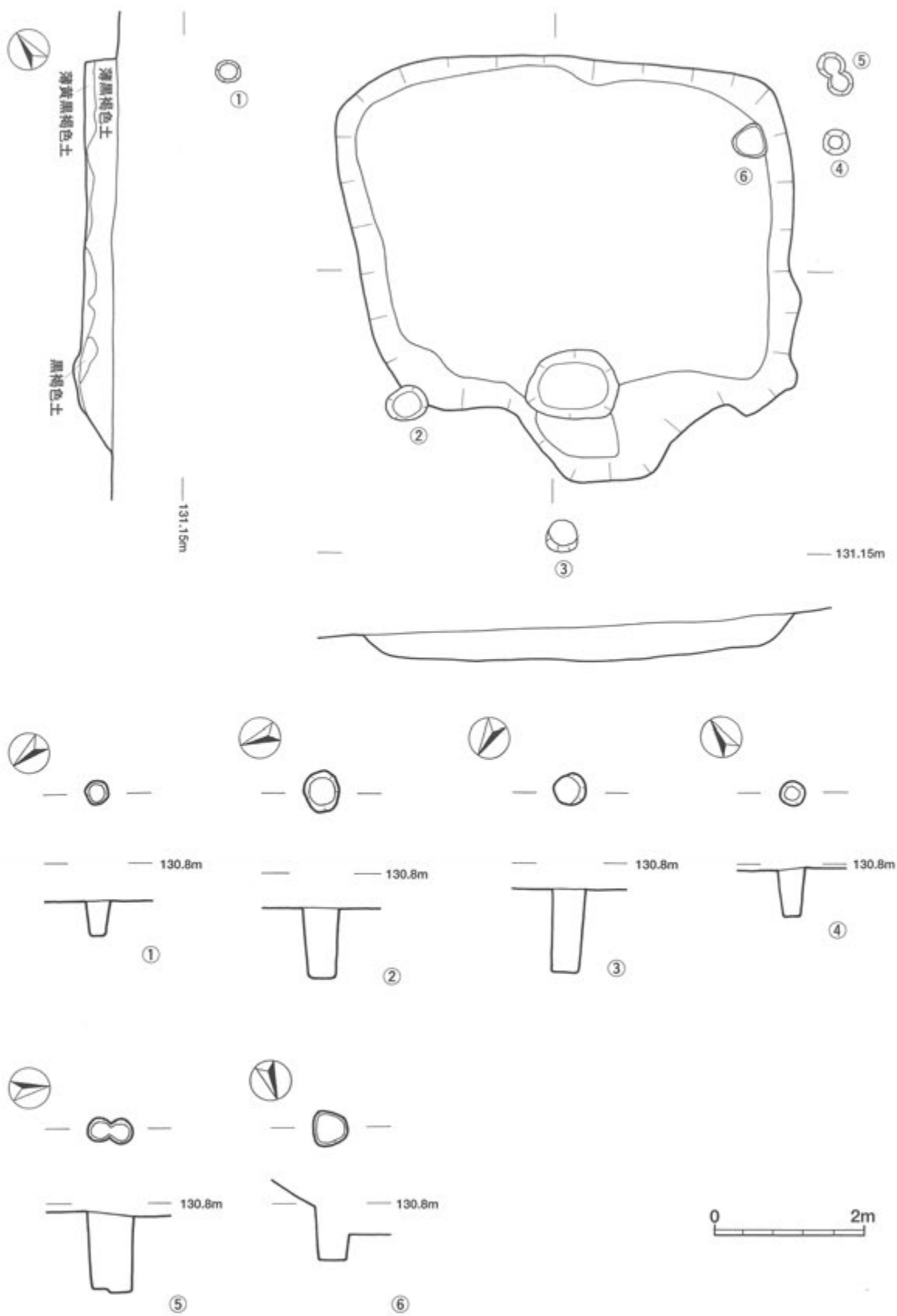
出土遺物は甕形土器・埴・高坏・埴形土器・石皿・軽石製品等が出土した。

#### ⑤3号住居跡

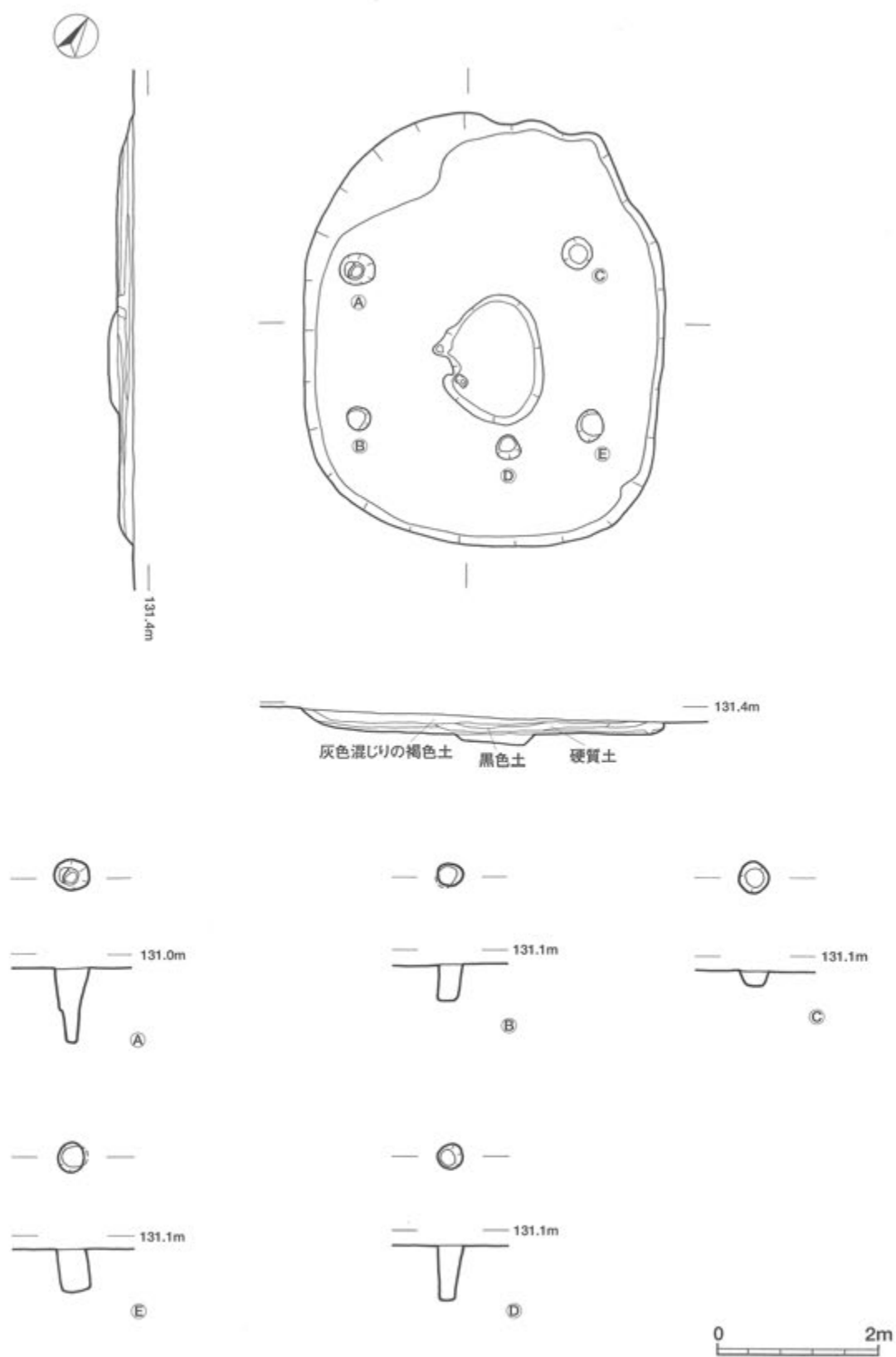
3号住居跡はD-22区, Ⅲ a層で1号住居跡の北側約9mの位置にある。プランは調査区域外の西側が延びているため判明しないが, 遺構検出面からの深さは約25~35cmを測る。主軸方向はN-



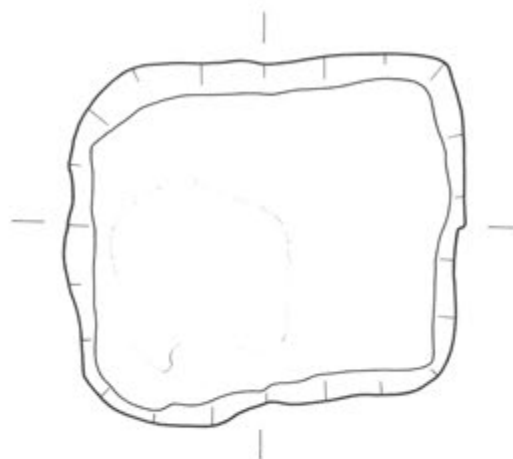
第125図 古墳時代遺構配置図



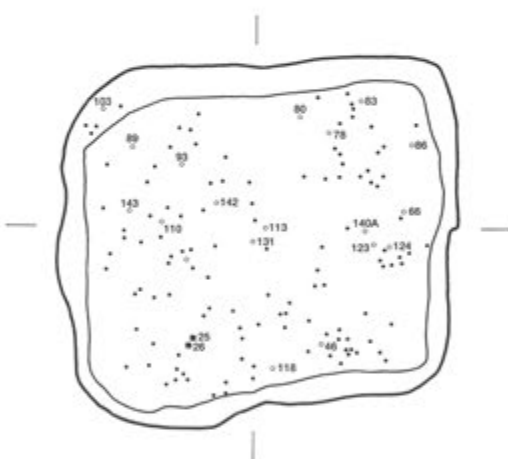
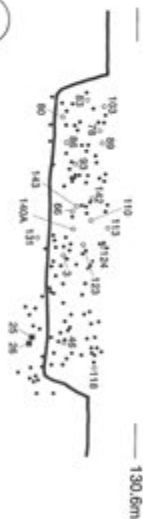
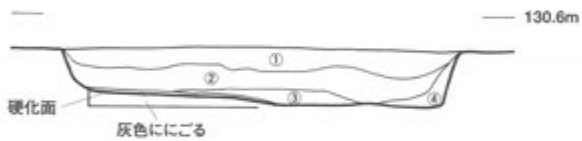
第126图 H11年度 2号住居跡



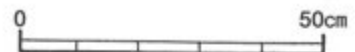
第127図 H11年度 3号住居跡



- ①：Ⅱbより黄色，②より明，パミスブロックなし
- ②：Ⅱbによるパミスアカホヤブロック
- ③：黒灰・炭化物，Ⅱbより薄い
- ④：Ⅱbがにごった感じ，Ⅱa・Ⅱbブロック混じる，樹皮etcのカクラン，②④の境が住居のかべの可能性もある
- ⑤：やや赤灰色の土，サラサラ似たような色の土が5住・4住にもある



- ：石器
- ：実測遺物
- ：土器



第128図 1号住居跡



80° - Eである。内部には20~30cmの深さを測る柱穴が3個あり、中央部には硬化面がみられる。  
出土遺物は甕形土器・壺形土器が出土した。

#### ⑥ 4号住居跡

4号住居跡は、C-21・22区、Ⅲa層で3号住居跡の北東側約4mの位置にある。外径3.4m×2.9m、内径3.0m×2.6mの方向プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約40cmを測る。主軸方向はN-15° - Wである。内部には約50cmの深さを測る柱穴が2個検出され、中央部には硬化面がみられる。

出土遺物は、甕形土器・埴形土器が出土した。

#### ⑦ 5号住居跡

5号住居は、D-20区、Ⅲa層で4号住居跡の北西側約12mの位置にある。外径2.5m×2.4m、内傾2.1m×2.0mのほぼ方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30~40cmを測る。主軸方向はN-11° - Eである。硬化面・灰などは検出されず、柱穴・落ち込み等もみられなかった。

出土遺物は甕形土器・高坏・台石が出土した。

#### ⑧ 7号住居跡

7号住居跡は、C-23区、Ⅲa層で検出された。農道との交差部で調査対象区が変則的であったため、半分程しか検出することが出来なかった。外径の長さが5.3mとこの遺跡では大型の竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30cmであり、主軸方向はほぼ南北である。内部には柱穴等は検出されなかったが中央部に硬化面がみられた。

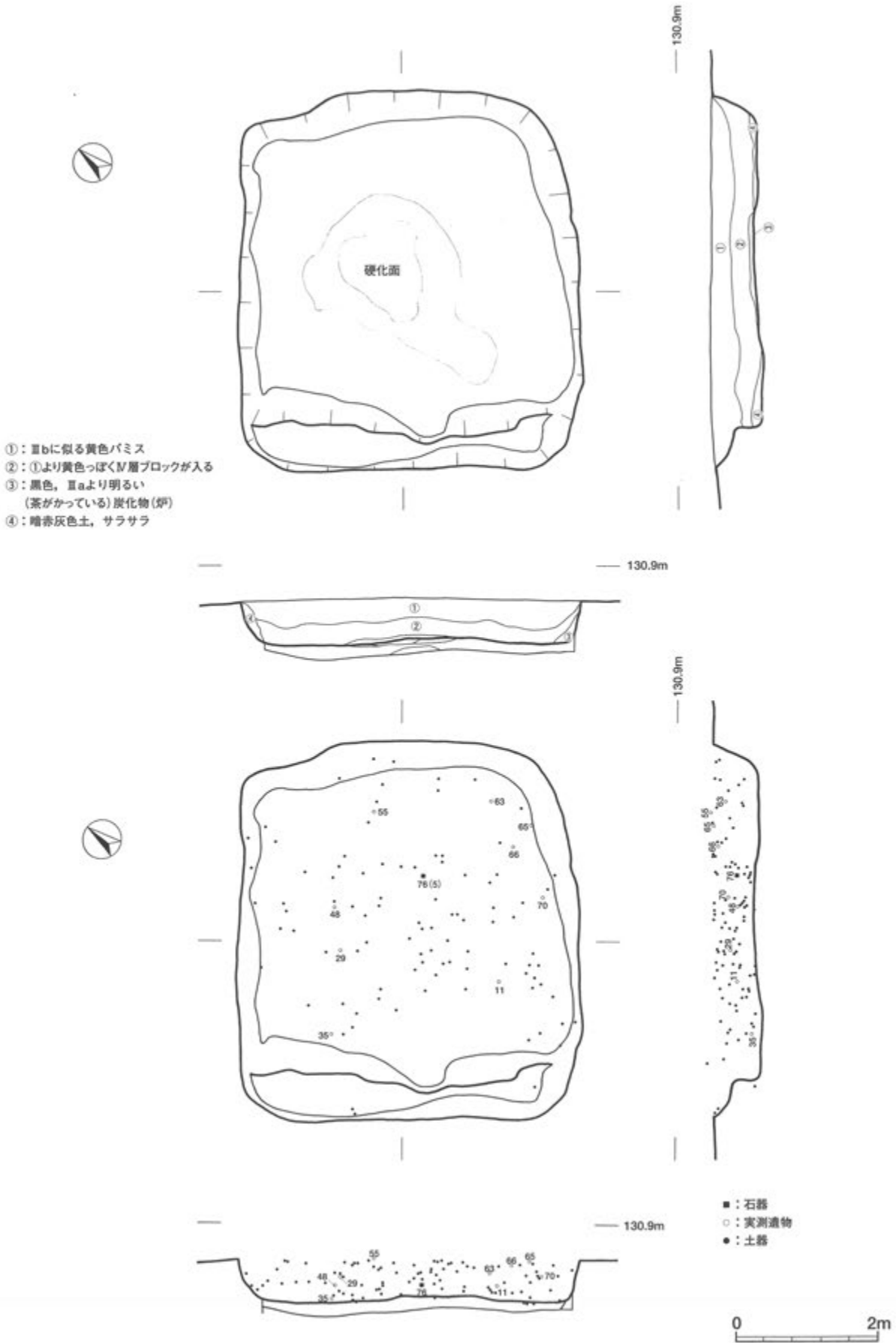
出土遺物は、甕形土器・壺形土器・砥石が出土した。

#### 焼土

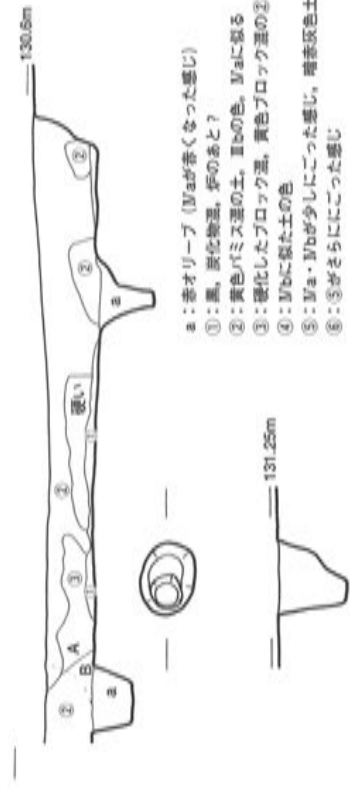
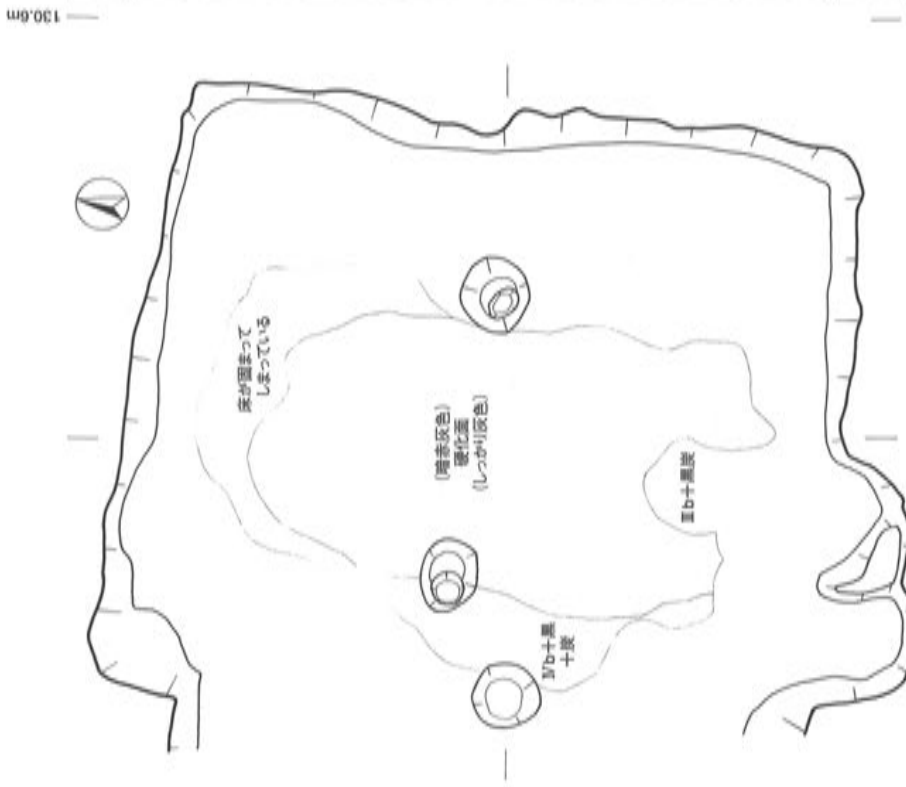
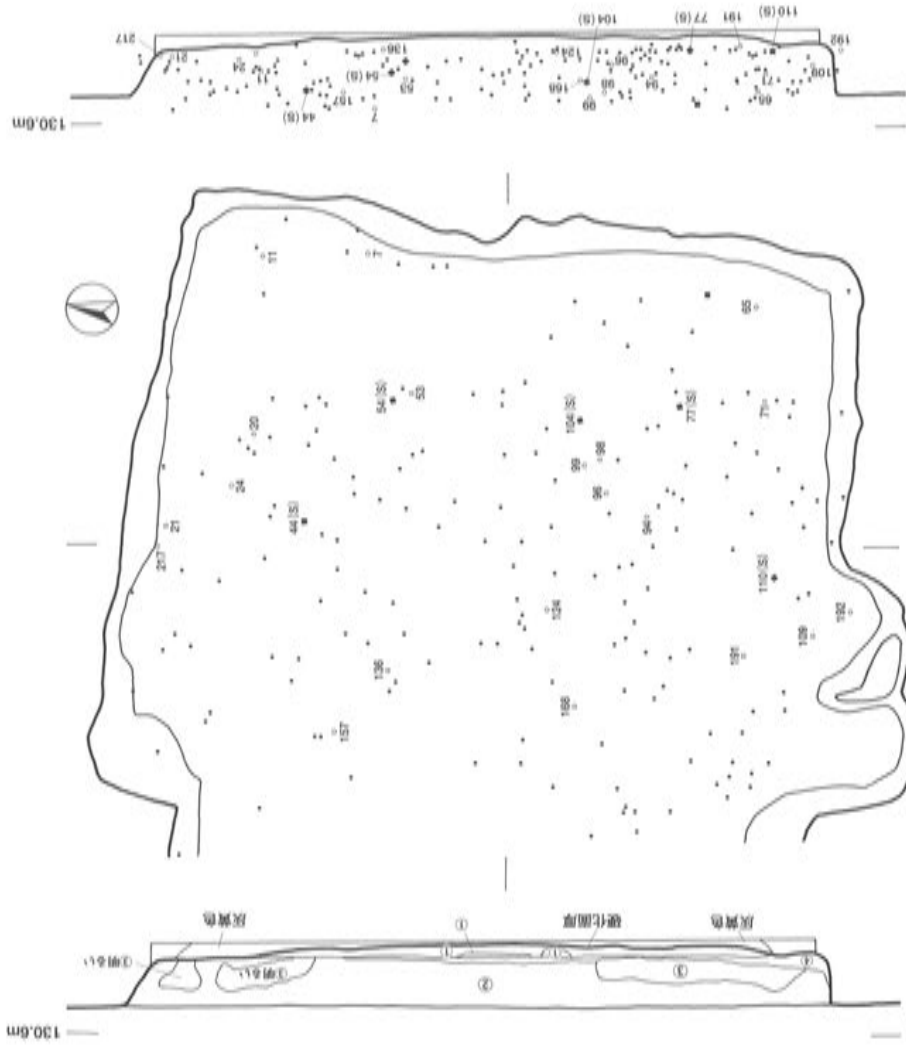
C-3・4区Ⅲa層から主軸が東西に長い5.5m×2.2mの隋円形の焼土城が検出された。中央部に炭化物も含まれているが、性格等は不明である。

#### 土坑

土坑は、調査区域内で6基検出した。ほぼ同タイプの土坑で直径1.5m前後の円形プランで、遺構検出面からの深さは約30cmを測る。性格等は不明である。

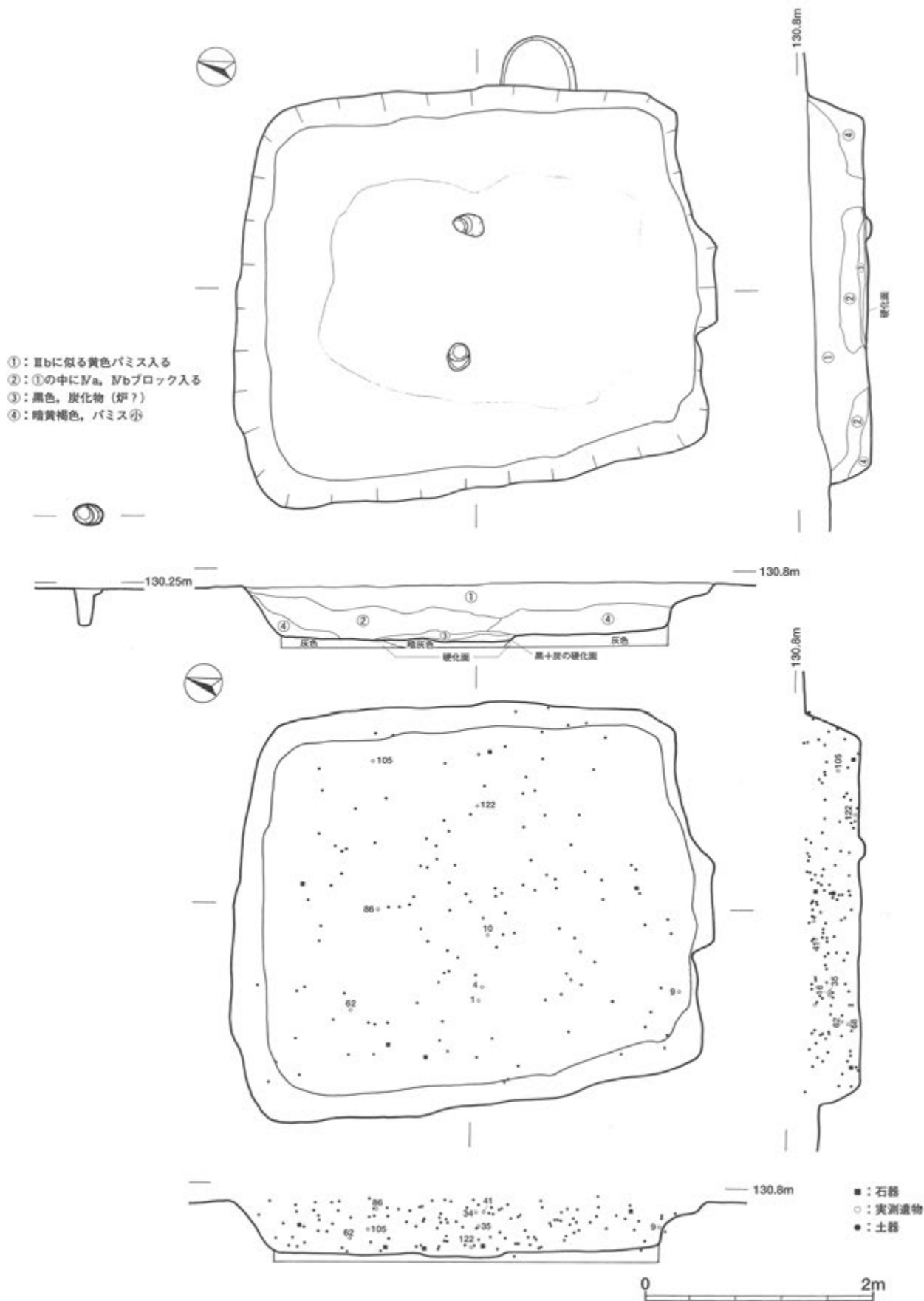


第129図 2号住居跡

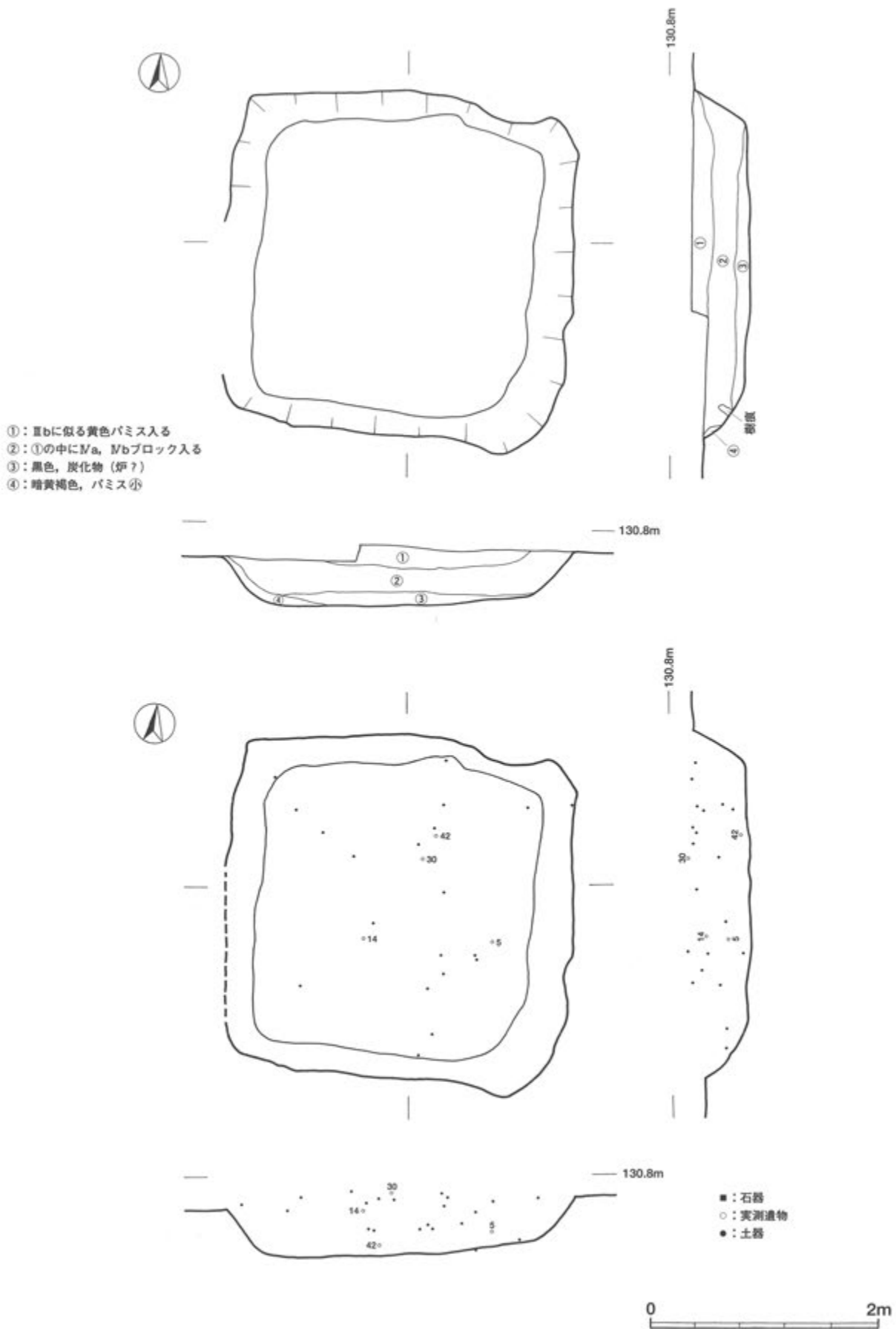


- a : 赤オリーブ (M/aが赤くなくなった感じ)
- ① : 黒, 炭化焼土, 灰のあと?
- ② : 黄色バミズ泥の土, M/bの色, M/aに似る
- ③ : 硬化したブロック泥, 黄色ブロック泥の②
- ④ : M/bに似た土の色
- ⑤ : M/a・M/bが少しにこった感じ, 暗赤灰色土
- ⑥ : ⑤がさらしにこった感じ

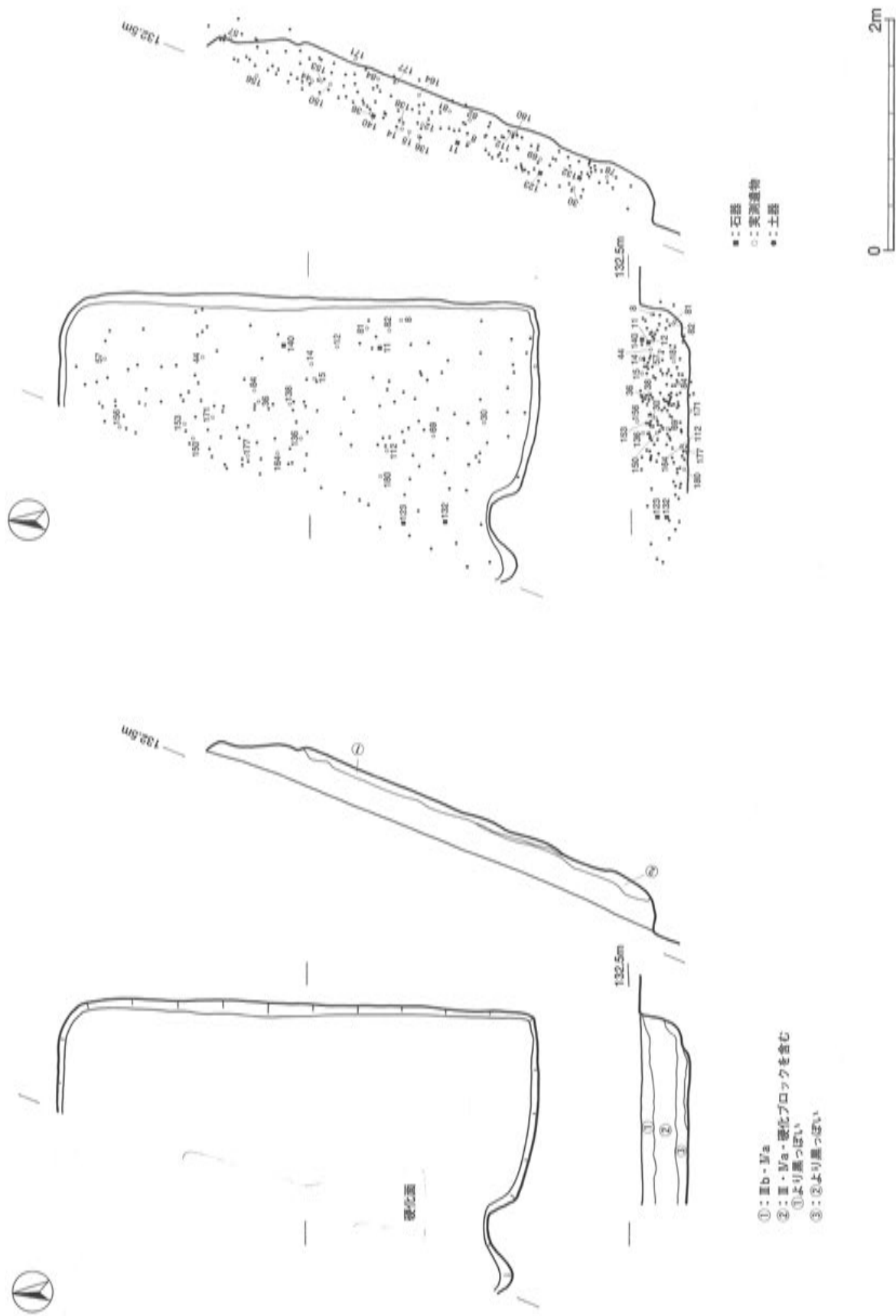
第130図 3号住居跡



第131図 4号住居跡



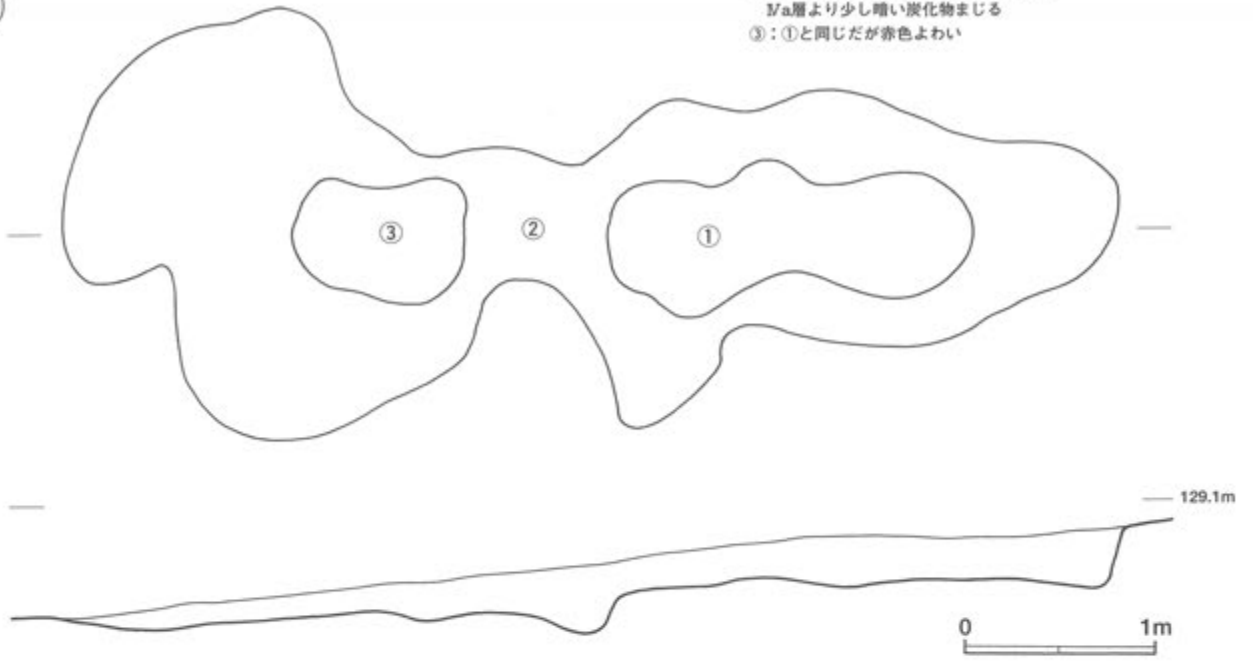
第132図 5号住居跡



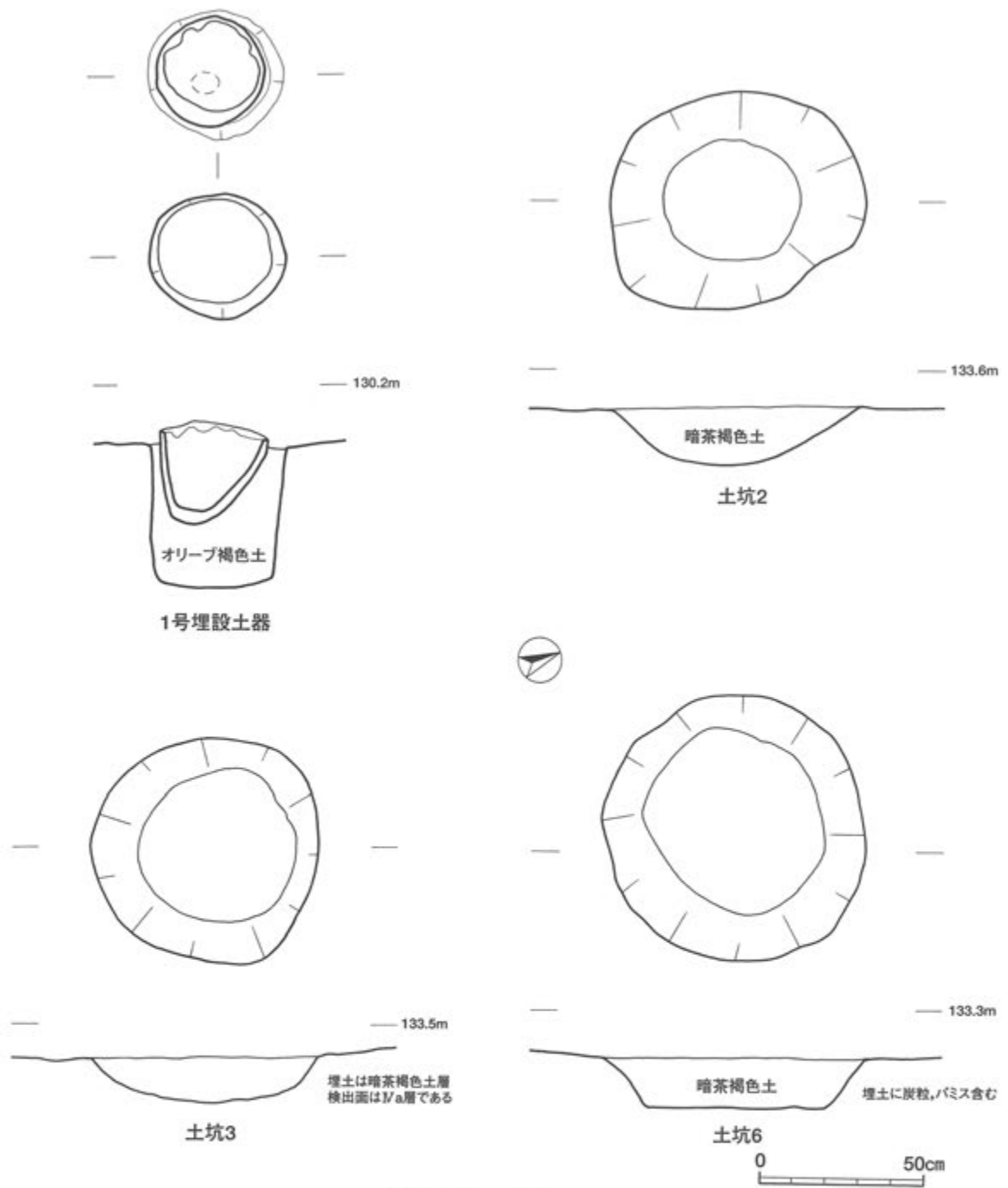
第133図 7号住居跡



- ①：Ma層土が少し赤色ににごる色調，炭化物まじる
- ②：Ma層土が炭や灰によりにごった感じ，  
Ma層より少し暗い炭化物まじる
- ③：①と同じだが赤色よわい

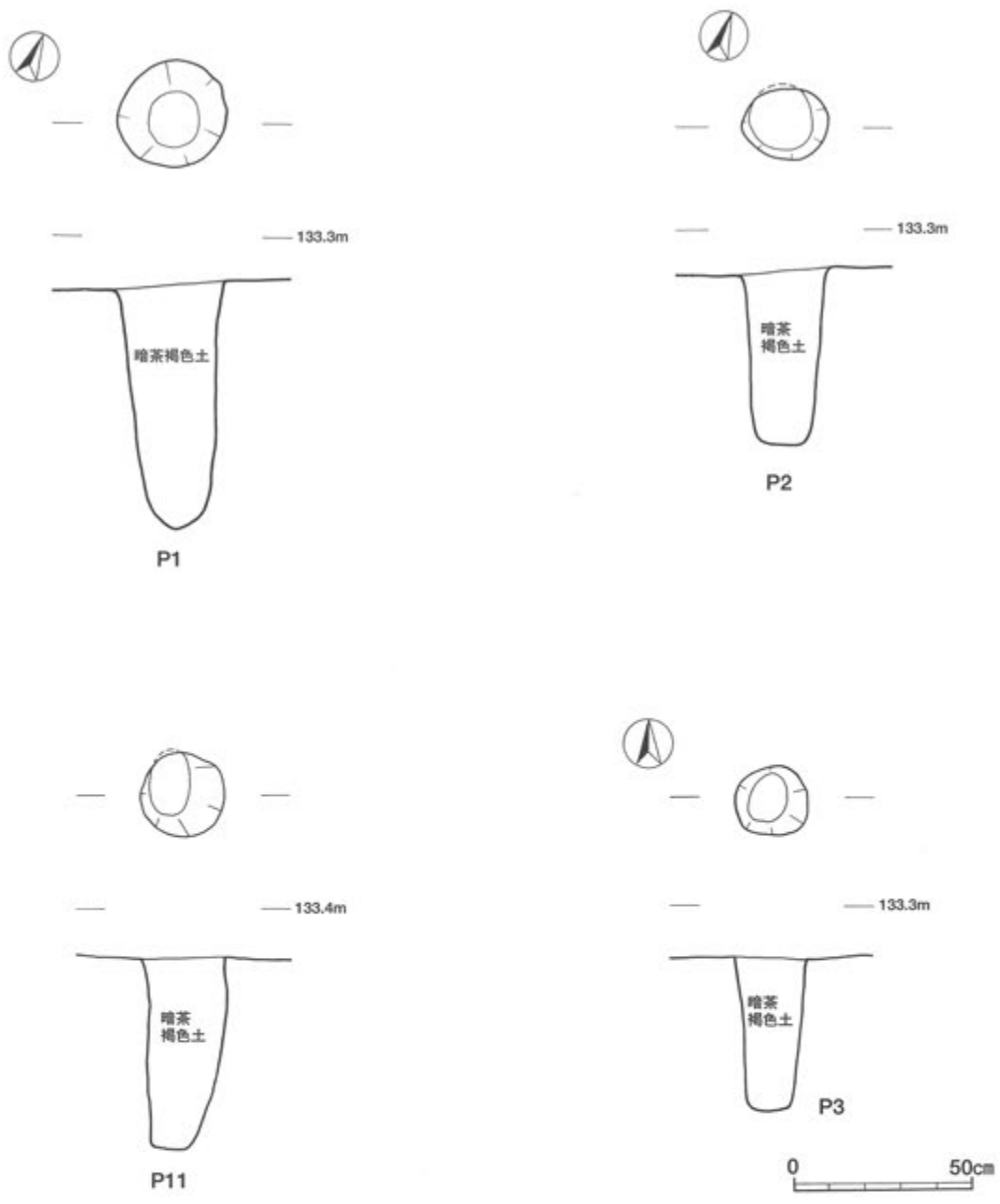


第134図 焼土

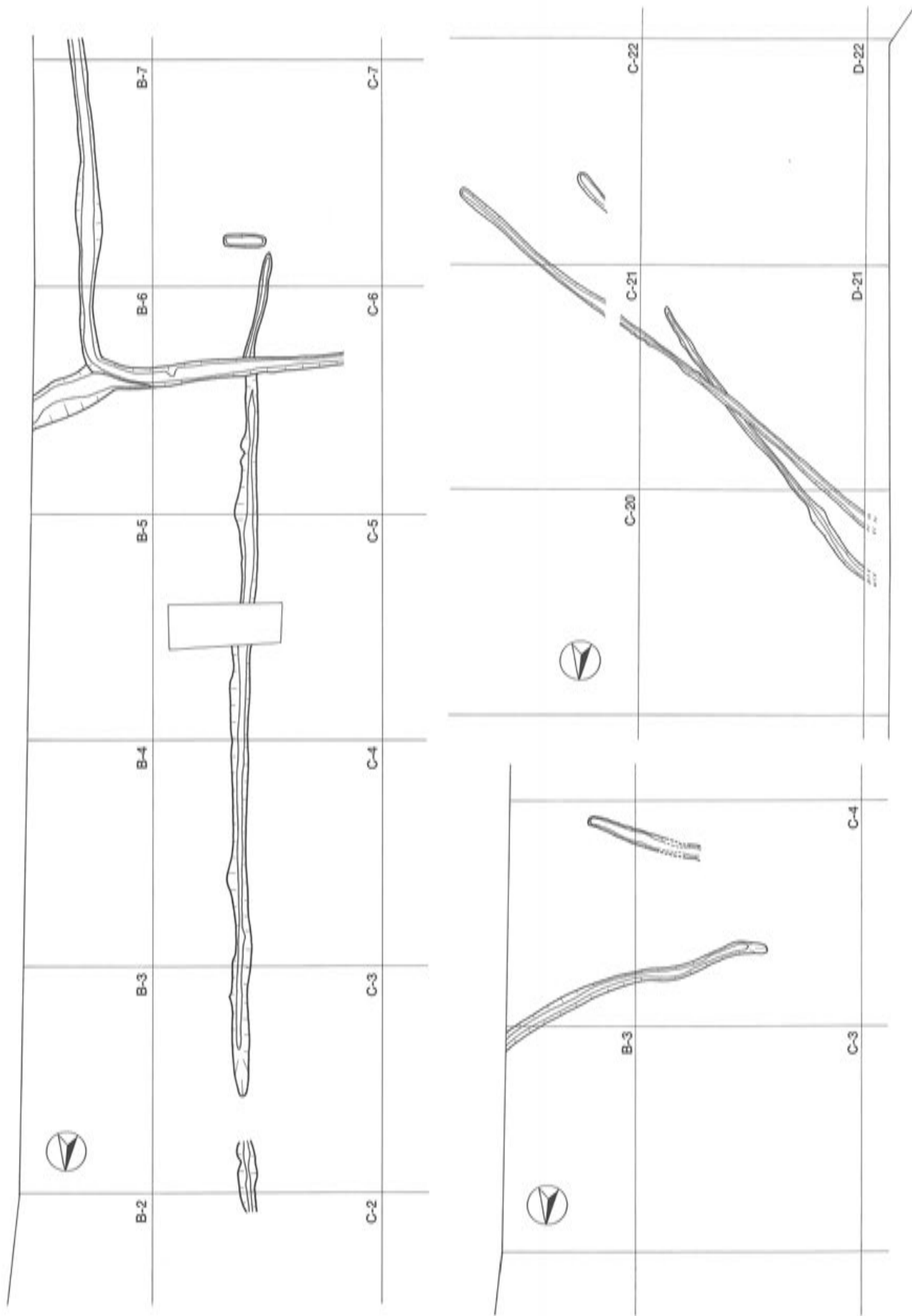


第135図 土坑





第136図 ピット



第137図 溝状遺構

## 遺構出土の土器

### 1号住居跡

761～777は、1号住居跡出土の土器である。

761～772は甕形土器である。761は復元口径21.6cmを測る口縁部で頸部に絡縄突帯を施すものである。口縁部は内弯し、内面の器面はナデ調整を行い、外面はヘラミガキで調整している。762は内弯する口縁部に幅広粘土を貼り付けたものである。ナデ調整を施し、胎土に細礫を多く含む。

773は鉢形土器である。口径は15cmを測り、やや内弯気味であるが直口する口縁部である。外面に沈線による段を有する。丁寧なナデ整形を行っている。

774～777は壺形土器である。いずれも肩部で口縁部からなで肩で胴部へ下るものである。外面はヘラミガキ整形を行っている。777は平底の底部で、内面は指ナデを行い、外面はヘラミガキ整形を行っている。

### 2号住居跡

778～790は2号住居跡から出土した土器である。

778～785は甕形土器である。778は口径38.0cmを測り、外反する口縁部で頸部に絡縄突帯を施すものである。外面はハケ目調整を施している。この突帯は交じらない。780は口径24.6cmで、外反する口縁部をもつものである。781は口径28.5cm、器高35.1cm、脚台径10.5cmを測る完形土器である。口縁は直口し、脚部は中空のあげ底底部である。784は底部で中空である。785は頸部で絡縄突帯を施すものである。ヘラミガキ調整を施している。

786は埴形土器でやや内向気味に立ち上がる口縁部である。ヘラミガキ調整を施している。丹塗り土器で、口径12.0cmを測る。

787は埴形土器である。内向気味の口縁部で、外面の器面調整はヘラミガキ調整を施している。やはり丹塗り土器である。

788は高坏の口縁部で丹塗りした椀形の器形をした坏部である。内外面とも丁寧なヘラミガキで調整されている。

### 3号住居跡

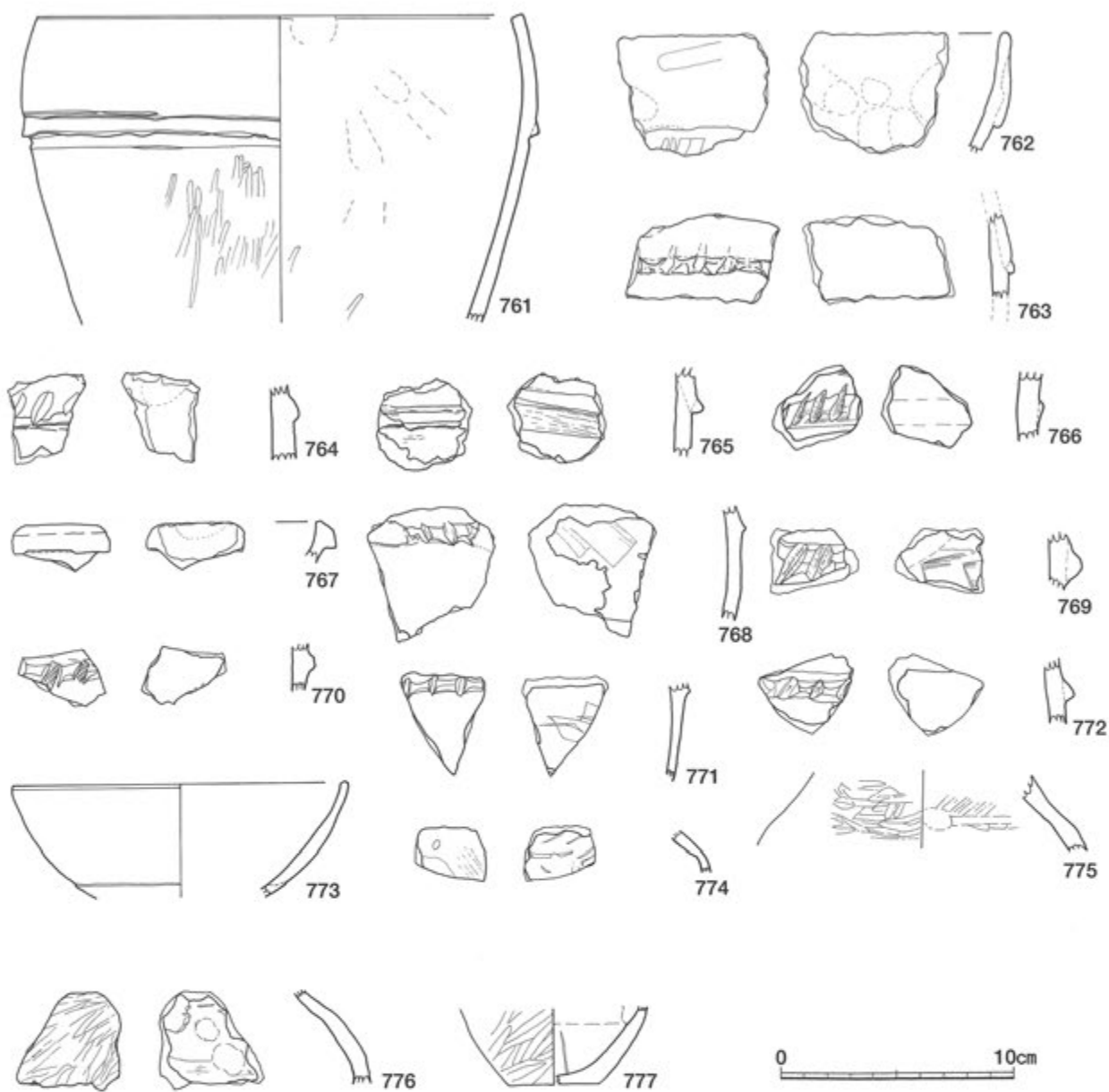
791～810は3号住居跡出土の土器である。

791～793・795～809は甕形土器で、794・810は壺形土器である。

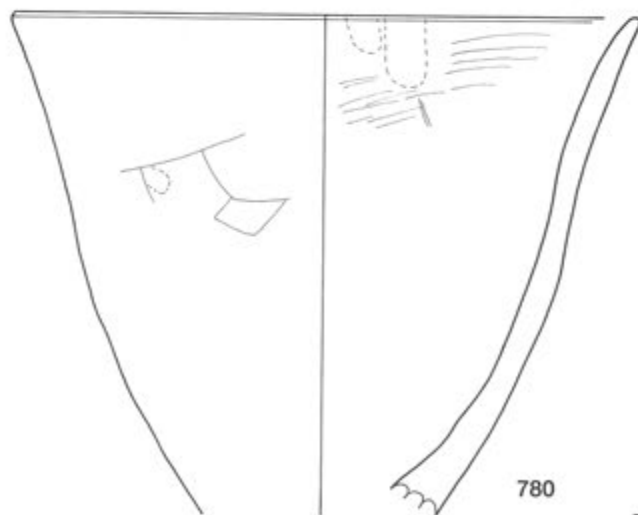
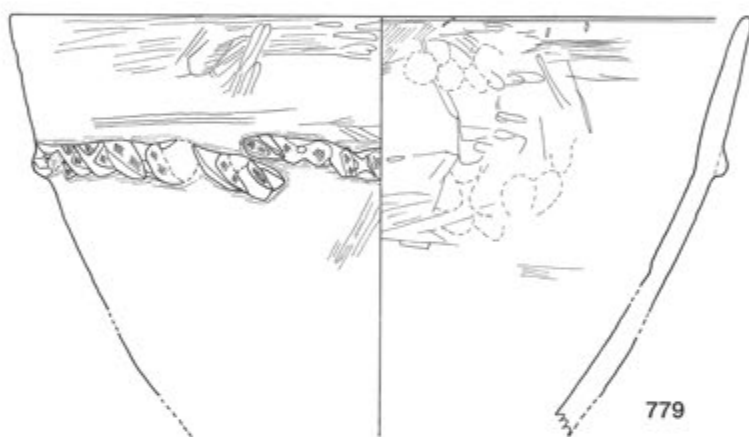
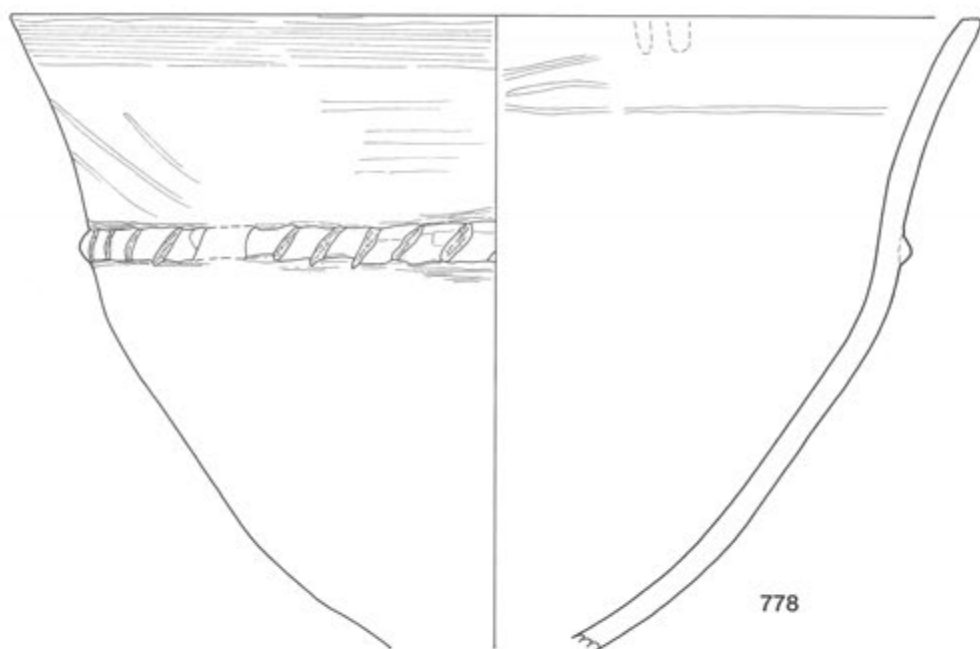
791は口径30.8cm、31.8cmを測り、外反する口縁部で頸部に絡縄突帯を施すものである。外面は縦位のハケ目調整を施している。793も同様のものである。795は直口する甕形土器の胴部である。

796・797は外反する口縁部をもつ甕形土器で器面はナデ調整を施している。798～803は頸部に絡縄突帯を施すものである。いずれもナデ調整を施している。

805～809は甕形土器の底部である。何れも中空のあげ底底部である。脚台径は9.6cm、8.7cm、11.7cm、8.7cm、9.6cmを測る。内外面ともナデ調整を施している。



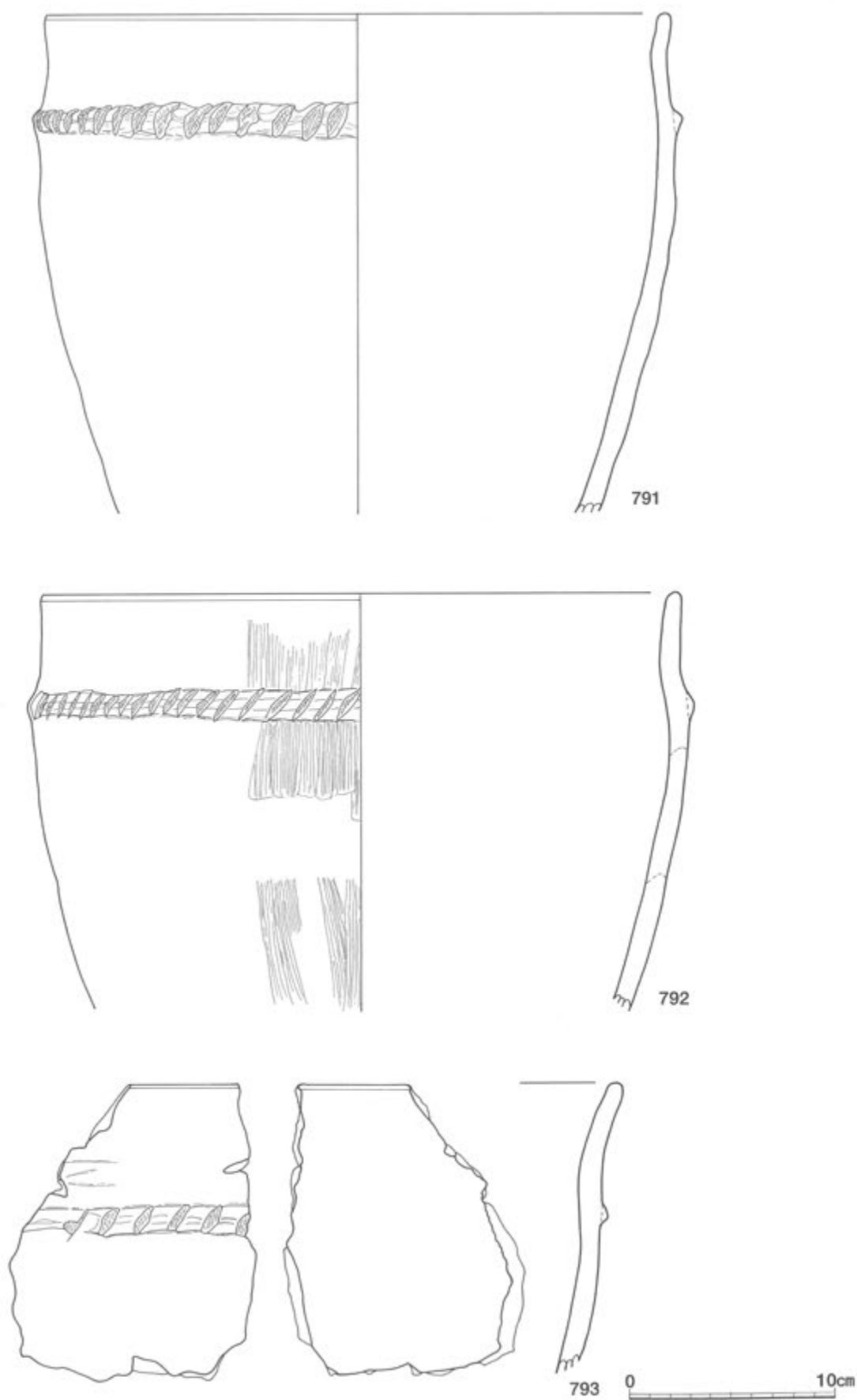
第138图 1号住居内出土遺物



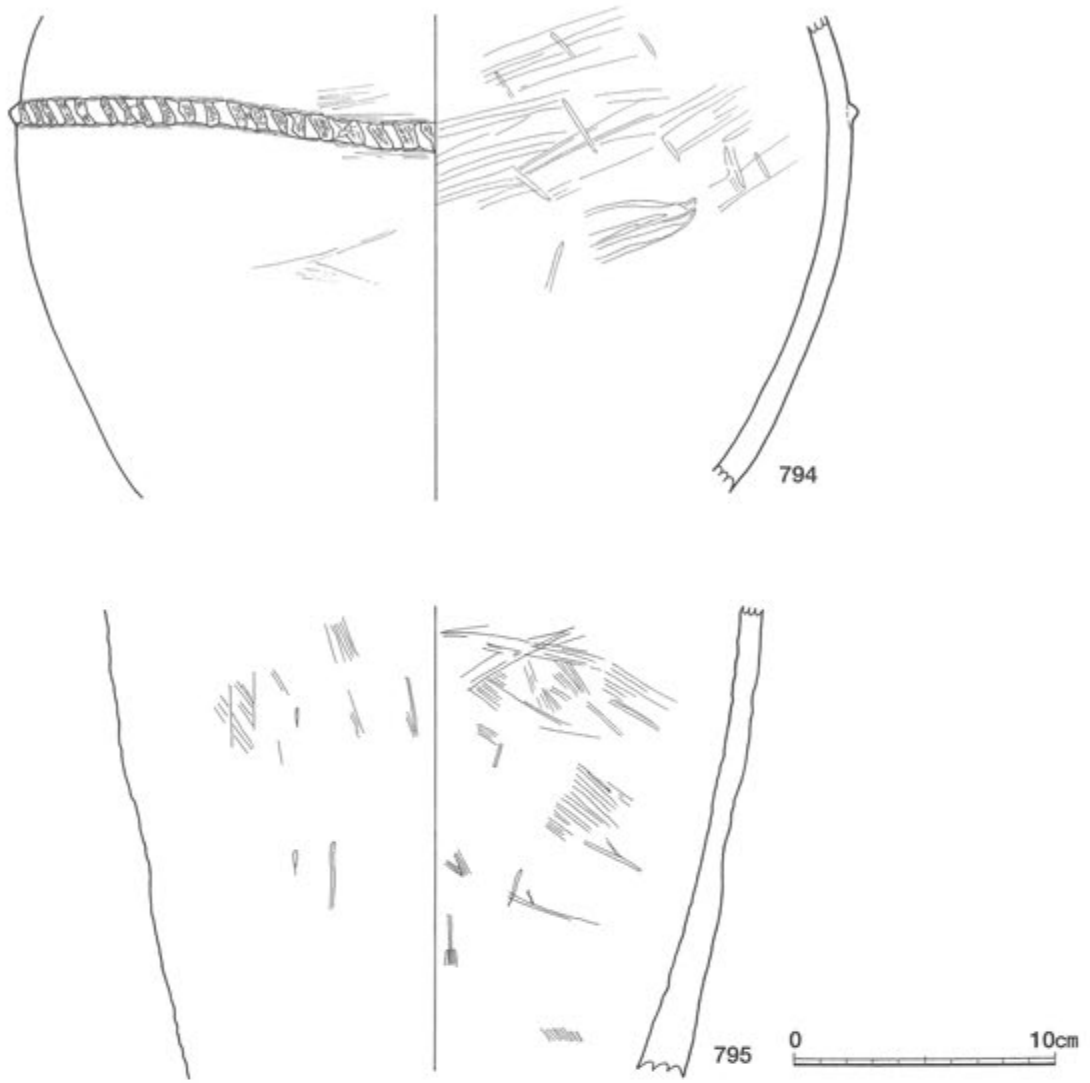
第139图 2号住居内出土遗物(1)



第140图 2号住居内出土遺物(2)



第141图 3号住居内出土遗物(1)



第142图 3号住居内出土遗物(2)



#### 4号住居跡

811～817は4号住居跡出土の土器である。

811～816は甕形土器である。811～814は頸部に絡縄突帯を施すものである。内外面とも器面調整はナデ整形を施している。816は中空のあげ底底部である。

817は埴形土器の口縁部である。外反する長い口縁部をもつもので丹塗りされ、外面は丁寧なヘラミガキが施されている。

#### 5号住居跡

818・819は5号住居跡出土の土器である。818は甕形土器の胴部で絡縄突帯を施している。819は高坏脚部の筒部であり、丹塗りされ外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

#### 6号住居跡

820～822は6号住居跡から出土した土器である。

820は口径20.4cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁で、胴部はやや膨らむものである。ハケ目による調整痕がみられる。ハケ目方向は縦位に施されている。822は口径22.2cmを測る甕形土器で、直口する口縁部をもつものである。ナデ整形で器面調整を施している。

821は高坏脚部である。丹塗りされ外面に丁寧なヘラミガキ調整を施している。

#### 7号住居跡

823～840は7号住居跡から出土した土器である。

803～831は甕形土器である。823～827は外反する口縁部であり、823は口径33.0cmを測る。825は口径26.1cmを測る。何れも内外面ともナデ調整を施している。828・829・833・834は頸部に絡縄突帯を施すもので、ナデ調整が施されている。

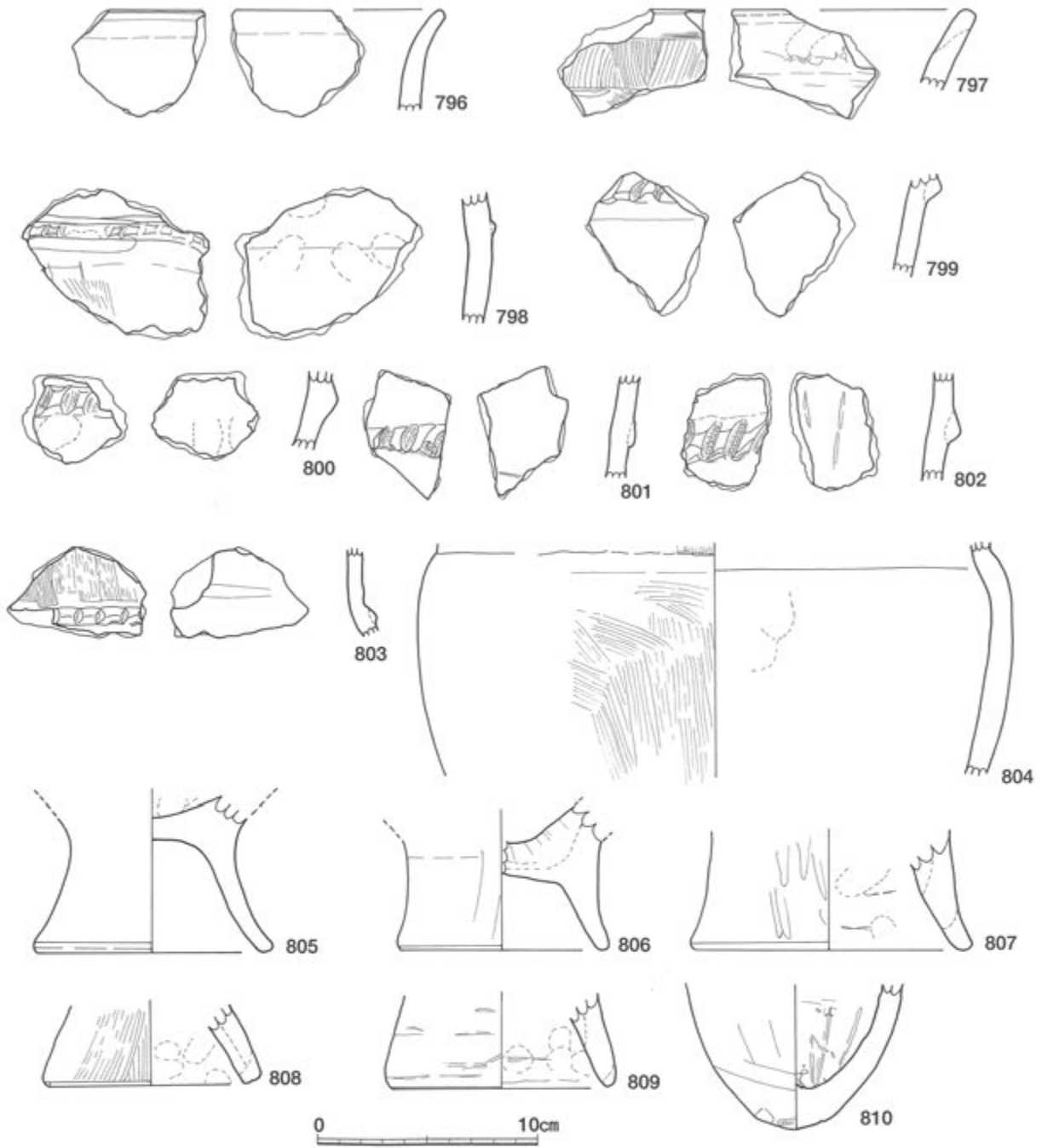
830・831・835は中空のあげ底底部である。

836・837は埴形土器の口縁部である。836は口径10.5cmを測るものである。外反する口縁で丁寧なヘラミガキ調整を施している。837はやや内向気味に立ち上がる口縁部で、口径10.5cmを測る。外面はヘラミガキ調整が施されている。

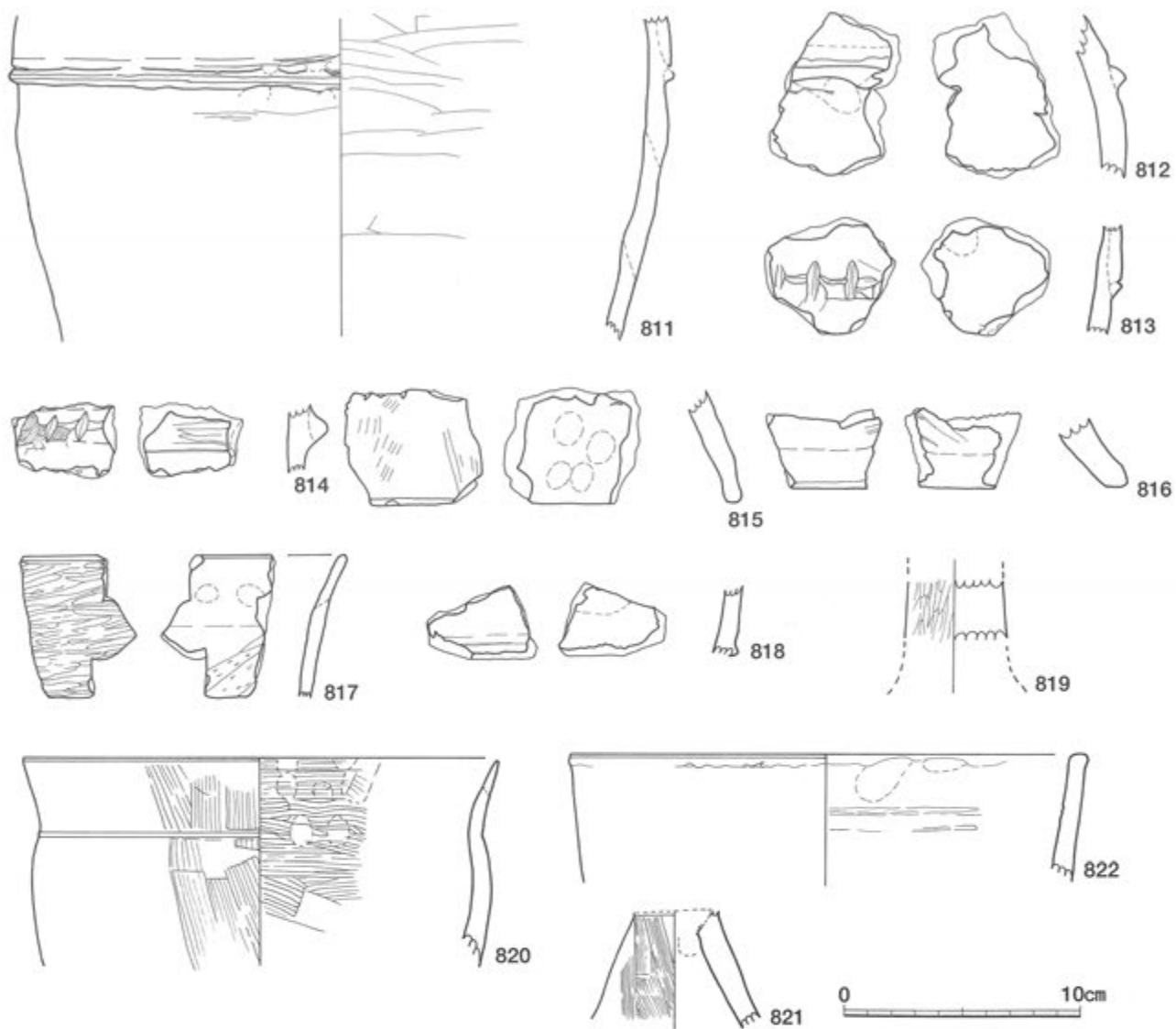
838は壺形土器の肩部である。340は壺形土器の丸底底部である。

839は埴形土器である。

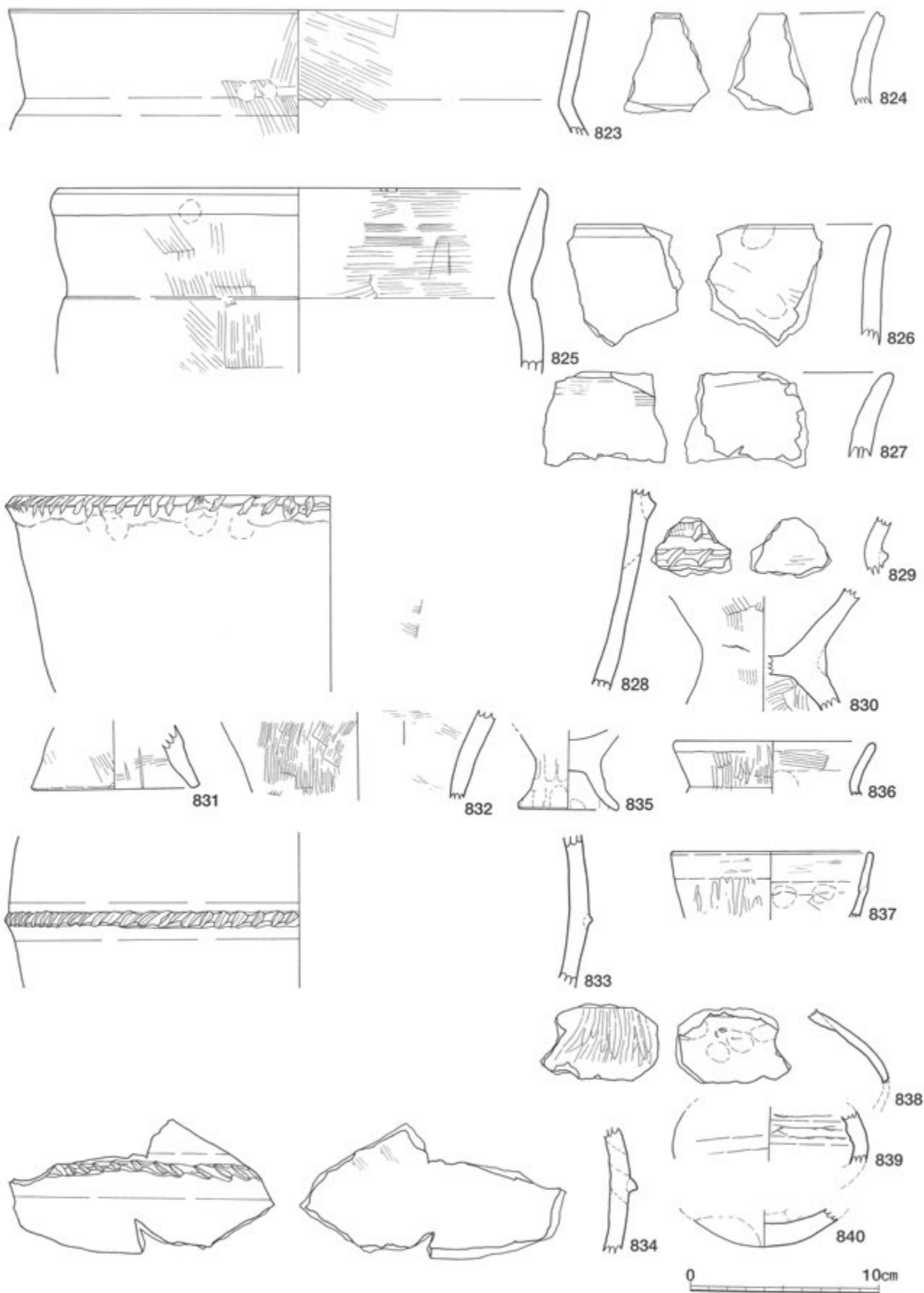
841は、C-22区、Ⅲa層から出土した埋設土器である。壺形土器で肥厚した丸底を呈するものである。外面はナデ調整が施され、煤が付着している。



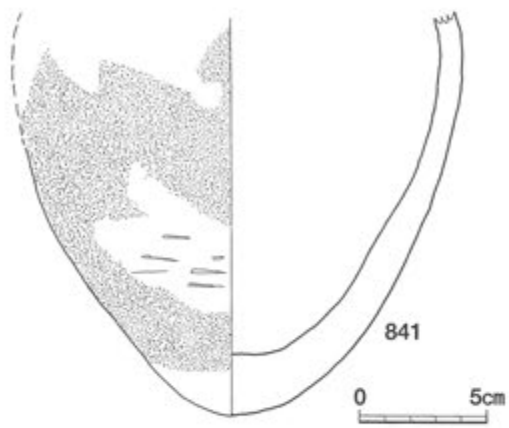
第143图 3号住居内出土遺物(3)



第144图 4·5·6号住居内出土遗物



第145图 7号住居内出土遗物



第146図 埋設土器

## 甕形土器

842～877は甕形土器である。

842～857は外反する口縁部をもつもので、842は口径33.0cmを測る。頸部はやや丸みにある「く」の字状に折れている。ナデ調整が施されている。

847・853～855・857は絡縄突帯を施すものである。器面調整は内面をナデ整形、外面はハケ目調整を行っている。

858～876は内弯する口縁部をもつもので、ナデ整形で器面調整がなされ、絡縄突帯を施すものである。858～860の口径は24.0cm, 18.0cm, 26.2cmを測る。860の突帯は刻目を施す。ナデ整形で器面調整を行っている。861は尖り気味の口縁部をもつ。877は口径37.8cmを測る大型の甕形土器である。頸部が「く」の字状に折れ、外反する口縁部をもつものである。

## 壺形土器

878は尖底気味の丸底をもつ壺形土器である。肩部に刻目のある絡縄突帯を施すものである。内外面ともナデ整形で器面調整を施している。879・880も同様の壺形土器である。893は小型壺で頸部が「く」の字状に折れ外反気味に直口する口縁部である。

## 鉢形土器

881・882は口径17.0cm, 15.0cmを測る鉢形土器である。881は内弯気味に直口する口縁部で、882は内弯する口縁部である。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。883・884は中空のあげ底底部で、脚台径は7.2cm, 9.0cmを測る。890・891も鉢形土器である。890は口径13.5cmを測る内弯する口縁部である。内外面ともナデ整形を施している。891は肥厚した底部で平底である。

## 埴形土器

885～889は埴形土器である。885は外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺である。器面調整はナデ整形である。復元口径11.0cm, 器高13.8cm, 胴部径12.8cmを測る。886も同様のもので、胴部径7.5cmを測る。887は外反する口縁部で、口縁下位に刻目突帯が貼付されている。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。888は内弯する口縁部で復元口径は10.2cmを測る。889は長い口縁部をもつもので外反する。内面はナデ整形、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

## 高坏

894～900は高坏である。894は坏部である。口縁部が体部から外折反転したもので、口径21.3cmを測る。895は脚部で、筒部が短く、裾部が緩やかに外反するものである。896は完形品で、口径24.0cm, 器高24.0cm, 脚部径12.2cmを測る。口縁部は体部から外折反転したもので、脚部は底部から筒部をもたずすぐ裾部になる形状を呈している。897～899は脚部で筒部が短く、裾部が緩やかに外反するもの(848)、底部から筒部をもたずすぐ裾部になる形状を呈しているもの(897・899)がある。何れも丹塗りである。

## 手捏土器

901～904は手捏土器である。901・902は底部が肥厚して平底となるもので、口縁は内弯気味のものである。902の口縁部は尖り気味である。903は丸底で内弯気味の口縁をあるもつものである。

904は外反気味に直口する口縁をもつもので、底部は尖底である。

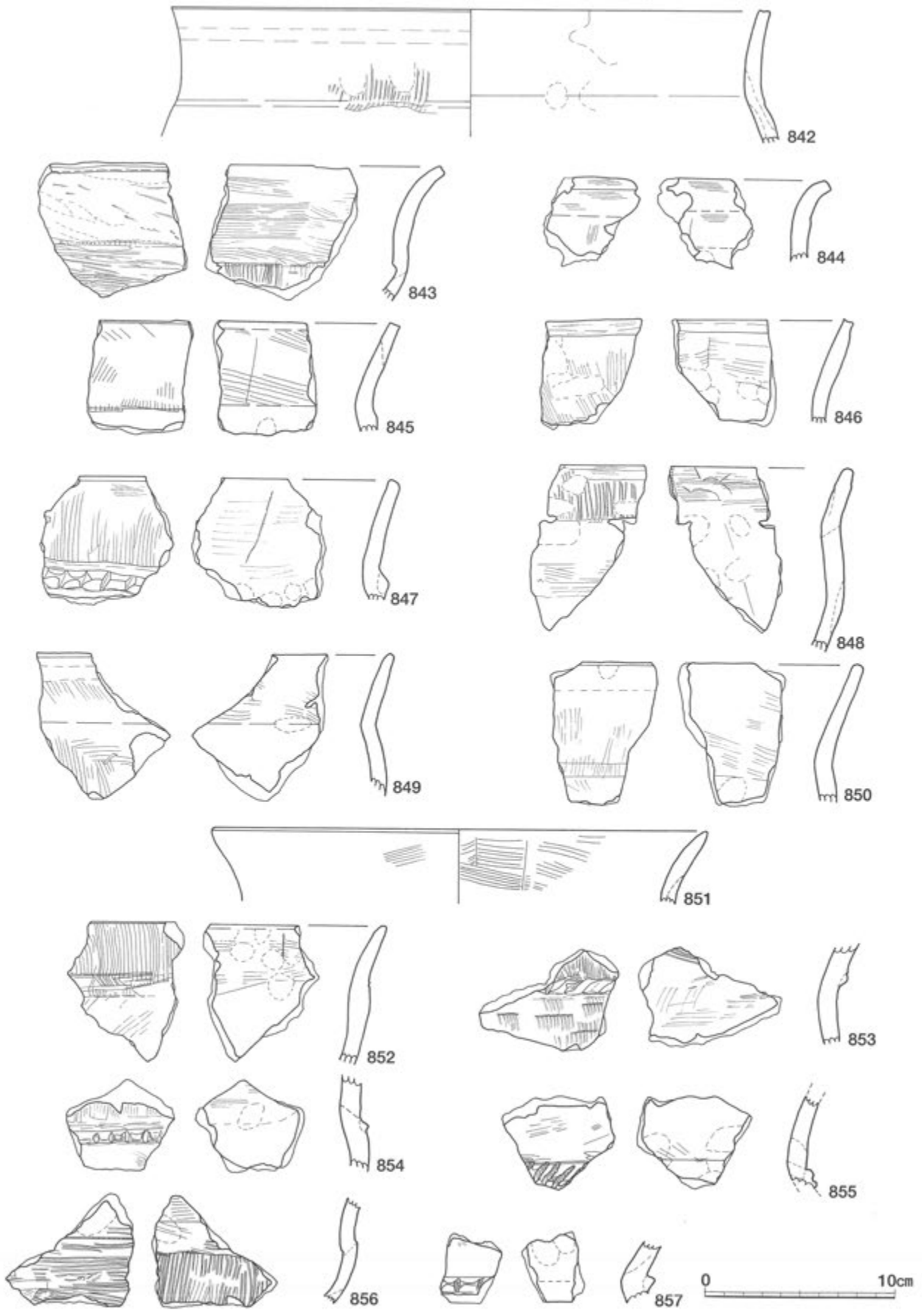
第24表 北原中遺跡遺構内出土土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	部位	調整		胎土	色調		取上番号	備考
						外面	内面		外面	内面		
138	761	D-23	住居1	甕	口~胴	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	褐色	3他	
	762	D-23	住居1	甕	口縁	ヨコナデ	指押さえ	qz,礫	暗褐色	にぶい赤褐色	46	
	763	D-23	住居1	甕	突帯		ナデ	qz	橙色	にぶい橙色	142	
	764	D-23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	黄褐色	褐色	89	
	765	D-23	住居1	甕	突帯	指押さえ	工具ナデ	qz,礫	黒褐色	黒褐色	86	
	766	D-23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ヨコナデ	qz	褐色	にぶい褐色	一括	
	767	D-23	住居1	甕	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	118	
	768	D-23	住居1	甕	突帯	ナデ	ハケメ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	103	
	769	D-23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ハケメ	qz	褐色	にぶい褐色	66	
	770	D-23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	赤褐色	一括	
	771	D-23	住居1	甕	突帯	ナデ	工具痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	80	
	772	D-23	住居1	壺	突帯	ナデ	ナデ	qz	褐色	にぶい褐色	131	
	773	D-23	住居1	埴	口~胴	ナデ	ヨコナデ	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	78	
	774	D-23	住居1	埴	肩部	ナデ	ナデ	qz		灰褐色	一括	
	775	D-23	住居1	埴	胴部	ヘラミガキ	ナデ	qz	褐色	にぶい褐色	93	丹塗り
776	D-23	住居1	埴	胴部	ヘラミガキ	指ナデ	qz	赤褐色	赤褐色	113		
777	D-23	住居1	壺	底部	ヘラミガキ	指ナデ	qz	にぶい褐色	明褐色	143		
139	778	D-7	住居2	甕	口~胴	ハケメ	指押さえ	ho,qz	褐色	褐色	一括	
	779	D-7	住居2	甕	口縁	ナデ	指押さえ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色		
	780	D-7	住居2	甕	口縁	工具痕	指押さえ	ho,qz	褐色	褐色		
	781	D-7	住居2	甕	完形	ナデ	ナデ	qz	褐色	にぶい褐色	一括	スス附着
140	782	D-7	住居2	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	明褐色	明黄褐色	一括	
	783	D-7	住居2	甕	底部	ハケメ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	29	
	784	D-7	住居2	甕	脚台	ヨコナデ	工具痕	fl,qz	にぶい黄褐色	褐色	一括	
	785	D-7	住居2	壺	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	黒褐色	一括	
	786	D-7	住居2	壺	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	赤褐色	明赤褐色	66	丹塗り
	787	D-7	住居2	埴	口縁	ヘラミガキ	ナデ	qz	赤褐色	にぶい褐色	55他	丹塗り
	788	D-7	住居2	高坏	口縁	ミガキ	ヘラミガキ	qz	赤褐色	にぶい褐色	65	丹塗り
	789	D-7	住居2	甕	口縁	ヨコナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	11	
	790	D-7	住居2	埴	胴部	ナデ	ヨコナデ	qz	明黄褐色	明黄褐色	一括	
	791	D-7	住居3	甕	口~胴	ナデ	ナデ	fl,qz	明赤褐色	褐色	191他	
141	792	D-7	住居3	甕	口~胴	板ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	9他	
	793	D-7	住居3	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	明赤褐色	132他	
	794	C-6	住居3	甕	胴部	ナデ	工具痕	fl,ho,qz	暗赤褐色	明赤褐色	13他	
142	795	C-11	住居3	甕	胴部	ハケメ	ハケメ	fl,ho,qz	赤褐色	明赤褐色	203他	
	796	D-22	住居3	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	71	
143	797	D-22	住居3	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	109	黒塗り
	798	D-22	住居3	甕	突帯	ハケメ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	157	
	799	D-22	住居3	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	65	
	800	D-22	住居3	甕	胴部	ヨコナデ	ナデ	ho,qz	にぶい褐色		177	
	801	D-22	住居3	甕	胴部	ヨコナデ	ナデ	qz	黄褐色	褐色	一括	
	802	D-22	住居3	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	98	
	803	D-22	住居3	壺	突帯	ハケメ	ヨコナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	7	
	804	D-22	住居3	甕	胴部	ハケメ	ナデ	fl,qz	にぶい褐色	褐色	804他	
	805	D-22	住居3	甕	脚台	ヨコナデ	ヨコナデ	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	21他	
	806	D-22	住居3	甕	脚台	ヨコナデ	ヨコナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	191	
	807	D-22	住居3	甕	脚部	ヨコナデ	ヨコナデ	fl,qz	褐色	にぶい赤褐色	192	
	808	D-22	住居3	甕	脚部	ハケメ	指押さえ	qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	136	
	809	D-22	住居3	甕	胴部	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	124他	
	810	D-22	住居3	壺	底部	板ナデ	工具痕	fl,qz	褐色	にぶい黄褐色	一括	
	144	811	D-21	住居4	甕	胴部	ヨコナデ	ナデ	qz,礫	赤褐色	にぶい黄褐色	41他
812		D-21	住居4	甕	突帯	指押さえ	ナデ	qz	暗石灰色	にぶい黄褐色	122他	
813		D-21	住居4	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	褐色	6	
814		D-21	住居4	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	35	
815		D-21	住居4	甕	脚台	ハケメ	ナデ	qz	褐色	にぶい褐色	34	
816			住居4	甕	脚台	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	入口土坑	
817			住居4	埴	口縁	ヘラミガキ	ヨコナデ	qz	褐灰色	灰褐色	一括	丹塗り
818			住居5	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	褐色	黒色	一括	
819		D-20	住居5	高坏	脚部	ヘラミガキ	/	qz	暗灰褐色	灰褐色	5	丹塗り
820		B-23	住居6	甕	口縁	ヨコハケ	ナデ	qz	暗灰黄色	にぶい黄褐色	一括	
145	821	D-23	住居6	高坏	脚部	ハケメ	指ナデ	qz	にぶい褐色	褐色	19	
	822	B-23	住居6	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	明赤褐色	一括	
	823	E22	住居7	甕	口縁	ナデ	ハケメ	qz	明黄褐色	明黄褐色	44	
	824	E23	住居7	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	明赤褐色	12	
	825	E22	住居7	甕	口縁	ヨコナデ	ナデ	qz	褐色	にぶい黄褐色	14他	
	826		住居7	甕	口縁	指ナデ	ヨコナデ	qz	明黄褐色	にぶい黄褐色	82	
	827		住居7	甕	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	qz	褐色	にぶい褐色	81	
	828	E22	住居7	甕	胴部	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	褐色	57他	
	829	E23	住居7	壺	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	30	

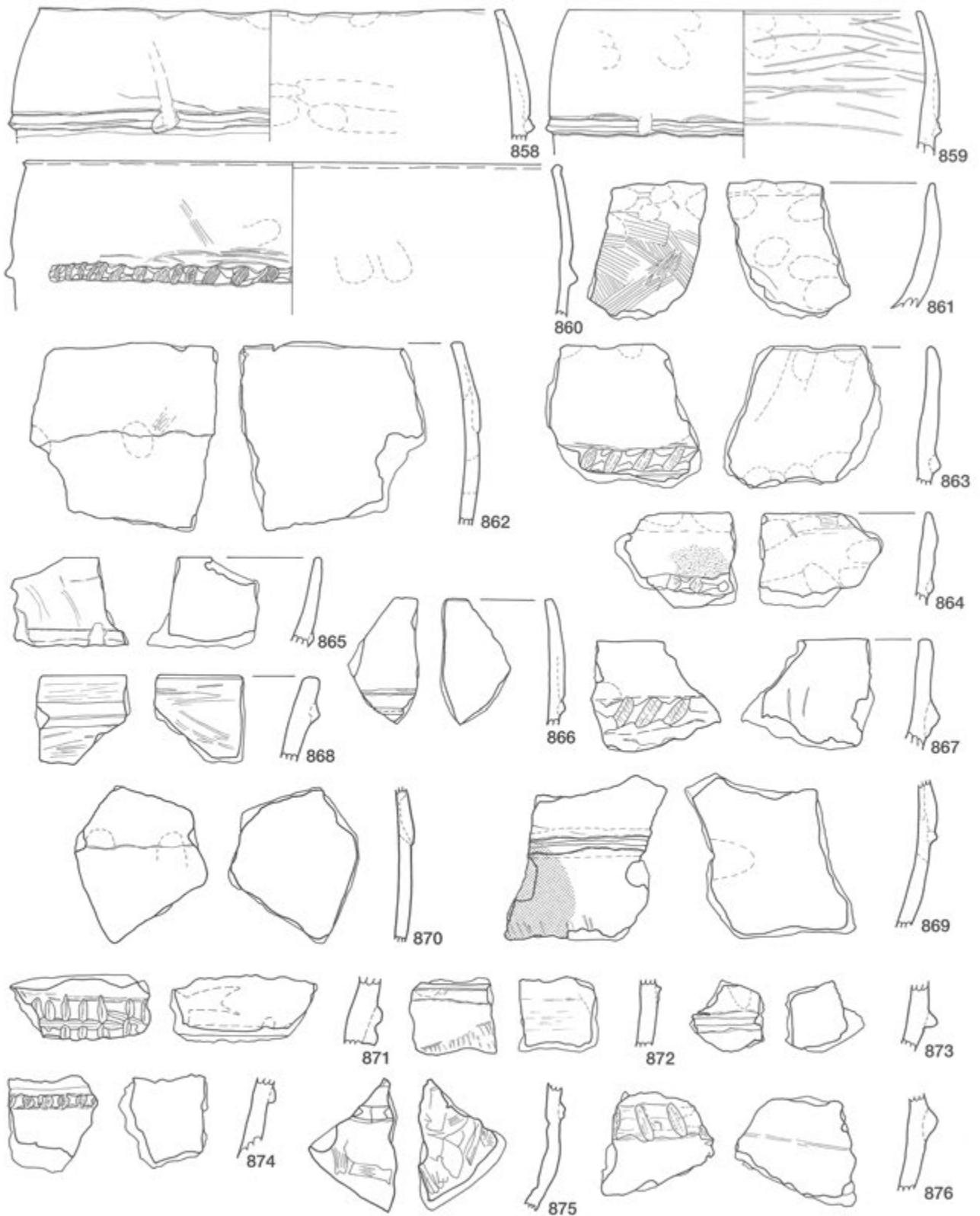
第25表 北原中遺跡遺構内出土土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	部位	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
145	830		住居7	甕	底部	ヨコナデ	指ナデ	qz	にぶい橙色	黒色	138	
	831	E22	住居7	甕	底部	ヨコハケ	ヨコハケ	qz	明黄褐色	明黄褐色	84	
	832	E23	住居7	壺	頸部	ハケメ	ナデ	qz	明黄褐色	にぶい黄橙色	15	
	833		住居7	壺	胴部	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄色	にぶい黄色	136	
	834		住居7	壺	突帯	ヨコナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	134他	
	835	E22	住居7	甕	脚台	指ナデ	指押さえ	qz	橙色	にぶい黄橙色	36	
	836	E23	住居7	埴	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	6	
	837	E22	住居7	埴	口縁	ヘラミガキ	指押さえ	qz	橙色	橙色	112	
	838	E22	住居7	壺	肩部	ミガキ	指押さえ	qz	明赤褐色	にぶい黄橙色	一括	
	839		住居7	埴	肩部	ミガキ	指ナデ	qz	にぶい黄橙色	浅黄色	171	
840	E22	住居7	壺	底部	ミガキ	指ナデ	qz	橙色	橙色	156	黒 斑	
146	841	C-22	1号埋土	壺	胴～底	ナデ		fl,qz,磔	にぶい褐色	黒褐色	埋設	スス付着

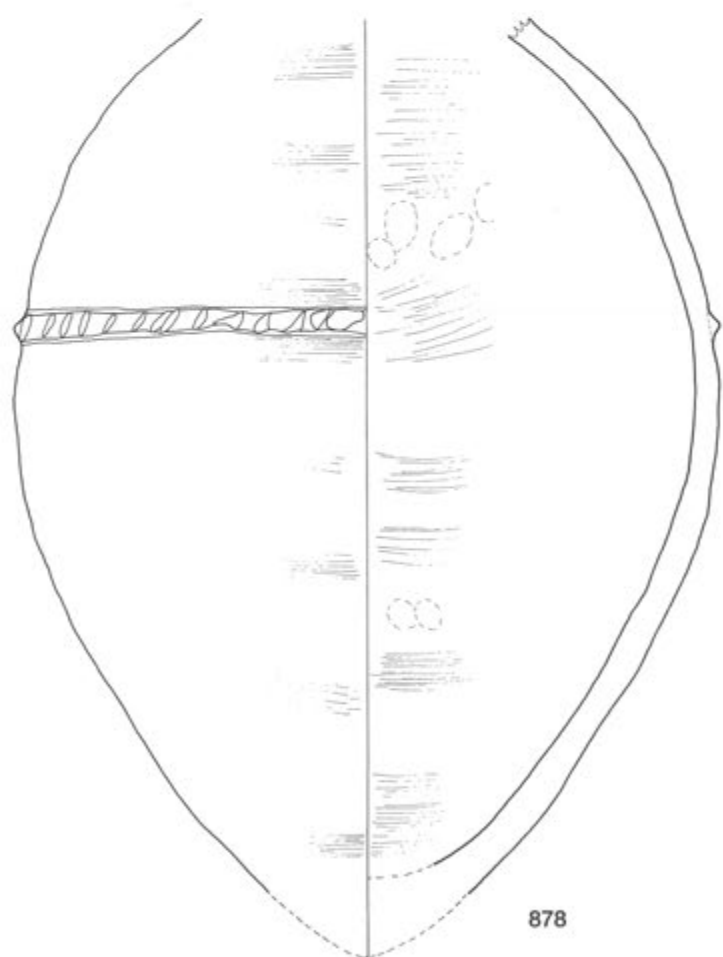
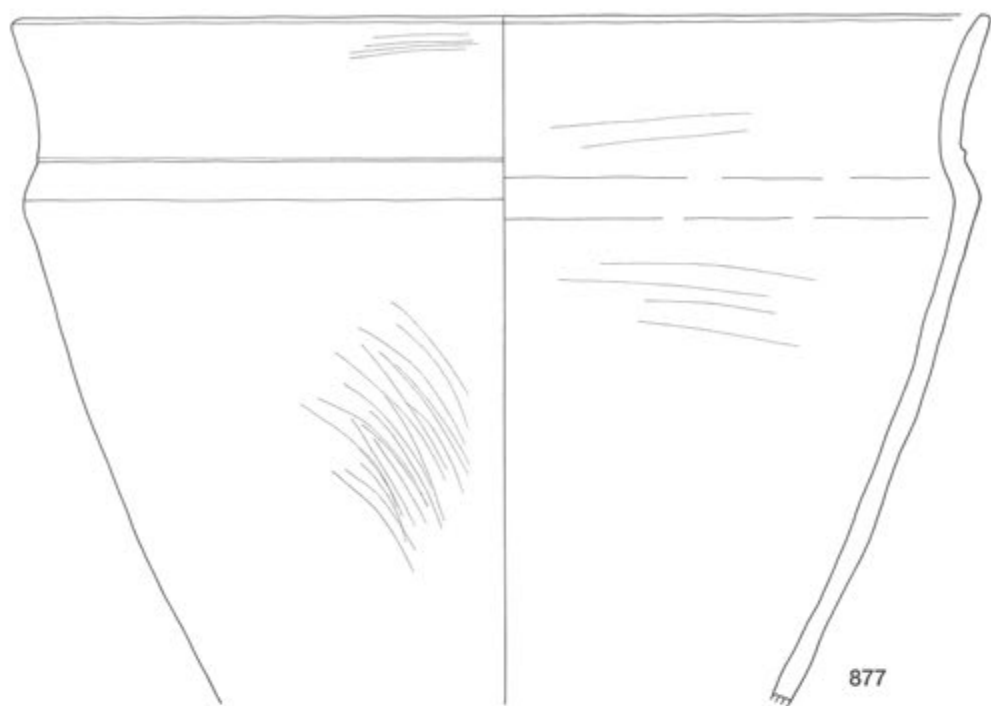




第147图 IV層出土土器 (1)

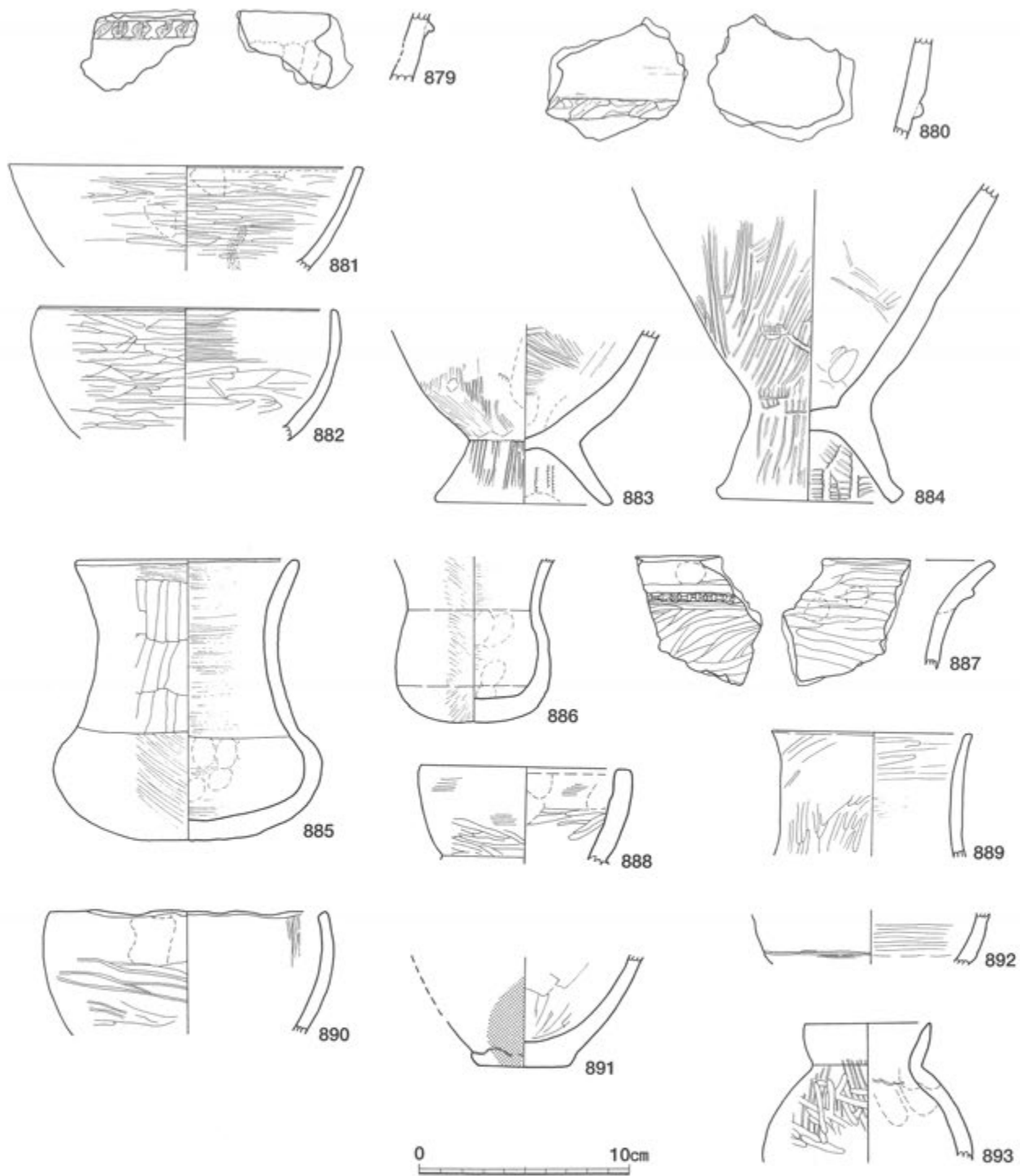


第148图 IV層出土土器 (2)

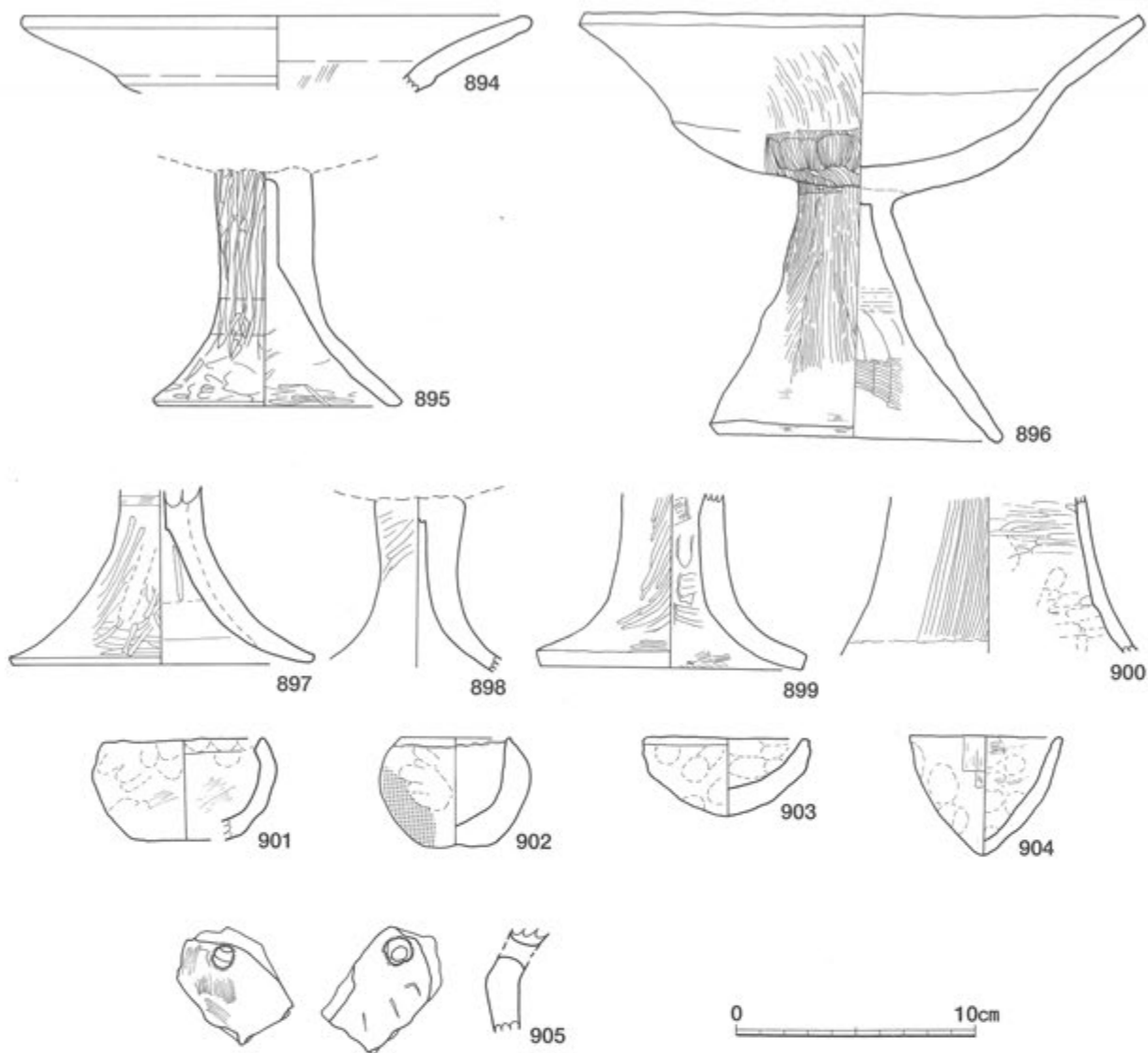


0 10cm

第149図 IV層出土土器 (3)



第150图 IV層出土土器(4)



第151圖 IV層出土土器 (5)

第26表 北原中遺跡包含層成川式土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	部位	調整		胎土	色調		取上番号	備考
						外面	内面		外面	内面		
147	842	D23	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	橙色	橙色	7725	
	843	D23	Ⅲb	甕	口縁	ケズリ	ハケメ	fl,qz	明赤褐色	にぶい褐色	7731	
	844	C9	Ⅳ	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz,磔	明黄褐色	明黄褐色	1595	
	845	D23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ハケメ	qz	にぶい黄褐色	にぶい橙色	7442	
	846	D23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ハケメ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	7918	
	847	D23	Ⅳa	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい橙色	7630他	
	848	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	橙色	にぶい黄褐色	2832他	
	849	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	明黄褐色	明黄褐色	711	
	850	E23	Ⅲ	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	橙色	1157	
	851	D23	Ⅳa	甕	口縁	ナデ	横ハケ	qz	明黄褐色	明黄褐色	7651	
	852	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	橙色	明黄褐色	786	
	853	D23	Ⅲb	甕	突帯	工具ナデ	工具ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	7524	
	854	D23	Ⅲb	甕	突帯	ハケメ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	明灰黄色	7740	
	855	E23		甕	突帯	横ナデ	指ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	一括	
	856	D23	Ⅲb	甕	頸部	ハケメ	ハケメ	fl,qz	にぶい橙色	橙色	7734	
	857	E23	Ⅲb	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1168	
	148	858	E23	表層	甕	口縁	横ナデ	指ナデ	ho,qz	黒褐色	にぶい黄褐色	カクラン
859		E23	表層	甕	口縁	指ナデ	ナデ	qz,磔	にぶい褐色	にぶい褐色	カクラン	
860		E23	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ナデ	ho,fl,qz	にぶい黄褐色	明黄褐色	755他	
861		E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	橙色	橙色	722	
862		E23	表層	甕	口縁	指ナデ	ナデ	ho,qz,磔	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	カクラン	
863		E23	Ⅳb	甕	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい黄褐色	橙色	1145	
864		C10	Ⅳa	甕	口縁	ナデ	横ナデ	qz	橙色	橙色	1110	
865		E23	Ⅳ	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	カクラン	
866		D22	表層	甕	口縁	横ナデ	ナデ	qz	暗褐色	にぶい黄褐色	73	
867		D23	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ハケメ	qz	橙色	橙色	7700	
868		E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ハケメ	ho,fl,qz	にぶい褐色	橙色	1211	
869		E23		甕	突帯	横ナデ	ナデ	qz	明褐色	暗赤灰色	土器集中部	スス附着
870		E23	表層	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz,磔	橙色	にぶい黄褐色	一括	
871		E23	Ⅲb	甕	突帯	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	719	
872		D23	Ⅳa	甕	突帯	ナデ	工具ナデ	fl,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	7715	
873		E23	表層	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz,磔	にぶい赤褐色	明赤褐色	カクラン	
874		D23	Ⅳa	甕	突帯	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	7633	
875	E23	表層	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	一括		
876	D23	Ⅲb	甕	突帯	ナデ	ナデ	ho,fl,qz	褐色	にぶい褐色	7463		
149	877	C15	Ⅳ	甕	口～胴	ハケメ	ハケメ	qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	2299他	
	878	C15		壺	胴部	ナデ	ナデ	qz,磔	にぶい褐色	褐灰色	294他	
150	879	D23	Ⅲb	壺	突帯	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	7406	
	880	E23	表層	壺	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	カクラン	
	881	E23	表層	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	にぶい褐色	カクラン	
	882	E23	表層	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	カクラン	
	883	D16	Ⅳb	壺	底部	ハケメ	ハケメ	fl,qz	明赤褐色	黄褐色	1	
	884	E23	Ⅲb	壺	底部	工具ナデ	工具ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	黒色	1123他	
	885	C15	Ⅲ	小型壺	完形	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	811他	
	886	C15	Ⅲ	小型壺	胴～底	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1845	
	887	E23	表層	壺	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	カクラン	
	888	E23	Ⅲb	小型壺	口縁	ナデ	ミガキ	fl,qz	明赤褐色	明赤褐色	716	
	889	E23	表層	埴	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	にぶい褐色	カクラン	
	890	E23	表層	埴	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	明赤褐色	明赤褐色	カクラン	
	891	D23	Ⅳa	埴	底部	ナデ	ナデ	fl,qz	褐色	にぶい褐色	一括	スス附着
151	892	E23	表層	鉢	胴部	ミガキ	ナデ	qz	赤色	にぶい赤褐色	一括	
	893	C9	Ⅳ	小型壺	口～胴	ハケメ	指押え	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1126他	
	894	E23	表層	高坏	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	カクラン	
	895	D22	Ⅲb	高坏	脚部	ヘラミガキ		fl,qz	赤色	にぶい黄褐色	7899	
	896	B10	Ⅳ	高坏	完形			ho,qz	明赤褐色	褐色	1013	
	897	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	qz	赤褐色	にぶい黄褐色	一括	
	898	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ミガキ		fl,qz,磔	明赤褐色	にぶい赤褐色	723	
	899	E23	表層	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	qz	赤色	明赤褐色	カクラン	
	900	E23	表層	高坏	脚部	ミガキ	ハケメ	qz	赤色	にぶい黄褐色	カクラン	
	901	D23	Ⅳa	手づくね		指押さえ	指押え	qz,磔	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	8078他	
	902	D23	Ⅳa	手づくね		ナデ	ナデ	fl,ho,磔	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	8078	スス附着
	903	D23	Ⅳa	手づくね		指押さえ	指押え	qz,磔	灰白色	灰白色	8078・8025	黒斑
	904	C16	Ⅲ	手づくね		ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3694	
	905	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ハケメ	工具痕	ho	にぶい褐色	明赤褐色	1112	透かし

### 住居内出土石器（第152～154図，906～910）

検出された住居内の胎土から，成川式土器に伴い数十点の石器が出土した。その中から，状態の良いものをそれぞれ図化した。

2号住居は，2点の遺物を図化した。906は石皿である。扁平な安山岩を用いており，最大長33.5cm，重量10.2kgを計る。両面に擦痕を有し，特に表面にはツヤがある。907は軽石製品である。全体に擦痕がみられ，中央に深くぼみがあるが，詳しい情報は不明な点が多い。

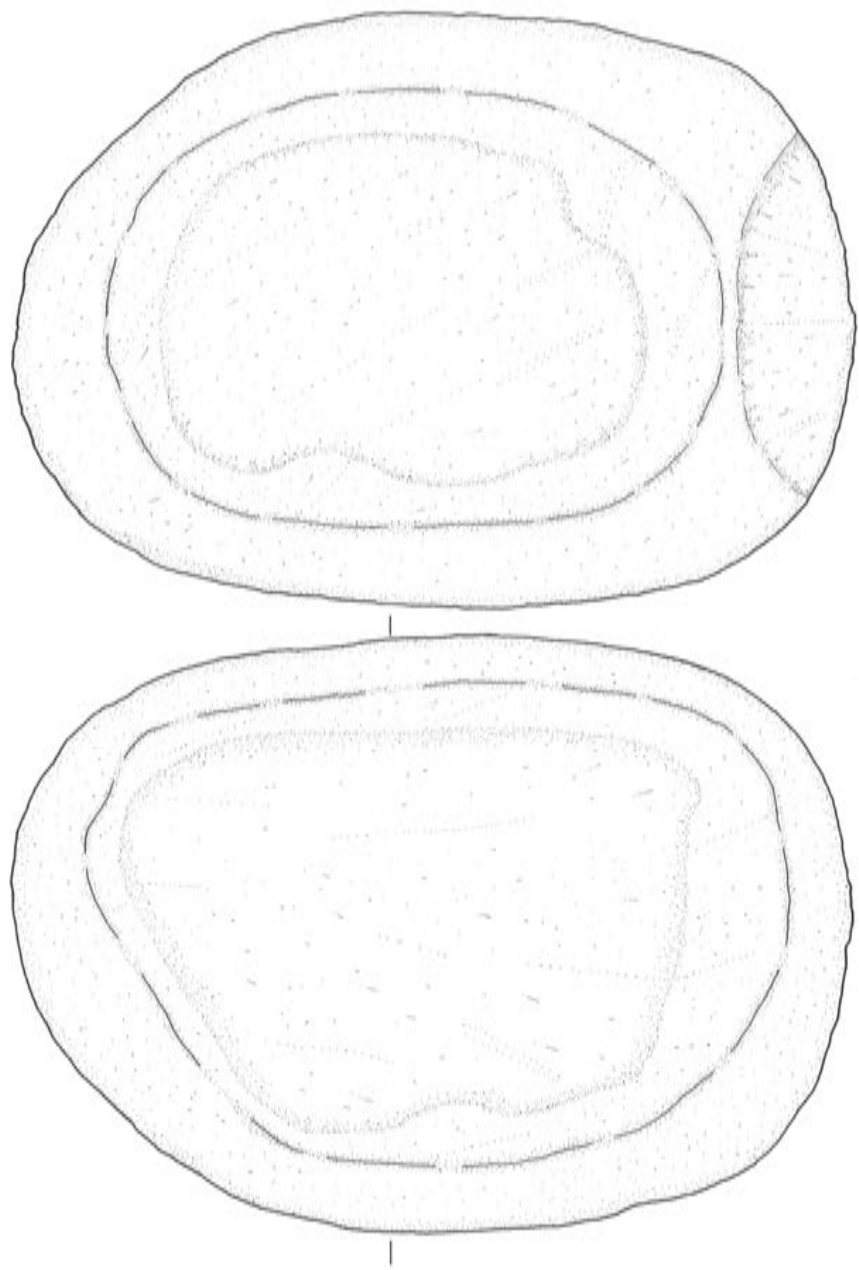
909は3号住居跡から出土したもので，大きく欠損しているが，花崗岩の扁平な素材を用いた石皿である。表裏に作業面を有し，いずれも弱い擦痕がみられる。中央部に向かって，緩やかにくぼんでいく。

910は5号住居跡から出土したもので，顕著に確認できる使用痕により，台石とした。楕円形の砂岩を用いている。正面には，やや深く擦り減った研磨面がみられる。方向が一定であり，砥石として利用された可能性がある。左右面，裏面には，ほぼ面の中心に敲打によるつぶれ状の使用痕がみられる。台石として使用されたと推測できる。上面と下面には，敲打痕と思われるつぶれや剥落が観察できた。全ての面に使用痕がみられ，また，一部弱い所もあるが擦痕が全面に確認できた。台石としたが，石器のオールマイティな使用法を考えさせる遺物であろう。

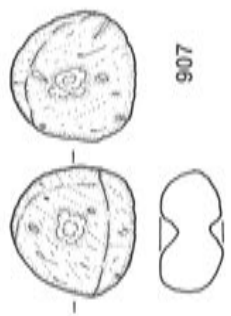
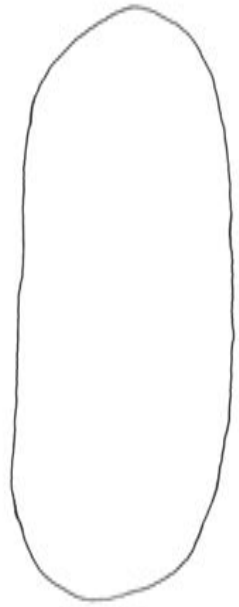
908は7号住居跡から出土したもので，頁岩製の砥石1点である。表面と裏面に大きく剥離面を残している。主に両側辺と正面の上部に，一定方向に向かっての研磨がみられる。

第27表 北原中遺跡住居内出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	器種	石材	区	住居No.	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
152	906	13338	石皿	安山岩	B5	2号	33.5	23.5	8.2	10200	
152	907	49	軽石製品	軽石	D23	2号	4.8	5.0	2.4	20.0	
153	909	7798	石皿	花崗岩	C6	3号	16.3	17.0	5.3	2810	
154	910	114	台石	砂岩	D20	5号	21.8	8.6	7.2	2140	
153	908	—	砥石	頁岩	E23	7号	10.1	4.2	1.5	70.0	



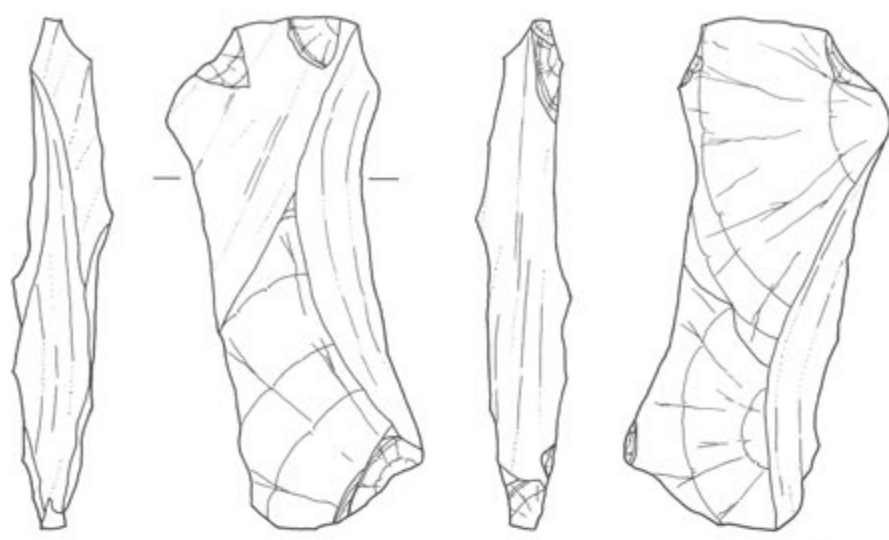
906



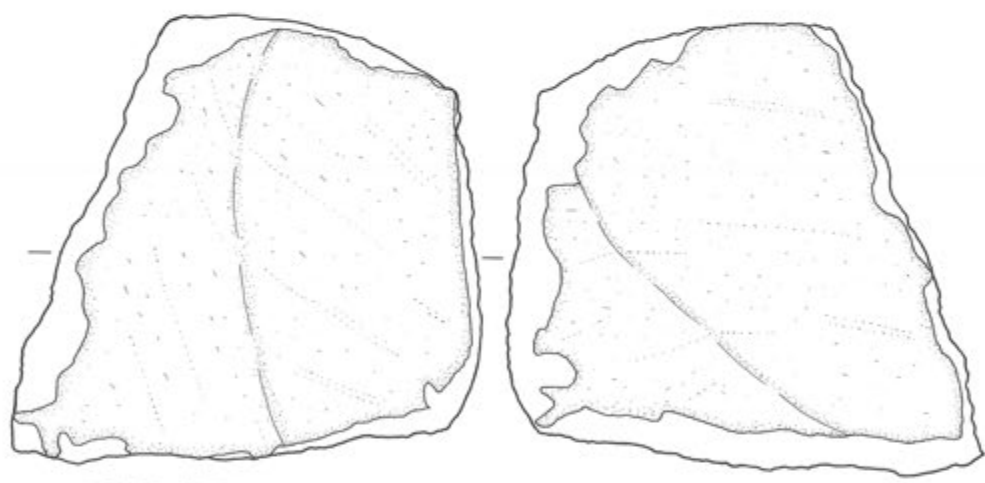
907

第152図 遺構内出土石器 (1)





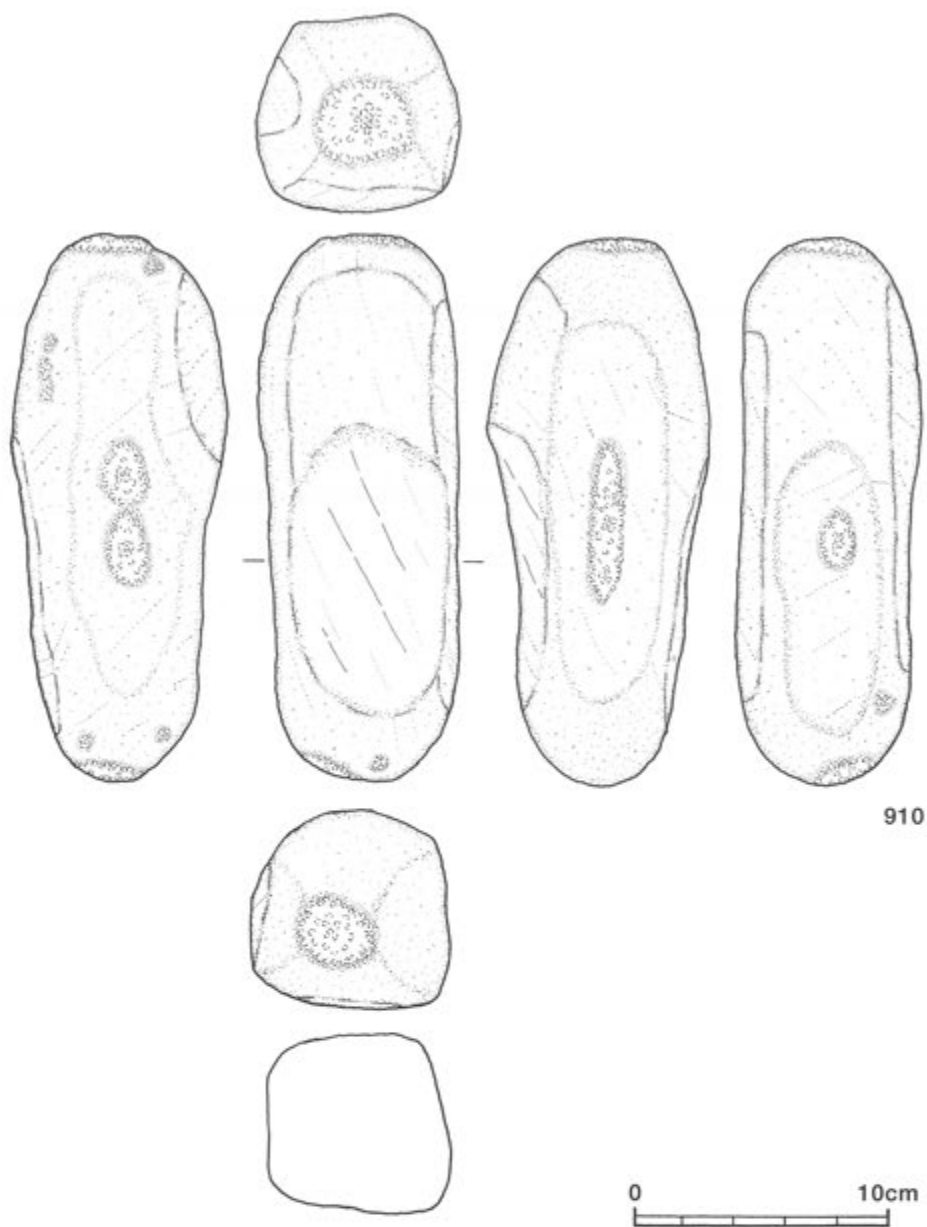
908



909



第153図 遺構内出土石器 (2)



910

第154図 遺構内出土石器 (3)

宇都上遺跡

## 第Ⅵ章 宇都上遺跡

### 第1節 発掘調査の概要

宇都上遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.180を基準に10m間隔の区割りを設定し、北側から1～12、西側からA～F区と名称した。平成17年度に確認調査を行い、面積が2,700㎡で縄文時代と古代～中世の二文化層があることが判明し、本調査を平成18年5月9日から10月27日まで行った。

平成17年度に、下記のとおり16か所のトレンチを設定して確認調査を行った。

トレンチ	規模(m)	遺構	遺物
1	4×5	溝状遺構・古道・柱穴	縄文後期土器, 古墳時代土器
2	2×5	溝状遺構	縄文後期土器
3	3×5	—	—
4	2×5	土坑・古道	縄文後期土器, 磨石, 古墳時代土器
5	2×5		縄文後期土器, 陶磁器
6	2×10	ピット	陶磁器
7	2×4	土坑	縄文後期土器, 古墳時代土器

その他、2×5m（1か所）、1×5m（4か所）、3×5m（4か所）は、盛土、削平があり遺構・遺物は発見されなかった。

この結果に基づいて、表土は重機にて排除し、Ⅱ～Ⅳ層の全面調査を実施した。

その結果、縄文時代・古墳時代・古代～中世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構・遺物は、集石2基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏃・石斧・敲石等の石器が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し、古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され、また、第2次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

### 第2節 縄文時代の調査

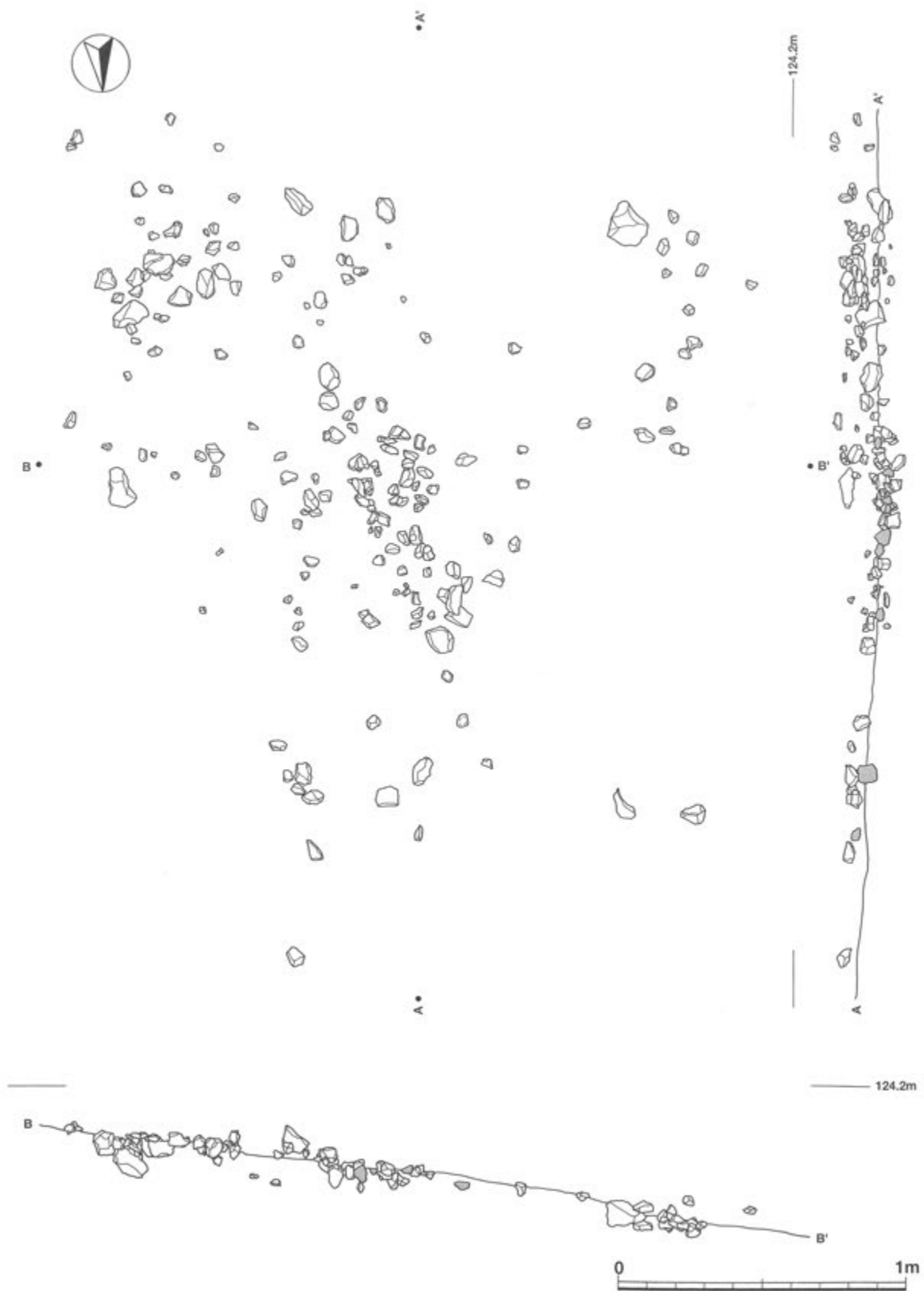
Ⅲ～Ⅳ層からは、縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。遺物はB～E-2～12区に集中し、遺構は集石遺構が2基検出された。

#### 集石遺構1（第155図）

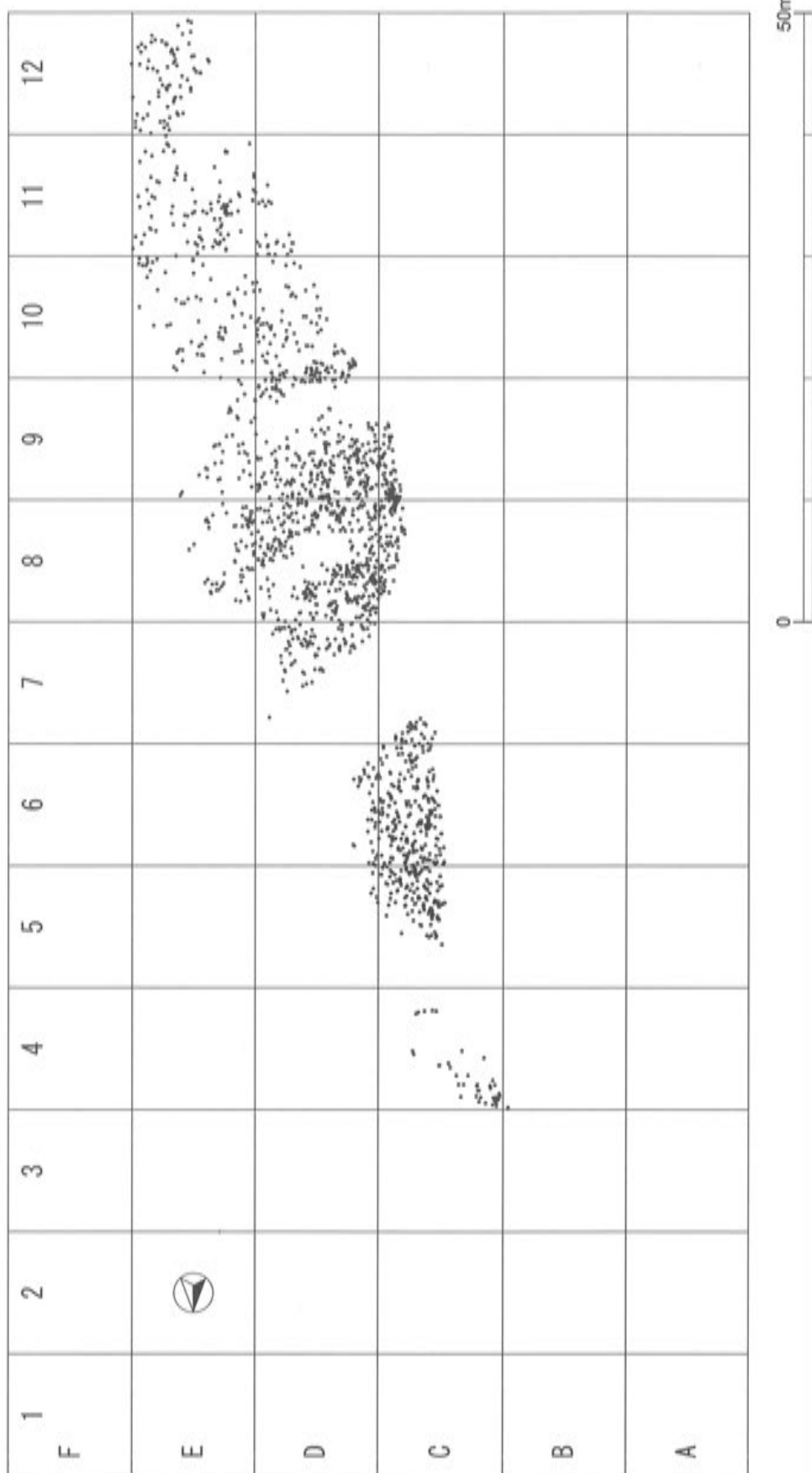
C-4区、Ⅲa層上面で検出したものである。175個の拳大の角礫が、240cm×240cmのほぼ円形の範囲に散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、加熱の影響を受けたものと考えられる。彫り込み等は認められなかった。

#### 集石遺構2（第166図）

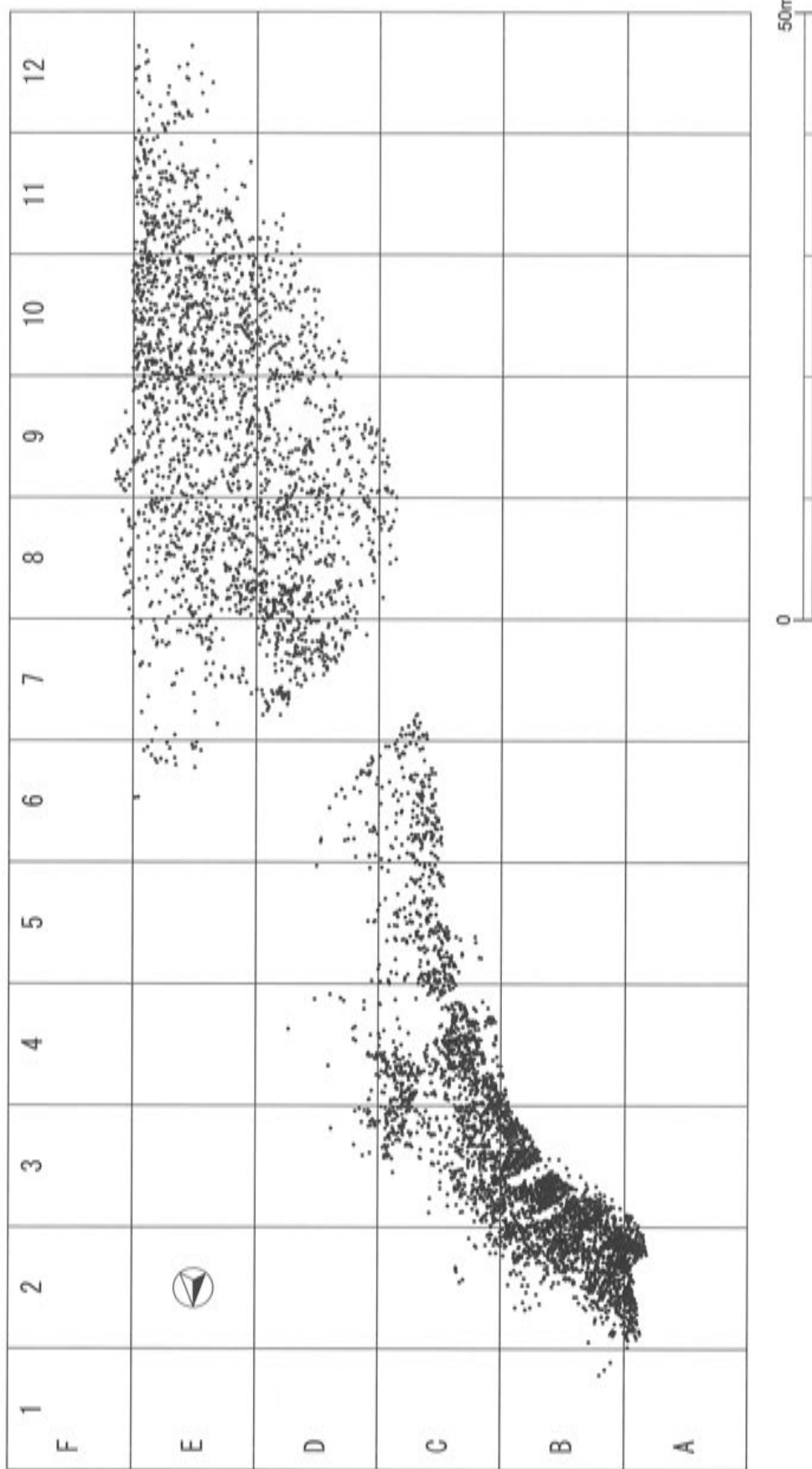
C-10区、Ⅲa層上面で検出したものである。9個の拳大の角礫が、50cm×20cmの楕円形の範囲に集中した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており、加熱の影響を受けたものと考えられる。彫り込み等は認められなかった。



第155図 集石 (1)



第156図 III層遺物出土状況



第157図 M層遺物出土状況

## 縄文土器

縄文土器は、B～F - 2～12区、IV層で出土した。縄文時代後期を主体にしたものである。

920～923はやや内湾する口縁部を呈し、胴部が緩やかにカーブないしほぼ直線的な立ち上がりを見せる鉢形土器である。文様は沈線のみで構成されている。辛川式土器に該当する土器である。

924・925は胴部である。

926は口縁部断面形が緩やかな三角形を呈し、口縁部の文様に沈線を用いるものである。北久根式土器に該当するものである。

927・928も辛川式土器の胴部で沈線を文様にするものである。

929～931は口縁部と胴部に磨消縄文を施す土器で、やや内湾する口縁部をもち、胴部の立ち上がりのカーブがやや強い土器である。加治木町干迫遺跡や鹿屋市中ノ原遺跡から出土した中ノ原式土器に類似する。

932は、口径24.0cmを測る口縁部で中ノ原土器であるが、2本の平行沈線で構成され、沈線のみで磨消縄文が施されていないものである。

933も北久根式土器で、926同様、口縁部断面形が緩やかに三角形を呈し、口縁部の文様に沈線を施すものである。

934は、口縁部が「く」の字状を呈するもので、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。ナデ整形で器面調整を行っている。丸尾式土器に該当する。

935は、口縁部が外反するもので、内外面とも貝殻条痕で施文を行っているものである。市来式土器に該当する。

936は、口縁部が外反する土器で、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。口縁部が山形を呈するものである。

937も市来式土器で、口縁部下位に貝殻復縁による斜位の連続刺突文を施すものである。

938～944は、口縁部が外反する土器で、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。貝殻刺突文は羽状に施され、942は口縁部が山形を呈す。

945は、口径31.2cmを測る外反する口縁部で、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。

946～948・950は、外反する口縁部をもつもので、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。947は貝殻刺突文は羽状に施されている。

949は、口縁部の断面形が「く」の字状を呈するもので、口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしている。

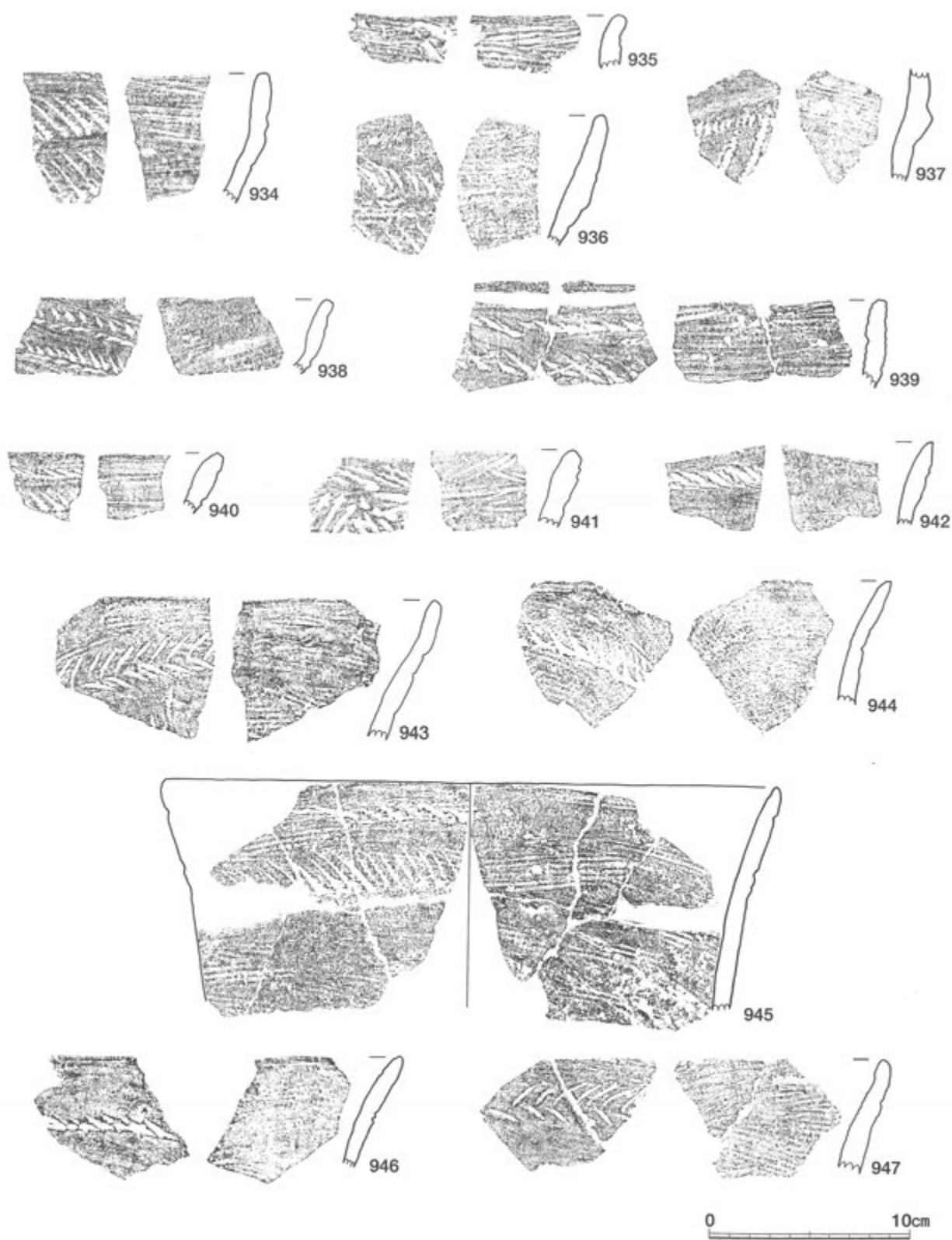
951～955は、丸尾式土器の貝殻条痕を施した胴部である。

956は、脚台をもつ鉢形土器の脚台部である。上観面が円形をベースとするもので、脚台径が9.8cmを測るものである。爪形押圧で文様を構成している。

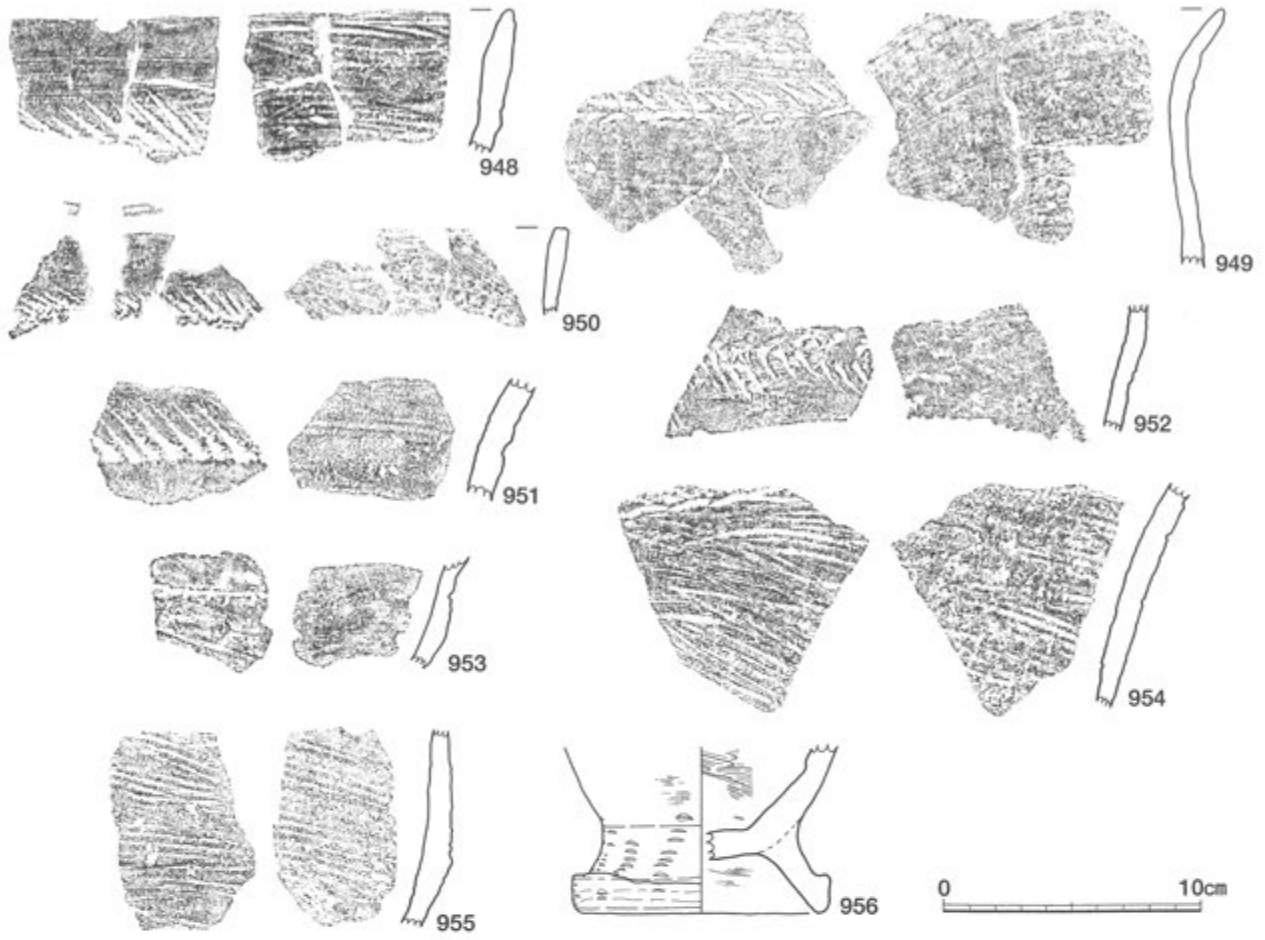




第158図 縄文土器 (1)



第159図 縄文土器 (2)



第160図 縄文土器 (3)

第28表 宇都上遺跡縄文土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	部位	調 整		胎土	色 調		取上番号	備 考
						外面	内面		外面	内面		
158	920	C4	IVb	辛川	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	淡茶褐色	6191	
	921	C4	IVa	辛川	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	黒褐色	5033他	
	922	C4	VIII	辛川	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	暗褐色	黒褐色	6210	
	923	C4・5	IVa	辛川	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	黒褐色	5554他	
	924	C4	IVa	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	暗褐色	暗褐色	5650他	
	925	C4	IVa	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	暗茶褐色	暗茶褐色	5621他	
	926	C4	IVa	北久根	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	暗黄褐色	暗褐色	5043他	
	927	C4	IVb	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	茶褐色	暗黄褐色	6205	
	928	C4	IVa	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	橙色	暗褐色	5585他	
	929	C4	IVa	中ノ原	胴部	ナデ	条痕	ho,qz	橙色	暗褐色	5615他	
	930	C4	IVb	中ノ原	胴部	ナデ	条痕	ho,qz	黒褐色	黒褐色	6077他	
	931	C4	IVa	中ノ原	胴部	ナデ	ナデ	qz,礫	暗茶褐色	暗茶褐色	6066	
	932	C4	IVa	中ノ原	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	暗褐色	黒褐色	5611他	
	933	C4	IVa	北久根	口縁	条痕	ナデ	bi,ho,qz	橙色	黒色	5582	
159	934	C3	IVa	丸尾	口縁	条痕	条痕	bi,qz	暗茶褐色	赤褐色	6092	
	935	C4	IVb	市来	口縁	条痕	条痕	bi,qz	赤褐色	赤褐色	5134	
	936	C4	IVb	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	淡赤褐色	暗赤褐色	5028	
	937	C4	IVa	市来	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	橙色	橙色	6185	
	938	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗茶褐色	暗茶褐色	5120	
	939	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	赤褐色	5235他	
	940	C3	IVb	丸尾	口縁	条痕	条痕	bi,qz	黒褐色	赤褐色	4839	
	941	C5	IVa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	黒褐色	淡赤褐色	7400	
	942	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,ho,qz	暗褐色	黄褐色	5102	
	943	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi,qz	暗茶褐色	暗黄褐色		
	944	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗黄褐色	黒褐色	5545	
	945	C4	IVb	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi,qz	暗茶褐色	茶褐色	5533他	
	946	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗赤褐色	暗茶褐色	4854	
	947	C4	IVb	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi,qz	赤褐色	暗黄褐色	6164	
160	948	C3	IVa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい茶褐色		
	949	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗茶褐色	赤褐色	5572	
	950	C4	IVa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	にぶい茶褐色	黒褐色	6059他	
	951	C4	IVa	丸尾	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	赤褐色	5256	
	952	C4	IVa	丸尾	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	赤褐色		
	953	C4	IVa	丸尾	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	暗茶褐色	黒褐色	5616	
	954	C4	IVa	丸尾	胴部	条痕	条痕	qz	暗茶褐色	赤褐色	5040	
	955	C4	IVb	丸尾	胴部	ナデ	条痕	qz	にぶい赤褐色	黒褐色	6053	
	956	C3	IVa	市来	底部	ナデ	ナデ	ho,qz	黄褐色	にぶい黄褐色	5128	

## 石器

宇都上遺跡からは、縄文時代後期・晩期、古代、中世の遺物が出土した。様々な石材が用いられており、黒曜石は肉眼的観察により、鷲ヶ迫遺跡同様の分類を行った。

### 石鏃（第161図，957～960）

本遺跡では4点の石鏃が出土した。石材、形態に統一性はみられず、また、遺物数も少量の為、各々を述べていきたい。

957は、節理面を利用している五角形鏃である。形態は、両側辺の下方に張り出した部分が作られ、側辺は直線的で、先端部に向かうにつれてやや膨らみを持つようになる。その為、逆刺はやや鈍い。抉りは非常に浅く、基部は内弯しているように見える。958は安山岩を素材としたものである。側辺部はわずかに外弯し、先端部付近でゆるやかに内弯している。側辺の上部には、表裏面からの細かく丁寧な剥離によって逆刺が鋭く作られている。脚部と抉りが欠損しているため、形態や詳しい情報は不明である。959は桑ノ木津留産黒曜石を用いている。側辺部はやや外弯し逆刺は丸く作られている。側辺の先端部には使用痕らしきつぶれが、ごくわずかにみられる。抉りはやや深く入り右脚部がわずかに欠損している。細部にわたる細かな調整剥離によって全体が形成されている。960は頁岩の縦長剥片を用いている。右脚部付近に厚みがあり、また自然面を有する。表面は、粗く大まかな剥離により形成されており、表面も同様の剥離が呈されている。全体的に粗いタッチが目立つため、未成品の可能性が高い。

### スクレイパー（第161図，961～964）

4点出土した。様々な素材を用いており、形態にも統一性はみられない。石鏃同様、分類せず、各々を述べていきたい。

961は自然面を有する、針尾産黒曜石の横長剥片を用いている。不定形を呈しているが、下部には使用によるとと思われる微細剥離がみられ、わずかに内弯する右側辺に表裏からの細かな調整剥離によって、刃部が形成されている。962は不純物を多く含む桑ノ木津留産黒曜石の縦長剥片を、横位に用いている。下辺に、表裏面からの調整剥離によって刃部が形成されているが、連続性はみられず、粗雑な印象を受ける。刃部はわずかに使用痕がみられる。右側辺には不純物が集中しており、破碎しているが、刃部はその部位まで続く可能性も考えられる。963は暗緑灰色のチャートを用いている。所々に風化面がみられる。ほぼ台形を呈し、下辺に表裏面からの調整剥離によって刃部が形成されている。左側辺が欠損しているが、そこに風化面がみられるため、欠損品を使用していた可能性がある。964はハリ質安山岩の縦長剥片を用いている。欠損品と思われ、下辺に刃部がわずかに残る。表裏からの調整剥離により、粗く刃部が形成されている。使用痕は観察できなかった。

### 石斧（第161図，965・966）

2点出土し、いずれも磨製石斧である。

965は黒色頁岩を用いている。基部、肩部が欠損し、半円状の刃部のみが残る。正面は研磨によって、ほぼ水平に加工されているが、かすかに稜を形成している。裏面には、広く剥離面が残る、

その部分を除いて研磨されている。刃部には、使用中の欠落と考えられる欠損部がある。966は剥落の激しい、粘板岩を素材としている。全面にわたり研磨が施されているが、非常に脆く、斧としての利用に疑問を感じる。

#### 磨石・敲石（第162図，967～969）

本遺跡からは、磨石、敲石が多数出土したが、完形を留めているものが少なかった。その中から完形品3点を選別し、図化した。また磨石、敲石には、同一個体上に研磨、敲打の加工痕があり、重複して有する場合がある。鷲ヶ迫遺跡同様、顕著に表れている使用痕により遺物を判断した。

967・968は敲石である。いずれも花崗岩の円礫を用いている。967は側面の全てに、広範囲に使用痕がみられ、正面と裏面には擦痕がみられる。特に正面に擦痕が強く残る。

968は所々に敲打による深くぼみとつぶれがみられる。全体に擦痕がみられるのだが、非常に弱い。969は花崗岩の楕円形の礫を用いた、磨石である。敲打痕は観察できなかった。全ての面に擦痕がみられるが側辺部の擦痕は、やや弱いものとなっている。

#### 石皿（第162図，970・971）

2点出土し、いずれも欠損品である。

970は花崗岩を用い下部、上部、右側部を大きく欠損している。両面に使用痕がみられ、強く磨りくぼんでいる。裏面の一部に敲打による浅いくぼみがみられ、台石としての利用も考えられる。971は花崗岩を用いているが、大きく欠損している。正面は、多方向への研磨により、稜が形成されている。裏面にも弱く研磨がみられ、中央に敲打によるくぼみがかすかにみられる。

#### 軽石製品（第162・163図，972～975）

軽石製品は4点出土した。

972は厚みを持つ楕円形で下部へ向けて膨らみを呈する。全面に研磨が施されている。

973・974は円形に近い不定形のものである。扁平な素材を用いており、研磨がみられる。

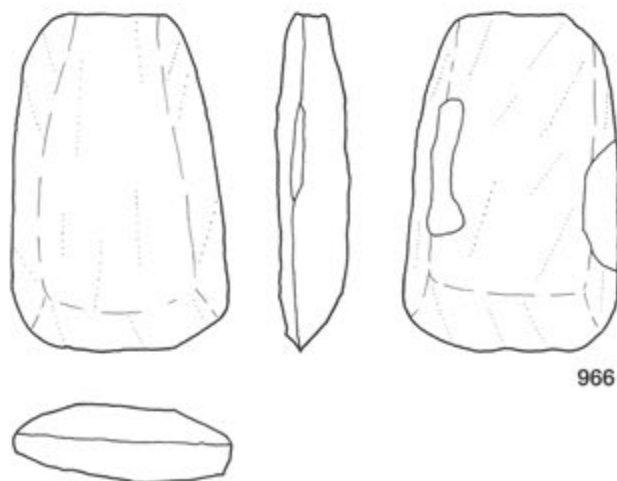
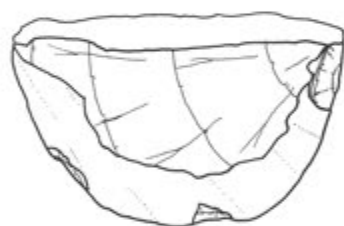
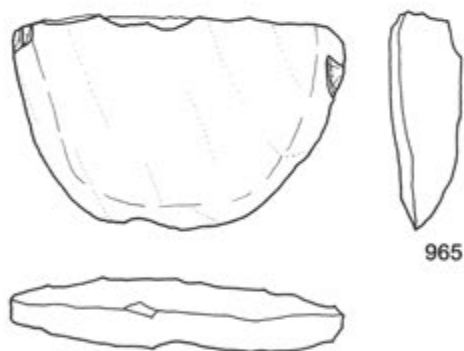
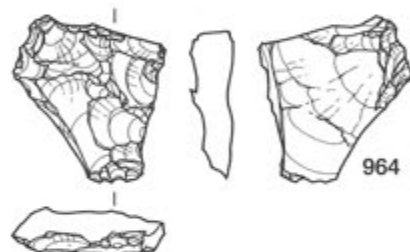
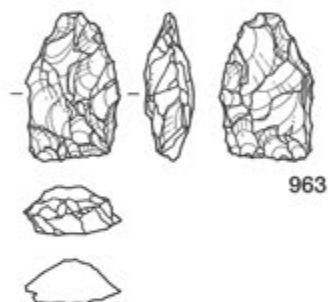
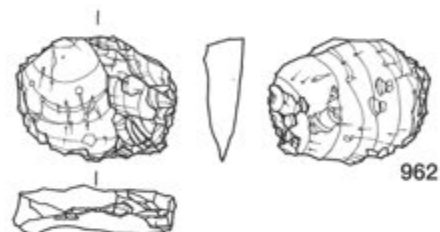
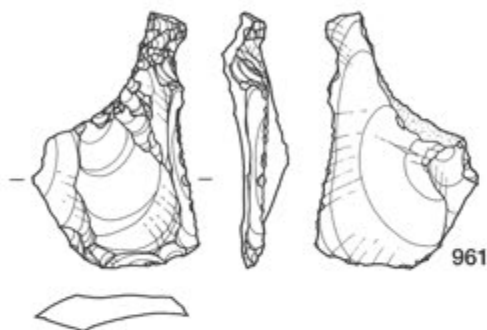
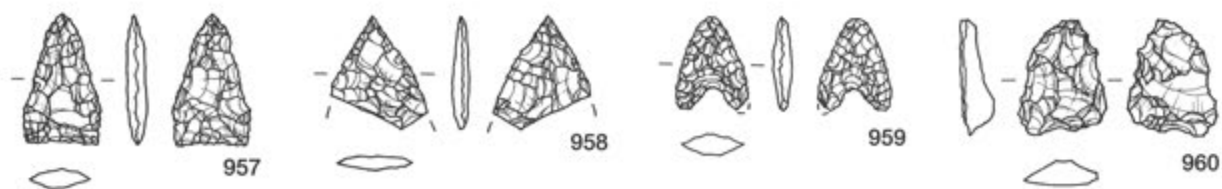
975は正面に1cm弱の深さのくぼみがみられる。欠損品のため、詳しい情報は不明である。

#### 滑石製品（第164図，976～979）

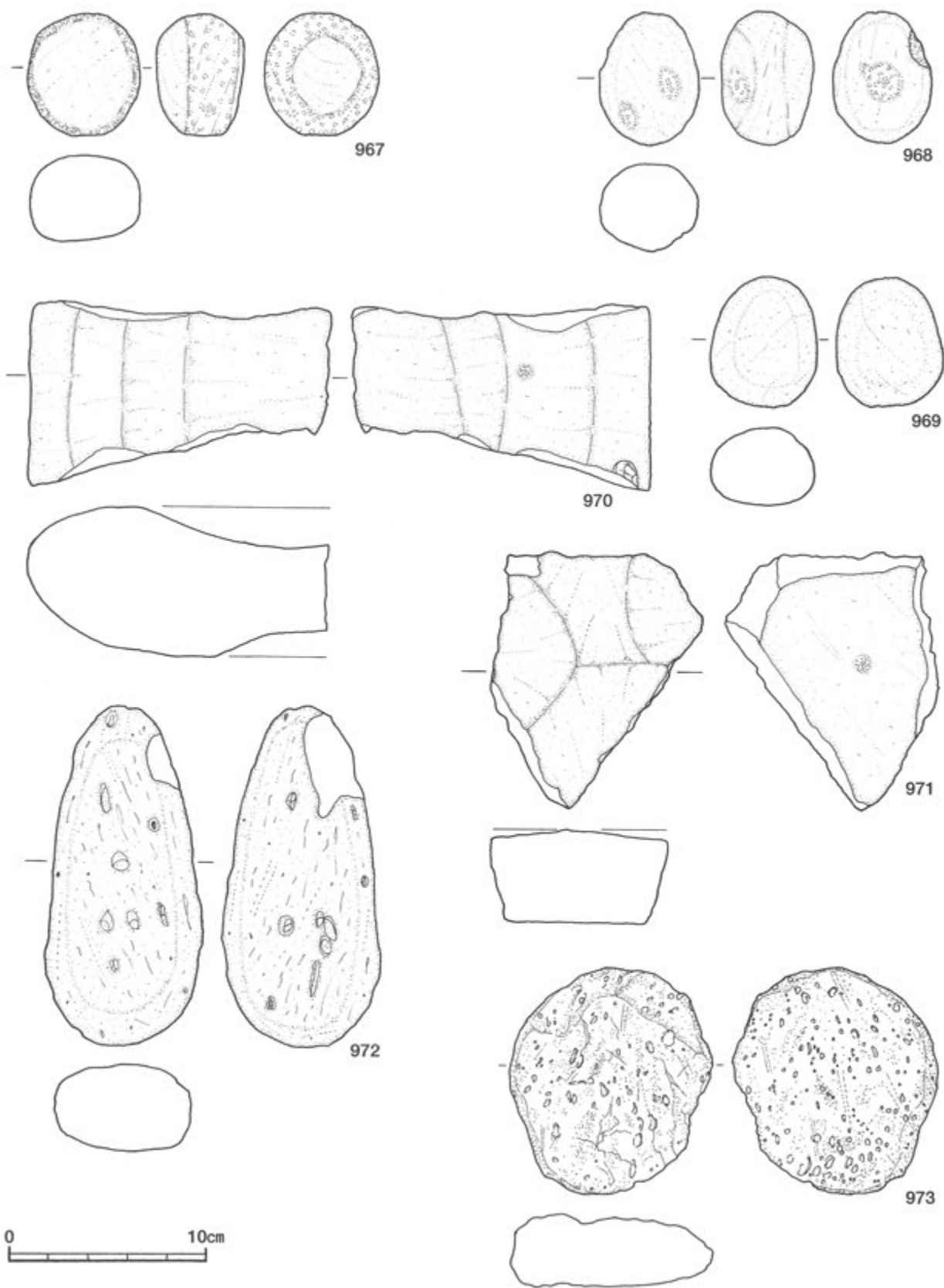
滑石製品、破片等、10数点の出土があったが、加工痕のみられるもの、原形を留めるもの4点を図化した。976～978は形態より、石錘と考えられる。

これらは、時期が不明な点が悔やまれるが、同一形態であり、用途的にも同一と思われる。

976は、表裏面に小型のノミ状の様な工具で加工されたような痕がわずかに観察できる。全体が5mm程度の均等な厚さを呈しており、1.5mm程の深さの溝が側辺に一周にわたって入っている。全体的に丁寧な仕上げられており、また重量が4.0gを計る。977は、表面は欠損、剥落が多く、幅が5mm程度のノミ状の様な工具痕がかすかにみられる。一周にわたり、1～2mm弱の深さの溝が入っており、側辺中央部にはそれに伴って3箇所交差する溝が作られている。裏面は内弯しており、上部と下部には形成の為と考えられる研磨痕がみられる。978は気泡の多い素材を用いている。下部

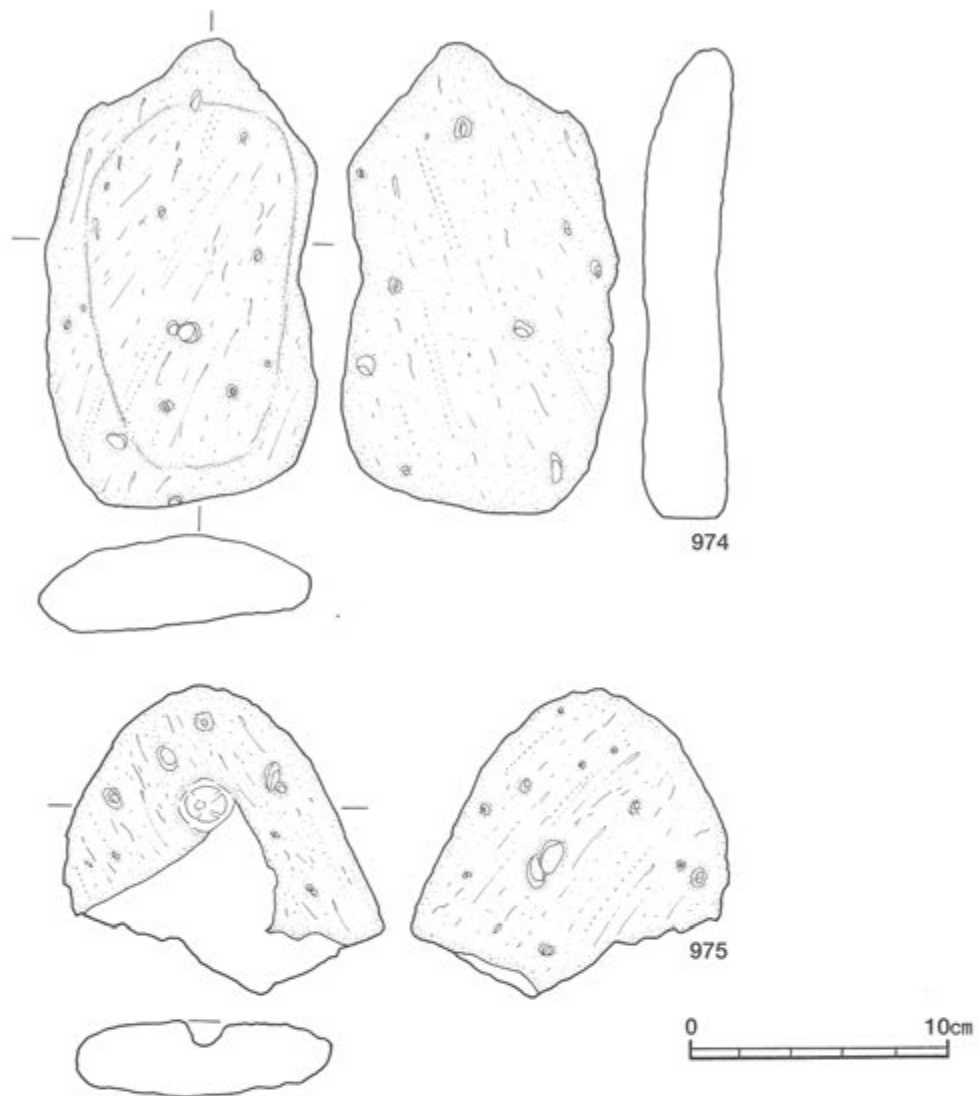


第161图 出土石器 (1)



第162図 出土石器 (2)

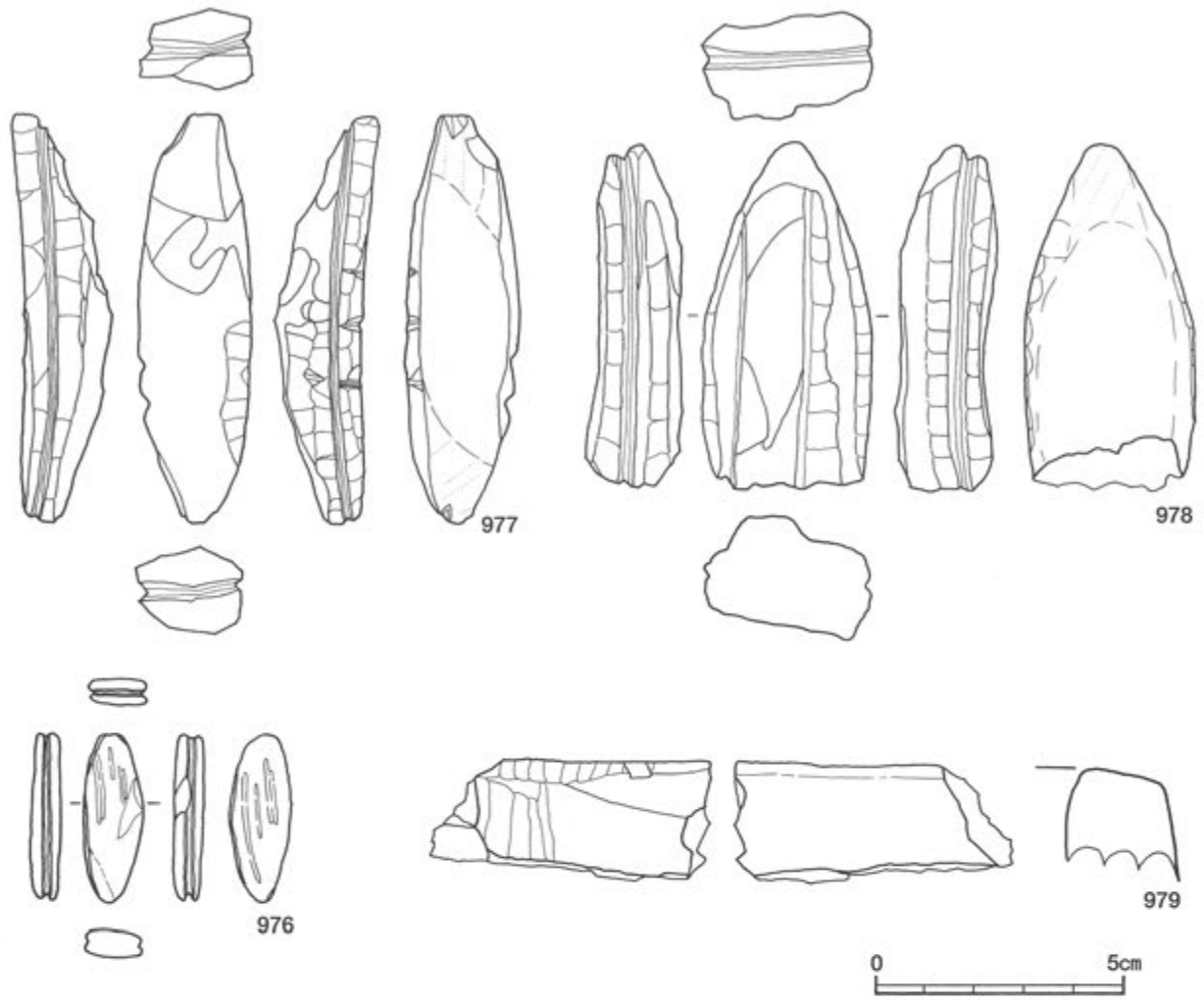




第163図 出土石器 (3)

が欠損しているが、側辺部のノミ状加工痕と、ほぼ一周にわたる溝により977と同じ性格であろう。表面中央薄が同じ幅で隆起しており、滑石製石鍋の鏝の部分の転用品である可能性が高い。979は、滑石製石鍋の口縁部である。表面、口唇部は、幅の狭いノミ状工具による加工痕がうすくみられる。裏面は、細かな加工の後、丁寧に磨かれている。

ほぼ全ての遺物がⅢ層から出土しており、古代から中世の時期に該当する。滑石は長崎県西彼杵半島が主な産地であり、中世に滑石製石鍋としてほぼ全国に流通した。県内の遺跡からも滑石製石鍋出土の報告が多数あり、また、滑石の特性を活かした転用品や、滑石製品の出土も報じられている。宇都上遺跡でも多数の滑石片や、977のように転用を考えさせる遺物が出土している。中世の交流や流通経路を知る上で、重要な遺物である可能性が高い。



第164图 出土石器 (4)

第29表 宇都上遺跡石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	取上番号	器 種	石 材	区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
161	957	5410	打製石鏃	玉髄	E7	IVa	2.6	1.5	0.3	1.0	
	958	8342	打製石鏃	安山岩	E10	IVb	2.3	1.8	0.3	1.0	
	959	6763	打製石鏃	桑ノ木津留	B3	IVa	1.9	1.4	0.4	1.0	
	960	7185	打製石鏃	頁岩	F9	IVa	2.3	1.7	0.6	2.0	
	961	9353	スクレイパー	黒曜石針尾	D9	IVb	5.2	3.4	0.9	9.0	
	962	8392	スクレイパー	黒曜石桑ノ木津留	C8	Ⅲ	2.5	3.2	0.9	9.0	
	963	8788	スクレイパー	チャート	D8	IVb	2.9	1.8	0.9	5.0	
	964	8791	スクレイパー	ハリ質安山岩	D8	IVb	3.7	2.8	0.7	7.0	
	965	6087	磨製石斧	頁岩	C4	IVb	4.3	6.6	1.2	50.0	
	966	4116	磨製石斧	粘板岩	C3	Ⅳ	6.9	4.3	1.3	60.0	
162	967	7483	敲石	花崗岩	E9	IVb	6.4	5.7	4.4	240.0	
	968	7436	敲石	花崗岩	D6	Ⅳ	6.9	5.1	4.6	210.0	
	969	6324	磨石	花崗岩	D6	Ⅲ	6.8	5.4	4.2	220.0	
	970	6405	石皿	花崗岩	E10	土坑内	9.7	15.4	9.0	1690	
	971	7526	石皿	花崗岩	D6	IVb	13.3	10.9	4.9	930.0	
	972	4593	軽石製品	軽石	B2	IVa	18.8	10.7	3.7	170.0	
	973	4848	軽石製品	軽石	C3	IVb	11.3	10.3	3.5	148.0	
163	974	2498	軽石製品	軽石	B2	IVa	17.6	8.1	4.5	220.0	
	975	679	軽石製品	軽石	B2	IVa	12.2	10.6	2.7	110.0	
164	976	3147	滑石製品	滑石	D9	Ⅲ	3.4	1.2	0.6	4.0	
	977	575	滑石製品	滑石	D9	Ⅲ	8.4	2.2	2.1	40.0	
	978	650	滑石製品	滑石	E8	Ⅲ	7.0	3.4	2.1	51.0	
	979	3143	石鍋	滑石	D10	IVa	2.5	5.6	2.2	37.0	

### 第3節 古代～中世の調査

古代～中世の遺構・遺物はⅡ層で検出された。遺構はC～E-6～12区で道跡6条，溝状遺構7条，土坑37基が検出された。

遺物は土師器・陶磁器・滑石製品が出土した。

#### 道跡（第166図）

道跡はC・D-6・7区，D-8・9区で検出された。溝状遺構と道跡の区別は，硬化面が顕著なものを道跡として分類した。C・D-6・7区に5条，D-8・9区に1条が検出された。

#### 道跡1

C・D-6区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.8～1.6mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向N-71°-Eを測り，総延長は12mである。

#### 道跡2

C・D-6区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで，硬さや締まり具合は部分により異なっている。主軸方向N-38°-Eを測り，総延長は10.4mである。

#### 道跡3・4

C-6区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向N-70°-Eを測り，道跡1と同方向である。総延長は4.8m，14mである。

#### 道跡5

C-7区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.8～1.0mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向N-38°-Eを測り，道跡2と同方向である。総延長は6mである。

#### 道跡6

D-8・9区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向南北方向に走り，総延長は約5mである。

#### 溝状遺構（第166図）

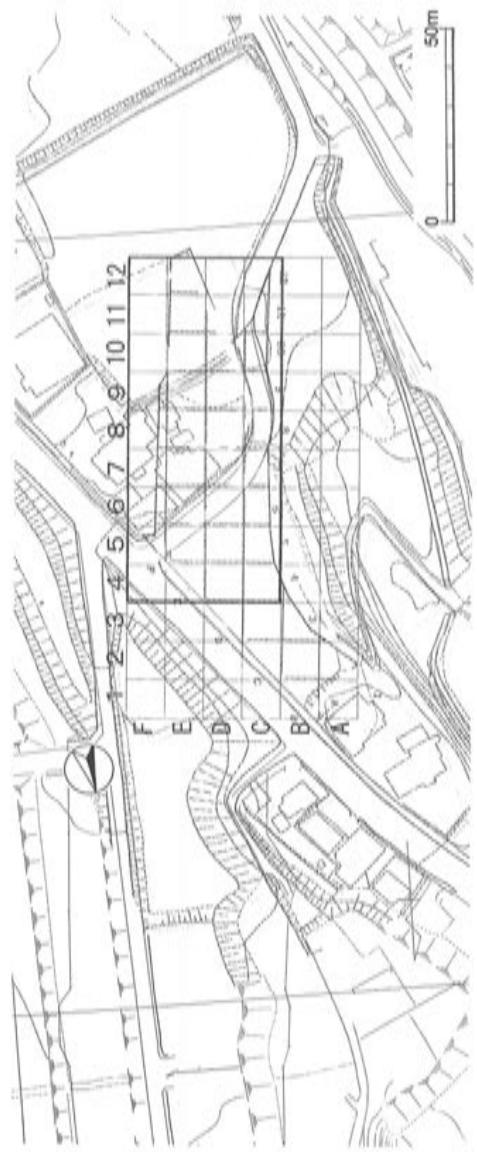
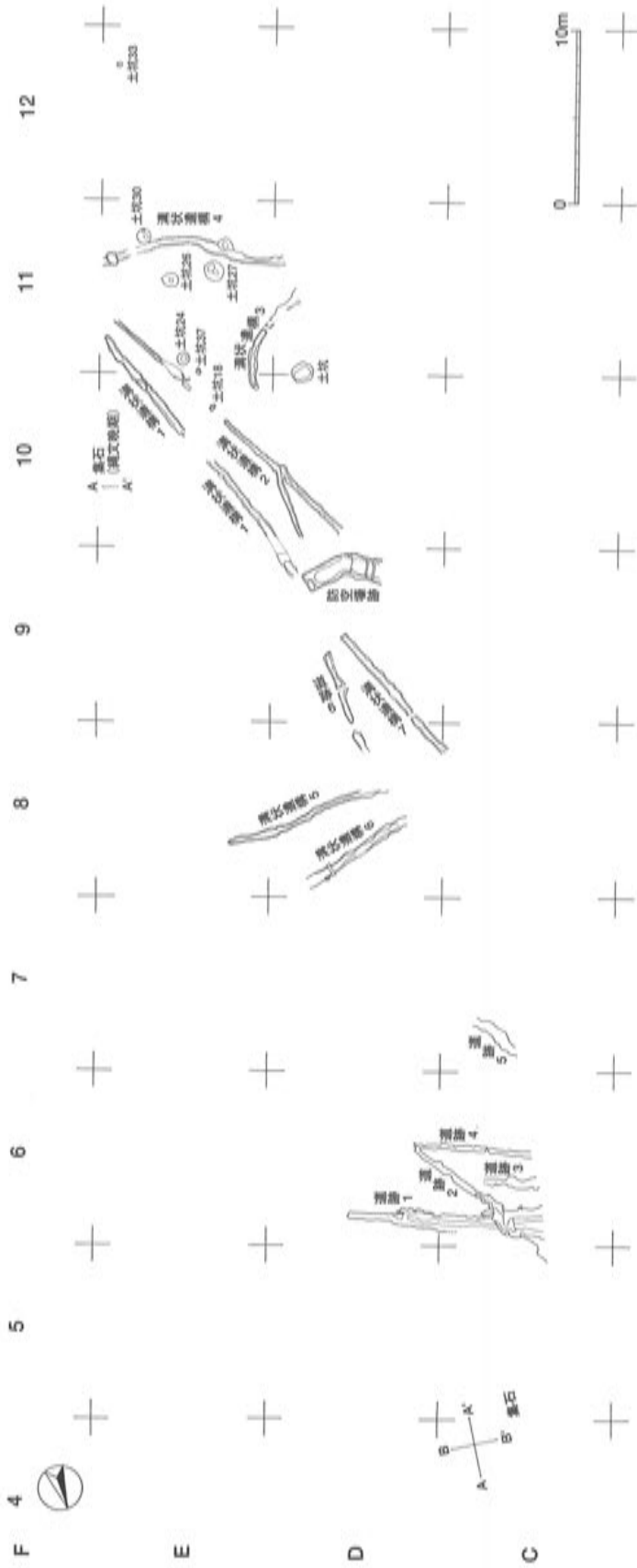
溝状遺構はD・E-8～11区で7条検出された。主軸方向は南北方向と東西方向，弯曲するものに分かれる。

#### 南北方向

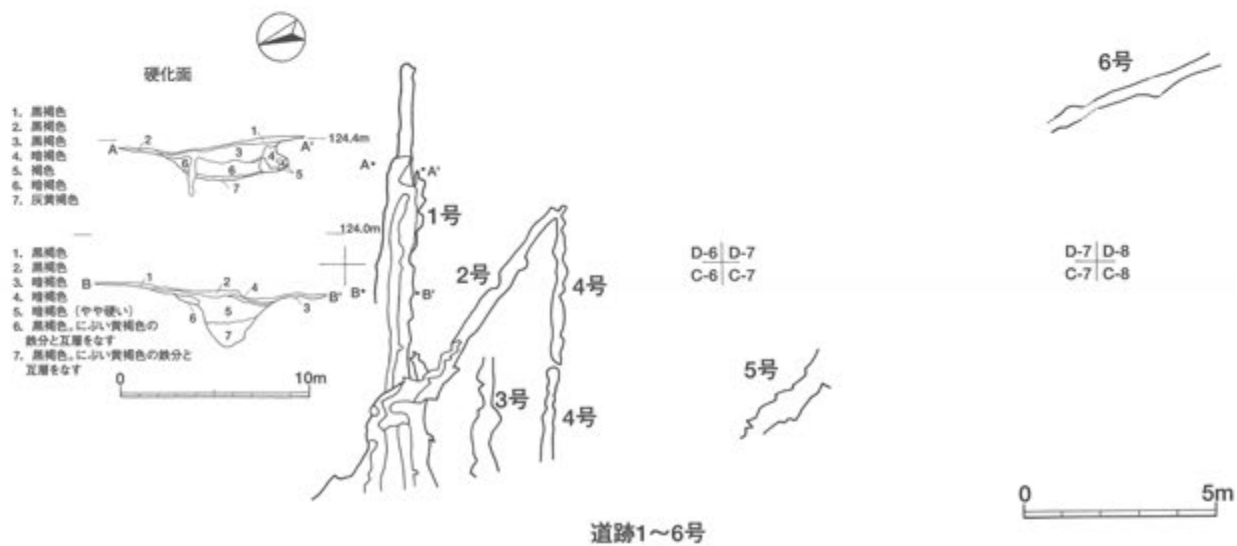
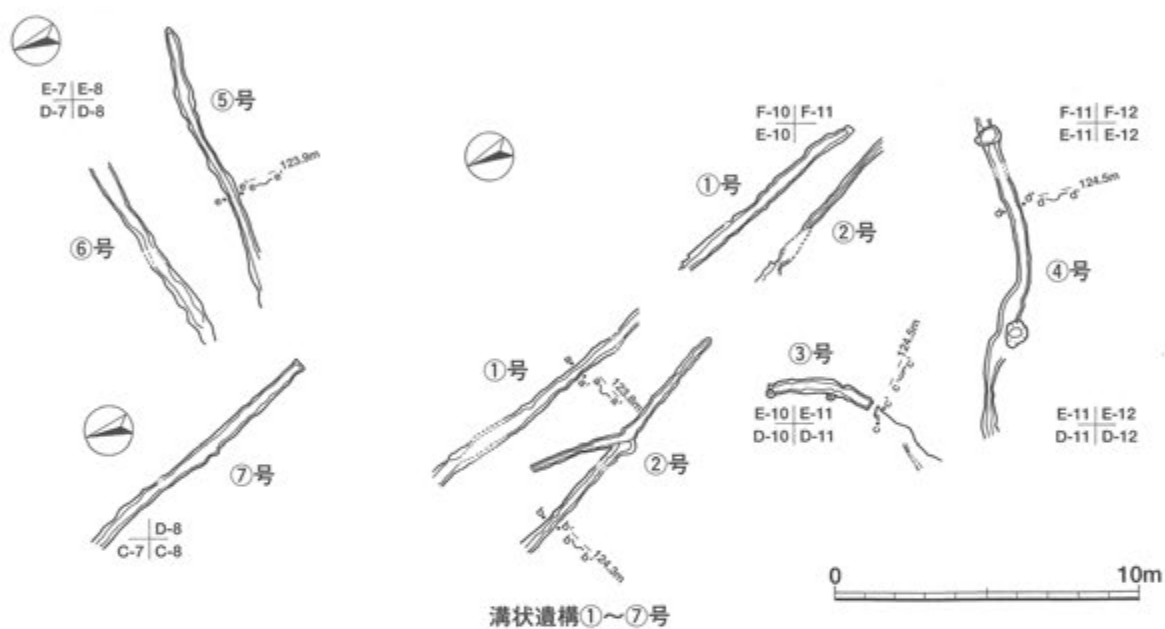
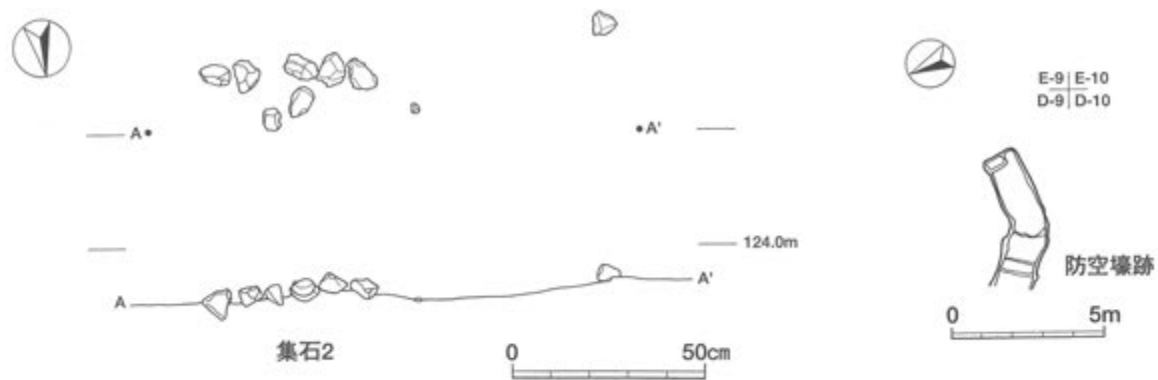
南北方向に走る溝状遺構は1・2・7の3条である。幅は0.5～0.7m，0.4～0.5m，0.5～0.7m，総延長は18m，17.5m，9mを測る。1・2はD・E-10・11区，7はD-7・8区で検出された。

#### 東西方向

東西方向に走る溝状遺構は4～6の3条である。幅は0.5～0.7m，0.4～0.5m，0.5～0.7m，総延長は11m，10m，6.8mを測る。4はE-11区，5・6はD・E-8区で検出された。



第165図 遺構配置図



第166図 集石(2)・防空壕跡・溝状遺構①~⑦号・道跡1~6号

#### 土坑 (167図)

土坑は遺跡内で37基検出されたが、特徴のある8基を図示した。

#### 土坑18

E-10区, II層上面で溝状遺構2を切るような状況で検出された。外径は40×28cm, 深さは56cmを測る楕円形を呈した土坑である。

#### 土坑24

E-11区, II層上面で検出された。外径は76×70cm, 深さ128cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土上部に礫や瓦が出土した。瓦から近世の遺構と考えられる。

#### 土坑26

E-11区, II層上面で検出された。外径は84×76cm, 深さ136cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土の状況から近世の土坑と考えられる。

#### 土坑27

E-11区, II層上面で検出された。外径は116×108cm, 深さ184cmを測るほぼ円形で深い土坑である。底部は二重になる。埋土中に遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

#### 土坑28

D-10・11区, II層上面で検出された。外径は128×104cm, 内径96×60cm, 深さ20cmを測る楕円形の浅い土坑である。

#### 土坑30

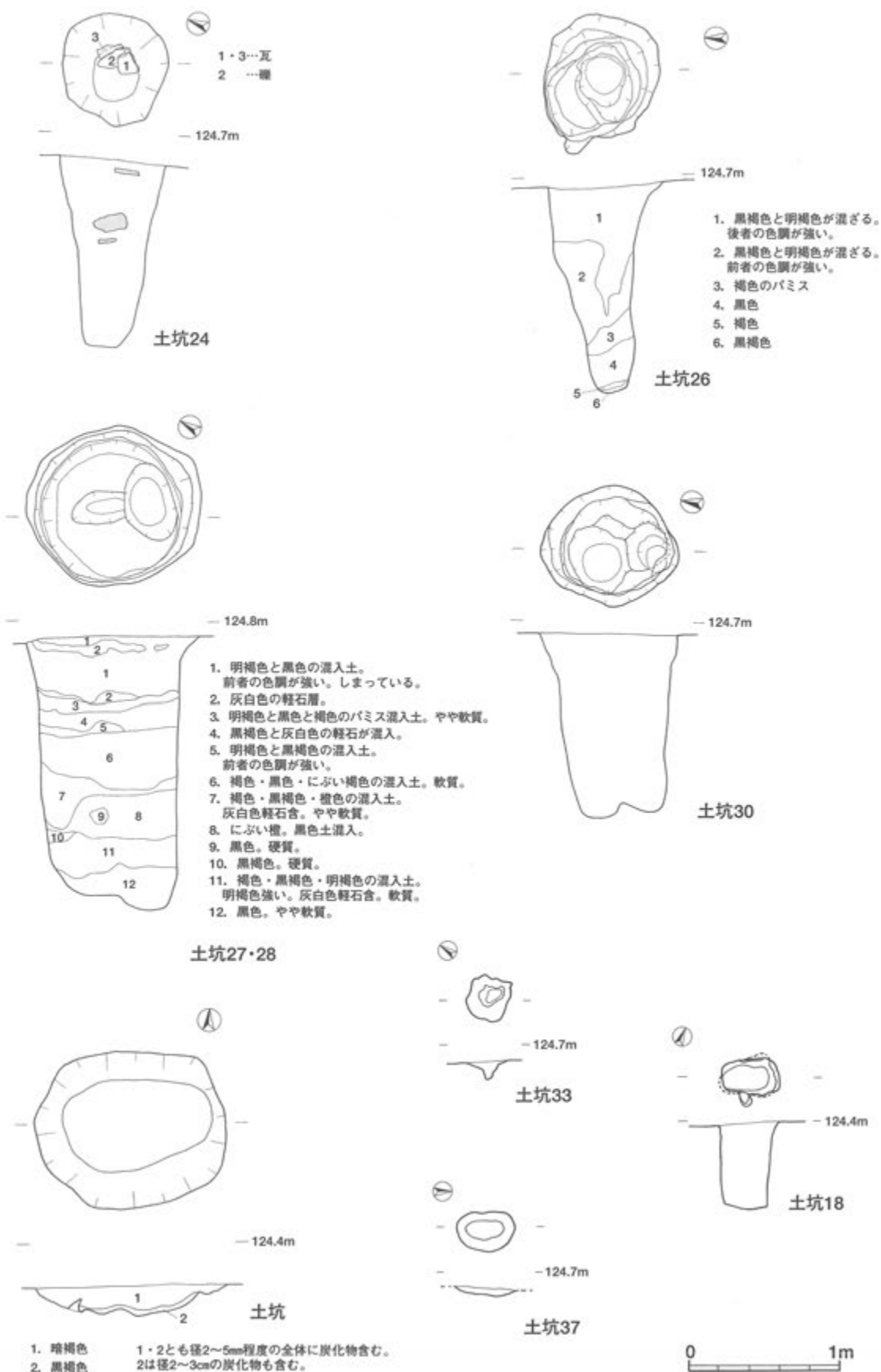
E-11区, II層上面で検出された。外径は92×80cm, 深さ124cmを測るほぼ円形の土坑である。底部は二重になる。埋土中に遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

#### 土坑33

E-11区, II層上面で検出された。外径は32×28cm, 深さ12cmを測るほぼ円形の浅い掘り込みをもつ土坑である。

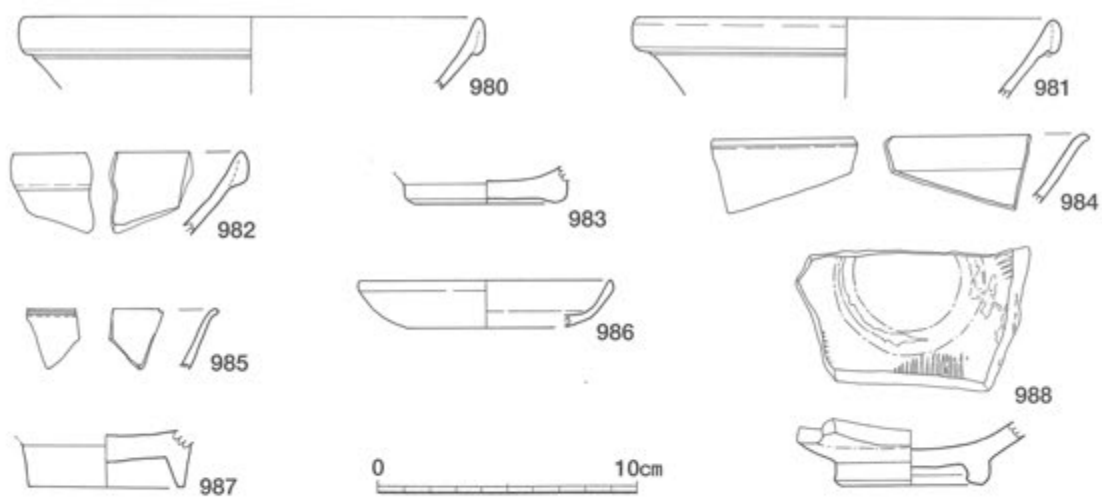
#### 土坑37

E-11区, II層上面で検出された。外径は40×26cm, 深さ4cmを測る楕円形の浅い掘り込みをもつ土坑である。



第167図 土坑





第168図 中世出土遺物

## 中世の出土遺物

中世の出土遺物としては白磁・青磁が出土しており、その出土量は少ない。時期的にはすべて11世紀後半～12世紀後半の範疇に相当するものと思われる。

980～986は白磁の碗である。980～982は玉縁口縁で、胎土は灰白色を呈する。釉は灰色味を帯びた白色である。983は980～982のような玉縁口縁を呈する碗の底部である。高台は幅広で、削り出しが浅いため底部は肉厚である。釉は外面腰部まで施釉されており、以下高台内面まで路胎する。984・985は口縁部を外側に外反させ、上端部を平坦気味につくるものである。胎土は茶色味を帯びた灰白色で釉は白色を呈する。987は口縁部が984・985のような形状を呈する碗の底部である。高台は細く高く直立する。胎土は灰白色で、釉の外面は体部と高台の境までかけられるもので、以下は高台内面まで路胎する。

986は白磁の皿である。口縁部は直口し、外面には明瞭な稜が入る。胎土は粗く、微細な白色粒子が混じる。

988は同安窯系青磁の碗である。口縁部は欠損しているがわずかに外反するものと思われる。胎の色調は部分的に異なり、灰色もしくは灰褐色を呈する。釉は外面腰部までかかり、以下は高台内面まで路胎する。内面には幅広で粗い縦の櫛目文を施す。見込みには重ね焼きの際の高台痕が残る。

第30表 中世出土遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	取上番号	出土区	層位 遺構	胎土	釉 (葉)	露胎	焼成	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
168	980	白磁 碗	1026	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	—	良	18.1	—	—	玉縁口縁
	981	白磁 碗	940	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	—	良	10.7	—	—	玉縁口縁
	982	白磁 碗	497	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	—	良	13.7	—	—	玉縁口縁
	983	白磁 碗	1606	E-11	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	—	良	16.6	—	—	
	984	白磁 碗	6284	E-12	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	腰部から 高台内面	良	—	6.2	—	柳文
	985	白磁 碗	859	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	—	良	—	—	—	鳥文
	986	白磁 皿	548	D-8	Ⅲ	灰白色	灰釉 白色	高台脇から 高台内面	良	—	6.0	—	
	987	白磁 皿	394	D-8	Ⅱ	灰白色	灰釉 白色	—	良	9.6	6.0	1.8	
	988	青磁 碗	999	D-8	Ⅲ	灰色 灰褐色	灰釉 緑褐色	腰部から 高台内面	良	—	5.8	—	同安窯系 内面に櫛目文 見込みに重ね焼きの高台痕あり

## 第Ⅶ章 発掘調査のまとめ

鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡では、旧石器時代から中世までの長い期間にわたる生活跡が検出され、それぞれの時期において重要であるが、鷺ヶ迫遺跡の縄文時代・古墳時代、北原中遺跡の縄文時代晩期・古墳時代、宇都上遺跡の縄文時代が主な生活跡であった。以下、遺跡ごとに時代を追って簡単にまとめてみたい。

### 鷺ヶ迫遺跡

#### 旧石器時代～縄文時代草創期

遺構は礫群・落とし穴が検出され、遺物はナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・スクレイパー・細石刃核・細石刃・楔形石器等が出土した。その他、植刃器が出土した。この植刃器は県内で初出土であり、特筆すべきものである。共伴遺物に細石刃や小型ナイフ形石器があるが、検討が必要である。Ⅶ層からは1点のみであるが、無文土器が出土した。

#### 縄文時代

縄文時代の遺構は落とし穴・集石が検出された。落とし穴は埋土内に遺物がみられなかったが、埋土より縄文時代早期該当の落とし穴と判断した。遺物も集中して出土したが、土器の主体は春日式土器であった。

石器は土器と同様の出土状況であった。石器は、石鏃・石槍・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・石核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・石皿・砥石・軽石製品などが出土している。この中で、特筆されるものに磨製石鏃がある。Ⅳ層の早期該当層から2点が出土した。現在、県内では37か所の遺跡が知られている。また、楔形石器・石錐も貴重なものである。

#### 古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はⅢ a 層で検出された。遺構はD-4・5区、C・D-27区、C-50・51区で竪穴住居跡が6軒検出される。その他、土坑14基、古道4条、溝状遺構15条が検出された。

遺物は成川式土器（甕形土器・壺形土器・高坏・埴形土器）、手捏土器と石器（凹石・敲石・磨石・石皿・台石・軽石製品）が出土した。

竪穴住居跡6軒検出され、住居の形態は方形プランを基本とし、花卉状住居跡も検出された。

### 北原中遺跡

#### 縄文時代

縄文時代の遺構は集石が5基検出され、落とし穴はⅢ a 層上面で検出されたもので、数10個の赤化した拳大の礫が散布した状態で検出されたもので掘り込み等はみられないものであった。周辺に縄文時代晩期の遺物が多く同時期の集石と判断した。遺物も土器・石器が集中して出土した。土器の主体は晩期の入佐式土器・黒川式土器・組織痕土器であった。

石器は土器と同様の出土状況であった。石器は、石鏃・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石などが出土している。この遺跡の特徴は、剥片石器が少なく礫石器が主体であったことである。石鏃は石材が豊富で県外の黒曜石等の使用もみられた。石斧の特徴は総数21点が出土

したが、磨製石斧は1点のみで、残りは全て打製石器であった。また、その大半が有肩石斧でありことである。土掘り具としての使用が考えられている有肩石斧が多かったこと、凹石・敲石・磨石が多く出土したことは、晩期の特徴を良く表していると考えられる。

#### 古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はⅢ a層で検出された。遺構はC・D-7区、C・D-20~23区で竪穴住居跡が8軒検出された。その他、土坑6基、焼土1か所、溝状遺構7条が検出された。竪穴住居跡は3m前後の方形プランを呈したもので、内部施設の判明したものはなかった。

#### 宇都上遺跡

縄文時代・古墳時代・古代～中世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構・遺物は、集石2基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏃・石斧・敲石等の石器が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し、古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され、また、第2次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

この遺跡で特筆するものに、滑石製品の石錘があげられる。石鍋の鏝の転用品で鯉節形の形態を呈し、側辺に溝を彫り込んだものである。石錐に分類したが使用が不明のものである。

第31表 縄文時代磨製石鏃一覽表

No.	遺跡名	所在地	数量	時代	標高	文献	備考
1	奥ノ仁田	西之表市安城	1	草創期	133m	2	粘板岩
2	鬼ヶ野	西之表市安城	5	草創期	74m	3	泥岩・2孔有 (1)
3	三角山 I	中種子町砂中	5	草創期	243m	34	ホルンフェルス, 頁岩
4	前原	鹿児島市松元町福山	9	早期	177m	4	頁岩
5	岩本	指宿市小牧	1	早期	48m	5	頁岩
6	小牧 3 A	指宿市小牧	3	早期	110m	35	粘板岩
7	戸原西	枕崎市木原	1	早期	60~70m	6	粘板岩
8	志風頭	南さつま市加世田内山田	34	早期	61m	1	頁岩
9	ヘゴノ原	南さつま市加世田武田	1	早期	55m	7	頁岩
10	祝原	南さつま市加世田川畑	1	早期	64m	36	頁岩 (赤色)
11	宇治野原	南さつま市金峰町白川	1	早期	90m	10	頁岩
12	木落	南さつま市金峰町白川	1	早期	54~62m	11	頁岩
13	南一ノ谷	知覧町東別府	3	早期	160~170m	8	粘板岩・頁岩
14	鷹爪野	川辺町上山田	29	早期	130m	9	頁岩
15	瀬戸頭A	日置市伊集院町竹之山	1	早期	188m	12	頁岩
16	塚ノ越	日置市吹上町	1	早期	19m	37	粘板岩
17	建昌城跡	始良町西餅田	1	早期	107m	13	ハリ質安山岩
18	倉園B	志布志市志布志町内ノ倉	1	早期	119m	14	頁岩, 局部磨製石鏃
19	中ノ丸	鹿屋市大浦町	1	早期	70m	15	頁岩
20	打馬平原	鹿屋市打馬平原	1	早期	65m	16	鉄石英, 局部磨製石鏃
21	榎崎B	鹿屋市白水	2	早期	108m	17	頁岩
22	西丸尾	鹿屋市白水	1	早期	65m	38	粘板岩
23	原口岡	鹿屋市吾平町下名東	5	早期	30m	18	頁岩
24	益畑	鹿屋市串良町	1	早期	46m	19	頁岩・住居内
	鷲ヶ迫	鹿屋市花岡町	2	早期	130m	本文	頁岩
25	横高尾	錦江町大根占神川	1	早期	198m	20	粘板岩
26	大中原	錦江町大根占	2	早期	232m	21	頁岩
27	荒田原	錦江町田代麓	4	早期	293m	22	頁岩
28	ホケノ頭	錦江町田代郷ノ原	7	早期	217m	23	粘板岩
29	日守	西之表市安城	1	早期	75m	24	粘板岩・表採
30	牛ノ原	中種子町増田	1	早期	98m	25	頁岩
31	三角山 I	中種子町砂中	7	早期	243m	34	頁岩, 砂岩
32	三角山 II	中種子町砂中	3	早期	255m	26	頁岩・2孔有 (1)
33	三角山 IV	中種子町砂中	2	早期	253m	26	頁岩
34	石ノ峯	南種子町中之上	3	早期	160m	27	頁岩
35	横峯C	南種子町島間	1	早期	120m	28	頁岩・表採
36	龍庵坂	南種子町西之	1	早期	102m	29	頁岩・2孔有
37	銭亀	南種子町	3	早期	82m	30	頁岩
38	上中段	曾於市末吉町深川	1	後期?	247m	31	頁岩
39	十文字	志布志市志布志町内ノ倉	1	後期	86m	14	粘板岩, 局部磨製石鏃
40	籾平小田	南種子町島間	17	後期	50m	32	粘板岩
41	住吉貝塚	知名町住吉	1	晩期?	13m	33	砂岩・粘板岩1孔有 (1)

文献

- 1 加世田市教育委員会 1999 「志風頭遺跡・奥名野遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
- 2 西之表市教育委員会 1995 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
- 3 西之表市教育委員会 2004 「鬼ヶ野遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 4 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007 「前原遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(118)
- 5 指宿市教育委員会 1978 「岩本遺跡」 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 6 加世田市教育委員会 1997 「ヘゴノ原遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
- 7 枕崎市教育委員会 1993 「滝ノ下遺跡・栢原西遺跡」 枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 8 知覧町教育委員会 2003 「前原遺跡群」 知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 9 川辺町教育委員会 1998 「鷹爪野遺跡」 川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 10 金峰町教育委員会 1992 「宇治野原遺跡」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 11 金峰町教育委員会 1991 「木落遺跡・高源寺遺跡」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- 12 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005 「瀬戸頭A遺跡ほか」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(85)
- 13 始良町教育委員会 2002 「建昌城跡」 始良町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 14 志布志町教育委員会 1983 「倉園B遺跡・十文字遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- 15 鹿児島県教育委員会 1989 「中ノ丸遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)
- 16 鹿屋市教育委員会 1988 「打馬平原遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 17 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 「榎崎B遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 18 吾平町教育委員会 1995 「原口岡遺跡」 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 19 串良町教育委員会 2005 「益畑遺跡」 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
- 20 大根占町教育委員会 1999 「横高尾遺跡」 大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- 21 根占町教育委員会 2000 「大中原遺跡」 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 22 田代町教育委員会 1995 「荒田原遺跡」 田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 23 田代町教育委員会 2001 「ホケノ頭遺跡」 田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 24 西之表市教育委員会 1999 「日守遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 25 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996 「牛ノ原遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
- 26 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004 「三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(63)
- 27 南種子町教育委員会 1996 「石ノ峯遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 28 南種子町教育委員会 2000 「横峯C遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
- 29 南種子町教育委員会 2004 「龍庵坂遺跡・今平遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 30 南種子町教育委員会 2006 「銭亀遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 31 末吉町教育委員会 1986 「上中段遺跡ほか」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 32 南種子町教育委員会 2002 「籐平小田遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 33 知名町教育委員会 2006 「住吉貝塚」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
- 34 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006.1「三角山遺跡群(3)」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(96)
- 35 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996「小牧3A遺跡・岩本遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 36 加世田市教育委員会 2003 「祝原遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
- 37 吹上町教育委員会 1990 「塚ノ越遺跡, 鳥越遺跡, 内門堀遺跡」 吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 38 鹿児島県教育委員会 1992 「西丸尾遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)



# 科学分析



# 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定) 鷺ヶ迫遺跡

(株)加速器分析研究所

## (1) 遺跡の位置

鷺ヶ迫遺跡は、鹿児島県鹿屋市花岡町鷺ヶ迫に所在する。

## (2) 測定の意義

遺構の年代と遺構間の前後関係、出土試料の年代を明らかにする。

## (3) 測定対象試料

測定対象は、XⅡ層出土の炭化物（1：IAAA-70456）、D-5区の住居3号から出土した木炭（2：IAAA-70457）、D-27区の住居1号から出土した木炭2点（3・4：IAAA-70458・70459）、D-14区の土坑から出土した炭化物（5：IAAA-70460）、合計5点である。試料は採取後、乾燥させ、アルミホイルに包み、さらにビニール袋に入れて保管された。

## (4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

## (5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ

酸 (HO<sub>x</sub> II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時に行う。

#### (6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る<sup>14</sup>C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、<sup>14</sup>A<sub>S</sub>: 試料炭素の<sup>14</sup>C濃度: (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>S</sub> または (<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C)<sub>S</sub>

<sup>14</sup>A<sub>R</sub>: 標準現代炭素の<sup>14</sup>C濃度: (<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)<sub>R</sub> または (<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C)<sub>R</sub>

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 (<sup>13</sup>A<sub>S</sub>=<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$  (‰) であるとしたときの<sup>14</sup>C濃度 (<sup>14</sup>A<sub>N</sub>) に換算した上で計算した値である。(1) 式の<sup>14</sup>C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

$^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

#### (7) 測定結果

X II層出土の炭化物 (1 : IAAA-70456) の $^{14}\text{C}$ 年代が $4420 \pm 40\text{yrBP}$ , D-5区の住居3号から出土した木炭 (2 : IAAA-70457) の $^{14}\text{C}$ 年代が $1730 \pm 30\text{yrBP}$ , D-27区の住居1号から出土した木炭2点 (3・4 : IAAA-70458・70459) の $^{14}\text{C}$ 年代が $1590 \pm 30\text{yrBP}$ ,  $1550 \pm 30\text{yrBP}$ , D-14区の土坑から出土した炭化物 (5 : IAAA-70460) の $^{14}\text{C}$ 年代が $2920 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) は、1が3270~2930BCに含まれる年代であり縄文時代中期前葉から中葉, 2が250~345ADであり古墳時代前期後半から中期前半, 3と4が420~550ADに含まれる年代であり古墳時代後期, 5が1200~1050BCであり縄文時代晩期前葉に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

#### 参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70456 #1784-1代替	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：1	Libby Age (yrBP) : 4,420 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -21.46 ± 0.48 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -423.2 ± 2.6 pMC (%) = 57.68 ± 0.26
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -419.0 ± 2.5 pMC (%) = 58.10 ± 0.25 Age (yrBP) : 4,360 ± 40
IAAA-70457 #1784-2	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：2	Libby Age (yrBP) : 1,730 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -23.58 ± 0.61 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -193.9 ± 3.0 pMC (%) = 80.61 ± 0.30
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -191.5 ± 2.9 pMC (%) = 80.85 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,710 ± 30
IAAA-70458 #1784-3	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：3	Libby Age (yrBP) : 1,590 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.38 ± 0.53 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -180.1 ± 3.1 pMC (%) = 81.99 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -185.8 ± 3.0 pMC (%) = 81.42 ± 0.30 Age (yrBP) : 1,650 ± 30
IAAA-70459 #1784-4	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：4	Libby Age (yrBP) : 1,550 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -24.59 ± 0.44 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -175.7 ± 3.0 pMC (%) = 82.43 ± 0.30
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -175.0 ± 2.9 pMC (%) = 82.50 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,540 ± 30
IAAA-70460 #1784-5	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷺ヶ迫 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：5	Libby Age (yrBP) : 2,920 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -22.39 ± 0.47 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -305.2 ± 2.7 pMC (%) = 69.48 ± 0.27
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -301.4 ± 2.6 pMC (%) = 69.86 ± 0.26 Age (yrBP) : 2,880 ± 30

参考

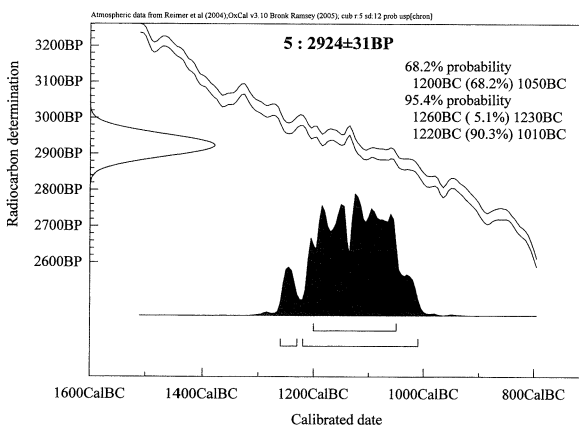
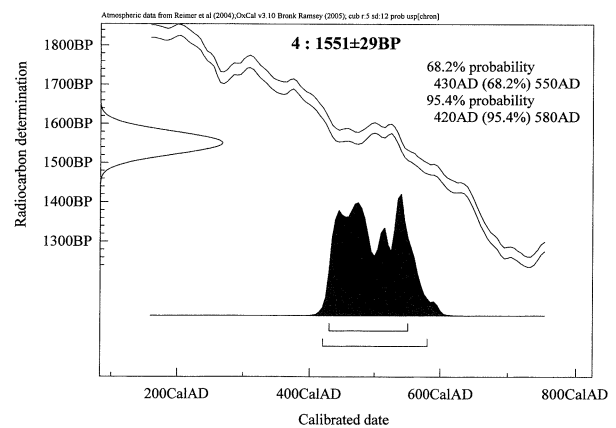
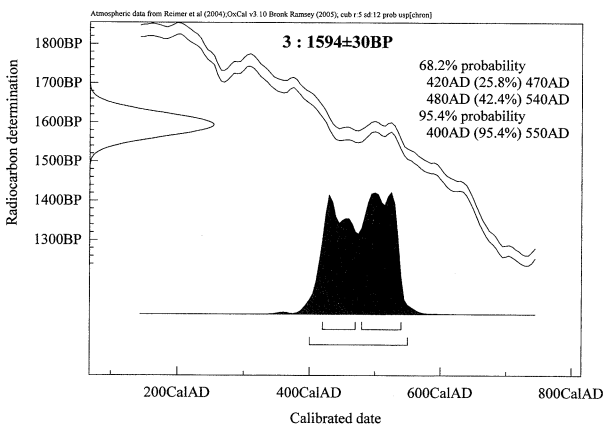
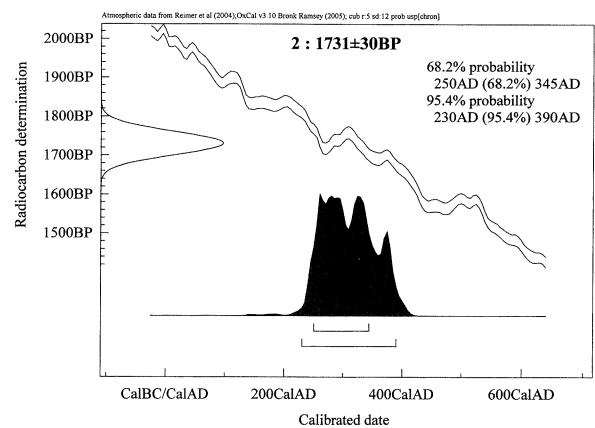
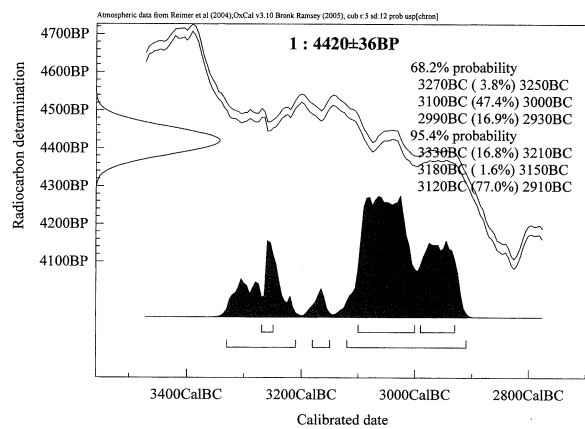
IAAA-70456に関しましては、代替試料を処理し測定した結果になります。

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA - 70456	1	4420 ± 36
IAAA - 70457	2	1731 ± 30
IAAA - 70458	3	1594 ± 30
IAAA - 70459	4	1551 ± 29
IAAA - 70460	5	2924 ± 31

ここに記載するLibby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

# 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)

## 鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡

(株)加速器分析研究所

### (1) 測定目的

遺跡内の住居跡や遺構の年代とその前後関係、集落の継続期間、遺物の年代を明らかにする。

### (2) 測定対象試料

鷲ヶ迫遺跡のD-5区の住居3号内から出土した木炭(1:IAAA-70879)、C・D-27区のⅢb層から出土した木炭(2:IAAA-70880)、北原中遺跡のD-14区の土坑内から出土した炭化物(3:IAAA-70881)、C-15区のⅣa層から出土した炭化物(4:IAAA-70882)、合計4点である。

### (3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを精製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

### (4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る<sup>14</sup>C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{S} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_\text{S} - {}^{13}\text{A}_\text{PDB}) / {}^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_\text{S}$ ：試料炭素の<sup>14</sup>C濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_\text{S}$  または  $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_\text{S}$

${}^{14}\text{A}_\text{R}$ ：標準現代炭素の<sup>14</sup>C濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_\text{R}$  または  $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_\text{R}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の<sup>13</sup>C濃度 ( ${}^{13}\text{A}_\text{S} = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ) を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの<sup>14</sup>C濃度 ( ${}^{14}\text{A}_\text{N}$ ) に換算した上で計算した値である。(1) 式の<sup>14</sup>C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_\text{N} = {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_\text{S} \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_\text{N} - {}^{14}\text{A}_\text{R}) / {}^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

<sup>14</sup>C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C}=(\text{pMC}/100-1)\times 1000\text{ (\%)}$$

$$\text{pMC}=\Delta^{14}\text{C}/10+100\text{ (\%)}$$

国際的な取り決めにより，この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000)+1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

#### (6) 測定結果

鷲ヶ迫遺跡のD-5区の住居3号内から出土した木炭（1：IAAA-70879）の $^{14}\text{C}$ 年代が $1680 \pm 30\text{yrBP}$ ，C・D-27区のⅢb層から出土した木炭（2：IAAA-70880）の $^{14}\text{C}$ 年代が $1550 \pm 30\text{yrBP}$ ，北原中遺跡のD-14区の土坑内から出土した炭化物（3：IAAA-70881）の $^{14}\text{C}$ 年代が $1580 \pm 40\text{yrBP}$ ，C-15区のⅣa層から出土した炭化物（4：IAAA-70882）の $^{14}\text{C}$ 年代が $2050 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代（ $1\sigma = 68.2\%$ ）は，1が330～420AD，2が430～560AD，3が430～540AD，4が110BC～0BC/ADである。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

#### 参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



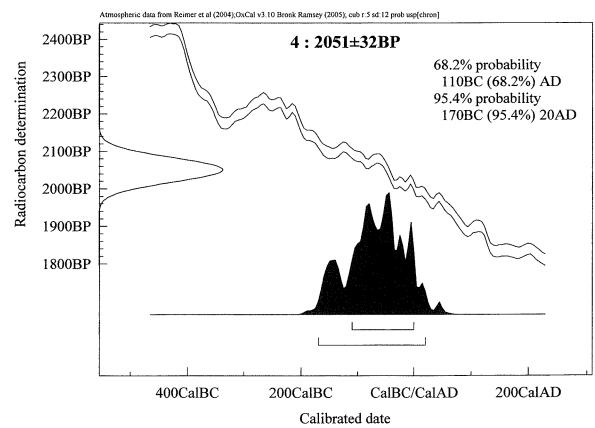
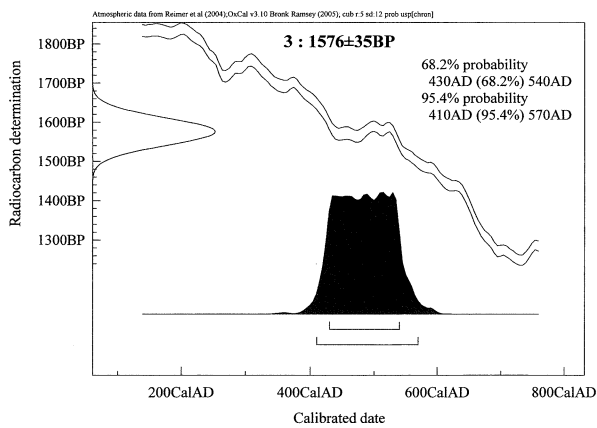
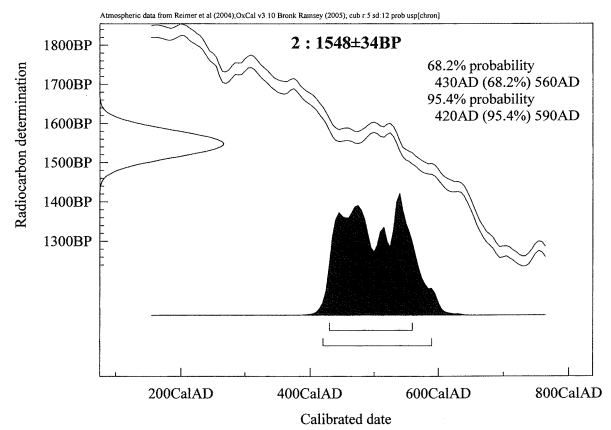
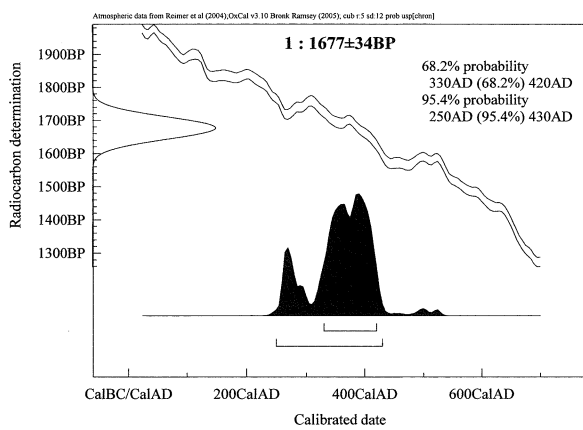
IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70879  #1851-1	試料採取場所：鷺ヶ迫遺跡  試料形態：木炭 試料名(番号)：1	Libby Age (yrBP) : 1,680 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -25.25 ± 0.72 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -188.4 ± 3.4 pMC (%) = 81.16 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -188.8 ± 3.2 pMC (%) = 81.12 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,680 ± 30
IAAA-70880  #1851-2	試料採取場所：鷺ヶ迫遺跡  試料形態：木炭 試料名(番号)：2	Libby Age (yrBP) : 1,550 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -24.32 ± 0.92 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -175.3 ± 3.5 pMC (%) = 82.47 ± 0.35
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -174.2 ± 3.1 pMC (%) = 82.58 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,540 ± 30
IAAA-70881  #1852-1	試料採取場所：北原中遺跡  試料形態： 試料名(番号)：3	Libby Age (yrBP) : 1,580 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -32.71 ± 0.90 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -178.2 ± 3.6 pMC (%) = 82.18 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -191.1 ± 3.2 pMC (%) = 80.89 ± 0.32 Age (yrBP) : 1,700 ± 30
IAAA-70882  #1852-2	試料採取場所：北原中遺跡  試料形態： 試料名(番号)：4	Libby Age (yrBP) : 2,050 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.74 ± 0.73 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -225.3 ± 3.2 pMC (%) = 77.47 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -231.3 ± 2.9 pMC (%) = 76.87 ± 0.29 Age (yrBP) : 2,110 ± 30

参考資料：暦年較正用年代

<i>I</i> AAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA - 70879	1	1677 ± 34
IAAA - 70880	2	1548 ± 34
IAAA - 70881	3	1576 ± 35
IAAA - 70882	4	2051 ± 32

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

# 放射性炭素年代測定結果報告書

## (AMS測定)

### 鷲ヶ迫遺跡

(株)加速器分析研究所

#### (1) 遺跡の位置と立地

鷲ヶ迫遺跡は、鹿児島県鹿屋市花岡町に位置する。標高約1000m級の山地から西に延びる標高約120～130mの台地上に立地する。

#### (2) 測定対象試料

測定対象試料は、鷲ヶ迫遺跡の竪穴住居跡1号から出土した炭化物 (No.1 : IAAA-62496), B-3区土坑埋土から出土した炭化物 (No.3 : IAAA-62497), D-5区円形土坑埋土から出土した炭化物 (No.5 : IAAA-62498), C～D-27区竪穴住居跡1号埋土から出土した木炭 (No.7 : IAAA-62499), D-5区竪穴住居跡3号から出土した木炭4点 (No.9 : IAAA-62500, No.11 : IAAA-62501, No.13 : IAAA-62502, No.15 : IAAA-62503), 合計8点である。

#### (3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理, アルカリ処理, 酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後, 超純水で中性になるまで希釈し, 90℃で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅 1 g と共に石英管に詰め, 真空下で封じ切り, 500℃で30分, 850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し, 真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し, グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め, それをホイールにはめ込み, 加速器に装着し測定する。

#### (4) 測定方法

測定機器は, 3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では, 米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HO<sub>x</sub> II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また, 加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時に行う。

## (5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S$  または  $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_S$

${}^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_R$  または  $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 ( ${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ ) を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 ( ${}^{14}\text{A}_N$ ) に換算した上で計算した値である。(1) 式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好とその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C}=(\text{pMC}/100-1)\times 1000\text{ (\%)}$$

$$\text{pMC}=\Delta^{14}\text{C}/10+100\text{ (\%)}$$

国際的な取り決めにより，この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}\text{C}/1000)+1]$$

$$=-8033\times\ln(\text{pMC}/100)$$

5)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

#### (6) 測定結果

鷲ヶ迫遺跡のC～D-27区竪穴住居跡1号から出土した炭化物（No.1：IAAA-62496）と木炭（No.7：IAAA-62499）の $^{14}\text{C}$ 年代はともに $1530\pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代（ $1\sigma=68.2\%$ ）は440AD～600ADに含まれ，古墳時代後期から飛鳥時代前半に相当する。B-3区土坑埋土から出土した炭化物（No.3：IAAA-62497）の $^{14}\text{C}$ 年代は， $1910\pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代は60AD～130AD（68.2%）であり，弥生時代後期に相当する。D-5区円形土坑埋土から出土した炭化物（No.5：IAAA-62498）の $^{14}\text{C}$ 年代は $1240\pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代は690AD～750AD（33.0%）・760AD～820AD（27.5%）・840AD～860AD（7.6%）であり，飛鳥時代末から平安時代前期前半に相当する。D-5区竪穴住居跡3号から出土した木炭4点（No.9：IAAA-62500，No.11：IAAA-62501，No.13：IAAA-62502，No.15：IAAA-62503）の $^{14}\text{C}$ 年代は，それぞれ $1740\pm 50\text{yrBP}$ ， $1720\pm 30\text{yrBP}$ ， $1690\pm 30\text{yrBP}$ ， $1660\pm 30\text{yrBP}$ である。4点の暦年較正年代は230AD～425ADに含まれ，340AD～380ADが共通する年代であり，古墳時代中期に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，同一遺構から出土した $^{14}\text{C}$ 年代も近似することから妥当な年代と考えられる。

#### 参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389

Reimer, P.J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA - 62496 #1609 - 1代替2	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：1	Libby Age (yrBP) : 1,530 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -27.11 ± 0.59 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -173.1 ± 3.2 pMC (%) = 82.69 ± 0.32
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -176.7 ± 3.0 pMC (%) = 82.33 ± 0.30 Age (yrBP) : 1,560 ± 30
IAAA - 62497 #1609 - 2	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：3	Libby Age (yrBP) : 1,910 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.65 ± 0.86 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -211.1 ± 3.3 pMC (%) = 78.89 ± 0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -217.0 ± 3.0 pMC (%) = 78.30 ± 0.30 Age (yrBP) : 1,970 ± 30
IAAA - 62498 #1609 - 3	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：5	Libby Age (yrBP) : 1,240 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -29.89 ± 0.87 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -142.7 ± 3.4 pMC (%) = 85.73 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -151.3 ± 3.1 pMC (%) = 84.87 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,320 ± 30
IAAA - 62499 #1609 - 4	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：7	Libby Age (yrBP) : 1,530 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -29.26 ± 0.92 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -173.0 ± 3.5 pMC (%) = 82.70 ± 0.35
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -180.2 ± 3.1 pMC (%) = 81.98 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,600 ± 30
IAAA - 62500 #1609 - 5	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：9	Libby Age (yrBP) : 1,740 ± 50 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -33.21 ± 0.87 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -195.0 ± 4.8 pMC (%) = 80.50 ± 0.48
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -208.5 ± 4.5 pMC (%) = 79.15 ± 0.45 Age (yrBP) : 1,880 ± 50

IAAA - 62501 #1609-6	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：11	Libby Age (yrBP) : 1,720 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -28.51 ± 0.83 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -192.8 ± 3.4 pMC (%) = 80.72 ± 0.34
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -198.6 ± 3.1 pMC (%) = 80.14 ± 0.31 Age (yrBP) : 1,780 ± 30
IAAA - 62502 #1609-7	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：13	Libby Age (yrBP) : 1,690 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -31.93 ± 0.80 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -189.8 ± 3.1 pMC (%) = 81.02 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -201.3 ± 2.8 pMC (%) = 79.87 ± 0.28 Age (yrBP) : 1,810 ± 30
IAAA - 62503 #1609-8	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷺ヶ迫遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：15	Libby Age (yrBP) : 1,660 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -33.15 ± 0.86 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -187.1 ± 3.3 pMC (%) = 81.29 ± 0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -200.6 ± 2.9 pMC (%) = 79.94 ± 0.29 Age (yrBP) : 1,800 ± 30

#### 参考

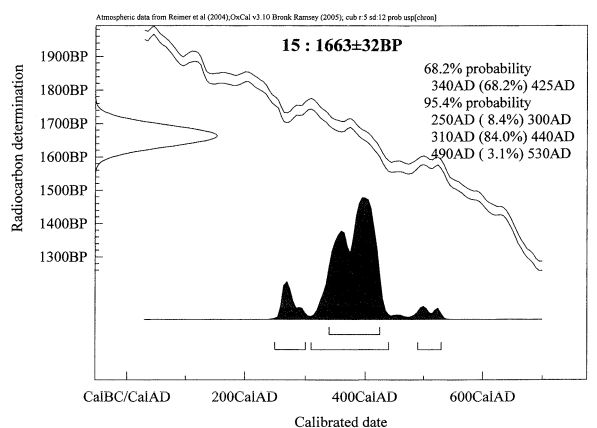
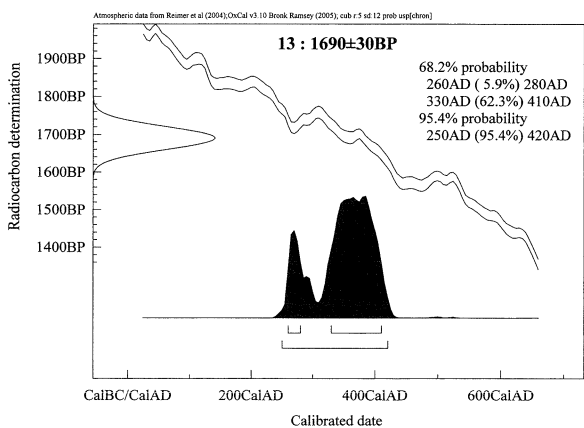
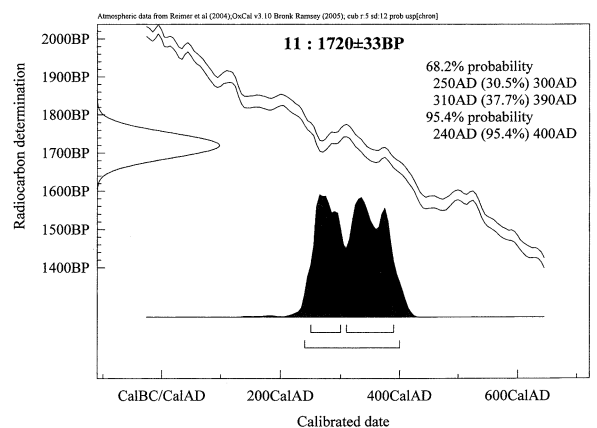
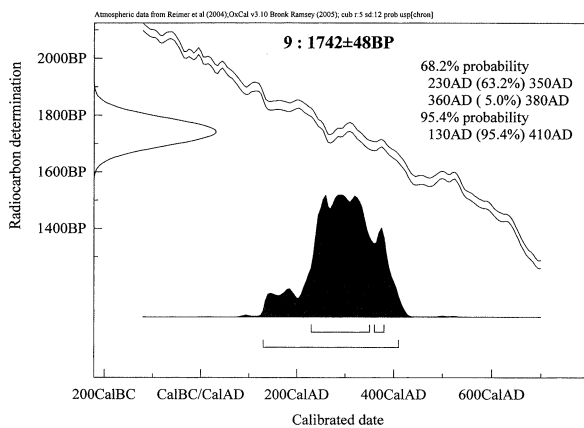
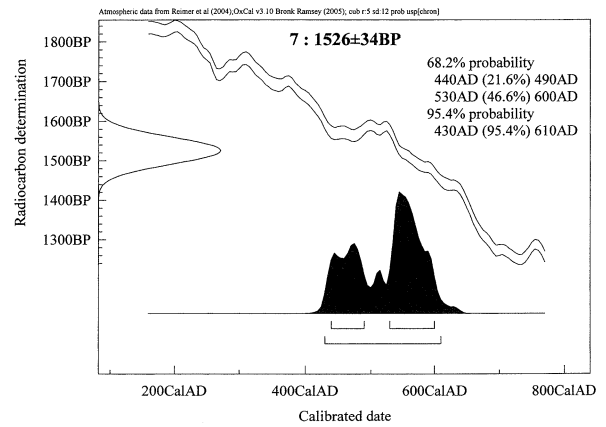
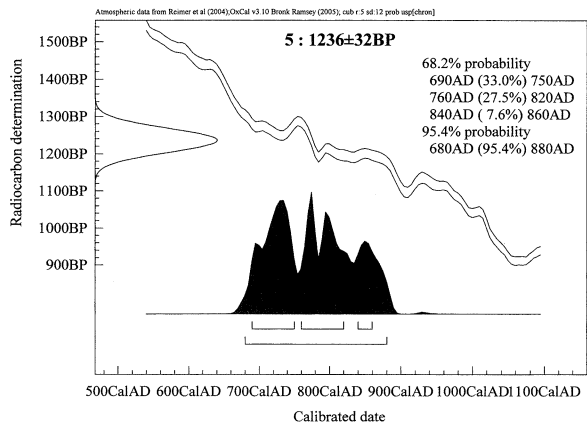
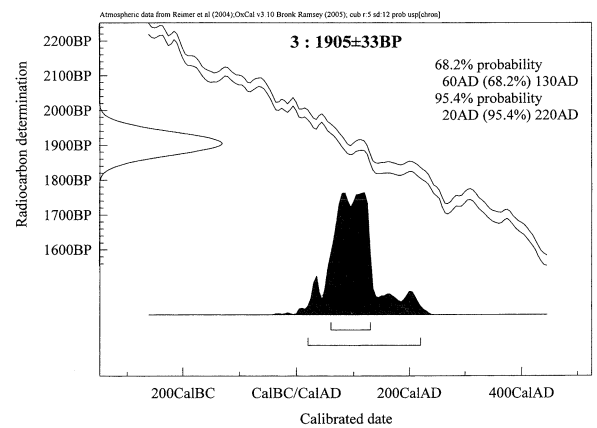
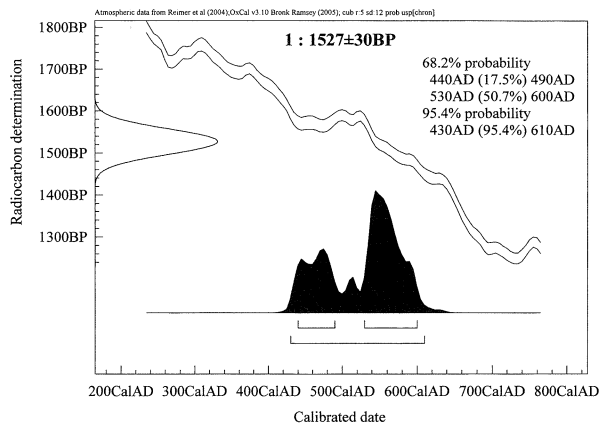
IAAA - 62496に關しましては、代替2の試料のみを処理し測定した結果になります。

#### 参考資料：暦年較正用年代

<del>IAA</del> Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA - 62496	1	1527 ± 30
IAAA - 62497	3	1905 ± 33
IAAA - 62498	5	1236 ± 32
IAAA - 62499	7	1526 ± 34
IAAA - 62500	9	1742 ± 48
IAAA - 62501	11	1720 ± 33
IAAA - 62502	13	1690 ± 30
IAAA - 62503	15	1663 ± 32

ここに記載するLibby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】





# 写真図版



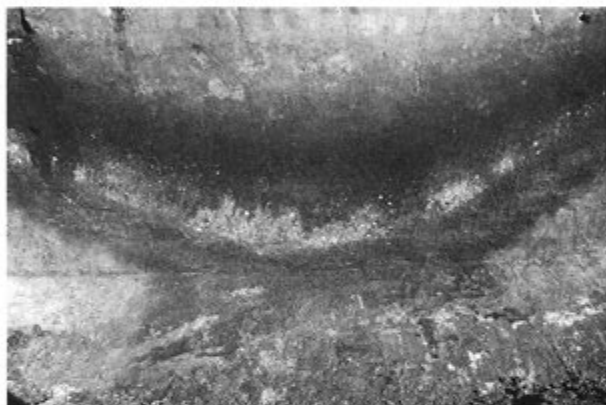
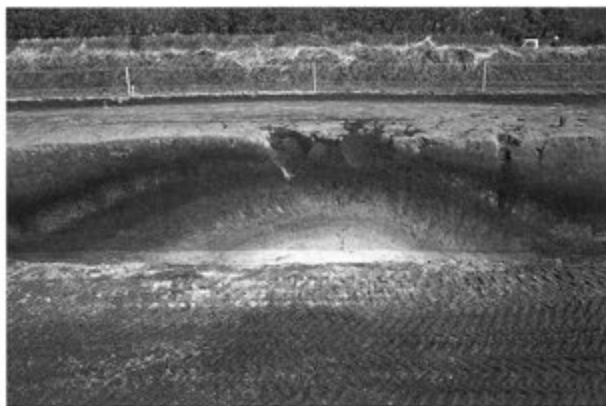
遺跡遠景（北から）平成16年



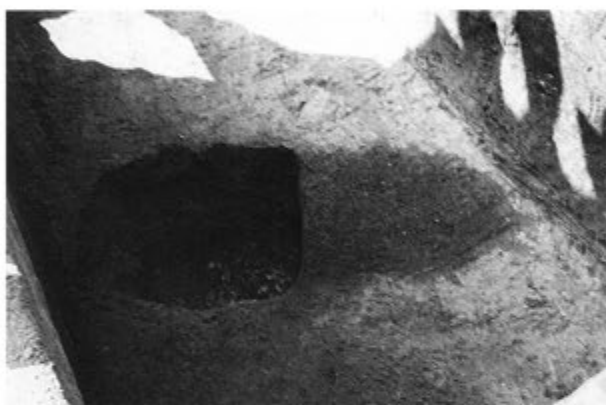
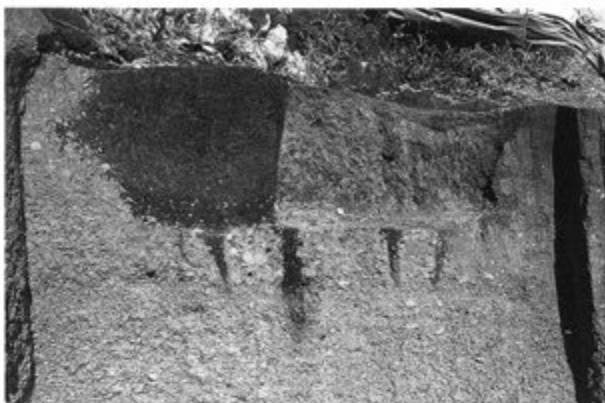
遺跡遠景（北から）平成18年



遺跡全景

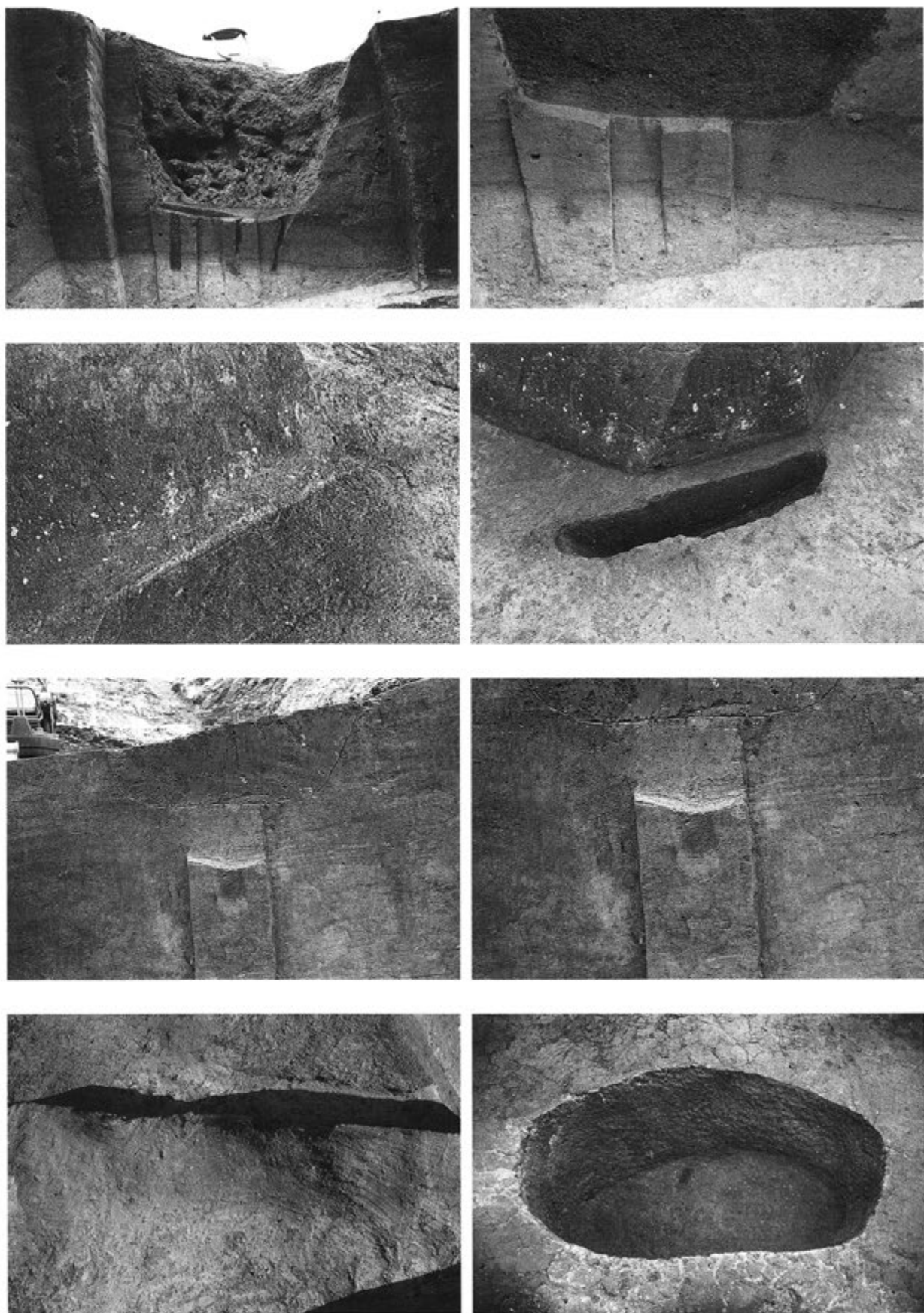


土層



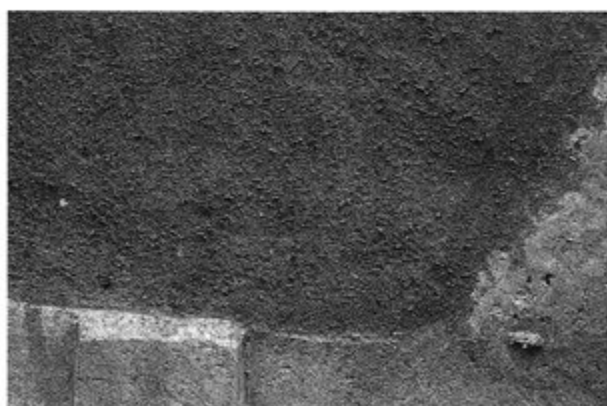
落とし穴 1~4号



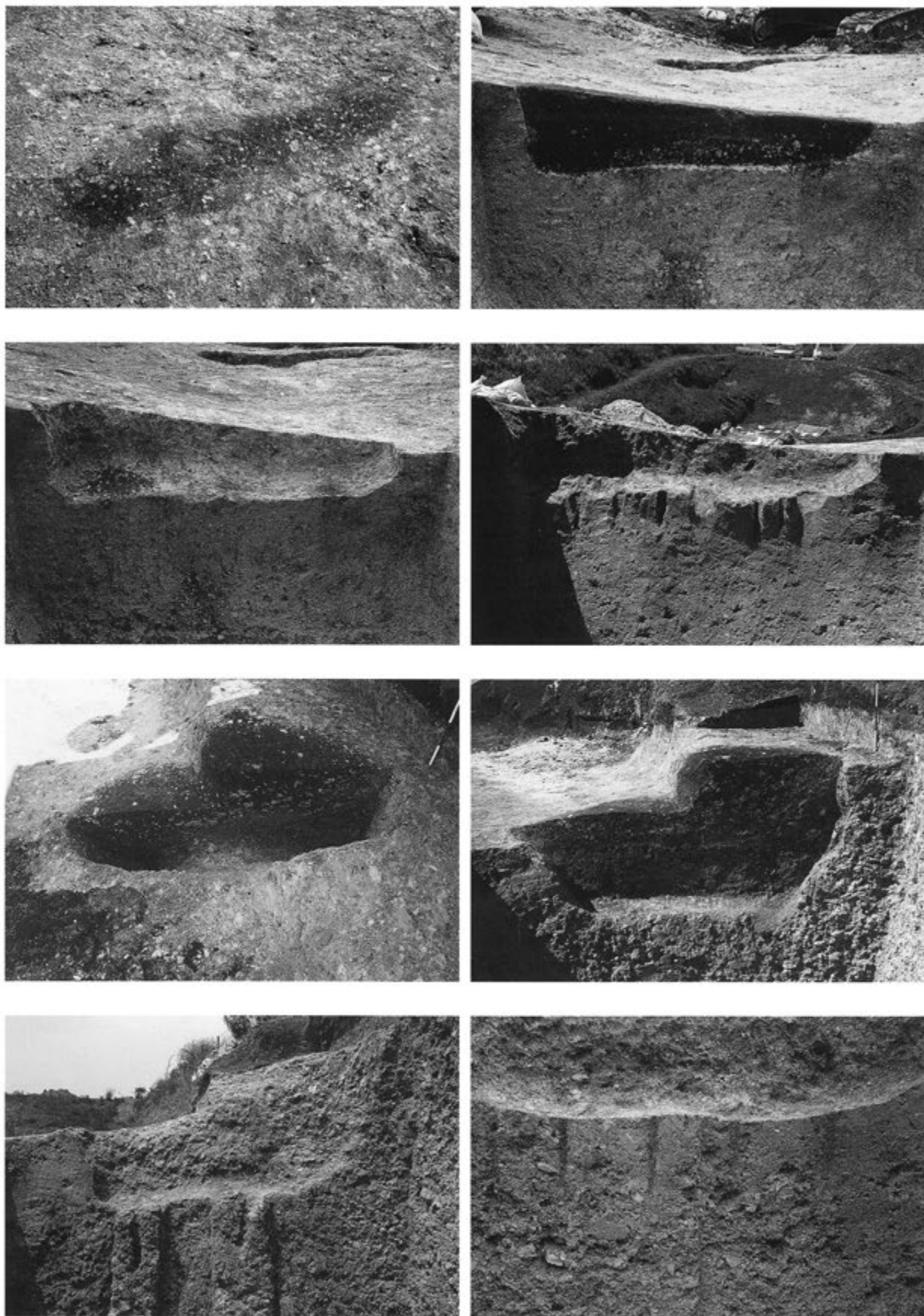


落とし穴 4～9号

図版  
6

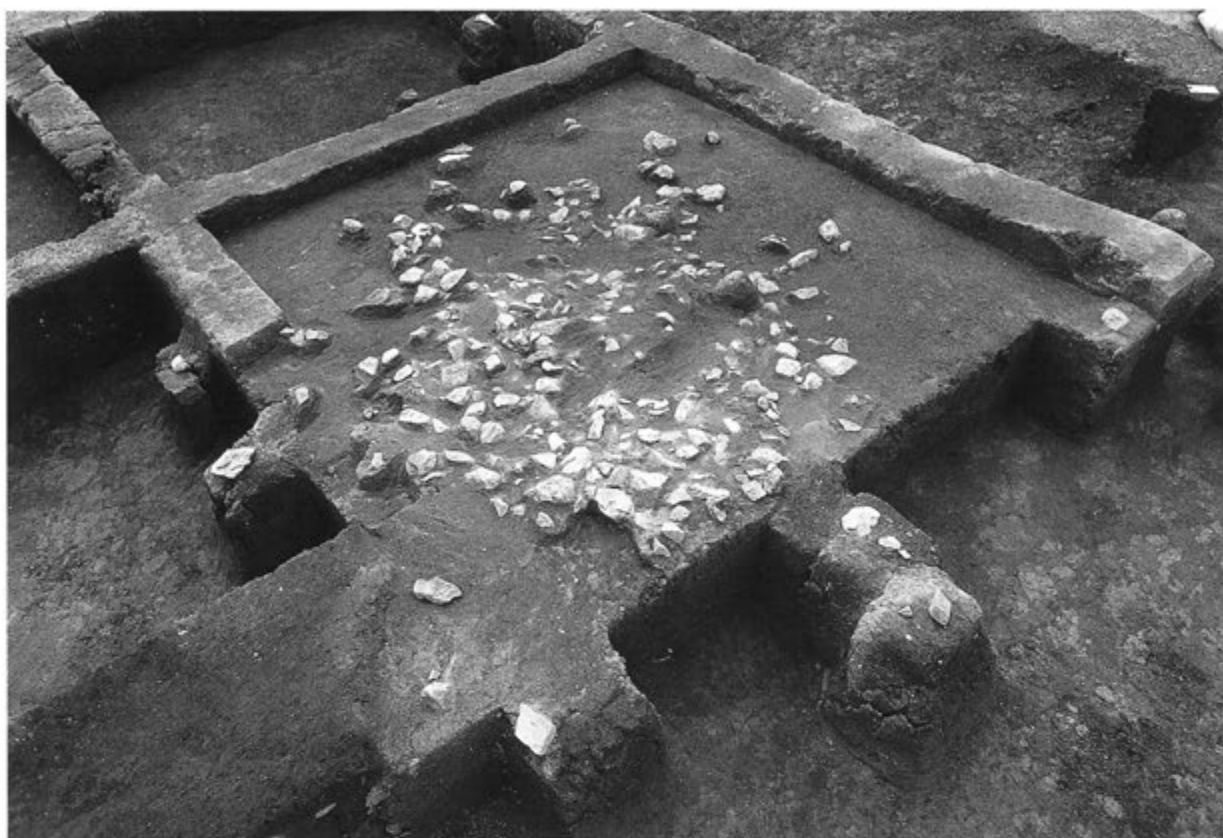


落とし穴 9～13号



落とし穴 14~15号

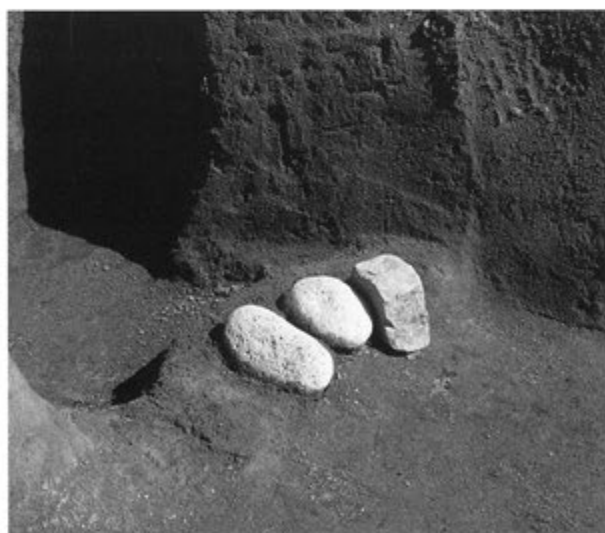
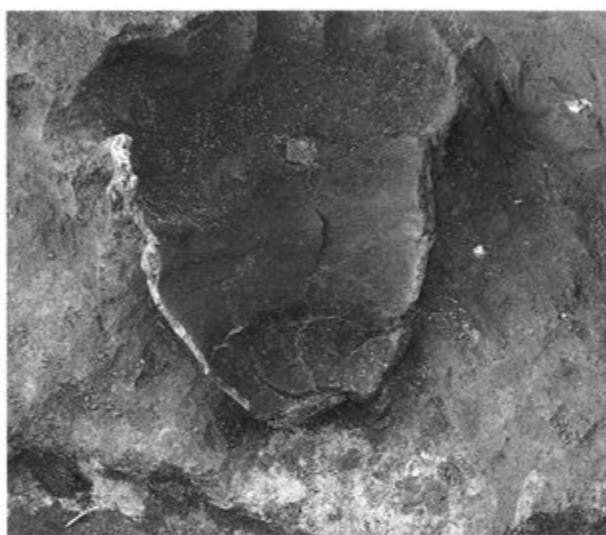
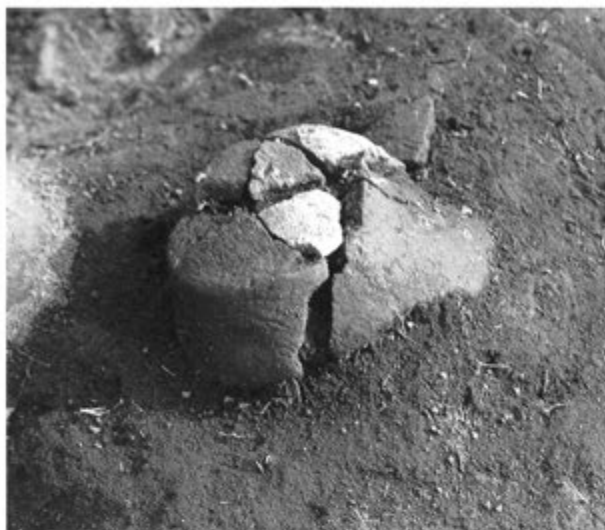




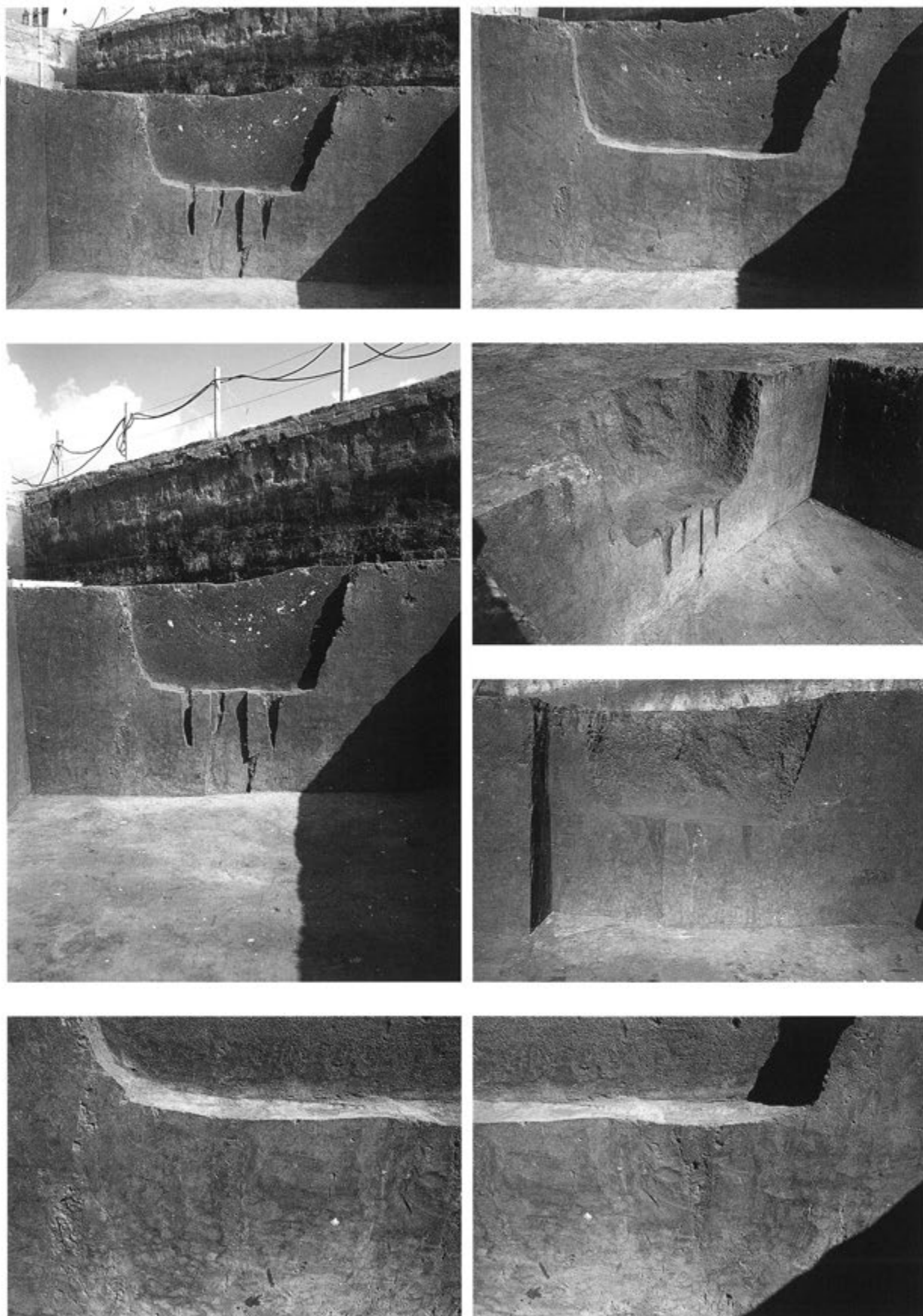
礫群



旧石器時代地形



縄文時代遺物出土状況

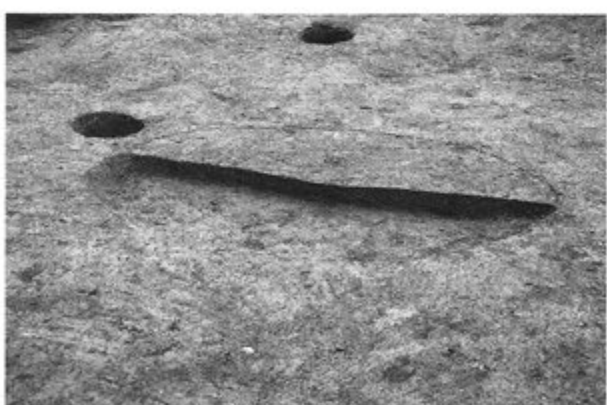
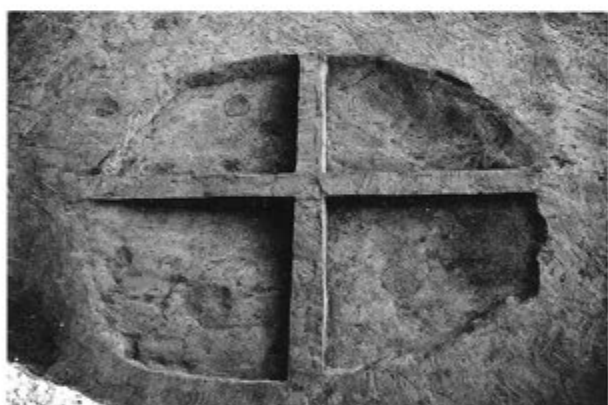


縄文時代落とし穴 1・2号

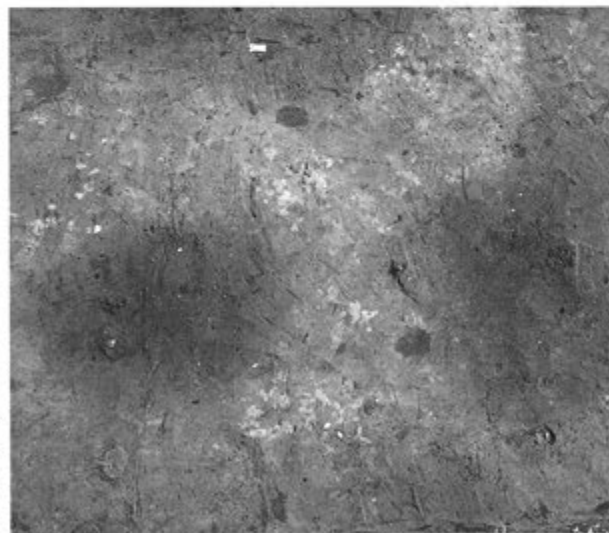




古墳時代住居跡



古墳時代住居跡



土坑



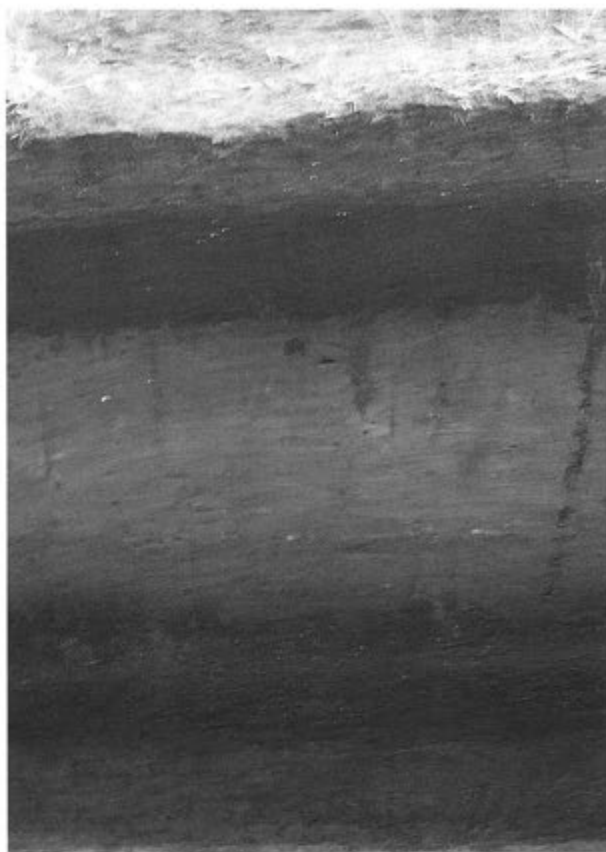


遺物出土状況

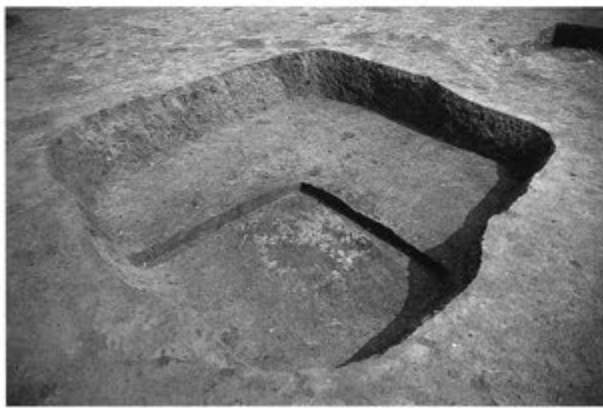
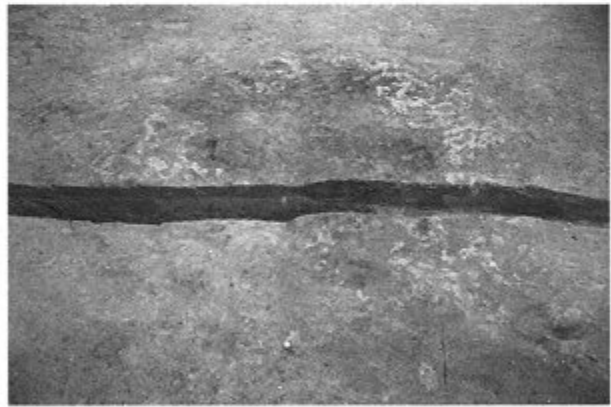
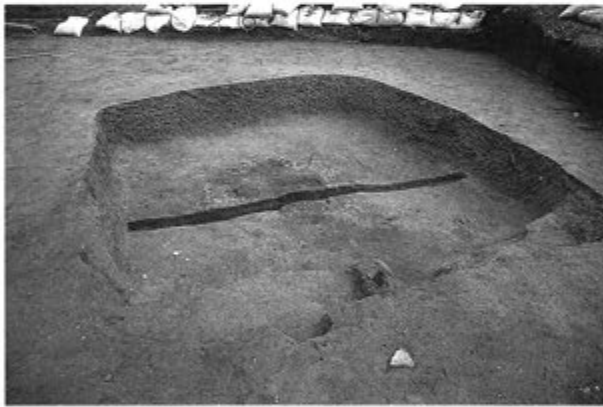
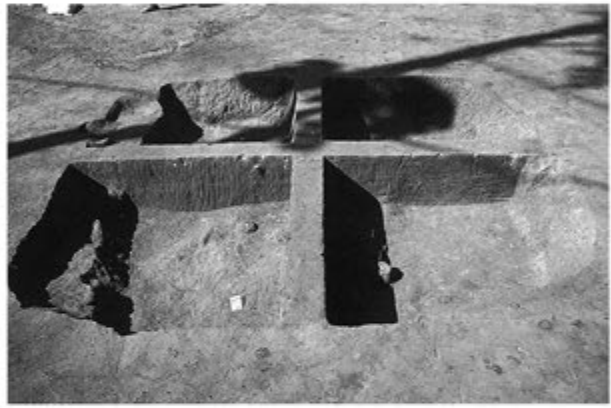
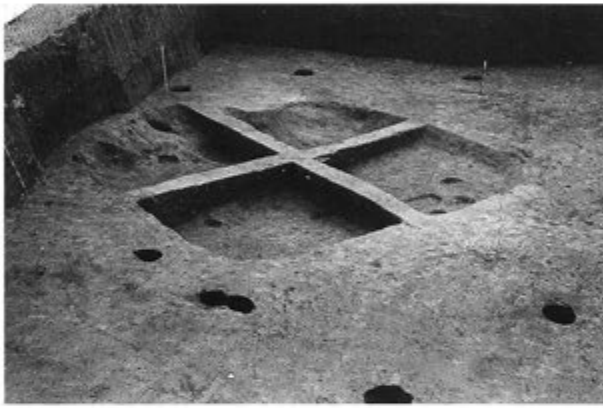


縄文時代遺構





土層



古墳時代住居跡



古墳時代住居跡

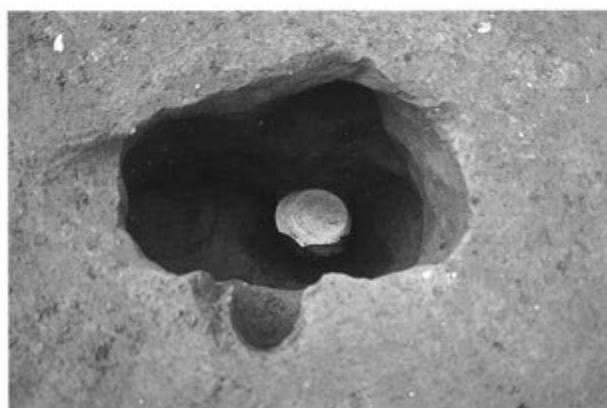
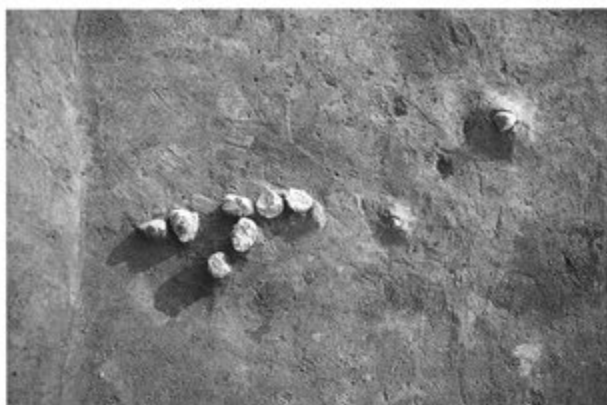


古墳時代住居跡





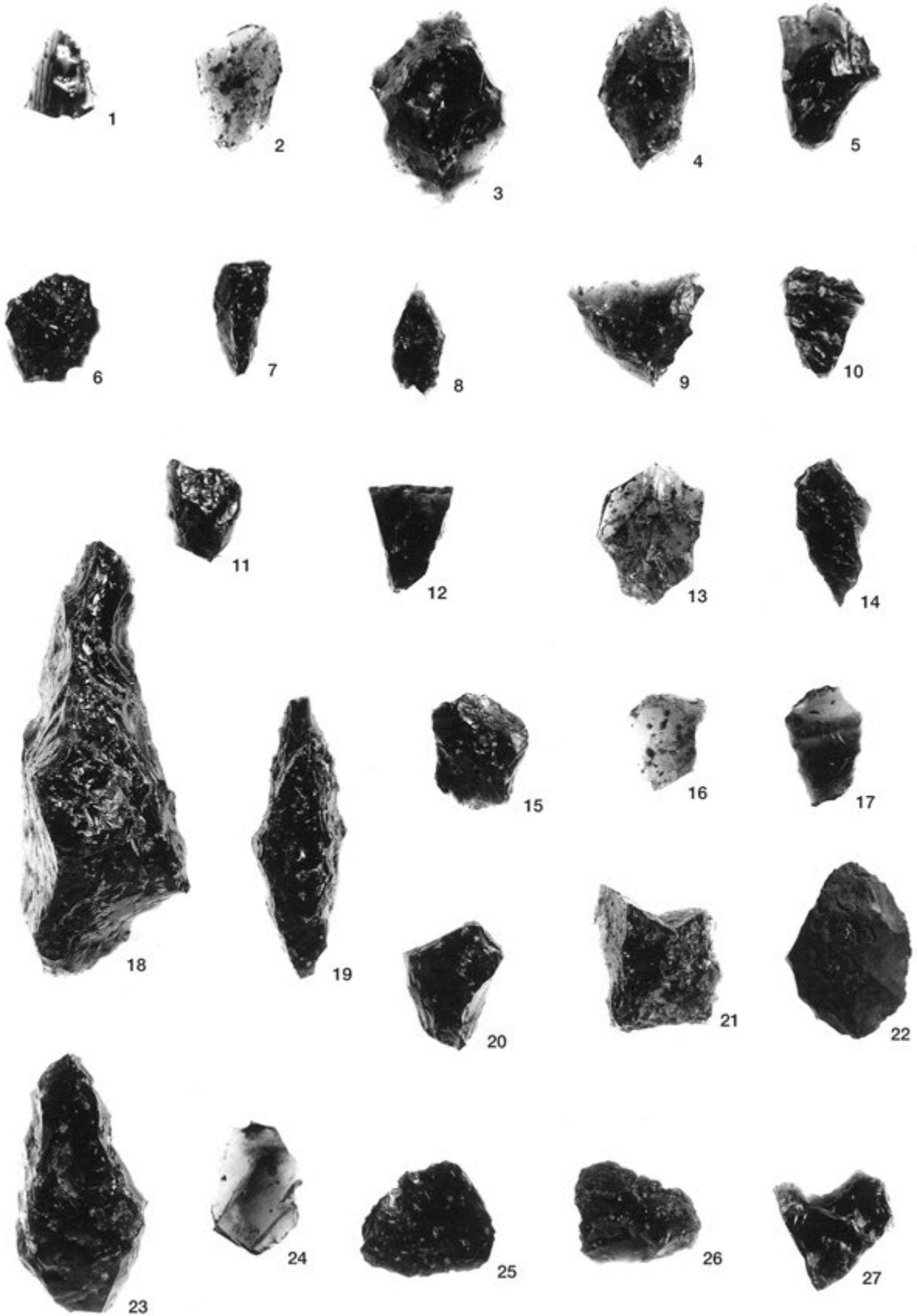
遺物出土状況



土層・遺構・遺物出土状況

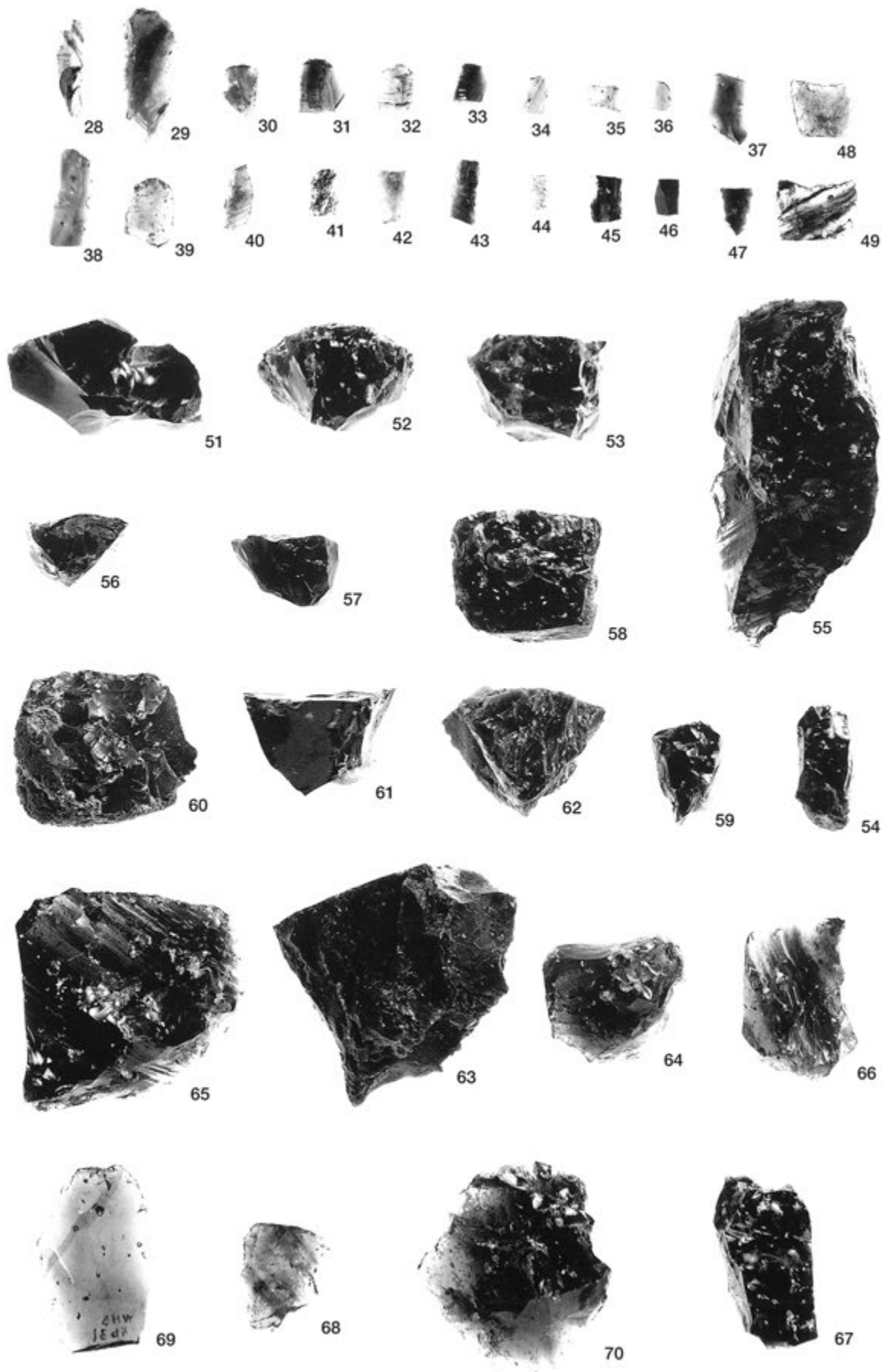


発掘風景



鷺ヶ迫遺跡 旧石器 (1)





鷺ヶ迫遺跡 旧石器 (2)



173

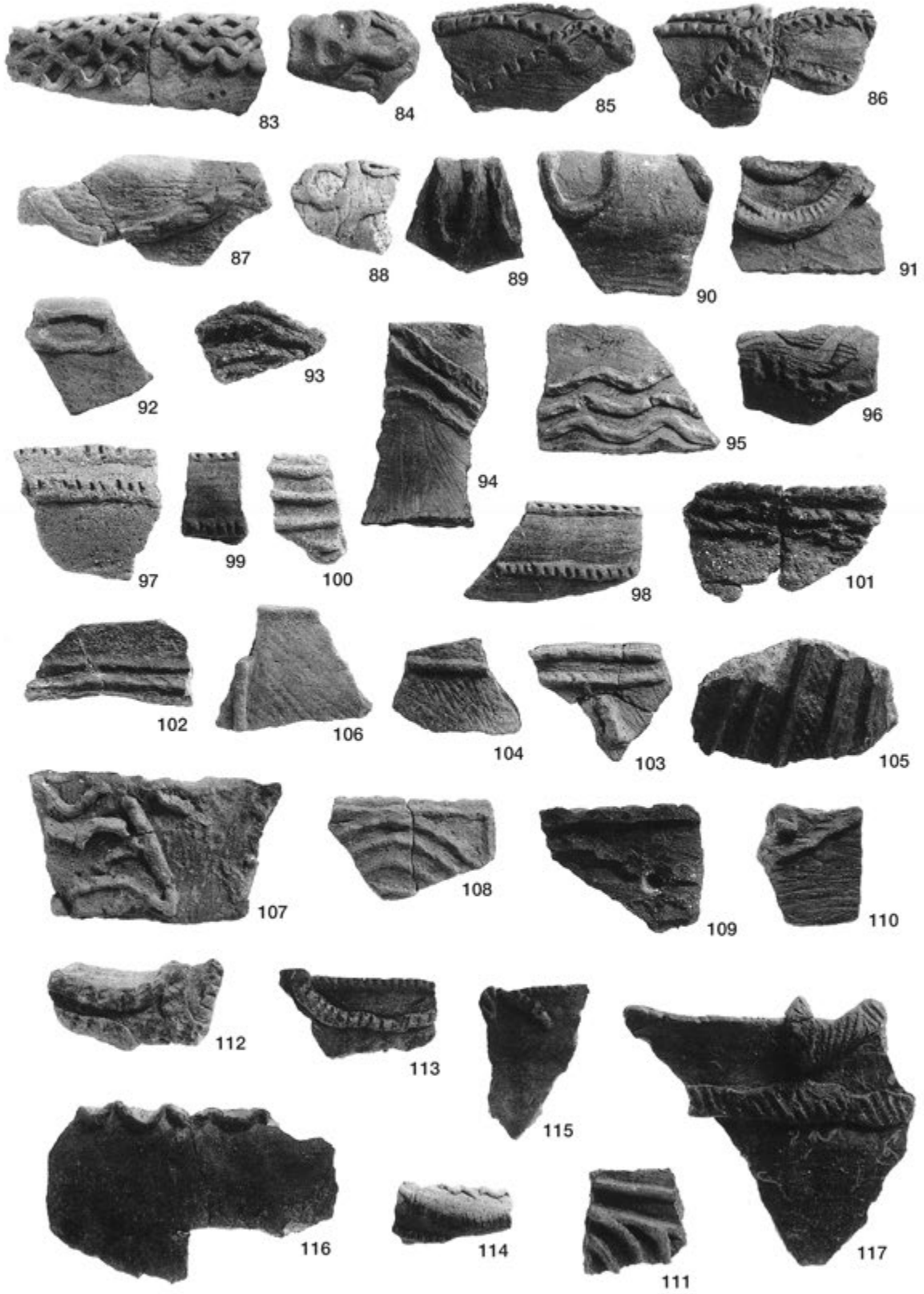


82

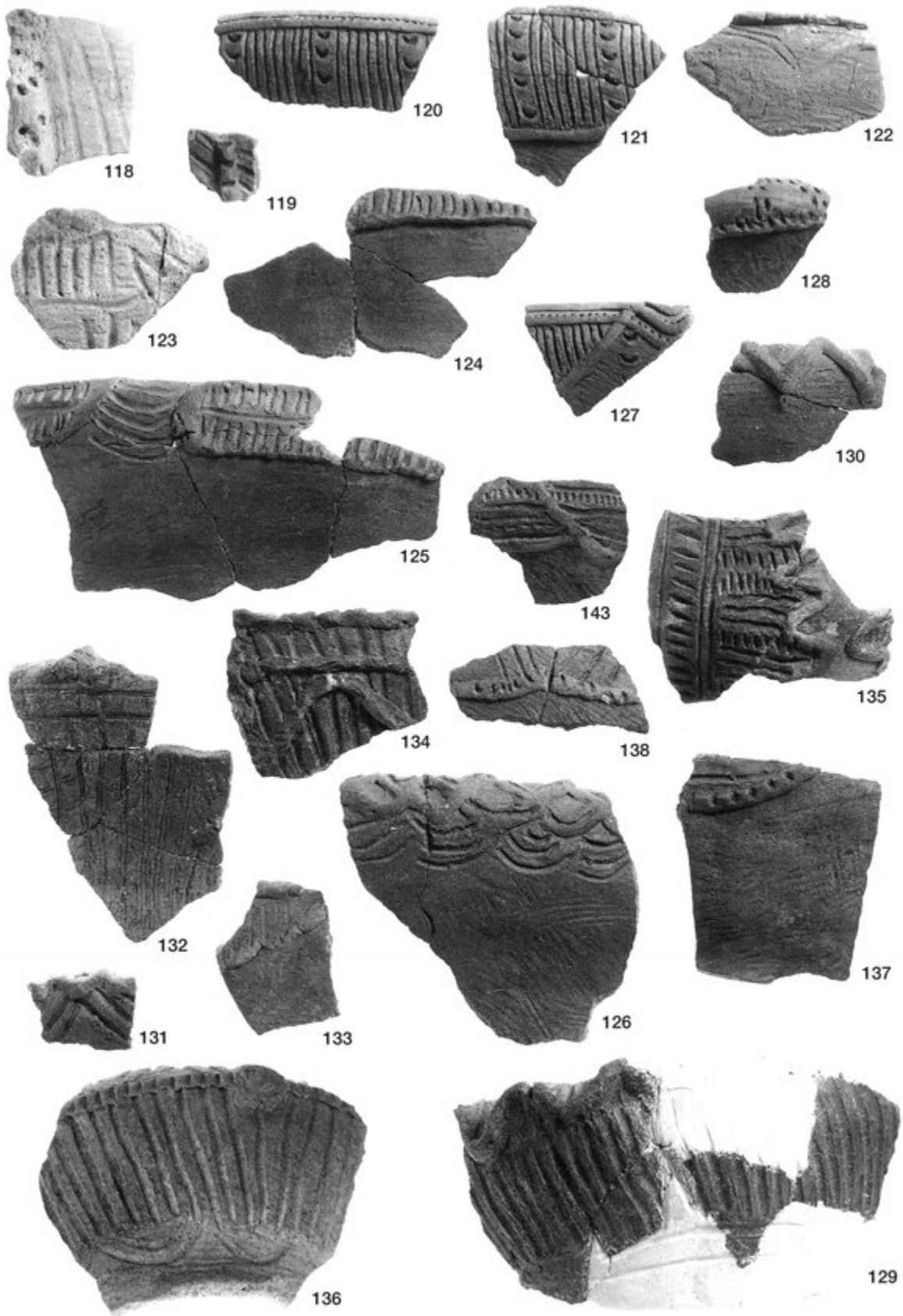


139

鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (1)



鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (2)



鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (3)



142

鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (4)



144



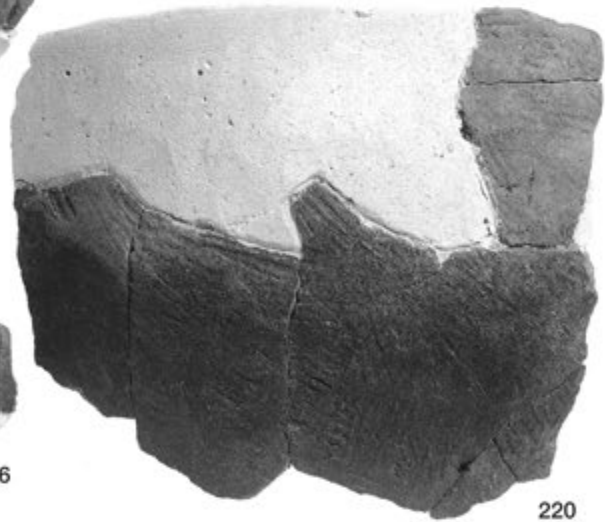
141



221



145



220



146

鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (5)



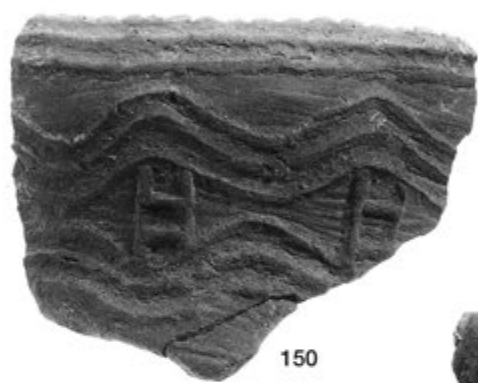
147



149



153



150



151



154



148



152



155



156



160



157



158



159



161



162



163



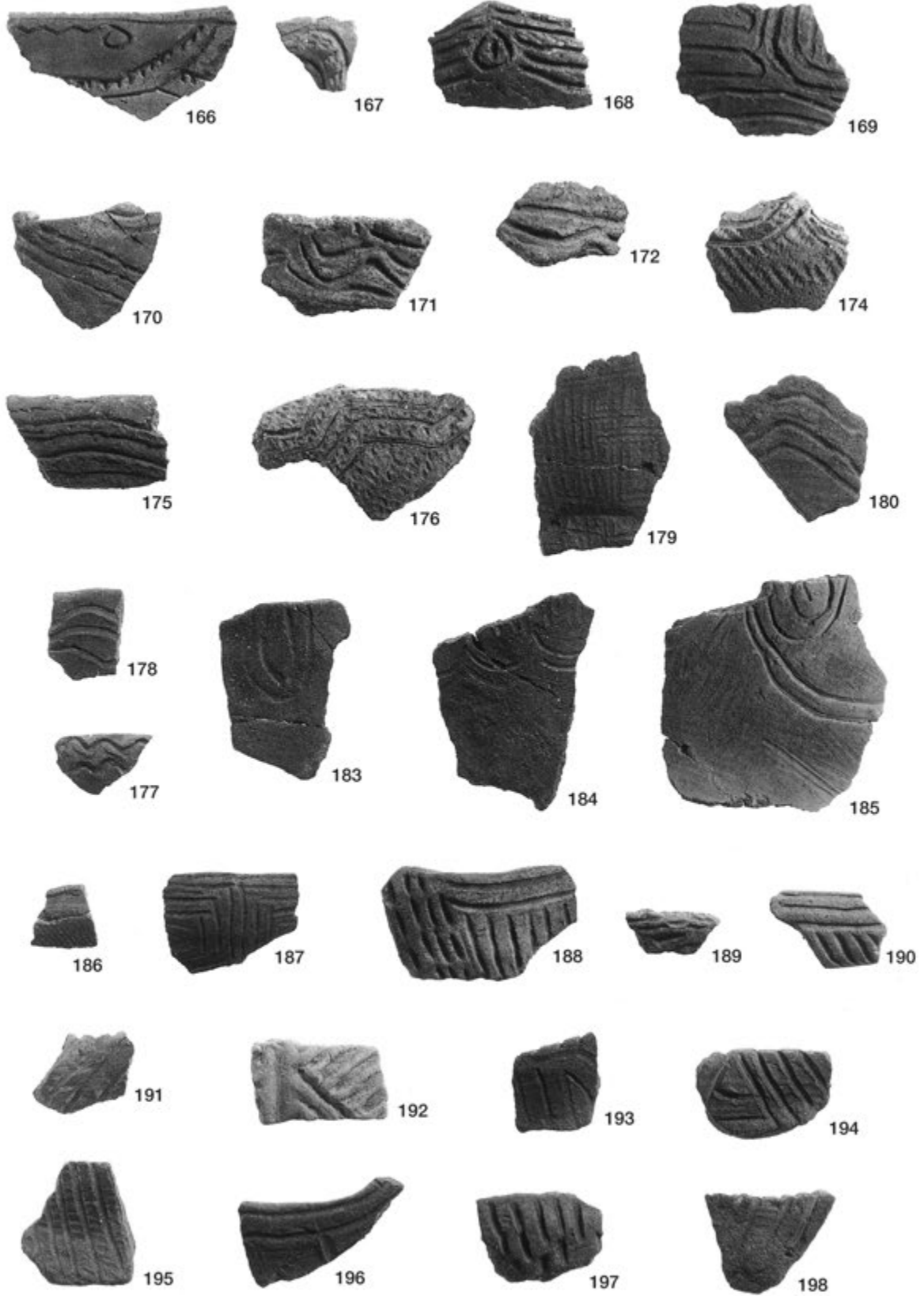
164



165

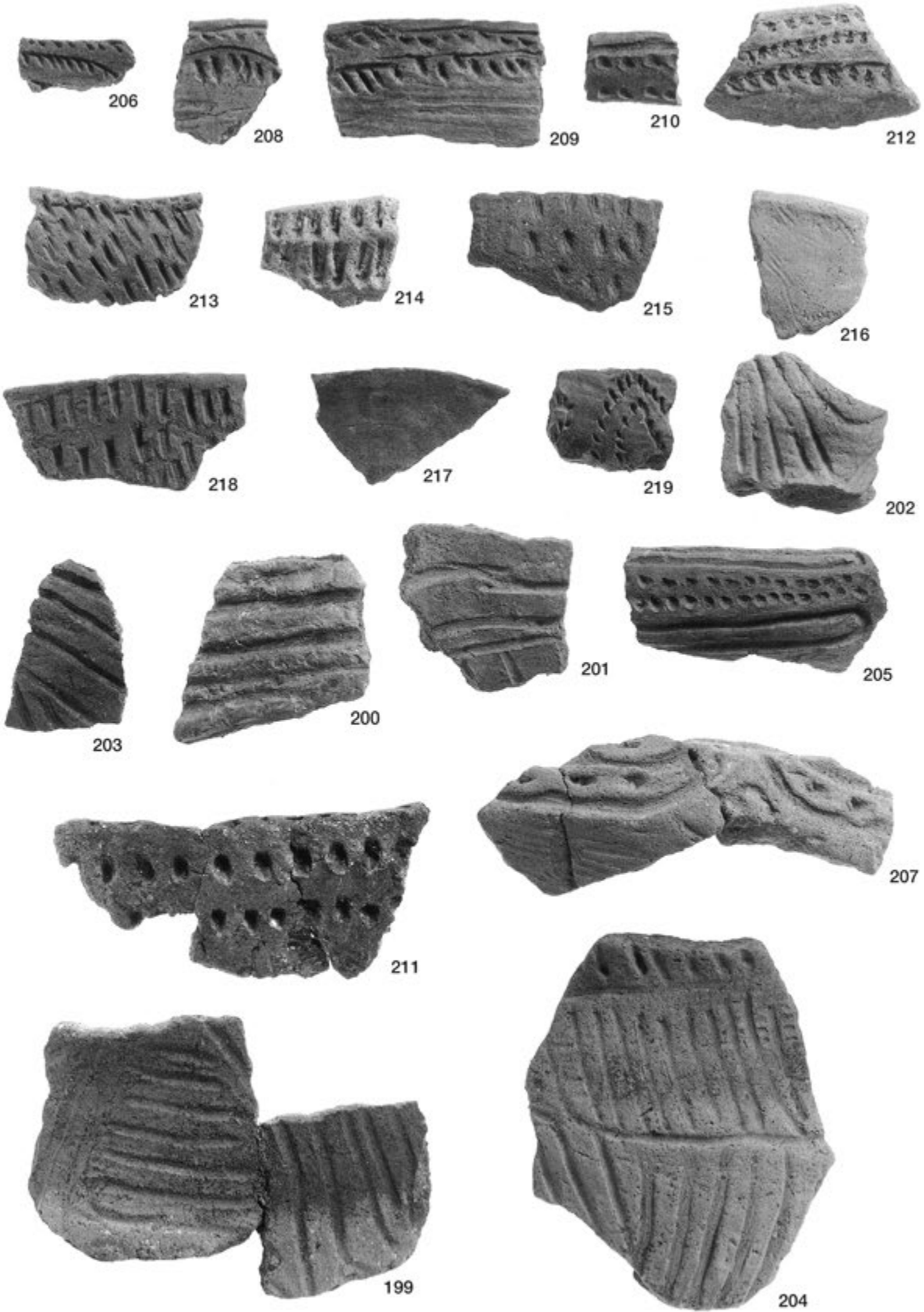
鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (6)



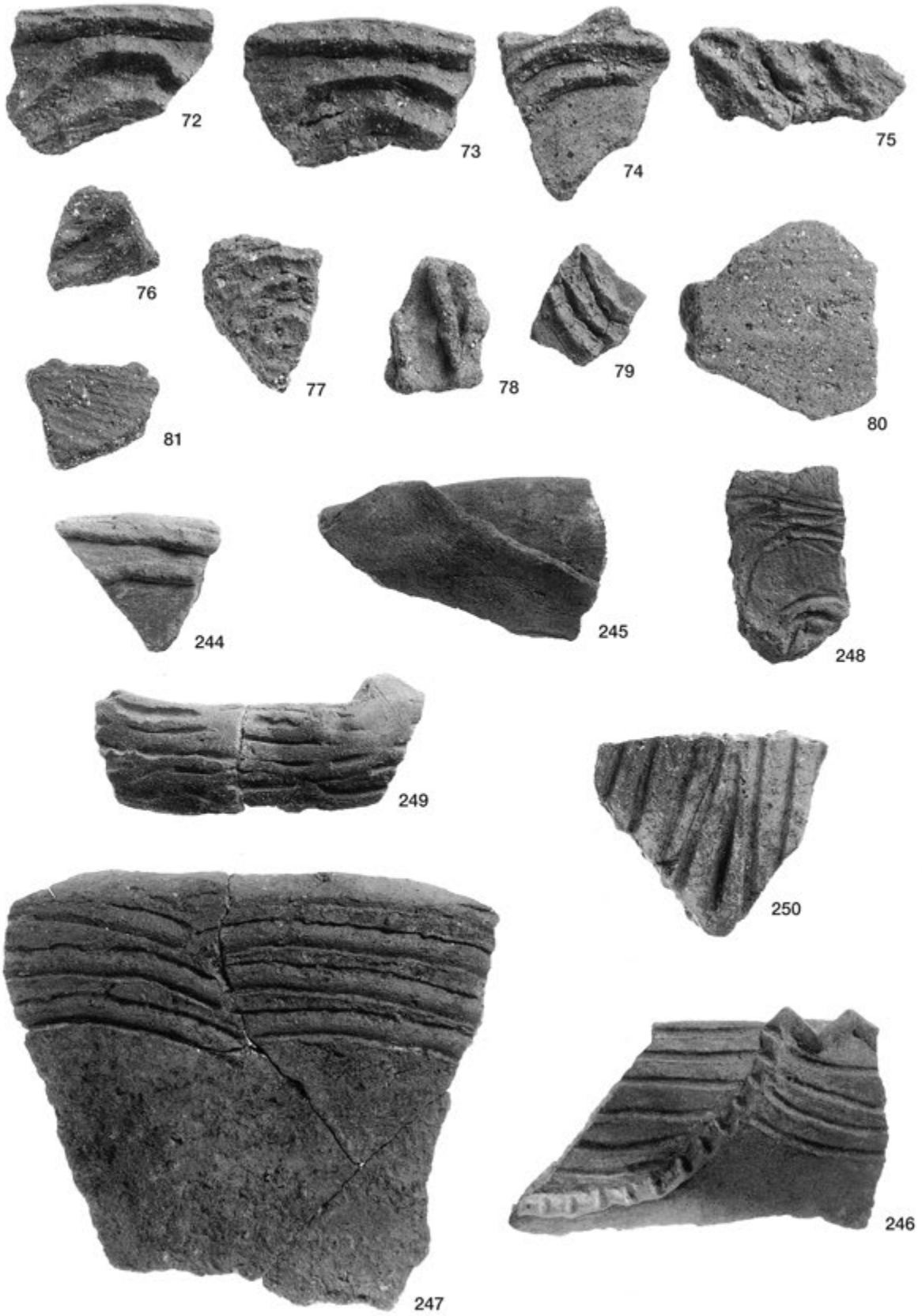


鷲ヶ迫遺跡 縄文土器 (7)

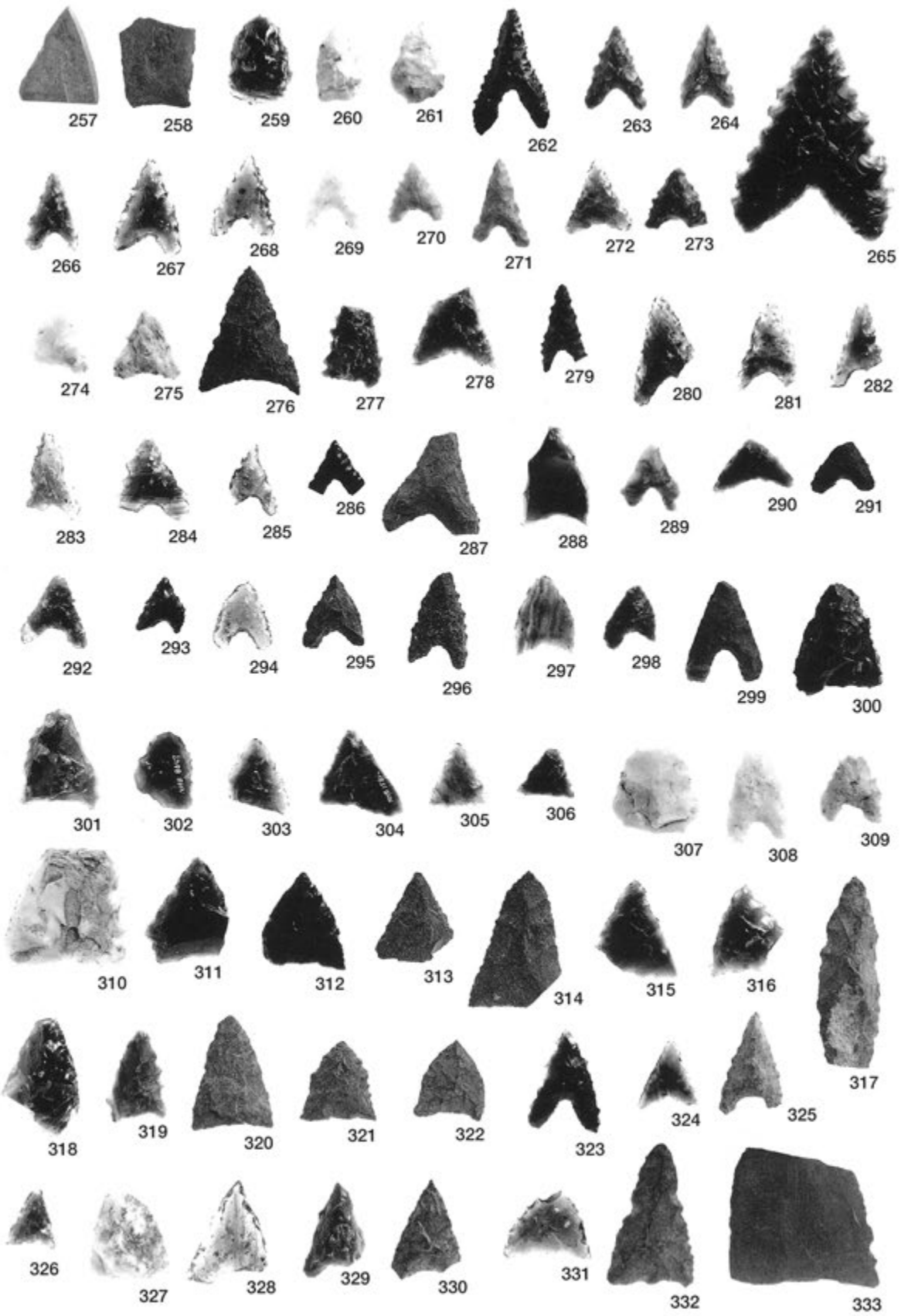




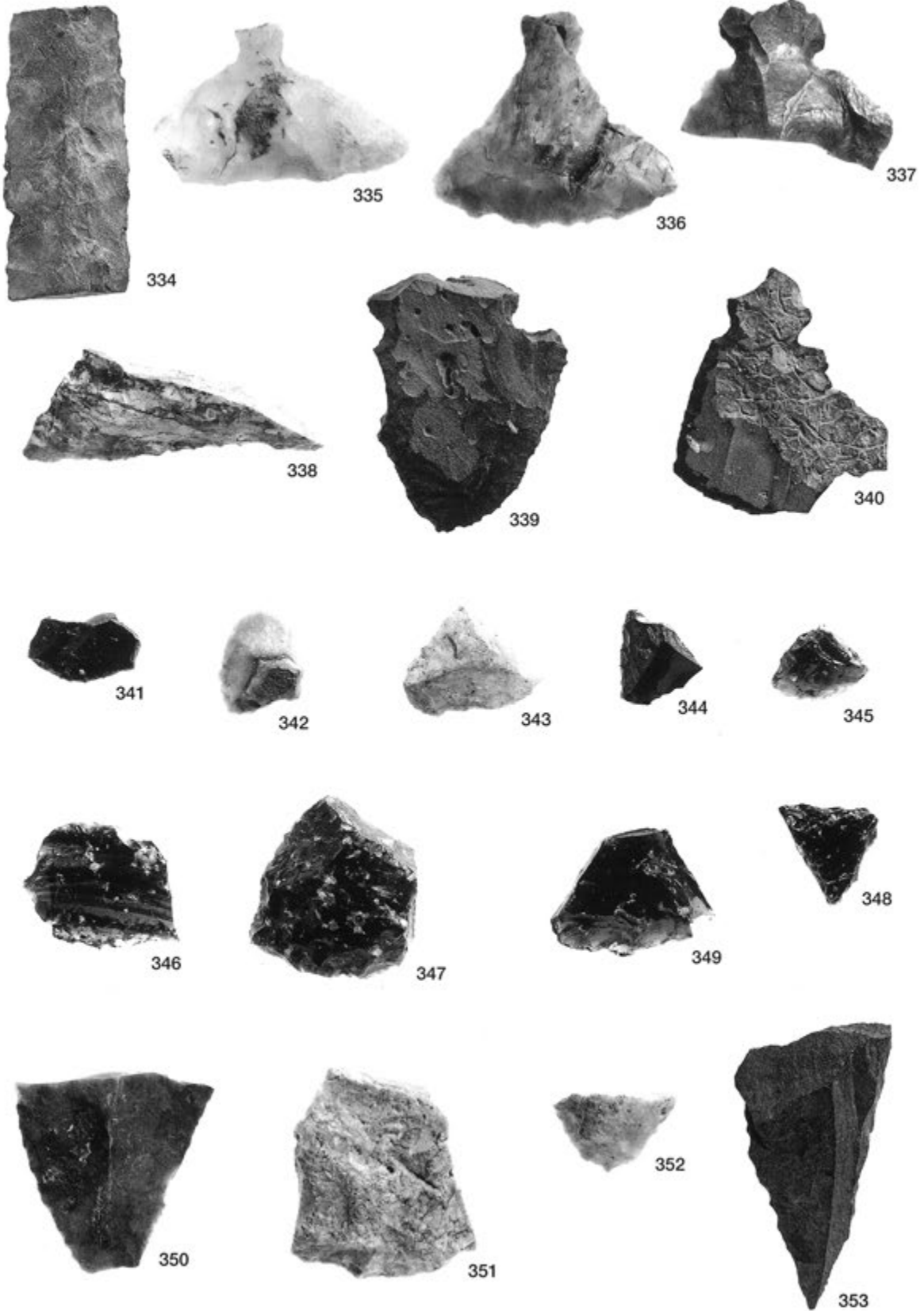
鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (8)



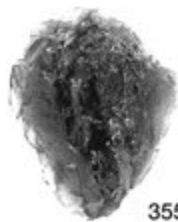
鷺ヶ迫遺跡 縄文土器 (9)



鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (1)



鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (2)



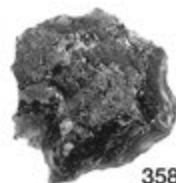
355



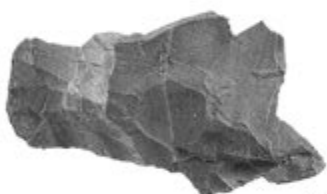
356



357



358



359



360



361



362



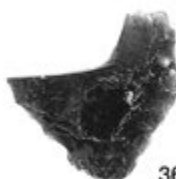
363



364



365



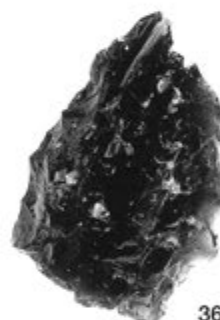
366



367



368



369



370



371



372

鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (3)



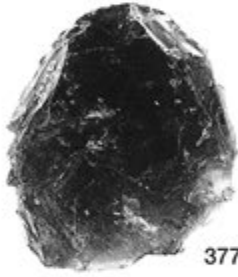
373



374



375



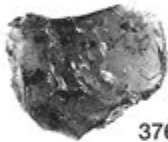
377



378



379



376



380



386



385



381



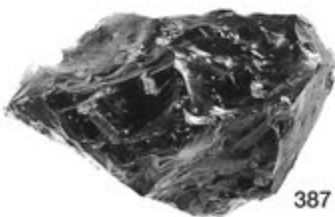
382



383



384



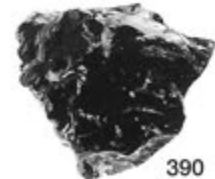
387



388



389



390

鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (4)



354



394



393



391



392



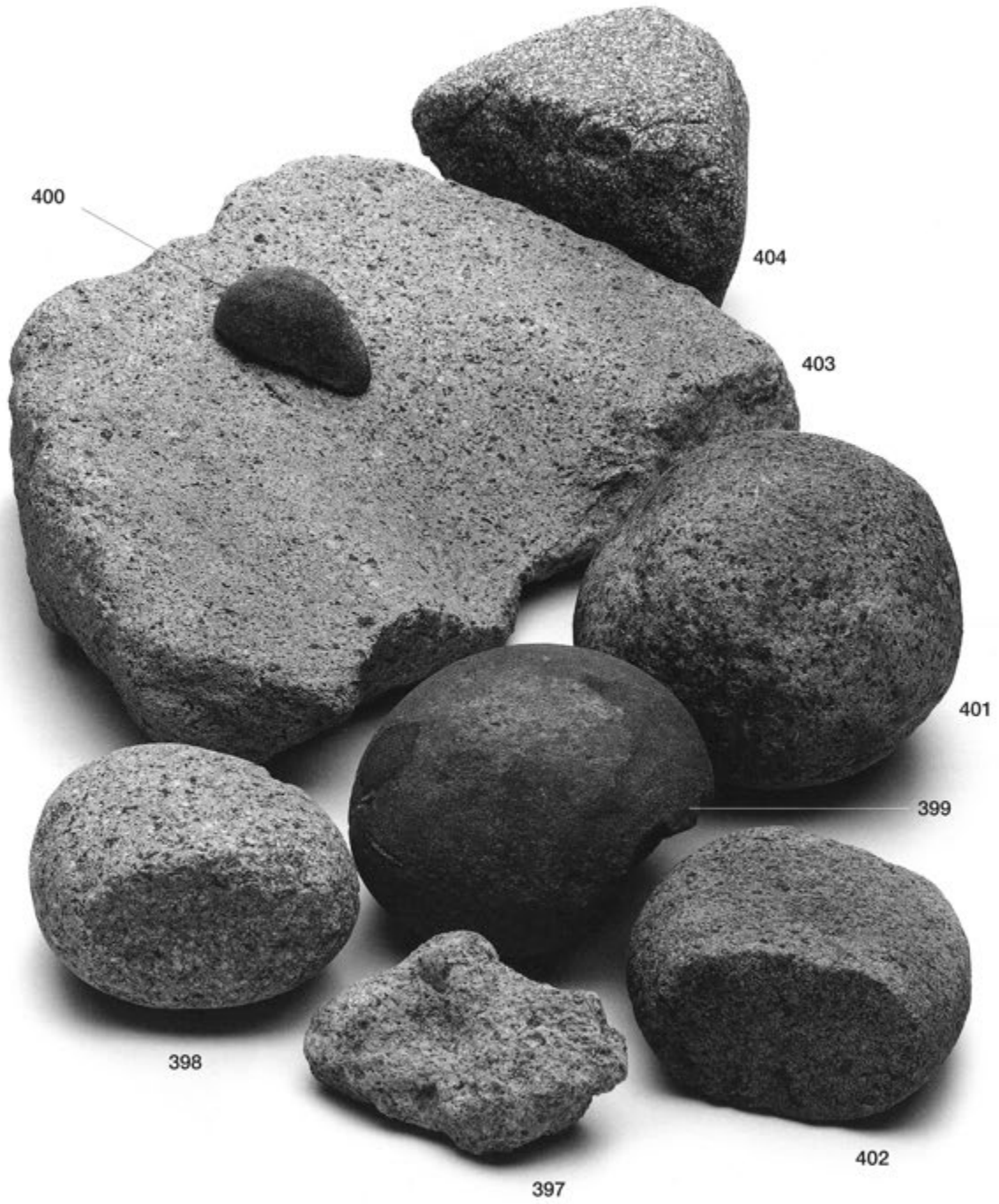
395



396

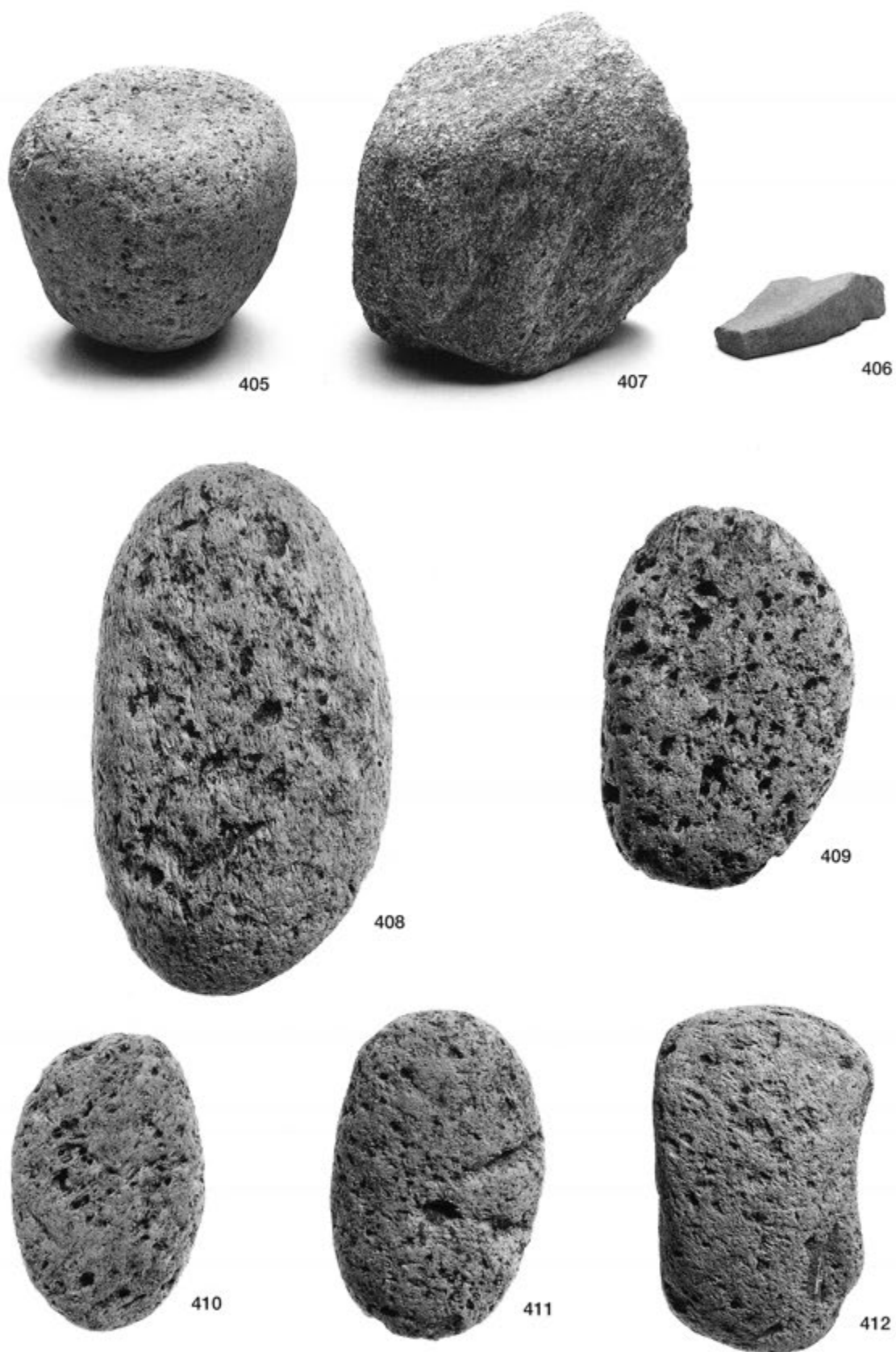
鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (5)



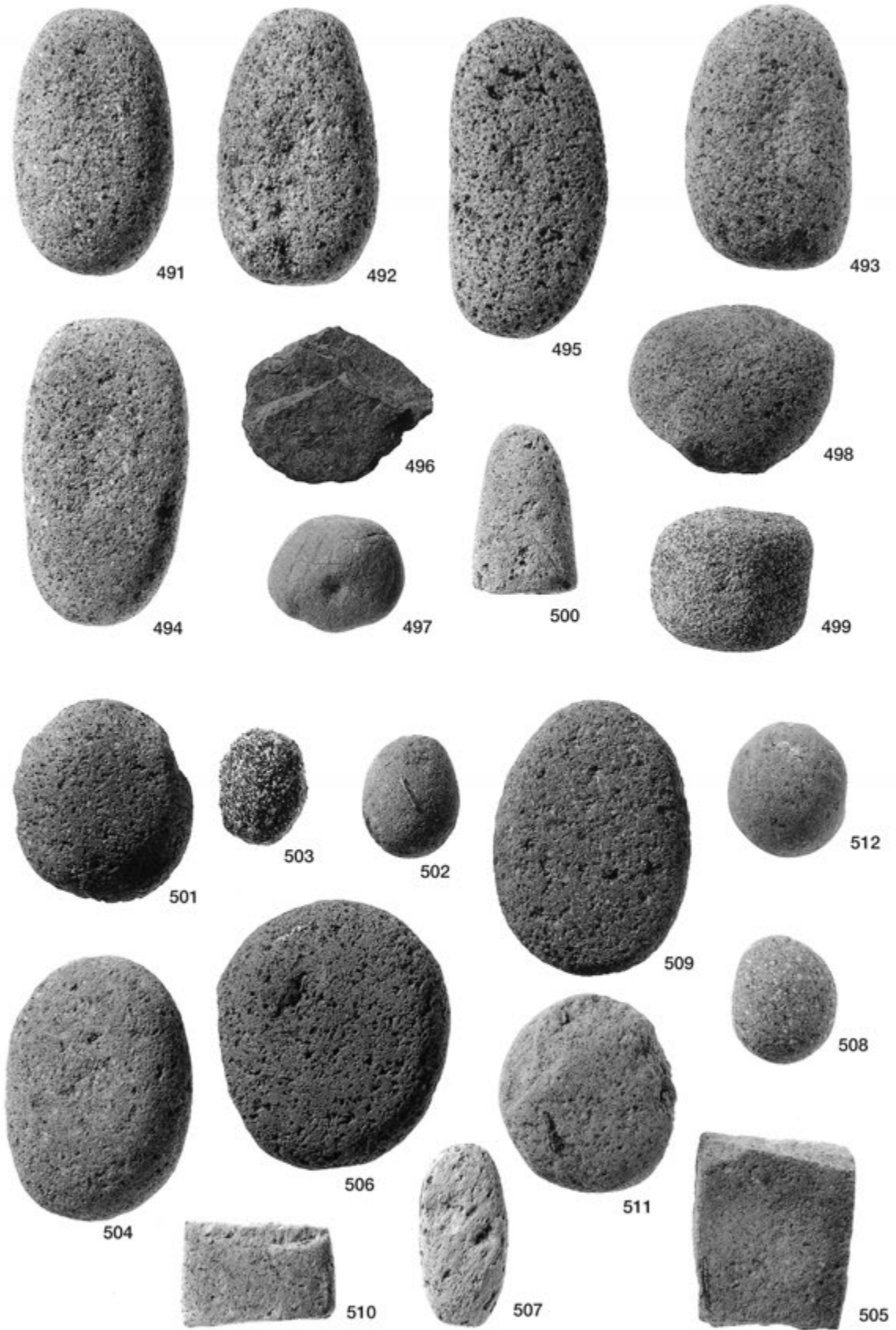


鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (6)

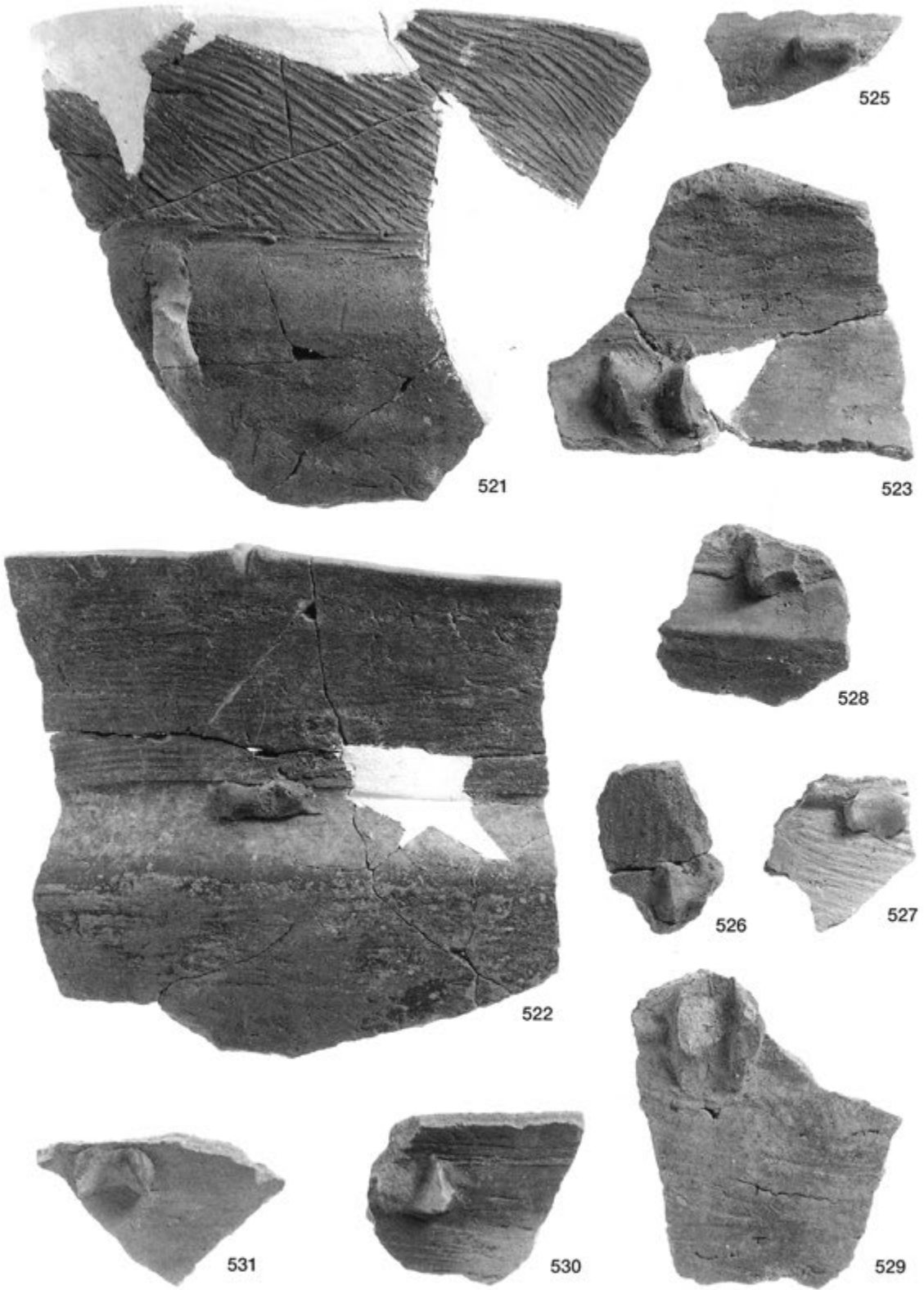




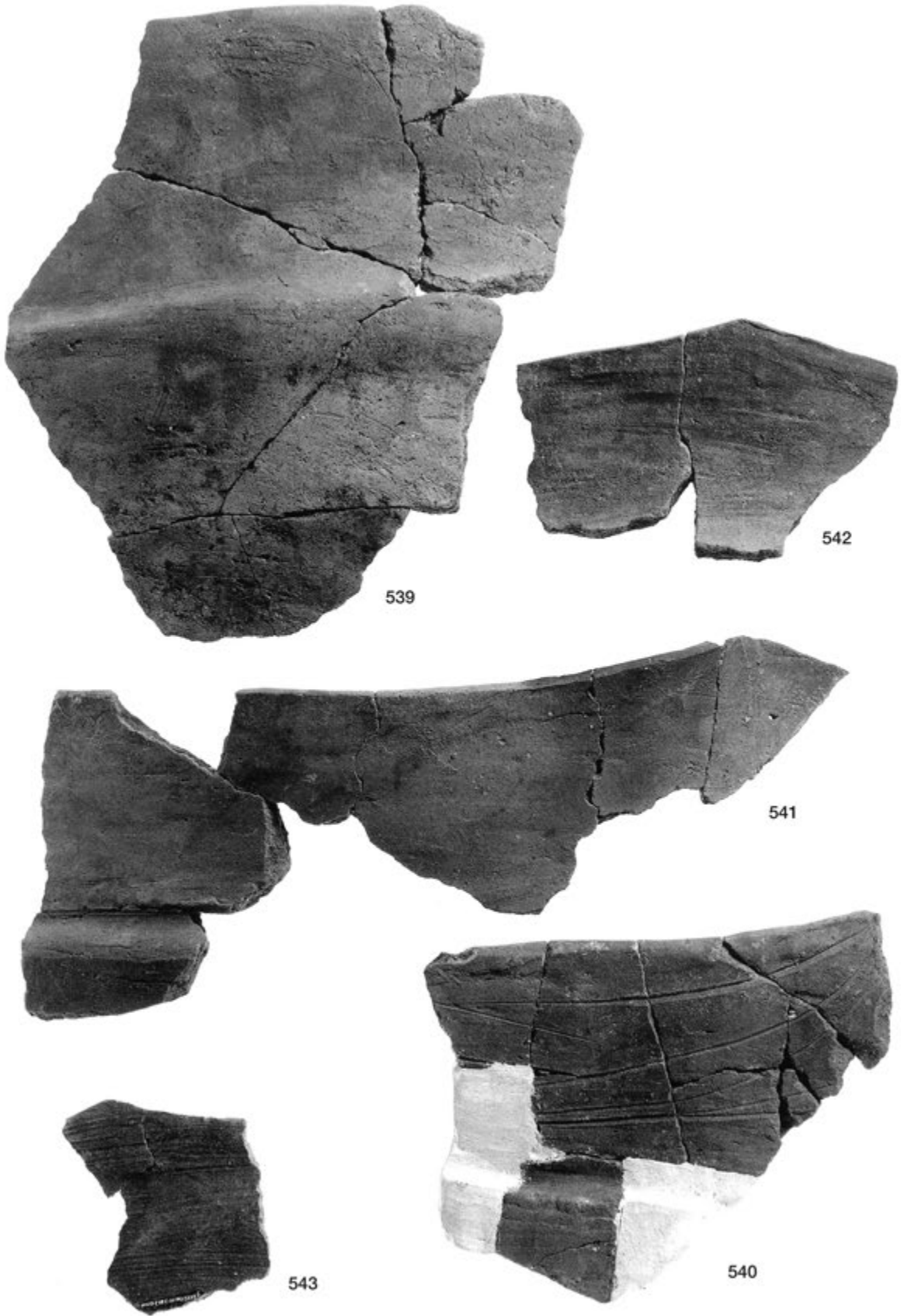
鷺ヶ迫遺跡 縄文石器 (7)



鷺ヶ迫遺跡 遺構内出土石器 (8)



北原中遺跡 縄文土器 (1)



北原中遺跡 縄文土器 (2)



544



546

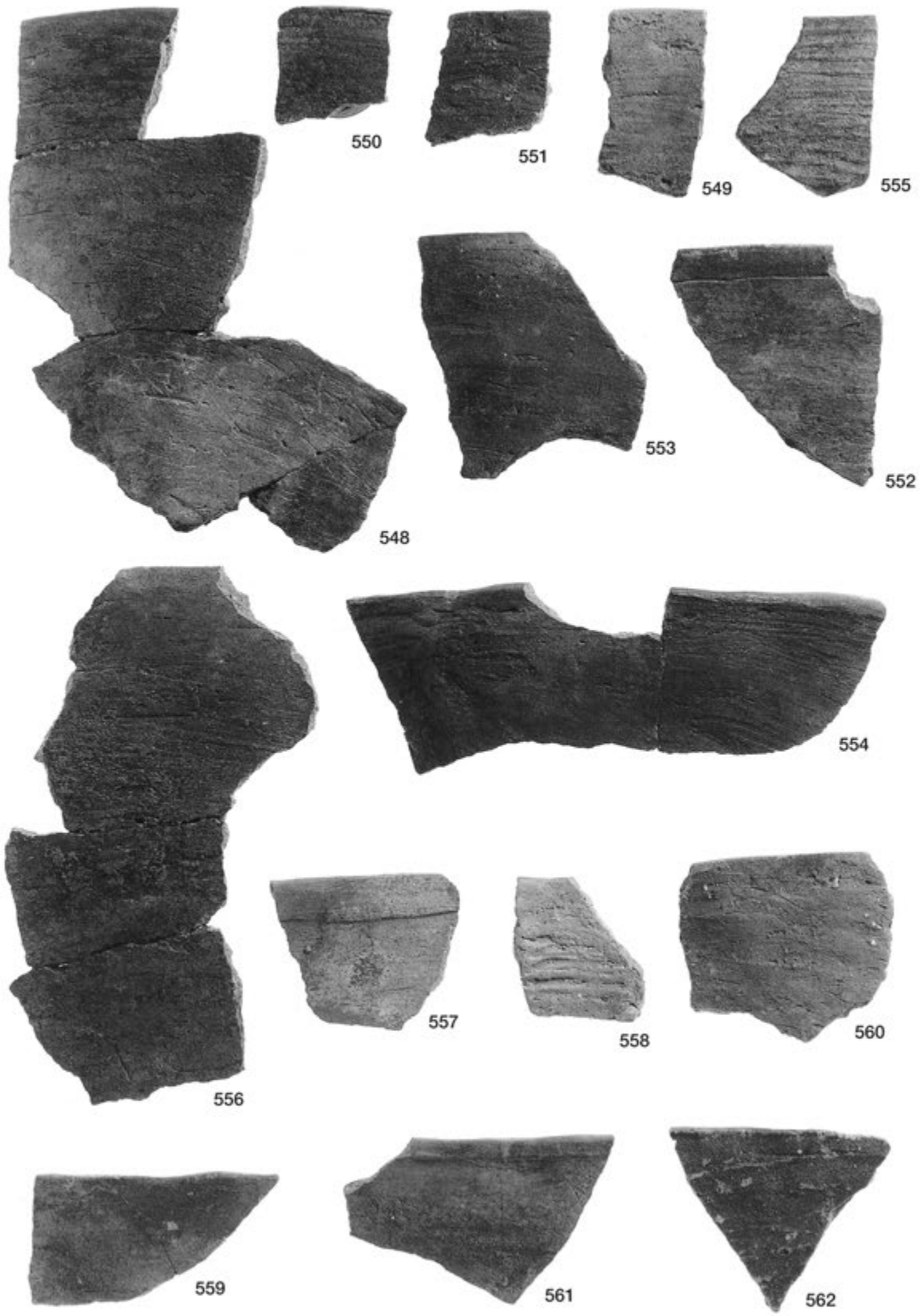


547



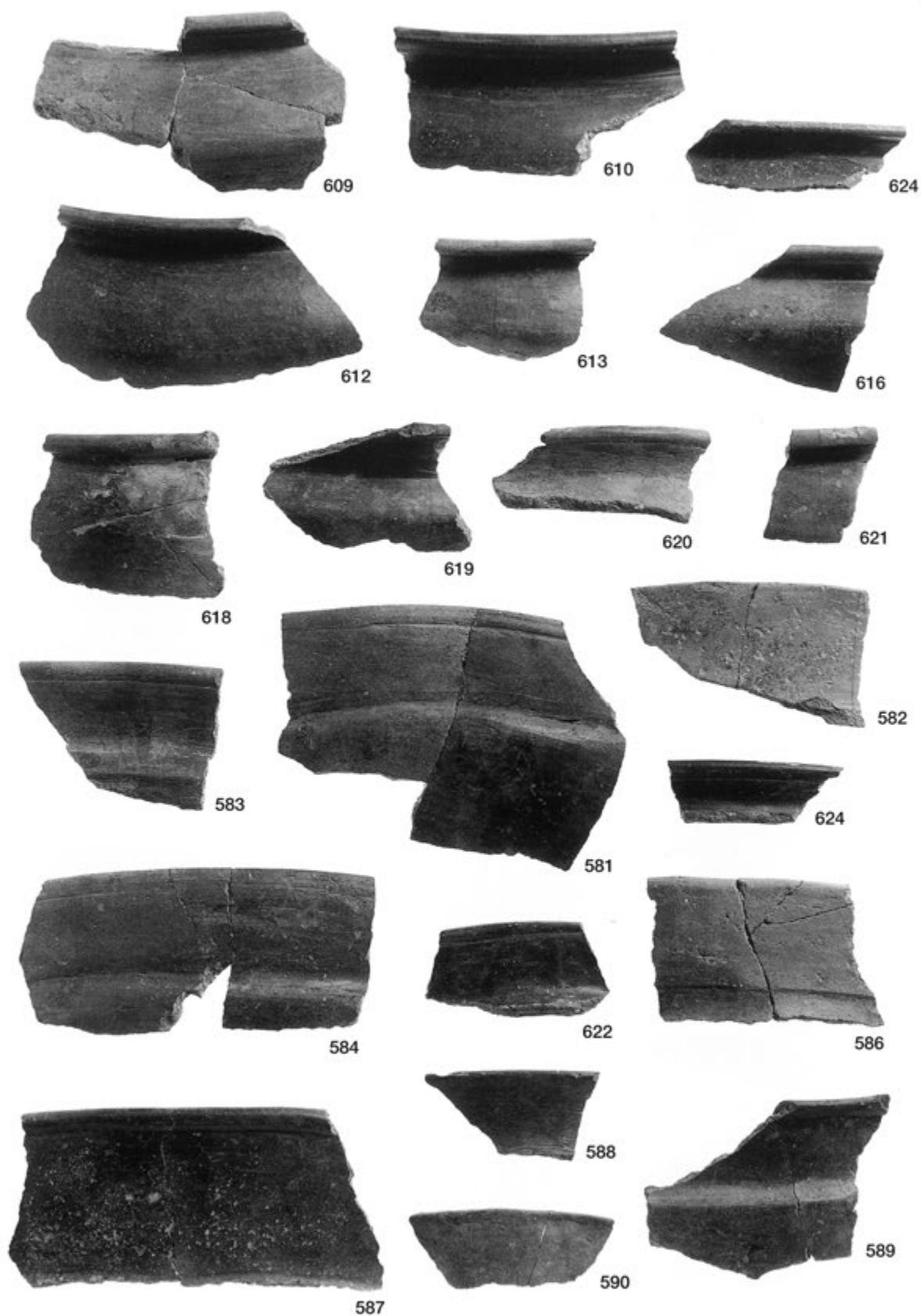
545

北原中遺跡 縄文土器 (3)

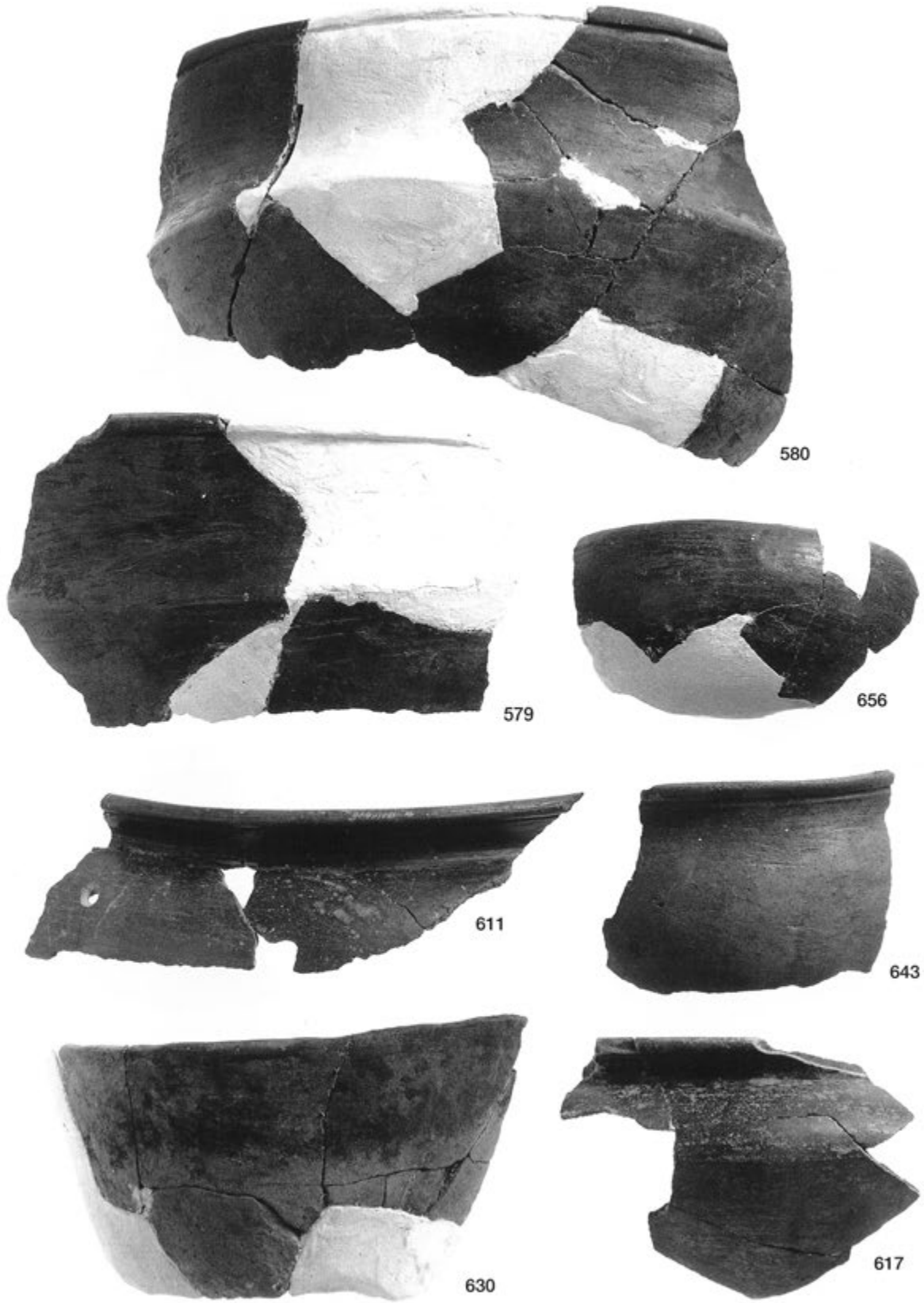


北原中遺跡 縄文土器 (4)



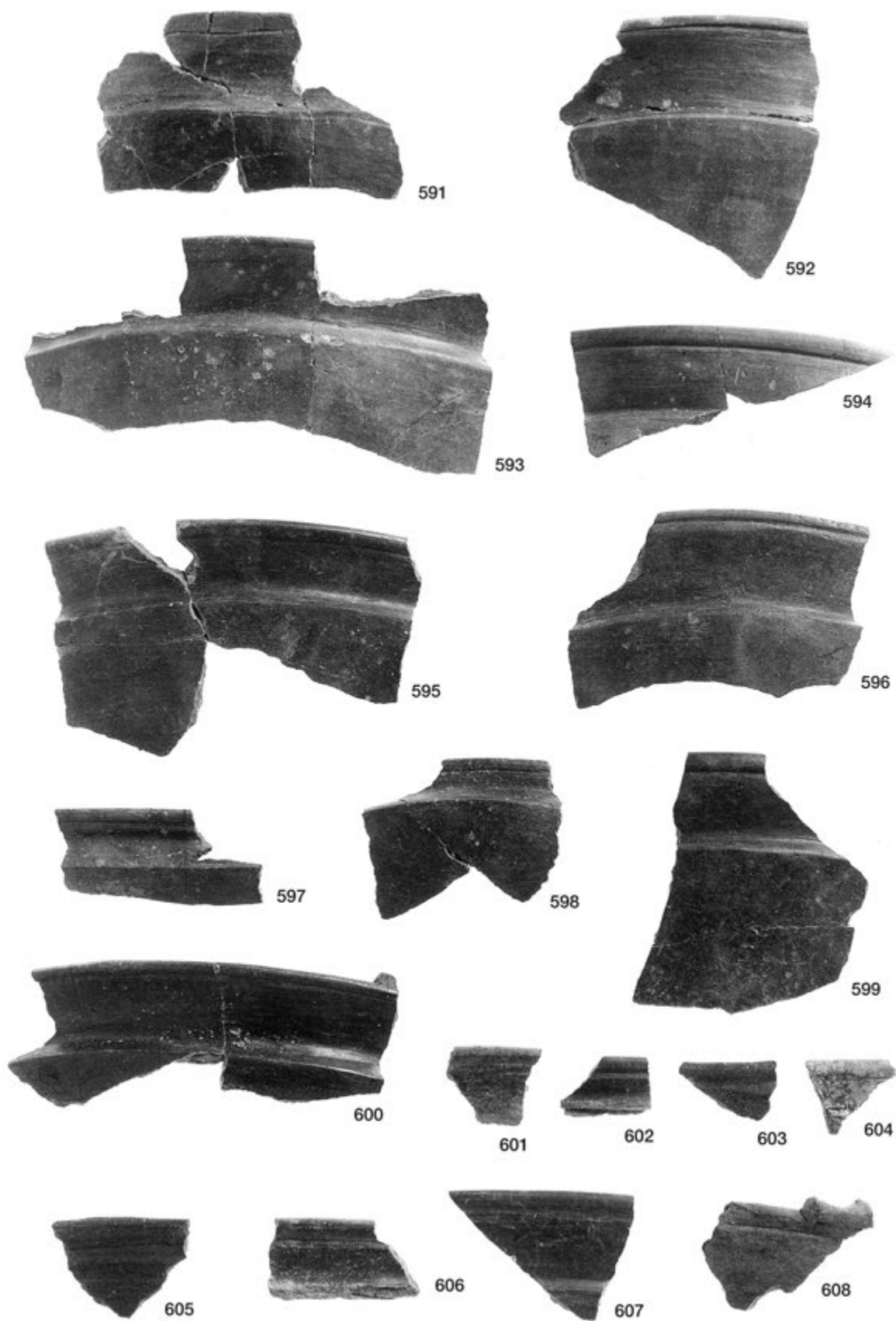


北原中遺跡 縄文土器 (5)

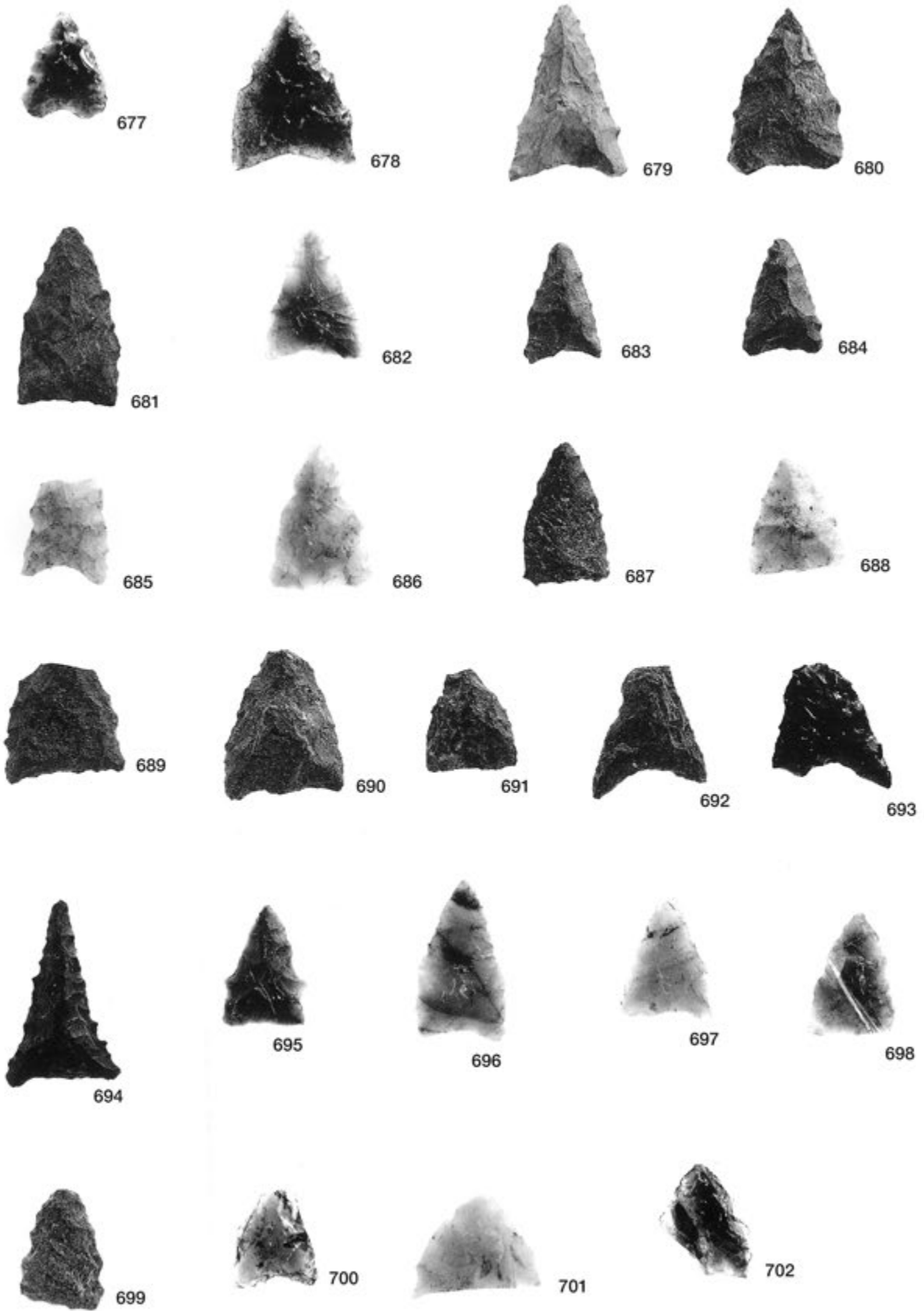


北原中遺跡 縄文土器 (6)

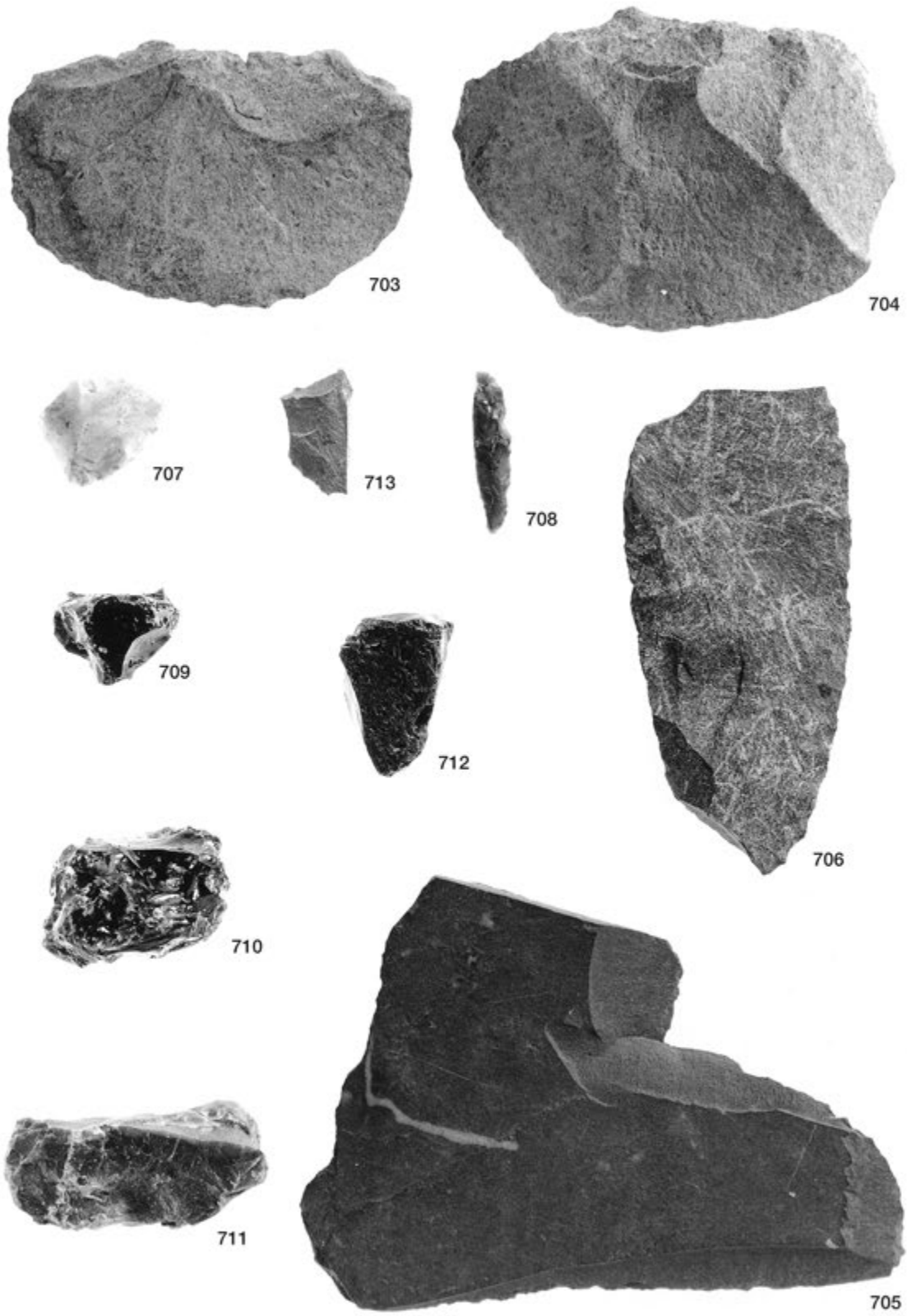




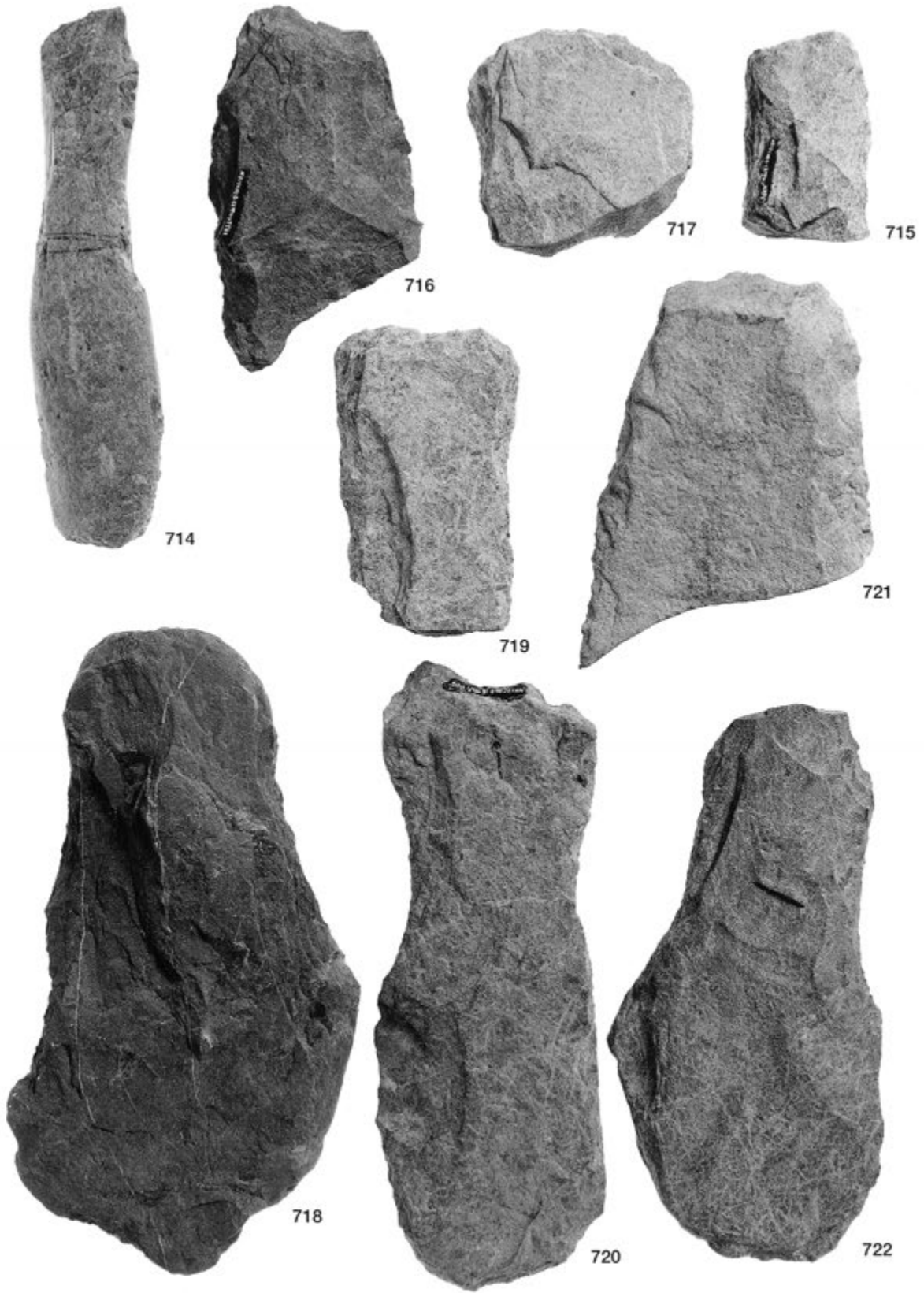
北原中遺跡 縄文土器 (7)



北原中遺跡 縄文石器 (1)



北原中遺跡 縄文石器 (2)



北原中遺跡 縄文石器 (3)



723



724



725



730



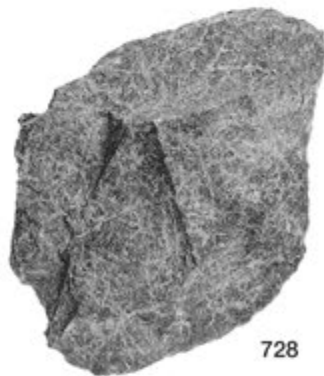
726



727



731

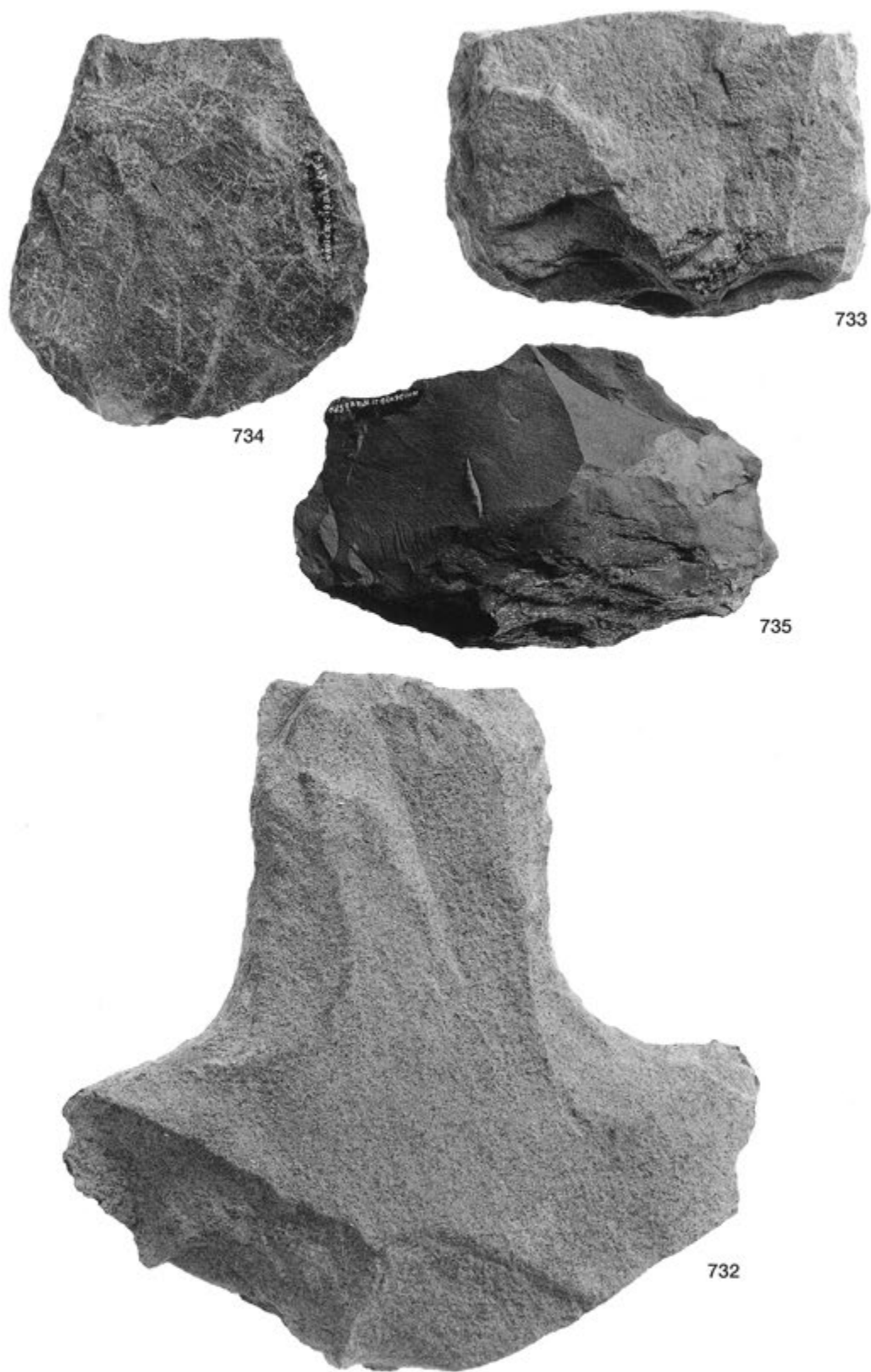


728

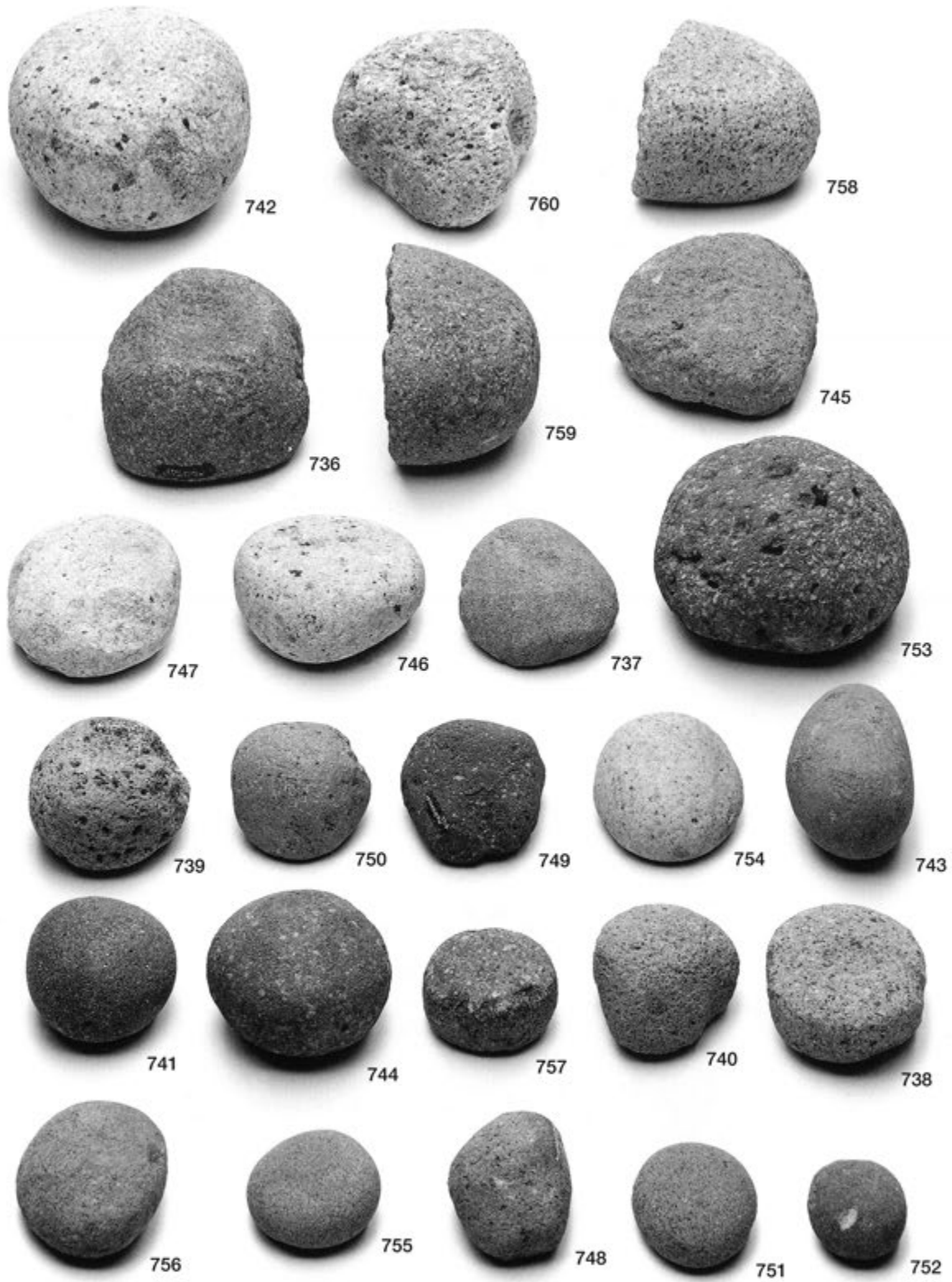


729

北原中遺跡 縄文石器 (4)



北原中遺跡 縄文石器 (5)



北原中遺跡 縄文石器 (6)





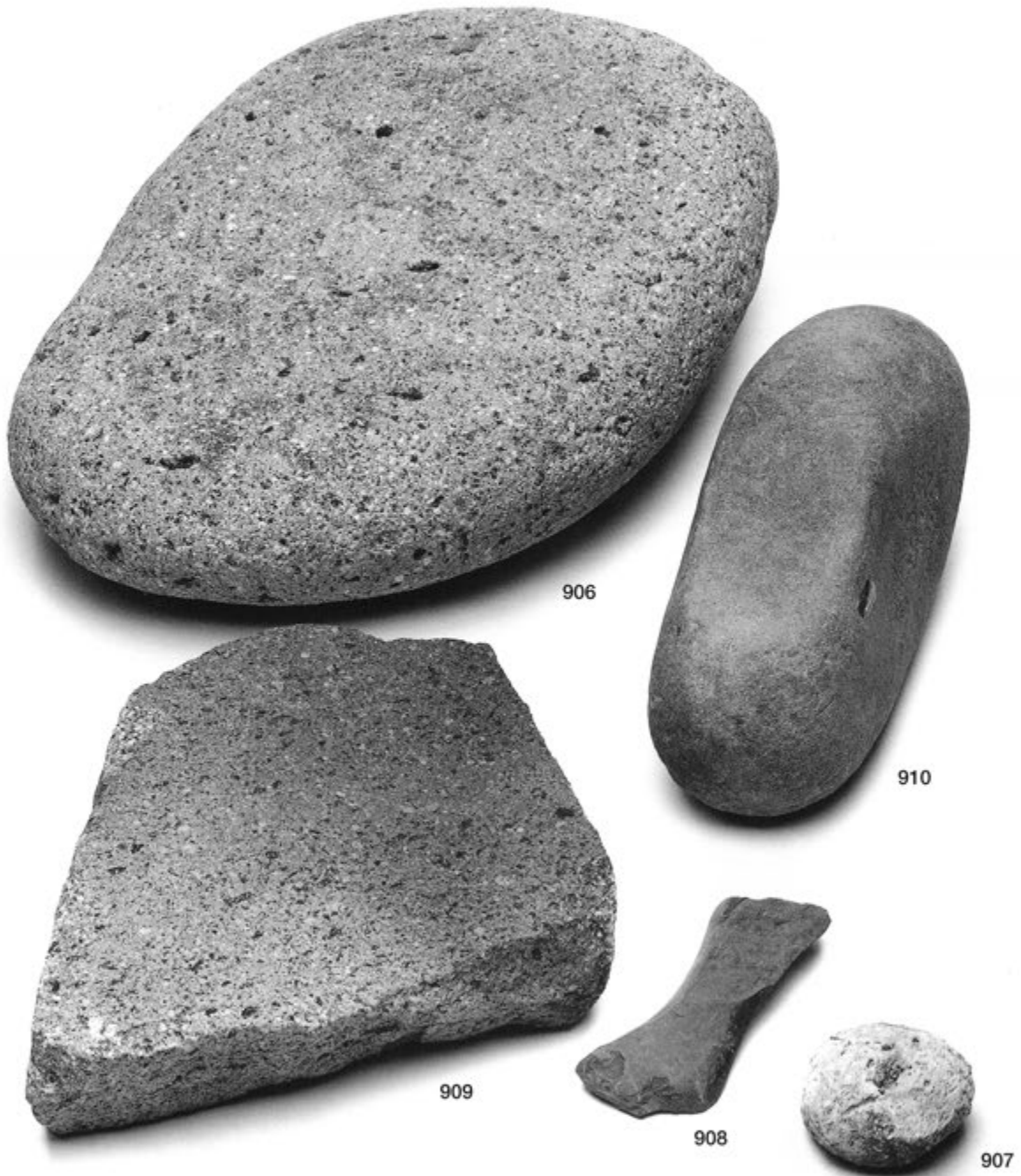
781



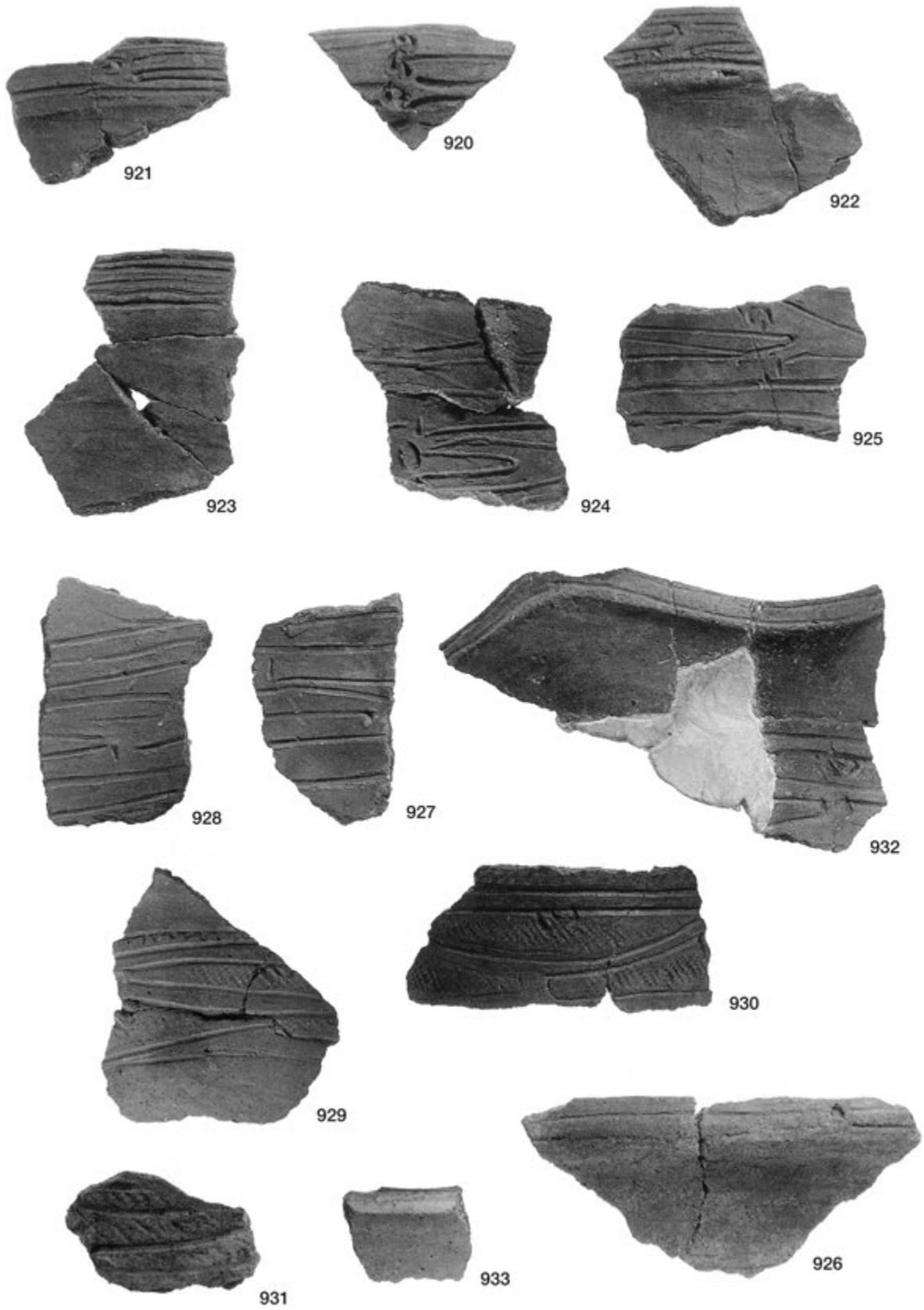
877

北原中遺跡 古墳時代土器 (1)

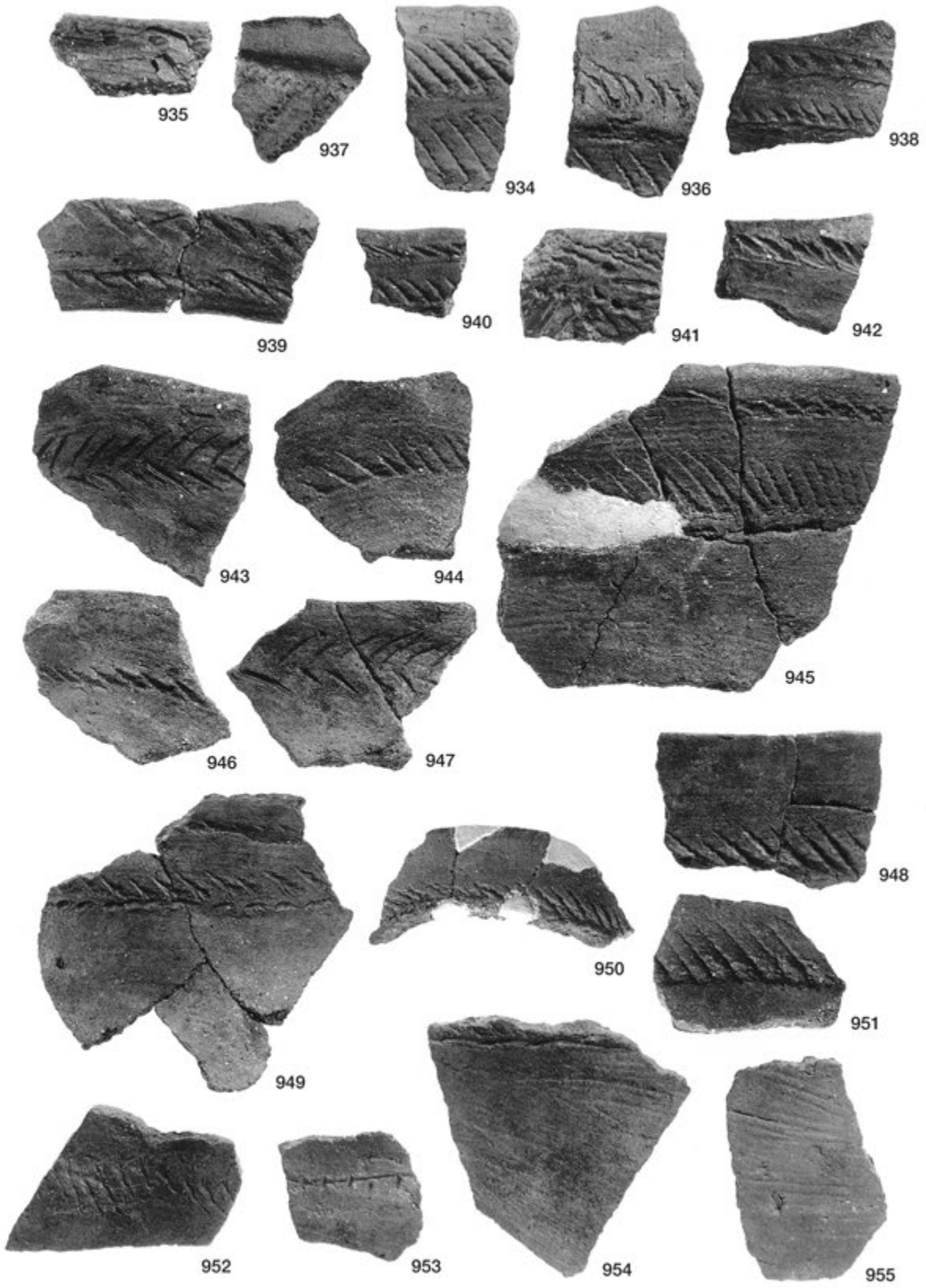




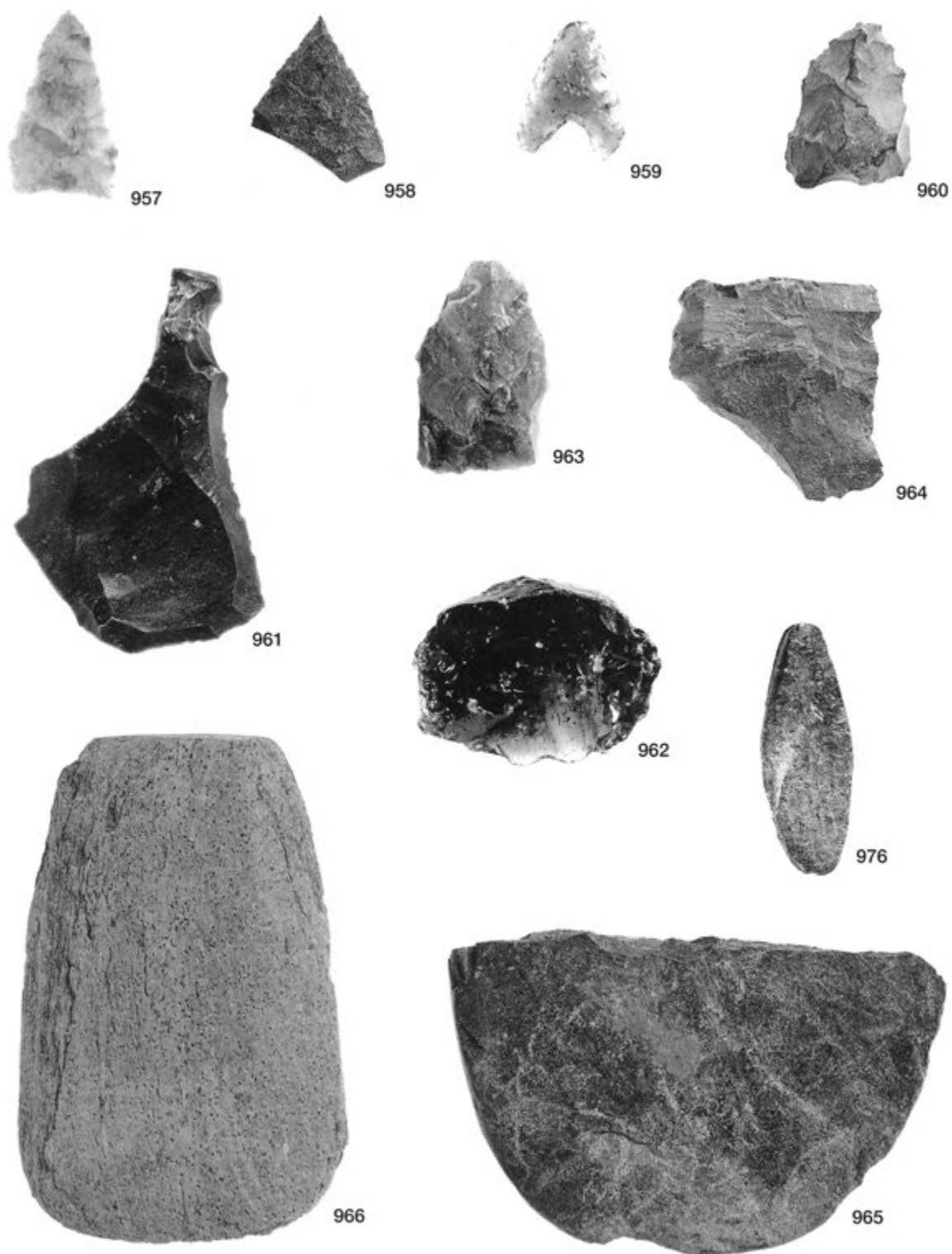
北原中遺跡 遺構内出土石器 (1)



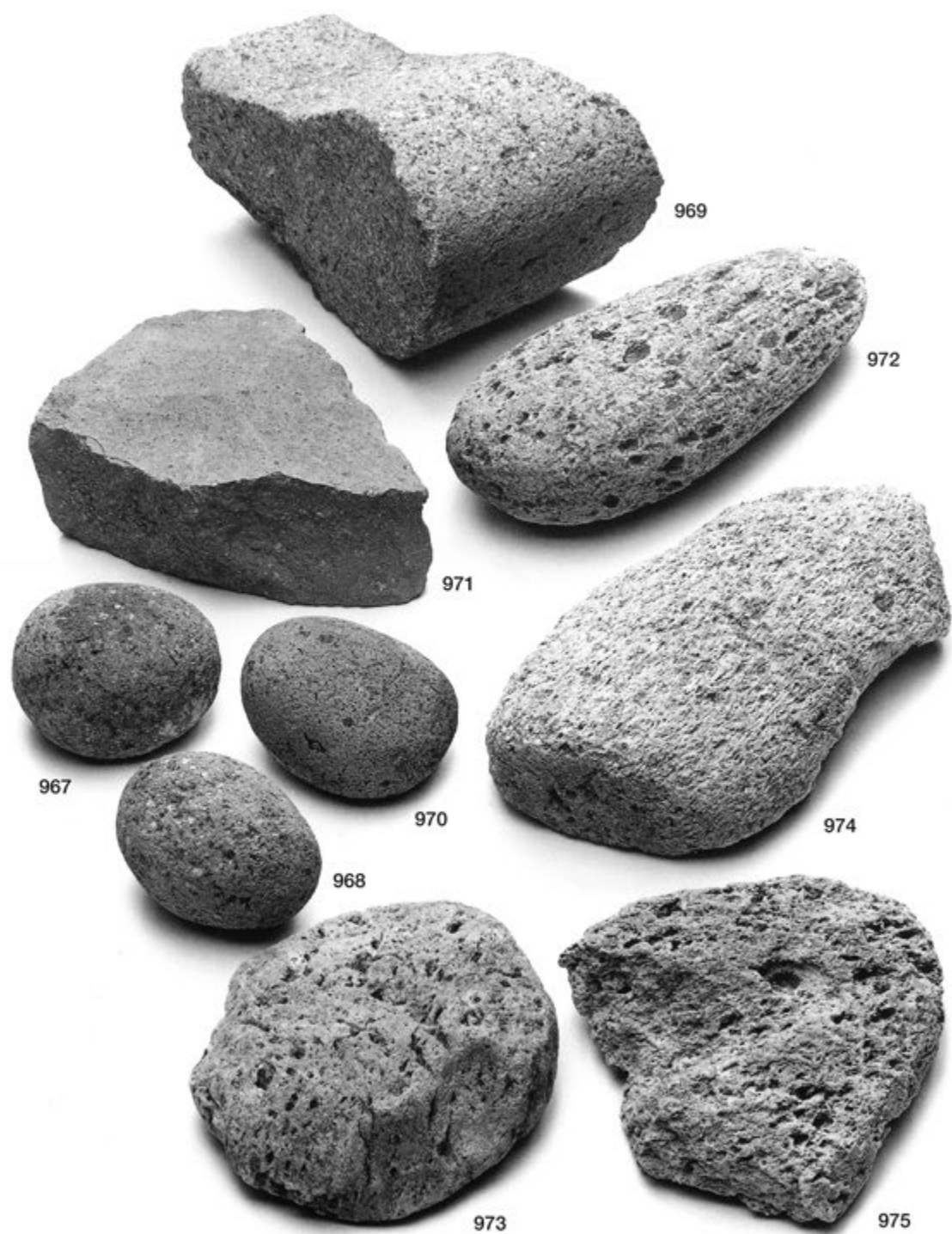
宇都上遺跡 縄文土器 (1)



宇都上遺跡 縄文土器 (2)



宇都上遺跡 縄文・中世石器 (1)



宇都上遺跡 縄文石器 (2)

## あ と が き

錦江湾沿いの古江から鹿屋市街地へ向けて走ると、皆が恐れる「魔の古江急カーブ」があり、交通事故が絶えないものであった。そこで、国立鹿屋体育大学からまさかり海岸までの古江バイパス建設が計画され、事前に発掘調査が計画され実施された。調査は平成9年度から行われたが用地買収が思うようにいかず、平成18年までの長い期間にわたるものであった。そのため報告書刊行の年には当時の発掘担当者は異動等により少なくなっていた。

根本原遺跡は約2600mの長さの遺跡で、北に桜島、南西方向には錦江湾越しに開聞岳が望める絶景の地に位置している。昭和50年代には圃場整備が行われているために、旧地形が想定しづらかったが、発掘調査によりいくつかの谷部がみられ、遺跡が分離されることが判明した。そのため遺跡は、それぞれの小字名により中野西遺跡・松山田西遺跡・鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・領家西遺跡・天神平溝下遺跡・宇都上遺跡と7箇所の遺跡に区割りして、名称を変更した。旧石器時代から古代までの長期にわたる生活痕が発見されました。

発掘調査も大変であったが、報告書作成については、年数が経っていることから、困難を極め、苦労した面もあった。それでも、鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡の報告書を刊行する運びとなった。万全を期したつもりであるが、必ずしも充分といえないものになった。今後、検討を要するものも多いと思うが、機会をみて不備を修正し、その責務を全うしたい。

調査にあたり便宜を図ってくださった鹿屋市教育委員会、発掘作業員として御協力いただいた地元の方々には心より感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(132)

わしがさこ

きたはらなか

うとうえ

### 鷺ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡

発行日 2008年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
電話番号 0995-48-5811

印刷 (株)イースト朝日  
〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7  
電話番号 099-266-5522



鹿児島県